IBM Campaign バージョン 9 リリース 0 2015 年 10 月

# 管理者ガイド



- 注記 -

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、455ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は、IBM Campaign バージョン 9、リリース 0、モディフィケーション 0、および新しい版で明記されていない 限り、以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

- 原典: IBM Campaign Version 9 Release 0 October 2015 Release Notes
- 発行: 日本アイ・ビー・エム株式会社
- 担当: トランスレーション・サービス・センター
- © Copyright IBM Corporation 1998, 2015.

# 目次

第1章 IBM Campaign での管理	1
IBM EMM での Campaign 関連の管理用タスク	. 2
第 2 章 IBM Campaign でのセキュリテ	
ィーの管理	3
セキュリティー・ポリシーについて	. 3
グローバル・セキュリティー・ポリシー	. 3
Campaign による権限の評価方法	. 4
所有者役割およびフォルダー所有者役割の使用.	. 5
セキュリティー・ポリシーの設計に関するガイドラ	7
12	. 5
セキュリティー・シナリオ	. 6
シナリオ 1: 単一部門を持つ会社	. 6
シナリオ 2: 複数の独立した部門を持つ会社	. 8
シナリオ 3: 部門内での制限付きアクセス	10
セキュリティー・ポリシーの実装	11
ヤキュリティー・ポリシーを作成するには	11
ヤキュリティー・ポリシーを削除するには	12
フォルダーやオブジェクトにセキュリティー・ポ	12
リシーを割り当てろ	12
Campaign での管理権限について	13
レポート・フォルダー権限の構成	14
	14
Windows 偽生の管理	14
Windows 闷表の自生	19
Windows 闷表こね	19
Willdows 協義を使用 9 る理由	19
Campaign ユーリーと Windows ユーリーとの国际 Windows 色壮ガループ	19
Windows 協会クルーク	20
Windows 協義と IBM EMM へのロクイン	20
Windows 協表の作業 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	20
第3章 データベース表の管理	23
テーブル管理の概念	23
システム・テーブルとは	23
ユーザー・テーブルとは	23
テーブルのマッピングについて	25
データ・ディクショナリーとは	25
テーブル・カタログとは	26
テーブルの初期管理タスク	27
前提条件・インストール後に前提とたる状能	27
システム・テーブルのアクセスをテストする方法	27
フーザー・テーブルのアクセスをテストする方法	27
「Customer」オーディエンス・レベルのシステ	20
人・テーブルのマッピング	20
ムノノノルのインシン・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	29
・ハノム ノ ノルツIF本 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	50
マハテム テーラルセイラフォルは日イラフタる 古注	20
114・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	21
マハノム・ノニノルセイツノ胖际りる刀広 シフテム・テーブルの中欧た主ニオス士社	31 21
マハノム・ノニノルの内谷と衣小りる刀伝	21
	32

ユーザー・テーブルの作業について	
する方法	
ルの作業	
ーブルの作業	
データ・ディクショナリーの作業	
データ・ディクショナリーを開く方法 48	
変更をデータ・ディクショナリーに適用する方法 48	
データ・ディクショナリーをいつ使用するか48	
データ・ディクショナリーの構文 48	
新しいデータ・ディクショナリーを手動で作成す	
る方法	
テーブル・カタログの作業	
テーブル・カタログにアクセスする方法50	
テーブル・カタログを開く方法 50	
テーブル・カタログの作成方法 50	
保管テーブル・カタログのロード方法51	
テーブル・カタログの削除 52	
テーブル・カタログ内のテーブルの事前計算され	
たプロファイルを更新する方法 52	
テーブル・カタログのデータ・フォルダーの定義	
方法	
第4章 キャンペーンのカスタマイズ 55	
キュカノーナンション 戸舟	
カスダム・キャンペーン属性	
カスタム・キャンペーン属性	
カスタム・セル属性	

第	5	章	才	ファ	· —	•	テ	ン	プ	レ-	-	-0	)管	理	1	(	63
才	ファ	-2	:は.														63
才	ファ	- •	テン	ノプ	レー	$\cdot$	とに	t									63
才	ファ	- •	テン	ノプ	レー	$\vdash$	とも	2キ	ユ	リラ	ティ	-					64
才	ファ	- •	テン	ノプ	レー	$\vdash$	を使	包用	す	ЗŦ	里由	Ι.					64
才	ファ	- •	テン	ノプ	レー	$\vdash$	おし	20	オ	フ	<i>P</i> –	の	計画	町			65
才	ファ	一層	属性を	を操	作す	る											65
	オフ	ファー	- • •	テン	プレ	/-	- ト・	での	り力	ス	タム	ム属	性	の値	吏用		65
	カン	くタ.	ム属	性の	作成	t											65
	カン	くタ.	ム属	性の	変更	ミナ	ī法										68

Campaign 内切标中切入 了 商庄 · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
オファー・テンプレートを操作する
オファー・テンプレートでのドロップダウン・リ
ストの使用
オファー・テンプレートを作成するには71
オファー・テンプレートを変更するには72
オファー・テンプレートを並べ替えるには 73
オファー・テンプレートを回収するには 74
「チャネル」属性へのリフト値の追加 74
テンプレート・アイコン 75
$\int \sqrt{3} \sqrt{1 + (\sqrt{3} \sqrt{3})^2} = \operatorname{Re} \left( \frac{1}{\sqrt{3}} + \frac{1}{\sqrt{3}} \right)^2 = \operatorname{Re} \left( \frac{1}{\sqrt{3}} + \frac{1}{\sqrt{3}} \right)^2$
Marketing Operations の貢産を Campaign のオファー
Campaign オファーで Marketing Operations 貧産
を使用するためのカイドライン
Campaign オファーで Marketing Operations の資
産を使用するための設定
第6草オーティエンス・レベルの管理 81
オーディエンス・レベルについて
Campaign で複数の異なるオーディエンス・レベルが
必要となる理由
デフォルトの「Customer」オーディエンス・レベル 82
追加のオーディエンス・レベルの作成 82
オーディエンス・レベルおよびシステム・テーブル
KONT
デフォルトの「Customer」オーディエンス・レベ
ルのシステム・テーブル 83
オーディエンス・レベルお上び戦略的セグメント
バークリイエンバーレージレベジスの日本(MEH) ビノバン 1 について 83
について
オーディエンス・レベルのユニーク ID
オーナイエンス・レベルに回有のナーナルの必須
$ \begin{array}{cccccccccccccccccccccccccccccccccccc$
オーティエンス・レベルわよびユーリー・テーノル
単一のオーティエンス・レベルを指定したユーザ
$-\cdot \overline{r} - 7 \mu$
複数のオーティエンス・レベルを指定したユーサ
$-\cdot \overline{r} - \overline{J} \overline{V}$
オーディエンス・レベルの作業

コンタクト・ステータスとは	. 96
コンタクト・ステータスの更新について...	. 97
コンタクト履歴とオーディエンス・レベルとの関	
係	. 97
コンタクト履歴とデータベース・テーブルおよび	
システム・テーブルとの関係	. 97
オファー履歴とは	. 97
処理履歴とは	. 98
コンタクト履歴の作業	. 99
新しいオーディエンス・レベル用のコンタクト履	
歴テーブルの作成	. 99
コンタクト履歴テーブルからシステム・テーブル	
へのマッピング...........	. 99
コンタクト・ステータス・コードの追加方法 .	. 99
履歴のロギング.............	100
コンタクト履歴の更新	101
コンタクト履歴の消去	101
デフォルトのコンタクト・ステータス・コード	101

第8章 レスポンス履歴の管理	103
レスポンス履歴の概念	103
レスポンス履歴とは	103
レスポンス・タイプとは.........	103
レスポンス履歴とオーディエンス・レベルの関係	104
レスポンス履歴とデータベース表の関係	104
レスポンス履歴テーブルでの外部キー制約	104
操作テーブルとは	104
操作テーブルに何が含まれるか	104
操作テーブルを使用する理由	105
レスポンス履歴の操作	105
新しいオーディエンス・レベル用のレスポンス履	
歴テーブルの作成	105
レスポンス履歴テーブルから IBM Campaign シ	
ステム・テーブルへのマッピング	105
オファーの有効期限が切れた後にレスポンスを記	
録する日数を設定するには........	105
レスポンス・タイプの追加.........	106
レスポンス履歴のログ	106
レスポンス履歴の参照資料	106
デフォルトのレスポンス・タイプ.....	107
サンプル UA_ActionCustomer テーブル	107

# 第9章操作モニター....109

操作モニターを構成するには	109
「すべてのモニターされている実行」ページにアク	
セスするには	109
「すべてのモニターされている実行」ページの表示	109
「すべてのモニターされている実行」ページでフロ	
ーチャート・リストをソートするには	110
関連するキャンペーンまたはフローチャートを表	
示するには	110
「すべてのモニターされている実行」ページの表	
示を最新表示するには	110
「すべてのモニターされている実行」ページでフロ	
ーチャートを操作する	111
実行中のフローチャートを停止するには	111

実行中のフローチャートを中断するには .			111
中断されたフローチャートを再開するには.			112
操作モニターの参照資料			112
フローチャートの状態と操作			112
操作モニターに関連するプロパティー			114
「すべてのモニターされている実行」ページ	`の`	P	
			114

第	10 章	ディメンション階層の管理	117

ア	イメンション階層とは....							117
デ	ィメンション階層を使用する理由							117
デ	ィメンション階層およびキューブ	に	つい	て				118
デ	ィメンション階層およびデータベ	-	ス表	に	つ	17	-	118
デ	ィメンション階層の作業...							119
	ディメンション階層の作業につい	17	•					119
	ディメンション階層の設計							120
	Campaign のディメンション階層	$\sim$	のア	ク	セ	ス		120
	ディメンション階層を作成する							120
	保管ディメンション階層をロート	す	3					121
	ディメンション階層を編集する							121
	ディメンション階層を更新する							122
	ディメンション階層を削除する							122

第 11 章 トリガーの管理	123
着信トリガーとは............	. 123
着信トリガーを使用する理由	. 123
着信トリガーとスケジュール・プロセス	. 123
ブロードキャストとは?	. 123
発信トリガーとは............	. 124
同期発信トリガー...........	. 124
非同期発信トリガー	. 124
発信トリガーを使用する理由	. 125
発信トリガーの戻り値	. 125
トリガーを定義する方法..........	. 125
トリガー・フォルダーおよびトリガーに関する作業	125
トリガーを編成するためのフォルダーを作成する	)
には	. 125
トリガー・フォルダーを移動するには	. 126
トリガー・フォルダーを編集するには	. 126
トリガー・フォルダーを削除するには	. 127
トリガーを作成するには........	. 127
トリガーを編集または移動するには....	. 128
トリガーを削除するには. . . . . . .	. 129
発信トリガーのセットアップ	. 129
発信トリガーを実行するためのプロセスのセット	
アップ	. 129
成功したときに発信トリガーが実行されるように	-
フローチャートをセットアップするには	. 129
失敗したときに発信トリガーが実行されるように	-
フローチャートをセットアップするには	. 130
着信トリガーのセットアップ . . . . . .	. 130
着信トリガーをセットアップするには	. 130
着信トリガーを使用して実行するためのスケジュ	
ール・プロセスの構成	. 131
トリガーをキャンペーンのすべてのフローチャー	•
トにブロードキャストするには	. 131

トリガーをフローチャートにブロードキャフトす	
トリカー をノローリャートにノロートナヤストリ	120
	132
ドリカーをすべてのキャンペーンにフロードキャ	
ストするには	132
リモート Windows マシンでのトリガー・ユーティ	
リティーのセットアップ	132
unica actrg ユーティリティー: 必要なファイル	133
トリガーの管理に関する参照情報	133
トリガーにトってサポートされストークン	133
$\begin{array}{c} 1 \\ 1 \\ 0 \\ 0 \\ 0 \\ 0 \\ 0 \\ 0 \\ 0 \\ 0 \\$	125
Campaign $(5)^{-1}$ $(-1)^{-1}$ $(-1)^{-1}$ $(-1)^{-1}$	155
Campaign トリカー・ユーティリティーのオノシ	
Эй	135
第 12 草 ロキングの管理	137
Campaign リスナー・ログ	137
Campaign Web アプリケーション・ログ	137
Campaign Server Manager ログ	138
Campaign ヤッション・ユーティリティー・ログ	138
カリーンアップ・フーティリティー・Dゲ	138
77 $7777$ $4$ $77777$ $1777$ $1777$ $1777$	120
	100
	138
Web 接続ロク	139
Windows イベント・ログ	139
log4j ログ・ファイル............	139
ログを操作する	139
Campaign リスナーのロギング・タスク	139
Campaign Web アプリケーションのロギング・タ	
スク	140
フローチャートのロギング・タフク	140
$\frac{1}{2} \int \frac{1}{2} \int \frac{1}$	140
Windows イベンド・ロインク・ダスク・・・・	143
$\log_{4j} \Box + \mathcal{I} \mathcal{I} \cdot \mathcal{I} \mathcal{I} \cdot \mathcal{I} $	143
第 19 音 田方コ_ドの答理 ・	145
	145
キャンペーン・コードについて	145
オファー・コードについて.........	145
セル・コードについて	146
処理コードについて	146
コード形式	147
デフォルトのコード形式	147
コード形式の要件	148
デフォルトのコード形式の恋面について	1/18
フライルトのコート形式の友文について	140
	149
$\mathbf{J} - \mathbf{F} \cdot \mathbf{y} = \mathbf{F} \cdot $	149
Campaign のデフォルトのコード・ジェネレータ	
—	149
カスタム・コード・ジェネレーターについて	150
カスタム・コード・ジェネレーターの要件	150
カスタム・コード・ジェネレーターを使用するた	
めの Campaign の構成について	151
カスタム・コード・ジェネレーターの作品について	152
田右コードの中力について	152
回行コードの山力にフロし	152
	152

力。	スタ	4	•	コ-	- F	•	ジニ	エイ	:1	-/	ター	-の	<b>北</b> 道	重に	つ	()	
τ																	153
力	スタ	'4	• ]	オフ	ファ	_	• 3	1-	-ド	• 3	ジェ	ネ	V-	ータ	-	の	
場	祈を	指	定	する	るに	は											153

コード生成の参照	153
コード生成に関連したプロパティー	153
デフォルトのキャンペーンおよびセル・コード・	
ジェネレーターのパラメーター	154
デフォルトのオファーのコード・ジェネレーター	
のパラメーター............	155
カスタム・コード・ジェネレーターのパラメータ	
—	155
第 14 音 抗進設守の管理 1	57
	57
	157
「王ړ」設定について	157
フローチャート実行相不で休住する	137
毎田すろ 「天日中に」 ノ 、 八日取過にと	158
このフローチャートのグローバル抑制を無効にす	150
このシローディー・0.シローバの時間を無効にす	158
2000 年 (Y2K) しきい値	158
自動保存 1	150
チェックポイント 1	159
許可されるデータ・エラーの最大数 1	159
フローチャート実行エラーでトリガー送信 1	160
フローチャート成功でトリガー送信 1	160
「サーバー最適化」設定について 1	160
Campaign によろ仮相メモリー使用量	160
このフローチャートでは一時テーブルを伸用した	100
	160
「テスト実行設定」について	160
	100
第 15 章 IBM Campaign のユーティリ	
第 15 章 IBM Campaign のユーティリ ティー ....................	63
第 15 章 IBM Campaign のユーティリ ティー	<b>63</b> 163
第 15 章 IBM Campaign のユーティリ ティー	<b>63</b> 163 163
第 15 章 IBM Campaign のユーティリ ティー	<b>63</b> 163 163 164
第 15 章 IBM Campaign のユーティリ ティー	<b>63</b> 163 163 164 164
第 15 章 IBM Campaign のユーティリ ティー	<b>63</b> 163 163 164 164 164
第 15 章 IBM Campaign のユーティリ ティー	<b>63</b> 163 163 164 164 164 166
第 15 章 IBM Campaign のユーティリ ティー	<b>63</b> 163 164 164 164 164
第 15 章 IBM Campaign のユーティリ ティー	<b>63</b> 163 164 164 164 166
第 15 章 IBM Campaign のユーティリ ティー	<b>63</b> 163 164 164 164 166 166
第 15 章 IBM Campaign のユーティリ ティー	<b>63</b> 163 163 164 164 164 166 166
第 15 章 IBM Campaign のユーティリ ティー	<b>63</b> 163 164 164 164 166 166 166
第 15 章 IBM Campaign のユーティリ ティー	<b>63</b> 163 164 164 164 166 166 166
第 15 章 IBM Campaign のユーティリ ティー	<b>63</b> 163 164 164 164 166 166 166 166
第 15 章 IBM Campaign のユーティリ ティー	<b>63</b> 163 163 164 164 164 166 166 166 166 167
第 15 章 IBM Campaign のユーティリ ティー	<b>63</b> 163 163 164 164 164 166 166 166 167 168 168 168
第 15 章 IBM Campaign のユーティリ ティー	<b>63</b> 163 163 164 164 166 166 166 167 168 168 168 169 169
第 15 章 IBM Campaign のユーティリ ティー	<b>63</b> 163 164 164 164 166 166 166 167 168 168 169 169 175
第 15 章 IBM Campaign のユーティリ ティー	<b>63</b> 163 164 164 164 166 166 166 167 168 168 169 175
第 15 章 IBM Campaign のユーティリ ティー	<b>63</b> 163 164 164 164 166 166 166 167 168 168 169 169 175 175
第 15 章 IBM Campaign のユーティリ ティー	<b>63</b> 163 164 164 164 166 166 166 167 168 168 169 175 175 175
第 15 章 IBM Campaign のユーティリ ティー	<b>63</b> 163 164 164 164 166 166 166 167 168 168 169 175 175 175
第 15 章 IBM Campaign のユーティリ ティー	<b>63</b> 163 164 164 164 166 166 166 167 168 168 169 169 175 175 175
第 15 章 IBM Campaign のユーティリ ティー	<b>63</b> 163 164 164 164 166 166 166 167 168 169 175 175 175 175
第 15 章 IBM Campaign のユーティリ ティー	<b>63</b> 163 164 164 164 166 166 167 168 169 169 175 175 175 175 175 176

Campaign セッション・ユーティリティーのオプ
ション
Campaign クリーンアップ・ユーティリティー
(unica acclean)
unica acclean で必要な環境変数
Campaign クリーンアップ・ユーティリティーの
ユースケース
キャンペーン・クリーンアップ・ユーティリティ
ーの構文
Campaign クリーンアップ・ユーティリティーの
オプション 187
Campaign レポート生成ユーティリティー
(unice account) $(0.100)$
(unica_acgenipi)
ユースケース: フローチャート実行からのセル数
の取得
IBM Campaign レポート生成ユーティリティーの
構文
IBM Campaign レポート生成ユーティリティーの
さまざまなオプション
データベース・テスト・ユーティリティー 194
cxntest ユーティリティー
odbctest ユーティリティー
db2test ユーティリティー
oratest ユーティリティー 198
$\vec{r} - q\vec{v} - 7 \cdot \eta - \vec{k} \cdot \eta - \vec{r} \cdot \eta + 100$
j $j$ $j$ $j$ $j$ $j$ $j$ $j$ $j$ $j$
向还ロークー (深り返されるトークノ 199

# 第16章 IBM Digital Analytics と

Campaign との統合......		201
IBM Digital Analytics と Campaign の統合		. 201
変換テーブルについて		. 205
変換テーブルのマッピング		. 207

タ用に構成する20	9
非 ASCII データまたは非 US ロケールの使用につ	
いて	9
文字エンコードについて	9
非 ASCII データベースとの相互作用について 20	9
複数ロケール・フィーチャーについて 21	1
非 ASCII 言語または米国以外のロケール用に	
Campaign を構成する	2
オペレーティング・システムの言語と地域の設定 21	3
Web アプリケーション・サーバーのエンコー	
ド・パラメーターの設定 (WebSphere のみ)21	4
Campaign の言語とロケールのプロパティー値の	
設定	4
システム・テーブルのマップ解除と再マップ21	5
データベースおよびサーバーの構成の検査21	5
複数ロケール用の Campaign の構成	9
始める前に: Campaign がインストールされてい	
る必要があります	9
SQL Server での複数ロケールの構成 21	9
Oracle での複数ロケールの構成	0
DB2 での複数ロケールの構成	1

付録 A. 構成ページの構成プロパティー	225
Marketing Platform 構成プロパティー	225
全般   Navigation	225
全般   データのフィルター操作 (Data filtering)	226
全般   パスワード設定 (Password settings)	226
全般   その他 (Miscellaneous)	229
Platform	229
Platform   Scheduler	231
Platform   Scheduler   反復定義 (Recurrence	
definitions)	233
Platform   Scheduler   スケジュール登録	
(Schedule registrations)   キャンペーン   [オブジ	
エクト・タイプ (Object type)]	234
Platform   Scheduler   スケジュール登録	
(Schedule registrations)   キャンペーン   [オブジ	
エクト・タイプ (Object type)]   [スロットル・グ	
ループ (Throttling group)]	235
Platform   セキュリティー	235
Platform   セキュリティー   ログイン方式の詳細	
(Login method details)   Windows 統合ログイン	
(Windows integrated login)	236
Platform I セキュリティー I ログイン方式の詳細	
(Login method details)   LDAP	239
Platform I セキュリティー I ログイン方式の詳細	
(Login method details)   Web アクセス制御 (Web	
access control)	242
Platform   セキュリティー (Security)   LDAP 同	
期 (LDAP synchronization)	243
Platform   セキュリティー   LDAP 同期   IBM	
Marketing Platform グループ・マップへの LDAP	
参照	252
レポート作成の構成プロパティー	253
レポート   統合   Cognos [バージョン]	253
レポート   スキーマ   [製品]   [スキーマ名]	
SQL 構成	256
レポート   スキーマ   キャンペーン....	257
レポート   スキーマ   キャンペーン   オファ	
ー・パフォーマンス (Offer Performance)	258
レポート   スキーマ   キャンペーン   [スキーマ	
名]   列   [コンタクト指標]	259
レポート   スキーマ   キャンペーン   [スキーマ	
名]   列   [レスポンス指標]	260
レポート   スキーマ   キャンペーン   キャンペ	
ーン・パフォーマンス	261
レポート   スキーマ   キャンペーン   キャンペ	
ーン・オファー・レスポンス内訳	263
レポート   スキーマ   キャンペーン   キャンペ	
ーン・オファー・レスポンスの詳細   カラム   [	
	263
レポート   スキーマ (Schemas)   キャンペーン	
キャンペーン・オファーのコンタクト・ステータ	
スによるフレークアウト (Campaign Offer	
Contact Status Breakout)	
	264
レホートースキーマーキャンペーンーキャンペ	264
レホート   スキーマ   キャンペーン   キャンペ ーン・オファーのコンタクト・ステータスの内訴	264

レポート・スキーマ・キャンペーン・キャンペ	
ーン・カスダム属性   カラム   [キャンペーン・ カスタム・カラム]	266
レポート   スキーマ   キャンペーン   キャンペ	
ーン・カスタム属性   カラム   [オファー・カス	
タム・カラム]	267
レボート   スキーマ   キャンペーン   キャンペ	
ーン・カスタム属性   カラム   [セル・カスタ	
	267
	268
レホートースキーマーインダラクトーインダラ	2(0
	269
$\nabla \pi - F \mid A + - \checkmark \mid eMessage \dots \dots$	270
Campaign 構成フロパティー	270
キャンペーン	270
Campaign   collaborate	272
Campaign   navigation	272
Campaign   キャッシング (caching)	276
Campaign   partitions	278
Campaign   モニター	376
Campaign   ProductReindex	378
Campaign   unicaACListener	379
Campaign   unicaACOOptAdmin	384
Campaign   server	385
Campaign   ロギング (logging)	386

# 付録 B. Campaign オブジェクト名での

特殊文字............	•		387
サポートされていない特殊文字			. 387
命名上の制約を持たないオブジェクト			. 388
特定の命名上の制約を持つオブジェクト .			. 388
ユーザー定義フィールドの命名上の制約			. 388

# 

付録 D.	王	際化	:対	応	お	よ	び	Τ	ンコ	<b>-</b> -	-	ŝ	393
Campaign	での	)文字	ドエ	ン	<u></u> -с	ード							. 393
西ヨー	ロッ	パ											. 394
Unicod	еエ	ンコ	-	ĸ									. 394
アラビ	ア語												. 394
アルメ	ニア	語											. 395
バルト	海沿	岸語	i.										. 395
ケルト	語.												. 395
中央ヨ	$-\Box$	ッパ	Ň.										. 395
中国語	(簡	体字	お。	たて	「繁	体	字)						. 395
中国語	(簡	体字	)										. 395
中国語	(繁	体字	)										. 395
キリル	文字												. 395
英語													. 396
グルジ	ア語												. 396
ギリシ	ヤ語												. 396
ヘブラ	イ語												. 396
アイス	ラン	ド語	i.										. 396
日本語													. 396
韓国語													. 397

	ラオ語.														397
	北ヨーロ	ツ1	۴												397
	ルーマニ	ア請	五日												397
	南ヨーロ	ツ1	۴												397
	タイ語.														397
	トルコ語														398
	ベトナム	諙													398
	その他.														398
日	付と時刻の	の形	式												398
	DateForm	at 3	およ	こび	D	ate	Гiт	eFo	orm	at	の刑	团	Ì		398
	DateOutp	utFo	orm	atSt	rin	g∛	およ	び							
	DateTime	Out	put	For	mat	Str	ing	の	形	式					401

付録 E. Campaign のエラー・コード	403
Campaign エラー・コード	. 403
IBM 技術サポートへのお問い合わせ	453
特記事項	455
商標	. 457
プライバシー・ポリシーおよび利用条件に関する考	
慮事項	. 457

# 第1章 IBM Campaign での管理

Campaign のほとんどの管理機能は、「設定」>「キャンペーン設定」を選択して実行します。以下の表で、「キャンペーン設定」ページを使用して実行する作業について説明します。

表1. 「キャンペーン設定」ページから実行する管理用タスク

作業	説明
テーブル・マッピング	ユーザー・テーブルのマッピングとシステム・テーブルのマッピングを管理します。
の管理	<ul> <li>大半のシステム・テーブルは、推奨されるシステム・テーブル・データ・ソース名 UA_SYSTEM_TABLES が使用されていれば、インストール時に自動的にマップされま す。重要:システム・テーブルのマップや再マップは、誰も Campaign を使用していない ときに限り行ってください。</li> </ul>
	<ul> <li>ユーザー・テーブルを既存のデータベース表かファイルにマップして、フローチャート内のプロセスからそのデータにアクセスできるようにしなければなりません。ユーザー・テーブルは、いつでも再マップできます。ユーザー・テーブルを再マップする理由は、不要なフィールドを削除したり、新しいフィールドを利用可能にしたり、テーブルやフィールドの名前を変更したり、オーディエンス・レベルを追加したり、プロファイル特性を変更したりするためです。</li> </ul>
データ・ソース・アク セスの表示	システム・テーブル・データベースと、構成済みのすべての顧客データベースを表示しま す。データベースを選択してその構成に関する詳細情報を参照したり、顧客データベースの ログインやログアウトを行ったりできます。
ディメンション階層の 管理	ディメンション階層を使用して、値の範囲に基づいてデータをグループ化します。例とし て、時間、地理、製品、部門、流通チャネルがあります。ビジネスやキャンペーンに関係の あるどのような階層でも作成できます。ディメンション階層は、キューブのビルディング・ ブロックです。
オーディエンス・レベ ルの管理	オーディエンス・レベルは、キャンペーンのターゲットにできる識別可能なグループです。 例として、世帯、見込み顧客、顧客、アカウントがあります。フローチャートの設計担当者 は、オーディエンス間でターゲット設定と切り替えをする操作や、あるオーディエンス・レ ベルを別のオーディエンス・レベルによって範囲設定する操作を行えます。例えば、世帯ご とに 1 人の個人をターゲット設定できます。
システム・ログの表示	現行セッションの Campaign リスナー (aclsnr) ログを表示します。ログ・ファイルが新しい ブラウザー・ウィンドウで開きます。
カスタム属性の定義	<ul> <li>キャンペーン、オファー、セルで使用できる属性を定義します。以下に例を示します。</li> <li>部門のキャンペーン属性を定義して、組織内においてキャンペーン企画を担当している部門を示します。</li> <li>住宅ローンのオファーに関する利率のカスタム・オファー属性を定義します。</li> <li>オーディエンス・タイプのカスタム・セル属性を定義して、抱き合せ販売、上位商品販売、ロイヤリティーの値を保管します。</li> </ul>
オファー・テンプレー トの定義	オファー・テンプレートは、特定の種類のオファーの構造を定義します。オファー・テンプ レートは必須です。ユーザーは、テンプレートに基づかないでオファーを作成することがで きません。

下記の方法で追加の管理用タスクを実行できます。

表 2. 追加の管理用タスク

作業	説明
セキュリティーの調整	「 <b>設定</b> 」メニューを開いて、「 <b>ユーザー</b> 」オプションを使 用します。
コンタクト履歴とレスポンス履歴の管理	Campaign で提供されるシステム・テーブルを変更して、 必要な情報を取得します。
フローチャート内からの管理設定の調整	フローチャートを開き、「システム管理」アイコンをクリ ックし、使用可能なオプションを使用します。例えば、 「拡張設定」を使用して、特定のフローチャートに関する グローバル抑制を無効にしたり、その他の調整を加えたり します。
構成設定の調整	「設定」>「構成」>「Campaign」を選択します。
管理機能を実行するためのユーティリティーの実行	Campaign はサーバー、セッション、データベースの作業 を実行するためのコマンド行ユーティリティーを多数提供 しています。
Campaign と他の IBM <sup>®</sup> 製品との統合	Campaign は、他の多数の IBM 製品と協働するように設計されています。指示については、「Campaign 管理者ガイド」、「Marketing Platform 管理者ガイド」、および統合しようとしている製品で提供されている資料を参照してください。インストール・ガイドにも、統合に関する重要な情報が記載されている場合があります。
レポートの構成	Marketing Platform と共に提供されている「 <i>IBM EMM</i> <i>Reports インストールおよび構成ガイド</i> 」を参照してくだ さい。

# **IBM EMM での Campaign 関連の管理用タスク**

IBM EMM 全体に実装された機能や関数を含む Campaign の管理用タスクは、 Marketing Platform で実行されます。これらには以下のタスクが含まれます。

- ユーザー、グループ、役割割り当て、セキュリティー・ポリシー、および許可の 管理
- Windows 偽装の管理
- プロキシー・サーバー認証の構成
- 構成プロパティーの管理
- レポート作成の構成
- IBM Scheduler によるフローチャートのスケジューリング

これらのタスクの実行方法について詳しくは、「Marketing Platform 管理者ガイド」を参照してください。

# 第 2 章 IBM Campaign でのセキュリティーの管理

Campaign は Marketing Platform のセキュリティー機能を使用して、Campaign のオ ブジェクトと機能へのユーザー・アクセスを制御します。管理者は Marketing Platform のセキュリティー・インターフェースを使用して、Campaign へのユーザ ー・アクセスに必要なユーザー・アカウント、グループ・メンバーシップ、役割、 および権限を構成します。

Campaign のオブジェクトと機能へのユーザー・アクセスは、セキュリティー・ポリ シーを使って実装されます。

# セキュリティー・ポリシーについて

セキュリティー・ポリシーは Campaign のセキュリティーを管理する「ルール・ブ ック」であり、ユーザーがアプリケーションで操作を実行するたびにそれが参照さ れます。セキュリティー・ポリシーはパーティションごとに作成されます (複数の パーティション間でセキュリティー・ポリシーが共有されることはありません)。 Campaign の 1 つのパーティションで複数のセキュリティー・ポリシーを設定する ことができます。

1 つのセキュリティー・ポリシーは、定義される複数の役割から成ります。それぞれの役割には、ユーザーが実行できる操作とアクセスできるオブジェクトを決定する権限のセットが含まれます。ユーザーを役割に直接割り当てることができます。 または、グループを役割に割り当てることもできます (グループ内のユーザーが役割に割り当てられます)。

最上位フォルダーでキャンペーンやオファーなどのオブジェクトを作成するとき、 セキュリティー・ポリシーをそのオブジェクトに適用します。さらに、最上位フォ ルダーを作成するとき、セキュリティー・ポリシーをフォルダーに適用すると、そ のフォルダー内に作成されるオブジェクトやサブフォルダーは、フォルダーに適用 されたセキュリティー・ポリシーを継承します。

セキュリティー・ポリシーをオブジェクトやフォルダーに適用することで、 Campaign のオブジェクトをさまざまなユーザー・グループ用に分けることができま す。例えば、1 つのポリシーに属するユーザーが、他のポリシーに関連付けられた オブジェクトにアクセスできないよう (表示さえできないよう) セキュリティー・ポ リシーを構成することができます。

独自のセキュリティー・ポリシーを作成できます。あるいは、Campaign に含まれる デフォルトのグローバル・セキュリティー・ポリシーを使用することもできます。

# グローバル・セキュリティー・ポリシー

Campaign には、デフォルトのグローバル・セキュリティー・ポリシーが含まれてい ます。これはそのまま使用することも、組織の必要に合わせて変更することもでき ます。独自のセキュリティー・ポリシーを作成しないことにした場合、Campaign で 作成したオブジェクトに対して、デフォルトのグローバル・セキュリティー・ポリ シーが適用されます。

独自のポリシーとグローバル・ポリシーを併用することも、専ら独自のポリシーを 使用することもできます。グローバル・ポリシーは、使用されていない場合でも、 削除できません。

作成するセキュリティー・ポリシーはすべて、グローバル・セキュリティー・ポリ シーの下に置かれます。グローバル・ポリシーの下に、組織内の各部門の従業員用 のセキュリティー・ポリシーを個別に作成することもできます。

グローバル・セキュリティー・ポリシーには、事前に定義された 6 つの役割が含ま れています。必要に応じてグローバル・ポリシーに役割を追加することができま す。事前に定義された役割を削除することはできませんが、その権限を変更するこ とは可能です。

事前に定義されている役割は、次のとおりです。

- ・フォルダー所有者 すべての権限が有効。
- ・所有者 すべての権限が有効。
- **管理** すべての権限が有効。デフォルトのユーザー asm\_admin には、この役割 が割り当てられます。
- ・ 実行 すべての権限が有効。
- 設計 ほとんどのオブジェクトに対する読み取り権限および書き込み権限。フロ ーチャートやセッションをスケジュールに入れることはできません。
- ・ レビュー 読み取り専用権限。

グローバル・セキュリティー・ポリシーは、所有者役割およびフォルダー所有者役 割を介してすべてのユーザーに適用されます。これには、グローバル・ポリシー内 で他のどの特定の役割にも割り当てられていないユーザーも含まれます。グローバ ル・ポリシーは常に適用されるため、これは例えば役割に対する権限をグローバル に拒否するために使用できます。

#### Campaign による権限の評価方法

ユーザーがタスクを実行する際、またはオブジェクトへのアクセスを試行する際、 Campaign は以下のステップを実行します。

 グローバル・セキュリティー・ポリシー内でユーザーが所属するすべてのグルー プおよび役割を識別します。ユーザーは、1 つの役割に属することも、多数の役 割に属することも、あるいはどの役割にも属さないこともできます。ユーザーは オブジェクトを所有している場合には所有者役割に属します。オブジェクトが置 かれているフォルダーを所有している場合にはフォルダー所有者役割に属しま す。ユーザーは、(直接的に、またはその役割に割り当てられているグループに 属しているために) その他の特定の役割に明確に割り当てられている場合のみ、 その役割に属します。

- アクセスされているオブジェクトがカスタム定義ポリシー(存在する場合)に割 り当てられているかどうかを識別します。割り当てられている場合、そのカスタ ム・ポリシー内でユーザーが所属するすべてのグループおよび役割がシステムで 識別されます。
- 3. ステップ 1 とステップ 2 の結果に基づいて、ユーザーの所属先の役割すべての 権限を集約します。この複合役割を使用して、アクションの権限がシステムで次 のように評価されます。
  - a. 対象のアクションに関していずれかの役割が「拒否 (Denied)」権限を持つ場合、ユーザーはそれを実行できません。
  - b. 対象のアクションに関して「拒否 (Denied)」権限を持つ役割がない場合、そのアクションに関して「許可 (Granted)」権限を持つ役割があるかどうかを判別するために検査されます。その役割がある場合、ユーザーはそのアクションを実行できます。
  - c. a と b のどちらも当てはまらない場合、ユーザーは権限を拒否されます。

#### 所有者役割およびフォルダー所有者役割の使用

デフォルトでは、各セキュリティー・ポリシーには、すべての権限が付与されてい る所有者役割とフォルダー所有者役割が含まれています。これらの役割は、デフォ ルトでは、セキュリティー・ポリシーの作成時に作成されます。これらの役割の権 限を変更することもできますし、デフォルトの権限を使用することも可能です。グ ローバル・セキュリティー・ポリシーでこれらの役割の権限を変更することも可能 ですが、削除することはできません。

所有者役割とフォルダー所有者役割はすべてのユーザーに適用されます。ユーザー をそれらの役割に割り当てる必要はありません。所有者役割は、ユーザーが作成し た単一のオブジェクトに適用されます。フォルダー所有者役割は、ユーザーが所有 するフォルダー内のすべてのオブジェクトに適用されます。

これらの役割は、ユーザー自身が所有していないオブジェクトにアクセスするのを 制限する際に便利です。例えば、セキュリティー・ポリシー内の全オブジェクトに 対する読み取り権限だけを付与する読み取り専用役割を作成することができます。 すべてのユーザーを読み取り専用役割に割り当てます。他の役割が権限 (例えば編 集または削除)を明示的に拒否しない限り、各ユーザーは (所有者役割の下)所有オ ブジェクトの編集または削除と、(フォルダー所有者役割の下) 各自が所有するフォ ルダー内のオブジェクトの編集または削除を行うことができますが、他のユーザー が所有するオブジェクトとフォルダーについては (読み取り専用役割の下)表示のみ 可能です。

## セキュリティー・ポリシーの設計に関するガイドライン

セキュリティー・ポリシーを設計する際、以下のガイドラインに従ってください。

 設計をシンプルに保つ。 Campaign では複数のセキュリティー・ポリシーおよび 役割を作成することが可能ですが、セキュリティー設計はできるだけシンプルに 保ち、セキュリティーの必要を満たすために使用するポリシーおよび役割の数は できるだけ少なくするべきです。例えば、最低限のレベルとして、新しい役割や ポリシーを作成せずにデフォルトのグローバル・セキュリティー・ポリシーをそ のまま使用することができます。

- セキュリティー・ポリシー間の潜在的な競合を回避する。 組織で複数のセキュリ ティー・ポリシーを実装する場合、ポリシーを設計する際に潜在的な競合につい て留意してください。例えば、複数のセキュリティー・ポリシーで移動権限およ びコピー権限を持つユーザーは、その権限を持つポリシーを越えた場所にオブジ ェクトおよびフォルダーを移動またはコピーすることができます。これを行う 際、移動されたオブジェクトまたはフォルダーは宛先のセキュリティー・ポリシ ーを取るため (別のフォルダーの下にある場合)、ある場所においては正当なユー ザーが、宛先のセキュリティー・ポリシーでは役割を持たないために、移動され たオブジェクトにアクセスできなくなることがあります。あるいは、オブジェク トにアクセスする予定ではなかった、宛先のセキュリティー・ポリシーで役割を 持つユーザーが、移動されたオブジェクトにアクセスできるようになることもあ ります。
- ユーザーがオブジェクトを変更できるようにするために表示権限を割り当てる。
   Campaign の多数のオブジェクトを変更するには、オブジェクトに対する表示権限
   と変更権限の両方が付与されている必要があります。この要件は、以下のオブジェクトに当てはまります。
  - キャンペーン
  - フローチャート
  - オファー
  - オファー・リスト
  - オファー・テンプレート
  - セッション
  - 戦略的セグメント

#### セキュリティー・シナリオ

このセクションでは、セキュリティー・モデルの例を挙げ、セキュリティー・ポリ シーを使って Campaign で実装する方法について説明します。

- 『シナリオ 1: 単一部門を持つ会社』
- 8ページの『シナリオ 2: 複数の独立した部門を持つ会社』
- 10ページの『シナリオ 3: 部門内での制限付きアクセス』

## シナリオ 1: 単一部門を持つ会社

社内の全従業員が同じオブジェクト (キャンペーン、オファー、テンプレートなど) のセットに対して作業を行います。オブジェクトの共有と再利用が推奨されていま す。従業員のグループが互いのオブジェクトにアクセスできないようにする必要は ありません。オブジェクトに対する従業員のアクセス権限、変更権限、または使用 権限を決定する権限のセットを、組織内における役割に基づいて作成する必要があ ります。

#### 解決策

オブジェクトをグループまたは部門ごとに分ける必要はないので、必要なセキュリ ティー・ポリシーは1つだけです。既存のグローバル・セキュリティー・ポリシー で従業員の職務に応じて役割を定義し、役割ごとに各オブジェクトまたは機能に対 する適切な権限を定義します。

X J = U = J = J = U = U = U = U = U = U =	表 3.	このシナ	リオにおけ	るオブジェ	クト権限
---	------	------	-------	-------	------

機能/役割	管理者	設計者	レビュー担当者
キャンペーン	$\checkmark$	$\times$	$\times$
<ul> <li>キャンペーンの追加</li> </ul>			×
<ul> <li>キャンペーンの編 集</li> </ul>	$\square$	$\square$	×
<ul> <li>キャンペーンの削除</li> </ul>	$\square$	$\square$	×
<ul> <li>キャンペーンの実 行</li> </ul>	$\square$	×	×
<ul> <li>キャンペーン要約 の表示</li> </ul>			$\checkmark$
オファー		$\times$	$\times$
• オファーの追加		$\checkmark$	×
• オファーの編集			×
<ul> <li>オファーの削除</li> </ul>		×	×
<ul> <li>オファーの撤回</li> </ul>	$\checkmark$	×	×
<ul> <li>オファーの要約の 表示</li> </ul>			$\checkmark$

例えば、管理者にはキャンペーンおよびオファーに対する全アクセス権限および編 集権限があります。レビュー担当者は、キャンペーンおよびオファーにアクセスす ることはできますが、それらを追加、編集、削除、または実行することはできませ ん。

オプションで、それらの役割と一致するユーザー・グループを IBM EMM で作成 し、ユーザーをそのグループに追加するだけでユーザー権限を割り当てることもで きます。

以下の表は、このシナリオにおけるオブジェクト権限の一部のサンプルを示してい ます。

表4. このシナリオにおけるオブジェクト権限

機能/役割	管理者	設計者	レビュー担当者
キャンペーン	$\checkmark$	$\times$	$\times$

機能/役割	管理者	設計者	レビュー担当者
<ul> <li>キャンペーンの追加</li> </ul>	$\square$	$\square$	×
<ul> <li>キャンペーンの編 集</li> </ul>	$\square$	$\square$	×
<ul> <li>キャンペーンの削除</li> </ul>	$\checkmark$	$\checkmark$	×
<ul> <li>キャンペーンの実 行</li> </ul>	$\checkmark$	×	×
<ul> <li>キャンペーン要約 の表示</li> </ul>	$\checkmark$	$\checkmark$	$\checkmark$
オファー	$\checkmark$	$\times$	$\times$
• オファーの追加	$\checkmark$	$\checkmark$	×
<ul> <li>オファーの編集</li> </ul>	$\checkmark$	$\checkmark$	×
<ul> <li>オファーの削除</li> </ul>	$\checkmark$	×	×
<ul> <li>オファーの撤回</li> </ul>	$\checkmark$	×	×
<ul> <li>オファーの要約の 表示</li> </ul>	$\checkmark$	$\checkmark$	$\checkmark$

表4. このシナリオにおけるオブジェクト権限 (続き)

# シナリオ 2: 複数の独立した部門を持つ会社

Eastern、Western という 2 つの業務部門が社内にあり、それらの間でデータは共有 されません。各部門内でそれぞれ異なる職務を果たす人は同じオブジェクト (キャ ンペーン、オファー、テンプレート) にアクセスする必要がありますが、そのオブ ジェクトに対して持つ権限はその役割に応じて異なります。

#### 解決策

それぞれ適切な役割と権限を持つ、2 つの別個のセキュリティー・ポリシーを定義 します。各セキュリティー・ポリシー内の役割は、それぞれの部門の必要に応じ て、同じにすることも別にすることもできます。両方の部門にまたがって作業を行 う必要がある個人 (例えば、業務担当者、部門間管理者、または CEO) を除き、1 つのポリシーだけで各ユーザーを役割に割り当てます。グローバル・ポリシー内で は、ユーザーに役割を割り当てないでください。両方の部門にまたがって作業を行 うユーザーの場合は、グローバル・ポリシー内で役割を割り当て、必要な権限を付 与します。 キャンペーン、オファーなどを格納するための、各ポリシーに属する最上位フォル ダーを作成します。それらのフォルダーは、各部門に固有のものです。一方のポリ シー内で役割を持つユーザーは、他方のポリシーに属するオブジェクトを見ること ができません。

以下の表は、Campaign で可能なオブジェクト権限のサンプルのほんの一部を示しています。

機能/役割	フォルダー所 有者	オブジェクト 所有者	管理者	設計者	レビュー担当 者
キャンペーン	$\checkmark$	$\checkmark$	$\checkmark$	×	×
<ul> <li>キャンペー ンの追加</li> </ul>	$\checkmark$	$\checkmark$	$\checkmark$	$\checkmark$	×
<ul> <li>キャンペー ンの編集</li> </ul>	$\checkmark$	$\checkmark$	$\checkmark$	$\checkmark$	×
<ul> <li>キャンペー ンの削除</li> </ul>	$\checkmark$	$\checkmark$	$\checkmark$	$\checkmark$	×
<ul> <li>キャンペー ン要約の表 示</li> </ul>					
オファー	$\checkmark$	$\checkmark$	$\checkmark$	×	×
• オファーの 追加	$\checkmark$	$\checkmark$	$\checkmark$	$\checkmark$	×
<ul> <li>オファーの 編集</li> </ul>	$\checkmark$	$\checkmark$	$\checkmark$	$\checkmark$	×
<ul> <li>オファーの 削除</li> </ul>	$\checkmark$	$\checkmark$	$\checkmark$	×	×
<ul> <li>オファーの 要約の表示</li> </ul>	$\checkmark$	$\checkmark$	$\checkmark$	$\checkmark$	$\checkmark$

表 5. Eastern 部門のセキュリティー・ポリシー

表 6. Western 部門のセキュリティー・ポリシー

機能/役割	フォルダー所 有者	オブジェクト 所有者	管理者	設計者	レビュー担当 者
キャンペーン	$\checkmark$	$\checkmark$	$\checkmark$	×	×
<ul> <li>キャンペー ンの追加</li> </ul>	$\checkmark$	$\checkmark$	$\checkmark$	$\checkmark$	×
<ul> <li>キャンペー ンの編集</li> </ul>	$\checkmark$	$\checkmark$	$\checkmark$	$\checkmark$	×

機能/役割	フォルダー所 有者	オブジェクト 所有者	管理者	設計者	レビュー担当 者
<ul> <li>キャンペー ンの削除</li> </ul>	$\checkmark$	$\checkmark$	$\checkmark$	$\checkmark$	×
<ul> <li>キャンペー ン要約の表示</li> </ul>	$\checkmark$				
オファー	$\checkmark$	$\checkmark$	$\checkmark$	×	×
• オファーの 追加	$\checkmark$	$\checkmark$	$\checkmark$	$\checkmark$	×
• オファーの 編集	$\checkmark$	$\checkmark$	$\checkmark$	$\checkmark$	×
<ul> <li>オファーの 削除</li> </ul>	$\checkmark$	$\checkmark$	$\checkmark$	×	×
<ul> <li>キャンペー ンの追加</li> </ul>	$\checkmark$	$\checkmark$	$\checkmark$	$\checkmark$	$\checkmark$

表 6. Western 部門のセキュリティー・ポリシー (続き)

# シナリオ 3: 部門内での制限付きアクセス

会社の部門内の従業員には同じオブジェクト (キャンペーン、オファー、テンプレートなど)のセットに対する読み取り権限が必要ですが、編集と削除は各自の所有オブジェクトと、各自が所有するフォルダー内のオブジェクトに対してのみ行えます。

#### 解決策

オブジェクトに対する読み取り権限だけを付与する読み取り専用役割を定義しま す。部門内のすべてのユーザーをこの役割に割り当てます。所有者役割およびフォ ルダー所有者役割に対して定義したとおりのデフォルトの権限を保持します。

**注:** 会社で必要なセキュリティー・ポリシーが 1 つだけの場合、グローバル・ポリ シーを使用して、すべてのユーザーを承認役割に割り当てることができます。

各ユーザーは (所有者役割の下) 所有オブジェクトの編集または削除と、(フォルダ ー所有者役割の下) 各自が所有するフォルダー内のオブジェクトの編集または削除 を行うことができますが、他のユーザーが所有するオブジェクトとフォルダーにつ いては (読み取り専用役割の下) 表示のみ可能です。

以下の表は、このシナリオにおけるオブジェクト権限の一部のサンプルを示してい ます。

機能/役割	フォルダー所有者	オブジェクト所有者	レビュー担当者
キャンペーン	$\checkmark$	$\checkmark$	$\times$
• キャンペーンの追 加	$\checkmark$	$\checkmark$	×
<ul> <li>キャンペーンの編 集</li> </ul>	$\checkmark$	$\checkmark$	×
<ul> <li>キャンペーンの削除</li> </ul>	$\checkmark$	$\checkmark$	×
<ul> <li>キャンペーン要約 の表示</li> </ul>	$\checkmark$	$\checkmark$	$\checkmark$
オファー			$\times$
• オファーの追加	$\checkmark$	$\checkmark$	×
<ul> <li>オファーの編集</li> </ul>	$\checkmark$	$\checkmark$	×
• オファーの削除	$\checkmark$	$\checkmark$	×
<ul> <li>オファーの要約の 表示</li> </ul>	$\checkmark$	$\checkmark$	$\checkmark$

表7. シナリオ3 におけるオブジェクト権限

# セキュリティー・ポリシーの実装

このセクションでは、Campaign でセキュリティー・ポリシーを作成したり削除した りする方法、およびセキュリティー・ポリシーを Campaign のフォルダーやオブジ ェクトに適用する方法について説明します。

注: Campaign セキュリティー・ポリシーに対して作業を行うには、Marketing Platform の「ユーザーの役割と権限 (User Roles & Permissions)」ページを管理する ための権限が割り当てられている必要があります。複数パーティション環境では、 platform\_admin ユーザー、または PlatformAdminRole 役割を持つ別のアカウントだ けが、すべてのパーティションのセキュリティー・ポリシーに対して作業を行えま す。

# セキュリティー・ポリシーを作成するには

- 「設定」>「ユーザーの役割と権限 (User Roles & Permissions)」をクリックし ます。「ユーザーの役割と権限 (User Roles & Permissions)」ページが表示され ます。
- 2. 「キャンペーン」ノードの下の、セキュリティー・ポリシーを追加するパーティ ションを選択します。
- 3. 「**グローバル・ポリシー**」をクリックします。

- 4. ページの右側で、「ポリシーの追加」をクリックします。
- 5. ポリシー名と説明を入力します。
- 6. 「変更の保存」をクリックします。

新規ポリシーが「ユーザーの役割と権限」ページの「グローバル・ポリシー」の 下にリストされます。デフォルトでは、ポリシーにはフォルダー所有者役割とオ ブジェクト所有者役割が含まれています。

#### セキュリティー・ポリシーを削除するには

Campaign でユーザーが作成したセキュリティー・ポリシーで、使用されていないものがあれば、この手順を使用してそれを削除します。グローバル・ポリシーは削除できません。

注: Campaign でオブジェクトに対して適用されたセキュリティー・ポリシーは削除 しないでください。使用中のセキュリティー・ポリシーを削除する必要がある場合 はまず、そのセキュリティー・ポリシーを使用する各イベント・オブジェクト/フォ ルダーのセキュリティー・オブジェクトを別のポリシー (例えばグローバル・ポリ シー) に設定します。これを行わないと、そのオブジェクトにアクセスできなくな る場合があります。オブジェクトのセキュリティー・ポリシーを変更するには、適 切なセキュリティー・ポリシーを持つフォルダーの中、または最上位ルート・フォ ルダーにオブジェクトを移動する必要があります。

1. 「設定」>「ユーザーの役割と権限 (User Roles & Permissions)」をクリックし ます。

「ユーザーの役割と権限 (User Roles & Permissions)」ページが表示されます。

- 2. 「キャンペーン」ノードの下の、セキュリティー・ポリシーを削除するパーティ ションを選択します。
- 3. 「グローバル・ポリシー」の横の正符号をクリックします。
- 4. 削除するポリシーをクリックします。
- 5. 「**ポリシーの削除**」をクリックします。

確認ダイアログが表示されます。

6. 「**OK**」をクリックして、ポリシーを削除します。

# フォルダーやオブジェクトにセキュリティー・ポリシーを割り当て る

Campaign で最上位フォルダーまたはオブジェクトを作成するときには、そのセキュ リティー・ポリシーを選択する必要があります。最上位オブジェクトまたはフォル ダーに関連付けることができるのは、そのユーザーに役割が割り当てられているポ リシーだけです。

デフォルトでは、Campaign の全オブジェクトがグローバル・ポリシーに関連付けら れますが、オプションのカスタム定義ポリシーを割り当てることもできます。

フォルダーまたはオブジェクトをセキュリティー・ポリシーに関連付けるときに は、以下の規則に注意してください。

- フォルダー内のオブジェクトに対してセキュリティー・ポリシーを割り当てることはできません。
   オブジェクトは、それが格納されているフォルダーのセキュリティー・ポリシーを自動的に継承します。
- ・最上位フォルダーはセキュリティー・ポリシーを決定します。フォルダー内のオブジェクト(サブフォルダーを含む)は、親フォルダーのセキュリティー・ポリシーを継承します。言い換えると、最上位フォルダーのセキュリティー・ポリシーは、その中のオブジェクトおよびサブフォルダーのセキュリティー・ポリシーを決定します。したがって、フォルダー内のオブジェクトに対して手動でセキュリティー・ポリシーを割り当てることはできません。オブジェクトのセキュリティー・ポリシーを変更するには、適切なセキュリティー・ポリシーを持つフォルダーの中、または最上位ルート・フォルダーにオブジェクトを移動する必要があります。
- オブジェクトが移動またはコピーされると、セキュリティー・ポリシーが変化します。 複数のセキュリティー・ポリシー間でオブジェクトとフォルダーを移動またはコピーできますが、移動/コピーを実行するユーザーは、ソースと宛先の両方のポリシーでその操作を行う権限を持っている必要があります。

ソースとは異なるセキュリティー・ポリシーに属するフォルダーまたは場所にオ ブジェクトやフォルダーが移動/コピーされた後、その下位のオブジェクトやサブ フォルダーのセキュリティー・ポリシーは、新しいフォルダーまたは場所のセキ ュリティー・ポリシーに自動的に変更されます。

#### Campaign での管理権限について

Campaign での管理権限はパーティションごとに割り当てられます。これらの管理機 能は、セキュリティー・ポリシーにおけるオブジェクト関連の機能権限 (グローバ ル・セキュリティー・ポリシーを含む)とは異なります。これらの権限を持つユー ザーは、パーティション内の任意のオブジェクトに対して、許可された操作を実行 できます。

各パーティションには、事前定義された次の 4 つの役割があります。

- **管理** すべての権限が有効。デフォルトのユーザー asm\_admin には、この役割 が割り当てられます。
- 実行 ほとんどの権限が有効です。ただし、クリーンアップ操作の実行、オブジェクト/フォルダーの所有権の変更、genrpt コマンド行ツールの実行、グローバル抑制の管理、フローチャートにおける抑制の無効化などの管理機能を除きます。
- 設計 「実行」役割と同じ権限です。
- レビュー すべてのオブジェクトに対する読み取り専用アクセス権限。フローチャートの場合、これらのユーザーはフローチャートの編集モードにアクセスできますが、保存は許可されていません。

必要に応じて、それぞれのパーティションでこの他にも管理役割を追加できます。

Campaign で管理役割と権限を管理する手順は、Marketing Platform で役割と権限を 管理する手順と同じです。

## レポート・フォルダー権限の構成

「分析」メニュー項目とオブジェクト・タイプ (例えばキャンペーンやオファー)の 「分析」タブへのアクセスを制御することに加えて、レポートのグループの権限 を、それが物理的に保管される IBM Cognos<sup>®</sup> システム上のフォルダー構造に基づ いて構成することができます。

「レポート・フォルダー権限の同期」を実行する前に、以下の条件が満たされてい ることを確認する必要があります。

- ・ レポート作成が構成後に有効になっている。
- レポートを構成する Cognos サーバーが稼働している。
- 1. ReportSystem 役割を持つ Campaign 管理者としてログインします。
- 2. 「設定」>「レポート・フォルダー権限の同期」と選択します。

システムは、すべてのパーティションについて、IBM Cognos システムにある フォルダーの名前を取得します。(これは、いずれかのパーティションのフォ ルダー権限を構成することに決めた場合、それをすべてのパーティションに対 して構成する必要があることを意味します。)

- 3. 「設定」>「ユーザーの役割と権限」>「キャンペーン」と選択します。
- 4. 「キャンペーン」ノードの下の最初のパーティションを選択します。
- 5. 「役割の追加と権限の割り当て」を選択します。
- 6. 「保存と権限の編集」を選択します。
- 7. 「権限」フォームで、「レポート」を展開します。

「レポート」エントリーは、「**レポート・フォルダー権限の同期**」オプション の初回実行後に表示されます。

- 8. 「パフォーマンス・レポート」の権限に適切な役割を付与します。
- 9. レポート・フォルダーのアクセス設定を適切に構成し、変更を保存します。
- 10. パーティションごとに、ステップ 4 から 8 を繰り返します。

#### 参照資料: Campaign での管理権限

Campaign には、以下のカテゴリーの管理権限が含まれています。

- 管理
- オーディエンス・レベル
- データ・ソース
- ディメンション階層
- 履歴
- ロギング
- ・ レポート (フォルダー権限)
- システム・テーブル
- ユーザー・テーブル
- ユーザー変数

注: カテゴリー・ヘッダーの権限を設定することにより、カテゴリー内のすべての 機能の権限を設定できます。

# 管理

#### 表 8. 管理 (管理権限)

権限	説明
モニター領域のアク セス権限	キャンペーン・モニター領域へのアクセスを許可します。
モニター作業の実行	キャンペーン・モニター領域でのモニター・タスクの実行を許可し ます。
分析領域のアクセス 権限	キャンペーン分析領域でのレポートへのアクセスを許可します。
最適化リンクのアク セス権限	Contact Optimization がインストール済みの場合、そのアプリケーションへのアクセスを許可します。
svradm コマンド・ラ イン・ツールの実行	Campaign Server Manager (unica_svradm) を使用した管理機能の実 行を許可します。
genrpt コマンド・ラ イン・ツールの実行	Campaign レポート生成ユーティリティー (unica_acgenrpt) の実行 を許可します。
編集モードでのフロ ーチャートの引き継 ぎ	他のユーザーからの「編集」または「実行」モードでのフローチャ ート制御の引き継ぎを許可します。 注:「ロックされた」フローチャートの制御を引き継いだ場合、他 方のユーザーが締め出されて、最後の保存時より後のフローチャー トの変更内容がすべて失われます。
実行中のフローチャ ートへの接続	Campaign Server Manager (unica_svradm) または Campaign ユーザ ー・インターフェースを介した実行中のフローチャートへの接続を 許可します。
サーバー・プロセス の終了	Campaign Server Manager (unica_svradm) を使用した Campaign サ ーバー (unica_acsvr) の終了を許可します。
キャンペーン・リス ナーの終了	Campaign Server Manager (unica_svradm) または svrstop ユーティ リティーを使用した Campaign リスナー (unica_aclsnr) の終了を許 可します。
sesutil コマンド・ ライン・ツールの実 行	Campaign セッション・ユーティリティー (unica_acsesutil) の実行 を許可します。
仮想メモリー設定の オーバーライド	フローチャート拡張設定の仮想メモリー設定のオーバーライドを許 可します。
カスタム属性のアク セス権限	キャンペーン設定ページからのカスタム属性定義へのアクセスと管 理を許可します。
セル・レポートのア クセス権限	フローチャートの「編集」ページで「レポート」アイコンからセ ル・レポートにアクセスできるようにします。セル内容レポートへ のアクセスを除外します (この権限も明示的に付与されている場合 を除く)。
セル・レポートのエ クスポート	セル・レポートへのアクセス権限が付与されている場合、セル・レ ポートの印刷とエクスポートを許可します。
セル内容レポートの アクセス権限	フローチャートの「 <b>編集</b> 」ページで「 <b>レポート</b> 」アイコンからセル 内容レポートにアクセスできるようにします。
セル内容レポートの エクスポート	セル内容レポートのエクスポートが付与されている場合、セル内容 レポートの印刷とエクスポートを許可します。

表 8. 管理 (管理権限) (続き)

権限	説明
クリーンアップ操作	unica_acclean またはカスタム・ツールを使用したクリーンアップ
の実行	操作の実行を許可します。
オブジェクト/フォル	オブジェクトまたはフォルダーの所有権の変更を許可します。
ダーの所有権の変更	

#### オーディエンス・レベル

このカテゴリーの権限は、キャンペーンのターゲット (顧客や世帯など)を表すオーディエンス・レベルの操作を許可します。

表9. オーディエンス・レベル (管理権限)

権限	説明
オーディエンス・レ ベルの追加	Campaign 設定ページの「オーディエンス・レベルの管理」の下で新 しいオーディエンス・レベルを作成できます。
オーディエンス・レ ベルの削除	Campaign 設定ページの「オーディエンス・レベルの管理」の下で既 存のオーディエンス・レベルを削除できます。
グローバル抑制の管 理	Campaign でのグローバル抑制セグメントの作成および構成を許可します。
フローチャートでの 抑制の無効化	フローチャートの詳細設定ダイアログでの「このフローチャートの グローバル抑制を無効にする」チェック・ボックスの選択/選択解除 を許可します。

# データ・ソース

このカテゴリーの権限は、データ・ソースへのアクセスに影響を与えます。

表 10. データ・ソース (管理権限)

権限	説明
データ・ソース・ア	管理領域からの (およびフローチャートでの) データ・ソースのログ
クセスの管理	インの管理を許可します。
DB 認証を伴う保存の	テーブル・カタログおよびフローチャート・テンプレートで「 <b>デー</b>
設定	タベース認証情報と共に保存」フラグを有効にすることを許可しま
	す。

#### ディメンション階層

このカテゴリーの権限は、レポートやキューブで使用できるディメンション階層の 操作を許可します。

表 11. ディメンション階層 (管理権限)

権限	説明
ディメンション階層 の追加	新しいディメンション階層の作成を許可します。
ディメンション階層 の編集	既存のディメンション階層の編集を許可します。
ディメンション階層 の削除	既存のディメンション階層の削除を許可します。

表 11. ディメンション階層 (管理権限) (続き)

権限	説明
ディメンション階層	既存のディメンション階層のリフレッシュを許可します。
のリフレッシュ	

#### 履歴

このカテゴリーの権限は、コンタクト履歴テーブルおよびレスポンス履歴テーブル への記録に影響を与えます。

表 12. 履歴 (管理権限)

権限	説明
コンタクト履歴テー	接触プロセスを構成する際のコンタクト履歴テーブルへの記録を有
ブルに記録	効化または無効化できるようにします。
コンタクト履歴の消	コンタクト履歴テーブルから項目をクリアできるようにします。
去	
レスポンス履歴テー	応答プロセスを構成する際のレスポンス履歴テーブルへの記録を有
ブルへの記録	効化または無効化できるようにします。
レスポンス履歴のク	レスポンス履歴テーブルから項目をクリアできるようにします。
リア	

#### ロギング

このカテゴリーの権限は、システムやフローチャートのログやオプションの操作に 影響を与えます。

表 13. ロギング (管理権限)

権限	説明
システムおよびフロ	フローチャート・ログおよびシステム・ログを表示できるようにし
ーチャートのログの	ます。
表示	
フローチャート・ロ	フローチャート・ログをクリアできるようにします。
グのクリア	
フローチャート・ロ	デフォルトのフローチャート・ロギング・オプションをオーバーラ
グ・オプションのオ	イドできるようにします。
ーバーライド	

#### レポート (フォルダー権限)

「設定」メニューから「レポート・フォルダー権限の同期」を初めて実行した後、 パーティション権限ページに「レポート」ノードが表示されます。同期プロセスに よって、IBM Cognos システムに物理的に置かれているレポートのフォルダー構造 が決定され、それらのフォルダーの名前がこのノードの下にリストされます。

このノードの下の設定により、リストに表示されるフォルダーのレポートへのアクセスが認可または拒否されます。

#### システム・テーブル

このカテゴリーの権限により、IBM Campaign システム・テーブルのマップやマップ解除などの操作が可能かどうかが決まります。

表14. システム・テーブル (管理権限)

権限	説明
システム・テーブル のマップ	システム・テーブルをマップできるようにします。
システム・テーブル の再マップ	システム・テーブルを再マップできるようにします。
システム・テーブル のマップ解除	システム・テーブルをマップ解除できるようにします。
システム・テーブ ル・レコードの削除	システム・テーブルからレコードを削除できるようにします。

# ユーザー・テーブル

このカテゴリーの権限により、IBM Campaign ユーザー・テーブルのマップやマッ プ解除などの操作が可能かどうかが決まります。ユーザー・テーブルには、フロー チャートで使用する、顧客や見込み客についてのデータが含まれています。

表 15. ユーザー・テーブル (管理権限)

権限	説明
ベース・テーブルの	ベース・テーブルをマップできるようにします。
マップ	
ディメンション・テ ーブルのマップ	ディメンション・テーブルをマップできるようにします。
その他のテーブルの マップ	その他のテーブルをマップできるようにします。
区切り記号付きファ イルのマップ	区切り記号付きファイルにユーザー・テーブルをマップできるよう にします。
固定幅フラット・フ ァイルのマップ	固定幅フラット・ファイルにユーザー・テーブルをマップできるよ うにします。
データベース表のマ ップ	データベース表にユーザー・テーブルをマップできるようにしま す。
ユーザー・テーブル の再マップ	ユーザー・テーブルを再マップできるようにします。
ユーザー・テーブル のマップ解除	ユーザー・テーブルをマップ解除できるようにします。
カウントと値の再計 算	テーブルのマッピングで「計算」ボタンを使用してテーブルのカウ ントと値を再計算できるようにします。
未加工 SQL を使用す る	未加工 SQL を選択プロセスの照会、カスタム・マクロ、およびディメンション階層で使用できるようにします。

#### ユーザー変数

このカテゴリーの権限は、フローチャート・プロセスの照会や式で使用できるユー ザー変数を操作できるかどうかを制御します。

表 16. ユーザー変数 (管理権限)

権限	説明
ユーザー変数の管理	フローチャートのユーザー変数のデフォルト値を作成、削除、および設定できるようにします。
ユーザー変数の使用	出力ファイルまたはテーブルでユーザー変数を使用できるようにし ます。

# Windows 偽装の管理

このセクションには、以下の情報が記載されています。

- 『Windows 偽装とは?』
- 『Windows 偽装を使用する理由』
- 『Campaign ユーザーと Windows ユーザーとの関係』
- 20 ページの『Windows 偽装グループ』
- 20 ページの『Windows 偽装と IBM EMM へのログイン』

## Windows 偽装とは?

Windows 偽装は、Campaign の管理者が、Campaign ユーザーを Windows ユーザー に関連付けることを可能にするメカニズムです。その関連付けにより、Campaign ユ ーザーが呼び出す Campaign プロセスが、対応する Windows ユーザーの資格情報 のもとで実行されるようになります。

例えば、Windows 偽装が有効になっている場合、Campaign のユーザー jsmith が フローチャートを編集すると、unica\_acsvr プロセスが Marketing Platform のログ イン名 jsmith に関連する Windows ユーザー ID のもとで開始されます。

# Windows 偽装を使用する理由

Windows 偽装を使用することにより、ファイル・アクセスに関して Windows レベ ルのセキュリティー許可の仕組みを利用することができます。 NTFS を使用するよ うセットアップされているシステムの場合、ユーザーおよびグループによるファイ ルやディレクトリーへのアクセスを制御することができます。

さらに、Windows 偽装を使用するなら、Windows システム・モニターのさまざまな ツールを使用することにより、どのユーザーがサーバー上のどの unica\_acsvr プロ セスを実行しているかを知ることができます。

# Campaign ユーザーと Windows ユーザーとの関係

Windows の偽装を使用するには、Campaign ユーザーと Windows ユーザーの間に 1 対 1 の関係を確立する必要があります。つまり、Campaign の各ユーザーが、それ と正確に同じユーザー名の 1 人の Windows ユーザーに対応していなければなりま せん。

多くの場合、Campaign を使用することになる、一群の Windows 既存ユーザーの集 合から管理作業を開始することになります。 Marketing Platform において、 Campaign ユーザーを、それぞれ関連する Windows ユーザーと正確に同じ名前で作 成する必要があります。

# Windows 偽装グループ

Campaign ユーザーをセットアップする対象となる Windows ユーザーのそれぞれ を、Windows 偽装グループに入れることが必要です。その上で、そのグループにい くつかの特定のポリシーを割り当てる必要があります。

Campaign パーティション・ディレクトリーに対する read/write/execute 特権を、 そのグループについて付与するなら、管理作業を簡素化できます。

#### Windows 偽装と IBM EMM へのログイン

Windows 偽装がセットアップされている場合、ユーザーが Windows にログインした時点で、Campaign ユーザーは、シングル・サインオンを使用して自動的に IBM EMM にログインすることになります。ブラウザーを開いて IBM EMM の URL に移動する際に、再度ログインする必要がなく、IBM EMM の開始ページがすぐに表示されます。

## Windows 偽装の作業

このセクションでは、Windows 偽装のセットアップに含まれる以下の作業について 説明します。

- 『Windows 偽装のプロパティーの設定』
- 『Campaign ユーザーの作成』
- 21ページの『Windows 偽装グループの作成』
- 21ページの『Windows 偽装グループのポリシーへの割り当て』
- 21ページの『Windows 偽装グループへの権限割り当て』

注: Windows 偽装の実行には、LDAP および Active Directory が必要です。 LDAP および Active Directory のセットアップについて詳しくは、「*IBM Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

#### Windows 偽装のプロパティーの設定

「構成」ページの Campaign > unicaACListener カテゴリーで、 enableWindowsImpersonation プロパティーの値を TRUE に設定します。

注:場合によっては、Windowsのドメイン・コントローラーのセットアップに基づいたプロパティーの付加的な要件があるかもしれません。詳しくは、「*Marketing Platform 管理者ガイド*」のうちシングル・サインオンに関するセクションを参照してください。

#### Campaign ユーザーの作成

Marketing Platform を使用して、Campaign の内部または外部ユーザーを作成することができます。

外部ユーザーは、Active Directory のユーザーおよびグループ同期を構成することに より作成します。作成する各ユーザーのログイン名は、そのユーザーの Windows ユーザー名と同じでなければなりません。

#### Windows 偽装グループの作成

注: この作業を完了するには、Windows サーバー上の管理者特権が必要です。

Campaign ユーザー用の Windows グループを作成します。その後、Campaign ユー ザーに対応する Windows ユーザーを、このグループに追加します。

グループの作成について詳しくは、Microsoft Windows の文書を参照してください。

#### Windows 偽装グループのポリシーへの割り当て

注: この作業を完了するには、Windows サーバー上の管理者特権が必要です。

Campaign ユーザーに対応するユーザーを格納するための Windows グループの作成 後、そのグループを以下のポリシーに追加する必要があります。

- プロセスのメモリー割り当て量の調整
- トークン・オブジェクトの作成
- プロセス・レベル・トークンの置き換え

グループをポリシーに割り当てることについて詳しくは、Microsoft Windows の文書 を参照してください。

#### Windows 偽装グループへの権限割り当て

Windows Explorer を使用して、Campaign インストール済み環境下の partitions/*partition\_name* フォルダーに対する read/write/execute アクセス権限を、 Windows 偽装グループに付与します。

フォルダーに対する権限割り当てについて詳しくは、Microsoft Windows の文書を参照してください。

# 第3章 データベース表の管理

Campaign 管理者は、以下を行う必要があります。

- Campaign システム・テーブルをマップする (これが Campaign のインストール時 に行われていない場合)。
- Campaign フローチャートで顧客データを使用できるように、ユーザー・テーブル をマップする。

さらに、管理者は以下を扱う作業を行います。

- データ・ディクショナリー。これを使用して、固定幅フラット・ファイルに基づいてユーザー・テーブルの構造を定義します。
- テーブル・カタログ。これは、マップされたユーザー・テーブルを効率的に管理 するために使用されます。

# テーブル管理の概念

このセクションでは、以下のテーブル管理の概念について説明します。

- 『システム・テーブルとは』
- 『ユーザー・テーブルとは』
- 25ページの『テーブルのマッピングについて』
- 25ページの『データ・ディクショナリーとは』
- 26ページの『テーブル・カタログとは』

# システム・テーブルとは

システム・テーブルは、Campaign アプリケーション・データを格納するデータベー ス表です。具体的には、システム・テーブルには、キャンペーン、セッション、フ ローチャート、オファー、テンプレート、カスタム・マクロ、ユーザー定義フィー ルド式、トリガーなどの、キャンペーン・オブジェクトのメタデータが格納されま す。コンタクト履歴情報およびレスポンス履歴情報もシステム・テーブルに格納さ れます。

Campaign のインストールおよび構成のプロセスには、Campaign システム・テーブ ルのセットアップが含まれます。詳しくは、インストール文書を参照してくださ い。

# ユーザー・テーブルとは

ユーザー・テーブルは、フローチャート内のプロセスで使用するデータを格納する テーブルです。ユーザー・テーブルは、リレーショナル・データベース内のテーブ ル、または ASCII フラット・ファイルにマップできます。

**注:** Campaign 内のユーザー・テーブルをマップする前に、Campaign でサポートされるデータ型だけがそのテーブルで使用されていることを確認してください。各デ

ータベースでサポートされるデータ型のリストについては、389ページの『付録 C. ユーザー・テーブルにおいてサポートされるデータ型』を参照してください。

通常、ユーザー・テーブルには、企業の顧客、見込み顧客、または製品に関するデ ータが格納されます。例えば、あるユーザー・テーブルには、アカウント ID、アカ ウント・タイプ、残高など、顧客アカウント・データの列が含まれるとします。こ のデータは、特定のアカウント・タイプおよび残高を持つ顧客をターゲットにした キャンペーンで使用できます。

以下に示す 3 つのタイプのユーザー・テーブルを扱います。

- ベース・テーブル
- ディメンション・テーブル
- 汎用テーブル

#### ベース・レコード・テーブルとは

ベース・レコード・テーブルは、個別の顧客、業種、アカウント、世帯など、キャ ンペーンの潜在的なコンタクトに関するデータを格納するテーブルです。

各ベース・レコード・テーブルは、データベース表または ASCII フラット・ファイ ル (固定幅あるいは区切り記号付き) にマップすることができます。また、ベース・ レコード・テーブルにはそのコンタクトの ID が必要です。つまり、1 つ以上の列 に格納される値を組み合わせたものをオーディエンス・エンティティーのユニーク ID として使用する必要があります。テーブル内のどのレコードについても、これら の列が NULL になることはありません。

ベース・レコード・テーブル内の ID を 1 つ以上のオーディエンス・レベルにマッ プします。

キャンペーンが実行されるとき、フローチャート内のプロセスは、これらのオーディエンス・レベル ID をベース・レコード・テーブルから選択します。

#### ディメンション・テーブルとは

ディメンション・テーブルは、データベース表にマップされるベース・レコード・ テーブル内のデータを補うデータベース表です。

注: ディメンション・テーブルは、フラット・ファイルにマップすることができま せん。また、フラット・ファイルにマップされるベース・テーブルと結合させるこ ともできません。ディメンション・テーブルとそれに対応するベース・テーブル は、同じ物理データベース (つまり同じデータ・ソース)内のデータベース表にマッ プされる必要があります。

例えば、ディメンション・テーブルには、郵便番号に基づく購買層情報、1 人の顧 客が保有する各アカウント、顧客の取り引き内容、製品情報、購入取り引きの詳細 などが含まれる場合があります。

ディメンション・テーブルを定義するとき、ディメンション・テーブルをベース・ レコード・テーブルに結合させるためのキー・フィールドを指定します。

#### 汎用テーブルとは

汎用テーブルは、Campaign からデータをエクスポートできるフリー・フォーマット のテーブルです。これは最も簡単に作成できるテーブル・タイプで、他のアプリケ ーションで使用するデータを Campaign からエクスポートするためだけに使用され ます (汎用テーブルは、ベース・テーブルとしてマップされていない限り、エクス ポート後に Campaign からアクセスすることはできません)。

汎用テーブルは、区切り記号付きフラット・ファイルとして、またはデータ・ディ クショナリーを設定したフラット・ファイルとして、リレーショナル・データベー ス内に定義できます。汎用テーブルには、キーやオーディエンス・レベルがありま せん。

汎用テーブルの使用法として、他のアプリケーションで使用するためのキャンペー ン・データを「**スナップショット**」プロセスで取得します。例えば、エクスポート される汎用テーブルに履歴データやメール配信リストを保管するように「**スナップ** ショット」プロセスを定義することができます。

汎用テーブルは、データをエクスポートするためだけに使用します。汎用テーブル のデータを Campaign で照会や操作することはできません。

# テーブルのマッピングについて

テーブルのマッピングとは、Campaign でアクセス可能な外部カスタマー・テーブル またはシステム・テーブルを作成するプロセスです。

テーブル・マッピングは、ベース・テーブル、ディメンション・テーブル、および 汎用テーブルを定義するために使用されるメタデータです。そこには、データ・ソ ース、テーブルの名前と場所、テーブル・フィールド、オーディエンス・レベル、 およびデータに関する情報が格納されます。テーブル・マッピングは、テーブル・ カタログに保管して再利用できます。

# データ・ディクショナリーとは

データ・ディクショナリーは、Campaign でベース・テーブルまたは汎用テーブルと して使用される固定幅 ASCII フラット・ファイルのデータ・フォーマットを定義す るファイルです。

データ・ディクショナリーは、固定幅 ASCII テキスト・ファイルの構造とフォーマットを解釈するために必要です。その中では、フィールド名、それらの順序、デー タ型 (文字列または数値)、およびファイル内で占めるバイト位置を定義します。デ ータ・ディクショナリーは、Campaign によって作成される固定幅フラット・ファイ ルでは自動的に作成され、通常は手動で作成や編集を行う必要はありません。

データ・ディクショナリーは、作成するフラット・ファイル・テーブルが必ず特定 の構成に従うようにするためのもので、「スナップショット」、「メール・リス ト」、「コール・リスト」などの出力プロセスで使用されます。

データ・ディクショナリーでは、テーブル・フィールド、データ型、およびサイズ を定義します。管理者は、ベンダーまたはチャネルに固有の出力用データ・ディク ショナリーを作成して、事前に決められたフォーマットの出力を作成するためにそ れらを再利用することができます。 IBM 以外のサード・パーティー・アプリケーションによって作成された固定幅フラ ット・ファイルを使用する場合は、関連するデータ・ディクショナリーを手動で、 またはプログラムで作成する必要が生じることがあります。あるいは、既存のデー タ・ディクショナリーをコピーして編集することにより、新しいファイルを作成す ることもできます。データ・ディクショナリーを編集してフィールド名を変更する こともできます。データ・ディクショナリーに含まれる他のフィールドを編集する 場合は、データを破損しないように注意する必要があります。

# テーブル・カタログとは

テーブル・カタログは、マップされたユーザー・テーブルの集合です。

テーブル・カタログには、各フローチャートで再利用するための、ユーザー・テー ブル・マッピング・メタデータ情報すべてが保管されます。テーブル・カタログ は、デフォルトでは.cat 拡張子を使用してプロプラエタリー・バイナリー・フォ ーマットで保管されます。詳しくは、「*Campaign* ユーザー・ガイド」の『保管テー ブル・カタログの概要』を参照してください。

また、末尾に .XML 拡張子が付いたテーブル・カタログ名を指定することにより、 テーブル・カタログを XML 形式で保管して後でロードすることもできます。テー ブル・カタログを XML として保存すると、値の表示や解釈が可能になります。 XML 形式は、編集目的で使用すると特に役立ちます。 XML 形式の一般的な使用 方法として、グローバルな検索を行い、実稼働データ・ソース名として出現するす べての語句をテスト・データ・ソース名に置き換える操作があります。これによ り、テーブル・カタログを他のデータ・ソースに簡単に移植できます。

テーブル・カタログは、以下の目的で使用できます。

- 共通に使用するユーザー・テーブルの保存、ロード、および更新を簡単に行う。
- 代替データ・マッピングを作成する (例えば、実行対象をサンプル・データベー スと実稼働データベースとで切り替えるため)。

マップされたユーザー・テーブルをテーブル・カタログに保存した後に、同じテー ブル・カタログを他のフローチャートで使用できます。つまり、以下を行うことが できます。

- あるフローチャートに含まれるテーブル・カタログを変更してから、更新された テーブル・カタログを各フローチャートにインポートして、それらの変更を他の フローチャートに伝搬させる。
- あるフローチャートのために最初にロードした内部カタログを保持した状態で、 それを他のフローチャートにコピーし、そこで変更する。
- 1 つの「テンプレート」となるテーブル・カタログから開始して、複数の異なる フローチャートの内部カタログに対して別々の変更を行う。

テーブル・カタログの削除には、Campaign インターフェースだけを使用してください。テーブルを削除した場合やファイル・システム内のテーブル・カタログを直接変更した場合、Campaign はシステム内のデータ保全性を保証できません。

# テーブルの初期管理タスク

このセクションでは、Campaign のインストール後に行う、テーブルの以下の初期管 理タスクについて説明します。

- ・ 『前提条件: インストール後に前提となる状態』
- 『システム・テーブルのアクセスをテストする方法』
- 28ページの『ユーザー・テーブルのアクセスをテストする方法』
- 29 ページの『「Customer」オーディエンス・レベルのシステム・テーブルのマッ ピング』

## 前提条件: インストール後に前提となる状態

このセクションで説明される初期管理タスクでは、Campaign のインストールが完了 していることを想定しています。これには以下が含まれます。

- Campaign システム・データベースのセットアップおよび構成
- ユーザー・テーブルを格納する任意のデータベースにアクセスするための Campaign の構成 (つまり、データ・ソースが定義されている)

これらのタスクについて詳しくは、インストール文書を参照してください。

さらに、ベース・テーブルに関連したオーディエンス・レベルを指定する必要があるため、ユーザー・テーブルの作業を開始する前に必要なオーディエンス・レベルを定義する必要があります。

Campaign システムでテーブル管理タスクを開始する準備ができたことを確認するための手順については、以下を参照してください。

- 『システム・テーブルのアクセスをテストする方法』
- 28ページの『ユーザー・テーブルのアクセスをテストする方法』
- 29 ページの『「Customer」オーディエンス・レベルのシステム・テーブルのマッ ピング』

#### システム・テーブルのアクセスをテストする方法

Campaign システム・テーブルがマップされていることと、データベース接続が正常 に機能していることを確認する必要があります。

- 「設定」>「Campaign 設定」を選択します。「キャンペーン設定」ページが開き、様々な管理タスクへのリンクが表示されます。
- 2. 「**データ・ソース操作**」セクションで、「**テーブル・マッピングの**管理」をクリックします。

「テーブル・マッピング」ウィンドウが開き、「システム・テーブル表示」が選 択された状態となります。

ODBC 名に UA\_SYSTEM\_TABLES を使用していれば、Campaign データベース をセットアップするときに Campaign システム・テーブルが自動的にマップされ ます。詳しくは、インストール文書を参照してください。

IBM Campaign システム・テーブルの各エントリーにおいて、右の列にデータベース表名が設定されている必要があります。ただし、実装環境で特定のフィーチ

ャーが使用されないことがあり、その場合にはいくつかのシステム・テーブルが マップされないままとなる場合があります。

システム・テーブルがマップされていることを確認できない場合、Campaignの インストールと構成を実行した担当者に問い合わせてください。

# ユーザー・テーブルのアクセスをテストする方法

必要なユーザー・テーブルにアクセスできるように Campaign が正しく構成されていることを確認する必要があります。

- 「設定」>「Campaign 設定」を選択します。「キャンペーン設定」ページが開き、様々な管理タスクへのリンクが表示されます。
- 2. 「**データ・ソース操作**」セクションで、「**テーブル・マッピングの**管理」をクリックします。

「テーブル・マッピング」ウィンドウが開き、「システム・テーブル表示」が選 択された状態となります。

- 3. 「**ユーザー・テーブル表示**」を選択します。 初期状態ではマップされたユーザ ー・テーブルがなく、リストは空です。
- 4. 「新規テーブル」をクリックします。 「新規テーブル定義」ウィンドウが開き ます。
- 5. 「**次へ**」をクリックします。

ファイルとデータベースのどちらにマップするかを指定するためのプロンプトが出されます。

「選択したデータベースの既存テーブルにマップ」を選択した場合、「データ・ ソースの選択」リストに1つ以上のデータベースが表示されるはずです。「デ ータ・ソースの選択」ボックスにエントリーが表示されない場合、データ・ソー スを定義する必要があります。詳しくは、インストール文書を参照してください。

- 6. Campaign が 1 つ以上のフラット・ファイルをユーザー・データ用に使用してい る場合、以下のようにします。
  - a. 「既存ファイルにマップ」を選択してから、「次へ」をクリックします。 「新規テーブル定義」ウィンドウに、フラット・ファイルおよびデータ・デ ィクショナリーの場所を指定するフィールドが含まれるようになります。
  - b. 「参照」をクリックして必要なファイルを位置指定するか、相対パスとファ イル名をテキスト・ボックスに直接入力します。ファイルにアクセスするに は、それを Campaign のパーティション・ルートの下に配置する必要があり ます。

これで、32ページの『ユーザー・テーブルの作業』に説明されているように、 ユーザー・データを Campaign 内にマップできるようになりました。

フローチャートを編集するときに Campaign がアクセスできるようにセットアップ された、顧客データベースを参照することもできます。「設定」>「キャンペーン設 定」をクリックし、「データ・ソース・アクセスの表示」を選択します。「データ ベース・ソース」ウィンドウが開き、システム・テーブル・データベース、および
構成済みのすべての顧客データベースがリストされます。このウィンドウから、顧 客データベースへのログインおよびログアウトを行うことができます。

# 「Customer」オーディエンス・レベルのシステム・テーブルのマ ッピング

Campaign の出荷時には、「Customer」オーディエンス・レベルが設定されていま す。インストール文書で説明されているように、「Customer」オーディエンス・レ ベルをサポートするシステム・データベース表は、提供されているシステム・テー ブル作成スクリプトを実行するときに作成されます。

ただし、「Customer」オーディエンス・レベル・テーブルのマッピングは、インス トール後に行われません。これらのテーブルは、以下の方法でマップする必要があ ります。

IBM Campaign システム・テーブル	マップ先のデータベース表
顧客コンタクト履歴	UA_ContactHistory
顧客詳細コンタクト履歴テーブル	UA_DtlContactHist
顧客レスポンス履歴	UA_ResponseHistory
顧客セグメント・メンバーシップ	UA_SegMembership

表 17. 「Customer」オーディエンス・レベルのテーブルのマッピング

## セグメント・メンバーシップ・テーブルのマッピングについて

セグメント・メンバーシップ・テーブルは、ユーザーが新しいオーディエンスを定 義する際に Campaign によって作成されるオーディエンス・レベルのシステム・テ ーブルの 1 つです。Campaign フローチャート、または Contact Optimization 内の 最適化セッションで戦略的セグメントを使用する場合、セグメント・メンバーが定 義されているデータベース表に対して、セグメント・メンバーシップ・テーブルを マップする必要があります。

例えば、戦略的セグメントと一緒にデフォルトの「Customer」オーディエンスを使用する予定の場合、「Customer セグメント・メンバーシップ」システム・テーブルを「UA\_SegMembership」セグメント・メンバーシップ・データベース表にマップする必要があります。戦略的セグメントで使用する他のオーディエンスに関しては、「<オーディエンス名>セグメント・メンバーシップ」というシステム・テーブルを、セグメント・メンバーが定義されているデータベース表にマップします。 UA SegMembership を、データベース表のテンプレートとして使用できます。

セグメント作成プロセスを実行する場合、データベース表がセグメント・メンバー シップ・システム・テーブルに既にマップされていると、そのデータベース表にデ ータが追加されます。データベース表がセグメント・メンバーシップ・システム・ テーブルにマップされていないときにセグメント作成プロセスを実行する場合に は、後からテーブルをマップしてそのテーブルにデータを追加するためには、セグ メント作成プロセスを再実行しなければなりません。そのようにしないと、戦略的 セグメントを使用する Contact Optimization 内の最適化セッションにおける結果が 不正確になる場合があります。

フローチャートまたは最適化セッションで戦略的セグメントを使用しない場合

Campaign フローチャートおよび Contact Optimization セッションで戦略的セグメン トを使用するかどうかは任意です。戦略的セグメントを使用しない場合には、セグ メント・メンバーシップ・テーブルをマップしないのがベスト・プラクティスで す。オーディエンスのセグメント・メンバーシップ・システム・テーブルをマップ すると、Campaign または Contact Optimization において、対象のオーディエンスが 含まれるフローチャートまたは最適化セッションを実行するたびにそのテーブルが リフレッシュされます。戦略的セグメントを使用していない場合、これは処理上の 不要なオーバーヘッドとなります。

# システム・テーブルの作業

このセクションには、以下の情報が記載されています。

- 『システム・テーブルをマップまたは再マップする方法』
- 31ページの『システム・テーブルをマップ解除する方法』
- 31ページの『システム・テーブルの内容を表示する方法』

## システム・テーブルをマップまたは再マップする方法

大半のシステム・テーブルは、推奨されるシステム・テーブル・データ・ソース名 UA\_SYSTEM\_TABLES が使用されていれば、初期のインストールおよび構成時に自動的 にマップされます。詳しくは、インストール文書を参照してください。システム・ テーブルをマップする必要がある場合は、以下の手順に従ってください。

**重要:**システム・テーブルのマップまたは再マップは、どのユーザーも Campaign を使用していないときに行う必要があります。

- 「設定」>「Campaign 設定」を選択します。「キャンペーン設定」ページが開き、様々な管理タスクへのリンクが表示されます。
- 2. 「**データ・ソース操作**」セクションで、「**テーブル・マッピングの管理**」をクリックします。 「テーブル・マッピング」ウィンドウが開きます。
- 3. 「システム・テーブル表示」を選択します。
- マップするテーブルを「IBM Campaign システム・テーブル」リストから選択し、それをダブルクリックするか、「テーブル・マッピング」または「テーブル 再マップ」をクリックします。

「ソース・データベースを選択し、必須フィールドを照合します」ウィンドウが 開きます。

5. 「ソース・テーブル」ドロップダウン・リストでテーブルが自動的に選択されない場合は、テーブルを選択します(エントリーは、「所有者名.テーブル名」のアルファベット順にリストされます)。 Campaign データベース内のソース・テーブル・フィールドは、必須フィールドに自動的にマップされます。システム・テーブルでは、フィールド・マッピングを追加または削除する必要はありません。すべてのフィールド・エントリーは自動的に照合されます。

注:システム・テーブルをマッピングするとき、「ソース・テーブル」リストから別のテーブルを選択しないでください。これを行うと、マッピングを完了できなくなります。間違えて選択した場合には、「キャンセル」をクリックし、「テーブル・マッピング」ウィンドウで正しいテーブルを選択してください。

6. 「完了」をクリックします。

## システム・テーブルをマップ解除する方法

**重要:**システム・テーブルをマップ解除して再マップしないと、重大なアプリケー ション問題が発生することがあります。システム・テーブルをマップ解除すると、 フィーチャーや既存のキャンペーンの処理が停止することがあります。

**重要:**システム・テーブルのマップ解除は、どのユーザーも Campaign を使用して いないときに行う必要があります。

- 「設定」>「Campaign 設定」を選択します。「キャンペーン設定」ページが開き、様々な管理タスクへのリンクが表示されます。
- 2. 「**データ・ソース操作**」セクションで、「**テーブル・マッピングの管理**」をクリックします。 「テーブル・マッピング」ウィンドウが開きます。
- 3. 「システム・テーブル表示」を選択します。
- マップ解除するテーブルを「IBM Campaign システム・テーブル」リストから 選択し、「テーブルのマップ解除」をクリックします。マップ解除の確認を求 めるプロンプトが出されます。

すぐにシステム・テーブルを再マップしてください。または、使用する環境ではマップの必要がないことを確認してください。

### セグメント・メンバーシップ・テーブルをマップ解除する方法

セグメント・メンバーシップ・テーブルをマップ解除するときは、既存のキャッシュ・ファイルを消去して、 Campaign および Contact Optimization リスナーを再始 動することも必要です。

注: Contact Optimization を使用している場合、オーディエンスを使用する Optimize セッションが実行している間は、そのオーディエンスのセグメント・メンバーシッ プ・テーブルのマッピングを変更しないでください。

- 1. Campaign で、特定のオーディエンスのセグメント・メンバーシップ・テーブル をマップ解除します。
- 2. Campaign インストール済み環境の conf ディレクトリーから unica tbmgr.cache を削除します。

デフォルトでは、このファイルは Campaign¥partitions¥<partition[n]>¥conf にあります。

3. Contact Optimization インストール済み環境の conf ディレクトリーから unica\_tbmgr.cache を削除します。

デフォルトでは、このファイルは Optimize¥partitions¥<partition[n]>¥conf にあります。

- 4. Campaign リスナー (unica\_aclsnr) を再始動します。
- 5. Contact Optimization リスナー (unica\_aolsnr) を再始動します。

# システム・テーブルの内容を表示する方法

利便性を考慮し、Campaign テーブル・マネージャーからほとんどのシステム・テーブルの内容を参照できます。

表示できるのは、テーブルの最初の 1000 行のデータだけです。そのため、コンタ クト履歴テーブルやレスポンス履歴テーブルなどの非常に大きなテーブルでは、こ の機能の使用が限定されます。システム・テーブル・データは、表示しながら編集 することはできません。

- 1. 「設定」 > 「Campaign 設定」を選択します。
- 2. 「テーブル・マッピングの管理」をクリックします。
- 3. 「システム・テーブル表示」を選択します。
- 4. システム・テーブルを選択して「参照」をクリックします。 ウィンドウが開い てテーブル・データが表示されます。
- 5. ソート基準となるいずれかの列をクリックします。ソート順を逆にするにはもう 一度列をクリックします。ウィンドウを閉じるには、右上隅にある「X」をクリ ックします。

# ユーザー・テーブルの作業

このセクションには、以下の情報が記載されています。

- 『ユーザー・テーブルの作業について』
- 33ページの『フローチャート内からデータ・ソースにアクセスする方法』
- 34ページの『フローチャートを編集する際のユーザー・テーブルの作業』
- 34ページの『「キャンペーン設定」ページからのユーザー・テーブルの作業』
- 35 ページの『ベース・レコード・テーブルを既存のデータベース表にマップする 方法』
- 37 ページの『ベース・レコード・テーブルから既存のファイルへのマッピング』
- 40ページの『ディメンション・テーブルをマップする方法』
- 42ページの『汎用テーブルをデータベース表にマップする方法』
- 42ページの『汎用テーブルをファイルにマップする方法』
- 44ページの『ユーザー・テーブルの再マップ』
- 45ページの『値および件数のプロファイル作成』
- 46ページの『ユーザー・テーブルをマップ解除する方法』
- 46ページの『出力プロセスによって新しいユーザー・テーブルを作成する方法』

注: ベース・テーブルに関連したオーディエンス・レベルを指定する必要があるため、ユーザー・テーブルの作業を開始する前に必要なオーディエンス・レベルを定義する必要があります。

### ユーザー・テーブルの作業について

通常、フローチャートからアクセスするマーケティング・データの大半はデータベ ース内に存在しますが、フラット・ファイルからデータに直接アクセスするほうが 便利な場合があります。

Campaign は、区切り記号付き ASCII フラット・ファイル、またはデータ・ディク ショナリーが指定された固定幅 ASCII フラット・ファイルのいずれかに保管された データを処理する機能をサポートします。フラット・ファイルは、ベース・テーブ ルとしてマップして、フローチャート内からアクセスすることができます。フラット・ファイルをディメンション・テーブルとしてマップすることはできません。

フラット・ファイルに直接アクセスすることにより、データを Campaign で使用で きるようにまずデータベースにアップロードする必要がなくなります。この方法 は、サード・パーティー・アプリケーション (Excel や SAS など) からエクスポー トされたデータを扱うときに役立ちます。また、1 回だけ使用する一時的なデータ (キャンペーンに固有のシード・リスト、最終段階での抑制、予測モデルのスコア、 その他の使用法など) で役立ちます。

# ユーザー・テーブルのマッピングのガイドライン

マップされるテーブル名およびフィールド名については、以下のガイドラインに従ってください。

- 名前にスペースを含めないでください。
- 名前の先頭は英字にします。
- サポートされない文字は使用しないでください。 Campaign オブジェクトでサポ ートされない文字および命名上の制約について詳しくは、 387ページの『付録 B. Campaign オブジェクト名での特殊文字』を参照してください。
- データベースまたはフラット・ファイルからマップされるテーブルの列ヘッダーでは、IBM Macro Languageの関数名またはキーワードを使用しないでください。マップされたテーブルの列ヘッダーでこれらの予約語を使用すると、エラーが生じることがあります。これらの予約語について詳しくは、「IBM EMM のマクロ ユーザー・ガイド」を参照してください。
- フィールド名は、大/小文字の区別がありません。フィールドがマップされている 場合、フィールド名の大/小文字を変更してもマッピングには影響がありません。

### フローチャート内からデータ・ソースにアクセスする方法

フローチャート内から顧客データベース表または見込み顧客データベース表にアク セスするには、参照先データベースにログインしていることを確認する必要があり ます。

1. フローチャートの編集中に、「システム管理」アイコンをクリックして「データ ベース・ソース」を選択します。

「データベース・ソース」ウィンドウが開きます。システム・テーブルを格納す るデータベース、および Campaign がアクセスできるように構成されているすべ てのデータベースがリストされます。

- 2. データベースにログインするには、それを選択して「**ログイン**」をクリックしま す。
- 3. 「閉じる」をクリックします。

これで、そのデータベース内のテーブルにアクセスできるようになりました。その データベース内のテーブルを照会するには、次のセクションで説明されているよう に、そのテーブルをマップする必要があります。

### フローチャートを編集する際のユーザー・テーブルの作業

以下のようにして、フローチャートを編集する際にユーザー・テーブルの作業を行 うことができます。

- 「**システム管理**」メニューを使用する
- 「選択」プロセスによって新しいユーザー・テーブルをマップする
- 「スナップショット」、「コール・リスト」、および「メール・リスト」の各プロセスによって、データをベース・テーブルまたは汎用テーブルにエクスポートする

「システム管理」メニューの使用によるユーザー・テーブルの作業

「システム管理」アイコンをクリックして、「テーブル」を選択します。「テーブ ル・マッピング」ウィンドウが開き、マップされたユーザー・テーブルのリストが 表示されます。

その後に実行できるタスクを以下に示します。

- 35ページの『ベース・レコード・テーブルを既存のデータベース表にマップする 方法』
- 37 ページの『ベース・レコード・テーブルから既存のファイルへのマッピング』
- 40ページの『ディメンション・テーブルをマップする方法』
- 42ページの『汎用テーブルをデータベース表にマップする方法』
- 42ページの『汎用テーブルをファイルにマップする方法』
- 44 ページの『ユーザー・テーブルの再マップ』
- 46ページの『ユーザー・テーブルをマップ解除する方法』

#### 「選択」プロセスからのユーザー・テーブルの作業

「選択」プロセスの「**ソース**」タブにある「入力」ドロップダウン・リストで、 「新規テーブル」を選択します。「新規テーブル定義」ウィンドウが開きます。

その後に実行できるタスクを以下に示します。

- 35 ページの『ベース・レコード・テーブルを既存のデータベース表にマップする 方法』
- 37 ページの『ベース・レコード・テーブルから既存のファイルへのマッピング』

#### エクスポートされたデータからのユーザー・テーブルの作業

新しいユーザー・テーブルを出力プロセスから作成できます。

### 「キャンペーン設定」ページからのユーザー・テーブルの作業

「設定」>「キャンペーン設定」を選択します。「キャンペーン設定」ページが開き ます。

次に、「**テーブル・マッピングの管理**」をクリックします。「テーブル・マッピン グ」ウィンドウが開きます。

その後、次のタスクを実行できます。

• 35 ページの『ベース・レコード・テーブルを既存のデータベース表にマップする 方法』

- 37 ページの『ベース・レコード・テーブルから既存のファイルへのマッピング』
- 40ページの『ディメンション・テーブルをマップする方法』
- 42 ページの『汎用テーブルをデータベース表にマップする方法』
- 42ページの『汎用テーブルをファイルにマップする方法』
- 44 ページの『ユーザー・テーブルの再マップ』
- 46ページの『ユーザー・テーブルをマップ解除する方法』

注: Campaign 内のユーザー・テーブルをマップする前に、Campaign でサポートされるデータ型だけがそのテーブルで使用されていることを確認してください。各デ ータベースでサポートされるデータ型のリストについては、389ページの『付録 C. ユーザー・テーブルにおいてサポートされるデータ型』を参照してください。

### ベース・レコード・テーブルを既存のデータベース表にマップする方 法

以下のようにして、新しいベース・レコード・テーブルを既存のデータベース表に マップできます。

- 34ページの『フローチャートを編集する際のユーザー・テーブルの作業』で説明 されているように、フローチャートを編集するとき、「システム管理」メニュー または選択プロセスから行う。
- 34ページの『「キャンペーン設定」ページからのユーザー・テーブルの作業』の 説明のように、「キャンペーン設定」ページから行う。

新しいベース・レコード・テーブルをマップして、フローチャートのプロセスから そのデータにアクセスできるようにします。

1. 「新規テーブル定義 - テーブル・タイプを選択」ウィンドウから始めます。

注: 選択プロセスからテーブル・マッピング・ウィザードにアクセスするとき は、「ディメンション・テーブル」と「その他のテーブル」の各オプション は、リストされません。

- 2. 必要な場合、「ベース・レコード・テーブル」を選択してから「次へ」をクリ ックします。
- 3. 「**選択したデータベースの既存テーブルにマップ**」を選択し、データ・ソース 名を選択してから、「次へ」をクリックします。
- 4. マップするテーブルを、「ソース・テーブル」リストから選択します。

テーブルは、<所有者>.<テーブル名>の形式で、アルファベット順にリストされます。必要なテーブルが表示されない場合には、テーブルの特定のエントリーがフィルターで除外されるようにデータ・ソースが構成されていないかを確認してください。

選択したテーブルのソース・フィールドは、作成するベース・レコード・テー ブル内の新しいテーブル・フィールドに自動的にマップされます。自動マッピ ングを変更するには、「ソース・テーブル・フィールド」リストまたは「新規 テーブル・フィールド」リストからフィールドを選択し、「追加」、「削 除」、「1 つ上へ」、「1 つ下へ」の各ボタンを使用して、テーブルに対する 必要なマッピングが行われるようにします。 「新規テーブル・フィールド」セクションの「フィールド名」列をクリックして、列名をアルファベットの昇順(または降順)で自動的にソートすることができます。

- 5. 「次へ」をクリックします。
- 6. オプションで、Campaign がベース・レコード・テーブルおよびそのフィールド に使用する名前を、より分かりやすい名前に変更できます。
  - a. テーブル名を変更するには、「**IBM Campaign テーブル名**」フィールドの 名前を編集します。
  - b. フィールド名を変更するには、「新規テーブル・フィールド」リストからフ ィールド名を選択し、「IBM Campaign フィールド名」フィールドのテキ ストを編集します。
- 7. 「次へ」をクリックします。
- ドロップダウン・リストから「オーディエンス・レベル」を選択します。「オ ーディエンス・フィールド」リストには、選択したオーディエンス・レベルの 定義に必要なフィールドが自動的に追加されます。新しいベース・テーブル内 の、各必須キーに対応する1つ以上のフィールドに対してマッチングを行う必 要があります。
- 選択したオーディエンス・レベルが正規化されている場合(固有の各オーディ エンス ID が現在のベース・テーブルに重複して出現しない場合)、「オーディ エンスにより正規化されている」にチェック・マークを付けます。

このオプションを正しく設定することは、「オーディエンス」プロセスでオプ ションを正しく構成するために重要です。正しい設定が不明な場合は、このオ プションのチェック・マークを外したままにしてください。

- 10. 「**次へ**」をクリックします。
- オプションで、「追加するオーディエンス・レベルを指定します」画面から、 ベース・レコード・テーブルに含まれる1つ以上の追加のオーディエンス・レ ベルを指定できます。追加のオーディエンス・レベルを追加することにより、 ユーザーはこのテーブルを「切り替えテーブル」として使用することが可能に なり、フローチャートの「オーディエンス」プロセスを使用して1つのオーデ ィエンス・レベルから別のオーディエンス・レベルに変換することができま す。
  - a. 「追加」をクリックします。 「オーディエンス・レベルと ID フィール ド」ウィンドウが開きます。
  - b. 「オーディエンス・レベル名」を選択します。
  - c. 「**オーディエンス・フィールド**」ごとに、ベース・テーブルの該当するフィ ールドを、オーディエンス・レベルの対応するキーにマッチングさせます。
  - d. 選択したオーディエンス・レベルが正規化されている (つまり、固有の各オ ーディエンス ID が現在のベース・テーブルに重複して出現しない)場合、 「オーディエンスにより正規化されている」にチェック・マークを付けま す。
  - e. 「**OK**」をクリックします。
  - f. ベース・テーブル用に追加するオーディエンス・レベルごとに、ステップの a から f を繰り返し、その後に「次へ」をクリックします。

- 現行のテーブル・カタログにディメンション・テーブルが存在する場合、「既存のディメンション・テーブルとのリレーションシップを指定します」ウィンドウが開きます。
  - a. 作成するベース・レコード・テーブルに関連したディメンション・テーブル の左側にあるボックスにチェック・マークを付けます。
  - b. 関連したディメンション・テーブルごとに、「新規テーブルのキー・フィー ルド」リストで、「ディメンション・テーブルのキー・フィールド」リスト にリストされた各キーとマッチングさせるフィールドをベース・テーブルか ら選択し、「次へ」をクリックします。
- 特定のフィールドについての個別値と頻度カウントを管理者が事前計算することもできますし、ベース・レコード・テーブルのデータのプロファイルをリアルタイムで作成する操作をユーザーに許可することもできます。
- 14. 「完了」をクリックします。

既存のデータベース表に基づいて、ベース・レコード・テーブルが作成されました。新しいベース・テーブルは現行テーブル・カタログの一部となるので、テーブル・マネージャーによって管理できます。

### ベース・レコード・テーブルから既存のファイルへのマッピング

以下のようにして、新しいベース・レコード・テーブルを、使用するパーティション内にある Campaign サーバー上の既存のファイルにマップできます (つまり、そのファイルは使用するパーティション・ルートの下に配置する必要があります)。

- 34ページの『フローチャートを編集する際のユーザー・テーブルの作業』で説明 されているように、フローチャートを編集するとき、「システム管理」メニュー または選択プロセスから行う。
- 34ページの『「キャンペーン設定」ページからのユーザー・テーブルの作業』の 説明のように、「キャンペーン設定」ページから行う。

新しいベース・レコード・テーブルをマップして、フローチャートのプロセスから そのデータにアクセスできるようにします。

ベース・レコード・テーブルをファイルにマップする方法:

- 1. 「新規テーブル定義 テーブル・タイプを選択」ウィンドウから始めます。
- 2. 必要な場合、「ベース・レコード・テーブル」を選択してから「次へ」をクリックします。
- 3. 「既存ファイルにマップ」を選択してから、「次へ」をクリックします。
- 4. ファイルのタイプおよびマッピング設定を指定します。

ベース・レコード・テーブルを既存の固定幅フラット・ファイルにマップする方法 :

以下のようにして、新しいベース・レコード・テーブルを、使用するパーティション内にある Campaign サーバー上の既存のファイルにマップできます (つまり、そのファイルは使用するパーティション・ルートの下に配置する必要があります)。

- フローチャートを編集するとき、「システム管理」メニューまたは選択プロセスから行う。
- 「キャンペーン設定」ページから行う。

新しいベース・レコード・テーブルをマップして、フローチャートのプロセスから そのデータにアクセスできるようにします。

- 1. 「新規テーブル定義 テーブル・タイプを選択」ウィンドウから始めます。
- 2. 必要な場合、「ベース・レコード・テーブル」を選択してから「次へ」をクリックします。
- 3. 「既存ファイルにマップ」を選択してから、「次へ」をクリックします。
- 4. 「**ファイル・タイプ**」の選択値を、デフォルトの「**固定幅フラット・ファイル**」 のままにします。

ウィンドウの「設定」セクションが表示されます。

 ウィンドウの「設定」セクションで、「参照」をクリックし、キャンペーン・パ ーティションのルート・ディレクトリー内から「ソース・ファイル」を選択しま す。 Campaign は、「ディクショナリー・ファイル」フィールドに、.dct 拡張 子があること以外は同じパスおよびファイル名を自動的に追加します。必要であ れば、このエントリーをオーバーライドできます。

ベース・レコード・テーブルを既存の区切り記号付きファイルにマップする方法: フローチャートの編集中に、または「キャンペーン設定」ページで、新しいベー ス・レコード・テーブルを、使用するパーティション内にある Campaign サーバー 上の既存のファイルにマップできます (つまり、そのファイルは使用するパーティ ション・ルートの下に配置する必要があります)。

新しいベース・レコード・テーブルをマップして、フローチャートのプロセスから そのデータにアクセスできるようにします。

- 1. 「新規テーブル定義 テーブル・タイプを選択」ウィンドウから始めます。
- 2. 必要な場合、「ベース・レコード・テーブル」を選択してから「次へ」をクリ ックします。
- 3. 「既存ファイルにマップ」を選択してから、「次へ」をクリックします。
- 4. 「ファイル・タイプ」として「区切り記号付きファイル」を選択します。
- 5. ウィンドウの「設定」セクションで、「先頭行にフィールド名を含む」にチェ ック・マークを付けます (これが該当する場合)。 これにより、自動的にデータ の最初の行が使用されて、ベース・テーブルのフィールドが定義されます。こ れらの値は、後でオーバーライドできます。
- 6. 「フィールド区切り記号」 (データの行で各フィールドを分離するために使用 する記号)を選択します。選択肢は、「タブ」、「コンマ」、「スペース」で す。
- 7. ファイル内で文字列を区切る方法を示すための「引用符」を選択します。選択 肢は、「なし」、「単一引用符」、「二重引用符」です。

スペース区切りのファイルで、フィールド・エントリーの一部にスペースが使 用されている場合には、これが重要になります。この場合、フィールドを引用 符で囲んで、組み込まれたスペースがフィールド区切り記号として解釈されな いようにする必要があります。例えば、"John Smith" "100 Main St." などの データの行があり、区切り記号が「スペース」で引用符が「なし」に設定され ている場合、Campaign はこれを 5 つの異なるフィールド ("John" が第 1 フィ ールドの値、"Smith" が 2 番目、"100" が 3 番目など) として解析します。引 用符が「二重引用符」に設定されている場合には、このレコードは正しく 2 つ のフィールド (名前および住所) として解析されます。

重要: Campaign は、区切り記号付きファイルのフィールド・エントリーでの二 重引用符 (")の使用をサポートしていません。使用するフィールド・エントリ ーに二重引用符が含まれる場合は、テーブルをファイルにマップする前にそれ を別の文字に変更してください。

- 8. 「参照」をクリックして、パーティション・ディレクトリー内から「ソース・ ファイル」を選択します。
- 9. 新しいテーブルで使用するフィールドを指定します。デフォルトでは、ファイ ル内のすべてのフィールドがリストされます。

区切り記号付きファイルをマッピングする場合、フィールド・タイプと幅を確認するためにファイルの最初の 50 行がサンプル出力されます。自動的に検出されるフィールド・タイプ(「数値」または「テキスト」)と幅は、オーバーライドできます。例えば、最初の 50 行の ID の幅が 2 文字で検出された場合でも、そのファイルの後のほうでは最大 5 文字で構成される ID があることが分かっている場合には、値を 5 に増やします。

重要:幅の値が小さすぎる場合、エラーが発生する場合があります。

「追加」、「削除」、「1 つ上へ」、「1 つ下へ」の各ボタンを使用して、新 しいテーブルに含まれる「ソース・テーブル・フィールド」およびその順序を 指定します。「新規テーブル・フィールド」セクションの「フィールド名」列 をクリックして、列名をアルファベットの昇順(または降順)で自動的にソート します。

- 10. 完了したら、「次へ」をクリックします。 「テーブル名とフィールド情報を指 定します」画面が開きます。
- デフォルトを受け入れるか、または「IBM Campaign テーブル名」フィールド を編集して Campaign に表示されるテーブルの名前を変更します。各ソース・ フィールド名にマップされた IBM Campaign フィールド名を変更することも できます。これを行うには、フィールド名を選択して、「フィールド情報の編 集」セクションの「IBM Campaign フィールド名」テキスト・ボックス内のテ キストを編集します。
- 12. 変更が完了したら、「次へ」をクリックします。 「オーディエンス・レベルを 指定して ID フィールドを割り当てます」画面が開きます。
- ドロップダウン・リストから「オーディエンス・レベル」を選択します。「オ ーディエンス・フィールド」リストには、データが自動的に追加されます。リ ストされた各エントリーに対応するキーとなるフィールドを新しいベース・テ ーブルから選択する必要があります。
- 14. 「次へ」をクリックします。 「追加するオーディエンス・レベルを指定しま す」画面が開きます。
- 15. オプションで、「追加するオーディエンス・レベルを指定します」画面から、 ベース・レコード・テーブルに含まれる 1 つ以上の追加のオーディエンス・レ ベルを指定できます。追加のオーディエンス・レベルを追加することにより、 ユーザーはこのテーブルを「切り替えテーブル」として使用することが可能に

なり、フローチャートの「**オーディエンス**」プロセスを使用して 1 つのオーデ ィエンス・レベルから別のオーディエンス・レベルに変換することができま す。

- a. 「追加」をクリックします。 「オーディエンス・レベルと ID フィール ド」ウィンドウが開きます。
- b. 「オーディエンス・レベル名」を選択します。
- c. 「**オーディエンス・フィールド**」ごとに、ベース・テーブルの該当するフィ ールドを、オーディエンス・レベルの対応するキーにマッチングさせます。
- d. 選択したオーディエンス・レベルが正規化されている (つまり、固有の各オ ーディエンス ID が現在のベース・テーブルに重複して出現しない) 場合、 「オーディエンスにより正規化されている」にチェック・マークを付けま す。
- e. 「**OK**」をクリックします。
- f. ベース・テーブル用に追加するオーディエンス・レベルごとに、ステップの a から f を繰り返し、その後に「次へ」をクリックします。
- 特定のフィールドについての個別値と頻度カウントを管理者が事前計算することもできますし、ベース・レコード・テーブルのデータのプロファイルをリアルタイムで作成する操作をユーザーに許可することもできます。
- 17. 「完了」をクリックします。 既存のファイルに基づいて、ベース・レコード・ テーブルが作成されました。新しいベース・テーブルは現行テーブル・カタロ グの一部となるので、テーブル・マネージャーによって管理できます。

### ディメンション・テーブルをマップする方法

以下のようにして、追加のテーブルに基づく新しいディメンション・テーブルをマ ップできます。

- 34ページの『フローチャートを編集する際のユーザー・テーブルの作業』で説明 されているように、フローチャートを編集するとき、「システム管理」メニュー から行う。
- 34ページの『「キャンペーン設定」ページからのユーザー・テーブルの作業』の 説明のように、「キャンペーン設定」ページから行う。

新しいディメンション・テーブルをマップして、郵便番号に基づく購買層情報な ど、ベース・テーブル内のデータを補うデータにフローチャートのプロセスからア クセスできるようにします。

ディメンション・テーブルは、データベース表にマップする必要があり、同じ IBM データ・ソース (つまり同じデータベース)内のテーブルにマップされた 1 つ以上 のベース・テーブルに関連付ける必要があります。ディメンション・テーブルを定 義する際に、ベース・テーブルとディメンション・テーブルの間に特定の結合条件 を指定できます。

1. 「新規テーブル定義 - テーブル・タイプを選択」ウィンドウから始めます。

注: 「選択」プロセスからディメンション・テーブルをマップすることはでき ません。

- 2. 「ディメンション・テーブル」を選択してから、「次へ」をクリックします。
- 3. マップするテーブルを、「**ソース・テーブル**」リストから選択します。

選択したテーブルのソース・フィールドは、作成するベース・ディメンショ ン・テーブル内の新しいテーブル・フィールドに自動的にマップされます。デ フォルトの選択を変更するには、「ソース・テーブル・フィールド」リストま たは「新規テーブル・フィールド」リストからフィールドを選択し、「追 加」、「削除」、「1 つ上へ」、「1 つ下へ」の各ボタンを使用して、テーブ ルに対する必要なマッピングが行われるようにします。その後、「次へ」をク リックします。

注:「新規テーブル・フィールド」セクションの「フィールド名」列をクリックして、列名をアルファベットの昇順(または降順)で自動的にソートすることができます。

- 4. (オプション) Campaign がディメンション・テーブルおよびそのフィールドに使用する名前を変更します。
  - a. テーブル名を変更するには、「**IBM Campaign テーブル名**」フィールドの 名前を編集します。
  - b. フィールド名を変更するには、「新規テーブル・フィールド」リストからマ ッピングを選択し、「IBM Campaign フィールド名」フィールドのテキス トを編集します。その後、「次へ」をクリックします。
- 5. ディメンション・テーブルのキーと、そのテーブルをベース・レコード・テー ブルに結合する方法を指定します。
- 6. 「キー・フィールド」リストから1つ以上のキーを選択します。
- 「キー・フィールドにより正規化されている」にチェック・マークを付けます (該当する場合)。
- 8. 「テーブル結合方法」を選択してから、「次へ」をクリックします。

注:「常に内部結合を使用」オプションを選択すると、ベース・テーブルとこ のディメンション・テーブルの間で常に内部結合が使用され、ベース・テーブ ルからは、ディメンション・テーブル内に存在するオーディエンス ID だけが 返されます。「常に外部結合を使用」オプションを選択すると、ベース・テー ブルとこのディメンション・テーブルの間で常に外部結合が実行されます(ベ ース・テーブル内のすべてのオーディエンス ID について、対応する行がディ メンション・テーブル内に必ず存在するとは限らないことが分かっている場合 に、この設定は最適な結果になります)。デフォルト設定の「自動」では、選択 プロセスおよびセグメント・プロセスでは内部結合を使用し、出力プロセス (「スナップショット」、「メール・リスト」、および「コール・リスト」)で は外部結合を使用します。この設定は、選択基準を考慮するためにディメンシ ョン・テーブル内の値が必要であり、その一方で、出力されるディメンショ ン・テーブル・フィールドを示すオーディエンス ID が存在しないときには NULL を出力する必要もある場合に、通常は適切な動作となります。

- ベース・レコード・テーブルが存在する場合、「ベース・テーブルとのリレーションシップを指定します」画面が開きます。作成するディメンション・テーブルに関連したベース・レコード・テーブルの左側にあるボックスにチェック・マークを付けます。結合フィールドを指定して、「次へ」をクリックします。
- 特定のフィールドについての個別値と頻度カウントを管理者が事前計算することもできますし、ベース・レコード・テーブルのデータのプロファイルをリアルタイムで作成する操作をユーザーに許可することもできます。

11. 「完了」をクリックします。 ディメンション・テーブルが作成されました。

### 汎用テーブルをデータベース表にマップする方法

以下のようにして、新しい汎用テーブルを既存のデータベース表にマップできま す。

- 34ページの『フローチャートを編集する際のユーザー・テーブルの作業』で説明 されているように、フローチャートを編集するとき、「システム管理」メニュー から行う。
- 34ページの『「キャンペーン設定」ページからのユーザー・テーブルの作業』の 説明のように、「キャンペーン設定」ページから行う。

Campaign データを他のアプリケーションで使用する目的でエクスポートするため に、新しい汎用テーブルをマップします。

- 1. 「新規テーブル定義 テーブル・タイプを選択」ウィンドウから始めます。
- 2. 「その他のテーブル」を選択してから、「次へ」をクリックします。
- 3. 「選択したデータベースの既存テーブルにマップ」を選択し、顧客データベース 名を選択してから、「次へ」をクリックします。
- 4. マップするテーブルを、「ソース・テーブル」リストから選択します。

選択したテーブルのソース・フィールドは、作成する汎用テーブル内の新しいテ ーブル・フィールドに自動的にマップされます。自動マッピングを変更するに は、「ソース・テーブル・フィールド」リストまたは「新規テーブル・フィール ド」リストからフィールドを選択し、「追加」、「削除」、「1 つ上へ」、「1 つ下へ」の各ボタンを使用して、テーブルに対する必要なマッピングが行われる ようにします。その後、「次へ」をクリックします。

5. (オプション) Campaign が汎用テーブルおよびそのフィールドに使用する名前を 変更します。

テーブル名を変更するには、「**IBM Campaign テーブル名**」フィールドの名前 を編集します。

フィールド名を変更するには、「新規テーブル・フィールド」リストからマッピ ングを選択し、「IBM Campaign フィールド名」フィールドのテキストを編集 します。

6. 「完了」をクリックします。

データベース表に基づいて汎用テーブルが作成されました。

### 汎用テーブルをファイルにマップする方法

以下のようにして、新しいベース・レコード・テーブルをファイルにマップできま す。

- 34ページの『フローチャートを編集する際のユーザー・テーブルの作業』で説明 されているように、フローチャートを編集するとき、「システム管理」メニュー から行う。
- 34ページの『「キャンペーン設定」ページからのユーザー・テーブルの作業』の 説明のように、「キャンペーン設定」ページから行う。

Campaign データを他のアプリケーションで使用する目的でエクスポートするため に、新しい汎用テーブルをマップします。

- 1. 「新規テーブル定義 テーブル・タイプを選択」ウィンドウから始めます。
- 2. 「その他のテーブル」を選択してから、「次へ」をクリックします。
- 3. 「既存ファイルにマップ」を選択してから、「次へ」をクリックします。
- 4. ベース・レコード・テーブルを固定幅フラット・ファイルにマップするには、以 下のようにします。
  - a. 「**ファイル・タイプ**」の選択値を、デフォルトのままにします。
  - b. 「参照」をクリックして、「ソース・ファイル」を選択します。 Campaign は、「ディクショナリー・ファイル」フィールドに、 .dct 拡張子があること 以外は同じパスおよびファイル名を自動的に追加します。必要であれば、こ のエントリーをオーバーライドできます。
- 5. ベース・レコード・テーブルを区切り記号付きファイルにマップするには、以下 のようにします。
  - a. 「ファイル・タイプ」として「区切り記号付きファイル」を選択します。
  - b. 「先頭行にフィールド名を含む」にチェック・マークを付けます (これが該 当する場合)。
  - c. 使用する「フィールド区切り記号」を選択します。選択肢は、「タブ」、 「コンマ」、「スペース」です。
  - d. ファイル内で文字列を区切る方法を示すための「引用符」を選択します。選 択肢は、「なし」、「単一引用符」、「二重引用符」です。
  - e. 「参照」をクリックし、「ソース・ファイル」を選択してから、「次へ」を クリックします。 「新規テーブルのフィールドを指定します」ウィンドウが 開きます。
- 6. 新しいテーブルで使用するフィールドを指定します。デフォルトでは、ファイル 内のすべてのフィールドがリストされます。

区切り記号付きファイルをマッピングする場合、フィールド・タイプと幅を確認 するためにファイルの最初の 50 行がサンプル出力されます。自動的に検出され るフィールド・タイプ(「数値」または「テキスト」)と幅は、オーバーライド できます。例えば、最初の 50 行の ID の幅が 2 文字で検出された場合でも、 そのファイルの後のほうでは最大 5 文字で構成される ID があることが分かっ ている場合には、値を 5 に増やします。

重要:幅の値が小さすぎる場合、エラーが発生する場合があります。

注: データをディスク上の固定幅フラット・ファイルにエクスポートする場合、 そのファイルのデータ・ディクショナリーを編集して、事前設定されたフィール ドの長さをオーバーライドできます。

「追加」、「削除」、「1 つ上へ」、「1 つ下へ」の各ボタンを使用して、新し いテーブルに含まれる「ソース・テーブル・フィールド」およびその順序を指定 します。

7. 完了したら、「次へ」をクリックします。

「テーブル名とフィールド情報を指定します」ウィンドウが開きます。

- 8. デフォルトを受け入れるか、または「IBM Campaign テーブル名」フィールド を編集して Campaign に表示されるテーブルの名前を変更します。さらに、ソー ス・フィールド名にマップされる IBM Campaign フィールド名を変更します。
- 9. 「完了」をクリックします。 ファイルに基づいて汎用テーブルが作成されました。

### ユーザー・テーブルの再マップ

ユーザー・テーブルは、いつでも再マップできます。これは以下を行うために実行 できます。

- 不要なフィールドを削除して、テーブルの作業を簡単にする。
- 使用可能にする必要のある新しいフィールドを追加する。
- テーブルまたはそのフィールドの名前を変更する。
- オーディエンス・レベルを追加する。
- または、プロファイルの特性を変更する。

フローチャートで参照されているフィールドを削除する場合、またはテーブルや参 照先フィールドの名前を変更する場合は、フローチャートが構成解除されます。そ の場合、テーブルが使用されている各プロセス・ボックスを手動で編集して、参照 を修正する必要があります。

ユーザー・テーブルを再マップすると、現在のフローチャートのローカル・テーブ ル・マッピングだけが変更されることに注意してください。更新されたテーブル・ マッピングをテーブル・カタログに保存するには、テーブル・カタログを保存する 必要があります。テーブル・カタログに保存された後、そのテーブル・カタログを 使用する (またはインポートする)後続のフローチャートはその変更を認識するよう になります。

以下のようにして、ユーザー・テーブルを再マップできます。

- 34ページの『フローチャートを編集する際のユーザー・テーブルの作業』で説明 されているように、フローチャートを編集するとき、「システム管理」メニュー から行う。
- 34ページの『「キャンペーン設定」ページからのユーザー・テーブルの作業』の 説明のように、「キャンペーン設定」ページから行う。

#### ユーザー・テーブルを再マップする方法:

- 1. 「新規テーブル定義 テーブル・タイプを選択」ウィンドウから始めます。
- 2. 再マップするテーブルを選択します。
- 3. 「**テーブル再マップ**」をクリックします。
- 4. その後、テーブルのマッピングに関係する以下の手順を繰り返します。
  - 35 ページの『ベース・レコード・テーブルを既存のデータベース表にマップ する方法』
  - 37ページの『ベース・レコード・テーブルから既存のファイルへのマッピン グ』
  - 40ページの『ディメンション・テーブルをマップする方法』
  - 42ページの『汎用テーブルをデータベース表にマップする方法』
  - 42ページの『汎用テーブルをファイルにマップする方法』

### 値および件数のプロファイル作成

ユーザー・テーブルをマップするとき、特定のフィールドについての個別値と頻度 カウントを管理者が事前計算することもできますし、ベース・レコード・テーブル のデータのプロファイルをリアルタイムで作成する操作をユーザーに許可すること もできます。プロファイルを作成することにより、ユーザーは生データを参照しな くてもフローチャートの編集中にテーブルの値を知ることができ、照会の作成中に 有効な値を容易に選択できるようになります。事前計算されたプロファイルを使用 すると、データベースを照会しなくても、個別フィールド値と件数を素早く効率的 に参照できます。リアルタイムでプロファイルを作成すると、最新のデータを参照 できます。これは、データベースが頻繁に更新される場合に役立つことがありま す。プロファイルを事前計算する場合、プロファイルが再生成される頻度を管理者 が制御できます。

注: プロファイルを動的にリアルタイムで作成することをユーザーに許可する方法 とプロファイルを事前計算する方法の両方を選択することもできますし、リアルタ イムのプロファイル作成は無効にして、事前計算されたプロファイルしかユーザー が使用できないようにすることもできます。「リアルタイム・プロファイルを許可 する」オプションを有効または無効に設定すると、チェック・マークを付けたテー ブル・フィールドだけではなく、すべてのテーブル・フィールドに適用されます。 リアルタイムのプロファイル作成を無効にした上で、事前生成されたプロファイル を使用する代替手段を指定しない場合、ユーザーは、このテーブルのすべてのフィ ールドについて値や件数を表示できなくなります。リアルタイムのプロファイル作 成を無効にした上で、事前計算されたプロファイルを1 つ以上のフィールドに提供 した場合、ユーザーはテーブル全体の事前計算されたプロファイルを使用できるよ うになります。ユーザーは、プロセスの入力セルの値だけについてのプロファイル を作成することはできません。柔軟性を最大にするためには、リアルタイム・プロ ファイルを許可する必要があります。

#### プロファイルを構成する方法:

1. Campaign で個別値および頻度件数を事前計算するフィールドにチェック・マー クを付けます。

デフォルトでは、Campaign は、事前計算されたプロファイルを Campaign > partitions > partitions[n] > profile カテゴリーに data source\_table name field name の形式で保管します。

- 個別値および件数が別個のデータベース表に保管されていて、Campaign がそれ を使用する必要がある場合、「データ・ソースの構成」をクリックします。「他 のテーブルの集計フィールドの指定」を選択して、テーブル名、値を格納するフ ィールド、および件数を格納するフィールドを選択します。次に「OK」をクリ ックします。
- 「リアルタイム・プロファイルを許可する」にチェック・マークを付けて、選択 されたフィールドの値のレコードを Campaign がリアルタイムで更新するように します。このオプションにより、フローチャートを編集中のユーザーはそれらの フィールドの現行値を参照できます。ただし、ユーザーが「プロファイル」をク リックするたびにデータベース照会も必要になるため、パフォーマンスが低下す る可能性があります。

### ユーザー・テーブルをマップ解除する方法

ユーザー・テーブルはいつでもマップ解除できます (テーブルをマップ解除しても 基礎となる元のデータは削除されず、他のフローチャートが影響を受けることもあ りません)。

**重要:** ユーザー・テーブルをマップ解除すると、そのユーザー・テーブルを参照す る現行フローチャート内のプロセスがすべて構成解除されます。

以下のようにして、ユーザー・テーブルをマップ解除できます。

- 34ページの『フローチャートを編集する際のユーザー・テーブルの作業』で説明 されているように、フローチャートを編集するとき、「システム管理」メニュー から行う。
- 34ページの『「キャンペーン設定」ページからのユーザー・テーブルの作業』の 説明のように、「キャンペーン設定」ページから行う。
- 1. 「新規テーブル定義 テーブル・タイプを選択」ウィンドウから始めます。
- 2. マップ解除するテーブルを選択します。
- 3. 「**テーブル・マッピング解除**」をクリックします。確認を求めるプロンプトが出 されます。
- 4. 「OK」をクリックしてテーブルをマップ解除します。

**重要:** このプロセスは、元に戻すことはできません。マップ解除されたテーブル を復元するには、初めてマップする場合と同様に行うか、またはマップされたテ ーブル定義を格納する保管テーブル・カタログをインポートする必要がありま す。テーブルを完全にマップ解除してよいか確信がない場合には常に、現行のテ ーブル・マッピングをテーブル・カタログに保存して、後で必要になった場合に 復元できるようにします。

#### 出力プロセスによって新しいユーザー・テーブルを作成する方法

「**エクスポート**」ドロップダウン・リストの出力プロセス(「スナップショット」、「コール・リスト」、および「メール・リスト」)から、新しいユーザー・ テーブルを作成できます。

- 1. フローチャートの編集中に、新しいユーザー・テーブルを作成するための出力プ ロセスを開きます。
- 2. 「**エクスポート先**」ドロップダウン・リストで、「新規マップ・テーブル」を選 択します。 「新規テーブル定義」ウィンドウが開きます。
- 「ベース・レコード・テーブル」、「ディメンション・テーブル」、または「その他のテーブル」を選択します。通常、このプロセスでは、既存のフラット・ファイルまたはデータベース内の新しいベース・テーブルにデータをエクスポートします。エクスポートしたデータを再び Campaign で読み取る必要がある場合には、それをベース・テーブルとしてエクスポートする必要があります。
- 4. 「**次へ**」をクリックします。
- 5. 「新規ファイル作成」または「選択したデータベースに新規テーブル作成」を選 択します。
- 新しいデータベース表の作成を選択した場合には、以下のようにします。
  a. テーブルを作成するデータベースを選択します。
  - b. 「次へ」をクリックします。

- c. 新しいテーブルまたはファイルにエクスポートする「ソース・テーブル・フィールド」を選択します。 Campaign 生成済みフィールド、オーディエンス・レベル ID、および入力セルのフィールドから選択できます。「追加」、「削除」、「上へ (Up)」、および「下へ (Down)」ボタンを使用して、「新規テーブル・フィールド」リスト内のフィールドを定義します。
- d. 「次へ」をクリックします。
- e. 新しいテーブルの「データベース・テーブル名」および「IBM Campaign テ ーブル名」を指定します。
- f. オプションで、新しいテーブル・フィールドを選択して、「IBM Campaign フィールド名」を変更します。
- g. 「次へ」をクリックします。
- h. 新しいテーブルの「オーディエンス・レベル」を選択して、新しいテーブル にオーディエンス・レベル・フィールドを指定します。
- i. 「次へ」をクリックします。
- j. オプションで、「追加」をクリックして、新しいテーブルの追加のオーディエ ンス・レベルを選択します。
- k. 「次へ」をクリックします。
- 1. 新しいテーブルのプロファイルを定義します。詳しくは、45ページの『値お よび件数のプロファイル作成』を参照してください。
- m. 「完了」をクリックします。
- 7. 新規ファイルの作成を選択した場合には、以下のようにします。
  - a. 「次へ」をクリックします。
  - b. 「固定幅フラット・ファイル」または「区切り記号付きファイル」を選択し てから、「設定」フィールドを適切に指定します。
  - c. 「次へ」をクリックします。
  - d. 新しいテーブルまたはファイルにエクスポートする「ソース・テーブル・フィールド」を選択します。 Campaign 生成済みフィールド、オーディエンス・レベル ID、および入力セルのフィールドから選択できます。「追加」、「削除」、「上へ (Up)」、および「下へ (Down)」ボタンを使用して、「新規テーブル・フィールド」リスト内のフィールドを定義します。
  - e. 「次へ」をクリックします。
  - f. 新しいテーブルの「**オーディエンス・レベル**」を選択して、新しいテーブル にオーディエンス・レベル・フィールドを指定します。
  - g. 「次へ」をクリックします。
  - h. オプションで、「追加」をクリックして、新しいテーブルの追加のオーディ エンス・レベルを選択します。
  - i. 「次へ」をクリックします。
  - j. 新しいテーブルのプロファイルを定義します。詳しくは、45ページの『値お よび件数のプロファイル作成』を参照してください。
  - k. 「完了」をクリックします。

## データ・ディクショナリーの作業

既存または新規作成のベース・テーブルまたは汎用テーブルに対するデータ・ディ クショナリーを編集することもできますし、既存の固定幅フラット・ファイルから 新しいデータ・ディクショナリーを作成することができます。

注: データ・ディクショナリーは、テーブル・マッピングに使用するために、 Campaign サーバー上に保管するか、またはそのサーバーからアクセス可能でなけれ ばなりません。

## データ・ディクショナリーを開く方法

必要なデータ・ディクショナリーを見つけてから、それをメモ帳や他の任意のテキ スト・エディターで開きます。

そのファイルは、以下の例に示すようなものです。

CellID, ASCII string, 32, 0, Unknown, MBRSHP, ASCII string, 12, 0, Unknown, MP, ASCII Numeric, 16, 0, Unknown, GST\_PROF, ASCII Numeric, 16, 0, Unknown, ID, ASCII Numeric, 10, 0, Descriptive/Names, Response, ASCII Numeric, 10, 0, Flag, AcctAge, ASCII Numeric, 10, 0, Quantity, acct\_id, ASCII string, 15, 0, Unknown, src\_extract\_dt, ASCII string, 50, 0, Unknown, extract\_typ\_cd, ASCII string, 3, 0, Unknown,

必要に応じてファイル内の情報を変更できます。関連したテーブルに保管されるデ ータが、設定するパラメーターを使用できるようにしてください。

## 変更をデータ・ディクショナリーに適用する方法

フローチャートを保存、クローズ、および再オープンする必要があります。

### データ・ディクショナリーをいつ使用するか

データ・ディクショナリーは、作成する固定幅出力ファイルが特定の構成に従うよ うにするためのもので、「スナップショット」プロセスで使用します。

### データ・ディクショナリーの構文

データ・ディクショナリーの各行は、次の構文を使用して固定幅フラット・ファイ ルのフィールドを定義します。

<変数名>, <"ASCII string" または "ASCII Numeric">, <長さ (バイト単位)>, <小 数点>, <フォーマット>, <コメント>

注: <小数点> 値は、小数点より右側の桁数を指定し、「ASCII Numeric」フィール ドでのみ有効です。「ASCII string」フィールドでは、この値は常に 0 にする必要 があります。

例えば、次のような行があるとします。

acct\_id, ASCII string, 15, 0, Unknown,

この行は、ファイル内のレコードに「acct\_id」という名前のフィールドがあり、そ のフィールドは 15 バイトの文字列で小数部がなく (文字列のフィールドなので)、 フォーマットは不明でコメントの文字列は空白であることを意味します。

**注:** フォーマット・フィールドおよびコメント・フィールドは、Campaign では使用 されません。そのため、最適な結果を得るには、フォーマット値には「Unknown」 を使用して「コメント」フィールドはブランクにしてください。

## 新しいデータ・ディクショナリーを手動で作成する方法

このセクションでは、新しいデータ・ディクショナリーを手動で作成する方法を説明します。新しいデータ・ディクショナリーを作成するときには、Campaign によって作成された既存のデータ・ディクショナリーを元にする方法が簡単です。

- 1. 空の .dat ファイル (長さ = 0) および対応する .dct ファイルを作成します。
- 2. .dct ファイル内に、フィールドを次のフォーマットで定義します。

<変数名>, < "ASCII string" または "ASCII Numeric" >, <バイト単位の長さ>, < 小数点 >, <フォーマット>, <コメント>

以下のように、フォーマットには Unknown を使用して、コメント・フィールド はブランクにします。

acct\_id, ASCII string, 15, 0, Unknown,

hsehld\_id, ASCII Numeric, 16, 0, Unknown,

occptn\_cd, ASCII string, 2, 0, Unknown,

dob, ASCII string, 10, 0, Unknown,

natural\_lang, ASCII string, 2, 0, Unknown,

commun\_lang, ASCII string, 2, 0, Unknown,

3. これで、このデータ・ディクショナリーを使用して新しいテーブルをファイルに マップできます。

# テーブル・カタログの作業

このセクションには、以下の情報が記載されています。

- 50ページの『テーブル・カタログにアクセスする方法』
- 50ページの『テーブル・カタログを開く方法』
- 50ページの『テーブル・カタログの作成方法』
- 51ページの『保管テーブル・カタログのロード方法』
- 52ページの『テーブル・カタログの削除』
- 52ページの『テーブル・カタログ内のテーブルの事前計算されたプロファイルを 更新する方法』
- 53ページの『テーブル・カタログのデータ・フォルダーの定義方法』

## テーブル・カタログにアクセスする方法

1. 「設定」>「Campaign 設定」を選択します。

「Campaign 設定」ページが表示されます。

2. 「**テーブル・マッピングの**管理」をクリックします。

「テーブル・マッピング」ウィンドウが表示されます。

3. 「テーブル・マッピング」ウィンドウで、「**ユーザー・テーブル表示**」を選択し ます。

注: フローチャートの編集中に、「オプション」メニューからテーブル・カタログ にアクセスすることもできます。

## テーブル・カタログを開く方法

- 1. 『テーブル・カタログにアクセスする方法』の手順に従ってください。
- 2. 「**ロード**」をクリックします。以前に保管されたカタログが、「**項目リスト**」に リストされます。
- 3. 開くカタログを選択し、「ロード」をクリックします。

## テーブル・カタログの作成方法

テーブル・カタログを作成するには、現行フローチャートの内部テーブル・カタロ グにあるユーザー・テーブルを保存します。テーブル・カタログを共通に定義され たテーブル・マッピングと共に保存すると、テーブル・マッピングの共有やテーブ ル・マッピングの復元が容易になります。

- 『テーブル・カタログにアクセスする方法』の手順に従ってください。テーブ ル・カタログとして保存するユーザー・テーブルが、Campaign でマップされて いることを確認してください。
- 2. 「テーブル・マッピング」ウィンドウで、テーブル・カタログに保存するユーザ ー・テーブルを選択し、「**保存**」をクリックします。
- 3. 「テーブルの保存」ウィンドウで、すべてのテーブル・マッピングをテーブル・ カタログに保存するオプション、または選択されたテーブル・マッピングだけを テーブル・カタログに保存するオプションを選択してから、「**OK**」をクリック します。

「テーブル・マッピングをカタログ・ファイルに保存」ウィンドウが開きます。

- 新しいテーブル・カタログの詳細を入力します。それには保存先のフォルダー、 名前、セキュリティー・ポリシー、説明、このカタログをデータベース認証情報 と共に保存するかどうかなどが含まれます。
- 5. テーブル・カタログの名前を入力します。拡張子名として .XML を入力する と、テーブル・カタログはプロプラエタリー・バイナリー・ファイルではなく XML 形式で保存されます。

**注:** この名前はフォルダーの中で固有でなければなりません。そうでない場合 は、同じ名前の既存のテーブル・カタログを上書きすることを確認するプロンプ トが出されます。この名前には、ピリオド、アポストロフィ、単一引用符を使用 できません。それは文字で開始して、文字 A から Z、数字 0 から 9、および 下線文字 (\_) だけを含めることができます。

- 6. (オプション) テーブル・カタログの説明を「説明」フィールドに追加します。
- 7. (オプション) 「データベース認証情報と共に保存」にチェック・マークを付けま す。
  - 「データベース認証情報と共に保存」にチェック・マークを付けない場合、このテーブル・カタログを使用するすべてのユーザーは、テーブル・カタログで参照されるすべてのデータ・ソースに対して、データベースのログイン名およびパスワードを入力する必要があります。これらのパスワードは、ASM ユーザー・プロファイルに既に保存されていることがあります。有効なログイン名およびパスワードがまだ保存されていない場合、それらの入力を求めるプロンプトがユーザーに出されます。この設定は、セキュリティーの観点からはベスト・プラクティスです。
  - 「データベース認証情報と共に保存」にチェック・マークを付けた場合、現在の認証情報(これらのデータ・ソースにアクセスするために現在使用しているログイン名およびパスワード)がテーブル・カタログに保存され、このテーブル・カタログへのアクセス権限を持つすべてのユーザーは、テーブル・カタログに保管された認証情報を使用してデータ・ソースに自動的に接続されます。つまり、このテーブル・カタログのユーザーは、ログイン名やパスワードを入力しなくてもこれらのデータ・ソースにアクセスでき、このデータ・ソースの読み書き用に保管されたログイン名が持つすべての特権を付与されます。セキュリティーの観点から、この設定を避けることができます。
- 8. 「**保存先**」ドロップダウン・リストを使用して、テーブル・カタログを保存する フォルダーを選択します。

テーブル・カタログはフォルダー別に編成できます。「項目リスト」から既存の フォルダーを選択するか、または「新規フォルダー」ボタンをクリックして新し いフォルダーを作成します。

特定のフォルダーを選択しない場合、または「**保存先**」ドロップダウン・リスト で「**なし**」を選択した場合は、現在のテーブル・カタログが最上位に保存されま す。選択されたフォルダーが、「**保存先**」フィールドの下に表示されます。

9. 「保存」をクリックします。

テーブル・カタログは、名前と共に拡張子を指定していない場合には .cat ファ イルとして保存され、選択した場所に置かれます。ファイル名と共に .xml 拡張 子を指定した場合、テーブル・カタログは XML 形式で保存されます。

### 保管テーブル・カタログのロード方法

以前に保存したテーブル・カタログを、現行フローチャートで使用するためにロー ドすることができます。

注:「保管テーブル・カタログからテーブル・マッピングをロードする(既存のマッ ピングを消去)」オプションを選択した場合、そのフローチャートに存在するマップ 済みテーブルは失われます。つまり、それらはロードされるカタログのテーブル・ マッピングで置き換えられます。「保管テーブル・カタログからテーブル・マッピ ングをマージする (既存のマッピングを上書き)」を選択した場合、ロードされる新 しいテーブル・カタログに含まれていない古いテーブル・マッピングは保持されま す。

default.cat テーブル・カタログを定義した場合、新しいフローチャートを作成するた びにそれがデフォルトでロードされます。ただし、cookie を受け入れるようにブラ ウザーを設定し、別のテーブル・カタログをロードした場合は、デフォルトでその カタログが default.cat の代わりにロードされます。これは保管されたディメンショ ン階層についても同じです。

- 1. 50 ページの『テーブル・カタログにアクセスする方法』の手順に従ってください。
- 2. 「ロード」をクリックします。

「テーブルのロード」ウィンドウが開きます。

- テーブルをロードするときに既存のマッピングを消去するか上書きするかを選択 するための該当するオプションを選択します。デフォルトでは、既存のマッピン グを消去するオプションが選択されています。
- 4. 「OK」をクリックします。

「**保管テーブル・カタログ**」ウィンドウが開きます。

5. ロードするテーブル・カタログの名前を選択します。

テーブル・カタログの名前をクリックすると、その情報が「**詳細情報**」ボックス に表示されて、「ロード」ボタンが使用可能になります。

6. 「**カタログのロード**」をクリックします。

選択したカタログがロードされます。新しいカタログに含まれるテーブルの詳細 が、「テーブル・マッピング」ウィンドウに表示されます。

## テーブル・カタログの削除

テーブル・カタログは、「編集」モードでフローチャート・ページから削除しま す。このタスクは、「キャンペーン設定」ページの「テーブル・マッピングの管 理」リンクからは使用できません。

重要:テーブル・カタログの削除には、Campaign インターフェースだけを使用して ください。テーブルを削除した場合やファイル・システム内のテーブル・カタログ を直接変更した場合、Campaign はシステム内のデータ保全性を保証できません。

保管テーブル・カタログの削除方法について詳しくは、「*Campaign* ユーザーズ・ガ イド」を参照してください。

# テーブル・カタログ内のテーブルの事前計算されたプロファイルを 更新する方法

基礎となるマーケティング・データが変更された場合、Campaign を使用してテーブ ル・フィールドのプロファイル情報を事前計算するときは、レコード数とテーブル に指定した事前計算値とを再計算して、テーブル・カタログを更新する必要があり ます。

- 1. 50ページの『テーブル・カタログにアクセスする方法』の手順に従ってください。
- ユーザー・テーブルのサブセットのレコード数および値を更新するには、テーブ ルのリストでそれらのテーブルを選択します。 Ctrl + クリックを使用して、複 数のテーブルを選択することもできます。

すべてのユーザー・テーブルのレコード数および値を計算するとき、どのテーブ ルも選択する必要はありません。

3. 「計算」をクリックします。

「再計算」ウィンドウが開きます。

1 つもテーブルを選択していない場合、デフォルトでは、「すべてのテーブルの レコード数を再計算する」オプションが選択されます。

テーブルのサブセットを選択した場合、「選択したテーブルのレコード数を再計 算する」オプションが選択されます。すべてのテーブルを計算するオプションも 選択可能です。

注:計算対象となるテーブルを選択しなかったとき、選択したテーブルの値を計 算するオプションを有効にするには、「再計算」ウィンドウで「キャンセル」を クリックします。ウィンドウが閉じて「テーブル・マッピング」ウィンドウに戻 ります。このウィンドウで、レコード数と値を計算するテーブルを選択できま す。

4. 選択を確定するには、「OK」をクリックします。

計算が完了すると、「**テーブル・マッピング**」ウィンドウに戻ります。

### テーブル・カタログのデータ・フォルダーの定義方法

テーブル・カタログを作成するとき、そのテーブル・カタログに関連した 1 つ以上 のデータ・フォルダーを指定することもできます。「スナップショット」などの出 カプロセスでは、ファイルの場所を選択するダイアログで、これらの指定フォルダ ーは、事前定義されたフォルダーの場所として示されます。

- 1. フローチャートの「編集」モードで「システム管理」アイコンをクリックし、 「テーブル」を選択します。
- 「テーブル・マッピング」ウィンドウで、カタログに保存するマップ済みユーザ ー・テーブルを選択します。「保存」をクリックします。
- 「テーブル・マッピングをカタログ・ファイルに保存」ウィンドウで「IBM Campaign データ・フォルダー」セクションをクリックして、項目を追加しま す。
- 4. 追加するデータ・フォルダーの名前と場所を、現行パーティションのホーム・ディレクトリーからの相対位置で入力します。例えば、パーティション 1 で作業している場合、指定するフォルダーの場所は、partitions/partition1 フォルダーからの相対位置となります。
- 5. 「保存」をクリックします。

関連したデータ・フォルダーを指定してテーブル・カタログを保存した後、「ス ナップショット」などの出力プロセスが含まれるフローチャート内のカタログを 再ロードすると、ファイルの場所を選択するダイアログでこれらのフォルダーが オプションとして示されます。

例えば、「フォルダーの場所」に temp を指定して MyFolder という名前の IBM Campaign データ・フォルダーを追加した場合、「スナップショット・プロ セス構成」ダイアログで、「エクスポート先」ドロップダウン・リストに 「MyFolder のファイル (File in MyFolder)」が表示されます。 「MyFolder の ファイル (File in MyFolder)」を選択すると、「出力ファイルの指定」ウィン ドウの「ファイル名」フィールドに自動的に相対パス temp/ が設定されます。

# 第4章 キャンペーンのカスタマイズ

カスタム・キャンペーン属性、イニシアチブ、および製品を使用して、キャンペー ンをカスタマイズできます。

# カスタム・キャンペーン属性

注: Campaign インストール済み環境が Marketing Operations と統合されている場合、Marketing Operations を使用してカスタム・キャンペーン属性を作成する必要があります。詳細については、Marketing Operations の資料を参照してください。

キャンペーンをカスタマイズするには、各キャンペーンについてのメタデータを保 管するカスタム・キャンペーン属性を追加します。

カスタム属性は、キャンペーンをさらに定義して分類するために役立ちます。例え ば、カスタム・キャンペーン属性の「部門」を定義して、組織内においてキャンペ ーン企画を担当している部門の名前を保管することができます。定義したカスタム 属性は、各キャンペーンの「**サマリー**」タブに表示されます。

カスタム・キャンペーン属性は、システム内のすべてのキャンペーンに適用されま す。既存のキャンペーンがあるときにカスタム・キャンペーン属性を追加した場 合、それらのキャンペーンの属性値は NULL になります。それらのキャンペーン は、後で編集してカスタム属性の値を指定することができます。

注: カスタム属性の名前は、キャンペーン、オファー、およびセル全体にわたって 固有なカスタム属性名でなければなりません。

# カスタム・セル属性

カスタム・セル属性は、既に作成されているキャンペーンも含めすべてのキャンペ ーンのターゲット・セル・スプレッドシート (TCS) に組み込まれます。例えば、カ スタム・セル属性の「マーケティング方式」を定義して、「抱き合わせ販売」、 「上位商品販売」、「離反」、「ロイヤリティー」などの値を保管できます。

カスタム・セル属性は、すべてのキャンペーンで同じです。ユーザーは、キャンペ ーンのターゲット・セル・スプレッドシートでカスタム・セル属性の値を入力しま す。例えば、カスタム・セル属性「マーケティング方式」を作成した場合、ユーザ ーがターゲット・セル・スプレッドシートの行を編集するときに「マーケティング 方式」フィールドが表示されます。

フローチャートの出力処理において、カスタム・セル属性の出力値を Campaign 生 成済みフィールド (UCGF) として生成することもできます。その後、ユーザーはセ ル属性の値に基づくレポートを表示できます (レポートがこれをサポートするよう にカスタマイズされている場合)。詳しくは、「*Campaign* ユーザー・ガイド」を参 照してください。 注: Campaign が Marketing Operations と統合されている場合、Marketing Operations を使用してカスタム・セル属性を作成する必要があります。詳細については、 Marketing Operations の資料を参照してください。

# カスタム・オファー属性

Campaign には、オファー・テンプレートで使用できる標準的なオファー属性のセットが備わっています。カスタム・オファー属性を作成することで、定義、出力、または分析に関する追加のオファー・メタデータを保管できます。

例えば、住宅ローンのオファーで提供される利率の値を保管する Interest Rate (利率) というカスタム・オファー属性を定義できます。

オファー・テンプレートを定義するとき、特定の種類のオファーでどの標準/カスタム・オファー属性を表示するかを選択できます。その後、ユーザーは、オファーを 作成したり使用したりするときにこれらの属性の値を提供します。

以下の 3 つのいずれかの方法で、カスタム属性をオファー・テンプレートで使用で きます。

- 静的属性として
- 表示されない静的属性として
- パラメーター化された属性として

### 静的属性とは

静的属性とは、値が一度だけ設定されて、オファーの使用時にその値が変わらない オファー・フィールドです。

オファー・テンプレートを作成するときに、すべての静的属性の値を提供します。 そのテンプレートに基づいてユーザーがオファーを作成するとき、既に入力されて いる値がデフォルト値として使われます。ユーザーは必要に応じてこれらのデフォ ルト値をオーバーライドできます。ただし、フローチャート処理でオファーを使用 するときには、ユーザーは静的属性の値をオーバーライドできません。

すべてのオファー・テンプレートに自動的に含まれる静的属性もあります。

### 表示されない静的属性とは

表示されない静的属性は、そのテンプレートに基づいてユーザーがオファーを作成 するときにユーザーに表示されないオファー・フィールドです。例えば、オファー を管理するための組織にとってのコストを、表示されない静的属性にすることがで きます。

オファーを作成しているユーザーは、表示されない静的属性の値を編集(および表示)できません。ただし管理者は、他のオファー属性の場合と同じ方法で、表示されない静的属性の値を追跡してレポートを生成することができます。

オファー・テンプレートを作成するとき、表示されない静的属性として入力した値 は、そのテンプレートに基づくすべてのオファーに適用されます。

## パラメーター化された属性とは

パラメーター化された属性とは、フローチャート内のセルにオファーが関連付けら れるインスタンスごとにユーザーが変更できるフィールドです。

オファー・テンプレートを作成するときには、パラメーター化された属性のデフォ ルト値を提供します。その後、このテンプレートに基づいてユーザーがオファーを 作成するとき、既に入力されているデフォルト値を受け入れたり、変更したりする ことができます。最後に、パラメーター化された属性を含むオファーがフローチャ ート内のセルに関連付けられるとき、ユーザーはオファーに入力されたデフォルト 値を受け入れるか、変更することができます。

# カスタム属性の作業

以下のトピックでは、キャンペーン、オファー・テンプレートとオファー、ターゲ ット・セル・スプレッドシート上のセルのいずれかで使用できるカスタム属性の処 理方法を説明します。

- 『カスタム属性の作成』
- 59ページの『カスタム属性の変更方法』
- 65ページの『オファー・テンプレートでのカスタム属性の使用』
- 74ページの『「チャネル」属性へのリスト値の追加』

### カスタム属性の作成

カスタム属性を作成するための手順は、キャンペーン、オファー、セルのいずれに ついても同じです。カスタム属性の作成時に指定するタイプによって、その属性を 使用できるのがキャンペーンであるか、オファー・テンプレートとオファーである か、それともターゲット・セル・スプレッドシート上のセルであるかが決まりま す。

注: キャンペーン、オファー、およびセルのカスタム属性を追加する権限が必要で す。詳しくは、「Marketing Platform 管理者ガイド」を参照してください。

- 1. 「設定」>「Campaign 設定」を選択します。
- 2. 「**テンプレートとカスタマイズ**」セクションで、「**カスタム属性の定義**」をクリックします。

「カスタム属性の定義」ウィンドウに、標準のオファー属性とすべての作成済み のカスタム属性が表示されます。

- 3. 「カスタム属性の追加」アイコンをクリックします。
- 4. 「属性詳細の追加」ウィンドウを使用して属性を定義します。
  - a. ユーザーに表示されるラベルを指定する「**属性表示名**」を入力します。特別 な命名上の制約はありません。
  - b. 「内部名」を入力します。これは、照会やカスタム・マクロなどの IBM EMM 式を作成するときにこの属性を参照する目的で使用されます。内部名 は、先頭文字を英字にする必要があります。さらに、スペースを含めること ができず、グローバルに固有の名前でなければなりません。内部名には大/小 文字の区別がありません。ベスト・プラクティスは、表示名と同じ名前を、 スペースを除去して使用することです(「InterestRate」など)。

- c. 「次の属性」ドロップダウン・リストを使用して、この属性を使用できる場 所を指定します。
  - 「**キャンペーン**」属性は、すべてのキャンペーン (既に作成済みのキャン ペーンを含む) に組み込まれます。
  - 「オファー」属性は、新規オファー・テンプレートで使用できます。オフ ァー・テンプレートにこの属性を組み込むと、そのテンプレートに基づく すべてのオファーにその属性が組み込まれます。
  - 「セル」属性は、すべてのキャンペーン (既に作成済みのキャンペーンを 含む)のターゲット・セル・スプレッドシートに組み込まれます。
- d. オプションで、「説明」を入力します。
- e. オプションで、「**必須**」ボックスにチェック・マークを付けて、この属性の 値を必須にします。この設定は、必要であれば後で変更できます。
  - キャンペーンの場合、ユーザーはこの属性の値を指定する必要があります (このフィールドは空白にはできません)。
  - セルの場合、ユーザーはターゲット・セル・スプレッドシートに値を指定 する必要があります (このセルは空白にはできません)。
  - オファーの場合、管理者は、属性がオファー・テンプレートに追加される ときに値を指定する必要があります。ユーザーがオファーを作成または編 集するときに別の値を指定した場合を除き、そのテンプレートに基づくす べてのオファーで、この指定値が使用されます。

注: オファー・テンプレートに「表示されない静的属性」または「パラメ ーター化された属性」としてオファー属性を追加する場合、その属性が 「必須」として定義されていない場合でも、値が常に必要になります。オ ファー・テンプレートに「静的属性」としてオファー属性を追加する場 合、値が必要であるかどうかは「**必須」**の設定によって決まります。

f. 「フォーム要素タイプ」リストを使用して、オファーまたはセルの属性フィ ールドに保管されるデータの型を指定します。

**重要:** カスタム属性を追加した後に、そのデータ型を変更することはできません。

- g. 選択内容に応じて、以下のいずれかの値を入力する必要が生じることがあり ます。
  - 「最大文字列長」: 「選択ボックス 文字列」または「テキスト・フィー ルド - 文字列」を選択した場合、この属性の値として保管される文字の最 大数を指定する必要があります。
  - 「小数点以下」:「テキスト・フィールド 数値」または「テキスト・フィールド 通貨」を選択した場合、小数点の右側に表示される小数位の桁数を指定する必要があります。

**重要:「テキスト・フィールド - 通貨」**の場合、その地域通貨で通常使用される小数点以下の桁数が通貨の値に反映されます。小数点以下の桁数を通常 使用される数よりも小さい値に指定した場合、通貨の値は切り捨てられま す。

h. 「**選択ボックス - 文字列**」を「フォーム要素タイプ」として選択した場合に は、次のようになります。  オプションで、「編集フォーム内からのリスト項目の追加を許可」にチェ ック・マークを付けると、この属性が組み込まれるキャンペーン、オファ ー・テンプレート、またはオファーをユーザーが作成または編集するとき に、使用可能な値のリストに新しい固有値を追加できます。(このオプシ ョンはセルには適用されません。)例えば、オファー・テンプレートの 「選択ボックス」に小、中、大 という値が設定されている場合、オファー の作成時やオファー・テンプレートの編集時に、ユーザーは特大 という値 を追加することができます。

**重要:** ユーザーは、キャンペーン、オファー・テンプレート、またはオフ ァーを一度保存すると、新しいリスト項目を削除できなくなります。値は 元のカスタム属性定義に保存されて、すべてのユーザーが使用できるよう になります。管理者だけが、カスタム属性を変更する方法を使ってリスト から項目を削除できます。

- 「使用可能な値のソース・リスト」は、「選択ボックス」で選択可能な項目のリストです。このリストにデータを設定するには、「新規項目または 選択した項目」フィールドに値を入力して「承認」をクリックします。値を削除するには、それを「使用可能な値のソース・リスト」で選択し、「削除」をクリックします。
- オプションで、「選択ボックス」の「デフォルト値」を指定します。その デフォルト値がキャンペーン、オファー、または TCS で使用されます が、ユーザーがキャンペーン、オファー、またはセルを作成または編集す るときに別の値を指定した場合にはその値が使用されます。
- 「ソート順」を指定して、リスト内で値が表示される方法を決定します。
- 5. 「変更の保存」をクリックします。

## カスタム属性の変更方法

カスタム属性を変更するための手順は、キャンペーン、オファー、セルのいずれに ついても同じです。

注: オファーおよびセルのカスタム属性を変更する権限が必要です。詳しくは、 「*Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

- 1. 「設定」>「Campaign 設定」を選択します。
- 2. 「**テンプレートとカスタマイズ**」セクションで、「**カスタム属性の定義**」をクリックします。

「カスタム属性の定義」ウィンドウに、標準のオファー属性とすべての作成済み のカスタム属性が表示されます。

- 3. 変更する属性の名前をクリックします。
- 4. 「属性詳細」ウィンドウを使用して以下のように変更します。
  - a. 「**属性表示名**」:作成したカスタム属性の表示名を変更できます。標準のオフ ァー属性の表示名は変更できません。
  - b.「内部名」:自分で作成したカスタム属性の内部名は変更できますが、既存の フローチャートでその内部名を使用するとエラーになり、その属性を保存す るときに警告を受け取ります。デフォルトのオファー属性の内部名を変更す ることはできません。

**重要:**カスタム属性の内部名は、グローバルに固有の名前でなければなら ず、先頭文字を英字にする必要があります。さらに、スペースを含めること ができず、大/小文字の区別はありません。

- c. オプションで、「説明」を変更します。
- d. 「**必須**」ボックスは、この属性で値が必要であるかどうかに応じてチェック・マークを付けるか外します。
  - 「必須」を必須でない設定に変更すると、その属性が使用されるときに値 が必要でなくなります。
  - 必須でない設定を「必須」に変更すると、今後この属性が使用されるときには必ず値が必要になります。この変更による既存のオブジェクトへの影響は、それを編集する場合を除いて、ありません。例えば、「編集」モードでキャンペーン、ターゲット・セル・スプレッドシート、またはオファーを開くとき、保存する前に値を指定する必要があります。
- e. 「選択ボックス 文字列」または「テキスト・フィールド 文字列」フィー ルドの場合、「最大文字列長」を変更して、この属性の値として保管する文 字の最大数を指定できます。

**重要:** 既存の属性の長さを小さくすると、既存の値は切り捨てられるので、そのフィールドが突き合わせのために使用される場合には、レスポンス・トラッキングに不具合が生じることがあります。

f. 「テキスト・フィールド - 数値」または「テキスト・フィールド - 通貨」フィールドの場合、「小数点以下」を変更して、小数点の右側に表示される小数位の桁数を指定できます。

**重要:** この値を小さくすると、ユーザー・インターフェースでの表示は切り捨 てられます。ただし、元の値はデータベースに保持されます。

- g. 属性が「選択ボックス 文字列」の場合、以下を行うことができます。
  - 「編集フォーム内からのリスト項目の追加を許可」を変更して、ユーザー がキャンペーン、オファー、またはオファー・テンプレートを定義すると きに新しい固有値をリストに追加する操作を許可または不許可にできま す。このオプションは、カスタム・セル属性には適用されません。
  - リスト項目の編集: これを「使用可能な値のソース・リスト」で選択し、 それを「新規項目または選択した項目」フィールドで変更してから「承認」をクリックします。
  - リスト項目の追加:「新規項目または選択した項目」フィールドで値を入 力し、「承認」をクリックします。
  - リスト項目の削除: それを「使用可能な値のソース・リスト」で選択し、 「削除」をクリックします。
  - 「デフォルト値」を変更します。
  - •「**ソート**順」を変更して、リスト内の項目の順序を決定します。
- 5. 「変更の保存」をクリックします。

# カスタム・イニシアチブ

Campaign では、「イニシアチブ」という名前の組み込み属性が提供されています。 「イニシアチブ」属性は、キャンペーンの「サマリー」タブにあるドロップダウ ン・リストです。初期状態では、ドロップダウン・リストに値が含まれていませ ん。管理者は、選択するイニシアチブを定義する必要があります。

# イニシアチブの追加方法

キャンペーンの「**サマリー**」タブの「**イニシアチブ**」ドロップダウン・リストから ユーザーが選択できるイニシアチブを追加できます。イニシアチブは、データベー ス表 UA Initiatives に直接追加します。

- 1. データベース管理システムを使用して、Campaign システム・テーブル・データ ベースにアクセスします。
- データベース表 UA\_Initiatives の「InitiativeName」列に値を追加します。そ れぞれの値は最大 255 文字まで可能です。
- 3. 変更内容を UA\_Initiatives テーブルに保存します。

## カスタム製品

ユーザーは、オファーに 1 つ以上の製品を関連付けることができます。製品 ID は、Campaign システム・テーブル・データベースの UA\_Product テーブルに保管さ れます。初期状態では、このテーブルにレコードは含まれていません。管理者は、 このテーブルにデータを追加できます。

### 製品の追加方法

ユーザーがオファーに関連付けることのできる製品を追加できます。製品は、デー タベース表 UA\_Products に直接追加します。

- 1. データベース管理システムを使用して、Campaign システム・テーブル・データ ベースにアクセスします。
- 2. UA\_Product テーブルを見つけます。

テーブルには、次の2つの列があります。

- ProductID (bigint、長さ 8)
- UserDefinedFields (int、長さ 4)
- 3. オプションで、テーブルを変更して追加の列を組み込みます。 「UserDefinedFields」列を削除することもできます。
- 4. 必要に応じてテーブルにデータを追加し、オファーと関連付けることのできる製 品を含めます。
- 5. 変更内容を UA\_Product テーブルに保存します。

# 第5章 オファー・テンプレートの管理

オファーの管理を進める前に、以下の点を理解しておく必要があります。

- 『オファーとは』
- 『オファー・テンプレートとは』
- 64 ページの『オファー・テンプレートとセキュリティー』
- 64 ページの『オファー・テンプレートを使用する理由』
- 56ページの『カスタム・オファー属性』

### オファーとは

オファーとは、1 つ以上の経路 (チャネル)を使って特定の人々のグループに送られる、マーケティング上の特定のコミュニケーションです。単純なオファーも複雑なオファーも可能であり、通常は、創造的部分、コスト、チャネル、終了日がオファーに含まれます。

例えば、オンライン小売業者からの単純なオファーは、「4 月中にオンラインで購入される全品目の配送料が無料になる」という項目から成ることがあります。より 複雑なオファーとしては、金融機関からのクレジット・カードに、対象となる顧客 の信用格付けと地域に基づいてアートワーク、初期の利率、有効期限を個人別に組 み合わせて付帯することがあります。

Campaign では、オファーは

- 管理されるオファー・テンプレートに基づきます。
- キャンペーンで使用され、ターゲット・セルに関連付けられます。

関連付けられたオファーは、その後、これらのターゲット・セルで識別される顧客 に向けて送られます。

また、複数のオファーをリストとしてグループ化し、オファー・リストをターゲット・セルに割り当てることもできます。

注: オファー名とオファー・リスト名の文字には、固有の制約事項があります。詳 しくは、387ページの『付録 B. Campaign オブジェクト名での特殊文字』を参照し てください。

# オファー・テンプレートとは

オファー・テンプレートは、特定の種類のオファーの構造を定義します。作成済み のオファー・テンプレートに基づいて、ユーザーはオファーを作成します。

**重要:** オファー・テンプレートは必須です。ユーザーは、テンプレートに基づかないでオファーを作成することができません。

企業においてさまざまな種類のオファーを管理するために、適切な数のオファー・ テンプレートを作成することができます。オファー・テンプレートを定義するとき には、関連するオファー属性とそれらの使用方法を一緒に指定します。

注:オファー・テンプレートの名前には、固有の制約事項はありません。

# オファー・テンプレートとセキュリティー

オファー・テンプレートに対して設定されるセキュリティー・ポリシーは、どのユ ーザーがオファー・テンプレートを使用できるかを決定します。

オファー・テンプレートのセキュリティー・ポリシーは、このオファー・テンプレ ートを使って作成されるオファーに適用されるセキュリティー・ポリシーとは無関 係です。つまり、テンプレートに基づくオファーにはセキュリティー・ポリシーが 伝搬されません。

ユーザーが新しいオファーを作成するとき、オファーのセキュリティー・ポリシー は、それが格納されるフォルダーに基づきます。そのフォルダーが最上位のオファ ー・フォルダー内に作成される場合、ユーザーはそのフォルダーに対して他の有効 なセキュリティー・ポリシーを選択できます。

オファー・テンプレートの操作 (オファー・テンプレートの追加、編集、回収など の作業)を行うには、オファー・テンプレートの表示権限を含む適切な権限が必要 です。例えばオファー・テンプレートを追加するには、「オファー・テンプレート の追加」と「オファー・テンプレートの表示」の両方の権限を付与される必要があ ります。

Campaign のセキュリティーについて、詳しくは「*Marketing Platform* 管理者ガイ ド」を参照してください。

### オファー・テンプレートを使用する理由

オファー・テンプレートを使用すると、企業および Campaign ユーザーにとって以下のような利点があります。

- オファー・テンプレートを作成することにより、ユーザーにとってオファー作成 が単純化されます。特定の種類のオファーに関連するオファー属性だけが表示さ れるためです。
- オファー属性のデフォルト値を提供することにより、オファー作成プロセスが速くなります。
- オファー・テンプレート内でパラメーター化されたオファー属性を指定することにより、新規オファーが作成される時点、およびオファー・バージョンが代わりに使用可能になる時点を制御できます。
- カスタム属性を使って特定のデータ (例えばオファーに関連付けられた割引率やボーナス・ポイント)を取得することにより、キャンペーンのレポート機能および分析を改善することができます。
# オファー・テンプレートおよびオファーの計画

オファーを計画するときには、どのテンプレートを使用するか、どの属性をパラメ ーター化するか、このオファーが割り当てられるセルで検証コントロール・グルー プを使用するかどうか、などの事柄を考慮します。

以下の点で、さまざまに異なるオファーが可能です。

- 有効期限日付を含む、パラメーター化されたさまざまなオファー・フィールド
- さまざまなオファー・コード (コードの数、長さ、形式、カスタム・コード・ジェネレーター)
- 特定の種類のオファーで表示されるカスタム属性(例えばクレジット・カード・ オファーには初期の年利率と通常の利率があり、住宅ローン・オファーには支払 い頻度と期間があります)。

ベスト・プラクティスとしては、オファーの中でパラメーター化された値を最小限 に抑えてください。ほとんどのオファー属性は、パラメーター化されるべきではあ りません。オファーの「本質」を変えない属性 (開始日、終了日など) にのみ、パラ メーターを作成すべきです。

オファーおよびオファー・テンプレートの設計を注意深く考慮してください。設計 は、キャンペーンの詳細をどのように分析および報告できるかに大きな影響を与え ることがあります。

オファーを使った作業について、詳しくは「Campaign ユーザー・ガイド」を参照してください。

## オファー属性を操作する

以下のトピックでは、オファー属性の操作方法について説明します。

- 『オファー・テンプレートでのカスタム属性の使用』
- 57 ページの『カスタム属性の作成』
- 59ページの『カスタム属性の変更方法』
- 69ページの『Campaign 内の標準のオファー属性』

## オファー・テンプレートでのカスタム属性の使用

カスタム・オファー属性を作成すると、それを新しいオファー・テンプレートに追加できるようになります。そのテンプレートに基づいて作成されたすべてのオファーには、カスタム属性が組み込まれます。関連情報については、70ページの『オファー・テンプレートでのドロップダウン・リストの使用』を参照してください。

## カスタム属性の作成

カスタム属性を作成するための手順は、キャンペーン、オファー、セルのいずれに ついても同じです。カスタム属性の作成時に指定するタイプによって、その属性を 使用できるのがキャンペーンであるか、オファー・テンプレートとオファーである か、それともターゲット・セル・スプレッドシート上のセルであるかが決まりま す。 注: キャンペーン、オファー、およびセルのカスタム属性を追加する権限が必要で す。詳しくは、「Marketing Platform 管理者ガイド」を参照してください。

- 1. 「設定」>「Campaign 設定」を選択します。
- 2. 「**テンプレートとカスタマイズ**」セクションで、「**カスタム属性の定義**」をクリックします。

「カスタム属性の定義」ウィンドウに、標準のオファー属性とすべての作成済み のカスタム属性が表示されます。

- 3. 「カスタム属性の追加」アイコンをクリックします。
- 4. 「属性詳細の追加」ウィンドウを使用して属性を定義します。
  - a. ユーザーに表示されるラベルを指定する「**属性表示名**」を入力します。特別 な命名上の制約はありません。
  - b.「内部名」を入力します。これは、照会やカスタム・マクロなどの IBM EMM 式を作成するときにこの属性を参照する目的で使用されます。内部名 は、先頭文字を英字にする必要があります。さらに、スペースを含めること ができず、グローバルに固有の名前でなければなりません。内部名には大/小 文字の区別がありません。ベスト・プラクティスは、表示名と同じ名前を、 スペースを除去して使用することです(「InterestRate」など)。
  - c. 「次の属性」ドロップダウン・リストを使用して、この属性を使用できる場 所を指定します。
    - 「**キャンペーン**」属性は、すべてのキャンペーン (既に作成済みのキャン ペーンを含む) に組み込まれます。
    - 「オファー」属性は、新規オファー・テンプレートで使用できます。オフ ァー・テンプレートにこの属性を組み込むと、そのテンプレートに基づく すべてのオファーにその属性が組み込まれます。
    - 「**セル**」属性は、すべてのキャンペーン (既に作成済みのキャンペーンを 含む) のターゲット・セル・スプレッドシートに組み込まれます。
  - d. オプションで、「説明」を入力します。
  - e. オプションで、「**必須**」ボックスにチェック・マークを付けて、この属性の 値を必須にします。この設定は、必要であれば後で変更できます。
    - キャンペーンの場合、ユーザーはこの属性の値を指定する必要があります (このフィールドは空白にはできません)。
    - セルの場合、ユーザーはターゲット・セル・スプレッドシートに値を指定 する必要があります (このセルは空白にはできません)。
    - オファーの場合、管理者は、属性がオファー・テンプレートに追加される ときに値を指定する必要があります。ユーザーがオファーを作成または編 集するときに別の値を指定した場合を除き、そのテンプレートに基づくす べてのオファーで、この指定値が使用されます。

注:オファー・テンプレートに「表示されない静的属性」または「パラメ ーター化された属性」としてオファー属性を追加する場合、その属性が 「必須」として定義されていない場合でも、値が常に必要になります。オ ファー・テンプレートに「静的属性」としてオファー属性を追加する場 合、値が必要であるかどうかは「必須」の設定によって決まります。 f. 「フォーム要素タイプ」リストを使用して、オファーまたはセルの属性フィ ールドに保管されるデータの型を指定します。

**重要:** カスタム属性を追加した後に、そのデータ型を変更することはできません。

- g. 選択内容に応じて、以下のいずれかの値を入力する必要が生じることがあり ます。
  - 「最大文字列長」:「選択ボックス 文字列」または「テキスト・フィー ルド - 文字列」を選択した場合、この属性の値として保管される文字の最 大数を指定する必要があります。
  - 「小数点以下」:「テキスト・フィールド 数値」または「テキスト・フィールド 通貨」を選択した場合、小数点の右側に表示される小数位の桁数を指定する必要があります。

**重要:「テキスト・フィールド - 通貨」**の場合、その地域通貨で通常使用される小数点以下の桁数が通貨の値に反映されます。小数点以下の桁数を通常 使用される数よりも小さい値に指定した場合、通貨の値は切り捨てられま す。

- h. 「**選択ボックス 文字列**」を「フォーム要素タイプ」として選択した場合に は、次のようになります。
  - オプションで、「編集フォーム内からのリスト項目の追加を許可」にチェ ック・マークを付けると、この属性が組み込まれるキャンペーン、オファ ー・テンプレート、またはオファーをユーザーが作成または編集するとき に、使用可能な値のリストに新しい固有値を追加できます。(このオプシ ョンはセルには適用されません。)例えば、オファー・テンプレートの 「選択ボックス」に小、中、大 という値が設定されている場合、オファー の作成時やオファー・テンプレートの編集時に、ユーザーは特大 という値 を追加することができます。

**重要:** ユーザーは、キャンペーン、オファー・テンプレート、またはオフ ァーを一度保存すると、新しいリスト項目を削除できなくなります。値は 元のカスタム属性定義に保存されて、すべてのユーザーが使用できるよう になります。管理者だけが、カスタム属性を変更する方法を使ってリスト から項目を削除できます。

- 「使用可能な値のソース・リスト」は、「選択ボックス」で選択可能な項目のリストです。このリストにデータを設定するには、「新規項目または 選択した項目」フィールドに値を入力して「承認」をクリックします。値を削除するには、それを「使用可能な値のソース・リスト」で選択し、「削除」をクリックします。
- オプションで、「選択ボックス」の「デフォルト値」を指定します。その デフォルト値がキャンペーン、オファー、または TCS で使用されます が、ユーザーがキャンペーン、オファー、またはセルを作成または編集す るときに別の値を指定した場合にはその値が使用されます。
- •「**ソート**順」を指定して、リスト内で値が表示される方法を決定します。
- 5. 「変更の保存」をクリックします。

## カスタム属性の変更方法

カスタム属性を変更するための手順は、キャンペーン、オファー、セルのいずれに ついても同じです。

注: オファーおよびセルのカスタム属性を変更する権限が必要です。詳しくは、 「*Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

- 1. 「設定」>「Campaign 設定」を選択します。
- 「テンプレートとカスタマイズ」セクションで、「カスタム属性の定義」をクリックします。

「カスタム属性の定義」ウィンドウに、標準のオファー属性とすべての作成済み のカスタム属性が表示されます。

- 3. 変更する属性の名前をクリックします。
- 4. 「属性詳細」ウィンドウを使用して以下のように変更します。
  - a. 「**属性表示名**」:作成したカスタム属性の表示名を変更できます。標準のオフ ァー属性の表示名は変更できません。
  - b. 「内部名」:自分で作成したカスタム属性の内部名は変更できますが、既存の フローチャートでその内部名を使用するとエラーになり、その属性を保存す るときに警告を受け取ります。デフォルトのオファー属性の内部名を変更す ることはできません。

**重要:**カスタム属性の内部名は、グローバルに固有の名前でなければなら ず、先頭文字を英字にする必要があります。さらに、スペースを含めること ができず、大/小文字の区別はありません。

- c. オプションで、「説明」を変更します。
- d. 「必須」ボックスは、この属性で値が必要であるかどうかに応じてチェック・マークを付けるか外します。
  - 「必須」を必須でない設定に変更すると、その属性が使用されるときに値 が必要でなくなります。
  - 必須でない設定を「必須」に変更すると、今後この属性が使用されるときには必ず値が必要になります。この変更による既存のオブジェクトへの影響は、それを編集する場合を除いて、ありません。例えば、「編集」モードでキャンペーン、ターゲット・セル・スプレッドシート、またはオファーを開くとき、保存する前に値を指定する必要があります。
- e. 「選択ボックス 文字列」または「テキスト・フィールド 文字列」フィー ルドの場合、「最大文字列長」を変更して、この属性の値として保管する文 字の最大数を指定できます。

**重要:** 既存の属性の長さを小さくすると、既存の値は切り捨てられるので、そのフィールドが突き合わせのために使用される場合には、レスポンス・トラッキングに不具合が生じることがあります。

f. 「テキスト・フィールド - 数値」または「テキスト・フィールド - 通貨」フィールドの場合、「小数点以下」を変更して、小数点の右側に表示される小数位の桁数を指定できます。

重要:この値を小さくすると、ユーザー・インターフェースでの表示は切り捨 てられます。ただし、元の値はデータベースに保持されます。

- g. 属性が「選択ボックス 文字列」の場合、以下を行うことができます。
  - 「編集フォーム内からのリスト項目の追加を許可」を変更して、ユーザー がキャンペーン、オファー、またはオファー・テンプレートを定義すると きに新しい固有値をリストに追加する操作を許可または不許可にできま す。このオプションは、カスタム・セル属性には適用されません。
  - ・ リスト項目の編集: これを「使用可能な値のソース・リスト」で選択し、 それを「新規項目または選択した項目」フィールドで変更してから「承 認」をクリックします。
  - リスト項目の追加: 「新規項目または選択した項目」フィールドで値を入 力し、「承認」をクリックします。
  - リスト項目の削除: それを「使用可能な値のソース・リスト」で選択し、 「削除」をクリックします。
  - 「デフォルト値」を変更します。
  - •「**ソート順**」を変更して、リスト内の項目の順序を決定します。
- 5. 「変更の保存」をクリックします。

## Campaign 内の標準のオファー属性

次の表は、Campaign と共に提供される標準のオファー属性のリストです。

表 18.	標準のオファー属性	

属性表示名	属性内部名	フォーム要素タイプ
平均レスポンス収益	AverageResponseRevenue	テキスト・フィールド - 通貨
チャネル	チャネル	選択ボックス - 文字列
チャネル・タイプ	ChannelType	選択ボックス - 文字列
オファー当たりのコスト	CostPerOffer	テキスト・フィールド - 通貨
クリエイティブ URL	CreativeURL	テキスト・フィールド - スト
		リング
開始日	EffectiveDate	テキスト・フィールド - 日付
終了日	ExpirationDate	テキスト・フィールド - 日付
期間	ExpirationDuration	テキスト・フィールド - 数値
フルフィルメント・コスト	FulfillmentCost	テキスト・フィールド - 通貨
インタラクション・ポイント	UACInteractionPointID	テキスト・フィールド - 数値
ID		
インタラクション・ポイント	UACInteractionPointName	テキスト・フィールド - 文字
		列
オファー固定コスト	OfferFixedCost	テキスト・フィールド - 通貨

# オファー・テンプレートを操作する

各オファーの基礎になるのは、オファー・テンプレートです。そのため、管理者が オファー・テンプレートを作成しておかないと、ユーザーはオファーを作成できま せん。

テンプレート (それに基づくオファーがあるもの) は、限定的に変更できます (基本 的なオプションと属性のデフォルト値を変更できます)。他の項目を変更する場合、 元のオファー・テンプレートを回収して、必要な変更点を反映した新しいオファ ー・テンプレートを作成することにより、置き換える必要があります。

オファー・テンプレートの操作を始める前に、必要になる可能性があるカスタム・ オファー属性を作成する必要があります。例えば、ユーザーがオファーを作成する ときに選択できるように、いくつかの選択項目で構成されるドロップダウン・リス トを作成しておくこともできます。

注: オファー・テンプレートを操作するには、適切な権限が必要です。例えばオファー・テンプレートを追加するには、「オファー・テンプレートの追加」と「オファー・テンプレートの表示」の両方の権限が必要です。詳しくは、3ページの『第 2章 IBM Campaign でのセキュリティーの管理』を参照してください。

## オファー・テンプレートでのドロップダウン・リストの使用

ドロップダウン・リストは選択ボックスとも呼ばれ、ユーザーが 1 つの項目を選択 できる値リストです。ドロップダウン・リストをオファー・テンプレートで (した がってオファーでも)使用できるようにするには、「選択ボックス・文字列」タイ プのカスタム・オファー属性を定義し、それをオファー・テンプレートに追加しま す。そのテンプレートに基づくすべてのオファーには、そのリストが組み込まれま す。

リスト内で選択可能な値は、カスタム属性が作成されるときに指定されます。ま た、値の「ソート順」、「デフォルト値」、この属性の値が必須であるかどうか (「必須」)も指定できます。オプションで「編集フォーム内からのリスト項目の追 加を許可」にチェック・マークを付けると、ユーザーが、オファー・テンプレート を編集するときやテンプレートに基づいてオファーを作成するときに新しい固有値 をリストに追加できるようになります。例えば、「選択ボックス」に小、中、大 と いう値が設定されている場合、どんなユーザーでも特大 という値を追加することが 可能になります。

注: ユーザーは、オファー・テンプレートまたはオファーを一度保存すると、新しいリスト項目を削除できなくなります。値は元のカスタム属性定義に保存されて、 すべてのユーザーが使用できるようになります。管理者のみが、カスタム属性を変 更することによってリストから項目を削除できます。

「必須」設定によって、この属性に値が必要であるかどうかが決まります。「必 須」が選択されている場合、管理者は、属性がオファー・テンプレートに追加され るときに値を指定する必要があります。ユーザーがオファーを作成または編集する ときに別の値を指定した場合を除き、そのテンプレートに基づくすべてのオファー で、この指定値が使用されます。

注:オファー・テンプレートに「表示されない静的属性」または「パラメーター化 された属性」としてオファー属性を追加する場合、その属性が「必須」として定義 されていない場合でも、値が常に必要になります。オファー・テンプレートに「静 的属性」としてオファー属性を追加する場合、値が必要であるかどうかは「**必須**」 の設定によって決まります。

## オファー・テンプレートを作成するには

1. 「設定」>「Campaign 設定」を選択します。

「キャンペーン設定」ページが開き、様々な管理タスクへのリンクが表示され ます。

 「テンプレートとカスタマイズ」セクションで、「オファー・テンプレートの 定義」をクリックします。

「オファー・テンプレートの定義」ウィンドウが開きます。

3. オファー・テンプレートのリストの下部で、「追加...」をクリックします。

新規オファー・テンプレートの「手順 1/3: メタデータ」ウィンドウが開きます。

- 4. オファー・テンプレートのメタデータを次のように入力します。
  - a. 基本オプションとして「テンプレート名」、「セキュリティー・ポリシー」、「説明」、「推奨される使い方」、「テンプレート・アイコン」のデータを入力します。
  - b. このオファー・テンプレートを Interact と共に使用するには、「このテンプ レートから作成したオファーをリアルタイム対話で使用できます」を選択し ます。
  - c. 「オファー・コード形式」、「オファー・コード・ジェネレーター」、「処 理コード形式」、「処理コード・ジェネレーター」では、デフォルトを受け 入れるか、オファー/処理のコード形式とジェネレーターに関するデータを変 更します。

重要:オファー・コード形式ではスペース文字を使用できません。

「**処理コード・ジェネレーター**」フィールドを空白のままにした場合、デフ ォルトの処理コード・ジェネレーターが使用されます。

5. 「次**へ** >>」をクリックします。

新規オファー・テンプレートの「手順 2/3: オファー属性」ウィンドウが開きま す。

必要に応じて、標準およびカスタムの属性をオファー・テンプレートに追加します。矢印ボタン (<< および >>) を使用すると、オファー・テンプレートの属性リストの中に属性を移動したり除去したりでき、含まれる属性の順序と種類(静的、表示されない、パラメーター化)を変更することもできます。

注:フローチャート内でオファーが使用可能になるには、少なくとも 1 つの標 準属性またはカスタム属性を持っている必要があります。

7. 「**次へ** >>」をクリックします。

新規オファー・テンプレートの「手順 3/3: デフォルト値」ウィンドウが開きます。

8. オファー・テンプレートに既に追加した属性に関して、ユーザーがこのテンプ レートを使ってオファーを作成するときに使用されるデフォルト値を提供しま す。オファーの作成時に、ユーザーは静的属性およびパラメーター化された属 性のデフォルト値を変更できますが、表示されない静的属性としてオファー・ テンプレートに入力した値は変更できません。

 ドロップダウン・リストで値が提供されるパラメーター化された属性の場合、 オファー・テンプレートの作成時に、リスト項目をここで追加することもでき ます。ここで追加した新しいリスト項目を除去できますが、既に存在していた リスト項目はどれも除去できません。ここで追加したリスト項目は、オファー のカスタム属性に保存されます。

重要:パラメーター化された属性として「オファー有効期間」属性をテンプレートに追加した場合、「フローチャート実行日」オプションがこの画面に表示されます。デフォルトのオファー有効日を入力する代わりにこのオプションを選択した場合、Campaign はフローチャート全体の実行日ではなく、オファーを使用する処理の実行日を使用します。

10. 「このテンプレートから作成したオファーをリアルタイム対話で使用できます」を選択した場合、「インタラクション・ポイント ID」および「インタラク ション・ポイント名」を入力します。

インタラクション・ポイント ID のデフォルト値として任意の整数を入力で き、インタラクション・ポイント名として任意の文字列を入力できます。実行 時環境では値として正しいデータが自動的に入りますが、設計環境ではデフォ ルト値が必要です。

11. 「完了」をクリックします。

これでオファー・テンプレートが作成されました。オファーの作成でこれを使用で きるようになりました。

## オファー・テンプレートを変更するには

オファー・テンプレートにそのテンプレートに基づくオファーがある場合は、テン プレート内の基本オプションと属性のデフォルト値を変更できます。ただし、オフ ァー・コードやオファー・カスタム属性についてのテンプレート・データは変更で きません。これらを変更するには、元のオファー・テンプレートを回収して、必要 な変更点を反映した新しいオファー・テンプレートを作成することにより、置き換 えます。

- 1. 「設定」>「Campaign 設定」を選択します。
- 「テンプレートとカスタマイズ」で、「オファー・テンプレートの定義」をクリックします。

「オファー・テンプレートの定義」ウィンドウが開きます。

3. 変更対象のオファー・テンプレートの名前をクリックします。

新規オファー・テンプレートの「手順 1/3: メタデータ」ウィンドウが開きます。

オファー・テンプレートがオファーによって現在使用されている場合は、基本オ プションの編集だけが可能です。オファー・テンプレートが使用されていない場 合、オファーと処理のコード・データもまた編集可能です。

4. 「**次へ** >>」をクリックします。

新規オファー・テンプレートの「手順 2/3: オファー属性」ウィンドウが開きま す。

5. 必要に応じて属性の設定を変更します。

注: オファー・テンプレートがオファーによって現在使用されている場合、オファー属性の設定を変更することはできません。テンプレートが使用されていない 場合は、必要に応じてオファー・テンプレートで属性を変更できます。矢印ボタン (<< および >>) を使用すると、オファー・テンプレートの属性リストの中に 属性を移動したり除去したりでき、含まれる属性の順序と種類 (静的、表示され ない、パラメーター化)を変更することもできます。

6. 「次へ >>」をクリックします。

新規オファー・テンプレートの「手順 3/3: デフォルト値」ウィンドウが開きます。

7. オファー・テンプレートの属性のデフォルト値を指定します。

オファーの作成時に、ユーザーは静的属性およびパラメーター化された属性のデ フォルト値を変更できます。しかし、ユーザーは、表示されない静的属性として 入力した値を変更することができません。

**重要:** パラメーター化された属性として「オファー有効期間」属性をテンプレートに追加した場合、「フローチャート実行日」ラジオ・ボックスがこの画面に表示されます。オファー有効日を入力する代わりにこのオプションを選択した場合、Campaign は (フローチャート全体ではなく) オファーを使用する処理の実行日を使用します。

8. 「完了」をクリックします。

# オファー・テンプレートを並べ替えるには

定義した複数のオファー・テンプレートの順序は、新規オファーの作成時にユーザ ーに表示されるテンプレートの順序となります。デフォルトでは、作成された順序 でオファー・テンプレートがリストされます。しかし、ユーザーに表示されるの は、オファー・テンプレートとユーザー役割のセキュリティー・ポリシーで許可さ れた特定のオファー・テンプレートだけです。すべてのオファー・テンプレートが ユーザーに表示されるとは限りません。ただし、表示される項目の順序は、指定し た順序に従います。

1. 「設定」>「Campaign 設定」を選択します。

「キャンペーン設定」ページが開き、様々な管理タスクへのリンクが表示されま す。

「テンプレートとカスタマイズ」セクションで、「オファー・テンプレートの定義」をクリックします。

「オファー・テンプレートの定義」ウィンドウが開きます。

3. オファー・テンプレートのリストの上部または下部で、「並べ替え...」をクリッ クします。

「オファー・テンプレートの並べ替え」ウィンドウが開いて、現在の順序でオフ ァー・テンプレートがリストされます。

- オファー・テンプレートの順序を変更するには、一度に1つのテンプレートを 選んで上または下に移動するアイコンをクリックすると、リスト内でそのテンプ レートの位置が変わります。
- 5. オファー・テンプレートが適切な順序になったら、「変更の保存」をクリックします。

## オファー・テンプレートを回収するには

オファー・テンプレートに基づいてユーザーが新しいオファーを作成できないよう にするには、テンプレートを回収します。回収されるテンプレートに基づいて既に 作成されたオファーは、影響を受けません。

**注:** オファー・テンプレートを回収した後、回収を取り消すことはできません。同 じ特性を持つ新しいオファー・テンプレートを作成する必要があります。

1. 「設定」>「Campaign 設定」を選択します。

「キャンペーン設定」ページが開き、様々な管理タスクへのリンクが表示されま す。

「テンプレートとカスタマイズ」セクションで、「オファー・テンプレートの定義」をクリックします。

「オファー・テンプレートの定義」ウィンドウが開きます。

3. 使用できないようにするオファー・テンプレートの右側で、「回収する」をクリ ックします。

回収を確認するプロンプトが出されます。

4. 「**OK**」をクリックしてオファー・テンプレートを回収するか、「**キャンセル**」 をクリックして操作を停止します。

「OK」をクリックするとオファー・テンプレートが回収され、そのステータスが画面に示されます。

### 「チャネル」属性へのリスト値の追加

Campaign には、オファー・テンプレートで使用するための「**チャネル**」カスタム属 性が組み込まれています。「**チャネル**」属性は、E メールや電話など、オファーの アウトバウンド通信チャネルを示すためのものです。

出荷時の状態では、「**選択ボックス · 文字列**」タイプの「**チャネル**」属性には選択 可能な値が組み込まれていません。「**チャネル**」属性を利用するには、属性を変更 して、ユーザーが選択可能な値を指定する必要があります。

「編集フォーム内からのリスト項目の追加を許可」にチェック・マークを付けることにより、そのフィールドの追加の値をユーザーが入力できるように設定することも可能です。

# テンプレート・アイコン

オファー・テンプレートを作成または変更するときには、基本オプションの1つと してテンプレート・アイコンを選択します。テンプレート・アイコンは、ユーザー が新しいオファーを作成するとき、オファー・テンプレートについての視覚的なヒ ントとなります。

以下の表は、使用可能なテンプレート・アイコンのリストとその外観です。

表 19. オファー・テンプレート・アイコン

アイコン名	アイコン
offertemplate_default.gif	
	TIS
	122
offertemplate_manychans.gif	
	167
	-20
offertemplate_manydates.gif	
	TIS
	- 96
offertemplate_manyresp.gif	
	IST Q
offertemplate_manysegs.gif	
	TISI
	-0.
offertemplate_repeatingtabl.gif	
	115
offertemplate_simpleemail.gif	12
	T Siemail
offertemplate_simplemail.gif	
	TISI C

アイコン名	アイコン
offertemplate_simplephone.gif	
offertemplate_versions.gif	

表19. オファー・テンプレート・アイコン (続き)

## デフォルトのオファー属性

オファー・テンプレートを作成するとき、必要に応じてテンプレート属性を追加で きます。

デフォルトでは、以下の静的属性がすべてのオファー・テンプレートに含まれています。

- 名前
- 説明
- ・ オファー・コード
- 関連製品

これらの静的属性をテンプレートから除去することはできません。

# Marketing Operations の資産を Campaign のオファーで使用する方法

Marketing Operations と Campaign の両方がインストールされていて、Marketing Operations の IBM マーケティング資産管理アドオンの使用を許諾している場合、 Marketing Operations 資産ライブラリーにあるデジタル資産をキャンペーンに組み込むことができます。例えば、Marketing Operations 資産ライブラリーに保存されている製品ロゴをオファーに組み込むことができます。

注: Campaign は、Marketing Operations と統合されている場合も、されていない場合もあります。

資産をオファーに組み込むには、CreativeURL 属性が組み込まれたテンプレートに 基づいてオファーを作成します。「クリエイティブ URL」は、Marketing Operations 内の資産の場所を示すポインターです。 CreativeURL 属性が指す資産が、オファー に組み込まれます。

「**CreativeURL**」属性を使用すると、オファー、オファー・テンプレート、またはキャンペーンの構成時に、Campaign から Marketing Operations ヘシームレスに移動することができます。

例えば、キャンペーンの作成または編集時に、ターゲット・セル・スプレッドシート (TCS)のセルからそのセルに関連したオファーに移動できます。そのオファーか

ら、Marketing Operations 内の関連する資産に移動して、この資産を表示または変更 することができます。キャンペーンですぐに使用できるように、新しい資産をライ ブラリーにアップロードすることもできます。

Marketing Operations と Campaign を統合していないシステムの実行可能なワークフ ローの 1 つを次の例に示します。ご使用のワークフローとは異なる場合がありま す。



# Campaign オファーで Marketing Operations 資産を使用するためのガイドライン

このトピックでは、Campaign オファーで Marketing Operations 資産を使用するため の前提条件と要件をリストします。この機能は、CreativeURL オファー属性に依存 します。

- Marketing Operations と Campaign の両方をインストールする必要があります。 (CreativeURL 属性は、Campaign と共にインストールされます。ただし、 Marketing Operations もインストールされていないと、この機能を使用することは できません。)
- Marketing Operations の IBM マーケティング資産管理アドオンの使用を許諾して いる必要があります。
- Campaign は、Marketing Operations と統合されている場合も、されていない場合 もあります。 UMO-UC の統合が無効でも、ユーザーは資産をオファーに割り当 てることができます。
- CreativeURL は、標準の Campaign オファー属性ですが、必須ではありません。
   オファー・テンプレートは、この属性があってもなくても作成できます。
- CreativeURL 属性がテンプレートに組み込まれている場合は、そのテンプレート に基づく各オファーに Marketing Operations 資産ライブラリーから資産を組み込 まなければなりません。

 オファー・テンプレート、およびそれに基づくオファーには、CreativeURL を 1 つしか組み込むことができません。このため、各オファーには、Marketing Operations からの資産を 1 つしか組み込むことができません。

注: オファーは 1 つの資産としか関連できません。ただし、1 つの資産は複数の オファーと関連できます。

# Campaign オファーで Marketing Operations の資産を使用する ための設定

このトピックでは、Marketing Operations からのデジタル資産を Campaign のオファーに関連させる操作を Campaign ユーザーに許可するために管理者が行う必要がある操作を説明します。

資産は、マーケティング・プログラムで使用することを意図した電子ファイルで す。例えば、ロゴ、ブランド・イメージ、マーケティング調査文書、参照資料、企 業販促用品、文書テンプレートなどがあります。資産を Campaign のオファーに追 加するには、CreativeURL 属性を使用します。CreativeURL 属性は、Campaign と 共にインストールされる標準のオファー属性です。「クリエイティブ URL」は、 Marketing Operations資産ライブラリー内のファイルのポインターです。

表 20. Campaign オファーで Marketing Operations の資産を使用するための設定

作業	詳細	資料
デジタル資産を保持する	通常、この作業は、Marketing Operations 管理者によっ	IBM Marketing Operations 管理者
ためのライブラリーを作	て行われます。	ガイド
成する。		
	IBM Marketing Operations では、「設定」	
	>「Marketing Operations 設定」を選択し、「資産ラ	
	イブラリー定義」をクリックしてライブラリーを追加	
	します。	
資産をライブラリーに追	通常、この作業は、Marketing Operations ユーザーによ	IBM Marketing Operations ユーザ
加する。	って行われます。	ー・ガイド
	IBM Marketing Operations Cは、「採作」>「貨産」を	
	選択します。ライブラリーを開き、特定のフォルダー	
	まで移動して、「資産の追加」アイコンをクリックし	
	ます。資産名、説明などの情報を指定し、「 <b>アップロ</b>	
	ード」を使用してファイルの選択とライブラリーへの	
	アップロードを行います。	

作業	詳細	資料
<b>CreativeURL</b> 属性が組 み込まれたオファー・テ	通常、この作業は、Campaign 管理者によって行われ ます。	Campaign 管理者ガイド:
み込まれたオファー・テ ンプレートを作成する。	ます。 オファー属性とは、オファーを定義するフィールドの ことをいいます。 CreativeURL は、Campaign で提供 される標準の属性です。 CreativeURL 属性をテンプ レートに追加すると、そのテンプレートに基づくすべ てのオファーでその属性を使用できます。 例えば、Marketing Operations と Campaign を統合し ていないシステムでは、「設定」>「Campaign 設定」 を選択し、「オファー・テンプレートの定義」をクリ ックします。「追加」をクリックしてから、プロンプ トに従います。 1. 手順 1/3 で、テンプレートを定義します。 2. 手順 2/3 で、「クリエイティブ URL」 を「選択 した属性」リストに移動します。 3. 手順 3/3 で、「クリエイティブ URL」フィールド の「ライブラリーの参照」をクリックします。資産 ライブラリー内のフォルダーに移動し、このオファ ーで使用する資産を選択します。あるいは資産を作 成する場合には、ライブラリーの名前をクリックし てから「資産の追加」をクリックし、必要な情報を 入力します。「ファイル」フィールドで「アップロ ード」をクリックしてから特定のファイルを参照し ます。アップロードできるのは、ファイル、プレビ ュー・ファイル、およびサムネールです。プロンプ トログ	71 ページの『オファー・テンプレ ートを作成するには』 Marketing Operations と Campaign を統合しているシステムの場合、 「 <i>IBM Marketing Operations およ</i> び <i>Campaign 統合ガイド</i> 」を参照 してください。
	トに従ってアクションを実行してください。 資産の URL が「 <b>クリエイティブ URL</b> 」フィール ドに組み込まれるようになります。 4. オファー・テンプレートを保存します。	
Campaign を使用して、 Marketing Operations か らの資産が組み込まれた オファーを作成します。	Campaign ユーザーは、CreativeURL 属性が組み込ま れたテンプレートに基づいてオファーを作成できる状 態になっています。ユーザーはオファーを定義すると きに、資産ライブラリーに移動して、資産を選択また は作成できます。	Campaign ユーザー・ガイド

表 20. Campaign オファーで Marketing Operations の資産を使用するための設定 (続き)

# 第6章オーディエンス・レベルの管理

Campaign 管理者は、以下のタスクを実行できます。

- 企業のキャンペーンに必要なオーディエンス・レベルの作成。
- Campaign システム・データベース内での、新しいオーディエンス・レベルをサポ ートするデータベース表の作成。
- Campaign システム・データベース内での、新しいオーディエンス・レベルをサポ ートするデータベース表とシステム・テーブルの間のマッピング。
- ユーザー・テーブルをマッピングする際の、オーディエンス・レベルおよび関連 データベース・フィールドの指定。
- 1 つ以上のオーディエンス・レベルに対するグローバル抑制セグメントの作成。

## オーディエンス・レベルについて

オーディエンス・レベルは、キャンペーンのターゲットにできる ID の集合です。

例えば、一連のキャンペーンでは、オーディエンス・レベルとして、「世帯」、 「見込み顧客」、「顧客」、「アカウント」などを使用できます。これらの各レベ ルは、キャンペーンで使用可能なマーケティング・データの特定の視点を表すもの です。

オーディエンス・レベルは、通常は階層として編成されます。上記の例を使用する と、次のようになります。

- 「世帯」は階層の最上位にあり、各世帯には、複数の「顧客」と 1 つ以上の「見 込み顧客」を含めることができます。
- 「顧客」は階層の次の段階にあり、それぞれの顧客は複数のアカウントを持つことができます。
- 「アカウント」は、階層の最下位にあります。

その他、より複雑なオーディエンス階層の例としては、企業間取引の環境がありま す。その場合にはオーディエンス・レベルとして、業種、企業、部署、グループ、 個人、アカウントなどが必要になるかもしれません。

これらのオーディエンス・レベルには、互いに「1 対 1」、「多対 1」、「多対 多」などの異なる関係が存在する場合があります。オーディエンス・レベルを定義 すると、このような概念を Campaign で表すことができるので、ユーザーは、ター ゲティングで利用するためにこれら異なるオーディエンス間の関係を管理できま す。例えば、1 つの世帯に複数の見込み顧客がいる場合には、メール配信を各世帯 につき 1 人の見込み顧客だけに限定することもできます。

オーディエンス・レベルは、一定数のキーまたはデータベース表フィールドから構成され、それらの組み合わせによってそのオーディエンス・レベルのメンバーが一 意的に識別されます。 例えば、オーディエンス・レベル「Custromer」は、「IndivID」フィールドだけで識 別できたり、「HouseholdID」フィールドと「MemberNum」フィールドを組み合わせ て識別できたりするかもしれません。

オーディエンス・レベルについて詳しくは、「*Campaign* ユーザー・ガイド」でオー ディエンス・プロセスに関するセクションを参照してください。

## Campaign で複数の異なるオーディエンス・レベルが必要となる理由

複数の異なるオーディエンス・レベルを使用することにより、フローチャートの設 計担当者は、キャンペーンで使用する識別可能な特定のグループ間でターゲット設 定と切り替えをする操作や、あるオーディエンス・レベルを別のオーディエンス・ レベルによって範囲設定する操作(世帯別に1人の個人をターゲット設定するなど) を行えるようになります。

例えば、複数のオーディエンス・レベルを使用すると、開発者は以下を行うことが できます。

- 世帯ごとに、勘定残高が最も多い顧客を選択する。
- 特定の顧客群に属する、残高がマイナスのアカウントをすべて選択する。
- 少なくとも1人の個人が当座勘定を持つ世帯をすべて選択する。

オーディエンス・レベルについて詳しくは、「*Campaign* ユーザー・ガイド」でオー ディエンス・プロセスに関するセクションを参照してください。

# デフォルトの「Customer」オーディエンス・レベル

Campaign の出荷時には、「Customer」という名前のオーディエンス・レベルだけが 設定されています。ユーザー・テーブルおよびキャンペーンの必要に合わせて、追 加のオーディエンス・レベルを定義できます。

デフォルトでは、Campaign システム・データベースには、「Customer」オーディエ ンス・レベルをサポートするために必要なテーブルが含まれています。 Campaign をインストールした後、これらのテーブルをマップする必要があります。

# 追加のオーディエンス・レベルの作成

追加のオーディエンス・レベルが必要な場合、デフォルトの「Customer」オーディ エンス・レベルに対して行ったように、追加オーディエンス・レベルをサポートす るための同等のシステム・テーブルのセットを作成してマップする必要がありま す。

各オーディエンス・レベルは、ユーザー・テーブルをマップする前に定義する必要 があります。これは、ユーザー・テーブルのマッピング・プロセス中にオーディエ ンス・レベルを指定できるようにするためです。特定のオーディエンス・レベルで マップされたベース・テーブルを照会すると、そのオーディエンス・レベルの ID が返されます。

## オーディエンス・レベルおよびシステム・テーブルについて

作成するオーディエンス・レベルごとに、関連する以下のシステム・テーブルが必要になります。

- コンタクト履歴テーブル
- 詳細コンタクト履歴テーブル
- レスポンス履歴テーブル
- セグメント・メンバーシップ・テーブル

これらのシステム・テーブルの項目は、オーディエンス・レベルを作成するときに 自動的に作成されます。その後、以下を行う必要があります。

- Campaign システム・テーブル・データベース内に物理データベース表を作成する。
- これらのシステム・テーブルをデータベース表にマップする。

注: 戦略的セグメントを Campaign フローチャートまたは Contact Optimization の Optimize セッションと共に使用する場合にのみ、セグメント・メンバーシッ プ・テーブルをマップすることを IBM はお勧めします。

# デフォルトの「Customer」オーディエンス・レベルのシステム・ テーブル

Campaign では、デフォルトの「Customer」オーディエンス・レベルをサポートする テーブルを作成するための、システム・テーブル ddl スクリプトが提供されていま す。

Campaign をインストールした後、以下の方法で、これらのシステム・テーブルを、 Campaign システム・データベース内のテーブルにマップする必要があります。

表 21. デフォルトのオーディエンス・レベルのシステム・テーブル

IBM Campaign システム・テーブル	データベース表名
顧客コンタクト履歴	UA_ContactHistory
顧客レスポンス履歴	UA_ResponseHistory
顧客詳細コンタクト履歴テーブル	UA_DtlContactHist
顧客セグメント・メンバーシップ	UA_SegMembership

これらのテーブルが上記のリストと同様にマップされている場合、Campaign で提供 されるサンプル・レポートを処理するときの変更箇所は、最小限に抑えられます。

これらのテーブルおよび関連した索引の作成に使用される SQL ステートメント は、他のオーディエンス・レベルのテーブルを作成するためのテンプレートとして 使用できます。

## オーディエンス・レベルおよび戦略的セグメントについて

戦略的セグメントを使用するフローチャートまたは Optimize セッションに含まれる オーディエンスごとに、セグメント・メンバーシップ・システム・テーブルを、セ グメント・メンバーを定義する物理テーブルにマップします。 例えば、戦略的セグメントが含まれる最適化セッションでデフォルトの 「Customer」オーディエンスを使用する場合、オーディエンス・システム・テーブ ル「Customer セグメント・メンバーシップ」を UA\_SegMembership セグメント・デ ータベース表にマップする必要があります。データベース表には、「セグメント 化」プロセスを使用してデータを追加します。

**注:** IBM では、戦略的セグメントを使用するフローチャートか Optimize セッショ ンでオーディエンスを使用する計画の場合のみ、オーディエンスのセグメント・メ ンバーシップ・テーブルをマップすることが勧められています。

Campaign フローチャートまたは Contact Optimization セッションでの戦略的セグメ ントの使用はオプションです。セグメント・メンバーシップ・テーブルをマップす る場合、フローチャートまたは Optimize セッションを実行するたびに、Campaign または Contact Optimization はテーブルを更新します。戦略的セグメントを使用し ていない場合、これは処理上の不要なオーバーヘッドとなります。

## オーディエンス・レベルのユニーク ID

新しいオーディエンス・レベルを作成するとき、そのオーディエンス・レベルのメ ンバーのユニーク ID として使用するために、少なくとも 1 つのフィールドを指定 する必要があります。オーディエンスの各メンバーを一意的に識別するために、複 数のフィールドを使用しなければならないこともあります。

以下に例を示します。

- 「世帯」は、フィールド「HHold ID」で識別できるとする。
- 「顧客」は、フィールド「HHold ID」と「MemberNum」で識別できるとする。
- 「見込み顧客」は、フィールド「Prospect ID」で識別できるとする。
- ・「アカウント」は、フィールド「Acct ID」で識別できるとする。

新しいオーディエンス・レベルのフィールド名 (特にユニーク ID のフィールド名) は、マッピングに支障がないように、データベース表のフィールド名と厳密に一致 する必要があります。このようにすると、Campaign の機能により、オーディエン ス・レベル作成時に、データベース・フィールドは該当するシステム・テーブル・ フィールドに自動的に対応するようになります。

注: オーディエンス・レベル・フィールド名には、文字に関する特定の制限があり ます。詳しくは、387ページの『付録 B. Campaign オブジェクト名での特殊文字』 を参照してください。

#### オーディエンス・レベルに固有のテーブルの必須フィールド

このセクションでは、各オーディエンス・レベルで必要なシステム・テーブルの必 須フィールドのリストを示します。

- 85ページの『コンタクト履歴テーブルの必須フィールド』
- 85ページの『詳細コンタクト履歴テーブルの必須フィールド』
- 85ページの『レスポンス履歴テーブルの必須フィールド』
- 86ページの『セグメント・メンバーシップ・テーブルの必須フィールド』

#### コンタクト履歴テーブルの必須フィールド

Campaign システム・データベース内の各オーディエンス・レベルのコンタクト履歴 テーブルには、少なくともこのセクションで説明するフィールドが含まれている必 要があります。

表 22. コンタクト履歴テーブルの必須フィールド

キー	列名	データ型	長さ	NULL の許可
はい	オーディエンス・レベル	数値またはテキ		いいえ
	の ID	スト		
はい	CellID	bigint	8	いいえ
はい	PackageID	bigint	8	いいえ
いいえ	ContactDateTime	datetime	8	はい
いいえ	UpdateDateTime	datetime	8	はい
いいえ	ContactStatusID	bigint	8	はい
いいえ	DateID	bigint	8	はい
いいえ	TimeID	bigint	8	はい

注: Campaign の出荷時には、「Customer」オーディエンス・レベルの UA\_ContactHistory テーブルに追加のフィールド (ValueBefore および UsageBefore) が設定済みであるため、サンプル・レポートがサポートされます。必 要に応じて、独自の「追加トラッキング・フィールド」をコンタクト履歴レポート およびカスタマイズ・レポート用に定義できます。

## 詳細コンタクト履歴テーブルの必須フィールド

Campaign システム・データベース内の各オーディエンス・レベルの詳細コンタクト 履歴テーブルには、少なくともこのセクションで説明するフィールドが含まれてい る必要があります。

キー	列名	データ型	長さ	NULL の許可
はい	オーディエンス・レベル	数値またはテキ		いいえ
	の ID	スト		
いいえ	TreatmentInstID	bigint	8	いいえ
いいえ	ContactStatusID	bigint	8	はい
いいえ	ContactDateTime	datetime	8	はい
いいえ	UpdateDateTime	datetime	8	はい
いいえ	DateID	bigint	8	いいえ
いいえ	TimeID	bigint	8	いいえ

表 23. 詳細コンタクト履歴テーブルの必須フィールド

## レスポンス履歴テーブルの必須フィールド

Campaign システム・データベース内の各オーディエンス・レベルのレスポンス履歴 テーブルには、少なくともこのセクションで説明するフィールドが含まれている必 要があります。

キー	列名	データ型	長さ	NULL の許可
はい	オーディエンス・レベル	数値またはテキ		いいえ
	の ID	スト		
はい	TreatmentInstID	bigint	8	いいえ
はい	ResponsePackID	bigint	8	いいえ
いいえ	ResponseDateTime	datetime	8	いいえ
いいえ	WithinDateRangeFlg	int	4	はい
いいえ	OrigContactedFlg	int	4	はい
いいえ	BestAttrib	int	4	はい
いいえ	FractionalAttrib	float	8	はい
いいえ	CustomAttrib	float	8	はい
いいえ	ResponseTypeID	bigint	8	はい
いいえ	DateID	bigint	8	はい
いいえ	TimeID	bigint	8	はい
いいえ	DirectResponse	int	4	はい

表24. レスポンス履歴テーブルの必須フィールド

新しいオーディエンス・レベル用に作成する各レスポンス履歴テーブルでは、 UA\_Treatment テーブルの「TreatmentInstID」フィールドに対する外部キー制約を 設定する必要があります。

### セグメント・メンバーシップ・テーブルの必須フィールド

Campaign または Contact Optimization で戦略的セグメントを使用する場合、戦略的 セグメントで使用するオーディエンス・レベルごとにセグメント・メンバーシッ プ・テーブルを作成する必要があります。そのテーブルには、少なくともこのセク ションで説明するフィールドが含まれている必要があります。

表 25. セグメント・メンバーシップ・テーブルの必須フィールド

キー	列名	データ型	長さ	NULL の許可
はい	SegmentID	bigint	8	いいえ
はい	オーディエンス・レベル	数値またはテキ		いいえ
	の ID	スト		

# オーディエンス・レベルおよびユーザー・テーブルについて

このセクションには、以下の情報が記載されています。

- 『単一のオーディエンス・レベルを指定したユーザー・テーブル』
- 87 ページの『複数のオーディエンス・レベルを指定したユーザー・テーブル』

# 単一のオーディエンス・レベルを指定したユーザー・テーブル

ユーザー・テーブルをマップするとき、少なくとも 1 つのオーディエンス・レベル をそのテーブルのプライマリー・オーディエンスとして指定する必要があります。

オーディエンス・レベルの作成時に指定したフィールドは、このステップの際に、 Campaign によってユーザー・テーブル内の同じ名前の ID フィールドに関連付けら れます。これを指定することにより、デフォルト状態では、Campaign がこのユーザ ー・テーブルから選択を行うときに、プライマリー・オーディエンス・レベルから ID が返されます。

例えば、「アカウント」という名前のオーディエンス・レベルとそのフィールド 「Acct\_ID」を作成し、ユーザー・テーブル「アカウント」をマップするときにこの オーディエンス・レベルをプライマリー・オーディエンスとして選択すると、 「Acct\_ID」オーディエンス・レベル・フィールドが、「アカウント」データベース 表のユニーク ID (1 次キー) であるユーザー・テーブル・フィールドに関連付けら れます。

## 複数のオーディエンス・レベルを指定したユーザー・テーブル

ユーザー・テーブルは複数のオーディエンス・レベルに関連付けることができま す。その中の1つのオーディエンス・レベルはプライマリー・オーディエンス・レ ベルとして指定し、その他のオーディエンス・レベルは代替オーディエンス・レベ ルとして指定します。

注: あるオーディエンス・レベルから別のオーディエンス・レベルに切り替える操作や、あるオーディエンス・レベルを別のオーディエンス・レベルによって範囲設定する操作をフローチャート設計担当者が行えるようにするには、必要なすべてのオーディエンス・レベルを指定したユーザー・テーブルを少なくとも1つ定義する必要があります。このテーブルを使用すると、Campaign は必要に応じて1つのオーディエンス・レベルを別のオーディエンス・レベルに「変換」することができます。

例えば、顧客アカウントに関するデータを格納するユーザー・テーブルに以下の列 が含まれるとします。

- Acct\_ID
- Indiv ID
- HHold ID

このテーブルで、「Acct\_ID」はレコードごとに固有のものにできます。個人が複数 のアカウントを持つことが可能であり、世帯に複数の個人を含めることができるの で、「Indiv\_ID」フィールドの値と「HHold\_ID」フィールドの値は、レコードごと に固有であるとは限りません。

「アカウント」、「顧客」、「世帯」の3つのオーディエンス・レベルがあると想定すると、このユーザー・テーブルをマップするとき、これら3つのオーディエンス・レベルすべてを指定して、対応する上記のユーザー・テーブル・フィールドに関連付けることができます。これにより、フローチャート設計担当者は、このテーブルを使用するときに、対象オーディエンスを切り替える操作や、あるオーディエンス・レベルを別のオーディエンス・レベルによって範囲設定する操作(顧客別のアカウント、世帯別の顧客、世帯別のアカウントなど)を行えるようになります。

# オーディエンス・レベルの作業

このセクションには、以下の情報が記載されています。

- 『新しいオーディエンス・レベルをセットアップするためのワークフロー』
- 91ページの『オーディエンス・レベルの削除』

# 新しいオーディエンス・レベルをセットアップするためのワークフ ロー

以下のステップでは、新しいオーディエンス・レベルをセットアップするためのワ ークフローを説明します。特定の手順については、それぞれのタスクを参照してく ださい。

- 『タスク 1: 新しい各オーディエンス・レベルの必須データベース表の作成』
- 89 ページの『タスク 2: Campaign での新しいオーディエンス・レベルの作成』
- 90 ページの『タスク 3: IBM Campaign システム・テーブルからデータベース表 へのマップ』
- 91ページの『タスク 4: 関連データを含んだユーザー・テーブルから適切なオー ディエンス・レベルへのマップ』
- 91 ページの『タスク 5: マップされたテーブルをテーブル・カタログに保存する 作業』

## タスク 1: 新しい各オーディエンス・レベルの必須データベース表の 作成

作成する新しい各オーディエンス・レベルをサポートするために、 Campaign シス テム・データベース内に物理データベース表を作成する必要があります。オーディ エンス・レベルごとに必要なテーブルは以下のとおりです。

- コンタクト履歴テーブル
- 詳細コンタクト履歴テーブル
- レスポンス履歴テーブル
- セグメント・メンバーシップ・テーブル

必要なそれぞれのテーブルには必須フィールド・セットがあります。オーディエン ス・テーブルには追加のカスタム・フィールドを作成できます。

注: 作成するテーブルには、索引を作成する必要があります。例えば、新しい「個人」オーディエンス・レベル用に INDIV\_ContactHistory テーブルを作成する場合、次のようにして索引を作成できます: CREATE INDEX XIE1INDIV\_ContactHistory ON INDIV\_ContactHistory (IndivID)。

他のオーディエンス・レベル用のテーブルを作成するために、 Campaign のデフォ ルトのオーディエンス・レベル・テーブルと関連した索引の作成に使用した SQL ステートメントを、テンプレートとして使用できます。例えば、UA\_ContactHistory を Acct\_ContactHistory (オーディエンス・レベル「アカウント」用)のテンプレー トとして使用できます。使用可能な SQL ステートメントを調べるに は、/Campaign/ddl ディレクトリーでデータベース管理システムのシステム・テー ブルを作成するスクリプトを探してください。 注: 基礎となる同一の物理データベース表(必要なすべてのオーディエンス・レベル で使用するための十分なオーディエンス・フィールドを含むもの)に新しいオーデ ィエンス・レベルのシステム・テーブルを複数マップすることもできますし、オー ディエンス・レベルごとに別個のデータベース表を作成することもできるなど、柔 軟な設定が可能です。 IBM コンサルティングまたは実装パートナーは、ご使用の 環境でコンタクト履歴テーブルとレスポンス履歴テーブルを実装する最善の方法を 決定する上で支援をすることができます。

#### タスク 2: Campaign での新しいオーディエンス・レベルの作成

1. 「設定」>「Campaign 設定」を選択します。

「Campaign 設定」ページが表示されます。

Campaign 設定」ページの「データ・ソース操作」で、「オーディエンス・レベルの管理」をクリックします。

「オーディエンス・レベル」ウィンドウが開いて、既存のオーディエンス・レベ ルが表示されます。

3. 「新規作成」をクリックします。

「新規オーディエンス・レベルの作成」ウィンドウが開きます。

4. 「**オーディエンス・レベル名**」に、そのオーディエンス・レベルにおける ID グ ループを反映する固有の名前を入力します。

オーディエンス・レベルの名前には、文字に関する特定の制限がありません。

5. 「フィールド・リスト」で、オーディエンス・レベルの各メンバーを一意的に識 別するために使用される各フィールドに名前を入力し、そのタイプ (数値または テキスト)を選択します。

注: オーディエンス・レベル・フィールド名には、文字に関する特定の制限が あります。

このオーディエンス・レベルのデータベース表内のフィールド名と完全に等しい 名前を指定する必要があります。 Campaign がフィールド名に関する完全一致を 検出した場合のみ、90ページの『タスク 3: IBM Campaign システム・テーブル からデータベース表へのマップ』でフィールドをマップできます。

例えば、新しいオーディエンス・レベル「世帯」を作成するとき、1 つのフィー ルドを「HouseholdID」という名前の固有のオーディエンス・レベル ID に指定 する場合は、各オーディエンス・レベル固有のデータベース表の ID フィールド がこれと厳密に一致する (つまりそのフィールドの名前も「HouseholdID」にす る) 必要があります。

6. 「**OK**」をクリックします。

「オーディエンス・レベル」ウィンドウで、新しいオーディエンス・レベルを選択 すると、必要なテーブルが「マップされていません」と示されてリストされます。 マッピングは、90ページの『タスク 3: IBM Campaign システム・テーブルからデ ータベース表へのマップ』で実行します。

## タスク 3: IBM Campaign システム・テーブルからデータベース表 へのマップ

新しい各オーディエンス・レベルの物理データベース表と各オーディエンス・レベ ルとを Campaign に作成した後、IBM Campaign システム・テーブルをそれらのデ ータベース表にマップする必要があります。

ユーザー・テーブルから作成済みオーディエンス・レベルへのマッピングは、IBM Campaign システム・テーブルからデータベース表へのマッピングを行わなくても実行できますが、コンタクト履歴テーブル、詳細コンタクト履歴テーブル、およびレスポンス履歴テーブルをマップしなければ、コンタクト履歴やレスポンス履歴をロ グに記録することはできません。

IBM では、戦略的セグメントが含まれる Campaign フローチャートまたは Contact Optimization セッションで使用されるオーディエンスに対してのみ、セグメント・メ ンバーシップ・システム・テーブルを物理データベース表にマップすることをお勧 めします。 Campaign および Contact Optimization での戦略的セグメントの使用は オプションです。

1. 「設定」>「Campaign 設定」を選択します。

「Campaign 設定」ページが表示されます。

Campaign 設定」ページの「データ・ソース操作」で、「オーディエンス・レベルの管理」をクリックします。

「オーディエンス・レベル」ウィンドウが開いて、既存のオーディエンス・レベ ルが表示されます。

- 3. データベース表をマップするオーディエンス・レベルを選択して、「履歴テーブ ル」をクリックします。
- 4. 「テーブル・マッピング」ウィンドウで各 IBM Campaign システム・テーブル を選択し、「**テーブル・マッピング**」をクリックします。
- 「テーブル・マッピング」ウィンドウで、そのオーディエンス・レベルの IBM Campaign システム・テーブルに対応するデータベース表を選択します。「ソー ス・テーブル・フィールド」リストに、選択したデータベース表のフィールドの データが追加されます。「必須フィールド」リストに、「選択済みフィールド」 (ソース・データベース表のフィールド)と、対応する「必須フィールド」(IBM Campaign システム・テーブルのフィールド)のデータが追加されます。

**重要:**フィールドをマップできるのは、Campaign がフィールド名の完全一致を 検出した場合のみです。

- 6. 「次へ」をクリックして、データベース表内のカスタム・フィールドのマッピン グを指定します。
- 7. 「次へ」をクリックして、カスタム・フィールドの表示名を指定します。このオ プションは、すべてのテーブルで使用可能であるとは限りません。
- 8. 「完了」をクリックしてマッピングを完了します。オーディエンス・レベルで必要な IBM Campaign システム・テーブルごとに、この手順を繰り返します。

**注:**「Campaign 設定」ページの「テーブル・マッピングの管理」リンクから も、このタスクを実行できます。

## タスク 4: 関連データを含んだユーザー・テーブルから適切なオーデ ィエンス・レベルへのマップ

ユーザー・テーブルをマップするとき、1 つのプライマリー・オーディエンス・レベルを指定する必要があります。また、1 つ以上の代替オーディエンス・レベルを 指定することもできます。

オーディエンス・レベルごとに、そのオーディエンス・レベルのエンティティーを 示す ID が含まれるユーザー・テーブルにマップします。

## タスク 5: マップされたテーブルをテーブル・カタログに保存する作 業

(オプション)。マップされたテーブルをテーブル・カタログに保存して、個別のテーブルを再マップしなくてもカタログを再ロードできるようにします。

## オーディエンス・レベルの削除

重要: Campaign 内で使用されたオーディエンス・レベルは削除しないでください。 以下に示すように、重大なシステム問題の原因となるためです。

オーディエンス・レベルを削除すると、システム・テーブルが削除されますが、基 礎となるデータベース表は残ります。

そのため、オーディエンス・レベルを削除すると、そのオーディエンス・レベルに 依存する (つまりそのオーディエンス・レベルのテーブルに書き込もうとする) プロ セスおよびフローチャートではエラーが発生します。

重要: IBM では、オーディエンス・レベルを削除する前に、Campaign システム全体をバックアップして、削除後に問題が発生した場合に現在のシステム状態をリカバリーできるようにすることが勧められています。

削除されたオーディエンス・レベルの復元は、同じ名前の「新しい」オーディエン ス・レベルを同じ必須フィールドを持つテーブルと共に作成し、オーディエンス・ レベルのテーブルを再マップすることによって可能です。

#### オーディエンス・レベルを削除する方法

1. 「設定」>「Campaign 設定」を選択します。

「Campaign 設定」ページが表示されます。

2. 「データ・ソース操作」で、「オーディエンス・レベルの管理」をクリックしま す。

「オーディエンス・レベル」ウィンドウが開いて、既に定義されたオーディエン ス・レベルが表示されます。

- 3. 削除するオーディエンス・レベルを選択します。
- 4. 「削除」をクリックします。

削除の確認を求められます。

5. 「OK」をクリックします。

## グローバル抑制およびグローバル抑制セグメントについて

注: グローバル抑制セグメントの指定および管理には、Campaign 内でのグローバル 抑制の管理権限が必要です。

グローバル抑制機能を使用して、Campaign でフローチャート内のすべてのセルから 自動的に除外される ID のリスト (オーディエンス・レベル別)を指定します。

これを行うには、このユニーク ID のリストを戦略的セグメントとして作成してから、そのセグメントを特定のオーディエンス・レベルのグローバル抑制セグメントとして指定します。オーディエンス・レベルごとに 1 つのグローバル抑制セグメントしか構成できません。

あるオーディエンス・レベルに対してグローバル抑制セグメントを構成した場合、 そのオーディエンス・レベルに関連付けられた最上位の「選択」、「抽出」、また は「オーディエンス」のいずれかのプロセスを実行すると、グローバル抑制セグメ ントの ID が出力結果から自動的に除外されます(特定のフローチャートにおいて グローバル抑制が明示的に無効になっている場合を除く)。デフォルトでは、各フロ ーチャートでグローバル抑制が有効になっているため、構成したグローバル抑制を 適用するために操作を行う必要はありません。

グローバル抑制を無効にする方法について詳しくは、「Campaign ユーザー・ガイ ド」を参照してください。

デフォルトではグローバル抑制が有効になりますが、グローバル戦略的セグメント そのものを作成した「セグメント化」プロセスが含まれるフローチャートの場合 は、例外となります。この場合、グローバル抑制は常に無効になります (グローバ ル抑制セグメントが作成されたオーディエンス・レベルについてのみ)。

## グローバル抑制が設定されたオーディエンスの切り替え

フローチャート内でオーディエンス 1 からオーディエンス 2 に切り替える場合、 これらのオーディエンス・レベルごとに 1 つのグローバル抑制が定義されていると きは、オーディエンス 1 のグローバル抑制セグメントが入力テーブルに適用され、 オーディエンス 2 のグローバル抑制セグメントが出力テーブルに適用されます。

## グローバル抑制セグメントの作成について

グローバル抑制セグメントを作成するには、以下のタスクを実行します。

- 『フローチャート内にグローバル抑制セグメントを作成する方法』
- 93ページの『セグメントをグローバル抑制セグメントとして指定する方法』

#### フローチャート内にグローバル抑制セグメントを作成する方法

**重要:** グローバル抑制セグメントを作成または更新するときのベスト・プラクティ スは、操作対象と同じオーディエンス・レベルのフローチャートが実行されていな い (つまりセグメントが使用される可能性がない) ときにその操作を行うことです。 グローバル抑制セグメントがフローチャートによって使用されているときにそれら のセグメントを作成または更新すると、抑制リストの整合性は保証されません。

- 1. 通常の方法でフローチャート内に戦略的セグメントを作成し、リストから選択す る際に容易に識別できるような名前を付けます。戦略的セグメントの作成方法に ついて詳しくは、「*Campaign* ユーザーズ・ガイド」を参照してください。
- 2. セグメント化プロセス構成ダイアログの「セグメントの定義」タブで、「編集 …」をクリックします。
- 3. 「セグメントの編集」ウィンドウの「一**時テーブルのデータ・ソース**」フィール ドで、1 つ以上のデータ・ソースを選択します。

グローバル戦略的セグメントが通常使用されるすべてのデータ・ソースを指定す る必要があります。戦略的セグメントがデータ・ソース内で持続しない場合、バ イナリー・ファイルを使用して Campaign サーバーで抑止が行われます。「セグ メント化」プロセスで戦略的セグメントを作成することやセグメントを指定デー タ・ソースに書き込むことができない場合、そのセグメントは構成解除されるか または実行時に失敗します。

ー時テーブルのデータ・ソースに対する変更は、フローチャートの保存時や実行 時ではなく、プロセス構成を保存するときに行われます。

4. **「OK」**をクリックします。

「セグメントの定義」タブで、選択したデータ・ソースが現在のセグメントの「一時テーブル DS」列に表示されます。

#### セグメントをグローバル抑制セグメントとして指定する方法

1. グローバル抑制セグメントとして使用するセグメントを作成した後に、Campaign で「設定」>「キャンペーン設定」を選択します。

「Campaign 設定」ページが表示されます。

- 2. 「キャンペーン設定」ページで、「オーディエンス・レベルの管理」をクリック します。
- 3. 「オーディエンス・レベル」ウィンドウで、グローバル抑制セグメントを指定す るオーディエンス・レベルを選択します。
- 4. 「**グローバル抑制…**」をクリックします。

「グローバル抑制セグメント」ウィンドウで、現在のオーディエンス・レベルと 一致するセグメントのリストがドロップダウン・リストに表示されます。

- 5. 現在のオーディエンス・レベルのグローバル抑制セグメントとして使用するセグ メントを選択してから、「OK」をクリックします。
- 6. 「**閉じる**」をクリックします。

選択した戦略的セグメントが、そのオーディエンス・レベルのグローバル抑制セグ メントとして指定されます。

グローバル抑制セグメントが定義されると、Marketing Platform の「構成」ページ で、次のパスのオーディエンス・レベル・プロパティーに表示されます。

[partition] > [partition[n]] > [audienceLevels] > [audienceLevelN]
> [globalSuppressionSegmentID]

# グローバル抑制セグメントの更新

グローバル抑制セグメントは、戦略的セグメントを更新するときと同じ方法で更新 します。戦略的セグメントを編集する方法について詳しくは、「*Campaign* ユーザー ズ・ガイド」を参照してください。

**重要:** グローバル抑制セグメントを作成または更新するときのベスト・プラクティ スは、操作対象と同じオーディエンス・レベルのフローチャートが実行されていな い (つまりセグメントが使用される可能性がない) ときにその操作を行うことです。 グローバル抑制セグメントがフローチャートによって使用されているときにそれら のセグメントを作成または更新すると、抑制リストの整合性は保証されません。

## グローバル抑制セグメントの削除

グローバル抑制セグメントは、戦略的セグメントを削除するときと同じ方法で削除 します。戦略的セグメントを削除する方法について詳しくは、「*Campaign* ユーザー ズ・ガイド」を参照してください。

グローバル抑制セグメントを作成したフローチャートが削除されると、そのセグメ ントも削除されます。

# グローバル抑制のためのロギング

グローバル抑制に関する以下の情報がフローチャート・ログに含まれます。

- ・ 適用対象となるプロセスのグローバル抑制セグメント名 (およびパス)
- 抑制の前の ID 数
- 抑制の後の ID 数

# 第7章 コンタクト履歴の管理

コンタクト履歴の作業を開始する前に、オーディエンス・レベルの管理に関するト ピックをすべて読み、必要なオーディエンス・レベルをセットアップする必要があ ります。

コンタクト履歴は、オーディエンス・レベルごとに別個のテーブルで Campaign シ ステム・データベースに保管されます。そのため、コンタクト履歴の作業を行う前 にオーディエンス・レベルをセットアップする必要があります。

さらに、コンタクト履歴に関する基本概念、およびコンタクト履歴を記録するフロ ーチャートのセットアップ方法に関する情報が、「*Campaign* ユーザーズ・ガイド」 に説明されています。

# コンタクト履歴の概念

このセクションには、以下の情報が記載されています。

- 『コンタクト履歴とは』
- 96ページの『詳細コンタクト履歴とは』
- 96ページの『コンタクト・ステータスとは』
- 97ページの『コンタクト・ステータスの更新について』
- 97 ページの『コンタクト履歴とオーディエンス・レベルとの関係』
- 97ページの『コンタクト履歴とデータベース・テーブルおよびシステム・テーブ ルとの関係』
- 97ページの『オファー履歴とは』
- 98 ページの『処理履歴とは』

## コンタクト履歴とは

コンタクト履歴は、ダイレクト・マーケティング活動またはコミュニケーションの 履歴レコードで、コンタクトの対象、日時、メッセージまたはオファーの内容、使 用したチャネルについての詳細情報が含まれます。

通常、コンタクト履歴には、キャンペーンによってコンタクトを受けるターゲット に加えて、ターゲット・グループとの比較目的で測定される、コミュニケーション を受け取らない検証制御も含まれます。

Campaign のコンタクト履歴には、各 ID に提供される厳密なバージョン・オファー のレコードが含まれます。これにはパーソナライズされたオファー属性の値が含ま れ、マーケティング・コミュニケーションの完全な履歴ビューが提供されます。

例えば、キャンペーンによってターゲットの顧客リストが生成される場合がありま す。このリストは、「コール・リスト」プロセスまたは「メール・リスト」プロセ スから出力されます。その顧客リストは、サンプルの「Customer」オーディエン ス・レベルのコンタクト履歴テーブルである、Campaign システム・データベース内 の UA ContactHistory に書き込まれます。 コンタクト履歴は、Campaign システム・データベースに記録されて保管されます。 作成するオーディエンス・レベルごとに、ベース・コンタクト履歴システム・テー ブルのための別個のエントリーがあります。同じセルに含まれるすべてのオーディ エンス・エンティティーが厳密に同じオファーを受け取る場合、ベース・コンタク ト履歴には、マーケティング・キャンペーンで使用されるそれぞれのターゲット・ セルと制御セルの中のオーディエンス・メンバーシップが格納されます。ベース・ コンタクト履歴テーブルのデータは UA\_Treatment システム・テーブルと連携して 使用され、誰がどのオファーを受け取るかが厳密に決定されます。

注: ユーザーが「コール・リスト」プロセスまたは「メール・リスト」プロセスで のコンタクト履歴ロギングをオフにした場合、そのプロセスで作成されるコンタク ト履歴はデータベースに書き込まれません。

コンタクト履歴は、実稼働実行の場合にのみデータベースに書き込まれ、テスト実 行の際には書き込まれません。

#### 詳細コンタクト履歴とは

詳細コンタクト履歴にデータが追加されるのは、オファーのデータ駆動型パーソナ ライズが使用される(複数の個人が同じセルに含まれる場合に、受け取るオファ ー・バージョンが個人によって異なる、つまりパーソナライズされたオファー属性 ごとに異なる値のオファーを受け取る)場合のみです。これらの詳細は、オーディ エンス・レベルごとに詳細コンタクト履歴テーブル(UA\_DtlContactHist など)に書 き込まれます。

作成するオーディエンス・レベルごとに、詳細コンタクト履歴システム・テーブル のための別個のエントリーがあります。詳細コンタクト履歴には、各オーディエン ス・エンティティーが受け取った厳密な処理が格納されます。

詳細コンタクト履歴は、オーディエンス ID とオファー・バージョンの対ごとに 1 行を記録します。例えば、ある個人が 3 つの異なるオファー・バージョンを受け取 る場合、その個人の詳細コンタクト履歴には 3 行が書き込まれ、UA\_Treatment テ ーブルには 3 つの処理が示されます。

注: ユーザーが「コール・リスト」プロセスまたは「メール・リスト」プロセスで のコンタクト履歴ロギングをオフにした場合、そのプロセスで作成される詳細コン タクト履歴はデータベースに書き込まれません。

詳細コンタクト履歴は、実稼働実行の場合にのみデータベースに書き込まれ、テス ト実行の際には書き込まれません。

## コンタクト・ステータスとは

コンタクト・ステータスは、作成されるコンタクトのタイプの指標です。

Campaign ユーザーは、「コール・リスト」プロセスまたは「メール・リスト」プロ セスを構成するときに、使用するコンタクト・ステータスを指定します。

注:制御セルは、Defaults 列に値が 2 のコンタクト・ステータスを自動的に受け取ります。デフォルトでは、その行の名前は「コンタクト」になります。

Campaign では、デフォルトのコンタクト・ステータス・コードのセットが提供され ています。管理者は、追加のステータス・コードを追加できます。

# コンタクト・ステータスの更新について

「トラッキング」プロセスを使用して、コンタクト・ステータス、およびコンタク ト履歴内の他のトラッキング対象フィールドを更新します。

例えば、「メール・リスト」プロセスは、顧客コンタクトを UA\_ContactHistory テ ーブルに記録する場合があります。このコンタクトでは、一時的なコンタクト・ス テータスとして「CountsAsContact」フィールドに 0 の値が設定されます。その 後、キャンペーン・マネージャーは、このコンタクト・リストをメール・ハウスに 送信します。メール・ハウスは、リストに対する後処理を実行して無効アドレスを 除去してから、実際にコンタクトを受けた顧客のリストを返します。その返された リストから、別のフローチャートを使って顧客を選択し、「トラッキング」プロセ スを使用してコンタクト・ステータスの「CountsAsContact」フィールドを 1 に更 新します。

## コンタクト履歴とオーディエンス・レベルとの関係

Campaign は、定義したオーディエンス・レベルごとに異なるコンタクト履歴および 詳細コンタクト履歴を記録して、保守することができます。

オーディエンス・レベルごとに、関連するコンタクト履歴テーブルおよび詳細コン タクト履歴テーブルを Campaign システム・データベースに保管する必要がありま す。

# コンタクト履歴とデータベース・テーブルおよびシステム・テーブ ルとの関係

コンタクト履歴テーブルは、Campaign システム・データベースに保管する必要があり、各オーディエンス・レベルの履歴コンタクトを保管します。

「Customer」オーディエンス・レベルが例として用意されていて、顧客をターゲットとするコンタクトの履歴は、Campaign システム・データベース内の UA\_ContactHistory に保管できます。 「Customer」オーディエンス・レベルの詳細 履歴は、UA Dt1ContactHist テーブルに保管できます。

追加のオーディエンス・レベルを作成する場合、そのコンタクト履歴テーブルと詳細コンタクト履歴テーブル、および関連した索引を、Campaign システム・データベースに作成する必要があります。サンプルの「Customer」オーディエンス・レベルのテーブルをテンプレートとして使用できます。

新しいオーディエンス・レベル用のテーブルを Campaign システム・データベース に作成した後、そのオーディエンス・レベルのコンタクト履歴用の新しいテーブル を詳細コンタクト履歴にマップする必要があります。

## オファー履歴とは

オファー履歴は、キャンペーンで実施されたオファーの履歴レコードです。これは キャンペーンで行われたコンタクトの全体的な履歴レコードの一部です。 オファー履歴は、Campaign システム・テーブル・データベースにある、以下の複数 のテーブルに格納されます。

- UA OfferHistory テーブル
- UA OfferHistAttrib テーブル (パラメーター化されたオファー属性用)
- UA\_OfferAttribute テーブル (静的オファー属性用)

例えば、典型的なフローチャートによってターゲットの顧客リストが生成されま す。このリストは、「コール・リスト」プロセスまたは「メール・リスト」プロセ スから出力されます。そのフローチャートで作成されるオファーのレコードは、 UA OfferHistory テーブルのオファー履歴に書き込まれます。

注: ユーザーが「コール・リスト」プロセスまたは「メール・リスト」プロセスで のコンタクト履歴ロギングをオフにした場合、そのプロセスで作成されるオファー 履歴はデータベースに書き込まれません。

オファー履歴は、実稼働実行の場合にのみデータベースに書き込まれ、テスト実行 の際には書き込まれません。

オファー履歴は、オーディエンス・レベル別に異なるテーブルに保管されるのでは なく、すべてのオファー履歴が、同じセットに含まれるシステム・テーブルに保管 されます。

## 処理履歴とは

処理履歴とは、キャンペーンで生成された処理の記録のことで、ターゲット処理と 制御処理の両方が含まれます。処理は、セル、オファー、および時間(特定のフロ ーチャートの実行)の固有の組み合わせです。同じフローチャートを複数回実行す ると、そのたびに新しい処理が生成されます。

処理履歴は、Campaign システム・テーブル・データベースの UA\_Treatment テーブ ルに保存され、コンタクト履歴と共に使用することにより、セル内の ID に送られ たオファーと、送られた各オファーの属性の具体的詳細とに関する完全な履歴レコ ードとなります。

セル・メンバーシップは、該当するオーディエンス・レベルの UA\_ContactHistory テーブルに記録され、各セルに対して行われる処理は、UA\_Treatment テーブルに記 録されます。これは完全な履歴情報を保管するための、高圧縮で効率的な手段で す。例えば、セル内の 10,000 人がすべて同じ 3 つのオファーを受け取る場合、コ ンタクト履歴に 3 \* 10,000 = 30,000 レコードを書き込む代わりに、セル内の個人 を記録する 10,000 行がコンタクト履歴に書き込まれ、処理を表す 3 行が UA Treatment テーブルに書き込まれます。

注: ユーザーが「コール・リスト」プロセスまたは「メール・リスト」プロセスで のコンタクト履歴ロギングをオフにした場合、そのプロセスで作成される処理履歴 はデータベースに書き込まれません。

オファー履歴は、実稼働実行の場合にのみデータベースに書き込まれ、テスト実行 の際には書き込まれません。

処理履歴は、オーディエンス・レベル別に異なるテーブルに保管されるのではな く、すべての処理履歴が UA Treatment テーブルに保管されます。

## コンタクト履歴の作業

このセクションには、以下の情報が記載されています。

- 『新しいオーディエンス・レベル用のコンタクト履歴テーブルの作成』
- 『コンタクト履歴テーブルからシステム・テーブルへのマッピング』
- 『コンタクト・ステータス・コードの追加方法』
- 100ページの『履歴のロギング』
- 101ページの『コンタクト履歴の更新』
- 101ページの『コンタクト履歴の消去』

## 新しいオーディエンス・レベル用のコンタクト履歴テーブルの作成

新しいオーディエンス・レベルを作成するとき、そのオーディエンス・レベルのタ ーゲットと制御用のコンタクト履歴および詳細コンタクト履歴を保管するテーブル を、Campaign システム・テーブル・データベースに作成しなければならないことが あります。

これらのテーブルを作成するときは、その索引を作成する必要があります。例えば、新しい「個人」オーディエンス・レベル用に INDIV\_ContactHistory テーブル を作成する場合、次のようにして索引を作成できます。

CREATE INDEX XIE1INDIV\_ContactHistory ON INDIV\_ContactHistory ( IndivID )

## コンタクト履歴テーブルからシステム・テーブルへのマッピング

新しいオーディエンス・レベルを作成するたびに、新しいオーディエンス・レベル のコンタクト履歴システム・テーブルおよび詳細コンタクト履歴システム・テーブ ルをマップする必要があります。

**重要:**使用しないコンタクト・ステータスは削除できますが、使用されているコン タクト・ステータスは削除しないでください。

## コンタクト・ステータス・コードの追加方法

Campaign に備わっているコンタクト・ステータスを補足するために、独自のコンタ クト・ステータス・コードを追加できます。新しいコンタクト・ステータス・コー ドを、Campaign システム・データベースの UA\_ContactStatus テーブルで定義しま す。コンタクト・ステータスは、行われたコンタクトのタイプ (配信済み、未配 信、制御など) を示します。

コンタクト・ステータスを追加する前に、デフォルトのコンタクト・ステータス・ コード を参照して、既存のステータス・コードが必要を満たすかどうかを判別しま す。

Campaign ユーザーは、「コール・リスト」プロセスまたは「メール・リスト」プロ セスを構成するときにコンタクト・ステータスを指定します。「トラッキング」プ ロセスを構成して、コンタクト・ステータスを更新します。以下の手順を使用し て、Campaign に備わっているコンタクト・ステータスでは必要を満たせない場合に コンタクト・ステータスを追加します。

- 1. Campaign システム・テーブル・データベースを格納するデータベース管理シス テムにログインします。
- 2. UA\_ContactStatus テーブルを開きます。
- 3. 新しいコンタクト・ステータス用の行を追加します。新しいステータスごとに、 以下を行います。
  - a. 固有の ContactStatusID を入力します。

注: ContactStatusID は、Marketing Platform の「構成」ページで定義されてい る構成パラメーター internalIdLowerLimit と internalIdUpperLimit の値の範囲 内にある、任意の固有の正整数とすることができます。

- b. 「名前」を入力します。
- c. オプションで、「説明」を入力します。
- d. 固有の ContactStatusCode を入力します。値 A から Z、および 0 から 9 を使用できます。
- e. CountsAsContact 列に、ステータスがコンタクトの成功を示す場合には 1、 そうでない場合には 0 を入力します。

注: この列は、コンタクトの負担を管理するために Contact Optimization によって使用されます。この列は、コンタクト履歴テーブルに対する照会で、一定の期間内に特定回数のコンタクトを受けた個人を抑制するときにも役立つ場合があります。

- f. Defaults 列に、そのステータスをデフォルトにしない場合は 0、デフォルト にする場合は 1 を入力します。制御セルのデフォルトのステータスには 2 を入力します。この列では、1 つの行だけに値 1 があり、1 つの行に値 2 があるようにします。
- 4. テーブルの変更内容を保存します。

テーブル内のデータの変更方法について詳しくは、データベース管理システムの資料を参照してください。

### 履歴のロギング

コンタクト履歴をログに記録するには、ユーザーは 1 つ以上のコンタクト・プロセス (コール・リストまたはメール・リスト) を構成します。その後、フローチャート が実稼働 (テストではない) モードで実行されると、そのフローチャートで使用され るオーディエンス・レベルに関連したテーブルにコンタクト履歴が書き込まれま す。

コンタクト履歴のログ記録が有効であるときには、オファー履歴と処理履歴も書き 込まれます。

注: プロセスが、コンタクト履歴をログに記録するように構成されてはいても、タ ーゲットが選択されていないセルで実行される場合、履歴レコードは書き込まれま せん。

ユーザーはオプションで、「コール・リスト」プロセスまたは「メール・リスト」 プロセスによってコンタクト履歴がログに記録されないようにすることもできま す。
詳しくは、「Campaign ユーザー・ガイド」を参照してください。

#### コンタクト履歴の更新

コンタクト履歴を更新する(例えば、コンタクト・ステータスまたは追加のトラッ キング対象コンタクト履歴フィールドを更新するため)には、ユーザーは「トラッ キング」プロセスを構成します。例えば、「トラッキング」プロセスへの入力が、 メール・ハウスから受け取った更新済みのコンタクト・リストであり、そこにコン タクトできなかったターゲットのリストが含まれる場合があります。「トラッキン グ」プロセスが含まれるフローチャートが実稼働モードで実行される場合、コンタ クト履歴は、使用されるオーディエンス・レベルに関連したテーブルに更新されま す。

詳しくは、「Campaign ユーザー・ガイド」を参照してください。

#### コンタクト履歴の消去

ユーザーは、コンタクト・プロセスで生成されるコンタクト履歴を構成するとき に、その履歴を消去できます。また、既存のコンタクト履歴を持つプロセスまたは ブランチを再実行する際に、実行履歴オプションの選択を求めるプロンプトがユー ザーに出されます。それは、このタイプの実行によってフローチャートの実行 ID がインクリメントされないためです。

ユーザーは、その特定のプロセスによって生成されたすべてのコンタクト履歴の消 去、特定の実行インスタンス (実行日時によって識別される)の消去、または指定し たコンタクト日付範囲内に行われたすべてのコンタクトの消去のいずれかを実行で きます。その後、そのオーディエンス・レベルのコンタクト履歴テーブルから、該 当するレコードが完全に削除されます。次にフローチャートが実行されるとき、コ ンタクト履歴テーブルの中で、コンタクト履歴は追加されるのではなく置き換えら れます。

詳しくは、「Campaign ユーザー・ガイド」を参照してください。

### デフォルトのコンタクト・ステータス・コード

Campaign では、UA\_ContactStatus テーブルで定義された以下のコンタクト・ステ ータスが提供されています。

Contact-			Contact-	Counts-	
StatusID	名前	説明	StatusCode	AsContact	Defaults
1	キャンペーン送信	<null></null>	CSD	1	0
2	配信済み	<null></null>	DLV	1	1
3	未配信	<null></null>	UNDLV	0	0
4	コントロール	<null></null>	CTRL	0	2

表 26. デフォルトのコンタクト・ステータス・コード

# 第8章 レスポンス履歴の管理

レスポンス履歴の操作を始める前に、オーディエンス・レベル管理についてのトピックを参照して、必要なオーディエンス・レベルをセットアップしてください。

レスポンス履歴は、オーディエンス・レベルごとに別個のテーブルとして Campaign システム・データベースに保管されます。このため、レスポンス履歴を操作する前 に、オーディエンス・レベルをセットアップする必要があります。

さらに「Campaign ユーザーズ・ガイド」には、コンタクトとレスポンスの履歴についての基本概念、およびレスポンス・プロセスを使用するようフローチャートをセットアップする方法についての情報が記載されています。

### レスポンス履歴の概念

このセクションには、以下の情報が記載されています。

- 『レスポンス履歴とは』
- 『レスポンス・タイプとは』
- 104 ページの『レスポンス履歴とオーディエンス・レベルの関係』
- 104 ページの『レスポンス履歴とデータベース表の関係』
- 104 ページの『レスポンス履歴テーブルでの外部キー制約』
- 104 ページの『操作テーブルとは』
- 104 ページの『操作テーブルに何が含まれるか』
- 105ページの『操作テーブルを使用する理由』

## レスポンス履歴とは

レスポンス履歴は、キャンペーンに対するレスポンスの履歴レコードです。対象レ スポンダーまたは (コンタクトされなくても望まれていた操作を実行した可能性の ある) 検証コントロール・グループのメンバーによるレスポンスを扱います。

Campaign でのレスポンス履歴の詳細情報、およびレスポンスを記録するようフロー チャートを設計する方法については、「*Campaign* ユーザーズ・ガイド」を参照して ください。

## レスポンス・タイプとは

レスポンス・タイプは、ターゲットによって出されたレスポンスのタイプを示す標 識です。 Campaign ユーザーは、レスポンス・プロセスを構成するときに、使用す るレスポンス・タイプを指定します。

Campaign にはデフォルトのレスポンス・タイプのセットが備わっています。管理者 はその他のタイプを追加することができます。

Campaign でのレスポンス・タイプの詳細情報については、「*Campaign* ユーザー ズ・ガイド」を参照してください。

### レスポンス履歴とオーディエンス・レベルの関係

Campaign は、定義されたオーディエンス・レベルごとに別個のレスポンス履歴を記録し、保守します。各オーディエンス・レベルには、Campaign システム・データベース内にそれぞれ関連するレスポンス履歴テーブルがあり、関連する IBM Campaign システム・テーブルもあります。

### レスポンス履歴とデータベース表の関係

レスポンス履歴テーブルは Campaign システム・データベース内に存在する必要が あり、各オーディエンス・レベルのレスポンス履歴を保管します。

「Customer」オーディエンス・レベルがデフォルトで備わっていて、顧客からのレ スポンスの履歴を Campaign システム・データベース内の UA\_ResponseHistory に 保管することができます。

追加のオーディエンス・レベルを作成する場合、それに関するレスポンス履歴テー ブルを Campaign システム・データベースの中に作成する必要があります。

新しいオーディエンス・レベル用のテーブルを Campaign システム・データベース 内に作成した後、その新しいテーブルをオーディエンス・レベルのレスポンス履歴 用の IBM Campaign システム・テーブルにマップする必要があります (このシステ ム・テーブルは、オーディエンス・レベル作成時に自動的に作成されます)。

### レスポンス履歴テーブルでの外部キー制約

新しいオーディエンス・レベル用に作成するレスポンス履歴テーブルごとに、 UA\_Treatment テーブルの TreatmentInstID フィールドで外部キー制約が必要で す。この制約をセットアップする方法の詳細については、システム・テーブルを作 成する DDL ファイルを参照してください。

#### 操作テーブルとは

操作テーブルは、キャンペーンに対するターゲットのレスポンスのデータを格納す るオプションのテーブルです。通常、操作テーブルは各ターゲットのレスポンス・ タイプと関心のある操作、その他のキャンペーン固有データを提供します。操作テ ーブルは、レスポンス・プロセスでの入力セルのソース・データとして機能しま す。

操作テーブルはオーディエンス・レベルに固有です。通常、Campaign では各オーディエンス・レベルに対して 1 つの操作テーブルを作成します。

**重要:**レスポンスの追跡に使われる操作テーブルが、レスポンス処理中に必ずロッ クされることを確認してください。また、レスポンスが複数回にわたって考慮され ないよう、レスポンス処理後に行をクリアする必要もあります。

### 操作テーブルに何が含まれるか

操作テーブルの各行は 1 つのイベントを表し、少なくともオーディエンス ID、レ スポンス・タイプ、およびレスポンス日付がそれに含まれる必要があります。さら に、通常、1 つ以上のレスポンス・コード (キャンペーン、セル、オファー、また は処理のコード)、および予想されるレスポンス追跡用の 1 つ以上の標準/カスタ ム・オファー属性 (例えば購入された製品やサービス) が含まれます。イベントの中 でデータが入っているすべてのフィールドを使って、そのオファー属性を持つ処理 の候補に対してマッチングが行われ、NULL であるフィールドはすべて無視されま す。

### 操作テーブルを使用する理由

ターゲットのレスポンスに関する十分なデータを確実に記録して使用できるように するうえで、操作テーブルの使用はベスト・プラクティスです。 Campaign には、 UA\_ActionCustomer という名前の、「Customer」オーディエンス・レベル用のサン プル操作テーブルがシステム・データベース内に備わっています。

## レスポンス履歴の操作

このセクションには、以下の情報が記載されています。

- 『新しいオーディエンス・レベル用のレスポンス履歴テーブルの作成』
- ・ 『レスポンス履歴テーブルから IBM Campaign システム・テーブルへのマッピン グ』
- 『オファーの有効期限が切れた後にレスポンスを記録する日数を設定するには』
- 106ページの『レスポンス・タイプの追加』
- 106ページの『レスポンス履歴のログ』

### 新しいオーディエンス・レベル用のレスポンス履歴テーブルの作成

新しいオーディエンス・レベルを作成するときには、そのオーディエンス・レベル でのターゲットに関するレスポンス履歴を保管するために、Campaign システム・デ ータベース内にテーブルを作成する必要があります。

また、このテーブルを作成するとき、パフォーマンスの改善のためにインデックス を作成する必要もあります。例えば、新しい Individual オーディエンス・レベル 用の INDIV\_ResponseHistory テーブルを作成する場合、以下のようにインデックス を作成できます。

INDEX XIE1INDIV\_ResponseHistory ON INDIV\_ResponseHistory ( IndivID )

## レスポンス履歴テーブルから IBM Campaign システム・テーブル へのマッピング

新しいオーディエンス・レベル用のレスポンス履歴テーブルを作成した後、オーディエンス・レベルのレスポンス履歴用の IBM Campaign システム・テーブルにそれ をマップする必要があります。

## オファーの有効期限が切れた後にレスポンスを記録する日数を設定 するには

注: このタスクを完了するには、Marketing Platform を使用するための適切な権限が 必要です。詳しくは、「*Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。 構成ページで、applications > Campaign > partitions > partition[n] > server > flowchartConfig カテゴリーの allowResponseNDaysAfterExpiration プロパティーを適切な日数に設定します。

## レスポンス・タイプの追加

Campaign システム・データベースの UA\_UsrResponseType テーブルの中でレスポン ス・タイプを定義します。

レスポンス・タイプを追加する前に、107ページの『デフォルトのレスポンス・タ イプ』を参照して、既存のどのタイプによって要件が満たされるか、何を作成する 必要があるかを判別してください。

レスポンス・タイプを追加するには

- 1. Campaign システム・データベースを含むデータベース管理システムにログイン します。
- 2. UA UsrResponseType テーブルを開きます。
- 3. 追加する必要のあるレスポンス・タイプ用の行を追加します。それぞれの新しい タイプに関して、
  - a. 固有の ResponseTypeID を入力します。
  - b. 「名前」を入力します。
  - c. オプションで、「説明」を入力します。
  - d. 固有の ResponseTypeCode を入力します。
  - e. CountsAsResponse 列で、成功レスポンスを表すタイプの場合は 1、表さない 場合は 0、拒否を表す場合は 2 をそれぞれ入力します。
  - f. IsDefault 列で、タイプがデフォルトにならない場合は 0、デフォルトになる場合は 1 をそれぞれ入力します。この列の中で 1 つの行だけが値 1 を持つことを確認してください。
- 4. テーブルの変更内容を保存します。
- 5. UA\_UsrResponseType システム・テーブルを再マップします。

テーブルのデータを変更する方法についての詳しい説明は、データベース管理シ ステムの資料を参照してください。

### レスポンス履歴のログ

レスポンス履歴をログに記録するには、ユーザーがレスポンス・プロセスを構成し ます。その後、フローチャートの実行時に、フローチャートで使われるオーディエ ンス・レベルに関連したテーブルにレスポンス履歴が書き込まれます。

詳しくは、「IBM Campaign ユーザー・ガイド」を参照してください。

## レスポンス履歴の参照資料

このセクションには、以下の情報が記載されています。

- 107 ページの『デフォルトのレスポンス・タイプ』
- 107 ページの『サンプル UA\_ActionCustomer テーブル』

# デフォルトのレスポンス・タイプ

Campaign には以下のレスポンス・タイプが備わっています。これらは UA\_UsrResponseType テーブルに定義されています。

それぞれのレスポンス・タイプに関して、CountsAsResponse フィールドでの有効な 値は次のとおりです。

0 - レスポンスとしてカウントしません

- 1 肯定的レスポンスとしてカウントします
- 2 否定的レスポンスとしてカウントします

注: 各レスポンス・タイプに関して CountsAsResponse 値は相互に排他的です。つまり、同じレスポンス・タイプを応答および拒否の両方としてカウントすることはできません。

			レスポンス		
レスポンス			-	カウント -	
- TypeID	名前	説明	StatusCode	AsResponse	IsDefault
1	Explore	<null></null>	EXP	0	0
2	Consider	<null></null>	CON	0	0
3	Commit	<null></null>	CMT	1	0
4	Fulfill	<null></null>	FFL	0	0
5	Use	<null></null>	USE	0	0
6	Unsubscribe	<null></null>	USB	0	0
7	Unknown	<null></null>	UKN	1	1
8	Reject	<null></null>	RJT	2	0

表 27. デフォルトのレスポンス・タイプ

# サンプル UA\_ActionCustomer テーブル

Campaign には、サンプル操作テーブル UA\_ActionCustomer が備わっています。このテーブル内のフィールドは、レスポンス履歴の生成に役立つフィールドの例となります。

表 28. サンプル UA\_ActionCustomer テーブル

列名	データ型	長さ	NULL の許可
CustomerID	bigint	8	いいえ
ActionDateTime	datetime	8	いいえ
ResponseChannel	varchar	16	はい
CampaignCode	varchar	32	いいえ
OfferCode	varchar	64	いいえ
CellCode	varchar	64	いいえ
TreatmentCode	varchar	64	いいえ
ProductID	bigint	8	いいえ
ResponseTypeCode	varchar	64	はい

# 第9章 操作モニター

操作モニターを使用すると、アクティブなすべてのフローチャートを 1 つのビュー で表示できます。

操作モニターは管理機能です。「モニター・ページへのアクセス」または「モニタ ー・タスクの実行」セキュリティー権限を持つユーザーだけが、「操作モニター (Operational Monitoring)」ページの表示を許可されます。 「モニター・タスクの実 行」セキュリティー権限を持つユーザーだけが、フローチャートの開始、停止、ま たは中断を許可されます。

「モニター・タスクの実行」権限を持つユーザーは、個別の各フローチャートに対 してどんな通常のアクセス権限を持っているかに関わらず、表示されるすべてのフ ローチャートを制御することができます。実行中のフローチャートを停止、一時停 止、または再開する権限を意図的に与えようとしている場合を除き、この権限をエ ンド・ユーザーに与えないでください。

### 操作モニターを構成するには

注: このタスクを完了するには、Marketing Platform を使用するための適切な権限が 必要です。詳しくは、「Marketing Platform 管理者ガイド」を参照してください。

実際の環境に適した方法で操作モニターを構成する必要があります。これには、過 去のフローチャート実行に関するモニター情報を保管および表示する期間について のパラメーターの設定が含まれます。

構成ページで、「キャンペーン」>「モニター」カテゴリーのプロパティーを必要に 応じて設定します。プロパティーについて詳しくは、コンテキスト・ヘルプまたは 「*Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

## 「すべてのモニターされている実行」ページにアクセスするには

**注:** 「モニター」ページにアクセスするには、適切な権限が必要です。詳しくは、 「*Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

「**キャンペーン」>「モニター**」を選択します。「すべてのモニターされている実行」ページが表示されます。

### 「すべてのモニターされている実行」ページの表示

「すべてのモニターされている実行」ページでは、所属するキャンペーンごとに、 アクティブ状態のフローチャートが Campaign によってグループ化されます。

各フローチャートの状況は、「ステータス」列およびステータス標識の色という 2 つの方法で示されます。各フローチャートに対して使用できる操作ボタンは、フロ ーチャートのステータスによって異なります。 各ステータスに対応する色と有効な操作については、112ページの『フローチャートの状態と操作』にある表を参照してください。

**注:** 「モニター・タスクの実行」セキュリティー権限を持つ場合にのみ、操作ボタンが使用可能になります。

## 「すべてのモニターされている実行」ページでフローチャート・リストをソ ートするには

デフォルトでは、キャンペーン名を基準に昇順でフローチャートが並べられます。 このほかに「**ステータス**」、「実行者」、「開始時刻」、または「終了時刻」列を 基準にしてフローチャートのリストをソートすることもできます。

フローチャートのリストをソートするには、ソート基準となる列名をクリックします。

右側の矢印の方向は、昇順または降順のどちらで列がソートされるかを示します。

- 上矢印は、昇順で列が並んでいることを示します。
- 下矢印は、降順で列が並んでいることを示します。

ソート順序を逆にするには、列名を再びクリックします。

注:「すべてのモニターされている実行」ページを終了した後、再びページに戻ったときには、デフォルトのソート順(キャンペーン名を基準に昇順)でフローチャートがリストされます。

#### 関連するキャンペーンまたはフローチャートを表示するには

「すべてのモニターされている実行」ページから、キャンペーンまたはフローチャ ートのサマリーを開くことができます。青色の下線は、キャンペーンまたはフロー チャートの名前がハイパーテキスト・リンクであることを示します。

キャンペーン・サマリーを表示するには、「キャンペーンおよびフローチャート」 列の左側に表示されるキャンペーンの名前をクリックします。

「読み取り専用」モードでフローチャートを表示するには、キャンペーン名の右側 に斜体字で表示されるフローチャートの名前をクリックします。

## 「すべてのモニターされている実行」ページの表示を最新表示する には

「最新表示」機能を使用すると、「すべてのモニターされている実行」ページの内 容をリフレッシュして、操作上の最新の詳細情報を表示することができます。

「すべてのモニターされている実行」ページを最新表示するには、右上にある「**リ** フレッシュ」をクリックします。ページが最新表示されて、最新のデータが表示さ れます。

### 「すべてのモニターされている実行」ページでフローチャートを操作する

注:「すべてのモニターされている実行」ページからフローチャートを操作するための権限が必要です。

「モニター・タスクの実行」セキュリティー権限を持っている場合、「すべてのモニターされている実行」ページでフローチャートに対して以下の操作を実行できます。フローチャートに対して実行できる操作は、フローチャートの現在のステータスによって異なります。

注:フローチャート・ページの「実行」メニューからフローチャートを一時停止、 続行、または停止することもできます。一時停止および続行操作は、フローチャー トの「実行」メニューからのみ実行可能です。詳細については、「*Campaign* ユーザ ー・ガイド」を参照してください。

### 実行中のフローチャートを停止するには

実行中のフローチャートに対してのみ、停止操作を実行できます。

- 1. 「すべてのモニターされている実行」ページで、停止の対象となるフローチャートを見つけます。 そのステータスと、使用可能な操作ボタンが表示されます。
- フローチャート・ステータスの横にある「停止」ボタン をクリックします。

フローチャートが停止します。「すべてのモニターされている実行」ページで、 そのステータスが「**停止**」に変わり、ステータス標識の色が赤に変化します。

#### 実行中のフローチャートを中断するには

実行中のフローチャートに対してのみ、中断操作を実行できます。

フローチャートを中断すると、プロセス実行が終了してシステム・リソースが解放 されます。中断された位置からフローチャートの実行を再開できるよう、プレース ホルダーが残されます。これは(フローチャートの「実行」メニューから操作する) フローチャートの一時停止とは異なります。フローチャートを一時停止した場合は プロセスが残り、(メモリーなどの)システム・リソースは解放されません。

- 1. 「すべてのモニターされている実行」ページで、中断の対象となるフローチャー トを見つけます。 そのステータスと、使用可能な操作ボタンが表示されます。
- フローチャート・ステータスの横にある「中断」ボタン U をクリックします。

中断処理が始まります。「すべてのモニターされている実行」ページで、フロー チャートのステータスが「中断中」に変わり、ステータス標識の色が黄色に変化 します。「中断中」ステータスの間は、フローチャートに対してどんな操作も実 行できません。 **注:** 実行中のフローチャートを正常に中断するには、実行中のプロセス・ボック スを安全に保存および再開できる状態になるまで待つ必要があるため、しばらく 時間がかかる可能性があります。

中断処理が完了すると、フローチャートのステータスが「**中断**」に変わります。 ステータス標識の色は黄色のままです。

### 中断されたフローチャートを再開するには

中断されているフローチャートを再開することができます。これにより、フローチ ャートが再始動して、中断された場所から実行を続けます。

- 1. 「すべてのモニターされている実行」ページで、再開の対象となる中断状態のフ ローチャートを見つけます。 そのステータスと、使用可能な操作ボタンが表示 されます。
- フローチャート・ステータスの横にある「再開」ボタン をクリックします。

フローチャートの実行が再開されます。「すべてのモニターされている実行」ペ ージで、そのステータスが「**実行中**」に変わり、ステータス標識の色が緑に変化 します。

### 操作モニターの参照資料

このセクションには、以下の参照情報が含まれています。

- 『フローチャートの状態と操作』
- 114ページの『操作モニターに関連するプロパティー』

#### フローチャートの状態と操作

このセクションでは、「すべてのモニターされている実行」ページに表示される有 効なフローチャートの状態と、それぞれの状態に対して実行できる操作を説明して います。

フローチャート・ステータスは、最後の実行のステータスを反映します。

注: ユーザーがフローチャートを実行したときに 1 つのブランチが成功しても、(そのフローチャート内の) そのブランチに含まれない別のプロセスが失敗した場合には、フローチャート・ステータスは「失敗」になります。

表29. フローチャートの状態と操作

ステータス (ステータ		
ス標識の色)	説明	有効な操作
実行中	フローチャートは実行中です。	• 中断
(緑色)		• 停止

表 29. フローチャートの状態と操作 (続き)

ステータス (ステータ		
ス標識の色)	説明	有効な操作
一時停止 (黄色)	フローチャートの「実行」メニューから、 実行中のフローチャートが一時停止されま した。(「モニター」ページからフローチャ ートを一時停止させることはできません。)	「モニター」ページか らは、ありません (フ ローチャートからは 「実行」>「続行」)
	フローチャートが一時停止すると、プロセ スは保持されたまま処理が停止します。こ れにより、フローチャートの実行が続行さ れるときに作業内容が失われません。「一 時停止」操作によってシステム・リソース が解放されないことに注意してください (CPU の使用は停止しますが、メモリーは解 放されません)。	
	フローチャートの「実行」メニューから、 一時停止中のフローチャートの実行を続行 できます。 フローチャートの実行の一時停止および続 行について、詳しくは「Commiss フィーザ	
	イトレフロン、詳しては「Campaign ユーサ ー・ガイド」を参照してください。	
中断中	「モニター」ページからフローチャートの	なし
(黄色)	「中断」操作が開始されたため、フローチ ャートはこのステータスに移行中です。	
中断 (黄色)	フローチャートの中断操作が完了し、フロ ーチャートは中断された状態になっていま す。プロセスはシャットダウンされ、シス テム・リソースが既に解放されました。中 断された位置からフローチャート実行を再 始動するためのプレースホルダーが残され ています。	• 再開
	「モニター」ページの「再開」ボタンを使 用すると、中断されたフローチャートの実 行を再開できます。 注:最初から再実行できる(結果として実質 的に同じ動作になる)実行中のプロセス・ボ ックスは、中断コマンドが出されると直ち に停止して、部分的に完了した作業内容は すべて失われます。フローチャートの実行 が再開されるときに、これらのプロセス・ ボックスは再実行されます。	
成功	フローチャートの実行が正常に完了し、エラーはありません。	なし
(明るい青色)		

表 29. フローチャートの状態と操作 (続き)

ステータス (ステータ		
ス標識の色)	説明	有効な操作
停止	フローチャートの実行が停止されました。	なし
	フローチャートの「実行」メニューからユ	
(亦巴)	ーザー操作により停止されたか、またはエ	
	ラーが原因です (つまりフローチャート内の	
	1 つ以上のプロセス・ボックスでエラーが	
	検出されました)。フローチャートの「実	
	行」メニューからのフローチャートの停止	
	について、詳しくは「Campaign ユーザー・	
	ガイド」を参照してください。	
失敗	実行が失敗しました。未処理エラーまたは	なし
	サーバー・エラー (つまり予期しないフロー	
(赤色)	チャート・サーバー・プロセスの終了)が原	
	因です。	

## 操作モニターに関連するプロパティー

Marketing Platform 構成ページの「キャンペーン」>「モニター」カテゴリーにある プロパティーを使用して、操作モニターの動作を変更します。プロパティーの詳細 については、コンテキスト・ヘルプまたは「*IBM Marketing Platform 管理者ガイ* ド」を参照してください。

- cacheCleanupInterval
- cacheRunCompleteTime
- monitorEnabled
- serverURL
- monitorEnabledForInteract
- protocol
- port

## 「すべてのモニターされている実行」ページのアイコン

「すべてのモニターされている実行」ページでは、以下のアイコンが使用されます。



以下の表では、左側のアイコンから右側のアイコンへの順番で説明します。

表 30. 「すべてのモニターされている実行」ページで使用されるアイコン

アイコン名	説明
項目の印刷	各項目の横にあるチェック・ボックスをクリックして、モニ
	ターされている 1 つ以上の実行を選択した後、このアイコ
	ンをクリックすると、選択された項目が印刷されます。

表 30. 「すべてのモニターされている実行」ページで使用されるアイコン (続き)

アイコン名	説明
Refresh	このアイコンをクリックすると、ページ上に示されるモニタ
	ーされている実行のリストがリフレッシュされます。

# 第 10 章 ディメンション階層の管理

このセクションには、以下の情報が記載されています。

- 『ディメンション階層とは』
- ・ 『ディメンション階層を使用する理由』
- 118ページの『ディメンション階層およびキューブについて』
- 118ページの『ディメンション階層およびデータベース表について』

## ディメンション階層とは

ディメンション階層とは、データを値の範囲に基づいてビンにグループ化するのに 使用されるデータ構造のことです。ディメンション階層に複数レベルを含めること ができ、レベルごとにそれぞれのビンのセットを持ちます。各下位のビンは、上位 ビンにきちんとロールアップされなければなりません。

例えば、「年齢」ディメンション階層は、最下位とロールアップの 2 つのレベルを 持つことができます。顧客はそれぞれのレベルのビンにグループ化されます。

最下位: (21-25)、(26-30)、(31-35)、(36-45)、(45-59)、(60+)

ロールアップ: 若年 (21-35)、中年 (36-59)、高齢 (60+)

注:上位にロールアップされる場合、下位ビン(例えば、上記のビン 26-30)を分割 して、26-27 歳の個人を「若年」、28-30 を「中年」に分割することはできません。 下位の単一ビンはどれも、上位ビンの範囲に完全に入らなければなりません。実際 に「若年」を 21-27 歳の人と定義する場合は、下位に別々のビン(例えば、26-27 と 28-30)を作成し、それぞれ「若年」と「中年」にロールアップされるようにする 必要があります。

一般に指定される他のディメンション階層として、時間、地理、製品、部門、流通 チャネルがあります。ただし、ビジネスやキャンペーンに関係のあるどのようなデ ィメンション階層でも作成できます。

## ディメンション階層を使用する理由

キューブの構成要素であるディメンション階層は、データ探索やクイック・カウン トに使用できる、あるいはターゲット・キャンペーンの基本として使用できる、さ まざまなレポートの基本です。キューブは、数値フィールド(例えば、集約レベル が増加している全製品の総売上高、地理別の経費対売上高のクロス集計分析など) のカウントや単純計算(合計、最小、最大、平均、標準偏差)を事前集約できます。

ディメンション階層は、(キューブを作成したりクロス集計レポートからキューブが 機能したりすることを必要とせずに)戦略セグメントから直接選択する手段として も使用可能です。

Campaign は、以下をサポートします。

- レベルとエレメント (それぞれ数の制限なし) から成るディメンション
- ・ 顧客分析レポート作成および視覚的選択の入力として作成されたデータ・ポイント
- ドリルダウン機能をサポートするためのカテゴリー (数の制限なし) へのロールア ップ

# ディメンション階層およびキューブについて

ディメンション階層は、動的データ・キューブを作成するために使用します。これ らのキューブは、戦略的セグメント上に作成される、顧客データを基に事前計算さ れた 2 ディメンションまたは 3 ディメンションの集合体です。キューブを使用す ると、データに対してドリルスルーを行い、その結果生成される顧客セットをフロ ーチャートでの新しいセルとして使用できるため、データの探索や視覚的選択のた めに使用されます。

キューブについて詳しくは、「*Campaign* ユーザーズ・ガイド」を参照してください。

## ディメンション階層およびデータベース表について

Campaign にディメンション階層を作成するとき、それをデータベース内のテーブル またはフラット・ファイルにマップします。そのテーブルには、以下のための列が 含まれている必要があります。

- ディメンション名
- ディメンション階層に含まれる各レベル
- オーディエンス・エンティティーを bin に定義する未加工 SQL 式または IBM EMM 式
- データ・ソース

例えば、「年齢」ディメンション階層に3つのレベルがある場合を考えます。第1 レベルは「すべての年齢」で、その後に2つのレベルが続きますが、これは以下の リストに示されている2つのレベルに対応します。

- 30 未満
  - 20 未満
  - 20 から 25
  - 26 から 30
- ・ 30 から 50
  - 30 から 40
  - 41 から 50
- 50 より上
  - 51 から 60
  - 60 より上

このディメンション階層は、以下のデータベース表に基づいています。

衣 31. アイ メンンヨン階層のアータハー/	ス表	バーン	タヘ	デー	Ø	階層	2	Ε'	ンシ	X	ディ	31. 5	表
-------------------------	----	-----	----	----	---	----	---	----	----	---	----	-------	---

ディメンショ					データ・ソー
ン名	Dim1Name	Dim2Name	Dim3Name	式	ス
MemberAge	すべての年齢	30 未満	< 20 歳	年齢 < 20	ユーザー・デ
					ータマート
MemberAge	すべての年齢	30 未満	20 - 25 歳	年齢 between	ユーザー・デ
				20 and 25	ータマート
MemberAge	すべての年齢	30 未満	26 - 30 歳	年齢 between	ユーザー・デ
				26 and 30	ータマート
MemberAge	すべての年齢	30 - 50 歳	30 - 40 歳	年齢 between	ユーザー・デ
				31 and 40	ータマート
MemberAge	すべての年齢	30 - 50 歳	41 - 50 歳	年齢 between	ユーザー・デ
				41 and 50	ータマート
MemberAge	すべての年齢	50 より上	51 - 60 歳	年齢 between	ユーザー・デ
				51 and 60	ータマート
MemberAge	すべての年齢	50 より上	60 より上	年齢 > 60	ユーザー・デ
					ータマート

# ディメンション階層の作業

このセクションには、以下の情報が記載されています。

- 『ディメンション階層の作業について』
- 120ページの『ディメンション階層の設計』
- 120ページの『Campaign のディメンション階層へのアクセス』
- 120ページの『ディメンション階層を作成する』
- 121ページの『保管ディメンション階層をロードする』
- 121ページの『ディメンション階層を編集する』
- 122ページの『ディメンション階層を更新する』
- 122ページの『ディメンション階層を削除する』

## ディメンション階層の作業について

Campaign でディメンション階層を使用するには、以下を行う必要があります。

- ディメンション階層を、ユーザー・データマートにあるデータベース表に定義して作成するか、区切り記号付きフラット・ファイルまたは固定幅フラット・ファイルに定義します。
- このテーブルまたはフラット・ファイルを、Campaign内のディメンション階層に マップします。

このディメンション階層が Campaign にマップされると、ディメンション階層が 「キューブ」プロセスで使用できるようになり、戦略的セグメントに動的データ・ キューブを作成できます。

ユーザーまたは IBM コンサルティング・チームは、データマートまたはフラット・ファイルにディメンション階層定義を作成する必要があります。これは Campaign の外部で行われる操作です。また、ディメンション階層の最下位では、未 加工 SQL 式または純粋な (カスタム・マクロ、ユーザー変数、ユーザー定義フィー ルドのない) IBM EMM 式を使用して、各 bin の個別オーディエンス ID メンバー シップを定義する必要もあります。

### ディメンション階層の設計

ディメンション階層を設計するときには、以下を検討する必要があります。

- ・ ディメンションの相互関係 (例:年齢/地域/期間)。
- 各ディメンションおよびキューブの詳細レベル。
- ディメンションは単一のキューブに限定されず、多数のキューブで使用できる。
- ディメンションの境界をまたぐときに明確にロールアップする必要があるため、 エレメントは相互に排他的で、オーバーラップしないようにする必要がある。

## Campaign のディメンション階層へのアクセス

以下のいずれかの方法で、ディメンション階層の作業を行うことができます。

- フローチャートの編集時に、「システム管理」アイコンをクリックし、「ディメンション階層」を選択する。
- 「キャンペーン設定」ページで、「ディメンション階層の管理」をクリックする。

注: ディメンション階層を使用してキューブを作成するとき、キューブ・プロセス を使用して、フローチャートからアプリケーションの「セッション」領域に動的デ ータ・キューブを作成することをお勧めします。

### ディメンション階層を作成する

この手順は、ディメンション階層定義のあるテーブルが既に使用可能であることを 前提としています。

- 1. 「ディメンション階層」ウィンドウを開きます。
- 「ディメンション階層」ウィンドウで、「新規ディメンション」をクリックします。

「ディメンションの編集」ウィンドウが開きます。

- 3. 新規ディメンション階層の以下の詳細を入力します。
  - 「ディメンション名」
  - 「説明」
  - ディメンション階層の「階層数」。このディメンション階層をマップするテーブルの階層レベルに対応している必要があります。
  - このディメンション階層をキューブの基本として使用する場合は、「データの 重複を許可しない」にチェック・マークを付けておく必要があります(デフォ ルトでは、このオプションにチェック・マークが付いています)。そうしない と、キューブ内でエレメントがオーバーラップできないため、このディメンシ ョン階層を使用してキューブを作成するときにエラーを受け取ります。単に戦 略セグメントからの選択用にディメンション階層を作成する場合は、このオプ ションを無効にしてオーバーラップ定義を作成することも可能です。ただし、 作成するディメンション階層をキューブの作成にも戦略セグメントでも自由に 使用できるように、非オーバーラップ・ビンを作成することをお勧めします。

4. 「**テーブル・マッピング**」をクリックします。

「テーブル定義の編集」ウィンドウが開きます。

ディメンション階層テーブルをデータベース内のテーブルかまたはディメンション階層定義が含まれるフラット・ファイルのどちらかにマップするには、35ページの『ベース・レコード・テーブルを既存のデータベース表にマップする方法』の手順に従ってください。

ディメンション階層のマッピングを完了すると、「ディメンションの編集」ウィ ンドウに戻ります。この時点で、このウィンドウに新規ディメンション階層の詳 細が表示されます。

6. 「**OK**」をクリックします。

「ディメンション」ウィンドウに戻ります。

 (オプション、ただし推奨)「保存」をクリックすることにより、テーブル・カタ ログで将来使用するためにディメンション階層を保管できます。ディメンション 階層を保管すると、そうした階層を再作成しなくても、別の使用目的で後で取り 出したり、他のユーザーと共有したりできます。

#### 保管ディメンション階層をロードする

ディメンション階層は、フローチャート内のマップされた他のテーブルとともに、 テーブル・カタログに保管されます。

- 1. 「ディメンション階層」ウィンドウを開きます。
- 2. 「ロード」をクリックします。
- 3. ロードするディメンション階層が含まれるテーブル・カタログを選択します。
- 4. 「**カタログのロード**」をクリックします。 ディメンション階層がロードされま す。

### ディメンション階層を編集する

- 1. 「ディメンション階層」ウィンドウを開きます。
- 2. 編集するディメンション階層のロードが必要なこともあります。
- 3. 編集するディメンション階層を選択します。
- 4. 「編集」をクリックします。
- 5. ディメンション階層の以下の詳細を変更します。
  - 「ディメンション名」
  - 「説明」
  - ディメンション階層の「階層数」。このディメンション階層をマップするデ ータベース表の階層レベルに対応している必要があります。
  - このディメンション階層をキューブの基本として使用する場合は、「データの重複を許可しない」にチェック・マークを付けておく必要があります(デフォルトでは、このオプションにチェック・マークが付いています)。そうしないと、キューブ内でエレメントがオーバーラップできないため、このディメンション階層を使用してキューブを作成するときにエラーを受け取ります。

 テーブル・マッピングを変更するには、「テーブル・マッピング」をクリック します。

「テーブル定義の編集」ウィンドウが開きます。

- 7. 35ページの『ベース・レコード・テーブルを既存のデータベース表にマップす る方法』の手順に従ってください。
- 8. ディメンションのマッピングを完了すると、「ディメンションの編集」ウィン ドウに戻ります。この時点で、このウィンドウに新規ディメンション階層の詳 細が表示されます。
- 9. 「**OK**」をクリックします。

「ディメンション」ウィンドウに戻ります。

 (オプション、ただし推奨)「保存」をクリックすることにより、テーブル・カ タログで将来使用するためにディメンション階層に対する変更を保管できま す。

#### ディメンション階層を更新する

Campaign は、ディメンション階層の自動更新をサポートしていません。基礎データ が変わった場合は、ディメンションを手動で更新する必要があります。

**注:** キューブは戦略セグメントに基づいたディメンション階層から成っているの で、戦略セグメントを更新するときは必ずキューブを更新する必要があります。

- 1. 「ディメンション階層」ウィンドウを開きます。
- 2. 編集するディメンション階層のロードが必要なこともあります。
- 3. 更新するディメンション階層が含まれるテーブル・カタログを選択します。
- 4. 「更新」をクリックします。

### ディメンション階層を削除する

**重要:** ディメンション階層を削除すると、戦略セグメントで使用できなくなりま す。ディメンション階層に基づいたキューブは、削除されたディメンション階層を 使用している場合は、構成解除された状態になります。

テーブル・カタログからディメンション階層を削除しても、既存のフローチャート に影響を及ぼしません (これらのフローチャートにはディメンション階層定義のコ ピーが含まれるため)。

- 1. 「ディメンション階層」ウィンドウを開きます。
- 2. 更新するディメンション階層のロードが必要なこともあります。
- 3. 削除するディメンション階層を選択します。
- 4. 「削除」をクリックします。

削除の確認を求められます。

# 第 11 章 トリガーの管理

Campaign では、パーティション内のすべてのフローチャートで使用できるインバウ ンド・トリガーおよび発信トリガーを定義することができます。

注: Campaign フローチャートで定義されるトリガーは、IBM Scheduler では使用さ れません。 IBM Scheduler でのトリガーの使用について詳しくは、「*Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

# 着信トリガーとは

着信トリガーとは、1 つ以上のキャンペーンにブロードキャストされるメッセージ のことです。特定のトリガーを「listen」して 1 つ以上のプロセスの実行を開始する ようにフローチャートを構成することができます。

サード・パーティー・システムは通常、何らかの外部イベントの発生に基づいてト リガーを送信します。

### 着信トリガーを使用する理由

インバウンド・トリガーが Campaign でのプロセスを開始する要因となり得るイベ ントの例を以下に示します。

- データベースの更新により、すべての戦略的セグメントの再計算がトリガーされ ます(例えば、最近の購入アクティビティーに基づいた高い値、中程度の値、低い値による顧客の分類)。
- データベース内のスコアを更新する予測モデルにより、獲得キャンペーンがトリ ガーされます。これは、最新のスコアが実行されるのを待ちます。
- サード・パーティーのスケジューリング・ツールは、フローチャートの実行をス ケジュールおよびトリガーするために使用されます。
- 最適化セッションの実行の完了により、参加キャンペーンの実行による、最適化 された結果の取得と処理がトリガーされます。

## 着信トリガーとスケジュール・プロセス

これを行うように構成すると、スケジュール・プロセスは着信トリガーを listen し、そのいずれかがブロードキャストされたときに実行されます。

### ブロードキャストとは?

ブロードキャストとは、Campaign 内のすべてのフローチャート、特定のキャンペーン、または特定のフローチャートに、着信トリガーが実行されたことを通知するプロセスのことです。その後、その着信トリガーを listen するように構成されているスケジュール・プロセスが実行されます。

インバウンド・トリガーをキャンペーンまたはフローチャートに送信するには、ト リガー・ユーティリティー *CAMPAIGN\_HOME*/bin/unica\_actrg.exe を使用してト リガーを Campaign にブロードキャストする必要があります。

## 発信トリガーとは

発信トリガーとは、フローチャートまたはプロセスの実行後に行われるコマンド、 バッチ・ファイル、またはスクリプトの実行のことです。何らかのアクション (ア プリケーションのオープン、E メールの送信、またはプログラムの実行など)を仮 想実行するようにトリガーを定義することができます。

Campaign は、スケジュール・プロセス、「コール・リスト」プロセス、または「メ ール・リスト」プロセスを実行するときに発信トリガーを実行できます。例えば、 「コール・リスト」プロセスが完了したときに、発信トリガーは、コンタクトのリ ストの準備が整ったことを管理者に知らせる自動 E メールを送信することができま す。

注:トリガーは、テスト実行および実稼働実行の完了時に実行されます。

Campaign は、フローチャートの実行時に発信トリガーを自動的に実行することもで きます。フローチャートが正常に完了したときと失敗したときのそれぞれに対して トリガーを構成することができます。

発信トリガーには、同期のものと非同期のものがあります。

#### 同期発信トリガー

Campaign が発信トリガーを同期的に実行する際、それを呼び出したプロセスは、実行されたコマンドが完了し、成功または失敗のステータスを返すのを待ちます。

言い換えると、フローチャートは、トリガーの結果が返されるまで実行を続行しま せん。トリガーが失敗する場合(非ゼロの戻り値によって示される)、プロセス・ボ ックスは処理を続行せず、エラー(赤い X)および該当するエラー・メッセージを 示します。

フローチャートが外部プロセスによる作業の完了を待ってから続行する場合は、同 期実行が便利です。例えば、同期発信トリガーはサード・パーティーの予測モデ ル・スコアをリアルタイムで実行でき、フローチャートはその完了を待った後、更 新されたモデル・スコアからの選択を行います。

発信トリガーを同期発信トリガーにするには、プロセス構成でトリガーを指定する際に、トリガー名の後ろに疑問符 (?) を置きます。以下に例を示します。

EmailUpdate ?

#### 非同期発信トリガー

非同期発信トリガーを実行すると、フローチャートの処理は即時に続行されます。 トリガーを呼び出したプロセスは、それが成功または失敗するのを待ちません。

発信トリガーを非同期にするために終了文字を追加する必要はありません。ただし、トリガーが非同期であることを明示的に知らせるために、プロセス構成でトリガーを指定する際に、トリガー名の後ろにアンパーサンド(&)を置くことができます。以下に例を示します。

EmailUpdate &

#### 発信トリガーを使用する理由

発信トリガーは、キャンペーンに関連するものの、キャンペーン外にあるアクショ ンを実行するさまざまな状況で役立ちます。

役立つ発信トリガーの代表的な例を以下に挙げます。

- キャンペーンのフローチャートの完了時に E メール通知を送信する。
- フローチャートが失敗した場合に E メール通知を送る、または他の何らかのタス クを実行する。
- サード・パーティーのモデリング・ツール (SAS など)を実行して、フローチャ ート・ロジックを使ってインラインの結果をリアルタイムで生成する。
- UNIX シェル・スクリプトを実行して、ファイル作成後に FTP で出力ファイル を送信する。
- 顧客データベースの更新を起動する。
- 別のフローチャートを起動またはトリガーする。

#### 発信トリガーの戻り値

発信トリガーによって実行されるプログラムは、成功したときは 0 を、失敗したと きは非ゼロの値を戻します。

## トリガーを定義する方法

フローチャートを編集する際にトリガーを定義します。 1 つのフローチャートで定 義するトリガーは、同じパーティション内のすべてのフローチャートで使用できま す。

トリガーの実行可能ファイルは、*CAMPAIGN\_HOME*/partitions/partition\_name デ ィレクトリーに保管する必要があります。必要に応じて、この場所にサブディレク トリー triggers を作成することも、その他のサブフォルダーを使用することもで きます。

### トリガー・フォルダーおよびトリガーに関する作業

このセクションでは、以下のタスクについて説明します。

- 『トリガーを編成するためのフォルダーを作成するには』
- 126ページの『トリガー・フォルダーを移動するには』
- 126ページの『トリガー・フォルダーを編集するには』
- 127 ページの『トリガー・フォルダーを削除するには』
- 127 ページの『トリガーを作成するには』
- 128 ページの『トリガーを編集または移動するには』
- 129ページの『トリガーを削除するには』

#### トリガーを編成するためのフォルダーを作成するには

注:トリガー用のフォルダーを作成するための権限が必要です。

1. フローチャートを編集する際に、「オプション」>「トリガー」と選択します。

- 2. 「新規フォルダー」をクリックします。
- 3. フォルダーの「名前」を入力します。
- 4. オプションで、「説明」を入力します。
- 5. 「保存先」リストで、新規フォルダーの作成先フォルダーを選択するか、「なし (None)」を選択して最上位フォルダーを作成します。
- 6. 最上位フォルダーを作成する場合、セキュリティー・ポリシーを選択します。

サブフォルダーは、その親フォルダーからのセキュリティー・ポリシーを自動的 に継承します。

7. 「保存」をクリックします。

### トリガー・フォルダーを移動するには

注: トリガー・フォルダーを移動するための権限が必要です。

- フローチャートを編集する際に、「オプション」アイコンをクリックし、「トリ ガー」を選択します。「トリガー」ウィンドウが開きます。
- 2. 左側のペインで、移動するフォルダーを選択します。
- 3. 「**編集/移動**」をクリックします。 「フォルダーの編集」ウィンドウが開きま す。
- 4. 「保存先」ドロップダウン・リストで、選択したフォルダーの移動先フォルダー を選択するか、「なし (None)」を選択してフォルダーを最上位フォルダーにし ます。
- 5. フォルダーを最上位に移動する場合、セキュリティー・ポリシーを選択します。

サブフォルダーは、その親フォルダーからのセキュリティー・ポリシーを自動的 に継承します。

6. 「保存」をクリックします。

### トリガー・フォルダーを編集するには

注:トリガー・フォルダーを編集するための権限が必要です。

 フローチャートを編集する際に、「オプション」アイコンをクリックし、「トリ ガー」を選択します。

「トリガー」ウィンドウが開きます。

- 2. 左側のペインで、編集するフォルダーを選択します。
- 3. 「編集/移動」をクリックします。

「フォルダーの編集」ウィンドウが開きます。

- 4. フォルダーの「名前」を編集します。
- 5. 「説明」を編集します。
- 「保存先」ドロップダウン・リストで、選択したフォルダーの移動先フォルダー を選択するか、「なし (None)」を選択してフォルダーを最上位フォルダーにし ます。
- 7. 最上位フォルダーを編集する場合、セキュリティー・ポリシーを選択します。

サブフォルダーは、その親フォルダーからのセキュリティー・ポリシーを自動的 に継承します。

8. 「保存」をクリックします。

## トリガー・フォルダーを削除するには

注: トリガー・フォルダーを削除するための権限が必要です。

 フローチャートを編集する際に、「オプション」アイコンをクリックし、「トリ ガー」を選択します。

「トリガー」ウィンドウが開きます。

- 2. 左側のペインで、削除するフォルダーを選択します。
- 3. 「削除」をクリックします。

削除の確認を求めるプロンプトが出されます。

4. 「**OK**」をクリックします。

#### トリガーを作成するには

注: トリガーを作成するための権限が必要です。

1. フローチャートを編集する際に、「オプション」>「トリガー」と選択します。

「トリガー」ウィンドウが開きます。

2. 「新規項目」をクリックします。

新規トリガーのデータ・フィールドがウィンドウの右側に表示されます。

3. オプションで、トリガーの保存先フォルダーを「**保存先**」リストから選択しま す。

**注:** フォルダーの場所によって、フォルダーのセキュリティー・ポリシーに基づいてどのユーザーがトリガーにアクセスできるかが決まります。

- 4. トリガーの名前を「名前」フィールドに入力します。
  - 文字列にスペースを使用することはできませんが、下線 (\_) は使用できます。
  - この名前は、トリガーを保存するフォルダー内で固有でなければなりません。
- トリガーを最上位フォルダーに作成する場合は、セキュリティー・ポリシーを選 択するか、デフォルトのままにします。
- 6. オプションで、トリガーの説明を「説明」フィールドに入力します。

トリガーのテキスト記述は、文書の目的で、フリー・フォームで入力できます。 誰がトリガーを変更したか、いつ、また何が変更されたかに関する変更履歴を保 持することもできます。

7. 「コマンド」フィールドに、現行パーティション・ルートへの相対パスおよび Campaign サーバー上の実行可能ファイルのファイル名を入力します。「参照」 をクリックすると、現行パーティション内の実行可能ファイルを視覚的に選択す ることができます。 発信トリガーを作成する場合にそれを同期発信トリガーにするには、コマンドの 最後に疑問符 (?) を置きます。

トリガーを非同期にするには、コマンドの最後に特殊文字を置かないで、アンパ ーサンド (&) を使用してください。

- 8. 「保存」をクリックして、トリガーを保存します。
- 9. 「閉じる」をクリックして、「トリガー」ウィンドウを終了します。

#### トリガーを編集または移動するには

注: トリガーを編集または移動するための権限が必要です。

1. フローチャートを編集する際に、「オプション」>「トリガー」と選択します。

「トリガー」ウィンドウが開き、現行 Campaign パーティション内で定義されているすべてのトリガーが表示されます。

- 2. 「項目リスト」で、編集するトリガーを見つけて選択します。
- 3. 「編集/移動」をクリックします。

トリガーのデータ・フィールドがウィンドウの右側に表示されます。

4. オプションで、トリガーの保存先フォルダーを「**保存先**」リストで変更しま す。

**注:** フォルダーの場所によって、フォルダーのセキュリティー・ポリシーに基 づいてどのユーザーがトリガーにアクセスできるかが決まります。

- 5. オプションで、「名前」フィールドのトリガー名を変更します。
  - 文字列にスペースを使用することはできませんが、下線(\_)は使用できます。
  - この名前は、トリガーを保存するフォルダー内で固有でなければなりません。

**重要:**トリガー名を変更する場合、そのトリガーを参照しているプロセスはす べて構成解除され、実行できなくなります。新規トリガー名を参照するように 各プロセスを編集する必要があります。

- 6. 最上位フォルダーのトリガー変更する場合、またはトリガーを最上位フォルダーに移動する場合、セキュリティー・ポリシーを選択するか、デフォルトのままにします。
- 7. オプションで、「説明」フィールドのトリガーの説明を変更します。
- オプションで、「コマンド」フィールドの現行パーティション・ルートへの相対パスおよび Campaign サーバー上の実行可能ファイルのファイル名を変更します。「参照」をクリックすると、現行パーティション内の実行可能ファイルを視覚的に選択することができます。

発信トリガーを作成する場合にそれを同期発信トリガーにするには、コマンドの最後に疑問符 (?) を置きます。

トリガーを非同期にするには、コマンドの最後に特殊文字を置かないで、アン パーサンド (&) を使用してください。

- 9. 「保存」をクリックして、トリガーを保存します。
- 10. 「閉じる」をクリックして、「トリガー」ウィンドウを終了します。

### トリガーを削除するには

トリガーを削除する場合、そのトリガーを参照しているプロセスはすべて構成解除 され、実行できなくなります。各プロセスを編集して、削除されるトリガーへの参 照を削除する必要があります。

注: トリガーを削除するための権限が必要です。

1. フローチャートを編集する際に、「**オプション」>「トリガー**」と選択します。

「トリガー」ウィンドウが開き、現行 Campaign パーティション内で定義されて いるすべてのトリガーが表示されます。

- 2. 「項目リスト」で、削除するトリガーを見つけて選択します。
- 3. 「削除」をクリックします。

削除の確認を求めるプロンプトが出されます。

- 4. 「OK」をクリックして、トリガーを削除します。
- 5. 「閉じる」をクリックします。

### 発信トリガーのセットアップ

フローチャートでトリガーを使用するための権限が必要です。

## 発信トリガーを実行するためのプロセスのセットアップ

次のいずれかのプロセスが実行されたときに発信トリガーが実行されるようにする ことができます。

- スケジュール
- コール・リスト
- メール・リスト

**スケジュール**・プロセスでは、実行するトリガーを「**スケジュール**」タブで指定します。

「コール・リスト」プロセスおよび「メール・リスト」プロセスで実行するトリガ ーを「**実現**」タブで指定します。

これらのプロセスの構成について詳しくは、「*Campaign* ユーザーズ・ガイド」を参照してください。

## 成功したときに発信トリガーが実行されるようにフローチャートを セットアップするには

フローチャートを編集する際に、「システム管理」アイコンをクリックし、「拡張設定」を選択します。

「拡張設定」ウィンドウが開きます。

2. 「フローチャート成功でトリガー送信」で、実行するトリガーを選択します。

複数のトリガーを使用するには、各トリガーの名前をコンマおよびスペースで区 切って入力します。

3. 「OK」をクリックします。

選択したトリガーは、フローチャートが正常に実行されたときに実行されます (実稼働実行とテスト実行の両方)。

## 失敗したときに発信トリガーが実行されるようにフローチャートを セットアップするには

 フローチャートを編集する際に、「システム管理」アイコンをクリックし、「拡 張設定」を選択します。

「拡張設定」ウィンドウが開きます。

2. 「**フローチャート実行エラーでトリガー送**信」で、実行するトリガーを選択しま す。

複数のトリガーを使用するには、各トリガーの名前をコンマおよびスペースで区 切って入力します。

3. 「**OK**」をクリックします。

選択したトリガーは、フローチャートの実行中にエラーが発生したときに実行されます (実稼働実行とテスト実行の両方)。

## 着信トリガーのセットアップ

このセクションには以下の内容が記載されています。

- 『着信トリガーをセットアップするには』
- 131ページの『着信トリガーを使用して実行するためのスケジュール・プロセスの構成』
- 131ページの『トリガーをキャンペーンのすべてのフローチャートにブロードキャストするには』
- 132ページの『トリガーをフローチャートにブロードキャストするには』
- 132 ページの『トリガーをすべてのキャンペーンにブロードキャストするには』

注:フローチャートでトリガーを使用するための権限が必要です。

### 着信トリガーをセットアップするには

この手順を使用して、着信トリガーをセットアップします。

- 1. 127 ページの『トリガーを作成するには』の説明に従って、フローチャート内に トリガーを作成します。
- 131ページの『着信トリガーを使用して実行するためのスケジュール・プロセスの構成』の説明に従って、着信トリガーを受け取ったときに実行するすべてのフローチャートのスケジュール・プロセスを構成します。
- 3. 以下の説明に従って、Campaign Trigger Utility unica\_actrg (フォルダー *Campaign\_home*/bin にある)を使用してトリガーをブロードキャストします。

- 『トリガーをキャンペーンのすべてのフローチャートにブロードキャストする には』
- 132 ページの『トリガーをフローチャートにブロードキャストするには』
- 132ページの『トリガーをすべてのキャンペーンにブロードキャストするに は』

## 着信トリガーを使用して実行するためのスケジュール・プロセスの 構成

着信トリガーを使用してフローチャートを実行するには、ここで説明されている構成したスケジュール・プロセスを使ってそのフローチャートを開始する必要があります。

- ・「実施頻度」リストで、「カスタム設定」を選択します。
- 「**トリガー指定**」にチェック・マークを付けます。
- 「トリガー指定」フィールドに、ブロードキャストされたときにフローチャート を実行するトリガーの名前を入力します。複数のトリガーをそれぞれ1つのコン マと1つのスペースで区切ってください。

その他の条件に基づいて実行されるようにスケジュール・プロセスを構成すること もできます。トリガー条件を構成すると、指定されたトリガーを受け取ったとき に、後続のプロセスを追加で実行します。

重要:着信トリガーを受け取ったときにフローチャートが実行されるようにするに は、前述のとおりフローチャートでスケジュール・プロセスを構成し、そのフロー チャートを実行しておく必要があります。フローチャートを実行すると、フローチ ャートの状態が「待機中」または「listen 中」になります。これにより、トリガーを 受け取ったときにフローチャートを実行する準備が整ったことになります。トリガ ーがブロードキャストされたときに実行されていないフローチャートは、実行され ません。

スケジュール・プロセスの構成について詳しくは、「*Campaign* ユーザー・ガイド」 を参照してください。

## トリガーをキャンペーンのすべてのフローチャートにブロードキャ ストするには

Campaign Trigger Utility を次の構文で実行します。

unica\_actrg campaign\_code trigger\_name

以下に例を示します。

unica\_actrg C003 web\_hit

指定されたキャンペーンのフローチャートが、web\_hit 着信トリガーに基づいてブ ロードキャストを受信したときに実行されるように構成されているスケジュール・ プロセスを使って開始される場合、そのフローチャートはブロードキャスト・トリ ガーを受け取ったときに実行されます。

## トリガーをフローチャートにブロードキャストするには

Campaign Trigger Utility を次の構文で実行します。

unica actrg -n flowchart name trigger name

以下に例を示します。

unica actrg -n account inquiry flowchart web hit

トリガーは、指定された名前を持つ実行中のすべてのフローチャートに対してのみ ブロードキャストされます。指定された名前のフローチャートが、web hit インバ ウンド・トリガーに基づいてブロードキャストを受信したときに実行されるように 構成されているスケジュール・プロセスを使って開始される場合、そのフローチャ ートはブロードキャスト・トリガーを受け取ったときに実行されます。

## トリガーをすべてのキャンペーンにブロードキャストするには

Campaign Trigger Utility を次の構文で実行します。

unica actrg \* trigger name

以下に例を示します。

unica actrg \* web hit

トリガーは、すべてのキャンペーンのすべてのフローチャートにブロードキャスト されます。任意のフローチャートが、web hit インバウンド・トリガーに基づいて ブロードキャストを受信したときに実行されるように構成されているスケジュー ル・プロセスを使って開始される場合、そのフローチャートはブロードキャスト・ トリガーを受け取ったときに実行されます。

注: UNIX サーバーでは、アスタリスクはエスケープするか (¥\*)、二重引用符で囲 む ("\*") 必要があります。

# リモート Windows マシンでのトリガー・ユーティリティーのセットアッ プ

トリガーを UNIX 上の Campaign インストールに送信するように Windows マシン を構成できます。以下のステップに従い、リモート Windows マシン上で unica\_actrg ユーティリティーおよび必要なファイルのセットアップを行います。 1. 必要なファイルを取得します。

Windows 上の別の Campaign インストールからファイルをコピーすることも、 Campaign をインストールしてファイルを取得することもできます。

必要なファイルのリストについては、133ページの『unica actrg ユーティリティ ー: 必要なファイル』を参照してください。 Campaign のインストールについて 詳しくは、インストール文書を参照してください。

インストーラーを実行してトリガー・ユーティリティー・ファイルを取得し、不 要なファイルを削除する場合、トリガー・ユーティリティーに必要なファイルを 別のディレクトリーにコピーしてから、Campaign をアンインストールします。 Campaign のアンインストールについて詳しくは、「*IBM Campaignインストー*ル・ガイド」を参照してください。

- 2. リモート Windows マシン上でコマンド・プロンプトを開きます。
- 3. まだ設定されていない場合は、リモート Windows マシン上で CAMPAIGN\_HOME 環境変数を設定します。以下に例を示します。

set CAMPAIGN HOME=C:¥Unica¥Campaign

unica\_actrg.exe を実行する際、Campaign インストールが存在するマシンのポート およびサーバー名を指定します。

## unica\_actrg ユーティリティー: 必要なファイル

リモート Windows マシンで Campaign トリガー・ユーティリティー (unica\_actrg) を実行するには、以下のファイルが必要です。

表 32. unica\_actrg ユーティリティーで必要なファイル

ディレクトリー	ファイル名
<campaign_home>¥bin</campaign_home>	iconv.dll
	intl.dll
	libeay32.dll
	ssleay32.dll
	tls4d.dll
	unica_actrg.exe
	xerces-c_1_4.dll
<campaign_home>¥conf</campaign_home>	config.xml

# トリガーの管理に関する参照情報

このセクションの参照には、以下の内容が含まれます。

- 『トリガーによってサポートされるトークン』
- 135 ページの『Campaign トリガー・ユーティリティーのオプション』
- 135ページの『Campaign トリガー・ユーティリティーの構文』

### トリガーによってサポートされるトークン

トークンを発信トリガーのコマンド・ラインで使用して、実行中のフローチャート から特定の情報を渡すことができます。

次の表は、トリガーによってサポートされているトークンと、特定のトークンが使 用可能なプロセスをリストしています。

表 33. トリガーによってサポートされるトークン

トークン	説明	使用場所
<amuser></amuser>	フローチャートを実行している ユーザーの IBM EMM ユーザー 名。	発信トリガーをサポートして いるプロセス。
<campcode></campcode>	現行キャンペーンに関連付けら れているキャンペーン・コー ド。	トリガー、失敗時のトリガ ー、成功時のトリガーをサポ ートしているプロセス。
<contactlist></contactlist>	コンタクト・プロセスで指定さ れるコンタクト・リスト。 コンタクト・リストがファイル に書き込まれる場合、適切な絶 対パス名およびファイル名によ ってトリガー・トークンが置き 換えられます。 コンタクト・リストがデータベ ース表に書き込まれる場合、ト	「 <b>コール・リスト</b> 」プロセス および「 <b>メール・リスト</b> 」プ ロセス。
<contactlog></contactlog>	<ul><li>ークンは単に削除されます。</li><li>特定のコンタクト・プロセスの</li><li>ログ。</li></ul>	「 <b>コール・リスト</b> 」プロセス および「 <b>メール・リスト</b> 」プ
	ログがファイルに書き込まれる 場合、適切な絶対パス名および ファイル名によってトリガー・ トークンが置き換えられます。	ロセス。
<flowchartfilename></flowchartfilename>	フローチャートの .ses ファイ ルの絶対パス名	発信トリガーをサポートして いるプロセス。
<ixuser></ixuser>	Distributed Marketing ユーザーの ユーザー名。	トリガー、失敗時のトリガ ー、成功時のトリガーをサポ ートしているプロセス。
<outputtemptable></outputtemptable>	<ul> <li>一時テーブルを作成するため</li> <li>に、「詳細設定」ウィンドウの</li> <li>下の前処理および後処理において未加工 SQL で使用するトークン。例: Create</li> <li>&lt;0UTPUTTEMPTABLE&gt; as SELECT</li> <li>CustIDs from CustomerTable</li> <li>WHERE</li> </ul>	選択プロセス。
<owner></owner>	フローチャートを作成したユー ザーの Marketing Platform セキ ュリティー・ユーザー名。	トリガー、失敗時のトリガ ー、成功時のトリガーをサポ ートしているプロセス。
<processname></processname>	現行プロセス・ボックスの名 前。	トリガーをサポートしている プロセス。
<processid></processid>	現行プロセス・ボックスの ID。	トリガーをサポートしている プロセス。

表 33. トリガーによってサポートされるトークン (続き)

トークン	説明	使用場所
<sessionid></sessionid>	現行フローチャートの ID。	トリガー、失敗時のトリガ ー、成功時のトリガーをサポ ートしているプロセス。
<sessionname></sessionname>	現行フローチャートの名前。	トリガー、失敗時のトリガ ー、成功時のトリガーをサポ ートしているプロセス。
<uservar.<i>UserVarName&gt;</uservar.<i>	任意のユーザー変数の値。現行 フローチャートでユーザー変数 を定義する必要があります。	トリガー、失敗時のトリガ ー、成功時のトリガーをサポ ートしているプロセス。

# Campaign トリガー・ユーティリティーの構文

[-p <port>] [-s <server\_name>] [-v] [<campaign\_code> | -n
"<flowchart\_name>"] "<trigger1>" "<trigger2>"...

# Campaign トリガー・ユーティリティーのオプション

unica\_actrg ユーティリティーは、以下のオプションをサポートしています。

表 34. Campaign	トリガー・	ユーティ	リティー	-のオプション
----------------	-------	------	------	---------

パラメーター	使用法
-p < <i>port</i> >	ユーティリティーを実行するために使用するポート。
-s <server_name></server_name>	Campaign サーバーの名前。
- V	Campaign Trigger Utility のバージョンを報告します。
<campaign_code></campaign_code>	実行するすべてのフローチャートが含まれているキャンペー ンの ID。このパラメーターを -n " <i><flowchart_name></flowchart_name></i> " パラ メーターと一緒に使用することはできません。
-n " <flowchart_name>"</flowchart_name>	実行するフローチャートの名前。フローチャート名は必ずし も固有名ではないため、この名前を持つすべてのフローチャ ートがブロードキャスト・トリガーを受け取ります。このパ ラメーターを <campaign_code> パラメーターと一緒に使用 することはできません。</campaign_code>
" <trigger1>" "<trigger2>"</trigger2></trigger1>	使用するトリガーの名前。トリガーは、少なくとも 1 つは 指定しなければなりません。オプションで、複数のトリガー をスペースで区切って指定できます。
# 第 12 章 ロギングの管理

Campaign では、次のような種類のログを使用できます。

- 『Campaign リスナー・ログ』
- 『Campaign Web アプリケーション・ログ』
- 138 ページの『Campaign Server Manager ログ』
- 138 ページの『Campaign セッション・ユーティリティー・ログ』
- 138ページの『クリーンアップ・ユーティリティー・ログ』
- 138ページの『フローチャート・ログ』
- 138ページの『セッション・ログ』
- 139 ページの『Web 接続ログ』
- 139 ページの『Windows イベント・ログ』 (Campaign サーバーが Windows 上に インストールされている場合)
- 139 ページの『log4j ログ・ファイル』

# Campaign リスナー・ログ

Campaign リスナー・ログ・ファイルには、Campaign リスナーによって生成される イベントが含まれます。

このログは、*Campaign\_home*/logs ディレクトリーにあるファイル unica\_aclsnr.log に含まれます。

システムのロギング設定に応じて、Campaign リスナーの複数の履歴ログが *Campaign\_home*/logs ディレクトリーに含まれることがあります。各ログは拡張番 号で終わります (例えば unica\_aclsnr.log.1、unica\_aclsnr.log.2 など)。

保持されるログの数と、各ログの最大サイズは、「アプリケーション」>「キャンペ ーン」> unicaACListener > logMaxBackupIndex および「アプリケーション」>「キ ャンペーン」> unicaACListener > logMaxFileSize プロパティーの値にそれぞれ依 存します。

# Campaign Web アプリケーション・ログ

Campaign Web ログ・ファイルには、Campaign Web アプリケーションによって生成されるイベントが含まれます。

このログは、デフォルトでは *Campaign\_home*/logs ディレクトリーにある campaignweb.log というファイルに含まれます。

システムのロギング設定に応じて、Campaign Web アプリケーションの複数の履歴 ログが *Campaign\_home*/log ディレクトリーに含まれることがあります。各ログは 拡張番号で終わります (例えば campaignweb.log.1、campaignweb.log.2 など)。 (デフォルトでは *Campaign\_home*/conf ディレクトリーにある) campaign\_log4j.properties ファイルの中で、Campaign Web アプリケーションの ロギング・プロパティーを構成できます。

### Campaign Server Manager ログ

Campaign Server Manager ログ・ファイル (unica\_svradm.log) は、unica\_svradm ユーティリティーの実行時にエラーが発生すると、生成されます。このログ・ファ イルは、*Campaign\_home*/logs ディレクトリーに配置されます。

### Campaign セッション・ユーティリティー・ログ

Campaign セッション・ユーティリティー・ログ・ファイル (unica\_acsesutil.log) は、unica\_acsesutil ユーティリティーの実行時にエラーが発生すると、生成され ます。このログ・ファイルは、*Campaign\_home*/partitions/partition\_name/logs ディレクトリーに配置されます。

# クリーンアップ・ユーティリティー・ログ

クリーンアップ・ユーティリティー・ログ・ファイル (unica\_acclean.log) は、 unica\_acclean ユーティリティーの実行時にエラーが発生すると、生成されます。 このログ・ファイルは、*Campaign\_home*/partitions/partition\_name/logs ディレ クトリーに配置されます。

# フローチャート・ログ

それぞれのキャンペーン・フローチャートは、実行されるときにフローチャート固 有のロギング情報を生成します。

ログは campaign\_name\_\_campaign\_code\_\_flowchart\_name.log という名前のファイ ルに含まれます。デフォルトでは、このログ・ファイルは Campaign\_home/ partitions/partition\_name/logs ディレクトリーに入ります。ただし、フローチャー トを編集するとき、「オプション」メニューをクリックして「ログ・パスの変更」 を選択することにより、ログの場所をカスタマイズできます。なお、Campaign のプ ロパティーで AllowCustomLogPath を有効にしない限り、「ログ・パスの変更」を 選択できないことに注意してください。

# セッション・ログ

ユーザーがフローチャートを表示したとき、編集前に、そのフローチャートのセッション情報のログが (*Campaign\_home*/partitions/*partition\_name*/logs ディレクトリーにある) ac\_sess.log ファイルに書き込まれます。

ac\_sess.log ファイルには、フローチャートが開いたときのサーバー接続についての情報が記録されます。

### Web 接続ログ

ユーザーが Campaign にログインしたとき、(*Campaign\_home*/partitions/ *partition\_name*/logs ディレクトリーにある) ac\_web.log ファイルの中に情報がログ として記録されます。

ac\_web.log ファイルには、Campaign システム・データベースへのユーザー接続に ついての情報が記録されます。

# Windows イベント・ログ

Campaign が Windows コンピューター上にインストールされている場合、オプショ ンで、Campaign リスナーおよびフローチャートのイベントを Windows イベント・ ログに記録することができます。 Windows イベント・ログが使用されるかどうか は、以下の構成プロパティーによって決まります。

- Applications > Campaign > unicaACListener > enableWindows-EventLogging (Campaignリスナー用)。
- Applications > Campaign > partitions > *partition\_name*> server > logging > enableWindowsEventLogging (そのパーティション内のフローチャート用)。

# log4j ログ・ファイル

Campaign Web アプリケーションは、構成、デバッグ、およびエラー情報をログに 記録するために Apache log4j ユーティリティーを使用します。

# ログを操作する

ログを操作する方法については、以下を参照してください。

- 『Campaign リスナーのロギング・タスク』
- 140 ページの『Campaign Web アプリケーションのロギング・タスク』
- 140ページの『フローチャートのロギング・タスク』
- 143 ページの『Windows イベント・ロギング・タスク』

### Campaign リスナーのロギング・タスク

Campaign リスナーのロギング・タスクには、以下のものが含まれます。

- 『Campaign リスナー・ロギングを構成するには』
- 140ページの『Campaign リスナー・ログ・ファイルを表示するには』

### Campaign リスナー・ロギングを構成するには

注: このタスクを完了するには、Marketing Platform を使用するための適切な権限が 必要です。詳しくは、「Marketing Platform 管理者ガイド」を参照してください。

構成ページで、「キャンペーン」>「unicaACListener」カテゴリーの以下のプロパ ティーを必要に応じて設定します。プロパティーについて詳しくは、コンテキス ト・ヘルプまたは「*Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

enableWindowsEventLogging

- loggingLevels
- logMaxBackupIndex
- logMaxFileSize
- windowsEventLoggingLevels

### Campaign リスナー・ログ・ファイルを表示するには

1. 「設定」>「Campaign 設定」を選択します。

「キャンペーン設定」ページが開き、様々な管理タスクへのリンクが表示されま す。

2. 「システム・ログの表示」をクリックします。

現在の Campaign リスナー・ログが新しいブラウザー・ウィンドウで開きます。 ログ・ファイルを開いた後で発生したイベントは、リストに含まれません。

# Campaign Web アプリケーションのロギング・タスク

Campaign Web アプリケーションのロギング・タスクには、以下のものが含まれます。

- 『Campaign Web アプリケーション・ロギングを構成するには』
- ・ 『Campaign Web アプリケーション・ログのファイル名と場所を変更するには』

### Campaign Web アプリケーション・ロギングを構成するには

- 「アプリケーション」>「キャンペーン」>「ロギング (logging)」>「プロパティー」で指定されたファイルを見つけます。デフォルトでは、このファイルは *Campaign\_home*/conf/campaign\_log4j.properties です。
- このファイル内のコメントに従って、Web アプリケーション・ロギング設定を 変更します。
- 3. ファイルを保存して、Web アプリケーションを再始動します。

### Campaign Web アプリケーション・ログのファイル名と場所を変更 するには

注: このタスクを完了するには、Marketing Platform を使用するための適切な権限が 必要です。詳しくは、「*Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

構成ページで、「キャンペーン」>「ロギング (logging)」カテゴリーの log4jConfig プロパティーの値を変更し、Campaign Web アプリケーション・ログ のプロパティーを定義するために使用されるファイルの場所と名前を指定します。

# フローチャートのロギング・タスク

フローチャートのロギング・タスクには、以下のものが含まれます。

- 141 ページの『フローチャート・ロギングを構成するには』
- 141 ページの『フローチャート・ロギングを有効または無効にするには』
- 141 ページの『フローチャート・ロギング・レベルを変更するには』
- 142ページの『フローチャート・ログ・ファイルの場所をカスタマイズするに は』

- 142ページの『フローチャート・ログ・ファイルを表示するには』
- 142ページの『フローチャート・ログ・ファイルを消去するには』

### フローチャート・ロギングを構成するには

**注:** このタスクを完了するには、Marketing Platform を使用するための適切な権限が 必要です。詳しくは、「*Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

構成ページで、Campaign > partitions > partition[n] > server > logging カテ ゴリーの以下のプロパティーを必要に応じて変更します。プロパティーについて詳 しくは、コンテキスト・ヘルプまたは「*Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照し てください。

- allowCustomLogPath
- enableLogging
- enableWindowsEventLogging
- keepFlowchartLogOpen
- logFileBufferSize
- loggingCategories
- loggingLevels
- logMaxBackupIndex
- logMaxFileSize
- logProcessId
- windowsEventLoggingCategories
- windowsEventLoggingLevels

### フローチャート・ロギングを有効または無効にするには

- 1. フローチャートの編集時に、「オプション」アイコンをクリックします。
- 「オプション」メニューで、「ログを有効にする」コマンドを次のように確認します。
  - このコマンドにチェック・マークが表示されている場合、ロギングは有効です。
  - チェック・マークが表示されない場合、ロギングは無効になっています。
- 3. 「ログを有効にする」を選択すると、現在の設定が切り替わります。

#### フローチャート・ロギング・レベルを変更するには

1. フローチャートの編集時に、「オプション」>「ログ・オプション」を選択しま す。

「**ログ・オプション**」ウィンドウが開きます。

- 2. ログに記録するメッセージ・タイプを確認します。以下の 4 つのロギング・レベルがあり、次第に冗長度が高くなります。
  - エラー フローチャートのエラー。
  - 警告 フローチャートの警告。
  - 通知 通知メッセージ。

• デバッグ - 詳細なデバッグ情報。

通知メッセージやデバッグ・メッセージをログに記録した場合、ログ・ファイル が急速に大きくなる可能性があるため、デバッグする場合を除いてこれらのオプ ションをクリアするのが適切でしょう。

- 3. ログに記録するメッセージ・カテゴリーを確認します。
- 4. 「**ログ・エントリーにプロセス ID を含める**」にチェック・マークを付けると、 各エントリーにプロセス ID が含まれます。
- 5. 「OK」をクリックして、設定を保存します。

#### フローチャート・ログ・ファイルの場所をカスタマイズするには

ログ・ファイルの場所をカスタマイズするには、その前に、Campaign > partitions > partition[n] > server > logging カテゴリーで Campaign サーバーの構成プロ パティー AllowCustomLogPath を有効にしておく必要があります。構成プロパティ ーの設定について、詳しくは「*Campaign 管理者ガイド*」を参照してください。

デフォルトでは、それぞれのフローチャート・ログ・ファイルは Campaign\_home/partitions/partition\_name/logs ディレクトリーに保管されます。 ただし、フローチャートを編集するとき、フローチャートのログ・ファイルを別の 場所に保管するよう指定できます。

1. フローチャートの編集時に、「ツール」>「ログ・パスの変更」を選択します。

「ログ・パスの選択」ウィンドウが表示されます。

「**ログ・パスの変更**」オプションが使用可能でない場合、サーバーの構成プロパ ティー AllowCustomLogPath を有効にして、フローチャートの編集で操作を再試 行してください。

- 「ディレクトリー」リストを使用して、フローチャート・ログ・ファイルの保管 場所となるディレクトリーを見つけます。 いずれかのディレクトリー名をダブ ルクリックすると、そこに含まれるディレクトリーが表示されます。
- 3. オプションで、「**ディレクトリー**」リストの上にある「新規フォルダー」アイコ ンをクリックして、新しいディレクトリーを Campaign サーバー上に作成するこ ともできます。
- 4. リストでディレクトリーを選択した後、「**開く**」をクリックすると選択項目が受け入れられます。「ログ・パスの選択」ウィンドウが自動的に閉じます。

これで、指定したディレクトリーにフローチャートのログ・ファイルが保管されるようになります。

### フローチャート・ログ・ファイルを表示するには

フローチャートの編集時に、「オプション」>「ログの表示」を選択します。

フローチャート・ログ・ファイルが新しいブラウザー・ウィンドウで開きます。

### フローチャート・ログ・ファイルを消去するには

フローチャートの編集時に、「オプション」>「ログの消去」を選択します。

ログ・ファイルの内容が削除されます。

# Windows イベント・ロギング・タスク

Windows イベント・ロギング・タスクには、以下のものが含まれます。

- 『Campaign リスナー用の Windows イベント・ロギングを構成するには』
- ・ 『フローチャート用の Windows イベント・ロギングを構成するには』

### Campaign リスナー用の Windows イベント・ロギングを構成する には

注: このタスクを完了するには、Marketing Platform を使用するための適切な権限が 必要です。詳しくは、「Marketing Platform 管理者ガイド」を参照してください。

構成ページで、「アプリケーション」>「キャンペーン」>「unicaACListener」カテ ゴリーの enableWindowsEventLogging および windowsEventLoggingLevels プロパ ティーを必要に応じて設定します。プロパティーについて詳しくは、コンテキス ト・ヘルプまたは「*Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

### フローチャート用の Windows イベント・ロギングを構成するには

注: このタスクを完了するには、Marketing Platform を使用するための適切な権限が 必要です。詳しくは、「*Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

構成ページで、Campaign > partitions > partition[n] > server > logging カテ ゴリーの以下のプロパティーを必要に応じて変更します。

- enableWindowsEventLogging
- windowsEventLoggingCategories
- windowsEventLoggingLevels

プロパティーについて詳しくは、コンテキスト・ヘルプまたは「*Marketing Platform* 管理者ガイド」を参照してください。

# log4j ロギング・タスク

Campaign の log4j ログ機能を使用すると、以下のタスクを実行できます。

- ・ 『log4j のロギングを構成するには』
- 144 ページの『campaign\_log4j.properties ファイルの場所を変更するには』

### log4j のロギングを構成するには

IBM Campaign 用の log4j のロギングを構成するには、Campaign インストール済み 環境の conf ディレクトリーにある campaign\_log4j.properties ファイル内でプロ パティー値を設定します。例えばログ・ファイルの場所を変更するには、 campaign\_log4j.properties ファイルを開いて、log4j.appender.FILE.File プロパ ティーの値を、ログ・ファイルの書き込み先となる完全修飾パスに変更します。

log4j プロパティー設定の変更については、以下の情報源を参照してください。

- campaign\_log4j.properties ファイル内のコメント。
- 以下の Apache Web サイトにある log4j 資料:

http://logging.apache.org/log4j/1.2/manual.html

注: campaign\_log4j.properties ファイル内の値を変更した後、IBM Campaign Web アプリケーションを再始動する必要があります。

# campaign\_log4j.properties ファイルの場所を変更するには

構成ページで、「キャンペーン」>「ロギング (logging)」カテゴリーの log4jConfig プロパティーの値を適切な場所に変更します。

# 第 13 章 固有コードの管理

Campaign の各キャンペーン、オファー、処理、およびセルには、コード・ジェネレ ーターによって生成される識別コードがあり、指定された形式に準拠します。

Campaign 管理者は、以下の操作を実行できます。

- 各タイプのコードを生成する方法やコードの有効な形式を制御するために構成パ ラメーターを設定します。
- デフォルトのジェネレーターが必要を満たさない場合は、カスタム・コード・ジェネレーターを作成し、セットアップします。

# キャンペーン・コードについて

キャンペーン・コードとは、キャンペーンのグローバル・ユニーク ID のことで す。各キャンペーンにコードが必要であり、同じ Campaign パーティション内で 2 つのキャンペーン・コードが同じであってはなりません。

注: キャンペーン・コードは各パーティション内で固有でなければなりませんが、 キャンペーン名は固有である必要はありません。

ユーザーがキャンペーンを作成すると、コード・ジェネレーターによって「**キャン** ペーン・コード」フィールドに固有値が自動的に取り込まれます。

ユーザーは「コードの再生成」をクリックしてコード・ジェネレーターによって新 規 ID が提供されるようにすることも、コードを手動で入力することもできます。 ユーザーがコードを手動で入力する場合は、指定された形式の固有のコードでなけ ればなりません。

### オファー・コードについて

オファー・コードとは、オファーのグローバル・ユニーク ID のことです。 Campaign の各オファーにはコードが必要であり、同じ Campaign パーティション内 で 2 つのオファー・コードが同じであるべきではありません。

オファー・コードで許容される構成は 1 文字から 5 文字です。これはオファー・ テンプレートを作成するときに指定します。

ユーザーがオファーを作成すると、コード・ジェネレーターによって「オファー・ コード」のフィールドに固有値が自動的に取り込まれます。

ユーザーは「コードの再生成」をクリックしてコード・ジェネレーターによって新 規 ID が提供されるようにすることも、コードを手動で入力することもできます。 オファー・コードをオーバーライドするには、ユーザーに適切な権限が必要です。

**重要:** ユーザーがどのオファー・コードもオーバーライドしない場合のみ、自動的 に生成されるセル・コードのグローバルな固有性は保証されます。

### セル・コードについて

セル・コードは、フローチャートまたはターゲット・セル・スプレッドシート内の 各セルの ID です。

新規出力セルを作成するフローチャート・プロセス (例えば、選択、マージ、セグ メント、サンプル、オーディエンス、抽出などのプロセス) では、プロセスの出力 のセル・コードが「**全般**」タブで構成されます。

デフォルトでは、セル・コードは自動的に生成されます。ユーザーは「自動生成」 チェック・ボックスをクリアし、有効な形式でコードを入力することにより、生成 されたセル・コードを手動でオーバーライドできます。

セル・コードがフローチャート内で固有でなければならないかどうかは、 AllowDuplicateCellCodes 構成パラメーターの設定によって異なります(『コード 生成の参照』で説明されています)。 AllowDuplicateCellCodes の値が FALSE の場 合、セル・コードはフローチャート内で固有でなければなりません。異なるフロー チャートおよびキャンペーンであれば、同じセル・コードを使用できます。 AllowDuplicateCellCodes の値が TRUE の場合、単一フローチャート内のセル・コ ードは固有である必要はありません。

複製セル・コードが許可されていない場合にユーザーが同じフローチャートのどこ かで既に使用されているセル・コードを入力する場合、エラーは即時生成されませ ん。ただし、複製セル・コードが許可されていない場合、ユーザーはフローチャー ト検証ツールを使用して、フローチャートを検証して複製セル・コードを検出する ことができます。フローチャートの検証について詳しくは、「Campaign ユーザー ズ・ガイド」のフローチャートの検証に関するセクションを参照してください。

重要: ユーザーがどのセル・コードもオーバーライドしない場合のみ、自動的に生成されるセル・コードの固有性は保証されます。セルの処理について詳しくは、「*Campaign* ユーザーズ・ガイド」を参照してください。

# 処理コードについて

特定の時点で使用されるセルとオファーの固有の組み合わせのことを、Campaign で は処理と呼びます。各処理は、処理コードによって一意的に識別されます。

処理について詳しくは、「Campaign ユーザー・ガイド」を参照してください。

フローチャートが実行されるたびに、処理と処理コードが個別に生成されます。ユ ーザーが 1 月 1 日にフローチャートを実行し、1 月 15 日に再び実行する場合、2 つの別個の処理が作成されます。これにより、オファーに対するレスポンスを可能 な限り詳細にトラッキングすることができます。

注: 処理コードは、生成後にオーバーライドすることができません。

# コード形式

各タイプの生成コードのデフォルトおよび有効な形式では、文字タイプを表す一連 の文字が使用されます。

コード形式を制御するために使用できる文字を以下の表にリストします。

表 35. 制御コード形式

文字	扱い
A-Z、任意の記号、	生成コードの定数値
b、d-m、o-w、y、z (つまり c、n、x を除く b-z)	
a	任意の大文字 A-Z
c または x	任意の大文字 A-Z、または任意の数値 0-9
x	任意の大文字 A-Z、任意の数値 0-9。ただし、ユーザーは生 成文字を任意の ASCII 文字で置き換えることができます。
	可変長コードを指定するには、コード形式の末尾に 1 つ以 上の "x" 文字を置き、allowVariableLengthCodes プロパテ ィーを "TRUE" に設定する必要があります。
n	任意の数値 0-9

# 例

表 36. 制御コード形式の例

形式定義	生成コードの例
CAMP_aaannn	CAMP_DWP839
	(CAMP_、ランダムに生成された 3 つの大文字、ランダムに 生成された 3 桁の数値の順)

# デフォルトのコード形式

IBM Campaign に組み込まれているコード・ジェネレーターによって生成されるキャンペーン、セル、オファー、および処理の各コードのデフォルトの形式を以下の表に示します。

表 37. デフォルトのコード形式

コード・タイプ	デフォルト値	定義される場所
キャンペーン	Cnnnnnnnn	Marketing Platform の「構成」ペー ジの campCodeFormat パラメータ ー
セル	Annnnnnn	Marketing Platform の「構成」ページの cellCodeFormat パラメーター
オファー	nnnnnnnn	Campaign で定義される各オファ ー・テンプレート内
処理	nnnnnnnn	Campaign で定義される各オファ ー・テンプレート内

### コード形式の要件

キャンペーン、セル、処理、オファーの固有のコードは、32 文字以下でなければな りません。これは、デフォルトのジェネレーターによって生成されるコードとカス タム・コード・ジェネレーターによって生成されるコードの両方に当てはまりま す。また、手動で入力するコードにも当てはまります。

オファー・コードではスペース文字を使用できません。

### デフォルトのコード形式の変更について

Campaign に組み込まれているコード・ジェネレーターよって生成されるコードのデフォルトの形式はオーバーライドすることができます。

デフォルトのコード形式を変更する前に、Campaign にあるコード形式の制限を思い に留めておいてください。

### キャンペーン・コード形式を変更するには

**注:** このタスクを完了するには、Marketing Platform を使用するための適切な権限が 必要です。詳しくは、「*Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

キャンペーン・コード形式を変更すると、新規形式がすべての新規キャンペーンに 適用されます。既存のキャンペーンは引き続き以前の形式の現行コードを使用しま す。ただし、ユーザーがキャンペーン・コードを編集する場合、新規コードはキャ ンペーン・コードの現行の形式に従う必要があります。

必要に応じて、「構成」ページの Campaign > partitions > partition[n] > server > systemCodes カテゴリーの campCodeFormat プロパティーを設定します。 147 ページの『コード形式』で説明されている形式に関するガイドラインに従って ください。

### セル・コード形式を変更するには

**注:** このタスクを完了するには、Marketing Platform を使用するための適切な権限が 必要です。詳しくは、「*Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

**重要:** ユーザーがフローチャートを作成した後は、セル・コード形式を変更しない でください。それを行うと、既存のフローチャートが無効になります。

必要に応じて、「構成」ページの Campaign > partitions > partition[n] > server > systemCodes カテゴリーの cellCodeFormat プロパティーを設定します。 147 ページの『コード形式』で説明されている形式に関するガイドラインに従ってください。

### 既存のオファー・テンプレートのオファーまたは処理コード形式を変 更するには

作成するオファー・テンプレートごとに、オファーおよび処理コード形式を定義し ます。オファーまたは処理コード形式は、それぞれのオファー・テンプレートを作 成する時点で設定します。テンプレートを編集することによって、既存のオファ ー・テンプレートのオファーおよび処理コード形式を変更することもできます。た だし、オファーを作成するためにテンプレートがまだ使用されていない場合に限り ます。

**注:** 既存のオファー・テンプレートのオファーおよび処理コード形式の変更は、オファーを作成するためにテンプレートがまだ使用されていない場合のみ行えます。

- 1. Campaign にログインし、「設定」>「Campaign 設定」をクリックします。
- 2. 「Campaign 設定」ページで、「オファー・テンプレートの定義」をクリックします。
- 3. 変更するオファーまたは処理コード形式が含まれるオファー・テンプレートのリ ンクをクリックします。
- 「オファー・テンプレートの定義」ページで、「オファー・コード形式」または 「処理コード形式」を必要に応じて変更します。その際、『コード形式の要件』 にある形式要件に従います。

**重要:**オファー・コード形式ではスペース文字を使用できません。

5. 「完了」をクリックします。

# コード構成プロパティーについて

Campaign でキャンペーン・コードやセル・コード、コード・ジェネレーター、およ びオファー・コードの特定の属性を構成するためのプロパティーはすべて、 Marketing Platform の「構成」ページで設定されます。

オファー・コード形式は、パラメーターを使用して構成されるのではなく、オファ ー・テンプレートで定義されます。

### コード・ジェネレーターについて

コード・ジェネレーターとは、Campaign で必要な形式のキャンペーン、セル、オファー、および処理などの各コードを自動生成するために使用されるプログラムのことです。

組み込みコード・ジェネレーターに加えて、Campaign は、ユーザーが独自に開発す るカスタム・コード・ジェネレーターもサポートしています。

# Campaign のデフォルトのコード・ジェネレーター

Campaign には、各タイプのコードに対して指定されているデフォルトの形式と一致 するキャンペーン、セル、オファー、および処理の各コードを自動的に生成するコ ード・ジェネレーターが備えられています。

各タイプのコードの組み込みコード・ジェネレーターの名前とその場所を以下の表 に示します。

表 38. デフォルトのコード・ジェネレーター

コード・タイプ	デフォルトのジェネレーター	場所
キャンペーン	uaccampcodegen	<install_dir>/Campaign/bin</install_dir>
セル	uaccampcodegen	<install_dir>/Campaign/bin</install_dir>

表 38. デフォルトのコード・ジェネレーター (続き)

コード・タイプ	デフォルトのジェネレーター	場所
オファー	uacoffercodegen	<install_dir>/Campaign/bin</install_dir>
処理	uaccampcodegen	<install_dir>/Campaign/bin</install_dir>

<install\_dir> を、Campaign がインストールされている実際のディレクトリーに置き 換えます。

Campaign に組み込まれているコード・ジェネレーターでは貴社の必要が満たされない場合には、カスタム・コード・ジェネレーターを開発して使用することができます。

# カスタム・コード・ジェネレーターについて

Campaign のデフォルトのコード・ジェネレーターでは必要が満たされない場合、独自のコード・ジェネレーターを開発して使用することができます。

カスタム・コード・ジェネレーターとは、固有のキャンペーン、オファー、または セルのコード (あるいは 3 つすべて) を出力するように開発するプログラムのこと です。カスタム・コード・ジェネレーターは、Campaign Web アプリケーションが 配置されているオペレーティング・システム用の実行可能ファイルにコンパイルで きるプログラミング言語であれば、どの言語ででも開発できます。

重要: Campaign Web および分析サーバーが別のマシンに配置される場合は、コード・ジェネレーターをすべてのマシンに配置してください。

カスタム・コード・ジェネレーターを作成する最も一般的な理由は、所属する会社 のビジネスの必要を満たすコードを生成することです。例えば、キャンペーン所有 者のイニシャルと現在日付が含まれるキャンペーン・コードが作成されるようにカ スタム・コード・ジェネレーターをセットアップすることもできます。

### カスタム・コード・ジェネレーターの要件

カスタム・コード・ジェネレーターは、以下の要件を満たしている必要がありま す。

- 実行可能ファイル名は、スペースを含まない単一の語でなければなりません。
- 生成される固有コードは、指定されているコード形式と一致している必要があり ます。これは、カスタム・コード・ジェネレーターへの入力として渡されます。
- カスタム・コード・ジェネレーターは、固有のコードまたはエラーを標準出力ストリーム (stdout) に出力する必要があります。
- カスタム・キャンペーンおよびセル・コード・ジェネレーターは /Campaign/bin ディレクトリーに置く必要があります。カスタム・オファー・コード・ジェネレ ーターは、任意の場所に置くことができます。これは、Marketing Platform の「構 成」ページのオファー・コード・ジェネレーターの構成プロパティーで指定する 必要があります。

# カスタム・コード・ジェネレーターを使用するための Campaign の構成について

Marketing Platform の「構成」ページのプロパティーを使用して、キャンペーン・コードおよびセル・コードの形式およびジェネレーターを指定します。

**注:** このタスクを完了するには、IBM EMM で適切な権限が必要です。詳しくは、 「*Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

作成するオファー・テンプレートごとに、オファーおよび処理コード・ジェネレー ターを指定します。テンプレートに基づいて作成される各オファーは、固有のオフ ァー・コードおよび処理コードを生成するために指定するプログラムを使用しま す。

### キャンペーン・コード・ジェネレーターを指定するには

注: このタスクを完了するには、Marketing Platform を使用するための適切な権限が 必要です。詳しくは、「Marketing Platform 管理者ガイド」を参照してください。

必要に応じて、「構成」ページの Campaign > partitions > partition[n] > server > systemCodes カテゴリーの campCodeGenProgFile プロパティーの値をカスタム・キャンペーン・コード・ジェネレーターの実行ファイル名に設定します。

### セル・コード・ジェネレーターを指定するには

注: このタスクを完了するには、Marketing Platform を使用するための適切な権限が 必要です。詳しくは、「Marketing Platform 管理者ガイド」を参照してください。

必要に応じて、「構成」ページの Campaign > partitions > partition[n] > server > systemCodes カテゴリーの cellCodeGenProgFile プロパティーの値をカ スタム・キャンペーン・コード・ジェネレーターの実行可能ファイル名に設定しま す。

### オファー・コード・ジェネレーターを指定するには

- 1. Campaign にログインし、「設定」>「Campaign 設定」をクリックします。
- 2. 「Campaign 設定」ページで、「オファー・テンプレートの定義」をクリックします。
- 指定するオファー・コード・ジェネレーターが含まれるオファー・テンプレートのリンクをクリックします。
- 新しいオファー・テンプレートの定義のページの「手順 1」で、カスタム・オフ ァー・コード・ジェネレーターの実行可能ファイル名を「オファー・コード・ジ ェネレーター」フィールドの値として入力します。
- 5. 「完了」をクリックします。

### 処理コード・ジェネレーターを指定するには

- 1. Campaign にログインし、「設定」>「Campaign 設定」をクリックします。
- 2. 「Campaign 設定」ページで、「オファー・テンプレートの定義」をクリックします。

- 指定するオファー・コード・ジェネレーターが含まれるオファー・テンプレートのリンクをクリックします。
- 4. 「手順 1: オファー・テンプレートの定義」ページで、カスタム処理コード・ジェネレーターの実行可能ファイル名を「処理コード・ジェネレーター」フィールドの値として入力します。このフィールドを空白のままにする場合、デフォルトの処理コード・ジェネレーターが使用されます。
- 5. 「完了」をクリックします。

### カスタム・コード・ジェネレーターの作成について

カスタム・コード・ジェネレーターは、Campaign を実行しているオペレーティン グ・システム用の実行可能ファイルにコンパイルできる言語であれば、どの言語で でも作成できます。

### 固有コードの出力について

カスタム・コード・ジェネレーターは、32 文字以下の固有のコードを標準出力スト リーム (stdout) に出力する必要があります。

重要: Campaign は、オファー・コードおよびセル・コードを保存する際に、その固 有性を検査しません。使用するカスタム・コード・ジェネレーターがグローバル固 有コードを生成できるようにする必要があります (ユーザーが生成コードをオーバ ーライドしないことを前提としています)。

出力行は、次の形式でなければなりません。

- 1 で始まる。
- その後に 1 つ以上の空白スペースが続く。
- その後に二重引用符で囲まれた固有のコードが続く。

#### 例

以下の例は、正しいコード出力形式を示しています。

1 "unique\_code"

### エラーの出力について

カスタム・コード・ジェネレーターは、正しい形式の固有のコードを正しく生成で きない場合に、標準出力ストリーム (stdout) にエラーを出力する必要があります。

エラーの出力行は、次の形式でなければなりません。

- 0 で始まる。
- その後に 1 つ以上の空白スペースが続く。
- その後に二重引用符で囲まれたエラー・メッセージが続く。

#### 例

以下の例は、正しいコード出力形式を示しています。

0 "error\_message"

**注:** カスタム・コード・ジェネレーターによって生成されるエラー・メッセージ は、ユーザーに表示され、ログに書き込まれます。

### カスタム・コード・ジェネレーターの配置について

キャンペーン・コードまたはセル・コードを生成するアプリケーションを Campaign インストールの bin ディレクトリーに配置する必要があります。

カスタム・オファー・コード・ジェネレーターを任意の場所に配置した後、IBM EMM を使用して場所を指定することができます。

# カスタム・オファー・コード・ジェネレーターの場所を指定するに は

「構成」ページで、「Campaign | partitions | partition\_N |

offerCodeGenerator」カテゴリーの offerCodeGeneratorConfigString プロパティ ーの値をカスタム・オファー・コード・ジェネレーターの実行ファイルの場所に変 更します。この場所は、Campaign Web アプリケーション・ホームに対する相対位 置です。

注: このタスクを完了するには、Marketing Platform を使用するための適切な権限が 必要です。詳しくは、「Marketing Platform 管理者ガイド」を参照してください。

# コード生成の参照

このセクションには、以下の参照トピックが含まれています。

- 『コード生成に関連したプロパティー』
- 154ページの『デフォルトのキャンペーンおよびセル・コード・ジェネレーターのパラメーター』
- 155ページの『デフォルトのオファーのコード・ジェネレーターのパラメーター』
- 155 ページの『カスタム・コード・ジェネレーターのパラメーター』

# コード生成に関連したプロパティー

コード形式およびジェネレーターをカスタマイズするには、以下のプロパティーを 使用します。これらのプロパティーへのアクセスとその変更をするには、Marketing Platform の「構成」ページを使用します。これらのプロパティーについて詳しく は、コンテキスト・ヘルプまたは「*Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してく ださい。

表 39. コード形式およびジェネレーターをカスタマイズするためのプロパティー

プロパティー	パス
allowVariableLengthCodes	<pre>Campaign&gt; partitions&gt; partition[n] &gt; server&gt;systemCodes&gt;</pre>
campCodeFormat	<pre>Campaign&gt; partitions&gt; partition[n] &gt; server&gt;systemCodes&gt;</pre>
campCodeGenProgFile	<pre>Campaign&gt; partitions&gt; partition[n] &gt; server&gt;systemCodes&gt;</pre>

プロパティー	パス
cellCodeFormat	<pre>Campaign&gt; partitions&gt; partition[n] &gt; server&gt;systemCodes&gt;</pre>
cellCodeGenProgFile	<pre>Campaign&gt; partitions&gt; partition[n] &gt; server&gt;systemCodes&gt;</pre>
displayOfferCodes	<pre>Campaign&gt; partitions&gt; partition[n] &gt; server&gt;systemCodes&gt;</pre>
offerCodeDelimiter	<pre>Campaign&gt; partitions&gt; partition[n] &gt; server&gt;systemCodes&gt;</pre>
allowDuplicateCellcodes	<pre>Campaign&gt; partitions&gt; partition[n] &gt; server&gt; flowchartConfig&gt;</pre>
defaultGenerator	<pre>Campaign&gt; partitions&gt; partition[n] &gt; offerCodeGenerator&gt;</pre>
offerCodeGeneratorClass	<pre>Campaign&gt; partitions&gt; partition[n] &gt; offerCodeGenerator&gt;</pre>
offerCodeGeneratorClasspath	<pre>Campaign&gt; partitions&gt; partition[n] &gt; offerCodeGenerator&gt;</pre>
offerCodeGeneratorConfigString	<pre>Campaign&gt; partitions&gt; partition[n] &gt; offerCodeGenerator&gt;</pre>

表 39. コード形式およびジェネレーターをカスタマイズするためのプロパティー (続き)

# デフォルトのキャンペーンおよびセル・コード・ジェネレーターの パラメーター

uaccampcodegen プログラムでは、以下のパラメーターがサポートされています。こ のプログラムは *<Campaign\_home>/bin* ディレクトリーにあります (*<Campaign\_home>* は Campaign インストール・ディレクトリーであり、 C:¥Unica¥Campaign¥bin または /Unica/Campaign/bin のようになります)。

パラメーター	使用法
-C	セル名を渡します。
-d	日を渡します。1 桁または 2 桁の整数を受け入れることができま す。値は 31 を超えてはなりません。
-f	コード形式を渡します。デフォルトの形式をオーバーライドするた めに使用されます。
-i	追加の整数を渡します。固有のコードを生成するために使用されま す。
-m	月を渡します。1 から 12 までの、1 桁または 2 桁の整数を受け 入れることができます。
-n	キャンペーン名を渡します。
-0	キャンペーン所有者を渡します。
-S	追加の文字列を渡します。固有のコードを生成するために使用され ます。

表40. デフォルトのキャンペーンおよびセル・コード・ジェネレーターのパラメーター

表 40. デフォルトのキャンペーンおよびセル・コード・ジェネレーターのパラメーター (続き)

パラメーター	使用法
-u	キャンペーン ID を渡します。システム生成 ID の代わりに使用し
	ます。
-V	最初の引数を標準出力ストリーム (STOUT) に出力します。
-y	年を渡します。4 桁の整数を受け入れます。

# デフォルトのオファーのコード・ジェネレーターのパラメーター

uacoffercodegen プログラムでは、以下のパラメーターがサポートされています。 このプログラムは *<Campaign\_home>/bin* ディレクトリーにあります (ここで、 *<Campaign\_home>* は Campaign インストール・ディレクトリーです)。

表 41. デフォルトのオファー・コード・ジェネレーターのパラメーター

パラメーター	使用法
-a	オファー・コード部分の数値 (1 から 5) を渡します。
-d	日を渡します。1 桁または 2 桁の整数を受け入れることができます。値は 31 を超えてはなりません。
-f	コード形式を渡します。デフォルトの形式をオーバーライドするために使用 されます。
-i	追加の整数を渡します。固有のコードを生成するために使用されます。
-m	月を渡します。1 から 12 までの、1 桁または 2 桁の整数を受け入れるこ とができます。
-n	キャンペーン名を渡します。
-8	追加の文字列を渡します。固有のコードを生成するために使用されます。
-u	キャンペーン ID を渡します。システム生成 ID の代わりに使用します。
-V	最初の引数を標準出力ストリーム (STOUT) に出力します。
-у	年を渡します。4 桁の整数を受け入れます。

### 例

# カスタム・コード・ジェネレーターのパラメーター

Campaign は、Campaign で使用するために構成するカスタム・コード・ジェネレー ターへの入力としてカスタム・パラメーターをサポートしています。

これらのパラメーターに対する検証は実行されませんが、次の制限が当てはまりま す。

- デフォルトの Campaign のコード・ジェネレーターのフラグを、カスタム・コード・ジェネレーターのパラメーターのフラグとして再利用することはできません。
- カスタム・コード・ジェネレーターの実行可能ファイル名にスペースを使用しないでください。

- パラメーターまたは実行可能ファイル名の前後に二重引用符を使用しないでください。
- コード・ジェネレーターの実行ファイル名の間、およびパラメーターの間のスペ ースは区切り文字と見なされます。最初のスペースは実行可能ファイル名の末尾 のマーキングとして解釈され、次に見つかるスペースは複数のパラメーターの区 切り文字として解釈されます。
- 構成マネージャーのコード・ジェネレーター・フィールドとオファー・テンプレート・インターフェースは、200文字に制限されています。

# 第 14 章 拡張設定の管理

拡張設定を使用して、Campaign のいくつかの設定およびサーバー最適化機能を管理 します。

### 拡張設定へのアクセス方法

- 1. フローチャートを「編集」モードで開きます。
- 2. 「システム管理」アイコンをクリックして、「拡張設定」を選択します。

「拡張設定」ウィンドウが開きます。

「拡張設定」ウィンドウには、以下の 3 つのタブがあります。

- 金般
- サーバー最適化
- テスト実行設定

# 「全般」設定について

「全般」タブ設定により、以下を指定できます。

- この保存フローチャートの実行結果を保存するかどうか。
- フローチャート処理を「データベース内」と Campaign サーバー上のどちらで行うか。
- このフローチャートでのグローバル抑制を無効にするかどうか。
- Y2K (2000 年) しきい値。
- Campaign がこのフローチャートを自動的に保存するかどうか。
- Campaign がこのフローチャートの実行中にチェックポイントを使用するかどうか。
- Campaign が許容するデータ・エラーの最大数。
- このフローチャートの実行がエラーの結果になった場合に送信されるトリガー。
- このフローチャートの実行が正常に完了した場合に送信されるトリガー。

### フローチャート実行結果を保存する

フローチャートの実行により出力されたセルが実行の終了時に保存されるように指 定するには、このチェック・ボックスを選択します。結果を保存した場合、次にフ ローチャートを開くときに、実行の終了したプロセスの結果のプロファイルを作成 したり、フローチャートの中間からプロセスまたはブランチの実行を開始したりで きます。結果を保存しない場合、フローチャート実行の結果を表示するたびに、フ ローチャート全体を最初から再実行する必要があります。

デフォルトでは、このチェック・ボックスは選択されています。

### フローチャート実行中にデータベース内最適化を使用する

フローチャートを実行する際に、Campaign が IBM サーバー上ではなく、可能な限 りデータベース内で作動するように指定するには、このチェック・ボックスを選択 します。そのようにすると、各プロセスの実行後にデータベースから IBM サーバ ーにデータを引き出す必要がないので、パフォーマンスを改善できます。デフォル トでは、このチェック・ボックスはクリアされています。

注: データベース内処理は、一部のデータベースではサポートされません。 Campaign 管理者は、このオプションがご使用のデータ・ソースで使用可能かどうか を確認することができます。

データベース内最適化について詳しくは、「Campaign ユーザーズ・ガイド」を参照 してください。

### このフローチャートのグローバル抑制を無効にする

グローバル抑制では、Campaign でフローチャート内のすべてのセルから自動的に除 外される ID のリスト (オーディエンス・レベル別) を指定します。

該当する権限がある場合は、このフローチャートのグローバル抑制を無効にするこ とができます。

**注:** 適切な権限がない場合は、設定を変更できないので、既存の設定でフローチャートを実行する必要があります。デフォルトでは、新しいフローチャートはこの設定がクリアされた状態で作成されるので、グローバル抑制が適用されます。

### 2000 年 (Y2K) しきい値

2 桁だけで表記された年を Campaign で解釈する方法は、「2000 年 (Y2K) しきい 値」の値で決まります。

注: 混乱を避けるために、データベースに保管する日付には 4 桁の年を使用するように強くお勧めします。

有効な値は 0 から 100 までです。100 よりも高い値は 100 に設定されます。 「2000 年 (Y2K) しきい値」のデフォルト設定は 20 です。

Campaign はこのしきい値を使用して年の範囲を計算します。下限はしきい値 + 1900、上限はそれに 99 を加えた年となります。

例えば、「2000 年 (Y2K) しきい値」を 50 に設定した場合、年の範囲は、下限が 1900 + 50 = 1950 で、上限がそれに 99 を加えた年である 2049 となります。

このとき、しきい値 (この例では 50) 以上の 2 桁の年を入力した場合、日付は 1900 年代のものとして解釈されます。しきい値より小さい 2 桁の年を入力した場 合、日付は 2000 年代のものとして解釈されます。

「2000 年 (Y2K) しきい値」を最大値の 100 に設定した場合、年の範囲は 1900 + 100 = 2000 から 2099 までになります。この場合、2 桁の年はすべて、2000 年代 のものとして解釈されます。

このしきい値は、必要に応じて変更できます。

### 自動保存

自動保存機能を設定することにより、リカバリーの目的で定期的 (5 分ごとなど) に 作業を自動保存できます。フローチャートの編集中に Campaign サーバーが終了し た場合、自動保存を有効にしていれば、フローチャートを再び開くときに、最後に 自動保存されたバージョンが表示されます。

**注:** この機能が作動するためには、事前に現行のフローチャートを (ファイル名を指 定して)保存しておく必要があります。

Campaign は自動保存ファイルを一時ディレクトリーに保管するので、元のフローチャート・ファイルは変更されません。そのため、リカバリーを行わない状態(フローチャートを保存せずに手動でフローチャートの「編集」モードを終了した場合など)では、自動保存バージョンは取得されません。この状態のときは、保存せずに手動で終了したフローチャートを再び開くと、最後に手動で保存したバージョンが表示されます。

選択されたプロセスの実行中に自動保存が発生する場合でも、一時停止状態のフロ ーチャートは自動保存で保存されません。

自動保存のデフォルト設定は、「しない」です。

# チェックポイント

チェックポイント機能には、リカバリーの目的で、実行中のフローチャートの「ス ナップショット」を取得する機能があります。チェックポイントの「保存」には、 「ファイル」>「保存」を選択した場合と同じ効果があり、サーバーが停止またはダ ウンした場合にフローチャートを最新のチェックポイント保存の状態にリカバリー できるようにします。

チェックポイントの頻度間隔を設定すると、フローチャートを実行するサーバーの タイマーがその設定に従って制御されます。チェックポイントの保存は指定された 間隔で行われます。

フローチャートの実行中、および「フローチャート」でブランチを実行するとき、 チェックポイントはアクティブになります。実行中のフローチャートが保存される とき、Campaign は「一時停止」モードでそれを保存します。フローチャートを開く ときは、そのフローチャートを停止または再開する必要があります。再開すると、 現在実行中のプロセスは最初から再実行されます。

チェックポイントのデフォルト設定は、「なし」です。

### 許可されるデータ・エラーの最大数

Campaign がデータをファイルまたはマップされたテーブルにエクスポートするとき (「スナップショット」プロセスまたは「最適化」プロセスなどの場合)、フォーマッ ト上のエラー (データがテーブルに収まらないなど) が検出されることが時々ありま す。「最大エラー許容数」オプションにより、Campaign は最初のエラーで失敗する のではなく、ファイルに対する作業を続行できます (エラー発生数が N より小さい 場合)。

デフォルトのエラー数はゼロ(0)です。

注: エクスポートの問題をデバッグする場合、エラーをログ・ファイルに書き込む ときには、この値をより大きく設定してください。

### フローチャート実行エラーでトリガー送信

このオプションにより、フローチャートの実行中にキャンペーンによってエラーが 検出されたときに実行される 1 つ以上のトリガーを、発信トリガーのリストから選 択できます (赤の X により示されます)。このオプションを使用する最も一般的な 例は、問題の発生を管理者に通知するために E メールをトリガーする場合です。失 敗時のトリガーは、失敗したプロセス実行ごとに実行されます。

### フローチャート成功でトリガー送信

このオプションにより、セッションが成功したときに実行される 1 つ以上のトリガ ーを、発信トリガーのリストから選択できます。このオプションを使用する最も一 般的な例は、実行の成功を管理者に通知するために E メールをトリガーする場合で す。成功時のトリガーは、フローチャート実行全体が正常に完了した場合にのみ実 行されます。

### 「サーバー最適化」設定について

「**サーバー最適化**」タブを使用すると、 Campaign 「**仮想メモリー使用上限**」を指定して、現在のフローチャートの一時テーブルの使用をオーバーライドできます。

### Campaign による仮想メモリー使用量

「管理」 > 「詳細設定」の下の「Campaign による仮想メモリー使用量」オプションを使用すると、特定のフローチャートの実行時に使用するシステム仮想メモリーの最大領 (MB) を指定できます。

この値を大きくするとパフォーマンスが向上し、この値を小さくすると単一のフロ ーチャートによって使用されるリソースを制限することができます。最大値は 4095 MB です。これより大きな値を入力すると、Campaign により自動的に 4095 MB に 制限されます。表示されるデフォルト値は、構成設定 Campaign | partitions | partition[n] | server | optimization | maxVirtualMemory により決まります。

# このフローチャートでは一時テーブルを使用しない

「このフローチャートでは一時テーブルを使用しない」チェック・ボックスにより、現在のフローチャートでは一時テーブルを使用しないように指定できます。

このオプションは、ユーザー・データベースに対して、IBM EMM によって提供される中央構成リポジトリーの allow\_temp\_tables プロパティーをオーバーライドします。この設定は、システム・データ・ソースには影響を及ぼしません。

### 「テスト実行設定」について

「**テスト実行設定**」タブを使用すると、テスト実行の結果をデータベースに書き込むかどうかを指定できます。

テスト実行の結果がデータベースに出力されるように指定するには、「出力を有効 にする」チェック・ボックスを選択します。 一般に、Campaign はテスト実行の結果をデータベースに書き込みません。しかし必要であれば、結果が適切に記録されていることを確認できます。これを行うには、 セル・サイズを制限してから「出力を有効にする」チェック・ボックスを選択し、 限られた量のデータを使用してフローチャートの実行とその出力のテストをするようにします。

# 第 15 章 IBM Campaign のユーティリティー

このセクションでは、Campaign に付属する管理ユーティリティーについて説明します。

# Campaign リスナー (unica\_aclsnr)

Campaign リスナー (unica\_aclsnr) は、クライアントが Campaign Web アプリケー ションに接続するために使用するユーティリティーです。 IBM EMM にログインす るユーザーが Campaign フィーチャーを使って作業を行えるようにするには、 Campaign が配置され実行されている Web アプリケーション・サーバーに加えて、 Campaign リスナーを事前に実行しておく必要があります。

リスナーは、ログインごと、およびアクティブ・フローチャートごとに別個の unica\_acsvr プロセスを自動的に spawn します。例えば、あるユーザーがログイン してフローチャートをオープンすると、リスナーは unica\_acsvr.exe の 2 つのイ ンスタンスを spawn することになります。

リスナーの開始と停止は、手動でも自動でも可能です。

Campaign が実行されているシステムで Campaign サーバーが自動的に始動するよう にするには、次のようにします。

- Campaign が Windows サーバーにインストールされている場合、リスナーをサービスとしてセットアップしてください。詳しくは、165ページの『Campaign サーバーを Windows サービスとしてインストールする方法』を参照してください。
- Campaign が UNIX サーバーにインストールされている場合、リスナーを init プロセスの一部としてセットアップします。 init プロセスのセットアップにつ いて詳しくは、UNIX ディストリビューションの資料を参照してください。

# Campaign リスナーの要件

Campaign リスナーを使用するには、Marketing Platform が実行されている必要があります。

リスナーは config.xml ファイル内の configurationServerBaseURL プロパティー の値を使って Marketing Platform に接続します。このファイルは、Campaign インス トールの conf ディレクトリーにあります。通常、この値は http:// hostname:7001/Unica です。 Marketing Platform が実行されていない場合、 Campaign リスナーを開始できません。

リスナーが正常に開始するためには Marketing Platform に依存するため、リスナー を開始する前に、Web アプリケーション・サーバーを稼働し、Marketing Platform Web アプリケーションを配置しておく必要があります。

# Campaign リスナーの構文

unica\_aclsnr ユーティリティーの構文は、次のとおりです。

unica\_aclsnr [-i] {[-n] | [-r]}[-u] [-v]

# Campaign リスナー・オプション

unica aclsnr ユーティリティーは、以下のオプションをサポートしています。

表 42. Campaign リスナー・オプション

オプション	説明
-i	このオプションは、リスナー・ユーティリティーをサービスとしてインスト
	ールしまり (Willdows のみ)。
-n	このオプションは、-r の逆です。リスナーが unica_acs1nr.udb ファイル
	を検査しないようにします。
-r (デフォル ト)	このオプションは、実行中のフローチャートを検索して登録するようリスナ ーに強制することにより、リカバリーの実行を開始します。このパラメータ ーは、リスナーが何らかの理由でダウンし、フローチャート(つまり acsvr プロセス)は引き続き実行されている場合に使用します。リスナーは、フロ ーチャート情報をテキスト・ファイル(unica_acs1nr.udb)に保管しま す。 -r オプションを使用すると、リスナーは実行されているフローチャー トを求めてファイルを検査し、接続を再確立します。 実行中のフローチャート・プロセス(フローチャートとブランチの実稼働実 行のみ)がリスナーとともにダウンした場合でも、リスナーはそのフローチ ャートを再ロードし、最後に保存したチェックポイントから実行を再開しま す。
-u	このオプションは、リスナー・ユーティリティーをサービスとしてアンイン ストールします (Windows のみ)。
-V	このオプションは、リスナーの現行バージョンを表示します。

### リスナーの開始と停止

リスナーをサービスとしてセットアップするか (Windows)、init プロセスの一部と してセットアップした場合 (UNIX)、サーバーの始動時にリスナーは自動的に開始さ れます。このセクションで説明されているように、リスナーの開始と停止は手動で も行えます。

#### Windows システムで Campaign リスナーを開始するには

サポートされている Windows システムで Campaign リスナーを開始するには、以下のようにします。

- 1. Campaign が配置されている Web アプリケーション・サーバーが稼働している ことを確認します。
- 2. Campaign インストールの下の bin ディレクトリーにある cmpServer.bat スク リプトを実行することにより、Campaign リスナーを開始します。

unica\_aclsnr.exe プロセスが「Windows タスク・マネージャー」の「プロセス」 タブに表示されていれば、それはサーバーが正常に始動したことを示しています。

### Windows システムで Campaign リスナーを停止するには

サポートされている Windows システムで Campaign リスナーを停止するには、以下のようにします。

1. Campaign bin ディレクトリーに移動して、コマンド svrstop -p 4664 を実行し ます。

CAMPAIGN\_HOME 環境変数を求めるプロンプトが出されたら、それを次の例のよう に設定し、svrstop コマンドを再度実行します。

set CAMPAIGN\_HOME=C:¥<installation\_path>¥Campaign

- 2. ログイン・プロンプトで、Campaign ユーザーのユーザー名を入力します。
- 3. パスワード・プロンプトで、入力した Campaign ユーザーのパスワードを入力し ます。

Campaign リスナー・プロセスが閉じます。リスナーが実行されていない場合、IBM EMM に接続するユーザーは、どの Campaign フィーチャーも開くことができません。

### Campaign サーバーを Windows サービスとしてインストールする 方法

Campaign サーバーを、Windows システムが始動するときにはいつでも自動的に開始される Windows サービスとしてインストールするには、次のようにします。

1. Campaign インストール・ディレクトリーの下にある bin ディレクトリーを、ユ ーザー PATH 環境変数に追加します。ユーザーの PATH 環境変数がない場合に は、作成します。

このパスを、システム PATH 変数ではなく、必ずユーザー PATH 変数に追加する ようにしてください。

Campaign bin ディレクトリーがシステム PATH 環境変数にある場合には、それ を削除します。Campaign サーバーをサービスとしてインストールするには、そ のディレクトリーがシステム PATH 環境変数にある必要はありません。

- 2. サーバーがサービスとしてインストールされている旧バージョンの Campaign か らアップグレードする場合には、サービスを停止してください。
- 3. コマンド・ウィンドウを開き、ディレクトリーを Campaign インストールの下の bin ディレクトリーに変更します。
- 次のコマンドを実行し、Campaign サーバー・サービスを作成します。 unica\_aclsnr -i

サービスが作成されます。

注: CAMPAIGN\_HOME がシステム環境変数として作成されたことを確認してから、 Campaign サーバー・サービスを開始します。

### UNIX システムでリスナーを開始するには

システム・プロンプトで次のコマンドを入力します。

rc.unica\_ac start

### UNIX システムでリスナーを停止するには

システム・プロンプトで次のコマンドを入力します。

rc.unica\_ac stop

### Campaign リスナー・ログ

リスナー・プロセスは、unica\_aclsnr.log という名前のログ・ファイルを作成します。

# Campaign リスナー・シャットダウン・ユーティリティー (svrstop)

Campaign リスナー・シャットダウン・ユーティリティー (svrstop) を使用して、以下のタスクを実行します。

- Campaign リスナーをシャットダウンします。
- Contact Optimization リスナーをシャットダウンします。

ベスト・プラクティスは、ACOServer スクリプト (これは svrstop ユーティリティーを使用する)を使って Contact Optimization リスナーを開始およびシャット ダウンすることです。詳しくは、「*IBM Contact Optimization インストール・ガイ* ド」を参照してください。

**注:** リスナー・シャットダウン・ユーティリティーは、指定したリスナーを停止す るための独立したコマンドとして使用することも、必要な認証引数が組み込まれて いる場合はスクリプトで使用することもできます。

### Campaign srvstop ユーティリティーの参照資料

svrstop ユーティリティーを使用して、ローカル・サーバーまたはネットワーク上 のいずれかのサーバー (ユーザーが適切な資格情報を持っているもの) で稼働してい る Campaign リスナーまたは Contact Optimization リスナーを停止します。

svrstop ユーティリティーは、すべての Campaign サーバーの <install\_dir>/Campaign/bin ディレクトリーに自動的にインストールされます。 <*install\_dir*> は Campaign がインストールされている親 IBM ディレクトリーで す。

svrstop ユーティリティーの構文は、次のとおりです。

svrstop [-g] [-p <port> [-S]] [-s <serverName>] [-y <user>] [-z <password>]
[-v] [-P <product>]

それぞれの引数について以下の表で説明します。

表43. svrstop 構文の引数

引数	説明
-g	リスナーがアクティブかどうかを判別するために、指定されたサーバー
	を ping します。
-p <port></port>	リスナーが実行されているポート。 Campaign リスナーをシャットダウ
	ンするには <port> を 4664 に設定します。 Optimize リスナーをシャ</port>
	ットダウンするには <port> を 2882 に設定します。</port>

表 43. svrstop 構文の引数 (続き)

引数	説明
-S	-p または -P 引数によって指定されているリスナーが SSL を使用して いることを指定します。
-s <servername></servername>	リスナーが実行されているサーバーのホスト名 (optimizeServer や campaignServer.example.com など)。この引数を省略する場合、ユーテ ィリティーは、ローカル・サーバー上の指定されたリスナーのシャット ダウンを試行します。
-y <user></user>	指定されたリスナーをシャットダウンするための Campaign 管理者権限 を持つ IBM EMM ユーザー。この値を省略する場合、ユーティリティ ーの実行時にユーザーを求めるプロンプトが出されます。
-z <password></password>	-y 引数を使って指定した IBM EMM ユーザーのパスワード。この値を 省略する場合、ユーティリティーの実行時にパスワードを求めるプロン プトが出されます。
-V	svrstop ユーティリティーのバージョン情報を報告し、それ以上のアク ションを行わずに終了します。
-P <product></product>	シャットダウンするリスナーが含まれる製品。 Contact Optimization リ スナーをシャットダウンするには、これを「Optimize」に設定します。 この引数にそれ以外の値を設定するか、この引数を省略すると、 Campaign リスナーがシャットダウンされます。

svrstop -y asm admin -z password -p 4664

# svrstop ユーティリティーを使用して Campaign リスナーをシャ ットダウンするには

Campaign サーバーのコマンド・プロンプトから、svrstop ユーティリティーを実行 して、そのサーバーで実行されている Campaign リスナーを停止できます。別のサ ーバーで実行されている Campaign リスナーを停止するには、-s servername.example.com のように -s 引数を使用し、必要な認証を提供します。

- 1. Campaign サーバーでコマンド・プロンプトを開きます。
- 2. CAMPAIGN\_HOME 環境変数を <install\_dir>/Campaign/bin に設定します。 <*install\_dir*> は、Campaign がインストールされる親ディレクトリーです。
- 3. 次のコマンドを入力します。

svrstop -p 4664

-p 引数は、リスナーが接続を受け入れるポートを指定します。ポート 4664 は、Web クライアントからの接続を受け入れるために Campaign が内部的に使 用するポートなので、-p 4664 引数は Campaign リスナーを停止することを示し ます。

 プロンプトが出されたら、リスナーを停止する権限を持つ任意の IBM EMM ユ ーザーの名前とパスワードを指定します。

オプションで、引数として svrstop> コマンドに -y <username> と -z <password> を組み込み、ユーザー名とパスワードのプロンプトが表示されない ようにすることもできます。

必要な情報を入力した後、Campaign リスナーはシャットダウンされます。

# svrstop ユーティリティーを使用して Contact Optimization リ スナーをシャットダウンするには

Campaign サーバーのコマンド・プロンプトから、svrstop ユーティリティーを実行 して、そのサーバーで実行されている Contact Optimization リスナーを停止できま す。別のサーバーで実行されている Contact Optimization リスナーを停止するに は、-s servername.example.com のように -s 引数を使用し、必要な認証を提供し ます。

- 1. Campaign サーバーでコマンド・プロンプトを開きます。
- 2. CAMPAIGN\_HOME 環境変数を <install\_dir>/Campaign/bin に設定します。 <*install\_dir*> は、Campaign がインストールされる親ディレクトリーです。
- 3. 次のコマンドを入力します。

svrstop -P "Optimize"

-P 引数は、シャットダウンするリスナーが含まれる製品を指定します。別の方 法として、-p 2882 と入力して、内部ポート番号 2882 (これも Contact Optimization リスナーを示す)を使用してリスナーをシャットダウンすることも できます。

4. プロンプトが出されたら、リスナーを停止する権限を持つ任意の IBM EMM ユ ーザーの名前とパスワードを指定します。

オプションで、引数として svrstop> コマンドに -y <username> と -z <password> を組み込み、ユーザー名とパスワードのプロンプトが表示されない ようにすることもできます。

必要な情報を入力した後、Contact Optimization リスナーはシャットダウンされます。

# Campaign Server Manager (unica\_svradm)

Campaign Server Manager (unica\_svradm) は、以下のタスクを実行するためのコマ ンド・ラインのサーバー管理ユーティリティーです。

- Campaign リスナーに接続する
- 現在開かれているすべてのフローチャートおよびその状態を表示する
- 環境変数を表示および設定する
- フローチャートを実行する
- フローチャートを中断/再開する
- フローチャートを停止する
- ランナウェイ・フローチャートを強制終了する

unica\_svradm ユーティリティーは、開始時にリスナーが実行されているかどうかを 検査します。

リスナーが実行されている場合、接続が自動的に確立され、サーバーの名前とポー ト番号が表示されます。

# Campaign Server Manager を実行するには

Campaign Server Manager を実行するには、事前に以下のようにする必要があります。

- リスナーを実行しておく。
- 使用するコマンド・ウィンドウで UNICA\_PLATFORM\_HOME 環境変数と CAMPAIGN\_HOME 環境変数を設定する。
- IBM EMM ログインのために「Svradm コマンド・ラインの実行」権限を取得する。
- 1. コマンド・プロンプトで、以下のように入力します。

unica\_svradm -s listener\_server -y Unica\_Marketing\_username -z Unica\_Marketing\_password

2. 次のようにプロンプトが出されます。

unica\_svradm[server:port]>

ここで、『Campaign Server Manager コマンド』で説明されているコマンドを発行します。

### Campaign Server Manager コマンド

Campaign Server Manager は、以下のセクションで説明されるコマンドをサポートしています。 unica\_svradm で使用可能なすべてのコマンドのリストを表示するに は、Help コマンドを使用します。

注: 引数としてフローチャート名を取るコマンドは、同じ名前を持つすべてのキャンペーンおよびセッションのすべてのフローチャートに使用できます。フローチャート・パスを取るコマンドには、相対フローチャート・パスを使用します。

Campaign Server Manager コマンドでは大/小文字が区別されません。

#### Cap (Distributed Marketing)

Cap

Cap コマンドを使用すると、Distributed Marketing フローチャートが追加で開始され ないようにしつつ、現在実行中のものを完了できるようにします。設定解除する場 合は、uncap コマンドを使用します。

#### Changeowner

Changeowner -o <olduserid> -n <newuserid> -p <policyid>

Changeowner コマンドを使用すると、ユーザーのキャンペーンの所有者を変更する ことができます。このコマンドは例えば、ユーザーを削除または無効にし、そのユ ーザーのキャンペーンの所有権を新規ユーザーに再び割り当てる場合に使用できま す。

オプション	説明
-o <olduserid></olduserid>	キャンペーンの現行所有者のユーザー ID。
-n <newuserid></newuserid>	キャンペーンに割り当てる新規所有者のユーザー ID。

オプション	説明
-p <policyid></policyid>	キャンペーンに適用するセキュリティー・ポリシーのポリシ
	- ID。

### Connect

Connect[-f] [-s server] [-p port][-S]]

Connect コマンドは、*port* 番号で *server* で実行されているリスナーに接続します。 一度に 1 つのサーバーにしか接続できません。別のサーバーに接続するには、-f (強制) 接続を使用します。

-p オプションを使用してポートを指定する場合、-S オプションも含めることによって SSL 接続を確立するように指示することができます。 -p オプションを使用して ポートを指定するときに -S オプションを指定しない場合には、接続で SSL は使用 されません。

#### Disconnect

Disconnect

Disconnect コマンドは、サーバーから切断します。このコマンドは、サーバーと接続されている場合のみ使用できます。

**注:**別のサーバーに接続するには、-f パラメーターを使用するか、最初に切断してから新規サーバーに接続します。

#### Exit

Exit

Exit コマンドを使用すると、ユーザーは Campaign Server Manager からログアウト します。

#### Help

Help

Help コマンドは、使用可能なコマンドを表示します。

#### Kill

Kill -p pid

Kill コマンドは、指定された *pid* に対して "kill-p" を発行します (Windows NT では Windows NT の相当するものが発行されます)。これは、ランナウェイ・プロ セスのためのものです。

#### Loglevel

Loglevel [high | low | medium | all]

Loglevel コマンドは、Campaign のリスナー・ロギング・レベルを設定します。引数 なしでコマンドを入力する場合は、現行のロギング・レベルが表示されます。ロギ ング・レベルを変更する場合、変更は即時に有効になります。そのため、このコマ ンドを入力した後にリスナーを再始動する必要はありません。

### Quit

Quit

Quit コマンドを使用すると、ユーザーは Campaign Server Manager からログアウト します。

### Resume

Resume {-s flowchart\_name |-p pid |-a}

Resume コマンドは、1 つ以上のフローチャートの実行を再開します。

- 単一の特定フローチャートを名前で再開するには -s を使用します
- 指定されたプロセス ID を再開するには -p を使用します
- 中断されているすべてのフローチャートを再開するには -a を使用します

### Run

Run -p relative-path-from-partition-root -u
Unica\_Marketing\_Platform\_user\_name [-h partition] [-c catalogFile] [-s]
[-m]

Run コマンドは、特定の単一フローチャート・ファイルを開いて実行します。その際、相対フローチャート・パスおよびファイル名、パーティション、カタログ・ファイル、およびユーザー名を指定します。

次の構文を使用できます。

[-S dataSource -U db\_User -P db\_Password]\*

注: Unix プラットフォームの場合、フローチャートはユーザー名の代替ログインと して指定された Unix アカウントによって実行されます。Windows NT の場合、フ ローチャートは管理者のユーザー・ログインとして実行されます。

Run コマンドのオプション

オプション	説明
-h	パーティション名を指定します。
-1	プロセス・ログ・ファイルの代替保管場所を示します。このオプションの後
	に、Campaign インストールへの相対パスを続ける必要があります (例えば
	¥partition1¥logs)。このオプションではファイル名を指定しないでくださ
	い。ファイル名は自動的に割り当てられるからです。
	注: このオプションを使用する場合、Campaign > partitions >
	partition[n] > server > logging カテゴリーの AllowCustomLogPath 構成
	プロパティーを有効にしておく必要もあります。構成プロパティーの設定に
	ついて、詳しくは「Marketing Platform 管理者ガイド」を参照してくださ
	$\langle \gamma \rangle_{\circ}$
-m	複数のフローチャートを実行することを指定します。このオプションは、バ
	ッチ・フローチャートではサポートされていません。

オプション	説明
-p	パーティション・ルートからの相対パスを指定します。
-P	データ・ソースのパスワードを指定します。
-s	同期実行を指定します。
-S	データ・ソースを指定します。
-u	IBM EMM ユーザー名を指定します。
-U	データ・ソースのユーザー名を指定します。
- v	次の構文を使って、フローチャートの変数値をコマンドで直接指定します。
	[-v "varname=[']value[']"]*
-x	次の構文を使って、フローチャートの変数値を XML ファイルで指定しま
	す。
	[-x <i>xml</i> -filename]

### -x 引数に関する XML ファイルの例

このサンプル XML ファイルは、ユーザー変数名 UVAcctType を値 Gold に設定します。

注: Campaign は、このファイルに書かれているとおりに変数の値を設定します。値 に引用符を含めない場合は、値を引用符で囲まないでください。

#### Save

Save {-s flowchart\_name|-p pid|-a}

Save コマンドは、アクティブ・フローチャートの現在の状態を保存します。

オプション	説明
-5	flowchart-name によって定義される名前で、単一の特定フローチャートを保存します。
-p	pid によって定義されるフローチャートを保存します。
-a	実行中のすべてのフローチャートを保存します。

### Set

Set [variable[=value]]

Set コマンドは、環境変数を表示および設定します。現在の値を表示する場合は値 を省略し、特定の変数を設定する場合は値を指定します。
## Shutdown

Shutdown [-f]

Shutdown コマンドは、リスナーをシャットダウンします。

システムは、実行されているフローチャートがないか検査します。実行されている フローチャートが見つかった場合、シャットダウンの確認を求める警告メッセージ が表示されます。

オーバーライドしてシャットダウンを強制するには、-f を使用します。

#### Status

Status [-d |-i] [-u] [-v | -c]]

Status コマンドは、実行されているフローチャートと中断されているフローチャートの両方に関する情報 (フローチャート名、所有者、ファイルの場所など) を表示します。

オプション	説明
d	表示される出力にサーバー ID、キャンペーン・コード、およびキャンペー ン ID を追加します。
i	プロセス ID (PID) のみを表示します。
u	表示されるデータに非 ASCII 文字が含まれている場合にこのオプションを 使用します。
v	出力を表示する前に unica_acsvr プロセスが存在するかどうかを確認しま す。これにより、破損したプロセスがステータス・リストに表示されないよ うにします。
c	出力を表示する前に unica_acsvr プロセスが存在するかどうかを確認しま す。これにより、破損したプロセスがステータス・リストに表示されないよ うにします。また、オプション c は、破損したサーバー・プロセスに関連 付けられているパーティションの temp ディレクトリーに一時ファイルがあ れば、それをクリーンアップするようにリスナーに指示します。

Status コマンドは、プロセスを次のように識別します。

- c 接続 (クライアントは、リスナー・プロセスに接続されています。クライアントは実行されている場合とそうでない場合があります。)
- ・ d 切断 (クライアントは閉じていますが、フローチャートはバックグラウンドで 実行されています。)
- o 孤立 (クライアントはフローチャートに接続されておらず、バックグラウンド でも実行されていません。このプロセスは既に存在せず、リスナーに再接続でき ません。ユーザーがそれにログインできるよう、強制終了する必要があります。)

注: WRITER 列に <no writer> という値がある場合、それは、サーバー・プロセス に編集モードのクライアントがないことを示します。このことは、クライアントが 接続されていない場合や、ログイン・セッションの場合に生じる可能性がありま す。

### Stop

Stop [-f] {-s flowchart\_name |-p pid | -a}

Stop コマンドは、アクティブ・クライアントの有無を検査し、存在する場合は警告 を出して (これは -f 強制オプションでオーバーライドできる)、IBM サーバー・プ ロセスを停止します。

オプション	説明	
- S	flowchart_name によって定義される名前で、単一の特定フローチャートを停	
	止します。	
-p	pid によってフローチャートを停止します。	
-a	実行中のすべてのフローチャートを停止します。	

オーバーライドして停止を強制するには、-f を使用します。

#### Suspend

Suspend [-f] {-s flowchart\_name | -p pid |-a}

Suspend コマンドを使用すると、実行中のキャンペーンを「静止」し、対応するコ マンド Resume を使って後で再始動するために状態を保存します。現在出力プロセ スを実行しているすべてのフローチャートはデータ・エクスポート・アクティビデ ィーを完了します。その後、フローチャートは一時停止されたフローチャートとし て保存されます。これにより、失われる作業量が可能な限り少なくなり、出力ファ イルのデータ保全性が保持されます。フローチャートを即時に停止する必要がある 場合、Save コマンドに続いて、Stop を発行します。

オプション	説明
- S	<flowchart_name> によって定義される名前で、単一の特定フローチャートを中断します。</flowchart_name>
-p	pid によって指定されるフローチャートを中断します。
-a	実行中のすべてのフローチャートを中断します。

システムは、現在実行されているプロセスの実行すべてを終了し、その後にプロセ スが開始されないようにします。フローチャートは保存され、中断されているフロ ーチャートのリストに書き込まれます。

-f パラメーターを使用すると、中断を強制できます。中断された後、フローチャートは中断されたフローチャートとしてリスナーに書き込まれます。

注: 中断した時点でフローチャートが実行されていない場合、フローチャートは保存されますが、リスナーに書き込まれず、Resumeを使って開始できません。

#### **Uncap (Distributed Marketing)**

Uncap

Uncap コマンドは、Cap (Distributed Marketing) コマンドを取り消します。 『Cap (Distributed Marketing)』を参照してください。

### Version

Version

Version コマンドは unica\_svradm のバージョンと、接続されているリスナー・プロセスのバージョンを表示します。このコマンドの使用は、バージョン不一致エラーのトラブルシューティングに役立ちます。

## 実行中のフローチャートを強制終了するには

フローチャートを即時に停止するために強制終了しなければならない場合がありま す。フローチャート名はさまざまなキャンペーンおよびセッションで同じにするこ とができるため、このセクションの指示に従う必要があります。

1. コマンド・プロンプトで次のコマンドを入力して、サーバー上で実行されている フローチャートのリストを取得します。

% unica\_svradm status

フローチャート名が同じの場合でも、フローチャートを一意的に識別するために 絶対パスを使用することができます。

- 2. 強制終了するフローチャートに関連付けられている PID のメモを取ります。
- 3. フローチャートを強制終了するには、強制終了するフローチャートの PID で *PID* を置き換えて、コマンド・プロンプトで次のコマンドを入力します。

unica\_svradm kill -p PID

フローチャートが強制終了される際、そのバッファーはディスクにフラッシュされ ません。代わりに、最後のチェックポイントのコピーが保存されます。

## Campaign セッション・ユーティリティー (unica\_acsesutil)

Campaign セッション・ユーティリティー (unica\_acsesutil) を使用して、以下のタ スクを実行します。

- 1つのサーバーから別のサーバーにキャンペーン、セッション、およびフローチャートをインポートおよびエクスポートする。
- フローチャート・ファイルまたはテーブル・カタログを入力として渡し、テーブ ル・カタログをバイナリーまたは XML 形式で出力として生成する。
- セッションまたはカタログの特殊値のレコード数およびリストを更新する。

注: unica\_acsesutil ユーティリティーは、同じバージョンの Campaign がインストー ルされているサーバー間のオブジェクトのインポートとエクスポートだけをサポー トしています。

## unica\_acsesutil で必要な環境変数

unica\_acsesutil を実行するには、環境変数をいくつか設定する必要があります。

すべてのオペレーティング・システムで、次の環境変数を設定する必要がありま す。

• UNICA\_PLATFORM\_HOME

• CAMPAIGN\_HOME

UNIX の場合のみ、UNIX プラットフォームに応じて次のデータベース固有のライ ブラリー・パスを設定します。

- LIBPATH (AIX<sup>®</sup>の場合)
- SHLIB\_PATH (HP-UX の場合)
- LD LIBRARY PATH (Linux または Sun Solaris の場合)

# Campaign セッション・ユーティリティーのユースケース

セッション・ユーティリティー (unica\_acsesutil) を使用して、以下のタスクを実行します。

- 『サーバー間のオブジェクトのエクスポートおよびインポート』
- 178 ページの『セッションのバックアップ』
- 178ページの『レコード数および値のリストの更新』
- 179ページの『テーブル・カタログの操作』
- 180ページの『カタログ・コンテンツの文書化』

### サーバー間のオブジェクトのエクスポートおよびインポート

注: unica\_acsesutil ユーティリティーは、同じバージョンの Campaign がインストー ルされているサーバー間のオブジェクトのインポートとエクスポートだけをサポー トしています。

unica\_acsesutil を使用して、1 つのサーバーから別のサーバーにキャンペーン、 セッション、およびフローチャートをエクスポートおよびインポートします。ただ し、次の制限があります。

- キャンペーンまたはセッションをエクスポートする際、関連付けられているシス テム・テーブルとメタデータだけがエクスポートされます。関連付けられている フローチャートは、別途エクスポートする必要があります。フローチャートのエ クスポートは一度に1つずつのみ行えます。
- フローチャートをターゲット・システムにインポートするには、そのフローチャート(.ses)ファイルと、それに関連付けられているキャンペーンまたはセッションがターゲット・システムに既に存在している必要があります。そのため、関連付けられているフローチャートをエクスポートおよびインポートする前に、キャンペーンおよびセッションをすべてエクスポートおよびインポートし、フローチャート(.ses)ファイルをターゲット・サーバーに手動でコピーしておく必要があります。
- エクスポートまたはインポートするオブジェクト・タイプに関係なく、処理を行う Campaign フローチャート (.ses) ファイルを指定するために -s パラメータ ーを使用する必要があります。関連付けられている複数のフローチャートととも にキャンペーンまたはセッションをエクスポートまたはインポートする際は、関 連付けられているいずれかの .ses ファイルを使用できます。
- eMessage または Distributed Marketing フローチャートのインポートを試みる際に、unica\_acsesutil は関連アプリケーションがターゲット・システム上にインストールされているかどうかを調べるために検査します。必要なアプリケーショ

ンがターゲット・システム上にインストールされていない場合、unica\_acsesutil はエラーを生成し、選択したオブジェクトはインポートされません。

**エクスポートおよびインポート・プロセスについて:** unica\_acsesutil を使用して サーバー間でオブジェクトを移動するプロセスは、さまざまな段階で行われます。 一部の手順は手動で行う必要があります。

- -s オプションで指定したフローチャートの (.ses) ファイルの情報を使用して、 unica\_acsesutil ユーティリティーは、エクスポートしたオブジェクトおよび情報を、-e オプションで指定した中間出力ファイルに書き込みます。
- 2. 出力ファイルをターゲット・サーバーに手動で移動 (コピー) します。
- 3. ターゲット・サーバーで、-i オプションを使用して unica\_acsesutil 出力ファ イルをインポートします。

#### インポートの際の既存のデータとの競合について:

unica\_acsesutil は、システム・テーブルにデータをインポートする際 (例えば、 セッション情報、トリガー、またはカスタム・マクロ)、各オブジェクトがターゲッ ト・システムに既に存在するかどうか検査します。

検査は内部オブジェクト ID に基づいて行われます。つまり、キャンペーンで内部 キャンペーン ID が固有でない場合、unica\_acsesutil はキャンペーンを上書きす るかどうか尋ねます。キャンペーンの上書きを選択する場合、unica\_acsesutil は ターゲット・サーバー上の既存のキャンペーンに関連付けられているすべてのデー タを削除してから、新規キャンペーンをインポートします。同様に、オファーをイ ンポートする際、unica\_acsesutil は内部オファー ID が固有かどうかを検査しま す。

同じ ID のオブジェクトが既に存在する場合には、インポート・プロセスでそのオ ブジェクトをスキップするか、既存のオブジェクトを置換するかを選択できます。

注: 競合しているオブジェクト (キャンペーン、セッション、またはオファーなど) が既にターゲット・システムに存在することがインポートを行う前に分かっている 場合には、競合解決の要求が出されないようにするために、インポートを実行する 前にオブジェクトを削除することを検討してください。

#### キャンペーン、セッション、またはフローチャートをエクスポートするには:

unica\_acsesutil -s <sesFileName> -h <partitionName>
 -e <exportFileName> [-f { flowchart | campaign | session }]
 [-S <datasource> -U <DBusername> -P <DBpassword>]

#### 例 1: キャンペーンのエクスポート

unica\_acsesutil -s "campaigns/Campaign C000001\_C000001.ses" -h partition1 -e campaign.exp -f campaign

この例は、Flowchart1 と関連付けられているキャンペーンをエクスポートするための出力ファイル campaign.exp を、partition1 にある "campaigns/Campaign C000001\_C000001.ses" ファイルに基づいて生成します。

#### 例 2: フローチャートのエクスポート

この例は、フローチャート C000001\_Flowchart1 をエクスポートするための出力ファ イル flowchart.exp を、partition1 にある "campaigns/Campaign C000001\_C000001\_ Flowchart1.ses" ファイルに基づいて生成します。

#### キャンペーン、セッション、またはフローチャートをインポートするには:

注: フローチャートをインポートするには、そのフローチャート (.ses) ファイル と、それに関連付けられているキャンペーンまたはセッションがターゲット・シス テムに存在している必要があります。そのため、フローチャートをインポートする 前に、(1) 関連付けられている .ses ファイルをソース・システムからターゲット・ システムに手動でコピーし、(2) 関連付けられているキャンペーンまたはセッション をターゲット・システムにインポートする必要があります。

unica\_acsesutil -s <sesFileName> -h <partitionName>
-i <importFileName> [-f { flowchart | campaign | session }]
[-b { abort | replace | skip }]
[-S <datasource> -U <DBusername> -P <DBpassword>]

#### 例 1: キャンペーンのインポート

unica\_acsesutil -s "campaigns/Campaign C000001\_C000001.ses" -h partition1 -i campaign.exp -f campaign

この例は、事前に生成された campaign.exp ファイルを使用し、Campaign C000001 データをターゲット・システムのシステム・テーブル、および partition1 にある "campaigns/Campaign C000001 C000001.ses" ファイルにインポートします。

#### 例 2: フローチャートのインポート

unica\_acsesutil -s "campaigns/Campaign C000001\_C000001\_ Flowchart1.ses" -h partition1 -i import.exp -f flowchart

この例は、事前に生成された flowchart.exp ファイルを使用し、Campaign C000001\_Flowchart1 に関連付けられているデータをターゲット・システムのシステ ム・テーブル、および partition1 にある "campaigns/Campaign C000001 C000001 Flowchart 1.ses" ファイルにインポートします。

## セッションのバックアップ

Campaign セッション・ユーティリティー (unica\_acsesutil) を使用して、セッショ ンをバックアップします。

セッション・ディレクトリー内のすべてのファイルをエクスポートして、それらの ファイルをバックアップ・システムにインポートするようにスクリプトを作成でき ます。

#### レコード数および値のリストの更新

Campaign セッション・ユーティリティー (unica\_acsesutil) は、レコード数や値の 種類のリストを更新したり、それらのカウントの自動再計算のスケジュールを設定 したりするために使用します。

再計算の対象となるカウントの種類を指定するため、以下の 3 つのパラメーターを 使用可能です。

- -n -- レコード数のみ再計算
- -1 -- 値の種類のリストのみ再計算

• -a -- 全テーブルのレコード数および値の種類のリストを再計算

これらのオプションを使用して、セッション (-s) またはカタログ (-t) について、 レコード数や値のリストをすべて再計算します。これらのオプションは、インポー ト (-i) など、その他のオプションと組み合わせることができます。

### フローチャート内でマップされているすべてのテーブルを対象としてカウン トを再計算するには、

unica\_acsesutil -s sesFileName -i importFileName [{-a ] -n | -1 }][-S Datasource -U DBUser -P DBPassword]

#### テーブル・カタログ内のテーブルを対象としてカウントを再計算するには、

unica\_acsesutil -t catFileName [{-a | -n | -l }][-S Datasource -U DBUser -P DBPassword]

注:フローチャート内に接続情報が保管されていない場合、データベース接続を定 義するパラメーター (-S、-U、-P)を指定する必要があります。

## テーブル・カタログの操作

Campaign セッション・ユーティリティーを使用して、Campaign の外部でテーブ ル・カタログに対して操作を行うことができます。

一般的には、XML テーブル・カタログは、データ・ソース名の一括検索および置換 を実行するために使用します。例えば、実稼働データベースで使用できるよう、テ スト・データベースで使用するために開発されたテーブル・カタログの変換などを 行います。この場合、テーブル・カタログを XML としてエクスポートし、必要に 応じて一括検索および置換を実行した後、XML テーブル・カタログを保存して、使 用のためにロードします。

## ステップ 1 - XML 形式への変換

Campaign セッション・ユーティリティーは、このプロセスの最初のステップでのみ 使用します。これを使用して、要求されるカタログのすべてのデータが含まれる XML 形式のファイルを生成します。カタログが既に XML 形式になっている場 合、このステップは不要です。

次のコマンドを使用します。

unica\_acsesutil -t catFileName -x [-o outputFileName] [-u] [-p] [{-a ] -n | -1}][-S dataSource -U DBUserName -P DBPassword]

### ステップ2-必要に応じた編集

次に、ステップ 1 で生成した XML ファイルを必要に応じて編集します。ファイル の整形された状態を維持するために、ファイル構文を検査する XML エディターを 使用する必要があります。

### ステップ3(オプション)-バイナリー形式への変換

必要に応じて、XML カタログ・ファイルを再びバイナリー形式のカタログに変換することができます。

次のコマンドを使用します。

unica\_acsesutil -t <catFileName> -x -o <outputFileName>

注: カタログを XML 形式のままにしておくことは、データ・アクセス用のパスワ ードが公開されてしまうという危険があります。カタログを XML 形式のままにし ておく場合は、ファイルがオペレーティング・システム・レベルで保護されるよう にしてください。

#### ステップ 4 - セッションでの新規カタログのロード

再びバイナリー形式に変換した後、新規カタログをセッションにロードできるよう になります。

### カタログ・コンテンツの文書化

2 つの手法を使ってカタログ・コンテンツを文書化することができます。

- XML カタログ・ファイルを使用したレポートの生成
- Campaign セッション・ユーティリティーを使用したテーブル・マッピングの出力

#### XML カタログ・ファイルの使用

unica\_acsesutil を使用して、要求されるカタログのすべてのデータが含まれる XML 形式のファイルを生成します。

現時点では、XML カタログ・ファイルをユーザー・フレンドリー・レポートに変換 するための IBM ユーティリティーはありません。

#### テーブル・マッピングの出力

unica\_acsesutil を使用して、カタログからのテーブル・マッピング情報を出力することができます。

次のコマンドを使用します。

unica\_acsesutil -t catFileName -h partitionName -p

## Campaign セッション・ユーティリティーの戻り値

unica\_acsesutil ユーティリティーは、正常に実行されると、値 0 を返します。指 定されたフローチャートまたはカタログのファイル名を持つファイルが見つからな い場合、1 を返します。

# Campaign セッション・ユーティリティーの構文

unica\_acsesutil -s sesFileName -h partitionName
[-r | -c | -x [-o outputFileName]] [-u] [-v]
[{-e exportFileName [-f {flowchart | campaign | session}]]
[ {-i importFileName [-t catFileName]
[-b {abort | replace | skip}]]]
[-p] [-a | -n | -1]
[-S dataSource -U DBUser -P DBPassword]\*
[-y userName] [-z password]
[-j owner] [-K policy]

# Campaign セッション・ユーティリティーのオプション

unica\_acsesutil ユーティリティーは、以下のオプションをサポートしています。

表44. Campaign セッション・ユーティリティーのオプション

オプショ		
ン	構文	説明
-a	-a	すべてのテーブルのレコード数および個別値のリスト を再計算します。
-b	-b {abort   replace   skip}	インポート・オプション (-i) にのみ当てはまります。 インポートがバッチ・モードで行われることを指定し ます。
		複製オブジェクト (ID が競合する場合) の処理方法を 指定するために、以下のいずれかの引数が必要です。
		<ul> <li>abort - 複製オブジェクトが検出された場合、イン ポートは停止します。</li> </ul>
		<ul> <li>replace - 複製オブジェクトが検出された場合、インポートされるオブジェクトで置き換えます。</li> </ul>
		<ul> <li>skip - 複製オブジェクトが検出された場合、置換せず、インポートを続行します。</li> </ul>
-c	-c <outputfilename></outputfilename>	<i>outputFileName</i> のテーブル・カタログを .cat 形式 (Campaign 内部形式) で生成します。 -s オプションを 指定すると、このオプションは無視されます。
-е	-e <exportfilename></exportfilename>	-f オプションによって指定されたオブジェクト・タイ プを <i>exportFileName</i> という名前のファイルにエクスポ ートします。
		-f オプションが使用されない場合、デフォルトではフ ローチャートがエクスポートに設定されます。
-f	-f {flowchart   campaign   session}	エクスポートするオブジェクトのタイプを指定しま す。このオプションを省略すると、デフォルトではフ ローチャートがエクスポートに設定されます。
		-f が使用される場合、flowchart、campaign、session の いずれかの引数が必要です。
-h	-h <partitionname></partitionname>	フローチャート・ファイル (-s によって指定される) が置かれているパーティションの名前を指定します。 このパラメーターは必須です。
-i	-i <importfilename></importfilename>	インポートされるファイルの名前を指定します。以前 のエクスポート操作で -e オプションを使ってエクス ポートされたファイルを指定する必要があります。
-j	-j <owner></owner>	インポートまたはエクスポートされるファイルの所有 者を指定します。
-k	-k <policy></policy>	インポートされるファイルのセキュリティー・ポリシ ーを指定します。
-1	-1	個別値のリストのみを再計算します。
-n	-n	レコード数のみを再計算します。

表 44. Cam	paign セッショ	ン・ユーティ	リティーのオフ	゚ション (続き)
-----------	------------	--------	---------	-----------

オプショ		
ン	構文	説明
-0	-o <outputfilename></outputfilename>	カタログを名前 outputFileName で指定します。指定さ れない場合、-x オプションと -c のどちらを使用する かに応じて、catFileName.xml または catFileName.cat がデフォルトになります。ワイルドカードを使用する 場合、出力ファイル名に宛先ディレクトリーを指定す る必要があります。
-P	-P <dbpassword></dbpassword>	データベース・ユーザー・アカウントのパスワードを 指定します。 -U オプションおよび -S オプションと 一緒に使用します。
-р	-p	テーブル・マッピングをコンソールに出力します。
-r	-r <outputfilename></outputfilename>	フローチャートの XML レポートを outputFileName に生成します。 -t オプション (テーブル・カタログ を入力として使用する) を使用する場合、このパラメ ーターは無視されます。
-S	-S <datasource></datasource>	処理が行われるオブジェクトのデータ・ソースの名前 を指定します。 -U <database_user> および -P <database_password> オプションと一緒に使用します。</database_password></database_user>
-5	-s <sesfilename></sesfilename>	処理を行う Campaign フローチャート (.ses) ファイ ルを指定します。オブジェクト・タイプ (キャンペー ン、セッション、またはフローチャート) に関係な く、エクスポートおよびインポートの際は常に .ses ファイルを指定する必要があります。関連付けられて いる複数のフローチャートとともにキャンペーンまた はセッションをエクスポートまたはインポートする際 は、関連付けられているいずれかの .ses ファイルを 使用できます。 ファイル名には、このフローチャート・ファイルの存 在場所のパーティション (-h オプションを使用して定 義されるもの) より下のパスが含まれていなければな りません。 -s の有効な値の例を以下に示します。 "campaign/Campaign C00001_Flowchart 1.ses" 一致する複数のフローチャートに対して処理を行うた めに、 <sesfilename> にワイルドカード文字を含める ことができます。</sesfilename>
-t	-t <catfilename></catfilename>	<catfilename> というテーブル・カタログを入力として 読み取ります。 <catfilename> にはワイルドカード文 字を含めることができます。</catfilename></catfilename>
-U	-U <dbusername></dbusername>	-S オプションによって指定されたデータ・ソースのユ ーザー・ログインを指定します。 -P オプション (こ のデータベース・ユーザーのデータベース・パスワー ドを指定する) と一緒に使用します。
-u	-u	テーブル・カタログを保存する際に既存のデータベー ス認証情報を使用します。
-V	-v	バージョン番号を表示して終了します。

表 44. Campaign セッション・ユーティリティーのオプション (続き)

オプショ		
ン	構文	説明
-X	-x <outputfilename></outputfilename>	代替 XML 形式のテーブル・カタログ・ファイルを
		outputFileName に生成します。入力テーブル・カタロ
		グが .cat ファイルの場合、対応する .xml ファイル
		を生成します (この逆の場合も同様です)。
-у	-y <username></username>	IBM EMM ユーザー名を指定します。
-Z	-z <password></password>	-y オプションによって指定された IBM EMM ユーザ ーのパスワードを指定します。

# Campaign クリーンアップ・ユーティリティー (unica\_acclean)

クリーンアップ・ユーティリティー (unica\_acclean) を使用して、現行パーティシ ョン内の一時ファイルとデータベース表を識別してクリーンアップします。クリー ンアップ・ユーティリティーは、Campaign システム・テーブル・データベースとユ ーザー・テーブル・データベースの両方で使用できます。

注: unica\_acclean ユーティリティーを実行する場合、現在実行中のフローチャートや実行予定のフローチャートをすべて停止しなければなりません。

このユーティリティーを実行するユーザーには、「クリーンアップ操作の実行」権 限が必要です。この権限は、Campaign 管理者によって付与されます。ユーザーが適 切な権限を持たずにこのユーティリティー実行しようとすると、エラーが表示さ れ、その後、ツールが終了します。

注: このツールがパーティションをまたがって実行されることはありません。 unica\_acclean の実行時には毎回、指定されたパーティション内のテーブルとファイ ルに対してのみ実行されます。

ユーティリティーが識別してクリーンアップできる項目は、次のとおりです。

- ある特定の条件に基づいて、指定されたオブジェクトまたはオブジェクト・タイプに関連付けられている一時ファイルおよびテーブル。
- 孤立一時ファイルおよびテーブル。つまり、関連付けられたオブジェクトの削除 後に残された一時ファイルおよびテーブル。

### unica\_acclean で必要な環境変数

unica\_acclean を実行するには、次の環境変数を設定する必要があります。

- UNICA\_PLATFORM\_HOME
- CAMPAIGN\_HOME
- LANG

CAMPAIGN\_PARTITION\_HOME の設定はオプションです。

# Campaign クリーンアップ・ユーティリティーのユースケース

クリーンアップ・ユーティリティー (unica\_acclean) を使用して、以下のタスクを 実行します。

- 『孤立ファイルおよび孤立テーブルのリストの生成』
- 『ファイル内にリストされているファイルおよびテーブルの削除』
- 185ページの『孤立一時ファイルおよび孤立一時テーブルすべての削除』
- 185 ページの『オブジェクト・タイプおよび条件によるファイルおよびテーブル のリストの選択的生成』
- 186 ページの『オブジェクト・タイプおよび条件によるファイルおよびテーブル の選択的削除』

#### 孤立ファイルおよび孤立テーブルのリストの生成

クリーンアップ・ユーティリティーを使用して、孤立一時ファイルおよび孤立一時 テーブルのリストを確認し、出力することができます。

注: IBM ではベスト・プラクティスとして、ユーティリティーを実行してファイル やテーブルを即時に削除するのではなく、クリーンアップ・ユーティリティーを使 用して削除を実行する前に、特定された孤立ファイルや孤立テーブルのリストを検 証のために出力することを推奨しています。これは、不慮の削除を避けるために役 立ちます。削除した後でリカバリーすることはできません。

### 孤立ファイルおよび孤立テーブルのリストを出力するには:

unica\_acclean -o <list file name> -w orphan

これを使用するには -w orphan が必須であり、条件を指定することはできません。

ファイル名を指定するには、-o オプションを使用します。ファイルが保存されるパ スを指定することもできます。パスを含めない場合、ファイルは unica\_acclean ユ ーティリティーと同じディレクトリーに保存されます。

#### 例

unica acclean -o "OrphanList.txt" -w orphan

この例は、孤立ファイルおよび孤立テーブルのリストを生成し、それをファイル OrphanList.txt に書き込みます。

### ファイル内にリストされているファイルおよびテーブルの削除

クリーンアップ・ユーティリティーを使用して、ユーティリティーによって生成されるファイル内にリストされている一時ファイルと一時テーブルすべてを削除する ことができます。

ファイル内にリストされているファイルおよびテーブルを削除するには: unica acclean -d -i "OrphanList.txt"

**OrphanList.txt** は、削除されるファイルのリストが含まれているファイルで、クリ ーンアップ・ユーティリティーによって生成されます。

一時ファイルまたは一時テーブルではないリスト・ファイルから行が読み取られる 場合、クリーンアップ・ツールはその項目をスキップし、項目が削除されないこと を示すエラーをコンソールおよびログ・ファイルに記録します。

### 孤立一時ファイルおよび孤立一時テーブルすべての削除

クリーンアップ・ユーティリティーを使用して、孤立していると見なされる一時フ ァイルおよび一時テーブルすべてを、システム・テーブルおよびユーザー・テーブ ルのデータベースとファイル・システムから削除することができます。

システムから孤立一時ファイルおよび孤立一時テーブルすべてを削除するには: unica\_acclean -d -w orphan

### 孤立ファイルおよび孤立テーブルについて

unica\_acclean ユーティリティーは、ファイルおよびテーブルが孤立しているかどうかを以下の方法で判別します。

## テーブル

ユーティリティーは、一時テーブルのリストを取得するために、現行パーティショ ンのデータベースをスキャンします。テーブルは、Marketing Platform の「構成」ペ ージの各データ・ソースに対して指定されている「TempTablePrefix」プロパティー に基づいて、「一時」テーブルとして識別されます。

ー時テーブルのリストがコンパイルされた後、その一時テーブルのうちのいずれか がフローチャートで使用されているかどうかを確認するために、システム内のすべ てのフローチャート・ファイルがスキャンされます。フローチャートで参照されて いない一時テーブルはすべて、孤立テーブルと見なされます。

注: クリーンアップ・ユーティリティーは、ユーティリティーを実行しているユー ザーの Marketing Platform ユーザー管理モジュールで定義されているデータ・ソー スのみをスキャンします。そのため、クリーンアップ・ユーティリティーを実行す るユーザーは、スキャンを実行するために、データ・ソースのグローバル・セット または該当するセットに対する認証権限があることを常に確認する必要がありま す。

### ファイル

ユーティリティーは、一時ファイルを識別するために 2 つの場所をスキャンしま す。

- パーティションの一時ディレクトリー (*<partition home>/<partition>/tmp*)。.t<sup>\*</sup># 拡 張子に基づいて「一時」ファイルとして識別されるファイルのリストをこの場所 から取得します。
- <partition home>/<partition>/[campaigns | sessions] ディレクトリー。これは、既知のCampaign 一時ファイル拡張子を持つファイル用のディレクトリーです。

ー時ファイルのリストがコンパイルされた後、その一時ファイルのうちのいずれか がフローチャートで使用されていないどうかを確認するために、システム内のすべ てのフローチャート・ファイルがスキャンされます。フローチャートで参照されて いない一時ファイルはすべて、孤立ファイルと見なされます。

## オブジェクト・タイプおよび条件によるファイルおよびテーブルのリ ストの選択的生成

クリーンアップ・ユーティリティーを使用して、オブジェクト・タイプおよび条件 によってファイルおよびテーブルのリストを生成することができます。 オブジェクト・タイプおよび条件によるファイルおよびテーブルのリストを選択的 に生成するには:

unica\_acclean -o <list file name> -w {flowchart | campaign | session | sessionfolder | campaignfolder} -s *criteria* [-r]

#### 例 1: キャンペーン・フォルダーによる一時ファイルおよび一時テーブルのリスト

unica\_acclean -o "JanuaryCampaignsList.txt" -w campaignfolder -s "NAME='JanuaryCampaigns'" -r

この例は、キャンペーン・フォルダー「JanuaryCampaigns」内、および 「JanuaryCampaigns」のすべてのサブフォルダー内のキャンペーンおよびフローチャ ートに関連付けられている一時ファイルと一時テーブルのリストを生成し、ファイ ル JanuaryCampaignsList.txt にそれを書き込みます。

#### 例 2: フローチャート LASTRUNENDDATE による一時ファイルおよび一時テーブ ルのリスト

unica\_acclean -o "LastRun\_Dec312006\_List.txt" -w flowchart -s
"LASTRUNENDDATE < '31-Dec-06'"</pre>

この例は、すべてのフローチャート内の、LASTRUNENDDATE が 2006 年 12 月 31 日より前の一時ファイルと一時テーブルすべてのリストを生成し、ファイル LastRun\_Dec312006\_List.txt にそれを書き込みます。

**注:** すべての日付条件が、データベースにとって正しい日付形式で指定されている ことを確認してください。

## オブジェクト・タイプおよび条件によるファイルおよびテーブルの選 択的削除

クリーンアップ・ユーティリティーを使用して、オブジェクト・タイプおよび条件 によって一時ファイルおよび一時テーブルを削除することができます。

### オブジェクト・タイプおよび条件によってファイルおよびテーブルを選択的に削除 するには:

unica\_acclean -d -w {flowchart | campaign | session | sessionfolder | campaignfolder} -s <criteria> [-r]

#### 例

#### 例 1: キャンペーン・フォルダーによる一時ファイルと一時テーブルの削除

unica acclean -d -w campaignfolder -s "NAME='JanuaryCampaigns'" -r

この例は、キャンペーン・フォルダー「JanuaryCampaigns」内、および 「JanuaryCampaigns」のすべてのサブフォルダー内のキャンペーンおよびフローチャ ートに関連付けられている一時ファイルと一時テーブルを削除します。

例 2: フローチャート LASTRUNENDDATE による一時ファイルおよび一時テーブ ルの削除

unica acclean -d -w flowchart -s "LASTRUNENDDATE < '31-Dec-06'"

この例は、すべてのフローチャート内の、LASTRUNENDDATE が 2006 年 12 月 31 日より前の一時ファイルと一時テーブルをすべて削除します。

**重要:** すべての日付条件が、データベースにとって正しい日付形式で指定されていることを確認してください。

# キャンペーン・クリーンアップ・ユーティリティーの構文

unica\_acclean {-d|-o <list file name>}
-w {flowchart | campaign | session | sessionfolder | campaignfolder |
other} -s <criteria>
[-u <user name>] [-p <password>] [-n <partition name>]
[-1 {low|medium|high|all}]
[-f <log file name>]
[-S <dataSource> -U <DB-user> -P <DB-password>]\*

クリーンアップ・ユーティリティーは、ユーザー名またはパスワードが指定される 場合には、非対話式となります。ユーザー名が指定されない場合、ユーザー名とパ スワードを求めるプロンプトがツールによって出されます。パスワードが指定され ない場合、パスワードを求めるプロンプトがツールによって出されます。

# Campaign クリーンアップ・ユーティリティーのオプション

unica acclean ユーティリティーは、以下のオプションをサポートしています。

オプション	構文	説明
-d	-d	ー時テーブルおよび一時ファイルを削除しま す。すべてのフローチャート・ファイルがス キャンされ、その結果に基づいて一時ファイ ルおよび一時テーブルが判別されます。
-f	-f <log file="" name=""></log>	エラーが記録されるファイルの名前を指定し ます。このファイルは、 <i><partition_home></partition_home></i> /logs ディレクトリー にあります。デフォルトでは、このファイル の名前は unica_acclean.log です。ログ・ ファイルの名前を変更することは可能です が、別の場所を指定することは現時点ではサ ポートされていません。
-h	-h	使用方法のヘルプを表示します。無効なコマ ンド・ラインの呼び出しでもヘルプは表示さ れます。
-i	-i <clean file="" name=""></clean>	削除される項目をリストしているファイルを 指定します。ベスト・プラクティスは、-o オプションを使用してクリーンアップ・ツー ルによって生成されたファイルと同じファイ ルを使用することです。
-1	-l {low   medium   high   all}][-f < <i>logFileName</i> >]	ロギング・レベルおよびログ・ファイルの名 前を指定します。レベルを指定しないと、デ フォルトでは medium が使用されます。

表 45. Campaign クリーンアップ・ユーティリティーのオプション

オプション	構文	説明
-n	-n <partition name=""></partition>	このオプションは、パーティションの名前を 指定するために使用します。パーティション 名が指定されていない場合は、デフォルトの 「パーティション 1」が使用されます。
-0	-o <listfilename></listfilename>	指定されたファイルにテーブルおよびファイ ルのリストを出力します。ただし、削除は行 いません。
-P	-p	テーブル・マッピングをコンソールに出力し ます。
-p	-p <password></password>	-u オプションが使用される場合には、この オプションも使用する必要があります。この オプションは、-u オプションを使って指定 したユーザーのパスワードを指定するために 使用します。
-r	-r	このオプションは、campaignfolder オブジェ クトまたは sessionfolder オブジェクトのい ずれかで、-w オプションとの併用のみ可能 です。
		フォルダーがクリーンアップ対象として指定 され、-r オプションが追加されると、 unica_acclean ツールは指定されたフォルダ ーのすべてのサブディレクトリーに対して操 作を実行します。フォルダーで -w オプショ ンだけが使用される場合、unica_acclean は 最上位フォルダーに対してのみ操作を実行し ます。
-S	-S <datasource></datasource>	処理が行われるオブジェクトのデータ・ソー スの名前を指定します。 -U < <i>database_user&gt;</i> および -P < <i>database_password&gt;</i> オプションと一緒に使 用します。これらのオプションによって、 Marketing Platform に保存された資格情報を オーバーライドしたり、 ASMSaveDBAuthentication が FALSE に設定 されているデータ・ソースに認証を提供した りできます。

表 45. Campaign クリーンアップ・ユーティリティーのオプション (続き)

表 45. Campaign クリーンアップ・ユーティリティーのオプション (続き)

オプション	構文	説明
-5	-s <criteria></criteria>	-w オプションとともに使用して、クリーン アップの基準を定義します。これは SQL 照 会として指定されます。 SQL の LIKE 演算 子を使用して、ワイルドカードに基づいて検 索を行うことができます。
		<ul> <li>指定されたオブジェクトのデータ・テーブル</li> <li>列はすべて基準として使用できます。</li> <li>キャンペーン・フォルダーまたはセッション・フォルダーをオブジェクトとして</li> <li>指定する場合、条件は UA_Folder テーブルの列に基づきます。</li> </ul>
		<ul> <li>キャンペーンをオブジェクトとして指定 する場合、条件は UA_Campaign テーブ ルの列に基づきます。</li> <li>フローチャートをオブジェクトとして指 定する場合、条件は UA_Flowchart テー ブルの列に基づきます。</li> </ul>
		<ul> <li>セッションをオブジェクトとして指定す る場合、条件は UA_Session テーブルの 列に基づきます。</li> </ul>
-U	-U <dbusername></dbusername>	-S オプションによって指定されたデータ・ ソースのユーザー・ログインを指定します。 -P オプション (このデータベース・ユーザ ーのデータベース・パスワードを指定する) と一緒に使用します。
-u	-u <user name=""></user>	-p オプションが使用される場合には、この オプションも使用する必要があります。この オプションは、ユーティリティーを実行して いるユーザーの IBM EMM ユーザー名を指 定するために使用します。
-V	-V	クリーンアップ・ユーティリティーに関する バージョン情報と著作権情報を表示します。

表45. Campaign クリーンアップ・ユーティリティーのオプション (続き)

オプション	構文	説明
-W	-w {flowchart	orphan オプションとともに使用される場合
	campaign   session	を除き、指定された条件に基づいて、指定さ
	sessionfolder	れたオブジェクト・タイプに関連付けられて
	campaignfolder	いる一時ファイルおよび一時テーブルを検索
	orphan} -s <criteria></criteria>	します。
	[-r]	orphan とともに使用される場合のみ、孤立 した一時ファイルおよび一時テーブルを求め てシステム全体を検索します。
		「orphan」を除くすべてのオプションで -s <criteria> が必須です。詳しくは、-s を参 照してください。</criteria>
		オプションで、サブフォルダーを再帰的に検 索する場合は、-r オプションを使用しま す。詳しくは、-r を参照してください。

# Campaign レポート生成ユーティリティー (unica\_acgenrpt)

unica\_acgenrpt は、指定されたフローチャートからフローチャート・セル・レポー トをエクスポートするためのコマンド・ライン・レポート生成ユーティリティーで す。レポートは、フローチャートの .ses ファイルから生成されます。以下のタイ プのセル・レポートを生成したりエクスポートしたりするには、unica\_acgenrpt ユ ーティリティーを使用します。

- セル・リスト
- セル・プロファイル
- セル変数クロス集計
- セル内容

これらのレポートについて詳しくは、「*IBM Campaign* ユーザー・ガイド」を参照 してください。

エクスポート・ファイルのデフォルト・ファイル名は、フローチャート名に基づく 固有のものです。指定されたディレクトリーに保存されます。その名前のファイル が既に存在する場合は上書きされます。デフォルトのファイル・フォーマットは、 タブ区切りです。

注: エクスポート・ファイルには、フローチャートの .ses ファイルからの現行デ ータが含まれます。 unica\_acgenrpt ユーティリティー実行時にフローチャートが .ses ファイルに書き込まれる場合、結果として生成されるレポート・ファイルに含 まれるデータは、そのフローチャートの前回実行時のものである可能性がありま す。 on-success トリガーを使用して unica\_acgenrpt ユーティリティーを呼び出し ている場合、unica\_acgenrpt の実行前に、フローチャートが .ses ファイルへの書 き込みを完了するために必要な長さの時間を見込んだ適切な遅延が、スクリプトに 含まれていなければなりません。 .ses ファイルを保存するのに必要な時間は、フ ローチャートのサイズや複雑度に応じて大きく異なります。 unica\_acgenrpt ユーティリティーを使用するには、管理者役割のセキュリティー・ ポリシー中に Run genrpt Command Line Tool の許可が必要です。セキュリティ ー・ポリシーと許可について詳しくは、3ページの『第 2 章 IBM Campaign での セキュリティーの管理』を参照してください。

# ユースケース:フローチャート実行からのセル数の取得

時間の経過に伴うセル数を分析するには、unica\_acgenrpt ユーティリティーを使用 してフローチャートの実稼働実行からセル数を取得します。レポート・タイプには 「セル・リスト」を指定します。

このデータ取得を自動化するには、フローチャートで on-success トリガーを使用し て、unica\_acgenrpt ユーティリティーを起動するスクリプトを呼び出します。 <FLOWCHARTFILENAME> トークンを使用して、フローチャートの .ses ファイルの絶 対パス名を返します。データを分析で使用できるようにするには、結果として生成 されるエクスポート・ファイルをテーブルにロードする別のスクリプトを使用しま す。

# IBM Campaign レポート生成ユーティリティーの構文

unica acgenrpt ユーティリティーの構文は、以下のとおりです。

unica\_acgenrpt -s <sesFileName> -h <partitionName> -r <reportType> [-p
<name>=<value>]\* [-d <delimiter>] [-n] [-i] [-o <outputFileName>] [-y
<user>] [-z <password>] [-v]

# IBM Campaign レポート生成ユーティリティーのさまざまなオプ ション

unica\_acgenrpt ユーティリティーでは、以下のオプションがサポートされています。

オプショ		
ン	構文	説明
-8	-s <sesfilename></sesfilename>	処理を行う Campaign フローチャート
		(.ses) ファイルを指定します。ファイル名
		には、このフローチャート・ファイルの存在
		場所のパーティション (-h オプションを使
		用して定義されるもの) より下のパスが含ま
		れていなければなりません。 -s の有効な値
		の例を以下に示します。
		"campaign/Campaign
		C00001_C00001_Flowchart 1.ses"
		   <sesfilename> にワイルドカード文字を含め</sesfilename>
		ることにより、それに一致する複数のフロー
		チャートを操作対象とすることが可能です。

表 46. Campaign レポート生成ユーティリティーのさまざまなオプション

オプショ		
ン	構文	説明
-h	-h <partitionname></partitionname>	フローチャート・ファイル (-s によって指定 される) が置かれているパーティションの名 前を指定します。
-r	-r <reporttype></reporttype>	生成するレポートのタイプを指定します。有 効な値は以下のとおりです。
		• CellList (セル・リスト・レポート)
		• Profile (セル変数プロファイル・レポート)
		• XTab (セル変数クロス集計レポート)
		• CellContent (セル・コンテンツ・レポート)
-р	-p <name>=<value></value></name>	name=value のペアを使用して、レポートの パラメーターを指定します。 -p オプション は複数回指定可能です。それらは、-r オプ ションより後に指定しなければなりません。 -p オプションでサポートされる有効な name=value ペアのリストについては、 『unica_acgenrpt の -p オプションで使用す るパラメーター』を参照してください。
-d	-d <delimiter></delimiter>	出力ファイルの中で列区切りを指定します。 デフォルトは TAB です。
-n	-n	出力ファイルの中で、レポート・データの前 に列名を含めます。
-i	-i	出力ファイルの末尾に固有のテキスト ID を 付加します。
-0	-o <outputfilename></outputfilename>	出力ファイルの名前を指定します。デフォル トは <sesfilename> の .ses を .csv で置 き換えたものです。ワイルドカードを使用す る場合、これは宛先ディレクトリーを指定し ます。</sesfilename>
-у	-y <user></user>	Campaign のログイン・ユーザー名を指定します。
-Z	-z <password></password>	ユーザー・ログインのためのパスワードを指 定します。
-V	-v	ユーティリティーのバージョン番号を表示し て終了します。

表46. Campaign レポート生成ユーティリティーのさまざまなオプション (続き)

# unica\_acgenrpt の -p オプションで使用するパラメーター

unica\_acgenrpt ユーティリティーの -p オプションを使用すると、セル変数プロファイル、セル変数クロス集計、およびセル・コンテンツの各レポートについて、 name=value ペアを使用することにより、以下のパラメーターを指定することができます。

# セル変数プロファイル・レポート

パラメーター名	使用法	説明
cell	必須	プロファイルを作成するセルの名前。
field	必須	セルのプロファイルを作成するために使用す
		るフィールドの名前。
cell2	オプション	プロファイルを作成する付加的なセルの名
		前。
bins	オプション	レポートに含めるビンの数。指定する数が、
		異なるフィールド値の数より小さい場合、一
		部のフィールドが結合されて 1 個のビンに
		なります。デフォルトは 25 です。
meta	オプション	メタタイプ別のプロファイルを作成するかど
		うかを指定します。有効な値は TRUE と
		FALSE です。デフォルトは TRUE です。

# セル変数クロス集計レポート

パラメーター名	使用法	説明
cell	必須	プロファイルを作成するセルの名前。
field1	必須	セルのプロファイルを作成するために使用す る最初のフィールドの名前。
field2	必須	セルのプロファイルを作成するために使用す る 2 番目のフィールドの名前。
cell2	オプション	プロファイルを作成する付加的なセルの名 前。
bins	オプション	レポートに含めるビンの数。指定する数が、 異なるフィールド値の数より小さい場合、一 部のフィールドが結合されて 1 個のビンに なります。デフォルトは 10 です。
meta	オプション	メタタイプ別のプロファイルを作成するかど うかを指定します。有効な値は TRUE と FALSE です。デフォルトは TRUE です。

## セル・コンテンツ・レポート

パラメーター名	使用法	説明
cell	必須	レポートに含めるセルの名前。
field	オプション	レポートに含めるフィールドの名前。付加的 なフィールドを指定するには、複数回指定し ます。フィールドを指定しない場合、レポー トにはオーディエンス・フィールドの値が表 示されます。
records	オプション	レポートに含めるレコードの数。デフォルト は 100 です。

パラメーター名	使用法	説明
skipdups	オプション	ID 値が複製するレコードをスキップするか どうかを指定します。非正担化テーブルを使
		用している場合、このオプションを有効にす
		るこ便利です。有効な値は TRUE と FALSE です。デフォルトは FALSE です。

# データベース・テスト・ユーティリティー

Campaign は、以下のコマンド・ライン・データベース・テスト・ユーティリティー をサポートしています。これを使用して、ターゲット・データベースへの接続をテ ストしたり、照会を実行したり、さまざまなタスクを実行したりすることができま す。

- 『cxntest ユーティリティー』
- 195 ページの『odbctest ユーティリティー』
- 196 ページの『db2test ユーティリティー』
- 198 ページの『oratest ユーティリティー』

これらのユーティリティーは、Campaign サーバー上の /Campaign/bin ディレクト リーにあります。

注:お使いのオペレーティング・システムが db2test ユーティリティーを提供しな い場合、cxntest ユーティリティーを使用してターゲット・データベースへの接続 をテストしてください。

## cxntest ユーティリティー

cxntest ユーティリティーでは、ターゲット・データベースへの接続をテストする ことができます。接続が確立された後、さまざまなコマンドを発行することができ ます。

#### cxntest ユーティリティーを使用するには

- 1. Campaign サーバーのコマンド・プロンプトから、cxntest ユーティリティーを 実行します。
- cxntest ユーティリティーは、プロンプトから起動されます。プロンプトで以下 の情報を入力する必要があります。
  - a. データベースの接続ライブラリーの名前
  - b. データ・ソースの名前
  - c. データベース・ユーザー ID
  - d. データベース・ユーザー ID に関連付けられたパスワード

ユーティリティーは、選択の確認を求めるプロンプトは出しません。

- 3. 接続が成功した場合、プロンプトで次のコマンドを入力できます。
  - bprint[*pattern*]

テーブルのリストの配列の取り出しを実行します (一度に 500 個)。オプショ ンで、検索 pattern を指定することもできます。 • describe*table* 

指定された table について説明します。各列名とそれに対応するデータ型、ストレージの長さ、精度、およびスケールを返します。

• exit

データベース接続を強制終了して、終了します。

• help

サポートされているコマンドのリストを表示します。

• print [pattern]

テーブルのリストを返します。オプションで、検索 pattern を指定することも できます。

• quit

データベース接続を強制終了して、終了します。

• SQL\_command

1 つの有効な SQL コマンド、または一連の SQL コマンドを実行します。

# odbctest ユーティリティー

odbctest ユーティリティーを使用すると、ターゲット・データベースへの Open DataBase Connectivity (ODBC) 接続をテストすることができます。接続が確立され た後、さまざまなコマンドを発行することができます。これは、 AIX、Solaris、Windows、および HP-UX システムでサポートされています (32 ビッ トのみ)。

注: Oracle データベースおよび DB2<sup>®</sup> データベースについては、それぞれ固有のユ ーティリティーを使用してください。

### odbctest ユーティリティーを使用するには

1. Campaign サーバーのコマンド・プロンプトから、odbctest ユーティリティーを 実行します。

odbctest ユーティリティーは、次のような接続可能データベースのリストを返 します。

Registered Data Sources: MS Access Database (Microsoft Access Driver (\*.mdb)) dBASE Files (Microsoft dBase Driver (\*.dbf)) Excel Files (Microsoft Excel Driver (\*.xls))

- 2. odbctest ユーティリティーは、プロンプトから起動されます。プロンプトで以下の情報を正確に入力する必要があります。
  - a. 接続先のデータベースの名前 (登録済みデータ・ソースのリストから取られる)。
  - b. データベース・ユーザー ID
  - c. データベース・ユーザー ID に関連付けられたパスワード

ユーティリティーは、選択の確認を求めるプロンプトは出しません。

 データベースに正常に接続した後、odbctest ユーティリティーは次のようなメ ッセージを出力し、コマンド・プロンプトを表示します。

Server ImpactDemo conforms to LEVEL 1. Server's cursor commit behavior: CLOSE Transactions supported: ALL Maximum number of concurrent statements: 0 For a list of tables, use PRINT.

- 4. プロンプトで以下のコマンドを入力できます。
  - bulk [number\_of\_records]

返すレコードの数を設定します (number\_of\_records によって指定される)。デフォルトは1です。

• descres*SQL\_command* 

*SQL\_command* によって指定された SQL コマンドによって返される列につい て説明します。

• describepattern

pattern によって指定されたテーブル (複数可) について説明します。対応する タイプ、データ型、ストレージの長さ、精度、およびスケールを返します。

• exit

データベース接続を強制終了して、終了します。

• help

サポートされているコマンドのリストを表示します。

• print [pattern]

テーブルのリストを返します。オプションで、検索 pattern を指定することも できます。

• quit

データベース接続を強制終了して、終了します。

• SQL\_command

1 つの有効な SQL コマンド、または一連の SQL コマンドを実行します。

• typeinfo

サポートされているデータベースのデータ型のリストを返します。

## db2test ユーティリティー

db2test ユーティリティーを使用すると、DB2 データベースへの接続をテストする ことができます。接続が確立された後、さまざまなコマンドを発行することができ ます。

お使いのオペレーティング・システムが db2test ユーティリティーを提供しない場 合、cxntest ユーティリティーを使用してターゲット・データベースへの接続をテ ストしてください。

#### db2test ユーティリティーを使用するには

お使いのオペレーティング・システムが db2test ユーティリティーを提供しない場 合、cxntest ユーティリティーを使用してターゲット・データベースへの接続をテ ストしてください。

1. Campaign サーバーのコマンド・プロンプトから、db2test ユーティリティーを 実行します。

db2test ユーティリティーは、接続可能なデータベース (登録済みデータ・ソー ス) のリストを返します。

- 2. db2test ユーティリティーは、プロンプトから起動されます。プロンプトで以下 の情報を正確に入力する必要があります。
  - 接続先のデータベースの名前(登録済みデータ・ソースのリストから取られる)。
  - データベース・ユーザー ID
  - データベース・ユーザー ID に関連付けられたパスワード

ユーティリティーは、選択の確認を求めるプロンプトは出しません。

 データベースに正常に接続した後、db2test ユーティリティーは次のようなメッ セージを出力し、コマンド・プロンプトを表示します。

Server ImpactDemo conforms to LEVEL 1. Server's cursor commit behavior: CLOSE Transactions supported: ALL Maximum number of concurrent statements: 0 For a list of tables, use PRINT.

- 4. プロンプトで以下のコマンドを入力できます。
  - describepattern

pattern によって指定されたテーブル (複数可) について説明します。対応する タイプ、データ型、ストレージの長さ、精度、およびスケールを返します。

• exit

データベース接続を強制終了して、終了します。

• help

サポートされているコマンドのリストを表示します。

• print [pattern]

テーブルのリストを返します。オプションで、検索 pattern を指定することも できます。

• quit

データベース接続を強制終了して、終了します。

• SQL\_command

1 つの有効な SQL コマンド、または一連の SQL コマンドを実行します。

• typeinfo

サポートされているデータベースのデータ型のリストを返します。

## oratest ユーティリティー

oratest ユーティリティーを使用すると、Oracle サーバーへの接続をテストするこ とができます。

#### oratest ユーティリティーを使用するには

- 1. Campaign サーバーのコマンド・プロンプトから、oratest ユーティリティーを 実行します。
- 2. oratest ユーティリティーは、プロンプトから起動します。プロンプトで以下の 情報を正確に入力する必要があります。
  - a. 接続先の Oracle サーバーの名前。
  - b. データベース・ユーザー ID
  - c. データベース・ユーザー ID に関連付けられたパスワード

ユーティリティーは、選択の確認を求めるプロンプトは出しません。

成功した場合、oratest ユーティリティーは、「接続は正常に行われました」というメッセージを出力し、戻り値ゼロ (0) で終了します。

## データベース・ロード・ユーティリティー

Campaign は、データベース・ロード・ユーティリティーを使用するためのサポート を提供しています。このユーティリティーを使用すると、ID リストを一時テーブル にプッシュしたりデータを再びデータベースにエクスポートしたりする際のパフォ ーマンスが向上します。この機能は、一般的なデータベース・ロード・ユーティリ ティーのほとんどで作動します。ユーティリティーは、データベース・ベンダーか ら直接入手できます。これらのユーティリティーのライセンス・コピーの取得はユ ーザーの責任で行います。

Campaign ロード・サポートは、Marketing Platform の「構成」ページで定義される 一連のプロパティーによって制御されます。詳しくは、「*Marketing Platform 管理者* ガイド」を参照してください。

ほとんどのデータベース・ロード・ユーティリティーでは、その使用時に制御ファ イルを指定する必要もあります。 Campaign は、構成する制御ファイル・テンプレ ートに基づいてファイルを動的に生成することができます。このファイルは一度構 成するだけで十分です。ユーザー・インターフェースから変更を行う必要はありま せん。

Campaign でデータベースへのデータの取り込みを行う必要が生じた場合 (例えば、「スナップショット」プロセス、または「メール・リスト」などのコンタクト・プロセス、あるいは一時テーブルへの ID リストに関して)、以下を行います。

1. 一時データ・ファイルを固定幅または区切りテキストとして作成します。

LoaderControlFileTemplate プロパティーで指定されている場合、データベース に送信する必要があるテンプレート・ファイルおよびフィールドのリストに基づ いて一時制御ファイルが動的に作成されます。

- 2. LoaderCommand プロパティーで指定されているコマンドを発行します。これは、 データベース・ロード・ユーティリティーの実行可能ファイルの直接呼び出しの 場合と、データベース・ロード・ユーティリティーを起動するスクリプトの呼び 出しの場合があります。
- 3. 一時データ・ファイルおよび一時制御ファイルをクリーンアップします。

この機能により、新規または空のデータベース表にデータをロードしたり、既存 のデータベース表にデータを追加したりできるようになります。

**注:** Campaign は、既存のデータベース表内のレコードを更新するためのロード・ユ ーティリティーはサポートしていません。

# 高速ローダーで繰り返されるトークン

LoaderControlFileTemplate または LoaderControlFileTemplateForAppend を作成 する際、アウトバウンド・テーブルのフィールドごとに一度ずつ、特別なトークン のリストが繰り返されます。

次の表で、利用できるトークンが説明されています。

表 47. 高速ローダーで繰り返されるトークン

トークン	説明
<controlfile></controlfile>	このトークンは、LoaderControlFileTemplate パラメーター で指定されたテンプレートに応じて Campaign が生成する 一時制御ファイルへの絶対パスおよびファイル名に置き換え られます。
<dsn></dsn>	このトークンは、DSN プロパティーの値に置換されます。 DSN プロパティーが設定されていない場合、 <dsn> トークン は、このデータ・ソースのカテゴリー名で使用されるデー タ・ソース名に置換されます (<database> トークンの置換 に使用されるのと同じ値)。</database></dsn>
<database></database>	このトークンは、Campaign がデータをロードしているデー タ・ソースの名前で置き換えられます。これは、このデー タ・ソースのカテゴリー名で使用されるのと同じデータ・ソ ース名です。
<datafile></datafile>	このトークンは、ロード・プロセス中に Campaign によっ て作成される一時データ・ファイルへの絶対パスおよびファ イル名で置き換えられます。このファイルは、Campaign の 一時ディレクトリー UNICA_ACTMPDIR にあります。
<numfields></numfields>	このトークンは、テーブル中のフィールドの数に置換されます。
<password></password>	このトークンは、現在のフローチャートからデータ・ソース への接続のデータベース・パスワードに置換されます。
<table></table>	このトークンは廃止されていますが、後方互換のためにサポ ートされています。 <tablename> を参照してください。バ ージョン 4.6.3 現在、<table> の代わりにそれが使用され ています。</table></tablename>

表 47. 高速ローダーで繰り返されるトークン (続き)

トークン	説明
<tablename></tablename>	このトークンは、Campaign がデータをロードしているデー タベース表名で置き換えられます。これは、スナップショッ ト・プロセスのターゲット・テーブルか、Campaign によっ て作成される一時テーブルの名前です。
<user></user>	このトークンは、現在のフローチャート接続からデータ・ソ ースへのデータベース・ユーザーに置換されます。

これらの特別なトークンに加えて、すべての行に他の文字が含まれています。最後 の行を除くすべての行に単一の文字を組み込む場合は、文字を不等号括弧で囲みま す。この機能では、不等号括弧 (< >) 文字で単一の文字だけを囲むことができま す。

これは、一般的には、フィールドのリストをコンマで区切るために使用されます。 例えば、次の構文は、フィールド名のコンマ区切りリストを生成します。

#### <FIELDNAME><,>

コンマを囲む不等号括弧 (< >) 文字は、最後の行を除く、各行のすべての挿入フィールド名の末尾にコンマが存在している必要があることを示します。

どの文字シーケンスもこの要件に適合しないと、最後の行を含め、これが毎回繰り 返されます。それで例えば、括弧付きの、各フィールド名の先頭にコロンを付けた フィールド名のコンマ区切りリストを生成するには、次の構文を使用します。

```
(
:<FIELDNAME><,>
)
```

コロンは不等号括弧 (< >) 文字で囲まれていないので、これは各行で繰り返されま す。しかし、コンマは最後の行を除く各行に現れます。次のような出力が生成され ます。

( :FirstName, :LastName, :Address, :City, :State, :ZIP )

コンマは最後のフィールド名 (ZIP)の末尾には現れていませんが、コロンはすべてのフィールド名の先頭に現れています。

# 第 16 章 IBM Digital Analytics と Campaign との統合

IBM Digital Analytics と Campaign が統合されると、Digital Analytics にあるオンラ イン・セグメントと関連データは、Campaign にあるオフライン・プロファイル・デ ータと結合されます。

Digital Analytics で定義されたセグメントを選択して、Web アクティビティーと行動を基に、マーケティング・キャンペーンのターゲットにできます。

統合システムを使用すると、次のような利点があります。

- Web アナリストは、Campaign によってターゲット設定されるセグメントを定義 することにより、オンラインで把握できるトレンドを迅速にフォローアップでき ます。
- キャンペーン・マネージャーは、キャンペーン戦術をマーケティング担当者の要求に合わせて調整できます。
- ビジネス・マーケティング担当者は、クロスチャネル・キャンペーンの成功と ROI を測定することにより、キャンペーン戦術の追跡とフォローアップを行えま す。
- オプションの eMessage とクリック後の分析ツールを構成すると、マーケティング・アナリストは、Eメール・キャンペーンで顧客と見込み顧客をターゲット設定した後、それらのターゲットの動作を追跡できます。

## IBM Digital Analytics と Campaign の統合

Digital Analytics を Campaign と統合する場合、Digital Analytics で定義されている オンライン・セグメントをキャンペーンで使用できます。

注: このトピックは、IBM Digital Analytics for On Premises ではなく、特に IBM Digital Analytics に関係があります。

Digital Analytics と Campaign の間の統合は、以下のような幾つかの構成要素に依存 します。

- Digital Analytics API にアクセスできるようにして 2 つの製品間の統合点の役割 を持つ統合サービス。
- どの Digital Analytics キーがどの Campaign オーディエンス ID に対応するかを Campaign に認識させるための変換テーブル。
- Campaign で統合サービスにアクセスするために必要な資格情報を使って構成された Marketing Platform ユーザー・アカウント。
- 統合サービス、変換テーブル、および資格情報について Campaign に通知するための構成設定。

以下の表は、必要な構成要素を構成する方法を説明しています。

表 48. Digital Analytics と Campaign の統合

作業	詳細	資料
ユーザーが製品間で容易にナビ ゲートできるように、オプショ ンで SSO を構成する。	シングル・サインオン (SSO) を使用すると、ユ ーザーが IBM EMM ユーザー・インターフェー ス内から Digital Analytics にアクセスするとき	IBM Marketing Platform 管理者 ガイド
	に、ログインのプロンプトが表示されません。	
Digital Analytics キーを Campaign オーディエンス ID に変換するための変換テーブル	通常、この作業は、IT 担当者などの技術担当者に よって行われます。	205 ページの『変換テーブルに ついて』
を構成する。	変換テークルは、少なくとも2列で構成されています。1 つの列は Digital Analytics の	
	registrationid (オンライン・キー) で、さらに Campaign オーディエンス ID (オフライン・キー) ごとに 1 つ以上の列があります。変換テーブル は、Campaign で選択が行われるユーザー・デー	
	タ・ソースに対して構成する必要があります。 Campaign 構成設定でテーブル名を指定する必要 があるため、それをメモしておいてください。	
セグメント統合を構成する	<ul> <li>統合を使用可能にする Campaign パーティションごとに、「設定」&gt;「構成」&gt; Campaignl</li> <li>partition   partition[n]   Coremetrics を選択し、</li> <li>以下の設定を構成します。</li> </ul>	373 ページの『Campaign   partitions   partition[n]   Coremetrics』
	<ul> <li>ServiceURL: 統合サービスを指定します (https://export.coremetrics.com/eb/ segmentapi/1.0/api.do)。</li> </ul>	
	<ul> <li>CoremetricsKey: 変換テーブルで使用される値 を指定します (registrationid)。</li> </ul>	
	<ul> <li>ClientID: お客様の会社に割り当てられる固有の Digital Analytics ID。</li> </ul>	
	• TranslationTableName: 変換テーブルの名前。	
	<ul> <li>ASMUserForCredentials: 統合サービスにアク セスすることを許可された Marketing Platform アカウント。デフォルトは asm_admin です。</li> </ul>	
	<ul> <li>ASMDatasourceForCredentials: ASMUserForCredentials 設定で指定された Marketing Platform アカウントに割り当てられ るデータ・ソース。デフォルトは UC_CM_ACCESS です。</li> </ul>	

表 48. Digital Analytics と Campaign の統合 (続き)

作業	詳細	資料
Marketing Platform アカウント	「設定」>「ユーザー」を選択し、	IBM Marketing Platform 管理者
に資格情報を割り当てる	ASMUserForCredentials 構成設定で定義されてい	ガイド
	るユーザーを選択し、「 <b>データ・ソースの編集</b> 」	
	リンクをクリックしてから新しいデータ・ソース	
	を追加します。	
	• データ・ソース名は、構成設定で定義された	
	ASMDatasourceForCredentials と厳密に一致す	
	る必要があります (例えば、UC_CM_ACCESS な	
	ど)。	
	• 「データ・ソース・ログイン」と「データ・ソ	
	ース・パスワード」は、Digital Analytics クラ	
	イアント ID に関連付けられている資格情報で	
	す。	
	この「テータ・ソース」は、統合サービスにアク	
	セ人できるようにする貧格情報を格納するために	
	Marketing Platform が使用するメカニスムです。	
変換テーブルをマップする。	Digital Analytics のデータを Campaign でアクセ	207 ページの『変換テーブルの
	スできるようにする手段として、テーブルをマッ	マッピング』
	プします。	
	   「設定」、「Campaign 設定」、「テーブル・マッ	
	<b>ピングの管理</b> 」を選択してからプロンプトに従	
	い、ユーザー・テーブルが存在するユーザー・デ	
	ータベースに対応するデータ・ソース	
	(ASMDatasourceForCredentials 用に定義した「デー	
	タ・ソース」ではありません)を指定します。	
	変換テーブル、テーブル・フィールド、およびオ	
	ーティエンス・レベルを選択します。 	
	テーブル・マッピングをすべてのフローチャート	
	で使用できるようにする場合は、それをデフォル	
	トのカタログ (default.cat) に保管します。	

表 48. Digital Analytics と Campaign の統合 (続き)

作業	詳細	資料
フローチャートの中でどの Campaign ユーザーが Digital Analytics セグメントを使用でき るかを指定する。	「設定」>「ユーザーの役割」&「権限」 >「Campaign」>「partition[n]」>「Global Policy」を選択します。「役割の追加と権限の割 り当て」をクリックしてから、「権限の保存と編 集」をクリックします。「キャンペーン」の下に ある「Coremetrics セグメントへのアクセス」の アクセス権限を調整します。	11ページの『セキュリティ ー・ポリシーの実装』
	デフォルトでは、「フォルダー所有者」、「所有 者」、および「管理」の各役割に対するアクセス 権限は「付与」になり、「実行」、「設計」、お よび「レビュー」の各役割に対しては「付与しな い」になります。	
	注: アクセス権限を決定するとき、SSO は考慮されません。シングル・サインオンを使用している場合でも、Campaign ユーザーが Digital Analytics セグメントにアクセスできるように設定するには、「グローバル・ポリシー」を設定してセグメントへのアクセス権限を付与する必要があります。	
Campaign の個々のパーティシ ョンに対して統合をオンにす る。	「設定」>「構成」> Campaign  partition   partition[n]   server   internal   UC_CM_integration を選択します。このオプショ ンが「はい」に設定されている場合、「選択」プ ロセス・ボックスに、「Digital Analytics セグメ ント」を入力として使用するオプションが表示さ れます。	369 ページの『Campaign   partitions   partition[n]   server   internal』
Digital Analytics 製品での権限 を構成する。	Campaign 関連の権限が設定されていない場合、 Campaign フローチャートの「選択」プロセス・ ボックスで「Digital Analytics セグメント」を入 力として使用できません。	Digital Analytics の製品資料。
Digital Analytics でセグメント を定義してそれらを Campaign で使用できるようにする。	以下のいずれかの製品を使用して、セグメントを Campaign にエクスポートします。 • Digital Analytics • Explore • Export	Digital Analytics の製品資料。

表 48. Digital Analytics と Campaign の統合 (続き)

作業	詳細	資料
フローチャートの中で	「選択」プロセス・ボックスをフローチャートに	IBM Campaign ユーザー・ガイ
Campaign ユーザーが Digital	追加し、「Digital Analytics セグメント」を「入	F
Analytics セグメントの使用を開	カ」として選択します。「クライアント ID」と	
始できるようになる。	セグメントを選択し、日付範囲を指定してからフ	
	ローチャートを実行します。	
	「選択」プロセスが実行されたときに、次のよう になります。	
	<ul> <li>統合サービスを介してデータが Digital Analytics からプルされます。セグメント・デー タは、登録 ID のリストに過ぎません。</li> </ul>	
	<ul> <li>マップされた変換テーブルを使用すると、登録 ID は Campaign オーディエンス ID に変換さ れます。</li> </ul>	
	<ul> <li>これでオーディエンス ID は、ダウンストリーム・プロセスで使用できるようになります。</li> </ul>	

# 変換テーブルについて

通常、変換テーブルの構成作業は、Digital Analytics と Campaign の統合の初期構成時に、IT 担当者などの技術担当者によって行われます。

変換テーブルは、どの Digital Analytics ID がどの Campaign オーディエンス ID に対応するかを Campaign に示す役割があります。変換テーブルは、入力として Digital Analytics セグメントが含まれるフローチャートを実行するときに必要です。 このテーブルがなければ、Campaign は製品同士の間で ID を変換する方法が分から ないためです。



変換テーブルは、以下のガイドラインに従う必要があります。

- 変換テーブルは、Campaign で選択が行われるユーザー・データ・ソースに対して 構成する必要があります。このデータ・ソースでは、テーブル作成権限を許可す る必要があります。これにより、Campaign は、セグメント定義を満たす ID のリ ストの一時テーブルを作成できます。
- 変換テーブルは、少なくとも2列で構成されています。1つの列は Digital Analytics キーで、それに対応する Campaign オーディエンス ID として1つ以 上の列があります。
- このリリースでは、Digital Analytics キーは、registrationid の値そのものにす る必要があります。
- 変換テーブルの registrationid のデータ型は、Digital Analytics の registrationID に定義されているものと同じデータ型である必要があります。例えば、いずれも VARCHAR である、など。
- Campaign オーディエンス ID は、統合の構成時にお客様によって定義されます。 例えば、CustomerID などです。
- Campaign プライマリー・オーディエンスが複数の物理キー (複合キー) で構成される場合、変換テーブルに含まれる列は、そのオーディエンスと同数でなければなりません。例えば、プライマリー・オーディエンスがキー CustomerID とAccountID から構成されている場合、変換テーブルには、(1) Digital Analytics キー、(2) CustomerID、(3) AccountID の 3 つの列が必要です。この要件は、複合オーディエンスに対してマッピングしている場合にのみ関係します。

**注:** パフォーマンスと保管時の利便性を考慮すると、ベスト・プラクティスは単 ーキー・オーディエンスを使用することです。

- 変換テーブル名とそのテーブルで定義される Digital Analytics キー (registrationid) は、必ず Campaign 構成設定で指定しておく必要があります。 変換テーブルで使用される値は、構成設定で定義される値と厳密に一致する必要 があります。 373 ページの『Campaign | partitions | partition[n] | Coremetrics』 を参照してください。
- 変換テーブルにデータを設定する方法は、それぞれのお客様の具体的な要件と構成によって異なります。どの Digital Analytics 登録 ID がどの Campaign オーディエンス ID と一致するかを特定できるようにするための共通ロジックを決定する必要があります。このプロセスは、実装を行うパートナーに支援してもらうことができます。
- 変換テーブルは、Campaign でマップされていなければなりません。『変換テーブ ルのマッピング』を参照してください。
- フローチャートが実行されるとき、Campaign は、マップされた変換テーブルにおいて Digital Analytics キーの数と Campaign オーディエンス ID の数の間に不一致があれば検出します。この不一致状態は、例えば ETL ルーチンがまだ実行中の場合に起こることがあります。このような場合、Campaign は、マップされた変換テーブルに更新済みレコードが含まれることを検証するように求めるメッセージをフローチャート・ログ・ファイルに書き込みます。この状態を解決するには、社内ポリシーに従ってオンライン・キーとオフライン・キーを(再度)一致させ、変換テーブルに最新のデータを再設定します。ユーザーは、マップされた変換テーブルが更新された後に、フローチャートを再実行する必要があります。

## 変換テーブルのマッピング

変換テーブルをマップすると、Digital Analytics のセグメント・データに Campaign でアクセスできるようになります。テーブル・マッピングにより、Campaign が使用 するデータ・ソース、変換テーブルの名前と場所、テーブル・フィールド、オーデ ィエンス・レベル、およびデータが識別されます。

テーブルをマップする前に、変換テーブルを構成し、統合設定を構成し、Marketing Platform アカウントに資格情報を割り当てる必要があります。手順については、201ページの『IBM Digital Analytics と Campaign の統合』 を参照してください。

通常、この作業は、Digital Analytics と Campaign の統合の初期構成時に、IT 担当 者などの技術担当者によって行われます。ただし、適切な権限を持つユーザーであ れば誰でも、任意の時点でテーブルのマップもしくは再マップを行うことができま す。

- 必要なユーザー・テーブルにアクセスできるように Campaign が正しく構成され ていることを確認します。28ページの『ユーザー・テーブルのアクセスをテス トする方法』を参照してください。
- 32ページの『ユーザー・テーブルの作業』の手順とガイドラインに従って、変換テーブルをマップします。

要約すると、新しいベース・レコード・テーブルをマップして、フローチャート のプロセスからデータにアクセスできるようにします。新しいベース・レコー ド・テーブルは、フローチャートを編集するときにマップ (作成) できます (「管理」>「テーブル」を使用)。あるいは、「設定」>「Campaign 設定」> 「テーブル・マッピングの管理」を選択してマップすることもできます。

- テーブル・カタログにマッピング情報を保存して再利用できるようにします。このようにすると、テーブル・マッピングの作業が1回だけで済むので、Digital Analytics セグメントを組み込む Campaign ユーザーは、保存されたカタログを ロードしてマッピング情報を直接取得することができます。この情報をすべての フローチャートで使用できるように設定するには、それをデフォルトのカタログ (default.cat) に保管します。49ページの『テーブル・カタログの作業』を参照 してください。
- 物理テーブルが変更されたとき (例えば、列の追加や削除などが行われたとき) には、テーブルを再マップする必要があります。テーブルを再マップしなかった 場合、Digital Analytics セグメントを使用するフローチャートの実行時に、テー ブル・スキーマが変更されたことを示すエラーが返されます。

**重要:** テーブルをマップまたは再マップするとき、テーブル定義ウィザードで割 り当てられた「**IBM Campaign テーブル名**」は、Campaign 構成設定で定義され た TranslationTableName と厳密に一致する必要があります (373 ページの 『Campaign | partitions | partition[n] | Coremetrics』 を参照してください)。テー ブル定義ウィザードを使用するときにテーブル名を編集しなければ、名前は一致 します。
# 第 17 章 Campaign を非 ASCII データ用に構成する

Campaign および PredictiveInsight は、ローカライズされたデータと米国以外のロケ ールの使用をサポートします。同じ IBM アプリケーション・インストール済み環 境の中で、ユーザーに合わせて複数のロケールを使用できます。非 ASCII データ、 米国以外のロケール、またはユーザー指定のロケールを正しく処理するようアプリ ケーションを確実にセットアップするには、特定の構成タスクをいくつか実行する 必要があります。実際のデータとロケールに適合するようシステムを完全に構成し て検査を完了するまでは、IBM アプリケーションを使用しないよう強くお勧めしま す。アプリケーションの新規インストール時にこれらの構成手順を実行することを お勧めします。

# 非 ASCII データまたは非 US ロケールの使用について

構成手順のいずれかを実行する前に、IBM EMM アプリケーションのデータとロケールの構成に適用されている基本概念を理解する必要があります。このセクションには、以下のトピックが含まれます。

- ・ 『文字エンコードについて』.
- ・『非 ASCII データベースとの相互作用について』.
- 211ページの『複数ロケール・フィーチャーについて』.

# 文字エンコードについて

文字エンコードは、人間の言語をコンピューター上で表すための手段です。異なる 言語を表すことを目的として、さまざまなエンコードが使用されます。非 ASCII 言 語を扱うように IBM アプリケーションを構成するためには、テキスト・データを 保管するファイルとデータベースの両方について、使用される文字エンコードを理 解する必要があります。テキスト形式によっては、文字エンコードに特殊ケースが 存在します。詳しくは、210ページの『文字ベースのフィールド内のテキストのエ ンコード』を参照してください。

サポートされるエンコードは、393ページの『Campaign での文字エンコード』にリ ストされています。

# 非 ASCII データベースとの相互作用について

アプリケーションがデータベースと通信する場合、アプリケーションとデータベー ス間のいくつかの言語依存領域を理解する必要があります。これには、以下の領域 が含まれます。

- 日時フィールドの形式
- 文字ベースのフィールド内のテキストのエンコード
- SQL SELECT ステートメントの ORDER BY 節で必要なソート順

Campaign と PredictiveInsight はデータベース・クライアントと直接通信し、クライアントがデータベースと通信します。データベースごとに言語依存データの扱いが

異なります。ご使用のデータベース・サーバーおよびクライアントで使われるエン コードと日付形式を理解し、これらの設定に応じて IBM アプリケーションを正し く構成する必要があります。

# 日時フィールドの形式

日付フィールドの形式には、以下のようなさまざまな特性があります。

- 日、月、年の順序
- 日、月、年の間の区切り文字
- 完全に記述した日付の表記
- カレンダーのタイプ (グレゴリオまたはユリウス)
- 曜日の省略名と完全な名前
- 月の省略名と完全な名前

時刻フィールドの形式には、以下のようなさまざまな特性があります。

- 時間形式 (例えば、12 時間形式または 24 時間形式)
- 分と秒の表記
- 午前/午後を表すロケール固有の標識

重要:複数ロケール・フィーチャーを使用する場合は、3 文字の月 (MMM)、%b (月の省略名)、または %B (月の完全な名前) が含まれる日付形式を使用すべきではありません。その代わり、月を表すために数値を使用する区切り形式または固定形式を使用するようにしてください。日付形式について詳しくは、398 ページの『日付と時刻の形式』を参照してください。複数ロケール・フィーチャーについて詳しくは、211 ページの『複数ロケール・フィーチャーについて』を参照してください。

日付と時刻の形式は、SQL ステートメントの中や、データベースによって返される データ (結果セットと呼ばれる)の中に現れることがあります。データベース・クラ イアントによっては、SQL ステートメント (出力)と結果セット (入力)で異なる形 式をサポートしたり必要としたりするものもあります。 Campaign の「構成」ペー ジには、さまざまな形式それぞれのパラメーター (DateFormat、

DateOutputFormatString、DateTimeFormat、DateTimeOutputFormatString) があり ます。

# 文字ベースのフィールド内のテキストのエンコード

CHAR や VARCHAR などのテキスト・ベースのフィールドのデータには、特定の文字 エンコードが使用されます。データベースが作成されると、データベース全体で使 用されるエンコードが指定される場合があります。さまざまな文字エンコードのう ちの 1 つをデータベース全体規模で使用するように Campaign と PredictiveInsight を構成することができます。列ごとのエンコードはサポートされていません。

最新のデータベースによく見られる 1 つの特徴として、データベースのエンコード とアプリケーションが使用するエンコード間のトランスコードをデータベース・ク ライアントが行うという点が挙げられます。これは、アプリケーションが何らかの 形式の Unicode を使用し、一方データベースは言語固有のエンコードを使用する場 合によく行われます。

# 複数ロケール・フィーチャーについて

Campaign は、単一インストールで複数の言語とロケールをサポートします。 Campaign には、インストール時にデフォルトの言語とロケールが設定されますが、 必要に応じて IBM EMM でユーザーごとに個別のロケール設定を設定できます。

ユーザーのロケール設定を設定することはオプションです。ユーザーの優先ロケー ルが IBM EMM で明示的に設定されない限り、そのユーザー・レベルの「優先」ロ ケールは存在しません。そのユーザーがログインすると、Campaign は IBM EMM で設定されたスイート・レベルのロケールを使用します。

ユーザーの優先ロケールが明示的に設定された場合、その設定はスイート・レベル の設定をオーバーライドします。このユーザーが Campaign にログインすると、そ のユーザーの優先する言語とロケールでユーザー・インターフェースが表示されま す。この設定は、セッションが終了する (つまり、ユーザーがログアウトする) まで 適用されます。したがって、複数ロケール・フィーチャーは、複数のユーザーが Campaign にログインして、それぞれの優先する言語とロケールで同時に作業するこ とを可能にします。 IBM EMM でのユーザー・ロケール設定の設定について詳しく は、「IBM Marketing Platform 管理者ガイド」を参照してください。

複数ロケール機能のシステムを構成するには、219 ページの『複数ロケール用の Campaign の構成』を参照してください。そのセクションのタスクは、Campaign を 非 ASCII 言語または非 US ロケール用に構成した後に行います。

重要: 複数ロケール・フィーチャーを使用する場合は、3 文字の月 (MMM)、%b (月の省略名)、または %B (月の完全な名前) が含まれる日付形式を使用すべきでは ありません。代わりに、月を表す数値が含まれる区切り形式または固定形式を使用 してください。

# ユーザー・ロケール設定の影響を受けない領域

Campaign での表示のすべての領域がユーザー・ロケール設定で制御されるわけでは ありません。以下の領域は、ユーザー・ロケール設定の影響を受けません。

- Campaign インターフェースのうち、ユーザー・コンテキストのない部分 (例えば、ユーザーがログインする前に表示されるログイン・ページ)。インターフェースのこのような部分は、デフォルト言語で表示されます。
- ユーザー・インターフェース内のユーザー定義項目は、ユーザー・データベース から読み取られる場合 (例えば、カスタム属性や外部属性)、その元のデータベー ス言語でのみ表示されます。
- データ入力 -- Unicode エンコードを指定してシステム・テーブルが正しくセット アップされていれば、ロケール・セットアップに関係なく、任意の言語でデータ を Campaign に入力できます。
- Campaign コマンド・ライン・ツール -- これらはデフォルト言語で表示されます。Campaign のデフォルト言語は、システムの LANG 環境変数で指定した言語でオーバーライドできます。LANG 環境変数を変更した場合、変更を有効にするためには、以下の Campaign プログラムを新たに起動する必要があります。
  - install\_license
  - svrstop
  - unica\_acclean.exe

- unica\_acgenrpt.exe
- unica\_aclsnr
- unica\_acsesutil
- unica\_actrg
- unica\_svradm

注: Windows では、言語の設定と地域の設定が一致しなければなりません。地域の 設定は Windows のすべての非 Unicode プログラムに影響するので、明示的に設定 する必要があります。

# 複数ロケール・フィーチャーの制限

複数ロケール・フィーチャーには、以下の制限があります。

日本語オペレーティング・システムではサポートされません。単一ロケールを指定して Campaign を日本語 OS 上にインストールする場合は、IBM 技術サポートにお問い合わせください。

注:日本語以外のオペレーティング・システム環境にインストールされた複数ロ ケール・フィーチャーは、ユーザー・ロケール設定として ja を適切にサポート します。

- これはすべての IBM アプリケーションによってサポートされるわけではありません。複数ロケールのサポートについては、各アプリケーションの資料を参照してください。
- Campaign の複数ロケール・インストールでは、ファイル名が混合言語になっている場合や、コマンド・シェル言語(エンコード)がファイル名のエンコードと一致しない場合は、コマンド・ラインに表示されるファイル名が文字化けする可能性があります。
- Windows プラットフォーム上の Campaign の複数ロケール・インストールは、 NTFS ドライブ上でのみサポートされます。 FAT32 は Unicode 文字セットをサ ポートしないためです。
- セル・プロファイル・レポートはローカライズされません。ロケールに関係なく 英語のままです。

# 非 ASCII 言語または米国以外のロケール用に Campaign を構成する

- ローカライズされたデータまたは非 ASCII ロケール用に Campaign を構成するに は、まず、209ページの『非 ASCII データまたは非 US ロケールの使用につい て』をすべてお読みください。次に、以下のリストにあるタスクをすべて完了しま す。それぞれの手順は、このセクションの後の部分で詳しく説明されています。
- 1. 213ページの『オペレーティング・システムの言語と地域の設定』.
- 2. 214 ページの『Web アプリケーション・サーバーのエンコード・パラメーター の設定 (WebSphere のみ)』.
- 3. 214 ページの『Campaign の言語とロケールのプロパティー値の設定』.
- 4. 215ページの『システム・テーブルのマップ解除と再マップ』.
- 5. 215 ページの『データベースおよびサーバーの構成の検査』.

**重要:** これらのタスクおよび手順のどれもスキップしないでください。手順をスキップした場合、誤った構成または不完全な構成になる可能性があり、エラーやデー 夕破損の原因となることがあります。

# オペレーティング・システムの言語と地域の設定

Campaign Sever を実行しているサーバー、および Campaign Web アプリケーショ ンがデプロイされているシステムで、オペレーティング・システムの言語と地域の 設定を構成します。

注: さらに、データベースによっては、データベースがインストールされているマ シン上でオペレーティング・システムの言語とロケールを設定する必要が生じるこ とがあります。それが必要かどうか判別するには、データベースの資料を参照して ください。

# UNIX での言語とロケールの設定について

UNIX システムでは、適切な言語がインストールされている必要があります。必要 な言語が AIX、HP、または Solaris マシンでサポートされているかどうか判別する には、以下のコマンドを使用します。

# locale -a

このコマンドにより、システムでサポートされるすべてのロケールが戻されます。 なお、Campaign では X Fonts およびトランスレーションのサポートをインストー ルする必要がないことに注意してください。

必要な言語がまだインストールされていない場合、以下の情報源を使用して、サポ ートされる UNIX バリアントを構成し、特定の言語を扱えるようにします。

- Solaris 9 International Language Environments Guide (http://docs.sun.com/app/ docs/doc/806-6642)
- AIX 5.3 ナショナル・ランゲージ・サポート・ガイドおよびリファレンス (http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/pseries/v5r3/index.jsp? topic=/com.ibm.aix.nls/doc/nlsgdrf/nlsgdrf.htm)
- HP-UX 11 Internationalization Features White Paper (http://docs.hp.com/en/ 5991-1194/index.html)

# Windows での言語とロケールの設定について

Windows システムの地域と言語のオプションで、必要な言語がまだ構成されていない場合は、直ちにそれを行ってください。 Windows の言語設定についての情報が必要な場合、http://www.microsoft.com で入手可能なリソースを参照してください。

このタスクを完了するにはシステム・インストール CD が必要になることがありま す。

注:言語設定を変更した後、Windows システムを必ず再始動してください。

# Web アプリケーション・サーバーのエンコード・パラメーターの 設定 (WebSphere のみ)

WebSphere<sup>®</sup> の場合に限り、非 ASCII エンコードで Campaign を使用する場合に は、アプリケーション・サーバーでエンコード用に UCS Transformation Format を 使用させるために、JVM 引数として -Dclient.encoding.override=UTF-8 を設定す る必要があります。

これを行う詳しい方法については、IBM WebSphere の資料を参照してください。

# Campaign の言語とロケールのプロパティー値の設定

Campaign は、単一インストールで複数の言語とロケールをサポートします。

Marketing Platform 内の Campaign 構成設定を使用して、Campaign が以下のタスク を実行する方法を制御する構成パラメーター値を設定します。

- テキスト・ファイルおよびログ・ファイルのデータの読み取り/書き込み
- データベース内の日付、時間、およびテキスト・フィールドの読み取り/書き込み
- データベースから受け取ったテキストの処理

これらの構成設定は、翻訳された Campaign メッセージ (例えば、Campaign ユーザ ー・インターフェースのテキスト)、およびアプリケーションの Web ページ上の日 付形式、数値、通貨記号で使われる言語とロケールを決定します。また表示言語は フローチャート・エディターの初期設定にも使用され、フローチャートで非 ASCII テキストの表示を可能にするために欠かせません。

注: Campaign は、非 ASCII の列名、表名、およびデータベース名をサポートして います。ただし、Campaign は、NCHAR、NVARCHAR などの列に関しては SQL Server データベースでのみサポートしています。DB2 は NCHAR 形式と NVARCHAR 形式の列は通常のテキスト・フィールドのように扱います。Oracle は、数値フィールドとして扱います。

「設定」>「構成」を選択して、以下のプロパティーを調整します。今後の参考のために、値を記録してください。

- Campaign > currencyLocale
- Campaign > supportedLocales
- Campaign > defaultLocale
- Campaign > partitions > partition[n]> dataSources > [data\_source\_name]> DateFormat
- Campaign > partitions > partition[n] > dataSources > [data\_source\_name]>DateOutputFormatString
- Campaign > partitions > partition[n] > dataSources > [data\_source\_name]>DateTimeFormat
- Campaign > partitions > partition[n]> dataSources > [data\_source\_name]> DateTimeOutputFormatString
- Campaign > partitions > partition[n] > dataSources > [data\_source\_name] > EnableSelectOrderBy

- Campaign > partitions > partition[n] > dataSources > [data\_source\_name] > ODBCunicode
- Campaign > partitions > partition[n] > dataSources > [data\_source\_name] > StringEncoding
- Campaign > partitions > partition[n] > dataSources > [data\_source\_name] > SuffixOnCreateDateField
- Campaign > partitions > partition[n] > server > encoding > stringEncoding
- Campaign > partitions > partition[n]> server > encoding > forceDCTOneBytePerChar
- Campaign > unicaACListener > logStringEncoding
- Campaign > unicaACListener >systemStringEncoding

# システム・テーブルのマップ解除と再マップ

言語依存のいずれかのパラメーターが正しく設定されていない場合、Campaign の 「管理」領域でシステム・テーブルをマップするときにシステム・テーブルを構成 するのが難しくなる可能性があります。ベスト・プラクティスとしては、すべての パラメーターを設定した後、データ・ソース内のすべてのテーブルをマップ解除し て、ログアウトし、再びログインしてすべてのテーブルを再びマップするのが適切 です。 Campaign では、データ・ソースがもはや使用されなくなるまで (つまりマ ップ解除されるまで)、データ・ソースに関する既存の設定が保持されます。

# データベースおよびサーバーの構成の検査

キャンペーンその他のオブジェクトを作成し始める前に、データベースとサーバー の設定が正しく構成されていることを確認する必要があります。

正しく構成されていることを確認するには、以下の検査を実行してください。

- 『データベース構成の検査』
- 216ページの『属性テーブルが正しく構成されていることの検査』
- 216 ページの『ASCII 文字と非 ASCII 文字を含むキャンペーンおよびフローチャートの検査』
- 217ページの『ASCII 文字と非 ASCII 文字を含むフローチャート入出力の検査』
- 218ページの『正しい言語ディレクトリーが使用されることの検査』
- 218ページの『カレンダー・レポートでの日付形式の検査』
- 218ページの『ロケールの通貨記号が正しく表示されることの検査』

# データベース構成の検査

- 1. 「**設定」>「Campaign 設定」**を選択します。 「Campaign 設定」ページが表示 されます。
- 2. 「データ・ソース・アクセスの表示」を選択します。
- 3. 「データベース・ソース」ダイアログで、データ・ソース名を選択します。

データベースのタイプと構成設定を含む、データ・ソースの詳細情報が表示され ます。

- StringEncoding」プロパティーまでスクロールダウンして、その値が、 Marketing Platform の構成ページの「dataSources」>「StringEncoding」で設定 した値と同じであることを確認します。
- 5. 想定されるエンコードでない場合は、データベース表を再マップして、この検査 を再び実行してください。

# 属性テーブルが正しく構成されていることの検査

1. 「設定」>「Campaign 設定」を選択します。

「Campaign 設定」ページが表示されます。

- 2. 「テーブル・マッピングの管理」を選択します。
- 3. 「テーブル・マッピング」ダイアログ内の IBM Campaign システム・テーブル のリストで、属性定義テーブル (UA\_AttributeDef) を選択して「参照」をクリッ クします。
- 4. 「**属性定義テーブル**」ウィンドウで、非 ASCII 文字が正しく表示されることを 確認します。

# ASCII 文字と非 ASCII 文字を含むキャンペーンおよびフローチャー トの検査

- 1. Campaign では、次のようなガイドラインに従ってキャンペーンを作成してくだ さい。
  - 名前には ASCII 文字だけを使用しますが、他のフィールド(「説明」、「目 的」などのフィールド) には非 ASCII 文字を使用します。
  - 「期間」フィールドに表示されるデフォルトの日付は、ロケールの日付形式で示される必要があります。カレンダー・ツールを使用して、それぞれの「期間」フィールドで新しい日付を選択してください。その際、「日」が間違って「月」として表示されてもすぐに識別できるよう、「12」より大きい「日」を選択します。
  - カレンダー・ツールを使って選択した日付が、フィールドに正しく表示される ことを確認します。
  - カスタム・キャンペーン属性が既に存在する場合、デフォルトのロケールやユ ーザー・ロケールとは無関係に、データベースのエンコード方式でそれらのフ ィールド・ラベルが表示される必要があります。
- 2. 基本的なキャンペーン・フィールドが完成したら、「保存とフローチャートの追加」をクリックします。
- 3. デフォルトのフローチャート名を受け入れますが、「フローチャートの説明」フ ィールドでは非 ASCII 文字を使用します。
- 4. 「保存してフローチャートを編集」をクリックします。
- 5. キャンペーンとフローチャートが正常に保存されていることを確認します。また、キャンペーンやフローチャートのラベルに非 ASCII 文字が含まれる場合、 それらが正しく表示されることを確認します。
- 6. キャンペーンの「サマリー」タブで「**サマリーの編集**」をクリックして、非 ASCII 文字を使用するようキャンペーン名を変更します。
- 7. 「変更の保存」をクリックして、非 ASCII 文字が正しく表示されることを確認 します。

- 8. 作成したばかりのフローチャートを選択し、「編集」をクリックして、非 ASCII 文字を使ってフローチャートの名前を変更します。
- 9. 「保存して終了」をクリックし、非 ASCII 文字が正常に表示されることを確認 します。

# ASCII 文字と非 ASCII 文字を含むフローチャート入出力の検査

- 1. 216ページの『ASCII 文字と非 ASCII 文字を含むキャンペーンおよびフローチ ャートの検査』で作成したテスト・フローチャートの中で、「編集」をクリッ クします。
- 2. フローチャートに選択プロセスを追加し、以下のガイドラインに従ってそれを 構成します。
  - 「入力」フィールドで、マップされるユーザー・テーブルを選択します。選択したテーブルにある使用可能なフィールドが「選択可能なフィールド」領域に表示されます。
  - 非 ASCII 文字を含んでいることが分かっているフィールドを 1 つ選択して、「プロファイル」をクリックします。
  - 非 ASCII 文字が正しく表示されることを確認します。
- 3. 同じ選択プロセス構成で、別の検査を次のように行います。今回は非 ASCII 文 字を含むフラット・ファイルを入力として使用します。
  - 「入力」フィールドで、非 ASCII 文字を使用しているフラット・ファイルを 選択します。選択したファイルにある使用可能なフィールドが「選択可能な フィールド」領域に表示されます。
  - 非 ASCII 文字が正しく表示されることを確認します。
- 「選択プロセス設定」ウィンドウの「全般」タブの「プロセス名」フィールドで、デフォルトの名前から非 ASCII 文字を含む名前に置き換えて「OK」をクリックします。
- 5. プロセスで、非 ASCII のプロセス名が正しく表示されることを確認します。
- 6. フローチャートにスナップショット・プロセスを追加して、既存の選択プロセ スから入力を受け入れるようにそれを接続します。
- 7. 「**エクスポート先**」でファイルにエクスポートするようスナップショット・プ ロセスを構成します。
- 8. 「**選択」>「スナップショット**」フローチャートを実行して、指定された出力フ ァイルを見つけます。
- 9. 出力の表示が正しいことを確認します。
- 10. フローチャートにスケジュール・プロセスを追加して、カスタム実行を次のように構成します。
  - 「プロセス構成」ウィンドウで、「実施頻度」フィールドから「カスタム設定」を選択します。
  - 「カレンダー」を使って日時を指定します。日付では、「日」が間違って 「月」として表示されてもすぐに識別できるよう、「12」より大きい「日」 を選択してください。
  - カレンダー・ツールを閉じる前に日時を保存するために、先に「適用」をクリックした後、「OK」をクリックします。
- 11. 「日時指定」フィールドで日時が正しく表示されることを確認します。

- 12. 「プロセス構成」ウィンドウを閉じて「保存して終了」をクリックします。
- 13. 「設定」>「Campaign 設定」を選択します。

「Campaign 設定」ページが表示されます。

- 14. 「テーブル・マッピングの管理」を選択します。
- 15. 「テーブル・マッピング」ウィンドウ内の IBM Campaign システム・テーブル のリストで、UA\_Campaign テーブルを選択して「参照」をクリックします。
- 16. 「キャンペーン・テーブル」ウィンドウで、非 ASCII 文字が正しく表示される ことを確認します。
- 17. 「テーブル・マッピング」ウィンドウで UA\_Flowchart テーブルを選択して、 非 ASCII 文字が正しく表示されることを確認します。
- 18. この検査が正常に完了したら、テスト用のキャンペーンとフローチャート、お よび検査に使ったファイルをすべて削除してください。

# 正しい言語ディレクトリーが使用されることの検査

1. Campaign において、「分析」>「キャンペーン分析」>「カレンダー・レポー ト」>「キャンペーン・カレンダー」と選択します。

キャンペーンのカレンダーが表示されます。レポートの右側に縦に表示される時間描写セレクター (日/週/2週/月) がイメージであることに注意してください。

- 2. イメージを右クリックして、「プロパティー」を選択します。
- 3. イメージの「プロパティー」ウィンドウで、イメージのアドレス (URL) を調べます。

アドレスは、例えば次のとおりです。

http://localhost:7001/Campaign/de/images/calendar\_nav7.gif

これは言語とロケールの設定がドイツ語 (de) であることを示しています。

 言語とロケールの設定が、デフォルトのアプリケーション設定またはユーザー・ ロケール設定(存在する場合)のいずれかに一致することを確認します。

# カレンダー・レポートでの日付形式の検査

- Campaign において、「分析」>「キャンペーン分析」 >「カレンダー・レポート」>「キャンペーン・カレンダー」をクリックします。
- 2. 右側の「日」、「週」、「2 週」、「月」の各タブをクリックして、このレポー トでの日付形式が正しいことを確認します。

# ロケールの通貨記号が正しく表示されることの検査

1. 「設定」>「Campaign 設定」を選択します。

「Campaign 設定」ウィンドウが表示されます。

- 2. 「オファー・テンプレートの定義」を選択します。
- 3. 新規作成します。「新規オファー・テンプレート (手順 2/3)」ページで、「使用 可能な標準属性およびカスタム属性」リストから「オファー当たりのコスト」を 選択して、それを「選択した属性」リストに移動します。

- 「次へ」をクリックして、「新規オファー・テンプレート (手順 3/3)」ページ で、「パラメーター化された属性」の下にある「オファー当たりのコスト」属性 フィールドを調べます。ロケールに適した通貨記号が括弧の中に正しく表示され ることを確認します。
- 5. この検査が正常に完了したら、オファー・テンプレートを作成する必要はないため、「**キャンセル**」をクリックしてください。

# 複数ロケール用の Campaign の構成

複数のロケール用に Campaign を構成するには、複数のロケールをサポートするよ うシステム・テーブルを構成する必要があります。まず、システム・テーブルの作 成時に適切なユニコード・バージョンのデータベース作成スクリプトを実行しま す。次に、データベースの種類に応じて特定のエンコード・プロパティー、日時の 形式、環境変数などを構成します。

# 始める前に: Campaign がインストールされている必要があります

このセクションの残りの部分では、次のような想定のもとで情報が記載されていま す:(1) Campaign が既にインストールされている、しかも(2) データベース・タイ プに適切なユニコード・バージョンのデータベース作成スクリプトを使って Campaign システム・テーブルが作成された。ユニコード・バージョンは <CAMPAIGN\_HOME>¥dd1¥unicode ディレクトリーの中にあります。

# SQL Server での複数ロケールの構成

IBM EMM にログインして、以下の表にリストされているエンコード・プロパティーを構成します。ここに示されているようにプロパティー値を設定してください。

プロパティー	値
<pre>Campaign &gt; partitions &gt; partition[n] &gt; dataSources &gt; [data_source_name] &gt; StringEncoding</pre>	WIDEUTF-8
<pre>Campaign &gt; partitions &gt; partition[n] &gt; server &gt; encoding &gt; stringEncoding</pre>	UTF-8
Campaign > unicaACListener > logStringEncoding	UTF-8
Campaign > unicaACListener >systemStringEncoding	UTF-8。必要に応じて複数のエ ンコードをコンマで区切って 設定できます。ただし一連の エンコードの中で UTF-8 を常 に最初に保ってください。例 えば UTF-8,ISO-8859-1,CP950 とします。
Campaign > partitions > partition[n] > dataSources > [data_source_name] > ODBCunicode	UCS-2

日時の形式を指定する構成プロパティーでは、デフォルト値を受け入れます。

# Oracle での複数ロケールの構成

複数ロケール用に構成するとき、システム・テーブルが Oracle である場合には、エ ンコード・プロパティー、日時の設定、環境変数、および Campaign Listener の始 動スクリプトを構成します。

# エンコード・プロパティーの構成 (Oracle)

Marketing Platform にログインして、以下の表にリストされているエンコード・プロ パティーを構成します。ここに示されているようにプロパティー値を設定してくだ さい。

プロパティー	値
<pre>Campaign &gt; partitions &gt; partition[n] &gt; dataSources &gt; [data_source_name] &gt; StringEncoding</pre>	UTF-8
<pre>Campaign &gt; partitions &gt; partition[n] &gt; server &gt; encoding &gt; stringEncoding</pre>	UTF-8
Campaign > unicaACListener > logStringEncoding	UTF-8
Campaign > unicaACListener >systemStringEncoding	UTF-8

# 日時の設定の構成 (Oracle)

プロパティー	值
Campaign > partitions > partition[n] > [data_source_name] > DateFormat	DELIM_Y_M_D
Campaign > partitions > partition[n] > [data_source_name] > DateOutputFormatString	%Y-%m-%d
Campaign > partitions > partition[n] > [data_source_name] > DateTimeFormat	DT_DELIM_Y_M_D
Campaign > partitions > partition[n] > [data_source_name] > DateTimeOutputFormatString	%Y-%m-%d %H:%M:%S 日本語のデータベースの場合、時間部分の区 切り文字はピリオド (.) でなければなりませ ん。したがって、日本語のデータベースでは 値を次のように設定します。 %Y/%m/%d %H.%M.%S
<pre>Campaign &gt; partitions &gt; partition[n] &gt; [data_source_name] &gt; SQLOnConnect</pre>	ALTER SESSION SET NLS_LANGUAGE='American' NLS_TERRITORY='America' NLS_TIMESTAMP_FORMAT='YYYY-MM-DD hh24:mi:ss' NLS_DATE_FORMAT='YYYY- MM-DD'

# 環境変数の構成 (Oracle)

Campaignクライアント・マシン上で、NLS\_LANG 変数の値を次のように設定します。

AMERICAN\_AMERICA.UTF8

以下に例を示します。

set NLS\_LANG=AMERICAN\_AMERICA.UTF8

## cmpServer.bat ファイルの構成 (Oracle)

Campaign クライアント・マシン上で、Campaign Listener の始動スクリプトを次の ように変更します。

# Windows の場合

<CAMPAIGN\_HOME>/bin ディレクトリーにある cmpServer.bat ファイルに、以下の行 を追加します。

set NLS\_LANG=AMERICAN\_AMERICA.UTF8

# UNIX の場合

<CAMPAIGN\_HOME>/bin ディレクトリーにある rc.unica\_ac ファイルに、以下の行を 追加します。

NLS\_LANG=AMERICAN\_AMERICA.UTF8

export NLS\_LANG

(オペレーティング・システムによって構文が異なります。)

# DB2 での複数ロケールの構成

システム・テーブルが DB2 である場合に複数ロケール用に IBM Campaign を構成 するには、エンコード・プロパティー、日時設定、環境変数、およびアプリケーシ ョン・サーバーの始動スクリプトを調整する必要があります。

まず、DB2 データベース・コード・セットとコード・ページを識別します。ローカ ライズされた環境の場合、DB2 データベースの構成を以下のようにする必要があり ます。

- データベース・コード・セット = UTF-8
- データベース・コード・ページ = 1208

Campaign を構成する際に、以下の調整を行います。

- 「StringEncoding」プロパティーを DB2 データベース・コード・セット値 (UTF-8) に設定します。さらに
- DB2CODEPAGE DB2 環境変数を DB2 データベース・コード・ページの値に設定します。

こうした調整については、以下のセクションで説明されています。

# エンコード・プロパティーの構成 (DB2)

Marketing Platform にログインして、以下の表にリストされているエンコード・プロ パティーを構成します。ここに示されているようにプロパティー値を設定してくだ さい。 重要な情報については、270ページの『Campaign 構成プロパティー』にあるプロパ ティーの説明を参照してください。

プロパティー	値
Campaign > partitions > partition[n] > dataSources >	UTF-8
[data_source_name] > StringEncoding	
Campaign > partitions > partition[n] > server >	UTF-8
encoding > stringEncoding	
Campaign > unicaACListener > logStringEncoding	UTF-8
Campaign > unicaACListener >systemStringEncoding	UTF-8

# 日時の設定の構成 (DB2)

Marketing Platform の構成ページで、以下の日時プロパティーに次のような値を設定します。

プロパティー	値
<pre>Campaign &gt; partitions &gt; partition[n] &gt; [data_source_name] &gt; DateOutputFormatString</pre>	%Y-%m-%d
Campaign > partitions > partition[n] > [data_source_name] > DateTimeFormat	DT_DELIM_Y_M_D
Campaign > partitions > partition[n] > [data_source_name] > DateTimeOutputFormatString	<ul> <li>%Y-%m-%d %H:%M:%S</li> <li>日本語のデータベースの場</li> <li>合、時間部分の区切り文字</li> <li>はピリオド (.) でなければ</li> <li>なりません。したがって、</li> <li>日本語のデータベースでは</li> <li>値を次のように設定します。</li> <li>%Y/%m/%d %H.%M.%S</li> </ul>

# 環境変数の構成 (DB2)

DB2 用の環境変数を構成するには、DB2 データベース・コード・ページを識別し、 DB2CODEPAGE DB2 環境変数を同じ値に設定します。ローカライズ環境の場合、DB2 データベース・コード・ページは 1208 にする必要があります。

以下のステップに従って、DB2CODEPAGE DB2 環境変数を 1208 に設定します。

 Windows の場合、以下の行を Campaign リスナーの始動スクリプト (<CAMPAIGN HOME>¥bin¥cmpServer.bat) に追加します。

db2set DB2CODEPAGE=1208

- 2. UNIX の場合:
  - a. DB2 を開始した後、システム管理者は次のコマンドを DB2 インスタンス・ ユーザーから入力する必要があります。

\$ db2set DB2C0DEPAGE=1208

このステップの完了後、管理者は DB2 インスタンス・ユーザーから db2set DB2CODEPAGE=1208 コマンドを再実行する必要はありません。値が DB2 イン スタンス・ユーザー用に登録されているからです。root ユーザーは、十分な 権限がないためこのコマンドを実行できません。

b. 設定を確認するには、次のコマンドを入力し、出力が 1208 であることを確認します。

\$ db2set DB2CODEPAGE

c. DB2CODEPAGE 設定が root ユーザーに対して有効であることを確認するには、 \$CAMPAIGN\_HOME/bin ディレクトリーで以下のコマンドを入力して、出力が 1208 であることを確認します。

# . ./setenv.sh

# db2set DB2C0DEPAGE

d. 次のコマンドを実行して、Campaign リスナーを開始します。

./rc.unica\_ac start

# アプリケーション・サーバー始動スクリプトの構成 (DB2)

222 ページの『環境変数の構成 (DB2)』の説明に従ってコード・ページ変数を設定 した場合は、以下のタスクを完了してください。設定しなかった場合は、以下の変 更は必要ありません。

Weblogic または WebSphere 用の始動スクリプトを変更します。 JAVA\_OPTIONS の下に次のように追加してください。

-Dfile.encoding=utf-8

以下に例を示します。

\${JAVA HOME}/bin/java \${JAVA VM} \${MEM ARGS} \${JAVA OPTIONS}

- -Dfile.encoding=utf-8 -Dweblogic.Name=\${SERVER NAME}
- -Dweblogic.ProductionModeEnabled=\${PRODUCTION\_MODE}
- -Djava.security.policy="\${WL\_HOME}/server/lib/weblogic.policy" weblogic.Server

# 付録 A. 構成ページの構成プロパティー

このセクションでは、「構成」ページの構成プロパティーについて取り上げます。

# Marketing Platform 構成プロパティー

このセクションでは、「構成」ページの Marketing Platform 構成プロパティーについて取り上げます。

# 全般 | Navigation セキュア接続の TCP ポート

説明

Marketing Platform がデプロイされる Web アプリケーション・サーバーの SSL ポートを指定します。このプロパティーは、IBM EMM 製品間での通 信に内部的に使用されます。

# デフォルト値

7001

# 標準接続の TCP ポート

# 説明

Marketing Platform がデプロイされる Web アプリケーション・サーバーの HTTP ポートを指定します。このプロパティーは、IBM EMM 製品間での 通信に内部的に使用されます。

#### デフォルト値

7001

# **IBM Marketing Platform URL**

# 説明

IBM EMM で使用する URL を指定します。インストール時に設定され、 通常は変更すべきではありません。この URL には、以下の例に示されてい るようにドメイン・ネームを含めます。

protocol://machine\_name\_or\_IP\_address.domain\_name:port\_number/ context-root

マシン名は localhost にしないでください。

# デフォルト値

定義されていません

#### 例

SSL が構成されている環境では、URL は次のようになります。

https://machineName.companyDomain.com:8080/unica

# 全般 | データのフィルター操作 (Data filtering)

デフォルト表名 (Default table name)

説明

デフォルト・オーディエンス名 (Default audience name) と組み合わせ て、IBM EMM のデータ・フィルター・ユーザー・インターフェースがフ ィルターと割り当てを読み取る一連のデータ・フィルター (つまり、データ 構成) を判別します。

# デフォルト値

未定義

# 有効な値

データ・フィルター基準として使用するフィールドが含まれる顧客テーブル の物理名。最大 50 文字の可変長文字型。

# デフォルト・オーディエンス名 (Default audience name)

# 説明

デフォルト表名 (Default table name) と組み合わせて、IBM EMM のデ ータ・フィルター・ユーザー・インターフェースがフィルターと割り当てを 読み取る一連のデータ・フィルター (つまり、データ構成) を判別します。

# デフォルト値

未定義

#### 有効な値

Distributed Marketing のデータ・フィルターを構成する場合、名前は、 Campaign のオーディエンス・レベルに指定されている名前と同じでなけれ ばなりません。最大 50 文字の可変長文字型。

# 全般 | パスワード設定 (Password settings)

このカテゴリーのプロパティーは、IBM EMM パスワードに適用されるポリシーを 指定します。これらのパスワード・オプションのほとんどは、(Marketing Platform 内で作成された)内部ユーザーのパスワードにのみ適用され、(外部システムからイ ンポートされた)外部ユーザーには適用されません。例外はログイン失敗時に許容 される最大試行回数 (Maximum failed login attempts allowed)プロパティーで、 このプロパティーは内部ユーザーと外部ユーザーの両方に影響を及ぼします。また このプロパティーは、外部システムの同様の制約事項を無効にするわけではありま せん。

# ログイン失敗時に許容される最大試行回数 (Maximum failed login attempts allowed)

説明

ユーザーがログインする際に、パスワードが無効であっても入力可能となる 最大回数を指定します。最大回数になると、ユーザーは IBM EMM システ ムを利用できなくなり、そのユーザーとしてだれもログインできなくなりま す。 ゼロ以下に設定すると、システムでは、何度でも連続して失敗することが許 容されます。

デフォルト値

3

有効な値

任意の整数

# パスワード履歴数

#### 説明

システムがユーザーのために保存する古いパスワード数を指定します。この 古いパスワードのリストにあるパスワードをユーザーが再使用することはで きません。値をゼロ以下に設定すると、履歴は全く保存されず、ユーザーは 同じパスワードを繰り返し再使用できます。パスワード履歴数には、ユーザ ー・アカウントを作成した際に割り当てられた初期パスワードは含まれませ ん。

デフォルト値

0

有効な値

任意の整数

# 有効期間 (日数)

#### 説明

ユーザーのパスワードの有効期限が切れるまでの日数を指定します。

値がゼロ以下の場合、パスワードは有効期限が切れることがありません。

値がゼロより大きいと、ユーザーは最初にログインする際にパスワードの変 更が必要となり、その最初のログイン日付を起点として有効期限間隔がカウ ントされます。

ユーザーとパスワードを作成後にこの値を変更すると、既存のユーザーが次 にパスワードを変更する際に新しい有効期限が施行されます。

# デフォルト値

30

# 有効な値

任意の整数

# 空白のパスワードを許容

# 説明

空白パスワードが許容されるかどうかを指定します。このプロパティーを True に設定する場合、最大文字長 (Minimum character length)=0 も設定 する必要があります。

# デフォルト値

true

有効な値

true | false

# ユーザー名と同一のパスワードを許可

# 説明

ユーザーのパスワードをユーザーのログイン名と同じにすることを許容する かどうかを指定します。

デフォルト値

false

# 有効な値

true | false

# 最小文字数

# 説明

パスワードで必要な最小文字数を指定します。値がゼロ以下の場合、最小要 件はなくなります。

デフォルト値

0

#### 有効な値

任意の整数

# 最小数字数

# 説明

パスワードで必要な最小数字数を指定します。値がゼロ以下の場合、最小要 件はなくなります。

デフォルト値

0

# 有効な値

任意の整数

## 最小文字長

# 説明

パスワードの最小長を指定します。値がゼロ以下の場合、最小要件はなくなります。0 より大きな値に設定する場合、許容される空白パスワード (Blank passwords allowed)=false も設定する必要があります。

### デフォルト値

#### 4

## 有効な値

任意の整数

# 全般 | その他 (Miscellaneous)

このカテゴリーのプロパティーは、内部的に使用される値、およびロケールに応じ て設定しなければならないことがある値を指定します。

# TokenLifetime

説明

Marketing Platform が生成するトークンが有効な期間を秒単位で指定しま す。これは、Suite サインオン実装の一部で、この値を変更してはなりませ ん。

# デフォルト値

15

#### 有効な値

任意の正整数

# デフォルトの地域

# 説明

Marketing Platform のデフォルトのロケールを指定します。Campaign をイ ンストールする予定の場合、Campaign の defaultLocale プロパティーと一 致するようにこの値を設定してください。

#### デフォルト値

English

### 有効な値

サポートされるロケール

# 有効にされたトラステッド・アプリケーション (Trusted application enabled)

# 説明

この値を True に設定する場合、Marketing Platform を SSL ポートのある 環境でデプロイし、「全般」>「ナビゲーション」カテゴリーの「IBM Marketing Platform URL」プロパティーで HTTPS を使用するように設定し なければなりません。

デフォルト値

False

# 有効な値

True | False

# **Platform**

# 地域設定 (Region setting)

# 説明

IBM EMM ユーザーのロケール設定を指定します。「構成」ページでこの プロパティーを設定すると、その適用する設定が IBM EMM のすべてのユ ーザーのデフォルトの設定となります。ただし、Marketing Platform の「ユ ーザー」ページで個別にロケール設定を指定するユーザーは例外です。個別 のユーザーにこのプロパティーを設定する場合には、そのユーザーに適用す る設定がデフォルトの設定よりも優先されます。

この設定は、IBM EMM アプリケーションの言語、時間、数値、日付の表示に影響を及ぼします。

ロケールの使用可能性は IBM EMM アプリケーションによって異なる場合 があり、すべての IBM アプリケーションが Marketing Platform のロケール 設定をサポートしているわけではありません。 地域設定 (Region setting) プロパティーを使用できてサポートされているかどうかについては、固有の 製品資料を参照してください。

```
デフォルト値
```

英語 (米国)

# ヘルプ・サーバー (Help server)

説明

IBM ホスト・オンライン・ヘルプがインストールされているサーバーの URL です。IBM EMM ユーザーがインターネットにアクセスできる場合、 デフォルト値を変更しないでください。デフォルト値は、IBM が保守/更新 しているオンライン・ヘルプ・サーバーを指しています。

# デフォルト値

ホスト・ヘルプ・サーバーの URL です。

# 有効な値

IBM ホスト・ヘルプがインストールされているサーバー。

# IBM Marketing Operations - Campaign 統合

# 説明

Marketing Operations と Campaign を一緒にインストールして統合するかど うかを示すフラグです。この統合の構成について詳しくは、「*IBM Marketing Operations および Campaign 統合ガイド*」を参照してください。

# デフォルト値

False

# 有効な値

True | False

# IBM Marketing Operations - オファー統合

# 説明

Marketing Operations と Campaign を統合するシステムにおいて、このフラ グは、オファー統合も有効になるかどうかを示します。オファー統合を使用 すると、Marketing Operations を使用してオファー・ライフサイクル管理タ スクを行う機能が有効になります。この統合の構成について詳しくは、 「*IBM Marketing Operations および Campaign 統合ガイド*」を参照してくだ さい。 デフォルト値

False

有効な値

True | False

# 開始ページ (Start page)

説明

ユーザーが IBM EMM にログインする際に表示されるページの URL で す。デフォルトは、デフォルトのダッシュボードになります。

デフォルト値

デフォルトのダッシュボード。

有効な値

任意の IBM EMM URL。フォーム送信ページ、編集ページ、検索結果ページは除きます。

# ドメイン・ネーム (Domain name)

説明

IBM EMM がインストールされているドメインの名前です。この値は、インストール時に設定されます。ドメイン・ネームを変更しない限りは、この値を変更してはなりません。

デフォルト値

定義されていません

# ページ・タグ付けの無効化 (Disable Page Tagging)

# 説明

デフォルト値の False に設定すると、IBM は Marketing Platform のインス トール時に入力したサイト ID コードを使用して、製品全体の使用傾向を追 跡する基本的な統計を収集します。こうした統計は、IBM 製品の開発や向 上に使用されます。こうした情報が収集されることを望まない場合には、こ のプロパティーを True に設定します。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

# Platform | Scheduler

# クライアント・ポーリング間隔

説明

Campaign は、ミリ秒単位で指定されたこの値が示す周期的間隔で、ジョブ について IBM EMM Scheduler をポーリングします。デフォルト値は 60 秒です。このプロパティーの値を 10000 (10 秒) 未満にしないでください。 10000 未満にすると、キャンペーン・パフォーマンスが低下する恐れがあり ます。

デフォルト値

60000

# クライアントの初期遅延 (Client initialization delay)

説明

Campaign が最初に始動した際に、Campaign スケジューラー・スレッドが ジョブに関して IBM EMM Scheduler をポーリングするまでに待機するミ リ秒単位の期間です。この値は、少なくとも、ご使用のシステム上で Campaign が始動するための十分な時間を確保できる長さに設定してくださ い。デフォルト値は 5 分です。

デフォルト値

300000

# 有効な値

任意の整数

# 不明状況になるポーリングの回数

説明

実行状況が判別できないスケジュールされた実行の状況を、スケジューラー がチェックする回数を指定します。この制限に達した後、実行状況は「設 定」>「スケジュールされたタスク」ページで「不明」としてリストされま す。

デフォルト値

5

有効な値

任意の整数

# スケジューラーの有効

# 説明

スケジューラーを有効にするかどうかを指定します。ユーザーがスケジュー ラーを使用できないようにするには、このプロパティーを False に設定しま す。False に設定すると、スケジューラーを使用するすべての製品でスケジ ューラーがオフになります。

デフォルト値

True

#### 有効な値

True | False

# Platform | Scheduler | 反復定義 (Recurrence definitions)

このカテゴリーのプロパティーは、IBM EMM Scheduler の反復パターンを設定しま す。反復パターンは、スケジュールを作成する際に反復パターンを設定する場合に 使用するダイアログ・ボックスに表示されます。反復テンプレートを使用すると、 有効な任意の Cron 式により独自の反復パターンを作成できます。

# 毎時

説明

ジョブは、毎時トリガーされます。

### デフォルト値

0 0 0/1 \* \* ?

# 毎日

# 説明

ジョブは 24 時間、毎時トリガーされます。

デフォルト値

000\*\*?

毎週 [曜日] の午前 12:00 (Every [day of week] at 12:00 am) <sup>説明</sup>

ジョブは、指定された曜日の午前0時にトリガーされます。

# デフォルト値

- 月 0 0 0 ? \* MON
- 火 0 0 0 ? \* TUE
- 水 0 0 0 ? \* WED
- 木 0 0 0 ? \* THU
- 金 0 0 0 ? \* FRI
- ± 0 0 0 ? \* SAT
- 日 0 0 0 ? \* SUN

# 毎月の [初日|最終日] の午前 12:00 ([First|Last] day of every month at 12:00 am)

説明

ジョブは、毎月の指定された日 (初日または最終日)の午前 0 時にトリガー されます。

# デフォルト値

- 毎月の初日 0 0 0 1 \* ?
- 毎月の最終日 0 0 0 L \* ?

# 各四半期の [初日|最終日] の午前 12:00 ([First|Last] day of every quarter at 12:00 am)

説明

ジョブは、カレンダーの四半期における指定された日 (初日または最終日) の午前 0 時にトリガーされます。

デフォルト値

- 各四半期の初日 0 0 0 1 \* JAN, APR, JUL, OCT
- 各四半期の最終日 0 0 0 L \* MAR, JUN, SEP, DEC

# 毎年の [初日|最終日] の午前 12:00 ([First|Last] day of every year at 12:00 am)

説明

ジョブは、毎年の指定された日 (初日または最終日)の午前 0 時にトリガー されます。

デフォルト値

- 毎年の初日 0 0 0 1 ? JAN \*
- 毎年の最終日 0 0 0 L ? DEC \*

毎年 [月] の午前 12:00 (Every [month] at 12:00 am)

説明

ジョブは、指定された月の初日の午前0時にトリガーされます。

デフォルト値

- 毎年 1 月 0 0 0 1 ? JAN \*
- 毎年 2 月 0 0 0 1 ? FEB \*
- 毎年 3 月 0 0 0 1 ? MAR \*
- 毎年 4 月 0 0 0 1 ? APR \*
- 毎年 5 月 0 0 0 1 ? MAY \*
- 毎年 6 月 0 0 0 1 ? JUN \*
- 毎年 7 月 0 0 0 1 ? JUL \*
- 毎年 8 月 0 0 0 1 ? AUG \*
- 毎年 9 月 0 0 0 1 ? SEP \*
- 毎年 10 月 0 0 0 1 ? OCT \*
- 毎年 11 月 0 0 0 1 ? NOV \*
- 毎年 12 月 0 0 0 1 ? DEC \*

# Platform | Scheduler | スケジュール登録 (Schedule registrations) | キャンペーン | [オブジェクト・タイプ (Object type)]

IBM Scheduler でスケジュール可能なオブジェクト・タイプごとに異なるカテゴリ ーが存在します。これらのカテゴリーのプロパティーを、通常は変更すべきではあ りません。

# Executor クラス名

# 説明

フローチャートまたはメール配信の実行をトリガーするために IBM Scheduler が使用するクラスです。

デフォルト値

# ステータス・ポーリング間隔

説明

ステータスがレポートされていないスケジュール済みオブジェクトの実行ス テータスを探すために、IBM Scheduler は Campaign を定期的にポーリング します。ここではこの間隔を、ミリ秒単位で指定します。デフォルト値は 10 分です。ポーリング間隔がより頻繁になるように (小さい値に) 設定する と、システムのパフォーマンスに影響を及ぼします。ポーリング間隔の頻度 が少なくなるように (大きな値に) 設定すると、システムへのロードが減少 します。例えば、完了までに 10 分を超える Campaign フローチャートが大 量にある場合には、ポーリング間隔の頻度が少なくなるように設定すること もできます。

デフォルト値

600000

# Platform | Scheduler | スケジュール登録 (Schedule registrations) | キャンペーン | [オブジェクト・タイプ (Object type)] | [スロットル・グループ (Throttling group)]

デフォルトの制限グループ (スロットル・グループ) が、IBM Scheduler でスケジュ ール可能なオブジェクト・タイプごとに存在します。制限グループ・テンプレート を使用すると、さらにグループを作成できます。

# スロットルしきい値 (Throttling threshold)

説明

同時に実行可能な、対象のグループに関連付けられたスケジュールの最大数 です。構成されているスケジューラー・グループは、スケジュールを作成お よび編集するために、Scheduler ユーザー・インターフェースの「スケジュ ーラー・グループ」ドロップダウン・リストに表示されます。デフォルトの スロットル・グループは 999 で、この場合、無制限となります。どのスケ ジュールであってもいずれかのスロットル・グループに属していなければな らないので、この値を変更しないで、スロットル対象としないスケジュール がこのグループに割り当てられるようにします。

## デフォルト値

有効な値

任意の正整数。

# Platform | セキュリティー

ログイン方式 (Login method)

ー緒にインストールおよび構成されているすべての IBM EMM 製品の認証 モードを、次のように指定します。

- 値を Windows 統合ログイン (Windows integrated login) に設定する と、IBM EMM 製品では認証に Windows Active Directory が使用されま す。
- この値を IBM Marketing Platform に設定すると、IBM EMM 製品では 認証と許可に Marketing Platform が使用されます。
- 値を LDAP に設定すると、IBM EMM 製品では認証に LDAP サーバーが 使用されます。
- 値を Web アクセス制御 (Web access control) に設定すると、IBM
   EMM 製品では認証に Web アクセス制御ソフトウェアが使用されます。

# デフォルト値

IBM Marketing Platform

# 有効な値

Windows 統合ログイン | IBM Marketing Platform | LDAP | Web アクセス 制御

# Platform | セキュリティー | ログイン方式の詳細 (Login method details) | Windows 統合ログイン (Windows integrated login)

ドメイン (Domain)

説明

JCIFS SMB クライアント・ライブラリー・プロパティー jcifs.smb.client.Domain の値を設定します。SMB URL でドメインが指定 されていない場合に使用されるドメインを指定します。この値は、Windows ドメイン・ネームに設定してください。ほとんどの環境では、このプロパテ ィーまたはドメイン・コントローラー (Domain Controller) プロパティー のどちらかを設定します。

# デフォルト値

定義されていません。

# 使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory サー バーと統合するよう構成されていて、Windows 統合ログインが使用可能な 場合にのみ使用されます。

# クライアントのタイムアウト (Client Timeout)

#### 説明

JCIFS SMB クライアント・ライブラリー・プロパティー jcifs.smb.client.soTimeout の値を設定します。クライアントとサーバー の間でアクティビティーがない場合、ソケットが閉じるまでの期間をミリ秒 単位で指定します。この数値は可能な限り短くしなければなりませんが、プ ロトコル・ハンドシェークが完了する十分な長さを確保する必要がありま す。その長さはネットワーク特性によって異なります。

## デフォルト値

1000

# 使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory サー バーと統合するよう構成されていて、Windows 統合ログインが使用可能な 場合にのみ使用されます。

# キャッシュ・ポリシー (Cache Policy)

#### 説明

JCIFS SMB クライアント・ライブラリー・プロパティー

jcifs.netbios.cachePolicy の値を設定します。重複する名前照会を減らす ために NetBIOS 名をキャッシュに入れる期間を秒単位で指定します。この 値を 0 に設定すると、キャッシングは行われません。値を -1 に設定する と、キャッシュはクリアされません。このプロパティーは、SMB 署名が有 効で、Windows 2003 ドメインで必要な場合に使用されます。

# デフォルト値

0

#### 使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory サー バーと統合するよう構成されていて、Windows 統合ログインが使用可能な 場合にのみ使用されます。

# ドメイン・コントローラー (Domain Controller)

### 説明

JCIFS SMB クライアント・ライブラリー・プロパティー jcifs.http.domainController の値を設定します。(NtlmHttpFilter および NetworkExplorer で使用される) HTTP クライアントを認証するために使用 する必要があるサーバーの IP アドレスを指定します。 Domain プロパティ ーで指定したドメインのワークステーションの IP アドレスを使用すること も可能です。ほとんどの環境では、このプロパティーまたは Domain プロパ ティーのどちらかを設定します。

# デフォルト値

定義されていません。

# 使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory サーバーと統合するよう構成されていて、Windows 統合ログインが使用可能な場合にのみ使用されます。

# WINS サーバーの IP (IP of the WINS server)

# 説明

JCIFS SMB クライアント・ライブラリー・プロパティー jcifs.netbios.wins の値を設定します。WINS サーバーの IP アドレスを 指定します。複数の IP アドレスをコンマで区切って入力することもできま す (例: 192.168.100.30,192.168.100.31)。WINS サーバーの照会が、 Domain プロパティーで指定したドメインをドメイン・コントローラーの IP アドレスに解決するために必要となります。このプロパティーは、(ドメイ ン・コントローラーの名前が異なるなど)別のサブネット上のホストにアク セスする際に WINS サーバーが使用可能であることが強く推奨される環境 で必要です。

デフォルト値

未定義

# 使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory サー バーと統合するよう構成されていて、Windows 統合ログインが使用可能な 場合にのみ使用されます。

# ドメインのストリップ (Strip Domain)

説明

ユーザーが IBM EMM にアクセスする際に、Marketing Platform がユーザ ーのログイン名からドメインを削除するかどうかを指定します。ご使用の Windows 構成においてユーザーのログイン時にユーザーのログイン名にド メインを含める必要がある場合、この値は False に設定してください。

# デフォルト値

True

# 有効な値

True | False

# 使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory サー バーと統合するよう構成されていて、Windows 統合ログインが使用可能な 場合にのみ使用されます。

# 認証障害時に再試行 (Retry on Authentication Failure)

# 説明

この値が True に設定されている場合、ユーザーがログインに失敗しても、 システムではさらにログインを試行できます。複数回のログイン試行を行え ないようにするには、False に設定します。

# デフォルト値

True

# 有効な値

True | False

#### 使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory サー バーと統合するよう構成されていて、Windows 統合ログインが使用可能な 場合にのみ使用されます。

# Platform | セキュリティー | ログイン方式の詳細 (Login method details) | LDAP

# LDAP サーバー・ホスト名 (LDAP server host name)

説明

LDAP サーバーの名前または IP アドレスを指定します。この値は、LDAP サーバーのマシン名または IP アドレスに指定してください。例:

machineName.companyDomain.com

Windows Active Directory と統合する場合、DNS 名ではなくサーバー名を 使用します。

# デフォルト値

未定義

## 使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

# LDAP サーバー・ポート (LDAP server port)

説明

LDAP サーバーが listen するポートを指定します。適切なポート番号にこの値を設定してください。通常、ポート番号は 389 になります (SSL を使用する場合には 636)。

# デフォルト値

389

# 使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

# ユーザー検索フィルター (User search filter)

# 説明

ユーザーの検索に使用するフィルターを指定します。任意の有効な LDAP 検索フィルター (RFC 2254 を参照) が有効な値です。この値の XML 文字 に関しては XML エスケープ処理を行う必要があります。

通常、ユーザー・ログイン属性の値は LDAP サーバーでは uid で、 Windows Active Directory サーバーの場合には sAMAccountName です。 LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーにおけるこの値を確認する 必要があります。LDAP サーバーが Windows Active Directory の場合に は、このプロパティーのデフォルト値を uid ではなく sAMAccountName に 変更しなければなりません。以下に例を示します。

(&( | (objectClass=user) (objectClass=person)) (sAMAccountName={0}))

# デフォルト値

(&(|(objectClass=user)(objectClass=person))(uid={0}))

# 使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

# IBM Marketing Platform に格納された資格情報を使用

説明

(ログイン時の) ユーザー認証中に LDAP サーバーまたは Windows Active Directory サーバーを検索する際、Marketing Platform が Marketing Platform データベースの資格情報を使用するかどうかを指定します。

この値が true の場合、Marketing Platform は Marketing Platform データベ ースの資格情報を使用するので、このカテゴリーの 「LDAP 資格情報の IBM Marketing Platform ユーザー」プロパティーと 「LDAP 資格情報のデー タ・ソース」プロパティーに適切な値を設定する必要があります。

LDAP サーバーまたは Windows Active Directory サーバーで匿名アクセス が許可されない場合には、この値を true に設定してください。

この値が false の場合、Marketing Platform は LDAP サーバーまたは Windows Active Directory サーバーを匿名で介して接続します。LDAP サー バーまたは Windows Active Directory サーバーで匿名アクセスが許可され る場合には、この値を false に設定できます。

# デフォルト値

false

# 有効な値

true | false

# 使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

# LDAP 資格情報の IBM Marketing Platform ユーザー

説明

LDAP 管理者ログイン資格情報が付与された IBM EMM ユーザーの名前を 指定します。このカテゴリーの 「IBM Marketing Platform に格納された資 格情報を使用」プロパティーを true に設定した場合には、この値を設定し てください。

LDAP 統合を構成した場合には、IBM EMM ユーザーに作成したユーザー 名に、このプロパティーの値を設定してください。このプロパティーは、こ のカテゴリーの LDAP 資格情報のデータ・ソース (Data source for LDAP credentials) プロパティーと連動しています。

# デフォルト値

asm\_admin

#### 使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

# LDAP 資格情報のデータ・ソース (Data source for LDAP credentials)

説明

LDAP 管理者資格情報の Marketing Platform データ・ソースを指定しま す。このカテゴリーの 「IBM Marketing Platform に格納された資格情報を 使用」プロパティーを true に設定した場合には、この値を設定してくださ い。

LDAP 統合を構成した場合には、IBM EMM ユーザーに作成したデータ・ ソース名に、このプロパティーの値を設定してください。このプロパティー は、このカテゴリーの「LDAP 資格情報の IBM Marketing Platform ユーザ ー」プロパティーと連動しています。

デフォルト値

未定義

#### 使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

## 基本 DN (Base DN)

# 説明

LDAP ディレクトリー構造のルートを示す基本識別名 (DN) を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

#### 有効な値

任意の有効な DN (RFC 1779、RFC 2253 を参照)

# 使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。 LDAP 接続に SSL が必要 (Require SSL for LDAP connection)

Platform | セキュリティー | LDAP

説明

Marketing Platform が LDAP サーバーに接続してユーザーを認証する際に SSL を使用するかどうかを指定します。値を true に設定すると、接続は SSL を使用して保護されます。

デフォルト値

false

有効な値

true | false

# Platform | セキュリティー | ログイン方式の詳細 (Login method details) | Web アクセス制御 (Web access control)

# ユーザー名パターン (Username pattern)

説明

Web アクセス制御ソフトウェアの HTTP ヘッダー変数からユーザー・ログ インを抽出するために使用する Java<sup>™</sup> 正規表現です。この正規表現の XML 文字に関しては XML エスケープ処理を行う必要があります。SiteMinder および Tivoli<sup>®</sup> Access Manager の推奨値は ¥w\* です。

デフォルト値

未定義

# 有効な値

任意の Java 正規表現。

# 使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Web アクセス制御ソフトウェ アと統合するように構成されている場合にのみ使用されます。

# Web アクセス制御のヘッダー変数 (Web access control header variable)

説明

Web アクセス制御ソフトウェアで構成されている HTTP ヘッダー変数を指定します。これは、Web アプリケーション・サーバーに送信されます。デフォルトでは、SiteMinder は sm\_user を使用し、Tivoli Access Manager (TAM) は iv-user を使用します。TAM の場合、この値を IBM HTTP ストリングではなく、IBM Raw ストリングのユーザー名コンポーネントに設定します。

デフォルト値

未定義

#### 有効な値

任意のストリング

# 使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Web アクセス制御ソフトウェ アと統合するように構成されている場合にのみ使用されます。

# Platform | セキュリティー (Security) | LDAP 同期 (LDAP synchronization)

LDAP 同期有効 (LDAP sync enabled)

説明

LDAP または Active Directory の同期を有効にする場合には、true に設定 します。

#### デフォルト値

false

# 有効な値

true | false

# 使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

# LDAP 同期間隔 (LDAP sync interval)

# 説明

ここで指定する秒数の周期的間隔で、Marketing Platform が LDAP サーバ ーまたは Active Directory サーバーと同期します。値がゼロ以下の場合、 Marketing Platform は同期しません。値が正整数の場合、新しい値は再始動 しなくても 10 分以内に有効になります。その後に変更した場合は、構成さ れた間隔内に有効になります。

# デフォルト値

600、または 10 分

## 使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

# LDAP 同期遅延 (LDAP sync delay)

# 説明

これは、Marketing Platform の開始後に、LDAP サーバーとの周期的同期が 開始される時刻 (24 時形式) です。例えば、LDAP 同期遅延 (LDAP sync delay) が 23:00 で LDAP 同期間隔 (LDAP sync interval) が 600 の場 合、Marketing Platform が開始されると、周期的同期は午後 11:00 に実行を 開始され、その後 10 分 (600 秒) ごとに実行されます。

# デフォルト値

23:00、または 11:00pm

# 使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

# LDAP 同期タイムアウト (LDAP sync timeout)

説明

LDAP 同期タイムアウト・プロパティーは、同期の開始後、Marketing Platform がプロセスに終了済みのマークを付けるまでの最大時間を分単位で 指定します。Platform で実行できるのは、一度に1つの同期プロセスだけ です。同期が失敗すると、正常に完了したかどうかに関係なく、終了済みの マークが付けられます。

クラスター環境では、これがとても役立ちます。例えば、Marketing Platform が 1 つのクラスターでデプロイされている場合、そのクラスターにあるサ ーバーが LDAP 同期を開始して、その後プロセスが終了済みのマークが付 けられる前にダウンしてしまう可能性があります。その場合、Marketing Platform はこのプロパティーで指定された期間待機してから、スケジュール されている次の同期を開始します。

# デフォルト値

600 (600 分、または 10 時間)

#### 使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

# LDAP 同期スコープ (LDAP sync scope)

#### 説明

一群のユーザーを取り出すための初期照会のスコープを制御します。ほとん どの LDAP サーバーとの同期の場合、デフォルトの SUBTREE のままにして ください。

# デフォルト値

SUBTREE

# 有効な値

値は、標準の LDAP 検索スコープ条件です。

- OBJECT 基本 DN のエントリーだけを検索し、戻されるのもそのエン トリーのみです。
- ONE\_LEVEL 基本 DN の 1 つ下のレベルのすべてのエントリーを検索 します。ただし、基本 DN は対象外です。
- SUBTREE 特定の基本 DN とその下のすべてのレベルにある全エントリーを検索します。
使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

# LDAP プロバイダー URL (LDAP provider URL)

説明

ほとんどの実装環境では、以下のいずれかの形式で、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーの LDAP URL に設定します。

- ldap://IP\_address:port\_number
- ldap://machineName.domain.com:port\_number

LDAP サーバーの場合、ポート番号は通常 389 になります (SSL を使用している場合には 636)。

IBM EMM を Active Directory サーバーと統合する場合、Active Directory 実装環境でサーバー未使用のバインドが使用されているときには、このプロ パティーの値を Active Directory サーバーの URL に設定してください。そ の際、次の形式を使用します。

ldap:///dc=example,dc=com

デフォルト値

未定義

## 使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

# LDAP 接続に SSL が必要 (Require SSL for LDAP connection)

パス

Platform | セキュリティー (Security) | LDAP 同期 (LDAP synchronization)

説明

Marketing Platform が LDAP サーバーに接続してユーザーを同期する際に SSL を使用するかどうかを指定します。値を true に設定すると、接続は SSL を使用して保護されます。

#### デフォルト値

false

#### 有効な値

true | false

#### 使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

# LDAP 構成 IBM Marketing Platform グループの区切り文字

説明

「IBM Marketing Platform グループ・マップの LDAP 参照」カテゴリー で、1 つの LDAP または Active Directory グループを複数の Marketing Platform グループにマップする場合は、ここで指定した区切り記号を使用し ます。名前の分離に使用されていない任意の単一文字にできます。

#### デフォルト値

;(セミコロン)

#### 使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

# LDAP 参照 config 区切り文字 (LDAP reference config delimiter)

説明

SEARCHBASE コンポーネントと FILTER コンポーネントを区切る区切り文字 を指定します。これらのコンポーネントは、LDAP または Active Directory 参照を構成します(「IBM Marketing Platform ユーザー作成の LDAP 参照 (LDAP references for IBM Marketing Platform user creation)」カテゴリ ーに記述されているとおりに構成します)。

FILTER はオプションで、省略すると、LDAP ユーザー参照属性名の値に基づいて Marketing Platform サーバーによって動的にフィルターが作成されます。

#### デフォルト値

;(セミコロン)

#### 有効な値

```
名前の分離に使用されていない任意の単一文字。
```

#### 使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

## LDAP 資格情報の IBM Marketing Platform ユーザー

説明

LDAP 管理者ログイン資格情報が付与された IBM EMM ユーザーの名前を 指定します。

LDAP 統合を構成した場合には、IBM EMM ユーザーに作成したユーザー 名に、このプロパティーの値を設定してください。このプロパティーは、こ のカテゴリーの LDAP 資格情報のデータ・ソース (Data source for LDAP credentials) プロパティーと連動しています。

#### デフォルト値

asm\_admin

#### 使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

# LDAP 資格情報のデータ・ソース (Data source for LDAP credentials)

説明

LDAP 管理者資格情報の Marketing Platform データ・ソースを指定します。

LDAP 統合を構成した場合には、IBM EMM ユーザーに作成したデータ・ ソース名に、このプロパティーの値を設定してください。このプロパティー は、このカテゴリーの「LDAP 資格情報の IBM Marketing Platform ユーザ ー」プロパティーと連動しています。

## デフォルト値

未定義

# 使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

# LDAP ユーザー参照属性名 (LDAP user reference attribute name) <sup>説明</sup>

LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーがグループ・オブジェクト のユーザー属性に使用する名前を指定します。通常、この値は LDAP サー バーでは uniquemember となり、Windows Active Directory サーバーの場合 には member になります。

## デフォルト値

member

#### 使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

# LDAP BaseDN 定期検索が有効

説明

このプロパティーを True に設定すると、Marketing Platform は、「IBM EMM」|「Platform」|「セキュリティー」|「LDAP」カテゴリーの「ベース DN」プロパティーで設定された識別名を使用して LDAP 同期検索を実行します。このプロパティーを False に設定すると、Marketing Platform は、

「**IBM Marketing Platform グループ・マップの LDAP 参照**」で LDAP グループにマップされたグループを使用して LDAP 同期検索を実行します。

デフォルト値

True

#### 使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

# ユーザー・ログイン (User login)

説明

IBM EMM ユーザーのログインを、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップします。ユーザー・ログイン (User login) は唯一の必須マッピングです。通常、この属性の値は LDAP サーバーでは uid で、Windows Active Directory サーバーの場合には sAMAccountName です。LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーに おけるこの値を確認する必要があります。

デフォルト値

uid

#### 使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

#### 名 (First name)

# 説明

Marketing Platform における名 (First Name) 属性を、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップします。

#### デフォルト値

givenName

#### 使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

# 姓 (Last name)

#### 説明

Marketing Platform における姓 (Last Name) 属性を、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップします。

デフォルト値

sn

#### 使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

# ユーザー・タイトル (User title)

#### 説明

Marketing Platform におけるタイトル (Title) ユーザー属性を、LDAP サー バーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップしま す。

#### デフォルト値

title

# 使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

# 部門 (Department)

#### 説明

Marketing Platform における部門 (Department) ユーザー属性を、LDAP サー バーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップしま す。

# デフォルト値

未定義

#### 使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

# 会社 (Company)

# 説明

Marketing Platform における会社 (Company) ユーザー属性を、LDAP サー バーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップしま す。

# デフォルト値

未定義

#### 使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

# Ξ

説明

Marketing Platform における国ユーザー属性を、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップします。

デフォルト値

未定義

#### 使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

# ユーザーの E メール (User email)

説明

Marketing Platform における E メール・アドレス (Email Address) 属性を、 LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性に マップします。

#### デフォルト値

mail

#### 使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

# アドレス 1 (Address 1)

#### 説明

Marketing Platform におけるアドレス・ユーザー属性を、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップします。

#### デフォルト値

未定義

# 使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

# 勤務先電話 (Work phone)

#### 説明

Marketing Platform における勤務先電話 (Work Phone) ユーザー属性を、 LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性に マップします。

#### デフォルト値

telephoneNumber

#### 使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

#### 携帯電話 (Mobile phone)

#### 説明

Marketing Platform における携帯電話 (Mobile Phone) ユーザー属性を、 LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性に マップします。

#### デフォルト値

未定義

## 使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

# 自宅電話 (Home phone)

#### 説明

Marketing Platform における自宅電話 (Home Phone) ユーザー属性を、 LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性に マップします。

# デフォルト値

未定義

#### 使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

# 代替ログイン (Alternate login)

# 説明

Marketing Platform における代替ログイン (Alternate Login) ユーザー属性 を、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属 性にマップします。

# デフォルト値

未定義

#### 使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

# Platform | セキュリティー | LDAP 同期 | IBM Marketing Platform グループ・マップへの LDAP 参照

# LDAP 参照のマップ (LDAP reference map)

説明

ここで指定する LDAP グループまたは Active Directory グループのメンバ ーのユーザーは、「IBM Marketing Platform グループ」プロパティーで指 定された Marketing Platform グループにインポートされます。

次の構文を使用して、このプロパティーの値を設定します。SEARCHBASE DELIMITER FILTER ここで、

SEARCHBASE は、オブジェクトの識別名 (DN) です。

DELIMITER は、LDAP config AM グループ区切り文字 (LDAP config AM group delimiter) プロパティーの値です。

FILTER は、LDAP または Active Directory の属性フィルターです。FILTER はオプションで、省略すると、LDAP ユーザー参照属性名 (LDAP user reference attribute name) プロパティーの値に基づいて Marketing Platform サーバーによって動的にフィルターが作成されます。

デフォルト値

未定義

#### 使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

# IBM Marketing Platform グループ

#### 説明

LDAP 参照グループ (LDAP reference group) プロパティーで指定された LDAP グループまたは Active Directory グループのメンバーのユーザーは、 ここで指定する Marketing Platform グループにインポートされます。

## デフォルト値

未定義

#### 使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory また はその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用 されます。

# レポート作成の構成プロパティー

レポート作成の場合、IBM EMM Suite は、サード・パーティーのビジネス・イン テリジェンス・アプリケーションである IBM Cognos と統合します。 IBM インス トール済み環境で使用される IBM Cognos システムを指定するときには、Cognos プロパティーを使用します。また、Campaign、eMessage、Interact については、レポ ート作成スキーマをセットアップしてカスタマイズする際に使用する追加の構成プ ロパティーがあります。

# レポート | 統合 | Cognos [バージョン]

このページには、この IBM システムで使用される IBM Cognos システムの URL および他のパラメーターを指定するプロパティーが表示されます。

# 統合名 (Integration Name)

説明

読み取り専用です。レポートを表示するために IBM EMM によって使用されるサード・パーティーのレポート作成/分析ツールが IBM Cognos となるように指定します。

デフォルト値

Cognos

### ベンダー (Vendor)

説明

読み取り専用です。IBM Cognos が、「統合名 (Integration Name)」プロパ ティーで指定したアプリケーションを提供する会社名であることを示しま す。

デフォルト値

Cognos

# バージョン

#### 説明

読み取り専用です。「統合名 (Integration Name)」プロパティーによって指 定されるアプリケーションの製品バージョンを示します。

#### デフォルト値

<バージョン>

# 有効 (Enabled)

説明

Suite で IBM Cognos を有効にするかどうかを指定します。

#### デフォルト値

False

#### 有効な値

True | False

# 統合クラス名 (Integration Class Name)

説明

読み取り専用です。「統合名 (Integration Name)」プロパティーで指定さ れたアプリケーションに接続する際に使用する統合インターフェースを作成 する Java クラスの完全修飾名を示します。

#### デフォルト値

com.unica.report.integration.cognos.CognosIntegration

#### ドメイン (Domain)

説明

Cognos サーバーが実行されている、完全修飾の会社ドメイン・ネームを示 します。例: myCompanyDomain.com

会社でサブドメインを使用している場合には、このフィールドの値には該当 するサブドメインも含める必要があります。

## デフォルト値

[CHANGE ME]

#### 有効な値

1024 文字未満のストリング。

# ポータル URL (Portal URL)

説明

IBM Cognos Connection ポータルの URL を指定します。Domain プロパティーで指定したドメイン・ネーム (および該当する場合にはサブドメイン) を含めた完全修飾ホスト名を使用します。例: http:// MyReportServer.MyCompanyDomain.com/cognos<version>/cgi-bin/ cognos.cgi

この URL は、IBM Cognos Configuration の「ローカル構成 (Local Configuration)」>「環境 (Environment)」で表示できます。

#### デフォルト値

http://[CHANGE ME]/cognos<バージョン>/cgi-bin/cognos.cgi

#### 有効な値

適切な形式の URL。

# ディスパッチ URL (Dispatch URL)

# 説明

IBM Cognos Content Manager の URL を指定します。Domain プロパティー で指定したドメイン・ネーム (および該当する場合にはサブドメイン) を含 めた完全修飾ホスト名を使用します。例: http:// MyReportServer.MyCompanyDomain.com:9300/p2pd/servlet/dispatch

この URL は Cognos Configuration の「ローカル構成 (Local Configuration)」>「環境 (Environment)」で表示できます。

#### デフォルト値

http://[CHANGE ME]:9300/p2pd/servlet/dispatch

Cognos Content Manager のデフォルトのポート番号は 9300 です。指定したポート番号が、Cognos インストール済み環境で使用されているポート番号と同じであることを確認してください。

# 有効な値

適切な形式の URL。

#### 認証モード (Authentication mode)

説明

IBM Cognos アプリケーションで IBM Authentication Provider を使用する かどうか、つまり認証を Marketing Platform で行うかどうかを指定します。

#### デフォルト値

anonymous

#### 有効な値

- 匿名 (anonymous): 認証は無効です。
- authenticated: IBM システムと Cognos システムの間の通信がマシン・ レベルで保護されていることを意味します。1 人のシステム・ユーザーを 構成し、そのユーザーが適切なアクセス権限を持つように構成します。規 則により、このユーザーの名前は「cognos\_admin」となります。
- authenticatedPerUser: システムによって、個別のユーザー資格情報が評価されます。

# 認証名前空間 (Authentication namespace)

#### 説明

読み取り専用です。IBM Authentication Provider の名前空間です。

#### デフォルト値

Unica

## 認証ユーザー名 (Authentication user name)

#### 説明

レポート作成システム・ユーザーのログイン名を指定します。IBM アプリ ケーションは、Cognos が Unica<sup>®</sup> Authentication Provider を使用するよう構 成されている場合に、このユーザーとして Cognos にログインします。この ユーザーは、IBM EMM へのアクセス権も持っていることに注意してくだ さい。

この設定は、「認証モード」プロパティーが authenticated に設定されてい る場合にのみ適用されます。

#### デフォルト値

cognos\_admin

# 認証データ・ソース名 (Authentication datasource name)

説明

Cognos ログイン資格情報を保持するレポート作成システム・ユーザーのデ ータ・ソースの名前を指定します。

デフォルト値

Cognos

# フォーム認証の有効化 (Enable form authentication)

説明

フォームに基づく認証を有効にするかどうかを指定します。次のいずれかに 当てはまる場合に、このプロパティーを True に設定します。

- IBM EMM が IBM Cognos アプリケーションと同じドメインにインスト ールされていない場合。
- IBM EMM アプリケーションと IBM Cognos の両方が同じマシンにイン ストールされている場合であっても、IBM Cognos が (IBM EMM アプリ ケーションへのアクセスに使用されている) 完全修飾ホスト名の代わり に、(同じネットワーク・ドメイン内の) IP アドレスを使用してアクセス されている場合。

ただし、値が True の場合には、Cognos Connection へのログイン・プロセスによってログイン名とパスワードが平文で渡されるため、IBMCognos と IBM EMM で SSL 通信を使用するように構成されていないと、機密保護機能がない状態になってしまいます。

SSL が構成されている場合であっても、表示されたレポートでソースを表示すると、ユーザー名とパスワードが HTML ソース・コードに平文として表示されます。このため、IBM Cognos と IBM EMM は同じドメインにインストールしてください。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

# レポート | スキーマ | [製品] | [スキーマ名] | SQL 構成 テーブル/ビュー名

説明

このレポート作成スキーマに生成される SQL スクリプトによって作成され ることになるビューまたはテーブルの名前を指定します。標準またはデフォ ルトのテーブル名/ビュー名を変更しないのが、ベスト・プラクティスとな ります。変更する場合には、IBM Cognos Framework Manager の Cognos モ デルにあるビューの名前も変更する必要があります。

新しいオーディエンス・レベルに新しいレポート作成スキーマを作成する場合には、新しいレポート作成テーブル/ビューすべての名前を指定しなけれ ばなりません。 デフォルト値

スキーマによって異なります。

#### 有効な値

以下の制約事項を満たすストリング。

- 18 文字より長くすることはできません。
- すべて大文字を使用する必要があります。

以下に使用しなければならない命名規則を記します。

- 名前の先頭は「UAR」でなければなりません。
- IBM EMM アプリケーションを表す 1 文字のコードを追加します。コードのリストについては、後続部分を参照してください。
- 下線文字を追加します。
- テーブル名を追加します。テーブル名には、オーディエンス・レベルを示す1つ以上の文字コードを含めます。
- 末尾は、下線文字にします。

SQL ジェネレーターは、適切な場合には時間ディメンション・コードを追加します。コードのリストについては、後続部分を参照してください。

例えば、UARC\_COPERF\_DY は Campaign のオファー・パフォーマンス (Offer Performance) の日単位のレポート作成ビューまたはテーブルの名前です。

以下に、IBM EMM アプリケーション・コードのリストを示します。

- Campaign: C
- eMessage: E
- Interact: I
- Distributed Marketing: X
- Marketing Operations: P
- Leads: L

以下に、ジェネレーターによって追加される時間ディメンション・コードの リストを示します。

- 時間: HR
- 日: DY
- 週: WK
- 月: MO
- 四半期: QU
- 年: YR

# レポート | スキーマ | キャンペーン

## 入力データ・ソース (JNDI)

説明

Campaign データベース、特にシステム・テーブルを示す JNDI データ・ソ ースの名前を指定します。SQL 生成ツールを使用してレポート作成テーブ ルを作成するスクリプトを生成する場合には、このデータ・ソースがなけれ ばなりません。SQL 生成ツールは、このデータ・ソースがなくてもレポー ト作成ビューを作成するスクリプトを生成できますが、スクリプトの検証を 実行できません。

このデータ・ソースのデータベース・タイプは、Campaign ビューまたはレ ポート作成のテーブルに SQL スクリプトを生成する際に選択したデータベ ース・タイプと同じでなければなりません。

#### デフォルト値

campaignPartition1DS

# レポート | スキーマ | キャンペーン | オファー・パフォーマンス (Offer Performance)

オファー・パフォーマンス・スキーマでは、すべてのオファーに関する、およびキャンペーンごとのオファーに関するコンタクトとレスポンスの履歴指標が提供されます。デフォルトでは、このスキーマは、すべての期間における「サマリー」ビュー(またはテーブル)を生成するように構成されています。

# オーディエンス・キー

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされているオーディエンス・レベルのオーディエンス・キーとなる列の名前を指定します。

#### デフォルト値

CustomerID

#### 有効な値

255 文字未満のストリング値

キーに複数の列が含まれる場合、列名の間にコンマを使用してください。例: ColumnX,ColumnY

# コンタクト履歴テーブル

#### 説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベル のコンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

# デフォルト値

UA\_ContactHistory

## 詳細コンタクト履歴テーブル

#### 説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベル の詳細コンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

#### デフォルト値

UA\_DtlContactHist

# レスポンス履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベル のレスポンス履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA\_ResponseHistory

# 期間のバリエーション

説明

このスキーマでサポートされる「期間」レポートで使用されるカレンダー期 間を指定します。

デフォルト値

日、月

有効な値

日、週、月、四半期、年

# レポート | スキーマ | キャンペーン | [スキーマ名] | 列 | [コン タクト指標]

このフォームは、キャンペーン・パフォーマンス・レポート作成スキーマまたはオ ファー・パフォーマンス・レポート作成スキーマにコンタクト指標を追加する場合 に使用します。

#### 列名

説明

「入力列名 (Input Column Name)」フィールドで指定した列に関して、レポート作成ビューまたはテーブルで使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

#### 有効な値

名前は 18 文字を超えてはならず、すべて大文字にする必要があり、スペー スを入れることはできません。

#### 関数

説明

コンタクト指標の判別または計算の方法を指定します。

#### デフォルト値

count

#### 有効な値

count, count distinct, sum, min, max, average

# 入力列名

説明

このレポート作成スキーマに追加するコンタクト指標が入っている列の名前 です。

デフォルト値

[CHANGE ME]

#### 有効な値

コンタクト履歴テーブルおよび詳細コンタクト履歴テーブルの列の名前。

#### 制御処理フラグ

説明

サンプルの IBM Cognos レポートを使用する場合、またはコントロール・ グループが含まれるカスタム・レポートを作成する場合には、レポート作成 スキーマのそれぞれのコンタクト・メトリック (コンタクト指標) には 2 つ の列がなければなりません。 1 つの列はコントロール・グループのメトリ ックを表し、もう 1 つの列はターゲット・グループのメトリックを表しま す。「制御処理フラグ」の値によって、ビューの列がコントロール・グルー プを表すのか、ターゲット・グループを表すのかが示されます。

レポートにコントロール・グループが含まれない場合には、コントロール・ グループ用の 2 番目の列は不要です。

#### デフォルト値

0

有効な値

- 0: ターゲット・グループを表す列
- 1: コントロール・グループを表す列

# レポート | スキーマ | キャンペーン | [スキーマ名] | 列 | [レス ポンス指標]

このフォームは、キャンペーン・パフォーマンス・レポート作成スキーマまたはオ ファー・パフォーマンス・レポート作成スキーマに、レポートに含めるレスポンス 指標を追加する場合に使用します。

#### 列名

説明

「入力列名 (Input Column Name)」フィールドで指定した列に関して、レポート作成ビューまたはテーブルで使用する名前を指定します。

#### デフォルト値

[CHANGE ME]

#### 有効な値

名前は 18 文字を超えてはならず、すべて大文字にする必要があり、スペー スを入れることはできません。

# 関数

説明

レスポンス指標の判別または計算の方法を指定します。

```
デフォルト値
```

count

有効な値

count, count distinct, sum, min, max, average

# 入力列名

説明

このレポート作成スキーマに追加するレスポンス指標が入っている列の名前 です。

デフォルト値

[CHANGE ME]

#### 有効な値

レスポンス履歴テーブルの列の名前。

### 制御処理フラグ

説明

標準の IBM Cognos レポートを使用する場合、またはコントロール・グル ープが含まれるカスタム・レポートを作成する場合には、レポート作成スキ ーマのそれぞれのレスポンス・メトリック (レスポンス指標)には 2 つの列 がなければなりません。 1 つの列はコントロール・グループのレスポンス を表し、もう 1 つの列はターゲット・グループのレスポンスを表します。 「制御処理フラグ」の値によって、ビューの列がコントロール・グループを 表すのか、ターゲット・グループを表すのかが示されます。

レポートにコントロール・グループが含まれない場合には、コントロール・ グループ用の 2 番目の列は不要です。

デフォルト値

0

有効な値

- 0: ターゲット・グループを表す列
- 1: コントロール・グループを表す列

# レポート | スキーマ | キャンペーン | キャンペーン・パフォーマ ンス

キャンペーン・パフォーマンス・スキーマでは、キャンペーン、キャンペーン・オファー、キャンペーン・セルの各レベルにおけるコンタクトとレスポンスの履歴指標が提供されます。

# オーディエンス・キー

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされているオーディエンス・レ ベルのオーディエンス・キーとなる列の名前を指定します。

#### デフォルト値

CustomerID

#### 有効な値

255 文字未満のストリング値

キーに複数の列が含まれる場合、列名の間にコンマを使用してください。例: ColumnX,ColumnY

# コンタクト履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベル のコンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

#### デフォルト値

UA\_ContactHistory

#### 詳細コンタクト履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベル の詳細コンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

#### デフォルト値

UA DtlContactHist

# レスポンス履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベル のレスポンス履歴テーブルの名前を指定します。

#### デフォルト値

**UA** ResponseHistory

## 期間のバリエーション

説明

このスキーマでサポートされる「期間」レポートで使用されるカレンダー期 間を指定します。

デフォルト値

日、月

#### 有効な値

日、週、月、四半期、年

# レポート | スキーマ | キャンペーン | キャンペーン・オファー・ レスポンス内訳

このスキーマは、キャンペーン詳細レスポンスを、レスポンス・タイプとオファ ー・データごとに詳細化したレポート作成をサポートしています。このスキーマ・ テンプレートでは、カスタムのレスポンス・タイプごとに、キャンペーンと、キャ ンペーンによってグループ化されたオファーに関して別々のレスポンス数が提供さ れます。

# レスポンス履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベル のレスポンス履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA\_ResponseHistory

# レポート | スキーマ | キャンペーン | キャンペーン・オファー・ レスポンスの詳細 | カラム | [レスポンス・タイプ]

このフォームは、レポート作成スキーマに、レポートに含めるカスタム・レスポン ス・タイプを追加する場合に使用します。

#### 列名

説明

「**レスポンス・タイプ・コード**」フィールドで指定した列に関して、レポー ト作成ビューまたはテーブルで使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

#### 有効な値

名前は 18 文字を超えてはならず、すべて大文字にする必要があり、スペースを入れることはできません。

# レスポンス・タイプ・コード

#### 説明

指定したレスポンス・タイプのレスポンス・タイプ・コードです。この値 は、UA\_UsrResponseType テーブルの ResponseTypeCode 列で保持されま す。

### デフォルト値

[CHANGE ME]

#### 有効な値

レスポンス・タイプ・コードの例を次に示します。

- EXP (調査)
- CON (考慮)

- CMT (コミット)
- FFL (実行)
- USE (使用)
- USB (アンサブスクライブ)
- UKN (不明)

ご使用の Campaign インストール済み環境では、カスタムのレスポンス・タ イプ・コードもさらに使用できます。

#### 制御処理フラグ

#### 説明

IBM EMM Reports Pack で提供されている標準の IBM Cognos レポートを 使用する場合、またはコントロール・グループが含まれるカスタム・レポー トを使用する場合には、レポート作成スキーマのそれぞれのレスポンス・タ イプには 2 つの列がなければなりません。 1 つの列はコントロール・グル ープのレスポンス・タイプを表し、もう 1 つの列はターゲット・グループ のレスポンス・タイプを表します。「制御処理フラグ」の値によって、ビュ ーの列がコントロール・グループを表すのか、ターゲット・グループを表す のかが示されます。

レポートにコントロール・グループが含まれない場合には、コントロール・ グループ用の 2 番目の列は不要です。

デフォルト値

0

有効な値

- 0: ターゲット・グループを表す列
- 1: コントロール・グループを表す列

# レポート | スキーマ (Schemas) | キャンペーン | キャンペーン ン・オファーのコンタクト・ステータスによるブレークアウト (Campaign Offer Contact Status Breakout)

このスキーマは、キャンペーン詳細コンタクトを、コンタクト・ステータスとオフ ァー・データごとに詳細化したレポート作成をサポートしています。このスキー マ・テンプレートでは、カスタムのコンタクト・ステータス・タイプごとに、キャ ンペーンと、キャンペーンによってグループ化されたオファーに関して別々のコン タクト数が提供されます。

デフォルトでは、このスキーマを使用する Campaign レポートのサンプルは存在しません。

# オーディエンス・キー

#### 説明

このレポート作成スキーマによってサポートされているオーディエンス・レベルのオーディエンス・キーとなる列の名前を指定します。

#### デフォルト値

CustomerID

## 有効な値

255 文字未満のストリング値

キーに複数の列が含まれる場合、列名の間にコンマを使用してください。例: ColumnX,ColumnY

# コンタクト履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベル のコンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA\_ContactHistory

# 詳細コンタクト履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベル の詳細コンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA\_DtlContactHist

# レポート | スキーマ | キャンペーン | キャンペーン・オファーの コンタクト・ステータスの内訳 | カラム | [コンタクト・ステータ ス]

## 列名

説明

「コンタクト・ステータス (Contact Status)」フィールドで指定した列に関 して、レポート作成ビューまたはテーブルで使用する名前を指定します。

#### デフォルト値

[CHANGE ME]

#### 有効な値

名前は 18 文字を超えてはならず、すべて大文字にする必要があり、スペースを入れることはできません。

# コンタクト・ステータス・コード

説明

コンタクト・ステータス・コードの名前です。この値は、UA\_ContactStatus テーブルの ContactStatusCode 列で保持されます。

デフォルト値

[CHANGE ME]

コンタクト・ステータス・タイプの例を次に示します。

- CSD (キャンペーン送信)
- DLV (配信済み)
- UNDLV (未配信)
- CTR (制御)

ご使用の Campaign インストール済み環境では、カスタムのコンタクト・ス テータス・タイプもさらに使用できます。

# レポート | スキーマ | キャンペーン | キャンペーン・カスタム属 性 | カラム | [キャンペーン・カスタム・カラム]

このフォームは、レポート作成スキーマに、レポートに含めるカスタム・キャンペ ーン属性を追加する場合に使用します。

#### 列名

説明

「属性 ID」フィールドで識別される属性に関して、レポート作成ビューまたはテーブルで使用する名前を指定します。

#### デフォルト値

[CHANGE ME]

## 有効な値

名前は 18 文字を超えてはならず、すべて大文字にする必要があり、スペー スを入れることはできません。

#### 属性 ID

説明

UA\_CampAttribute テーブルの属性の AttributeID 列の値です。

デフォルト値

0

#### 値タイプ

説明

キャンペーン属性のデータ型です。

#### デフォルト値

StringValue

# 有効な値

StringValue、 NumberValue、 DatetimeValue

このキャンペーン属性に通貨値を入れる場合、NumberValue を選択してください。

このキャンペーン属性の「フォーム要素タイプ」を Campaign で「選択ボックス - 文字列」に設定した場合、StringValue を選択します。

# レポート | スキーマ | キャンペーン | キャンペーン・カスタム属 性 | カラム | [オファー・カスタム・カラム]

このフォームは、レポート作成スキーマに、レポートに含めるカスタム・オファー 属性を追加する場合に使用します。

# 列名

説明

「属性 ID」フィールドで識別される属性に関して、レポート作成ビューまたはテーブルで使用する名前を指定します。

## デフォルト値

[CHANGE ME]

#### 有効な値

名前は 18 文字を超えてはならず、すべて大文字にする必要があり、スペー スを入れることはできません。

# 属性 ID

説明

UA\_OfferAttribute テーブルの属性の AttributeID 列の値です。

デフォルト値

0

#### 値タイプ

説明

オファー属性のデータ型です。

#### デフォルト値

StringValue

#### 有効な値

StringValue、 NumberValue、 DatetimeValue

このオファー属性に通貨値を入れる場合、NumberValue を選択してください。

このオファー属性の「フォーム要素タイプ」を Campaign で「選択ボックス - 文字列」に設定した場合、StringValue を選択します。

# レポート | スキーマ | キャンペーン | キャンペーン・カスタム属 性 | カラム | [セル・カスタム・カラム]

このフォームは、レポート作成スキーマに、レポートに含めるカスタム・セル属性を追加する場合に使用します。

#### 列名

説明

「属性 ID」フィールドで識別される属性に関して、レポート作成ビューまたはテーブルで使用する名前を指定します。

#### デフォルト値

[CHANGE ME]

#### 有効な値

名前は 18 文字を超えてはならず、すべて大文字にする必要があり、スペー スを入れることはできません。

#### 属性 ID

説明

「UA\_CellAttribute」テーブルの属性の「AttributeID」列の値です。

#### デフォルト値

0

#### 値タイプ

説明

セル属性のデータ型です。

デフォルト値

StringValue

#### 有効な値

StringValue, NumberValue, DatetimeValue

# レポート | スキーマ | インタラクト

Interact レポート作成スキーマは、設計時、実行時、学習の 3 つの異なるデータベースを参照します。このページのプロパティーは、これらのデータベースのデー タ・ソースの JNDI 名を指定する場合に使用します。

SQL レポート生成ツールを使用してレポート作成テーブルを作成するスクリプトを 生成する場合には、このページで指定するデータ・ソースがなければなりません。 SQL 生成ツールは、こうしたデータ・ソースがなくともレポート作成ビューを作成 するスクリプトを生成できますが、スクリプトの検証を実行できません。

データ・ソースのデータベース・タイプは、ビューまたはレポート作成のテーブル に SQL スクリプトを生成する際に選択したデータベース・タイプと同じでなけれ ばなりません。

# Interact 設計データ・ソース (Interact Design Datasource (JNDI)) <sup>説明</sup>

Interact 設計時データベースを示す JNDI データ・ソースの名前を指定しま す。このデータベースは、Campaign システム・テーブルでもあります。

#### デフォルト値

campaignPartition1DS

# Interact 実行時データ・ソース (Interact Runtime Datasource (JNDI))

説明

Interact 実行時データベースを示す JNDI データ・ソースの名前を指定します。

デフォルト値

InteractRTDS

# Interact 学習データ・ソース (Interact Learning Datasource (JNDI))

説明

Interact 学習データベースを示す JNDI データ・ソースの名前を指定します。

デフォルト値

InteractLearningDS

# レポート | スキーマ | インタラクト | インタラクト・パフォーマ ンス

インタラクト・パフォーマンス・スキーマは、チャネル、チャネル・オファー、チャネル・セグメント、チャネル・インタラクション・ポイント、対話式セル、対話 式セル・オファー、対話式セル・インタラクション・ポイント、対話式オファー、 対話式オファー・セル、対話式オファー・インタラクション・ポイントの各レベル において、コンタクトとレスポンスの履歴指標を生成します。

# オーディエンス・キー

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされているオーディエンス・レベルのオーディエンス・キーとなる列の名前を指定します。

デフォルト値

CustomerID

#### 有効な値

255 文字未満のストリング値。

キーに複数の列が含まれる場合、列名の間にコンマを使用してください。例: ColumnX,ColumnY

# 詳細コンタクト履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベル の詳細コンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

#### デフォルト値

UA\_DtlContactHist

# レスポンス履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベル のレスポンス履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA\_ResponseHistory

# 期間のバリエーション

説明

このスキーマでサポートされる「期間」レポートで使用されるカレンダー期間を指定します。

デフォルト値

時間、日

有効な値

時間、日、週、月、四半期、年

# レポート | スキーマ | eMessage

# eMessage トラッキング・データ・ソース (eMessage Tracking Datasource (JNDI))

説明

eMessage トラッキング・テーブルを示す JNDI データ・ソースの名前を指 定します。このトラッキング・テーブルは、Campaign システム・テーブル 内にあります。SQL レポート生成ツールを使用して、レポート作成テーブ ルを作成するスクリプトを検証する場合には、このデータ・ソースがなけれ ばなりません。SQL 生成ツールは、このデータ・ソースがなくてもレポー ト作成ビューを作成するスクリプトを生成できますが、スクリプトの検証を 実行できません。

このデータ・ソースのデータベース・タイプは、ビューまたはレポート作成 のテーブルに SQL スクリプトを生成する際に選択したデータベース・タイ プと同じでなければなりません。

デフォルト値

campaignPartition1DS

# Campaign 構成プロパティー

このセクションでは、「構成」ページの Campaign 構成プロパティーについて取り 上げます。

# キャンペーン

インストール環境でサポートされるロケールとコンポーネント・アプリケーション を指定するには、「設定」 > 「構成」を選択してから Campaign カテゴリーをクリ ックします。

# currencyLocale

#### 説明

currencyLocale プロパティーは、表示ロケールに関係なく Campaign Web アプリケーションでの通貨表示方法を制御するグローバル設定です。

重要:(複数ロケール機能が実装されていて、ユーザー指定のロケールに基づいて表示ロケールの変更が行われる場合など)表示ロケールが変更されても、Campaign では通貨変換は行われません。ロケールを切り替える場合には注意が必要です。例えば、通貨額が US\$10.00 などと表記される「英語(米国)」から「フランス語」ロケールに変更する場合、ロケールと一緒に通貨記号を変更しても通貨額(10,00)は変更されません。

#### デフォルト値

en\_US

#### supportedLocales

#### 説明

supportedLocales プロパティーは、Campaign でサポートするロケールまた は言語ロケールのペアを指定します。このプロパティーの値は、ユーザーが Campaign をインストールする際にインストーラーによって設定されます。 例: de,en,fr,ja,es,ko,pt,it,zh,ru

#### デフォルト値

Campaign がローカライズされているすべての言語/ロケール。

# defaultLocale

#### 説明

defaultLocale プロパティーは、supportedLocales プロパティーで指定さ れたロケールのうち、Campaign のデフォルトの表示ロケールとするロケー ルを指定します。このプロパティーの値は、ユーザーが Campaign をインス トールする際にインストーラーによって設定されます。

# デフォルト値

en

#### acoInstalled

パス

#### 説明

acoInstalled プロパティーは、Contact Optimization がインストールされて いるかどうかを指定します。

Contact Optimization がインストールされて構成されている場合には、この 値を「はい」に設定し、Contact Optimization プロセスがフローチャートで 表示されるようにします。値が「true」で Contact Optimization がインスト ールも構成もされていないと、プロセスは表示されますが、使用できません (ぼかし表示)。

デフォルト値

false

有効な値

false および true

# collaborateInstalled

説明

collaborateInstalled プロパティーは、Distributed Marketing がインストー ルされているかどうかを指定します。Distributed Marketing がインストール されて構成されている場合、この値を「true」に設定し、Distributed Marketing 機能が Campaign ユーザー・インターフェースで表示されるよう にします。

デフォルト値

false

有効な値

true | false

# Campaign | collaborate

このカテゴリーのプロパティーは、Distributed Marketing 構成に関連します。

# **CollaborateIntegrationServicesURL**

説明

CollaborateIntegrationServicesURL プロパティーは、Distributed Marketing のサーバーとポート番号を指定します。この URL は、ユーザーがフローチ ャートを Distributed Marketing に公開する際に Campaign によって使用さ れます。

デフォルト値

http://localhost:7001/collaborate/services/
CollaborateIntegrationServices1.0

# Campaign | navigation

このカテゴリーのプロパティーの中には内部的に使用されるため、変更すべきでないものがあります。

# welcomePageURI

構成カテゴリー

Campaign navigation

説明

welcomePageURI プロパティーは、IBM アプリケーションによって内部的に 使用されます。Campaign 索引ページの Uniform Resource Identifier (URI) を指定します。この値を変更してはなりません。

#### デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

# seedName

```
構成カテゴリー
```

Campaign navigation

# 説明

seedName プロパティーは、IBM アプリケーションによって内部的に使用されます。この値を変更してはなりません。

# デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

# タイプ

```
構成カテゴリー
```

Campaign navigation

# 説明

type プロパティーは、IBM アプリケーションが内部的に使用します。この 値を変更してはなりません。

# デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

# httpPort

```
構成カテゴリー
```

Campaign navigation

# 説明

このプロパティーは、Campaign Web アプリケーション・サーバーが使用するポートを指定します。Campaign インストールでデフォルト以外のポートを使用する場合、このプロパティーの値を編集する必要があります。

# デフォルト値

7001

# httpsPort

# 構成カテゴリー

Campaign navigation

# 説明

SSL が構成されている場合、このプロパティーは、Campaign Web アプリ ケーション・サーバーがセキュア接続のために使用するポートを指定しま す。Campaign インストールでデフォルト以外のセキュア・ポートを使用す る場合、このプロパティーの値を編集する必要があります。

# デフォルト値

7001

# serverURL

構成カテゴリー Campaign|navigation 説明

serverURL プロパティーは、Campaign が使用する URL を指定します。 Campaign インストールでデフォルト以外の URL を使用する場合、この値 を次のように編集しなければなりません。

http://machine\_name\_or\_IP\_address:port\_number/context-root

デフォルト値

http://localhost:7001/Campaign

#### logoutURL

構成カテゴリー

Campaign navigation

#### 説明

logoutURL プロパティーは、ユーザーがログアウト・リンクをクリックした 場合に、登録されているアプリケーションのログアウト・ハンドラーを呼び 出すために内部的に使用されます。この値を変更しないでください。

#### serverURLInternal

構成カテゴリー

Campaign navigation

説明

serverURLInternal プロパティーは、SiteMinder を使用する場合の Campaign Web アプリケーションの URL を指定します。このプロパティー は、eMessage や Interact などの、他の IBM EMM アプリケーションとの 内部通信用にも使用されます。このプロパティーが空の場合、serverURL プ ロパティーの値が使用されます。内部アプリケーション通信を HTTP にし て、外部通信を HTTPS にする必要がある場合には、このプロパティーを変 更します。 SiteMinder を使用する場合には、この値を、Campaign Web ア プリケーション・サーバーの URL に設定する必要があります。次のように フォーマット設定します。

http://machine\_name\_or\_IP\_address:port\_number/context-root

# デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

# campaignDetailPageURI

#### 構成カテゴリー

Campaign | navigation

# 説明

campaignDetailPageURI プロパティーは、IBM アプリケーションが内部的 に使用します。Campaign 詳細設定ページの Uniform Resource Identifier (URI) を指定します。この値を変更してはなりません。

#### デフォルト値

campaignDetails.do?id=

# flowchartDetailPageURI

# 構成カテゴリー

Campaign navigation

# 説明

flowchartDetailPageURI プロパティーは、特定のキャンペーンにあるフロ ーチャートの詳細情報にナビゲートする URL を構成するために使用されま す。この値を変更してはなりません。

# デフォルト値

flowchartDetails.do?campaignID=&id=

# schedulerEditPageURI

```
構成カテゴリー
```

Campaign | navigation

# 説明

このプロパティーは、スケジューラーのページにナビゲートする URL を構成するために使用されます。この値を変更しないでください。

# デフォルト値

jsp/flowchart/scheduleOverride.jsp?taskID=

# offerDetailPageURI

# 構成カテゴリー

Campaign navigation

# 説明

```
offerDetailPageURI プロパティーは、特定のオファーの詳細情報にナビゲートする URL を構成するために使用されます。この値を変更してはなりません。
```

# デフォルト値

offerDetails.do?id=

# offerlistDetailPageURI

# 構成カテゴリー

Campaign navigation

# 説明

```
offerlistDetailPageURI プロパティーは、特定のオファー・リストの詳細
情報にナビゲートする URL を構成するために使用されます。この値を変更
してはなりません。
```

# デフォルト値

displayOfferList.do?offerListId=

# mailingDetailPageURI

構成カテゴリー Campaign|navigation 説明

```
このプロパティーは、eMessage のメール配信の詳細ページにナビゲートする URL を構成するために使用されます。この値を変更しないでください。
```

#### デフォルト値

view/MailingDetails.do?mailingId=

#### optimizeDetailPageURI

#### 構成カテゴリー

Campaign navigation

# 説明

```
このプロパティーは、IBM Contact Optimization の詳細ページにナビゲート
する URL を構成するために使用されます。この値を変更しないでくださ
い。
```

デフォルト値

optimize/sessionLinkClicked.do?optimizeSessionID=

#### optimizeSchedulerEditPageURI

構成カテゴリー

Campaign navigation

# 説明

このプロパティーは、IBM Contact Optimization のスケジューラーの編集ペ ージにナビゲートする URL を構成するために使用されます。この値を変更 しないでください。

# デフォルト値

optimize/editOptimizeSchedule.do?taskID=

# displayName

# 構成カテゴリー

Campaign navigation

#### 説明

displayName プロパティーは、それぞれの IBM 製品の GUI に表示される ドロップダウン・メニューの Campaign リンクに使用されるリンク・テキス トを指定します。

#### デフォルト値

Campaign

# Campaign | キャッシング (caching)

このキャッシング・カテゴリーのプロパティーは、チャネル、イニシアチブ、キャ ンペーン、セッション、オファーのキャッシュ・データが保持される期間を指定し ます。

# offerTemplateDataTTLSeconds

#### 説明

offerTemplateDataTTLSeconds プロパティーは、システムがオファー・テン プレートのキャッシュ・データを保持する期間 (存続時間) を秒単位で指定 します。値が空の場合は、キャッシュ・データが消去されないことを意味し ます。

デフォルト値

600 (10 分)

#### campaignDataTTLSeconds

#### 説明

campaignDataTTLSeconds プロパティーは、システムが Campaign キャッシュ・データを保持する期間 (存続時間) を秒単位で指定します。値が空の場合は、キャッシュ・データが消去されないことを意味します。

#### デフォルト値

600 (10 分)

# sessionDataTTLSeconds

## 説明

sessionDataTTLSeconds プロパティーは、システムがセッション・キャッシュ・データを保持する期間 (存続時間)を秒単位で指定します。値が空の場合は、キャッシュ・データが消去されないことを意味します。

#### デフォルト値

600 (10 分)

# folderTreeDataTTLSeconds

# 説明

folderTreeDataTTLSeconds プロパティーは、システムがフォルダー・ツリ ーのキャッシュ・データを保持する期間 (存続時間) を秒単位で指定しま す。値が空の場合は、キャッシュ・データが消去されないことを意味しま す。

#### デフォルト値

600 (10 分)

## attributeDataTTLSeconds

# 説明

attributeDataTTLSeconds プロパティーは、システムがオファー属性のキャッシュ・データを保持する期間 (存続時間)を秒単位で指定します。値が空の場合は、キャッシュ・データが消去されないことを意味します。

## デフォルト値

600 (10 分)

# initiativeDataTTLSeconds

説明

initiativeDataTTLSeconds プロパティーは、システムがイニシアチブ・キャッシュ・データを保持する期間 (存続時間)を秒単位で指定します。値が 空の場合は、キャッシュ・データが消去されないことを意味します。

デフォルト値

600 (10 分)

# offerDataTTLSeconds

説明

offerDataTTLSeconds プロパティーは、システムがオファーのキャッシュ・ データを保持する期間 (存続時間)を秒単位で指定します。値が空の場合 は、キャッシュ・データが消去されないことを意味します。

デフォルト値

600 (10 分)

#### segmentDataTTLSeconds

説明

segmentDataTTLSeconds プロパティーは、システムがセグメントのキャッシュ・データを保持する期間 (存続時間)を秒単位で指定します。値が空の場合は、キャッシュ・データが消去されないことを意味します。

デフォルト値

600 (10 分)

# Campaign | partitions

このカテゴリーには、すべての Campaign パーティション (パーティション 1 という名前のデフォルトのパーティションも含みます)を構成するためのプロパティー が含まれています。それぞれの Campaign パーティションに対して 1 つのカテゴリ ーを作成する必要があります。このセクションでは、partition[n] カテゴリーのプロ パティーについて取り上げます。このカテゴリーは、Campaign で構成するすべての パーティションに適用されます。

# Campaign | partitions | partition[n] | eMessage

このカテゴリーのプロパティーを定義することで、宛先リストの特性を定義し、 IBM EMM Hosted Services にリストをアップロードするリソースの場所を指定しま す。

#### eMessagePluginJarFile

説明

宛先リスト・アップローダー (RLU) として作動するファイルの場所の絶対 パスです。 Campaign に対するこのプラグインによって、IBM がホストす るリモート・サービスに OLT データと関連メタデータがアップロードされ ます。指定する場所は、Campaign Web アプリケーション・サーバーをホス トするコンピューターのファイル・システムにあるローカル・ディレクトリ ーの絶対パスでなければなりません。

IBM インストーラーを実行すると、デフォルトのパーティション用のこの 設定がインストーラーによって自動的に取り込まれます。その他のパーティ ションの場合、このプロパティーは手動で構成しなければなりません。 eMessage のインストールごとに RLU は 1 つしか存在しないので、すべて のパーティションに関して RLU に同じ場所を指定する必要があります。

IBM で指示されない限り、この設定は変更しないでください。

#### デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

#### 有効な値

Campaign Web サーバーをインストールした場所のローカル・ディレクトリ ーの絶対パスです。

#### defaultSeedInterval

#### 説明

defaultSeedType が Distribute list の場合におけるシード・メッセージ 間のメッセージ数。

## デフォルト値

1000

#### defaultSeedType

#### 説明

eMessage がシード・アドレスを宛先リストに挿入するために使用するデフ ォルトのメソッドです。

#### デフォルト値

Distribute IDS

#### 有効な値

- Distribute IDS 宛先リストのサイズと有効なシード・アドレスの数に 基づいて ID を均等に配布し、シード・アドレスを宛先リスト全体で均等 な間隔に挿入します。
- Distribute list メイン・リストの defaultSeedInterval ID すべてに シード・アドレスを挿入します。宛先リストに指定の間隔で、有効なシー ド・アドレスのリスト全体を挿入します。挿入点の間隔を指定する必要が あります。

#### oltTableNamePrefix

#### 説明

出力リスト表の生成済みスキーマで使用します。このパラメーターを定義す る必要があります。

# デフォルト値

OLT

#### 有効な値

接頭部に含めることができるのは 8 文字までの英数字または下線文字で、 先頭は文字でなければなりません。

#### oltDimTableSupport

#### 説明

この構成パラメーターによって制御される機能は、eMessage スキーマで作成された出力リスト表 (OLT) にディメンション表を追加する機能です。ディメンション表は、Eメールの Eメール・メッセージにデータ表を作成する拡張スクリプトを使用するのに必要となります。

デフォルトの設定は、False です。マーケティング担当者が eMessage プロ セスを使用して宛先リストを定義する際にディメンション表を作成できるよ うに、このプロパティーを True に設定する必要があります。データ・テー ブルの作成と、E メールの拡張スクリプトの処理に関して詳しくは、「*IBM eMessage* ユーザー・ガイド」を参照してください。

デフォルト値

False

#### 有効な値

True | False

# Campaign | partitions | partition[n] | reports

これらの構成プロパティーは、レポートのフォルダーを定義します。

#### offerAnalysisTabCachedFolder

#### 説明

offerAnalysisTabCachedFolder プロパティーは、ナビゲーション・ペイン の「分析」リンクをクリックして「分析」タブに移動した際に、そのタブ上 にリストされる満杯の(拡張される)オファー・レポートの仕様を入れるフ ォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定されま す。

# デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='offer']/folder[@name='cached']

#### segmentAnalysisTabOnDemandFolder

#### 説明

segmentAnalysisTabOnDemandFolder プロパティーは、セグメントの「分析」タブにリストされるセグメント・レポートを入れるフォルダーの場所を 指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定されます。

## デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='segment']/folder[@name='cached']
# offerAnalysisTabOnDemandFolder

# 説明

offerAnalysisTabOnDemandFolder プロパティーは、オファーの「分析」タ ブにリストされるオファー・レポートを入れるフォルダーの場所を指定しま す。パスは、XPath 表記を使用して指定されます。

# デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='offer']

# segmentAnalysisTabCachedFolder

# 説明

segmentAnalysisTabCachedFolder プロパティーは、ナビゲーション・ペインの「分析」リンクをクリックして「分析」タブに移動した際に、そのタブ上にリストされる満杯の(拡張される)セグメント・レポートの仕様を入れるフォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定されます。

# デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='segment']

# analysisSectionFolder

# 説明

analysisSectionFolder プロパティーは、レポート仕様を格納するルート・フォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定されます。

# デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign']

# campaignAnalysisTabOnDemandFolder

# 説明

campaignAnalysisTabOnDemandFolder プロパティーは、キャンペーンの「分析」タブにリストされるキャンペーン・レポートを入れるフォルダーの場所 を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定されます。

# デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='campaign']

# campaignAnalysisTabCachedFolder

## 説明

campaignAnalysisTabCachedFolder プロパティーは、ナビゲーション・ペインの「分析」リンクをクリックして「分析」タブに移動した際に、そのタブ

上にリストされる満杯の (拡張される) キャンペーン・レポートの仕様を入れるフォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定されます。

# デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='campaign']/folder[@name='cached']

# campaignAnalysisTabEmessageOnDemandFolder

説明

campaignAnalysisTabEmessageOnDemandFolder プロパティーは、キャンペーンの「分析」タブにリストされる eMessage レポートを入れるフォルダーの 場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定されます。

## デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign']/folder[@name='eMessage
Reports']

#### campaignAnalysisTabInteractOnDemandFolder

説明

```
Interact レポートのレポート・サーバー・フォルダー・ストリングです。
```

# デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign']/folder[@name='Interact Reports']

## 使用可能性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能で す。

#### interactiveChannelAnalysisTabOnDemandFolder

# 説明

「対話式チャネル」分析タブ・レポートのレポート・サーバー・フォルダ ー・ストリングです。

#### デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='interactive channel']

# 使用可能性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

# Campaign | partitions | partition[n] | validation

Campaign に同梱されている検証プラグイン開発キット (PDK) を使用すると、サード・パーティーはカスタム検証ロジックを開発し、Campaign で使用することができます。 partition[n] > validation カテゴリーのプロパティーは、カスタム検証プログラムのクラスパスとクラス名、さらにはオプションの構成ストリングを指定します。

# validationClass

# 説明

validationClass プロパティーは、Campaign における検証で使用するクラ ス名を指定します。クラスのパスは、validationClasspath プロパティーで 指定します。クラスは、パッケージ名で完全修飾する必要があります。

```
以下に例を示します。
```

com.unica.campaign.core.validation.samples.SimpleCampaignValidator

サンプル・コードの SimpleCampaignValidator クラスであることを示して います。

このプロパティーはデフォルトでは未定義で、Campaign ではカスタム検証 は行われません。

#### デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

## validationConfigString

## 説明

validationConfigString プロパティーは、Campaign が検証プラグインをロ ードする際にそのプラグインに渡す構成ストリングを指定します。使用する 構成ストリングは、使用するプラグインによって異なる可能性があります。

このプロパティーは、デフォルトでは未定義です。

## デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

## validationClasspath

## 説明

validationClasspath プロパティーは、Campaign におけるカスタム検証で 使用するクラスのパスを指定します。

- 絶対パスか相対パスのいずれかを使用します。相対パスである場合、 Campaign を実行しているアプリケーション・サーバーによって動作が異なります。 WebLogic では、ドメイン作業ディレクトリーへのパスが使用されます。このパスは、デフォルトでは c:¥bea¥user projects¥domains¥mydomain です。
- パスの末尾がスラッシュ (UNIX の場合には /、Windows の場合には円 記号 ¥) になっていると、Campaign では、使用する必要のある Java プ ラグイン・クラスの場所を指すと見なされます。
- パスの末尾がスラッシュでないと、Campaign では、Java クラスが含まれる.jar ファイルの名前と見なされます。例えば、/<CAMPAIGN\_HOME>/ devkits/validation/lib/validator.jar という値は、UNIX プラットフォーム上のパスで、プラグイン開発者キットにある JAR ファイルを指します。

このプロパティーはデフォルトでは未定義で、このプロパティーは無視されます。

## デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

# Campaign | partitions | partition[n] | audienceLevels | audienceLevel

このカテゴリーのプロパティーは編集しないでください。これらのプロパティー は、ユーザーが Campaign の「管理」ページでオーディエンス・レベルを作成する 時に、作成され、設定されます。

#### numFields

説明

オーディエンス・レベルのフィールド数を示すプロパティーです。このプロ パティーは編集しないようにしてください。

# デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

### audienceName

説明

オーディエンス名を示すプロパティーです。このプロパティーは編集しない ようにしてください。

## デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

# Campaign | partitions | partition[n] | audienceLevels | audienceLevel | field[n]

このカテゴリーのプロパティーは、オーディエンス・レベル・フィールドを定義し ます。これらのプロパティーは、Campaign の「管理」ページでユーザーがオーディ エンス・レベルを作成する際に設定されます。このカテゴリーのプロパティーは編 集しないようにしてください。

# タイプ

# 説明

partition[n] > audienceLevels > audienceLevel > field[n] > type プロ パティーは、Campaign の「管理」ページでユーザーがオーディエンス・レ ベルを作成する際に設定されます。このプロパティーは編集しないようにし てください。

# デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

#### name

説明

partition[n] > audienceLevels > audienceLevel > field[n] > name プロ パティーは、Campaign の「管理」ページでユーザーがオーディエンス・レ ベルを作成する際に設定されます。このプロパティーは編集しないようにし てください。

#### デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

# Campaign | Partitions | partition[n] | dataSources

Campaign | Partitions | partition[n] | dataSources を選択し、IBM Campaign がデータベース (独自のシステム・テーブルを含む) と対話する方法を構成します。

これらのプロパティーは、IBM Campaign からアクセス可能なデータベース、および照会の構成方法に関する多くの面を制御します。

Campaign で追加する各データ・ソースは、partition[n] > dataSources > DATA SOURCE NAME の下のカテゴリーによって表されます。

注: Marketing Platform において、各パーティションの Campaign システム・テーブ ル・データ・ソースの名前は UA\_SYSTEM\_TABLES でなければならず、Campaign のど のパーティションについても、「構成」ページに dataSources > UA\_SYSTEM\_TABLES のカテゴリーが存在していなければなりません。

# AccessLibrary

#### 説明

Campaign は、データ・ソースのタイプに従ってデータ・ソース・アクセ ス・ライブラリーを選択します。例えば、Oracle の接続には libora4d.so が使用され、DB2 の接続には libdb24d.so が使用されます。ほとんどの場 合、デフォルトの選択内容が適切です。しかし、Campaign の実際の環境に おいてデフォルト値が適切でないという場合には、AccessLibrary プロパテ ィーを変更することが可能です。例えば、64 ビット Campaign には 2 つの ODBC アクセス・ライブラリーが提供されています。1 つは unixODBC 実 装 (libodb4d.so) と互換の ODBC データ・ソースに適したもの、もう 1 つは、DataDirect 実装 (Teradata などへのアクセスのために Campaign が使 用する libodb4dDD.so) と互換のものです。

## AIX 用の追加ライブラリー

## 説明

Campaign には、ODBC Unicode API ではなく ODBC ANSI API をサポートする AIX ODBC ドライバー・マネージャーのための 2 つの追加ライブ ラリーが含まれています。

- libodb4dAO.so (32 ビットおよび 64 ビット): unixODBC 互換実装用の ANSI 専用ライブラリー
- libodb4dDDAO.so (64 ビットのみ): DataDirect 互換実装用の ANSI 専用 ライブラリー

デフォルトのアクセス・ライブラリーをオーバーライドする必要があると判断した場合には、必要に応じてこのパラメーターを設定してください(例えば、libodb4dDD.so に設定し、デフォルトの選択である libodb4d.so をオーバーライドするなど)。

## デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

# AliasPrefix

説明

AliasPrefix プロパティーは、ディメンション・テーブルを使用していて新 しいテーブルに書き込む際に、Campaign により自動的に作成される別名 を、Campaign がどのように生成するかを指定します。

各データベースには、それぞれ ID の最大長があります。使用しているデー タベースの文書を調べて、設定する値がデータベースの最大 ID 長を超えな いものであることを確認してください。

デフォルト値

А

# AllowBaseJoinsInSelect

# 説明

このプロパティーは、選択プロセスにおいて使用される (同じデータ・ソー スからの) ベース・テーブルの SQL 結合の実行を Campaign が試みるかど うかを決定します。それをしない場合、それに相当する結合は Campaign サ ーバーにおいて実行されます。

デフォルト値

TRUE

# 有効な値

TRUE | FALSE

# AllowSegmentUsingSQLCase

# 説明

AllowSegmentUsingSQLCase プロパティーは、Campaign の Segment プロセスにおいて、構成に関する特定の条件が満たされた場合に、複数の SQL ステートメントを統合して単一の SQL ステートメントにするかどうかを指定します。

このプロパティーを TRUE に設定すると、以下の条件のすべてが満たされた 場合に、パフォーマンスが大幅に改善されます。

- セグメントが相互に排他的である。
- すべてのセグメントが単一のテーブルに由来するものである。
- 各セグメントの基準が IBM マクロ言語に基づくものである。

この場合、Campaign は、セグメンテーションを実行した後、フィールドご とのセグメント処理を Campaign アプリケーション・サーバー上で実行する ための単一の SQL CASE ステートメントを生成します。

デフォルト値

TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

#### AllowTempTables

説明

AllowTempTables プロパティーは、Campaign がデータベース中に一時テー ブルを作成するかどうかを指定します。一時テーブルを作成すると、キャン ペーンのパフォーマンスが大幅に改善されることがあります。値が TRUE の 場合、一時テーブルが有効です。

一時テーブルが有効の場合、(例えば Segment プロセスによって) データベ ースに対して照会が発行されるたびに、結果として生成される ID がデータ ベース中の一時テーブルに書き込まれます。追加の照会が発行されると、 Campaign は、データベースから行を取り出すために、その一時テーブルを 使用します。

一時テーブルが有効でない場合、Campaign は、選択された ID をサーバ ー・メモリー中に保持します。追加の照会では、データベースから ID を取 り出して、サーバー・メモリー中の ID との突き合わせが実行されます。

一時テーブルの結合を制御することについて詳しくは、

MaxTempTableJoinPctSelectAll および MaxTempTableJoinPctWithCondition の 説明を参照してください。

一時テーブルを使用するには、データベースへの書き込むための適切な特権 が付与されていなければなりません。特権は、データベースへの接続時に入 力するデータベース・ログインによって決まります。

デフォルト値

TRUE

#### ASMSaveDBAuthentication

説明

ASMSaveDBAuthentication プロパティーは、Campaign にログインし、それ までにログインしていないデータ・ソース中のテーブルをマップする際に、 Campaign がユーザー名とパスワードを IBM EMM に保存するかどうかを 指定します。

このプロパティーを TRUE に設定した場合、Campaign は、データ・ソース へのログイン時にユーザー名とパスワードを入力するためのプロンプトを表 示しません。このプロパティーを FALSE に設定した場合、データ・ソース にログインするたびに、毎回ユーザー名とパスワードを入力するためのプロ ンプトが Campaign によって表示されます。 TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

# **ASMUserForDBCredentials**

# 説明

ASMUserForDBCredentials プロパティーは、Campaign システムのユーザー に割り当てられている IBM EMM ユーザー名を指定します (Campaign シ ステム・テーブルにアクセスするために必要)。

このプロパティーは、デフォルトでは未定義です。

## デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

## BulkInsertBlockSize

# 説明

BulkInsertBlockSize プロパティーは、Campaign がデータベースに一度に 渡すデータ・ブロックの最大サイズを、レコード数として定義します。

# デフォルト値

100

#### BulkInsertRequiresColumnType

#### 説明

BulkInsertRequiresColumnType プロパティーは、Data Direct ODBC デー タ・ソースのサポートのためにのみ必要です。 Data Direct ODBC データ・ ソースにおいて、バルク (配列) 挿入機能を使用する場合、このプロパティ ーを TRUE に設定します。その他のほとんどの ODBC ドライバーと互換 にするには、このプロパティーを FALSE に設定します。

# デフォルト値

FALSE

# BulkReaderBlockSize

## 説明

BulkReaderBlockSize プロパティーは、Campaign がデータベースから一度 に読むデータ・ブロックのサイズを、レコード数として定義します。

# デフォルト値

2500

# ConditionalSQLCloseBracket

# 説明

ConditionalSQLCloseBracket プロパティーは、未加工 SQL カスタム・マクロ内で、条件付きセグメントの終わりを示すために使用されるブラケットのタイプを指定します。指定された左大括弧タイプと右大括弧タイプで囲ま

れた条件付きセグメントは、一時テーブルが存在する場合にのみ使用されま す。一時テーブルが存在しない場合は無視されます。

# デフォルト値

} (閉じ中括弧)

## ConditionalSQLOpenBracket

# 説明

ConditionalSQLOpenBracket プロパティーは、未加工 SQL カスタム・マク ロ内で、条件付セグメントの開始を示すために使用されるブラケットのタイ プを指定します。 ConditionalSQLOpenBracket プロパティーと ConditionalSQLCloseBracket プロパティーによって指定されるブラケット で囲まれた条件付きセグメントは、一時テーブルが存在する場合にのみ使用 され、一時テーブルがない場合は無視されます。

デフォルト値

{ (開き中括弧)

# ConnectionCacheSize

#### 説明

ConnectionCacheSize プロパティーは、Campaign においてデータ・ソース ごとにキャッシュ中に維持する接続の数を指定します。

デフォルトでは N=0 であり、その場合 Campaign は、1 つの操作ごとにデ ータ・ソースとの新しい接続を 1 つ確立します。 Campaign で接続キャッ シュが維持されていて、接続の再利用が可能なら、Campaign は、新しい接 続を確立するのではなく、キャッシュに含まれる接続を使用します。

設定値が 0 でない場合、接続を利用して実行されるプロセスについて、 Campaign は、指定された数の接続を、InactiveConnectionTimeout プロパ ティーによって指定される時間にわたって、開かれた状態に維持します。そ の時間の満了後、キャッシュから接続が除去され、閉じられます。

# デフォルト値

0 (ゼロ)

# DateFormat

## 説明

Campaign は、Campaign マクロ言語を使用する際、または日付列からのデ ータを解釈する際に、DateFormat プロパティーの値を使用することによ り、さまざまな日付形式のデータの解析方法を決定します。

DateFormat プロパティーの値は、Campaign において、このデータ・ソース から受け取る日付について予期されている形式に設定します。その値は、 select において日付表示のためにデータベースによって使用される形式と一 致するものでなければなりません。ほとんどのデータベースの場合、この設 定値は、DateOutputFormatString プロパティーの設定値と同じです。

注: 複数ロケールのフィーチャーを使用する場合は、3 文字で表わされる月 (MMM)、%b (月の省略名)、または %B (月の完全な名前) が含まれる日付

形式を使用しないでください。代わりに、月を表す数値が含まれる区切り形 式または固定形式を使用してください。

データベースで使用する日付形式を判別するには、下記の説明のようにし て、データベースから日付を選択します。

# データベースによる日付の選択

表 49. 日付形式

データベース	正しい設定値を判別する方法
DB2	Campaign サーバーの実行されているマシンからデータベースに接続 します。 Campaign¥bin ディレクトリーにある db2test を使用して 接続してから、以下のコマンドを発行します。
	values current date
	お使いのオペレーティング・システムが db2test ユーティリティー を提供しない場合、cxntest ユーティリティーを使用してターゲッ ト・データベースへの接続をテストしてください。
Netezza®	Campaign サーバーの実行されているマシンからデータベースに接続 します。 Campaign¥bin ディレクトリーにある odbctest を使用し て接続してから、以下のコマンドを発行します。
	CREATE TABLE date_test (f1 DATE); INSERT INTO date_test values (current_date); SELECT f1 FROM date_test;
	日付形式を選択する別の方法は、以下のコマンドを実行することで す。
	<pre>SELECT current_date FROM ANY_TABLE limit 1;</pre>
	ANY_TABLE は、既存のテーブルの名前です。
Oracle	Campaign サーバーの実行されているマシンからデータベースにログ インします。 SQL *Plus を使用して接続し、以下のコマンドを発行 します。
	SELECT sysdate FROM dual
	現在日付が、そのクライアントの NLS_DATE_FORMAT で返されます。
SQL Server	Campaign リスナーの実行されているマシンからデータベースに接続 します。 Campaign¥bin ディレクトリーにある odbctest を使用し て接続してから、以下のコマンドを発行します。
	SELECT getdate()

## 追加の考慮事項

データベース固有の以下の説明に注意してください。

# Teradata

Teradata では、列ごとに日付形式を定義できます。 dateFormat と dateOutputFormatString に加えて、SuffixOnCreateDateField を設定する 必要があります。ここでのシステム・テーブルの設定値と一貫性のあるもの とするには、下記を使用します。

- SuffixOnCreateDateField = FORMAT 'YYYY-MM-DD'
- DateFormat = DELIM\_Y\_M\_D
- DateOutputFormatString = %Y-%m-%d

#### SQL Server

ODBC データ・ソースの構成の中で、「通貨、数値日付、および時刻の出 カ時に地域設定値を使用する」オプションにチェックが付いていない場合、 日付形式をリセットすることはできません。一般に、この設定値をクリアし た状態のままにして、日付形式の構成が言語ごとに変わらないようにしてお くほうが簡単です。

# デフォルト値

DELIM\_Y\_M\_D

# 有効な値

DATE マクロの中で指定される形式のいずれか

# DateOutputFormatString

# 説明

DateOutputFormatString プロパティーは、Campaign が日付 (キャンペーン の開始日付や終了日付など) をデータベースに書き込む際に使用される日付 データ型の形式を指定します。 DateOutputFormatString プロパティーの値 は、データ・ソースにおいてタイプ date の列について予期されている形式 に設定します。ほとんどのデータベースの場合、この設定値は [data source name] > 「DateFormat」プロパティーの設定値と同じです。

DateOutputFormatString プロパティーは、DATE\_FORMAT マクロの中で、 format\_str について指定されている形式のいずれかに設定することができ ます。 DATE\_FORMAT マクロは、2 つの異なる種類の形式を受け付けます。 1 つは ID (DELIM\_M\_D\_Y や DDMMMYYYY など、DATE マクロで受け付けられ るのと同じ)、そしてもう 1 つは書式ストリングです。

DateOutputFormatString プロパティーの値は書式ストリングでなければな りません。 DATE マクロ ID の 1 つにすることはできません。多くの場 合、区切り形式の 1 つを使用します。

以下に説明されている手順に従ってテーブルを作成し、選択した形式で日付 を挿入することにより、正しい形式が選択されているかどうかを検証できま す。

#### DateOutputFormatString を検証する方法

 「データベースによる日付の選択」の表で説明されているようにして、 適切なツールを使用してデータベースに接続します。

日付がデータベースに正しく送信されていることを確認するために、デ ータベース付属の照会ツール (SQL Server の Query Analyzer など) は 使用しないでください。それらの照会ツールは、日付形式を、Campaign が実際にデータベースに送信するものとは異なる形式に変換する可能性 があります。

 テーブルを作成し、選択した形式で日付を挿入します。例えば、 m/%d/%Y を選択した場合、 CREATE TABLE date\_test (F1 DATE) INSERT INTO date\_test VALUES ('03/31/2004')

INSERT コマンドがデータベースにより正常に完了した場合、選択した形 式は正しいということです。

# デフォルト値

%Y/%m/%d

## DateTimeFormat

説明

[data\_source\_name] >「DateTimeFormat」プロパティーの値は、Campaign がデータベースから日時/タイム・スタンプ・データを受け取る際に予期さ れている形式を指定します。これは、select において日時/タイム・スタン プ・データの表示のためにデータベースによって使用される形式に一致して いなければなりません。ほとんどのデータベースの場合、この設定値は、 DateTimeOutputFormatString の設定値と同じです。

多くの場合、DateTimeFormat には、「データベースによる日付の選択」の 表で説明されているようにして DateFormat の値を判別した後、その DateFormat の値の前に DT\_ を付加したものを設定します。

注: 複数ロケールのフィーチャーを使用する場合は、3 文字で表わされる月 (MMM)、%b (月の省略名)、または %B (月の完全な名前) が含まれる日付 形式を使用しないでください。代わりに、月を表す数値が含まれる区切り形 式または固定形式を使用してください。

## デフォルト値

DT\_DELIM\_Y\_M\_D

#### 有効な値

以下の区切り形式のみサポートされています。

- DT\_DELIM\_M\_D
- DT\_DELIM\_M\_D\_Y
- DT\_DELIM\_Y\_M
- DT\_DELIM\_Y\_M\_D
- DT\_DELIM\_M\_Y
- DT\_DELIM\_D\_M
- DT\_DELIM\_D\_M\_Y

# DateTimeOutputFormatString

説明

DateTimeOutputFormatString プロパティーは、Campaign が、キャンペーン の開始日時や終了日実行などの日時データをデータベースに書き込む際に使 用する日時データ型の形式を指定します。 DateTimeOutputFormatString プ ロパティーの値は、データ・ソースにおいてタイプ datetime の列について 予期されている形式に設定します。ほとんどのデータベースの場合、この設 定値は、[data\_source\_name] >「DateTimeFormat」プロパティーの設定値と 同じです。

選択する形式が正しいものであることを検証する方法については、 DateOutputFormatStringの説明を参照してください。

デフォルト値

%Y/%m/%d %H:%M:%S

## DB2NotLoggedInitially

説明

DB2NotLoggedInitially プロパティーは、DB2 の一時テーブルのデータを 設定する際に、Campaign が not logged initially SQL 構文を使用するか どうかを決定します。このプロパティーを TRUE に設定した場合、一時テー ブルへの挿入のロギングは無効になり、その結果、パフォーマンスが向上 し、データベース・リソースの消費量が少なくなります。

not logged initially 構文がサポートされていないバージョンの DB2 を 使用している場合、このプロパティーは FALSE に設定します。

デフォルト値

TRUE

## 有効な値

TRUE | FALSE

## DB2NotLoggedInitiallyUserTables

## 説明

DB2NotLoggedInitiallyUserTables プロパティーは、DB2 のユーザー・テ ーブルへの挿入操作で、Campaign が not logged initially SQL 構文を使 用するかどうかを決定します。このプロパティーを TRUE に設定した場合、 ユーザー・テーブルへの挿入のロギングが無効になり、その結果、パフォー マンスが向上し、データベース・リソースの消費量が少なくなります。

注: TRUE に設定した場合、ユーザー・テーブル・トランザクションが何ら かの理由で失敗すると、そのテーブルは破損した状態になり、ドロップしな ければならなくなります。それまでにそのテーブルに含まれていたデータ は、すべて失われます。

注: DB2NotLoggedInitiallyUserTables プロパティーは、Campaign のシス テム・テーブルについては使用されません。

# デフォルト値

FALSE

# 有効な値

TRUE | FALSE

#### DefaultScale

説明

Campaign がフラット・ファイルかユーザー定義フィールドから数値を保存 するためにデータベース・フィールドを作成するときに、スナップショッ ト・プロセスまたはエクスポート・プロセスを使用する場合、DefaultScale プロパティーが使用されます。

このプロパティーは、データベース・フィールドで精度とスケールに関する 情報が省略されている場合を除いて、データベース表から得られる数値には 使用されません。(精度はフィールドに使用できる総桁数を示します。スケ ールは小数点以下に使用できる桁数を示します。例えば、6.789の精度は 4 で、スケールは 3 です。データベース表から取得した値には、Campaign が フィールドを作成するときに使用する精度とスケールに関する情報が含まれ ます。)

例: フラット・ファイルは精度とスケールを示さないので、作成されるフィ ールドに定義する小数点以下の桁数を指定するには、DefaultScale を使用 できます。以下に例を示します。

- DefaultScale=0 は、小数点以下がないフィールドを作成します (整数部 のみを保存できます)。
- DefaultScale=5 は、小数点以下が最大 5 桁のフィールドを作成します。

DefaultScale に対して設定された値がフィールドの精度を超えた場合は、 それらのフィールドに対して DefaultScale=0 が使用されます。例えば、精 度が 5 で、DefaultScale=6 の場合、値ゼロが使用されます。

# デフォルト値

0 (ゼロ)

#### DefaultTextType

# 説明

DefaultTextType プロパティーは ODBC データ・ソースのためのもので す。このプロパティーは、ソース・テキスト・フィールドのデータ・ソー ス・タイプが異なる場合に、宛先データ・ソース内にテキスト・フィールド を作成する方法を Campaign に指示します。例えば、フラット・ファイルか 別のタイプの DBMS からのソース・テキスト・フィールドである可能性が あります。同じタイプの DBMS からのソース・テキスト・フィールドであ る場合は、このプロパティーは無視され、ソース・テキスト・フィールドの データ型を使用してテキスト・フィールドが宛先データ・ソース内に作成さ れます。

## デフォルト値

VARCHAR

## 有効な値

VARCHAR NVARCHAR

# DeleteAsRecreate

#### 説明

DeleteAsRecreate プロパティーは、TRUNCATE がサポートされておらず、 REPLACE TABLE を実行するように出力処理が構成されている場合に、 Campaign がテーブルをドロップしてから再作成するのか、それとも単にそ のテーブルから削除するのみかを指定します。

値が TRUE の場合、Campaign はテーブルをドロップしてから再作成しま す。

値が FALSE の場合、Campaign はテーブルからの DELETE FROM を実行します。

## デフォルト値

FALSE

# 有効な値

TRUE | FALSE

# DeleteAsTruncate

# 説明

DeleteAsTruncate プロパティーは、REPLACE TABLE を実行するように出力 プロセスが構成されている場合に、Campaign が TRUNCATE TABLE を使用す るのか、それともテーブルから削除するのかを指定します。

値が TRUE の場合、Campaign はテーブルからの TRUNCATE TABLE を実行します。

値が FALSE の場合、Campaign はテーブルからの DELETE FROM を実行します。

デフォルト値は、データベースのタイプに応じて異なります。

## デフォルト値

- TRUE (Netezza、Oracle、および SQLServer の場合)
- FALSE (その他のデータベース・タイプの場合)

#### 有効な値

TRUE | FALSE

# **DisallowTempTableDirectCreate**

# 説明

DisallowTempTableDirectCreate プロパティーは、Campaign がデータを一時テーブルに追加する方法を指定します。

FALSE に設定されている場合、Campaign は、1 つのコマンドを使用することにより、直接的な作成およびデータ設定 SQL 構文を実行します。例えば、CREATE TABLE <table\_name> AS ... (Oracle および Netezza の場合)、および SELECT <field\_names> INTO <table\_name> ... (SQL Server の場合)が使用されます。

TRUE に設定されている場合、Campaign は、一時テーブルを作成した後、複数の別個のコマンドを使用することにより、テーブルからテーブルにデータを直接設定します。

デフォルト値

FALSE

# 有効な値

TRUE | FALSE

# DSN

#### 説明

このプロパティーは、ODBC 構成の中で、この Campaign データ・ソース について割り当てられているデータ・ソース名 (DSN) に設定します。デフ ォルトでは、この値は未定義になっています。

Campaign データ・ソース構成プロパティーを使用することにより、同じ物 理データ・ソースを参照する複数の論理データ・ソースを指定できます。例 えば、同じデータ・ソースについて 2 つのデータ・ソース・プロパティ ー・セットを作成し、1 つは AllowTempTables = TRUE、もう 1 つは AllowTempTables = FALSE とすることが可能です。それらのデータ・ソース のそれぞれは、Campaign の中で異なる名前にすることができますが、それ らが同じ物理データ・ソースを参照する場合、DSN 値は同じになります。

# デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

#### **DSNUsingOSAuthentication**

# 説明

DSNUsingOSAuthentication プロパティーは、Campaign データ・ソースが SQL Server である場合にのみ適用されます。 Windows の認証モードを使 用するように DSN が構成されている場合、値を TRUE に設定します。

#### デフォルト値

FALSE

# 有効な値

TRUE | FALSE

# EnableBaseDimSelfJoin

## 説明

EnableBaseDimSelfJoin プロパティーは、ベース・テーブルとディメンショ ン・テーブルが同じ物理テーブルにマップされ、ベース・テーブルの ID フ ィールド上でディメンションがベース・テーブルに関連付けられていない場 合、Campaign データベースの動作として自己結合操作を実行するかどうか を指定します。

このプロパティーのデフォルトは FALSE であり、Base テーブルとディメン ション・テーブルが同じデータベース表で、かつ関係フィールドが同じ (AcctID から AcctID へ、など) であるなら、Campaign は、結合を実行しな いということを想定します。

#### デフォルト値

FALSE

#### EnableSelectDistinct

説明

EnableSelectDistinct プロパティーは、Campaign の ID の内部リストに対 する重複解消を Campaign サーバーで実行するか、それともデータベースで 実行するかを指定します。

値が TRUE の場合、データベースによって重複解消が実行され、データベー スに対して生成される SQL 照会は以下の形になります (該当する場合)。 SELECT DISTINCT key FROM table

値が FALSE の場合、Campaign サーバーによって重複解消が実行され、デー タベースに対して生成される SQL 照会は以下の形になります。 SELECT key FROM table

以下の場合には、デフォルト値 FALSE のままにしてください。 if:

- ユニーク ID (ベース・テーブルの 1 次キー) に重複がないことが既に保 証済みとなるように、データベースが構成されている場合。
- Campaign アプリケーション・サーバーで重複解消を実行することにより、データベースのリソース消費量/負荷を軽減する場合。

このプロパティーにどんな値を指定するかには関係なく、Campaign では、 必要に応じてキーの重複解消が実行されることが自動的に保証されていま す。このプロパティーは、単に重複解消がどの場所で実行されるか (データ ベース上か、それとも Campaign サーバー上か)を制御するだけです。

#### デフォルト値

TRUE

#### 有効な値

TRUE | FALSE

#### EnableSelectOrderBy

説明

EnableSelectOrderBy プロパティーは、Campaign の ID の内部リストのソートを、Campaign サーバーで実行するか、それともデータベースで実行するかを指定します。

値が TRUE の場合、データベースによってソートが実行され、そのデータベースに対して生成される SQL 照会は以下の形になります。

SELECT <key> FROM ORDER BY <key>

値が FALSE の場合、Campaign サーバーによってソートが実行され、データ ベースに対して生成される SQL 照会は以下の形になります。

SELECT <key>FROM

注: 使用されるオーディエンス・レベルが英語以外のデータベースでのテキ スト・ストリングである場合、このプロパティーは FALSE にのみ設定して ください。その他のすべてのシナリオでは、デフォルト TRUE を使用できま す。

#### デフォルト値

TRUE

## 有効な値

True | False

## **ExcludeFromTableDisplay**

# 説明

ExcludeFromTableDisplay パラメーターを使用すると、Campaign における テーブル・マッピングにおいて、表示されるデータベース表を制限すること ができます。データベースから取り出されるテーブル名の数を少なくするわ けではありません。

指定されたパターンに一致するテーブル名は表示されません。

例えば、このパラメーターの値が sys.\* に設定されている場合、sys.で始 まる名前のテーブルは表示されません。このパラメーターの値では、大/小 文字が区別されることに注意してください。

# デフォルト値

UAC\_\*。一時テーブルと抽出テーブルが除外されます (ExtractTablePrefix プロパティーの値がデフォルト値の場合)

# **ExtractTablePostExecutionSQL**

# 説明

ExtractTablePostExecutionSQL プロパティーは、抽出テーブルの作成とデ ータ設定の直後に実行される、完成された 1 個以上の SQL ステートメン トを指定するために使用します。

ExtractTablePostExecutionSQL で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 50. ExtractTablePostExecutionSQL	で利用可能なトークン
------------------------------------	------------

トークン	説明
<amuser></amuser>	このトークンは、抽出テーブル作成の対象となったフロー チャートに関連する IBM EMM ユーザー名に置換されま す。
<campaigncode></campaigncode>	このトークンは、抽出テーブル作成の対象となったフロー チャートに関連するキャンペーンのコードに置換されま す。
<campaignname></campaignname>	このトークンは、抽出テーブル作成の対象となったフロー チャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<dbuser></dbuser>	このトークンは、抽出テーブルが作成されたデータベース のデータベース・ユーザー名に置換されます。

トークン	説明
<flowchartname></flowchartname>	このトークンは、抽出テーブル作成に関連するフローチャ
	ートの名前に置換されます。
<keycolumns></keycolumns>	このトークンは、抽出テーブルの列名に置換されます。
<tablename></tablename>	このトークンは、抽出テーブルの名前に置換されます。
<user></user>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザー
	の Campaign ユーザー名に置換されます。

表 50. ExtractTablePostExecutionSQL で利用可能なトークン (続き)

# デフォルト値

定義されていません

## 有効な値

有効な SQL ステートメント

# ExtractTablePrefix

## 説明

ExtractTablePrefix プロパティーは、Campaign におけるすべての抽出テー ブル名の前に自動的に付加されるストリングを指定します。このプロパティ ーは、複数のデータ・ソースが同じデータベースを指す場合に便利です。詳 細については、TempTablePrefix の説明を参照してください。

# デフォルト値

UAC\_EX

## ForceNumeric

# 説明

ForceNumeric プロパティーは、Campaign が数値をデータ型 double として 取り出すかどうかを指定します。値が TRUE に設定されている場合、 Campaign は、すべての数値をデータ型 double として取り出します。

# デフォルト値

FALSE

# 有効な値

TRUE | FALSE

# InactiveConnectionTimeout

# 説明

InactiveConnectionTimeout プロパティーは、非アクティブの Campaign デ ータベース接続を開いたままにしておく秒数を指定します。指定した時間が 経過した後、その接続は閉じられます。この値を 0 に設定するとタイムア ウトは無効になり、接続は開いたままにされます。

# デフォルト値

120

## InsertLogSize

## 説明

InsertLogSize プロパティーは、Campaign のスナップショット・プロセス の実行中、ログ・ファイルに新しいエントリーがいつ入力されるかを指定し ます。スナップショット・プロセスによって書き込まれるレコード数が、 InsertLogSize プロパティーで指定される数の倍数に達するたびに、ログ・ エントリーが書き込まれます。それらのログ・エントリーは、実行中のスナ ップショット・プロセスの進行状況を判別するのに役立ちます。この値の設 定値が低すぎると、作成されるログ・ファイルが大きくなる場合がありま す。

# デフォルト値

100000 (10 万レコード)

#### 有効な値

正整数

# **JndiName**

#### 説明

JndiName プロパティーは、Campaign システム・テーブルを構成する際にの み使用されます (カスタマー・テーブルなど、その他のデータ・ソースでは 使用されません)。その値は、アプリケーション・サーバーで定義されてい る Java Naming and Directory Interface (JNDI) データ・ソースに設定します (WebSphere または WebLogic)。

デフォルト値

campaignPartition1DS

#### LoaderCommand

## 説明

LoaderCommand プロパティーは、Campaign においてデータベース・ロー ド・ユーティリティーを呼び出すために発行されるコマンドを指定します。 このパラメーターを設定すると、スナップショット・プロセスの出力ファイ ルのうち、「全レコード置換」設定値で使用されるものすべてについて、 Campaign はデータベース・ローダー・ユーティリティー・モードに入りま す。また、このパラメーターは、Campaign が ID リストを一時テーブル中 にアップロードする際に、データベース・ローダー・ユーティリティー・モ ードを呼び出します。

このプロパティーの有効な値は、データベース・ロード・ユーティリティー を起動するデータベース・ロード・ユーティリティー実行可能ファイルまた はスクリプトの絶対パス名です。スクリプトを使用すると、ロード・ユーテ ィリティーを呼び出す前に、追加のセットアップを実行することができま す。

Contact Optimization は、Campaign と同じ構成設定を使用して、データベース・ロード・ユーティリティーを実装します。データベース・ロード・ユーティリティーを処理するように Campaign を構成する場合には、同じコマンドを使用するように Contact Optimization を構成します。同様に、データベ

ース・ロード・ユーティリティーを処理するように Contact Optimization を 構成する場合には、データベース・ロード・ユーティリティーを処理するよ うに Campaign を構成します。IBM EMM インストール・ディレクトリー 内のルート・ディレクトリーがそれぞれ異なることを想定しています。 Campaign のルート・ディレクトリーは /Campaign で Contact Optimization のルート・ディレクトリーは /ContactOptimization なので、ローダー・コ マンド内の別のコマンドと別のテンプレート・ファイルを指定できます。

ほとんどのデータベース・ロード・ユーティリティーでは、正常に起動する ために複数の引数が必要です。その中には、ロード元となるデータ・ファイ ルと制御ファイル、およびロード先となるデータベースおよびテーブルを指 定するための引数が含まれることがあります。 Campaign では、以下のトー クンがサポートされています。コマンド実行時に、これらは、指定された要 素に置換されます。データベース・ロード・ユーティリティー呼び出しで使 用する正しい構文については、データベース・ロード・ユーティリティーの 文書を参照してください。

このパラメーターは、デフォルトでは未定義です。

LoaderCommand で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 51. LoaderCommand で利用可能なトークン

トークン	説明
<amuser></amuser>	このトークンは、実行中のフローチャートに関連する IBM EMM ユーザー名に置換されます。
<campaigncode></campaigncode>	このトークンは、フローチャートに関連するキャンペーン のコードに置換されます。
<campaignname></campaignname>	このトークンは、実行中のフローチャートに関連するキャ ンペーンの名前に置換されます。
<controlfile></controlfile>	このトークンは、LoaderControlFileTemplate パラメータ ーで指定されるテンプレートに従って Campaign によって 生成される一時制御ファイルの絶対パスとファイル名に置 換されます。
<database></database>	このトークンは、Campaign がデータをロードする先のデー タ・ソースの名前に置換されます。これは、このデータ・ ソースのカテゴリー名で使用されるのと同じデータ・ソー ス名です。
<datafile></datafile>	このトークンは、ロード・プロセスで Campaign によって 作成される一時データ・ファイルの絶対パスとファイル名 に置換されます。このファイルは、Campaign 一時ディレク トリー UNICA_ACTMPDIR に入っています。
<dbuser></dbuser>	このトークンは、データベースのデータベース・ユーザー 名に置換されます。
<dsn></dsn>	このトークンは、DSN プロパティーの値に置換されます。 DSN プロパティーが設定されていない場合、 <dsn> トーク ンは、このデータ・ソースのカテゴリー名で使用されるデ ータ・ソース名に置換されます (<database> トークンの置 換に使用されるのと同じ値)。</database></dsn>
<flowchartname></flowchartname>	このトークンは、実行中のフローチャートの名前に置換されます。

表 51. LoaderCommand で利用可能なトークン (続き)

トークン	説明
<numfields></numfields>	このトークンは、テーブル中のフィールドの数に置換され ます。
<password></password>	このトークンは、現在のフローチャートからデータ・ソー スへの接続のデータベース・パスワードに置換されます。
<table></table>	このトークンは廃止されました。しかし、旧バージョンと の互換性のためにサポートされています。 <tablename> を 参照してください。バージョン 4.6.3 現在、<table> の 代わりにそれが使用されています。</table></tablename>
<tablename></tablename>	このトークンは、Campaign がデータをロードする先のデー タベース表名に置換されます。このは、スナップショッ ト・プロセスからのターゲット・テーブルまたは Campaign によって作成される一時テーブルの名前です。
<user></user>	このトークンは、現在のフローチャート接続からデータ・ ソースへのデータベース・ユーザーに置換されます。

#### デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

#### 有効な値

データベース・ロード・ユーティリティーの実行可能ファイルまたはデータ ベース・ロード・ユーティリティーを起動するスクリプトのいずれかの絶対 パス名

## LoaderCommandForAppend

#### 説明

LoaderCommandForAppend パラメーターは、Campaign においてデータベース 表にレコードを付加するために、データベース・ロード・ユーティリティー を起動するために発行するコマンドを指定します。このパラメーターを設定 すると、スナップショット・プロセスの出力ファイルのうち、「レコード付 加」設定値で使用されるものすべてについて、Campaign はデータベース・ ローダー・ユーティリティー・モードに入ります。

このパラメーターは、データベース・ロード・ユーティリティーの実行可能 ファイルまたはデータベース・ロード・ユーティリティーを起動するスクリ プトの絶対パス名として指定します。スクリプトを使用すると、ロード・ユ ーティリティーを呼び出す前に、追加のセットアップを実行することができ ます。

ほとんどのデータベース・ロード・ユーティリティーでは、正常に起動する ために複数の引数が必要です。その中には、ロード元となるデータ・ファイ ルと制御ファイル、およびロード先となるデータベースとテーブルを指定す るものが含まれることがあります。コマンドが実行されると、指定された要 素によってトークンが置換されます。

データベース・ロード・ユーティリティー呼び出しで使用する正しい構文に ついては、データベース・ロード・ユーティリティーの文書を参照してくだ さい。 このパラメーターは、デフォルトでは未定義です。

LoaderCommandForAppend で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

トークン	説明
<amuser></amuser>	このトークンは、実行中のフローチャートに関連する IBM EMM ユーザー名に置換されます。
<campaigncode></campaigncode>	このトークンは、実行中のフローチャートに関連するキャ ンペーンのコードに置換されます。
<campaignname></campaignname>	このトークンは、実行中のフローチャートに関連するキャ ンペーンの名前に置換されます。
<controlfile></controlfile>	このトークンは、LoaderControlFileTemplate パラメータ ーで指定されるテンプレートに従って Campaign によって 生成される一時制御ファイルの絶対パスとファイル名に置 換されます。
<database></database>	このトークンは、Campaign がデータをロードする先のデー タ・ソースの名前に置換されます。これは、このデータ・ ソースのカテゴリー名で使用されるのと同じデータ・ソー ス名です。
<datafile></datafile>	このトークンは、ロード・プロセスで Campaign によって 作成される一時データ・ファイルの絶対パスとファイル名 に置換されます。このファイルは、Campaign 一時ディレク トリー UNICA_ACTMPDIR に入っています。
<dbuser></dbuser>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベース のデータベース・ユーザー名に置換されます。
<dsn></dsn>	このトークンは、DSN プロパティーの値に置換されます。 DSN プロパティーが設定されていない場合、 <dsn> トーク ンは、このデータ・ソースのカテゴリー名で使用されるデ ータ・ソース名に置換されます (<database> トークンの置 換に使用されるのと同じ値)。</database></dsn>
<flowchartname></flowchartname>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチ ャートの名前に置換されます。
<numfields></numfields>	このトークンは、テーブル中のフィールドの数に置換され ます。
<password></password>	このトークンは、現在のフローチャートからデータ・ソー スへの接続のデータベース・パスワードに置換されます。
<table></table>	このトークンは廃止されました。しかし、旧バージョンと の互換性のためにサポートされています。 <tablename> を 参照してください。バージョン 4.6.3 現在、<table> の 代わりにそれが使用されています。</table></tablename>
<tablename></tablename>	このトークンは、Campaign がデータをロードする先のデー タベース表名に置換されます。このは、スナップショッ ト・プロセスからのターゲット・テーブルまたは Campaign によって作成される一時テーブルの名前です。
<user></user>	このトークンは、現在のフローチャート接続からデータ・ ソースへのデータベース・ユーザーに置換されます。

表 52. LoaderCommandForAppend で利用可能なトークン

デフォルト値

## LoaderControlFileTemplate

説明

LoaderControlFileTemplate プロパティーは、Campaign で構成されている 制御ファイル・テンプレートの絶対パスとファイル名を指定します。このパ ラメーターが設定されている場合、Campaign は、ここに指定するテンプレ ートに基づいて、一時制御ファイルを動的に作成します。この一時制御ファ イルのパスおよび名前は、LoaderCommand パラメーターから利用可能な <CONTROLFILE> トークンから利用可能です。

Campaign をデータベース・ローダー・ユーティリティー・モードで使用す るには、その前に、このパラメーターによって指定される制御ファイル・テ ンプレートを構成することが必要です。制御ファイル・テンプレートでは、 以下のトークンがサポートされています。それらは、Campaign によって一 時制御ファイルが作成される際に動的に置換されます。

制御ファイルで必要な正しい構文については、データベース・ローダー・ユ ーティリティーの文書を参照してください。

このパラメーターは、デフォルトでは未定義です。

LoaderControlFileTemplate で利用可能なトークンとしては、 LoaderCommand プロパティーについて説明されているのと同じものに加え て、アウトバウンド・テーブル内のフィールドごとに 1 回ずつ反復される 以下の特殊トークンがあります。

トークン	説明
<pre><dbcolumnnumber></dbcolumnnumber></pre>	このトークンは、データベース中の列順序に置換されま
	す。
<fieldlength></fieldlength>	このトークンは、データベース中にロードされているフィ
	ールドの長さに置換されます。
<fieldname></fieldname>	このトークンは、データベース中にロードされているフィ
	ールドの名前に置換されます。
<fieldnumber></fieldnumber>	このトークンは、データベース中にロードされているフィ
	ールドの番号に置換されます。
<fieldtype></fieldtype>	このトークンは、リテラル CHAR() に置換されます。 ()
	の中により、このフィールドの長さが指定されます。デー
	タベースでフィールド・タイプ CHAR が認識されていない
	場合、フィールド・タイプとして適切なテキストを手動で
	指定し、 <fieldlength> トークンを使用することができま</fieldlength>
	す。例えば、SQLSVR および SQL2000 の場合、
	SQLCHAR( <fieldlength>) を使用します。</fieldlength>
<nativetype></nativetype>	このトークンは、このフィールドのロード先である実際の
	データベースのタイプに置換されます。

表 53. LoaderControlFileTemplate で利用可能なトークン

表 53. LoaderControlFileTemplate で利用可能なトークン (続き)

トークン	説明
<xyz></xyz>	このトークンは、指定された文字を、データベース中にロードされているフィールドのうち、最後を除くすべてに配置します。典型的な使用方法としては、<,> があります。これは、最後を除くすべてのフィールドについてコンマを繰り返します。
<~xyz>	このトークンは、指定された文字を、反復の最後の行にの み配置します。
xyz	このトークンは、指定された文字 (不等号括弧 < > を含 む)を、すべての行に配置します。

#### デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

#### LoaderControlFileTemplateForAppend

# 説明

LoaderControlFileTemplateForAppend プロパティーは、Campaign において 構成されている制御ファイル・テンプレートの絶対パスとファイル名を指定 します。このパラメーターが設定されている場合、Campaign は、ここで指 定されているテンプレートに基づいて一時制御ファイルを動的に作成しま す。この一時制御ファイルのパスおよび名前は、LoaderCommandForAppend プロパティーから利用可能な <CONTROLFILE> トークンから利用可能です。

Campaign をデータベース・ローダー・ユーティリティー・モードで使用す るには、その前に、このパラメーターによって指定される制御ファイル・テ ンプレートを構成することが必要です。制御ファイル・テンプレートでは、 以下のトークンがサポートされています。それらは、Campaign によって一 時制御ファイルが作成される際に動的に置換されます。

制御ファイルで必要な正しい構文については、データベース・ローダー・ユ ーティリティーの文書を参照してください。制御ファイル・テンプレートで 利用可能なトークンは、LoaderControlFileTemplate プロパティーのものと 同じです。

このパラメーターは、デフォルトでは未定義です。

#### デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

# LoaderDelimiter

# 説明

LoaderDelimiter プロパティーは、一時データ・ファイルが固定幅フラット・ファイルか、それとも区切りフラット・ファイルかを指定します。また、区切りファイルの場合には、Campaign が区切り文字として使用する文字を指定します。

値が未定義の場合、Campaign は、固定幅フラット・ファイルとして一時デ ータ・ファイルを作成します。 値を指定する場合、それは、ローダーが呼び出された時点で、空であると認 識されているテーブルのデータを設定するために使用されます。 Campaign は、このプロパティーの値を区切り文字として使用することにより、区切り フラット・ファイルとして一時データ・ファイルを作成します。

このプロパティーは、デフォルトでは未定義です。

## デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

#### 有効な値

文字(必要なら二重引用符で囲むことが可能)。

#### LoaderDelimiterAtEnd

# 説明

一部の外部ロード・ユーティリティーでは、データ・ファイルを区切る必要 があります。また、各行は区切り文字で終わる必要があります。この要件を 満たすためには、LoaderDelimiterAtEnd の値を TRUE に設定することによ り、ローダーが起動して、空として認識されているテーブルのデータを設定 する際に、Campaign が各行の末尾に区切り文字を使用するようにします。

FALSE

#### デフォルト値

FALSE

## 有効な値

TRUE | FALSE

## LoaderDelimiterAtEndForAppend

## 説明

一部の外部ロード・ユーティリティーでは、データ・ファイルを区切る必要 があります。また、各行は区切り文字で終わる必要があります。この要件を 満たすためには、LoaderDelimiterAtEndForAppendの値を TRUE に設定する ことにより、ローダーが起動して、空として認識されてはいないテーブルの データを設定する際に、Campaign が各行の末尾に区切り文字を使用するよ うにします。

デフォルト値

FALSE

## 有効な値

TRUE | FALSE

# LoaderDelimiterForAppend

#### 説明

LoaderDelimiterForAppend プロパティーは、Campaign の一時データ・ファ イルが固定幅フラット・ファイルであるか、それとも区切りフラット・ファ イルであるかを指定します。また、区切りファイルの場合には、区切りとし て使用する文字または文字の集合を指定します。 値が未定義の場合、Campaign は、固定幅フラット・ファイルとして一時デ ータ・ファイルを作成します。

値を指定する場合、それは、ローダーが呼び出された時点で、空であるとは 認識されていないテーブルのデータを設定するために使用されます。 Campaign は、このプロパティーの値を区切り文字として使用することによ り、区切りフラット・ファイルとして一時データ・ファイルを作成します。

このプロパティーは、デフォルトでは未定義です。

# デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

## 有効な値

文字 (必要なら二重引用符で囲むことが可能)。

# LoaderNULLValueInDelimitedData

# 構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|dataSourcename

# 説明

このプロパティーは、データベース・ローダーの区切りデータ内の NULL 値をサポートします (特に Netezza)。NULL 値を表わす、列のストリングを 入力してください。

# デフォルト値

null

# LoaderUseLocaleDP

## 説明

LoaderUseLocaleDP プロパティーは、Campaign が、データベース・ロード・ユーティリティーによってロードされるファイルに数値を書き込む際に、小数点としてロケール固有の記号を使用するかどうかを指定します。

ピリオド (.) を小数点として指定するには、この値を FALSE に設定します。

ロケールにふさわしい小数点記号を使用することを指定するには、この値を TRUE に設定します。

# デフォルト値

FALSE

## 有効な値

TRUE | FALSE

# MaxItemsInList

#### 説明

Campaign が SQL 中の単一リスト (WHERE 節の IN 演算子の後の値リス トなど) の中に含めることのできる項目の最大数を指定します。

# デフォルト値

Oracle の場合のみ 1000。その他のすべてのデータベースでは 0 (無制限)。

#### 有効な値

整数

# MaxQueryThreads

## 説明

MaxQueryThreads プロパティーは、Campaign の単一のフローチャートか ら、各データベース・ソースに対して同時実行可能な照会の数の上限を指定 します。

Campaign は、独立した複数のスレッドを使用してデータベース照会を実行 します。 Campaign のプロセスは並列実行されるため、単一のデータ・ソー スに対して複数の照会を同時に実行することが少なくありません。並列実行 する照会の数がこのプロパティーで指定される値を超えると、Campaign サ ーバーは、同時実行照会の数を、自動的にこの値まで制限します。

最大値は無制限です。 maxReuseThreads プロパティーがゼロでない値に設 定されている場合、それは MaxQueryThreads の値以上でなければなりませ ん。

デフォルト値

データベースによって異なる

# MaxRowFetchRecords

## 説明

選択された ID 数が MaxRowFetchRecords プロパティーによって指定される 値より小さい場合、Campaign は、一度に 1 つずつ、それぞれ別個の SQL 照会で ID をデータベースに渡します。この処理には、非常に長い時間がか かる場合があります。選択された ID 数がこのパラメーターで指定される値 より大きい場合、Campaign は、一時テーブルを使用するか (データベー ス・ソースに対して可能な場合)、またはテーブルから、不要な値を除くす べての値をプルダウンします。

パフォーマンス上の理由から、この数をできるだけ低い値に保つのが最善で す。

# デフォルト値

100

#### MaxTempTableJoinPctSelectAll

# 説明

照会が発行されると Campaign は、その照会の結果として、ID の正確なリ ストを内容とする一時テーブルをデータベース上に作成します。すべてのレ コードを選択する追加照会がデータベースに対して発行される場合、 MaxTempTableJoinPctSelectAll プロパティーによって、一時テーブルとの 結合が実行されるかどうかが指定されます。 一時テーブルの相対サイズ (パーセントとして指定) が

MaxTempTableJoinPctSelectAll プロパティーの値より大きい場合、結合は 実行されません。まずすべてのレコードが選択された後、不要なレコードが 破棄されます。

一時テーブルの相対サイズ (パーセントとして指定) が

MaxTempTableJoinPctSelectAll プロパティーの値以下の場合、まず一時テ ーブルとの結合が実行された後、結果としての ID がサーバーに取り出され ます。

このプロパティーは、AllowTempTables プロパティーの値が TRUE に設定さ れている場合にのみ適用されます。 useInDbOptimization プロパティーが YES に設定されている場合、このプロパティーは無視されます。

# デフォルト値

90

#### 有効な値

0-100 の範囲の整数。値が 0 の場合、それは、一時テーブルの結合が決し て使用されないことを意味します。値が 100 の場合、それは、一時テーブ ルのサイズには関係なく常にテーブルの結合が使用されることを意味しま す。

#### 例

MaxTempTableJoinPctSelectAll が 90 に設定されているとします。まず、 勘定残高 (Accnt\_balance) が \$1,000 より大きいカスタマー (CustID) を、 データベース表 (Customer) から選択するとします。

対応する SQL 式として Select プロセスで生成されるものは、下記のよう になります。

SELECT CustID FROM Customer
WHERE Accnt\_balance > 1000

Select プロセスでは、合計テーブル・サイズ 1,000,000 のうちの 10% に当 たる 100,000 個の ID を取り出す可能性があります。一時テーブルが可能 になっている場合、Campaign は、選択された ID (TempID) をデータベース 中の一時テーブル (Temp\_table) に書き込みます。

次に、選択された ID (CustID) と現在の残高 (Accnt\_balance) のスナップ ショットを取るとします。一時テーブル (Temp\_table) の相対サイズは 90% (MaxTempTableJoinPctSelectAll) より小さいため、まず一時テーブルとの 結合が実行されます。スナップショット・プロセスによって生成される SQL 式は、以下のようになります。

SELECT CustID, Accnt\_balance FROM Customer, Temp\_table WHERE CustID = TempID

Select プロセスで取り出すものが 90% を超える場合、それより後のスナップショット・プロセスでは、すべてのレコードが取り出され、最初の ID セットとそれらが突き合わされて、不要なものが破棄されます。

スナップショット・プロセスによって生成される SQL 式は、以下のように なります。

SELECT CustID, Accnt\_balance FROM Customer

## MaxTempTableJoinPctWithCondition

説明

照会が発行されると Campaign は、その照会の結果として、ID の正確なリ ストを内容とする一時テーブルをデータベース上に作成します。制限条件を 伴うレコード選択の追加照会がデータベースに対して発行される場合、 MaxTempTableJoinPctWithCondition プロパティーは、一時テーブルとの結 合を実行するかどうかを指定します。

一時テーブルの相対サイズ (パーセントとして指定) が

MaxTempTableJoinPctWithCondition の値より大きい場合、結合は実行され ません。これにより、不要なデータベースでのオーバーヘッドが回避されま す。その場合、データベースに対する照会が発行され、結果として ID のリ ストが取り出された後、サーバー・メモリー内のリストに一致する不要なレ コードが破棄されます。

一時テーブルの相対サイズ (パーセントとして指定) が MaxTempTableJoinPctWithCondition の値以下の場合、まず一時テーブルと の結合が実行された後、結果として ID がサーバーに取り出されます。

このプロパティーは、AllowTempTables プロパティーの値が TRUE に設定されている場合にのみ適用されます。

デフォルト値

20

#### 有効な値

0-100 の範囲の整数。値が 0 の場合、それは、一時テーブルの結合が決し て使用されないことを意味します。値が 100 の場合、それは、一時テーブ ルのサイズには関係なく常にテーブルの結合が使用されることを意味しま す。

## MinReqForLoaderCommand

## 説明

このプロパティーは、バルク・ローダーを使用するためのしきい値を設定す るために使用します。入力セル中のユニーク ID の数がここで定義される値 を超えると、Campaign は、LoaderCommand パラメーターに割り当てられて いるスクリプトを呼び出します。このプロパティーの値は、書き込まれるレ コードの数を表わすものではありません。

このプロパティーが構成されていない場合、Campaign では、値としてデフ ォルト値 (ゼロ) が想定されます。このプロパティーが構成されてはいる が、値として設定されているのが負の値または非整数値である場合、 Campaign は値がゼロであると想定します。

#### デフォルト値

0 (ゼロ)

#### 有効な値

整数

## MinReqForLoaderCommandForAppend

説明

このプロパティーは、バルク・ローダーを使用するためのしきい値を設定す るために使用します。入力セル中のユニーク ID の数がここで定義される値 を超えると、Campaign は、LoaderCommandForAppend パラメーターに割り当 てられているスクリプトを呼び出します。このプロパティーの値は、書き込 まれるレコードの数を表わすものではありません。

このプロパティーが構成されていない場合、Campaign では、値としてデフ ォルト値 (ゼロ) が想定されます。このプロパティーが構成されてはいる が、値として設定されているのが負の値または非整数値である場合、 Campaign は値がゼロであると想定します。

デフォルト値

0 (ゼロ)

有効な値

正整数

## **NumberOfRetries**

## 説明

NumberOfRetries プロパティーは、データベース操作での障害発生時に Campaign が自動的に再試行する回数を指定します。 Campaign は、この回 数だけ、データベースに対する照会を自動的に再サブミットします。この回 数を超えると、データベース・エラーまたは障害が報告されます。

デフォルト値

0 (ゼロ)

## **ODBCTableTypes**

# 説明

このプロパティーはデフォルトでは空です。これは、現在サポートされてい るすべてのデータ・ソースに適しています。

デフォルト値

定義されていません

# 有効な値

(空)

# **ODBCUnicode**

#### 説明

ODBCUnicode プロパティーは、Campaign ODBC 呼び出しにおいて使用され るエンコード方式のタイプを指定します。これは、ODBC データ・ソース でのみ使用されるものであり、Oracle または DB2 のネイティブ接続で使用 される場合は無視されます。 重要: このプロパティーが UTF-8 または UCS-2 に設定されている場合、デ ータ・ソースの StringEncoding 値は UTF-8 または WIDEUTF-8 に設定され ていなければなりません。そうでない場合、ODBCUnicode プロパティーの設 定値は無視されます。

#### デフォルト値

disabled

# 有効な値

このプロパティーで可能な値は、以下のとおりです。

- Disabled Campaign は、ANSI ODBC 呼び出しを使用します。
- UTF-8 Campaign は、Unicode ODBC 呼び出しを使用し、SQLWCHAR が 1 バイトであると想定します。これは DataDirect ODBC ドライバー と互換です。
- UCS-2 Campaign は、Unicode ODBC 呼び出しを使用し、SQLWCHAR が 2 バイトであると想定します。これは Windows および unixODBC ODBC ドライバーと互換です。

# ODBCv2

## 説明

ODBCv2 プロパティーは、Campaign においてデータ・ソースのためにどの ODBC API 仕様を使用するかを指定するために使用します。

デフォルト値は FALSE であり、その場合、Campaign は v3 API 仕様を使 用します。 TRUE に設定した場合、Campaign は v2 API 仕様を使用しま す。 ODBC v3 API 仕様がサポートされていないデータ・ソースでは、 ODBCv2 プロパティーを TRUE に設定します。

ODBCv2 プロパティーが TRUE に設定されている場合、Campaign において ODBC Unicode API はサポートされず、ODBCUnicode プロパティーに関し て disabled 以外の値は認識されなくなります。

# デフォルト値

FALSE

# 有効な値

TRUE | FALSE

# **OwnerForTableDisplay**

説明 このプロパティーは、IBM Campaign でのテーブル・マッピングの表示を、 指定したスキーマのテーブルに制限する場合に使用します。例えば、スキー マ「dbo」のテーブルを指定するには、OwnerForTableDisplay=dbo と設定し ます。

## デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

## PadTextWithSpaces

#### 説明

PadTextWithSpaces プロパティーが TRUE に設定されている場合、Campaign は、ストリングがデータベース・フィールドと同じ幅になるまで、テキスト 値にスペースを埋め込みます。

# デフォルト値

FALSE

# 有効な値

TRUE | FALSE

# **PostExtractTableCreateRunScript**

# 説明

PostExtractTableCreateRunScript プロパティーは、抽出テーブルが作成されて、そのデータが設定された後に Campaign が実行するスクリプトまたは 実行可能ファイルを指定するために使用します。

PostExtractTableCreateRunScript で利用可能なトークンは、以下のとおり です。

表 54. PostExtractTableCreateRunScript で利用可能なトークン

トークン	説明
<dbuser></dbuser>	このトークンは、抽出テーブルが作成されたデータベース のデータベース・ユーザー名に置換されます。
<amuser></amuser>	このトークンは、抽出テーブル作成の対象となったフロー チャートに関連する IBM EMM ユーザー名に置換されま す。
<campaignname></campaignname>	このトークンは、抽出テーブル作成の対象となったフロー チャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<campaigncode></campaigncode>	このトークンは、抽出テーブル作成の対象となったフロー チャートに関連するキャンペーンのコードに置換されま す。
<flowchartname></flowchartname>	このトークンは、抽出テーブル作成に関連するフローチャ ートの名前に置換されます。
<password></password>	このトークンは、現在のフローチャートからデータ・ソー スへの接続のデータベース・パスワードに置換されます。
<keycolumns></keycolumns>	このトークンは、抽出テーブルの列名に置換されます。

# デフォルト値

定義されていません

#### 有効な値

シェル・スクリプトまたは実行可能ファイルのファイル名

## **PostSegmentTableCreateRunScript**

# 説明

Segment 一時テーブルの作成とデータ設定の後、Campaign が実行するスク リプトまたは実行可能ファイルを指定します。 PostSegmentTableCreateRunScript で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

ンは、セグメント一時テーブルが作成されたデ
のデータベース・ユーザー名に置換されます。
ンは、セグメントー時テーブルの作成対象とな チャートに関連する IBM EMM ユーザー名に す。
ンは、セグメントー時テーブルの作成対象とな チャートに関連するキャンペーンの名前に置換
ンは、セグメントー時テーブルの作成対象とな チャートに関連するキャンペーンのコードに置 。
ンは、セグメントー時テーブルの作成に関連す ャートの名前に置換されます。
ンは、現在のフローチャートからデータ・ソー のデータベース・パスワードに置換されます。
ンは、セグメント一時テーブルの列名に置換さ

表 55. PostSegmentTableCreateRunScript で利用可能なトークン

# デフォルト値

定義されていません

## 有効な値

スクリプトまたは実行可能ファイルのファイル名

# PostSnapshotTableCreateRunScript

# 説明

PostSnapshotTableCreateRunScript プロパティーは、スナップショット・ テーブルが作成され、そのデータが設定された後に Campaign が実行するス クリプトまたは実行可能ファイルを指定するために使用します。

PostSnapshotTableCreateRunScript で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 56. PostSnapshotTableCreateRunScript で利用可能なトークン

トークン	説明
<dbuser></dbuser>	このトークンは、スナップショット・テーブルが作成され たデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されま す。
<amuser></amuser>	このトークンは、スナップショット・テーブルの作成対象 となったフローチャートに関連する IBM EMM ユーザー 名に置換されます。

表 56. PostSnapshotTableCreateRunScript で利用可能なトークン (続き)

トークン	説明
<campaignname></campaignname>	このトークンは、スナップショット・テーブル作成の対象 となったフローチャートに関連するキャンペーンの名前に 置換されます。
<campaigncode></campaigncode>	このトークンは、スナップショット・テーブルの作成対象 となったフローチャートに関連するキャンペーンのコード に置換されます。
<flowchartname></flowchartname>	このトークンは、スナップショット・テーブル作成に関連 するフローチャートの名前に置換されます。
<password></password>	このトークンは、現在のフローチャートからデータ・ソー スへの接続のデータベース・パスワードに置換されます。
<keycolumns></keycolumns>	このトークンは、スナップショット・テーブルの列名に置換されます。

デフォルト値

定義されていません

#### 有効な値

シェル・スクリプトまたは実行可能ファイルのファイル名

# **PostTempTableCreateRunScript**

# 説明

PostTempTableCreateRunScript プロパティーは、ユーザー・データ・ソー スまたはシステム・テーブル・データベースの中で一時テーブルが作成さ れ、データが設定された後、Campaign が実行するスクリプトまたは実行可 能ファイルを指定するために使用します。

PostTempTableCreateRunScript で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 57. PostTempTableCreateRunScript で利用可能なトークン

トークン	説明
<dbuser></dbuser>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベースは、コーザータに異換されます
	のサータペース・ユーリー石に直換されます。
<amuser></amuser>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー トに関連する IBM EMM ユーザー名に置換されます。
<campaignname></campaignname>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー トに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<campaigncode></campaigncode>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー トに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<flowchartname></flowchartname>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチ ャートの名前に置換されます。
<password></password>	このトークンは、現在のフローチャートからデータ・ソー スへの接続のデータベース・パスワードに置換されます。
<keycolumns></keycolumns>	このトークンは、一時テーブルの列名に置換されます。

デフォルト値が定義されていません。

# PostUserTableCreateRunScript

説明

ユーザー・テーブルが作成されてデータが設定された後に Campaign が実行 するスクリプトまたは実行可能ファイルを指定します。

PostUserTableCreateRunScript で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

トークン	説明
<dbuser></dbuser>	このトークンは、ユーザー・テーブルが作成されたデータ ベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<amuser></amuser>	このトークンは、ユーザー・テーブル作成の対象となった フローチャートに関連する IBM EMM ユーザー名に置換 されます。
<campaignname></campaignname>	このトークンは、ユーザー・テーブル作成の対象となった フローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換され ます。
<campaigncode></campaigncode>	このトークンは、ユーザー・テーブル作成の対象となった フローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換さ れます。
<flowchartname></flowchartname>	このトークンは、ユーザー・テーブル作成に関連するフロ ーチャートの名前に置換されます。
<password></password>	このトークンは、現在のフローチャートからデータ・ソー スへの接続のデータベース・パスワードに置換されます。
<keycolumns></keycolumns>	このトークンは、ユーザー・テーブルの列名に置換されま す。

表 58. PostUserTableCreateRunScript で利用可能なトークン

## デフォルト値

定義されていません

#### 有効な値

スクリプトまたは実行可能ファイルのファイル名

# PrefixOnSelectSQL

説明

PrefixOnSelectSQL プロパティーは、Campaign によって生成される SELECT SQL 式のすべてに対して、自動的にその先頭に付加するストリングを指定 するために使用します。

このプロパティーは Campaign により生成された SQL にのみ適用され、選 択プロセスで使用される「未加工 SQL」式の SQL には適用されません。

このプロパティーは、構文チェックなしで自動的に SELECT SQL 式に追加 されます。このプロパティーを使用する場合は、有効な式であることを確認 してください。
このプロパティーは、デフォルトでは未定義です。

PrefixOnSelectSQL で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 59. PrefixOnSelectSQL で利用可能なトークン

トークン	説明
<amuser></amuser>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー トに関連する IBM EMM ユーザー名に置換されます。
<campaigncode></campaigncode>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー トに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<campaignname></campaignname>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー トに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<dbuser></dbuser>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベース のデータベース・ユーザー名に置換されます。
<flowchartname></flowchartname>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチ ャートの名前に置換されます。
<user></user>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザー の Campaign ユーザー名に置換されます。

#### デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

# QueryThreadSleep

#### 説明

QueryThreadSleep プロパティーは、Campaign サーバー・プロセス (UNICA\_ACSVR)の CPU 使用率に影響します。値が TRUE に設定されている 場合、Campaign サーバー・プロセスが照会の完了をチェックするために使 用するスレッドは、チェックとチェックの間でスリープします。値が FALSE の場合、Campaign サーバー・プロセスは、照会の完了を連続的にチェック します。

### デフォルト値

TRUE

### ReaderLogSize

# 説明

ReaderLogSize パラメーターは、Campaign がデータベースからデータを読 む際に、ログ・ファイル中の新しいエントリーをいつ作成するかを定義しま す。データベースから読み取られるレコード数が、このパラメーターによっ て定義される数の倍数に達するたびに、ログ・エントリーがログ・ファイル に書き込まれます。

このパラメーターは、プロセスの実行の進行状況を判別するのに役立ちま す。この値の設定値が低すぎると、作成されるログ・ファイルが大きくなる 場合があります。

# デフォルト値

1000000 (100 万レコード)

# 有効な値

整数

# **SegmentTempTablePrefix**

# 説明

このデータ・ソースにおいて、CreateSeg プロセスによって作成されるセグ メント・テーブルの接頭部を設定します。このプロパティーは、複数のデー タ・ソースが同じデータベースを指す場合に便利です。詳細については、 TempTablePrefixの説明を参照してください。

# デフォルト値

UACS

# ShareConnection

説明

ShareConnection プロパティーは使用されなくなり、そのデフォルト値である FALSE のままにしておく必要があります。

# デフォルト値

FALSE

# 有効な値

FALSE

# SQLOnConnect

# 説明

SQLOnConnect プロパティーは、各データベース接続の直後に Campaign が 実行する、完成された 1 個の SQL ステートメントを定義します。

このプロパティーによって生成される SQL ステートメントは、構文チェックなしで自動的にデータベースに渡されます。このプロパティーを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。

このプロパティーは、デフォルトでは未定義です。

SQLOnConnect で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 60. SQLOnConnect で利用可能なトークン

トークン	説明
<amuser></amuser>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー トに関連する IBM EMM ユーザー名に置換されます。
<campaigncode></campaigncode>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー トに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<campaignname></campaignname>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー トに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<dbuser></dbuser>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベース のデータベース・ユーザー名に置換されます。

表 60. SQLOnConnect で利用可能なトークン (続き)

トークン	説明
<flowchartname></flowchartname>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチ
	ャートの名前に置換されます。
<user></user>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザー
	の Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値が定義されていません。

#### StringEncoding

説明

StringEncoding プロパティーは、データベースの文字エンコードを指定し ます。 Campaign がデータベースからデータを取り出す際、指定されたエン コード方式から、Campaign の内部エンコード方式 (UTF-8) にデータが変換 されます。 Campaign がデータベースに照会を送信する際、内部エンコード 方式 Campaign (UTF-8) から、StringEncoding プロパティーで指定される エンコード方式に文字データが変換されます。

このプロパティーの値は、データベース・クライアントで使用されるエンコ ード方式に一致していなければなりません。

デフォルトとして未定義になっているのでない限り、この値をブランクのままにはしないでください。

ASCII データを使用する場合、この値は UTF-8 に設定します。

データベース・クライアントのエンコード方式が UTF-8 の場合、この値の ための望ましい設定値は WIDEUTF-8 です。 WIDE-UTF-8 設定値は、データ ベース・クライアントが UTF-8 に設定されている場合にのみ有効です。

partitions > partition[n] > dataSources > data\_source\_name > ODBCUnicode プロパティーを使用する場合、StringEncoding プロパティー は UTF-8 または WIDEUTF-8 のいずれかに設定されます。そうでない場合、ODBCUnicode プロパティーの設定値は無視されます。

サポートされているエンコード方式のリストについては、「Campaign 管理 者ガイド」の『Campaign での文字エンコード』を参照してください。

**重要:** 重要な例外および追加の考慮事項については、以下のセクションを参照してください。

#### デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

#### データベース固有の考慮事項

このセクションでは、DB2、SQL Server、または Teradata データベースの 適切な値を設定する方法について説明します。

DB2

DB2 データベース・コード・ページおよびコード・セットを識別します。 ローカライズされた環境の場合、DB2 データベースの構成を以下のように する必要があります。

- データベース・コード・セット = UTF-8
- データベース・コード・ページ = 1208

Campaign の StringEncoding プロパティー値を DB2 データベース・コード・セット値に設定します。

DB2CODEPAGE DB2 環境変数を DB2 データベース・コード・ページの値に 設定します。

 Windows の場合:以下の行を Campaign リスナーの始動スクリプト (<CAMPAIGN HOME>¥bin¥cmpServer.bat) に追加します。

db2set DB2C0DEPAGE=1208

 UNIX の場合: DB2 を開始した後、システム管理者は次のコマンドを DB2 インスタンス・ユーザーから入力する必要があります。

\$ db2set DB2C0DEPAGE=1208

その後、以下のコマンドを実行し、Campaign リスナーを開始します。

./rc.unica ac start

この設定は DB2 のすべてのデータ・ソースに影響します。さらに、実行中の他のプログラムにも影響する可能性があります。

#### SQL Server

SQL Server の場合、iconv エンコード方式の代わりにコード・ページを使用します。SQL Server データベースにおける StringEncoding プロパティーの適切な値を判別するには、サーバーのオペレーティング・システムの地域設定値に対応するコード・ページを検索してください。

例えば、コード・ページ 932 (日本語 Shift-JIS) を使用するには、 StringEncoding=CP932

#### Teradata

Teradata の場合、デフォルトの動作の一部をオーバーライドする必要があり ます。 Teradata では列ごとに文字エンコードの指定がサポートされていま すが、Campaign でサポートされているのはデータ・ソースごとのエンコー ドのみです。 Teradata ODBC ドライバーのバグのため、Campaign で UTF-8 を使用することはできません。 Teradata では、ログインごとにデフ ォルトの文字エンコードが設定されます。これは、Windows において ODBC データ・ソース構成に含まれるパラメーター、または UNIX プラッ トフォームにおいて odbc.ini に含まれるパラメーターを使用することによ り、以下のようにしてオーバーライドすることができます。

#### CharacterSet=UTF8

Teradata テーブルのデフォルトのエンコード方式は LATIN です。 Teradata の組み込みエンコード方式はごくわずかのみですが、ユーザー定義エンコード方式がサポートされています。

StringEncoding プロパティーのデフォルト値は ASCII です。

**重要:** UTF-8 データベースの関係する多くの状況では、WIDEUTF-8 疑似エン コード方式を使用してください。それについては、WIDEUTF-8 に関するセ クションで説明されています。

#### WIDEUTF-8

通常、Campaign は、その内部エンコード方式 UTF-8 と、データベースのエ ンコード方式の間のトランスコーディングをそれ自身で処理します。データ ベースのエンコードが UTF-8 の場合、StringEncoding の値として UTF-8 を指定することができ (SQLServer を除く)、トランスコーディングは不要で す。従来、データベース内の英語以外のデータに Campaign がアクセスする ための可能なモデルは、それらのみでした。

Campaign のバージョン 7.0 では、StringEncoding プロパティーのための 値として、WIDEUTF-8 という新しいデータベース・エンコード方式が導入さ れています。このエンコード方式を使用することにより Campaign では、デ ータベース・クライアントとの通信に UTF-8 を使用しながら、UTF-8 と実 際のデータベースのエンコード方式との間のトランスコーディングの作業を クライアント側で実行することが可能です。変換後のテキストに十分に対応 できるよう、テーブル列マッピングの幅を変更するため、このように拡張さ れたバージョンの UTF-8 が必要になっています。

注: WIDEUTF-8 疑似エンコード方式を使用できるのは、データベース構成の中のみです。その他の目的では使用しないでください。

注: Oracle では、クライアントによるトランスコーディングはサポートされていません。

# SuffixOnAllOtherSQL

#### 説明

SuffixOnAllOtherSQL プロパティーは、Campaign によって生成されるあら ゆる SQL 式のうち、SuffixOnInsertSQL、SuffixOnSelectSQL、 SuffixOnTempTableCreation、SuffixOnUserTableCreation、そして SuffixOnUserBaseTableCreationのどのプロパティーによってもカバーされ ないものに自動的に付加するストリングを指定します。

このプロパティーは Campaign により生成された SQL にのみ適用され、選 択プロセスで使用される「未加工 SQL」式の SQL には適用されません。

SuffixOnAllOtherSQL は、Campaign によって以下のタイプの式が生成され る際に使用されます。

TRUNCATE TABLE table DROP TABLE table DELETE FROM table [WHERE ...] UPDATE table SET ...

このプロパティーは、構文を確認せずに SQL 式に自動的に追加されます。 このパラメーターを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。 このプロパティーは、デフォルトでは未定義です。

SuffixOnAllOtherSQL で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 61. Suffix On All Other SQL で利用可能なトークン

トークン	説明
<amuser></amuser>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー
	トに関連する IBM EMM ユーサー名に直換されます。
<campaigncode></campaigncode>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー
	トに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<campaignname></campaignname>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー
	トに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<dbuser></dbuser>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベース
	のデータベース・ユーザー名に置換されます。
<flowchartname></flowchartname>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチ
	ャートの名前に置換されます。
<user></user>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザー
	の Campaign ユーザー名に置換されます。

# デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

# SuffixOnCreateDateField

#### 説明

SuffixOnCreateDateField プロパティーは、CREATE TABLE SQL ステートメントで、DATE フィールドのすべてに Campaign によって自動的に付加されるストリングを指定します。

例えば、このプロパティーを以下のように設定することができます。 SuffixOnCreateDateField = FORMAT 'YYYY-MM-DD'

このプロパティーが未定義 (デフォルト) の場合、CREATE TABLE コマンドは 未変更のままです。

注: DateFormat プロパティーの説明に含まれる表を参照してください。

#### デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

# SuffixOnInsertSQL

説明

SuffixOnInsertSQL プロパティーは、Campaign によって生成されるすべて の INSERT SQL 式に自動的に付加されるストリングを指定します。このプ ロパティーは Campaign により生成された SQL にのみ適用され、選択プロ セスで使用される「未加工 SQL」式の SQL には適用されません。

SuffixOnInsertSQL は、Campaign によって以下のタイプの式が生成される際に使用されます。

INSERT INTO table ...

このプロパティーは、構文を確認せずに SQL 式に自動的に追加されます。 このプロパティーを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。

このプロパティーは、デフォルトでは未定義です。

SuffixOnInsertSQL で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 62. SuffixOnInsertSQL で利用可能なトークン

トークン	説明
<amuser></amuser>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー トに関連する IBM FMM ユーザー名に置換されます。
<campaigncode></campaigncode>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<campaignname></campaignname>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー トに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<dbuser></dbuser>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベース のデータベース・ユーザー名に置換されます。
<flowchartname></flowchartname>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチ ャートの名前に置換されます。
<user></user>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザー の Campaign ユーザー名に置換されます。

#### デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

# SuffixOnSelectSQL

### 説明

SuffixOnSelectSQL プロパティーは、Campaign によって生成されるすべて の SELECT SQL 式に自動的に付加されるストリングを指定します。このプ ロパティーは Campaign により生成された SQL にのみ適用され、選択プロ セスで使用される「未加工 SQL」式の SQL には適用されません。

このプロパティーは、構文を確認せずに SQL 式に自動的に追加されます。 このプロパティーを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。

このプロパティーは、デフォルトでは未定義です。

SuffixOnSelectSQL で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 63. SuffixOnSelectSQL で利用可能なトークン

トークン	説明
<amuser></amuser>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー
	トに関連する IBM EMM ユーザー名に置換されます。
<campaigncode></campaigncode>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー
	トに関連するキャンペーンのコードに置換されます。

表63.	SuffixOnSelectSQL	で利用可能な	トージ	ウン	(続き)
------	-------------------	--------	-----	----	------

トークン	説明
<campaignname></campaignname>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー トに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<dbuser></dbuser>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベース のデータベース・ユーザー名に置換されます。
<flowchartname></flowchartname>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチ ャートの名前に置換されます。
<user></user>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザー の Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値が定義されていません。

#### SuffixOnTempTableCreation

### 説明

SuffixOnTempTableCreation プロパティーは、一時テーブルが作成される際 に Campaign によって生成される SQL 式に自動的に付加されるストリング を指定するために使用します。このプロパティーは Campaign により生成さ れた SQL にのみ適用され、選択プロセスで使用される「未加工 SQL」式 の SQL には適用されません。このプロパティーを使用するためには、 AllowTempTables プロパティーが TRUE に設定されていなければなりませ ん。

テーブル名および列名はキャンペーン実行中に動的に生成されるため、この SQL ステートメントでそれらを置換するためのトークン (<TABLENAME> お よび <KEYCOLUMNS>) を使用することが望ましい場合があるかもしれませ ん。

このプロパティーは、構文を確認せずに SQL 式に自動的に追加されます。 このプロパティーを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。

このプロパティーは、デフォルトでは未定義です。

注: Oracle データベースの場合、一時テーブル作成 SQL 式のうちテーブル 名の後に構成パラメーターが付加されます。

SuffixOnTempTableCreation で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 64. SuffixOnTempTableCreation で利用可能なトークン

トークン	説明
<amuser></amuser>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー トに関連する IBM EMM ユーザー名に置換されます。
<campaigncode></campaigncode>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー トに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<campaignname></campaignname>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー トに関連するキャンペーンの名前に置換されます。

トークン	説明
<dbuser></dbuser>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベース
	のテータベース・ユーサー名に置換されます。
<flowchartname></flowchartname>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチ
	ャートの名前に置換されます。
<keycolumns></keycolumns>	このトークンは、一時テーブルの列名に置換されます。
<tablename></tablename>	このトークンは、一時テーブルの名前に置換されます。
<user></user>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザー
	の Campaign ユーザー名に置換されます。

表 64. SuffixOnTempTableCreation で利用可能なトークン (続き)

デフォルト値が定義されていません。

# SuffixOnSegmentTableCreation

# 説明

セグメントー時テーブルの作成時に Campaign によって生成される SQL 式 に自動的に付加されるストリングを指定します。

SuffixOnSegmentTableCreation で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 65. SuffixOnSegmentTableCreation で利用可能なトークン

トークン	説明
<amuser></amuser>	このトークンは、セグメント一時テーブルの作成対象となったフローチャートに関連する IBM EMM ユーザー名に
	置換されます。
<campaigncode></campaigncode>	このトークンは、セグメント一時テーブルの作成対象とな
	ったフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置
	換されます。
<campaignname></campaignname>	このトークンは、セグメントー時テーブルの作成対象とな
	ったフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換
	されます。
<dbuser></dbuser>	このトークンは、セグメント一時テーブルが作成されたデ
	ータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<flowchartname></flowchartname>	このトークンは、セグメントー時テーブルの作成に関連す
	るフローチャートの名前に置換されます。
<keycolumns></keycolumns>	このトークンは、セグメント一時テーブルの列名に置換さ
	れます。
<tablename></tablename>	このトークンは、セグメント一時テーブル名によって置き
	換えられます。
<user></user>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザー
	の Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

定義されていません

# 有効な値

有効な SQL

# SuffixOnSnapshotTableCreation

### 説明

SuffixOnSnapshotTableCreation プロパティーは、スナップショット・テー ブルの作成時に Campaign によって生成される SQL 式に自動的に付加され るストリングを指定するために使用されます。

SuffixOnSnapshotTableCreation で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

トークン	説明
<amuser></amuser>	このトークンは、スナップショット・テーブルの作成対象 となったフローチャートに関連する IBM EMM ユーザー 名に置換されます。
<campaigncode></campaigncode>	このトークンは、スナップショット・テーブルの作成対象 となったフローチャートに関連するキャンペーンのコード に置換されます。
<campaignname></campaignname>	このトークンは、スナップショット・テーブル作成の対象 となったフローチャートに関連するキャンペーンの名前に 置換されます。
<dbuser></dbuser>	このトークンは、スナップショット・テーブルが作成され たデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されま す。
<flowchartname></flowchartname>	このトークンは、スナップショット・テーブル作成に関連 するフローチャートの名前に置換されます。
<keycolumns></keycolumns>	このトークンは、スナップショット・テーブルの列名に置換されます。
<tablename></tablename>	このトークンは、スナップショット・テーブルの名前に置 換されます。
<user></user>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザー の Campaign ユーザー名に置換されます。

表 66. SuffixOnSnapshotTableCreation で利用可能なトークン

# デフォルト値

定義されていません

# 有効な値

有効な SQL

# SuffixOnExtractTableCreation

# 説明

SuffixOnExtractTableCreation プロパティーは、抽出テーブルの作成時に Campaign によって生成される SQL 式に自動的に付加されるストリングを 指定するために使用します。 SuffixOnExtractTableCreation で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

トークン	説明
<amuser></amuser>	このトークンは、抽出テーブル作成の対象となったフロー チャートに関連する IBM EMM ユーザー名に置換されま す。
<campaigncode></campaigncode>	このトークンは、抽出テーブル作成の対象となったフロー チャートに関連するキャンペーンのコードに置換されま す。
<campaignname></campaignname>	このトークンは、抽出テーブル作成の対象となったフロー チャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<dbuser></dbuser>	このトークンは、抽出テーブルが作成されたデータベース のデータベース・ユーザー名に置換されます。
<flowchartname></flowchartname>	このトークンは、抽出テーブル作成に関連するフローチャ ートの名前に置換されます。
<keycolumns></keycolumns>	このトークンは、抽出テーブルの列名に置換されます。
<tablename></tablename>	このトークンは、抽出テーブルの名前に置換されます。
<user></user>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザー の Campaign ユーザー名に置換されます。

表 67. SuffixOnExtractTableCreation で利用可能なトークン

#### デフォルト値

定義されていません

### 有効な値

有効な SQL

### SuffixOnUserBaseTableCreation

#### 説明

SuffixOnUserBaseTableCreation プロパティーは、ユーザーがベース・テー ブルを作成する際に (抽出プロセスなど)、Campaign によって生成される SQL 式に自動的に付加されるストリングを指定するために使用します。こ のプロパティーは Campaign により生成された SQL にのみ適用され、選択 プロセスで使用される「未加工 SQL」式の SQL には適用されません。

テーブル名および列名はキャンペーン実行中に動的に生成されるため、この SQL ステートメントでそれらを置換するためのトークン (<TABLENAME> お よび <KEYCOLUMNS>) を使用することが望ましい場合があるかもしれませ ん。

このプロパティーは、構文を確認せずに SQL 式に自動的に追加されます。 このプロパティーを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。

このプロパティーは、デフォルトでは未定義です。

SuffixOnUserBaseTableCreation で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 68. SuffixOnUserBaseTableCreation で利用可能なトークン

トークン	説明
<amuser></amuser>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー
	トに関連する IBM EMM ユーザー名に置換されます。
<campaigncode></campaigncode>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー
	トに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<campaignname></campaignname>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー
	トに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<dbuser></dbuser>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベース
	のデータベース・ユーザー名に置換されます。
<flowchartname></flowchartname>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチ
	ャートの名前に置換されます。
<keycolumns></keycolumns>	このトークンは、一時テーブルの列名に置換されます。
<tablename></tablename>	このトークンは、一時テーブルの名前に置換されます。
<user></user>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザー
	の Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値が定義されていません。

# SuffixOnUserTableCreation

# 説明

SuffixOnUserTableCreation プロパティーは、ユーザーが一般のテーブルを 作成する際に (スナップショット・プロセスなど)、Campaign によって生成 される SQL 式に自動的に付加されるストリングを指定するために使用しま す。このプロパティーは Campaign により生成された SQL にのみ適用さ れ、選択プロセスで使用される「未加工 SQL」式の SQL には適用されま せん。

このプロパティーは、構文を確認せずに SQL 式に自動的に追加されます。 このプロパティーを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。

このプロパティーは、デフォルトでは未定義です。

SuffixOnUserTableCreation で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

トークン	説明
<amuser></amuser>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー トに関連する IBM EMM ユーザー名に置換されます。
<campaigncode></campaigncode>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー トに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<campaignname></campaignname>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー トに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<dbuser></dbuser>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベース のデータベース・ユーザー名に置換されます。

表 69. SuffixOnUserTableCreation で利用可能なトークン

表 69. SuffixOnUserTableCreation で利用可能なトークン (続き)

トークン	説明
<flowchartname></flowchartname>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチ
	ャートの名前に置換されます。
<tablename></tablename>	このトークンは、一時テーブルの名前に置換されます。

デフォルト値が定義されていません。

### SystemTableSchema

説明

Campaign システム・テーブルで使用されるスキーマを指定します。

デフォルト値はブランクです。このパラメーターは、UA\_SYSTEM\_TABLES デ ータ・ソースにのみ関係するものです。

UA\_SYSTEM\_TABLES データ・ソースに複数のスキーマが含まれるという場合 (例えば、複数のグループで使用される Oracle データベースの場合) 以外 は、この値をブランクのままにしてください。 (この文脈で「スキーマ」と いう語は、X.Y という形式の「修飾」テーブル名の先頭部分のことを指しま す (dbo.UA\_Folder など)。ただし、この形式のうち X はスキーマ、Y は修 飾なしのテーブル名です。この構文に関しては、Campaign でサポートされ ているさまざまな異なるデータベース・システムの間で異なる用語が使用さ れています。)

システム・テーブル・データベースの中に複数のスキーマが存在する場合、 この値は、Campaign システム・テーブル作成時のスキーマの名前に設定し てください。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

#### **TempTablePostExecutionSQL**

説明

TempTablePostExecutionSQL プロパティーは、ユーザー・データ・ソースま たはシステム・テーブル・データベースでの一時テーブルの作成直後に Campaign によって実行される、完成された 1 つの SQL ステートメントを 指定するために使用します。データ・ソースで一時テーブルを作成できるよ うにするには、AllowTempTables プロパティーを TRUE に設定する必要があ ります。

テーブル名および列名はキャンペーン実行中に動的に生成されるため、この SQL ステートメントでそれらを置換するためのトークン (<TABLENAME> お よび <KEYCOLUMNS>) を使用することが望ましい場合があるかもしれませ ん。

このプロパティーは、構文を確認せずに SQL 式に自動的に追加されます。 このプロパティーを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。 TempTablePostExecutionSQL プロパティーでは、セミコロンが、複数の SQL ステートメントを実行するための区切り文字として扱われます。 SQL ステ ートメントにセミコロンが含まれていて、その全体を 1 つのステートメン トとして実行するには、そのセミコロンの直前にエスケープ文字としてバッ クスラッシュ (円記号)を使用してください。

注: TempTablePostExecutionSQL プロパティーでストアード・プロシージャ ーを使用している場合は、データベースに対して正しい構文が使用されてい ることを確認してください。以下に示すのは、Oracle においてストアード・ プロシージャーを呼び出す例ですが、セミコロンのエスケープにバックスラ ッシュ (円記号) を使用しています。 begin dbms\_stats.collect\_table\_stats()¥; end¥;

TempTablePostExecutionSQL で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 70. TempTablePostExecutionSQL で利用可能なトークン

トークン	説明
<amuser></amuser>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー トに関連する IBM EMM ユーザー名に置換されます。
<campaigncode></campaigncode>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー トに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<campaignname></campaignname>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー トに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<dbuser></dbuser>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベース のデータベース・ユーザー名に置換されます。
<flowchartname></flowchartname>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチ ャートの名前に置換されます。
<keycolumns></keycolumns>	このトークンは、一時テーブルの列名に置換されます。
<tablename></tablename>	このトークンは、一時テーブルの名前に置換されます。
<user></user>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザー の Campaign ユーザー名に置換されます。

## デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

### TableListSQL

### 説明

TableListSQL プロパティーは、マップに使用可能なテーブルのリストにシ ノニムを含めるために使用する SQL 照会を指定するために使用します。

デフォルト値はブランクです。データ・ソースが SQL Server の場合に、返 されるテーブル・スキーマの中でシノニムをマップできるようにするために は、このプロパティーが必須です。その他のデータ・ソースにおいて、標準 的な方法 (ODBC 呼び出しやネイティブ接続など)を使用して取り出したテ ーブル・スキーマ情報の代わりに (またはそれに加えて)、特定の SQL 照会 を使用する場合、このプロパティーはオプションです。 注: キャンペーンにおいて SQL Server のシノニムが正常に動作するには、 ここで説明されているこのプロパティーの設定に加えて、

UseSQLToRetrieveSchema プロパティーを TRUE に設定する必要があります。

有効な SQL 照会でこのプロパティーを設定する場合、Campaign により、 マッピング用のテーブルのリストを取り出すための SQL 照会が発行されま す。その照会から 1 個の列が返される場合、それは名前の列として扱われ ます。その照会から 2 個の列が返される場合、最初の列は所有者の名前の 列であると想定され、2 番目の列はテーブル名の列であると見なされます。

SQL 照会がアスタリスク (\*) で始まっていない場合、Campaign は、通常の 方法で (ODBC 呼び出しやネイティブ接続などにより) 取り出されるテーブ ルのリストとこのリストをマージします。

SQL 照会がアスタリスク (\*) で始まる場合、その SQL から返されるリストは、通常のリストにマージされるのではなく、それを置き換える ものとなります。

デフォルト値

なし

### 有効な値

有効な SQL 照会

#### 例

データ・ソースが SQL Server の場合、通常の環境では、キャンペーンで使 用される ODBC API 呼び出しから返されるのはテーブルとビューのリスト であり、シノニムではありません。シノニムのリストも含めるには、 TableListSQL を以下の例に示すように設定します。

select B.name AS oName, A.name AS tName
from sys.synonyms A LEFT OUTER JOIN sys.schemas B
on A.schema\_id = B.schema\_id ORDER BY 1, 2

ODBC API をまったく使用しないでテーブル、ビュー、およびシノニムの リストを取り出すには、TableListSQL を以下の例に示すように設定しま す。

\*select B.name AS oName, A.name AS tName from
 (select name, schema\_id from sys.synonyms UNION
 select name, schema\_id from sys.tables UNION select name,
 schema\_id from sys.views) A LEFT OUTER JOIN sys.schemas B on
 A.schema id = B.schema id ORDER BY 1, 2

データ・ソースが Oracle の場合は、ALL\_OBJECTS ビューを調べるネイテ ィブ接続方式を使用してデータを取り出す代わりに、以下のような照会を使 用することにより、テーブル、ビュー、およびシノニムのリストを取り出す ことができます。

\*select OWNER, TABLE\_NAME from (select OWNER, TABLE\_NAME from ALL\_TABLES UNION select OWNER, SYNONYM\_NAME AS TABLE\_NAME FROM ALL\_SYNONYMS UNION select OWNER, VIEW\_NAME AS TABLE\_NAME from ALL\_VIEWS) A ORDER BY 1, 2

## UOSQLOnConnect

説明

SQLOnConnect プロパティーは、各データベース接続の直後に Campaign が 実行する、完成された 1 個の SQL ステートメントを定義します。 UOSQLOnConnect プロパティーはこれによく似ていますが、それは特に Contact Optimization 適用されます。

このプロパティーによって生成される SQL ステートメントは、構文チェックなしで自動的にデータベースに渡されます。このプロパティーを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。

このプロパティーは、デフォルトでは未定義です。

UOSQLOnConnect で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 71. UOSQLOnConnect で利用可能なトークン

トークン	説明
<amuser></amuser>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー トに関連する IBM FMM ユーザータに置換されます
	「「に肉座する IDM EMIM ユーリー 石に直狭されより。
<campaigncode></campaigncode>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー
	トに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<campaignname></campaignname>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャー
	トに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<dbuser></dbuser>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベース
	のデータベース・ユーザー名に置換されます。
<flowchartname></flowchartname>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチ
	ャートの名前に置換されます。
<user></user>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザー
	の Campaign ユーザー名に置換されます。

#### デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

# UseSQLToRetrieveSchema

### 説明

このデータ・ソースにおいてテーブル・スキーマとして使用するスキーマを 取り出すには、ODBC やネイティブ API 呼び出しではなく、SQL 照会を 使用します。

このプロパティーのデフォルト値は FALSE です。これは、Campaign が標 準的な方法 (ODBC やネイティブ接続など) を使用してスキーマを取り出す よう指示するものです。このプロパティーを TRUE に設定すると、 Campaign は、テーブル・スキーマを取り出すために select \* from のような SQL 照会を準備することになります。

これは、各データ・ソース固有の利点を提供するものとなります。例えば、 一部のデータ・ソース (Netezza、SQL Server) の場合、デフォルトの ODBC またはネイティブ接続では SQL のシノニム (create synonym 構文を使用 して定義されるデータベース・オブジェクトの代替名) のレポートが正しく 作成されません。このプロパティーを TRUE に設定することにより、 Campaign 内でのデータ・マッピングのための SQL シノニムが取り出され ます。

以下のリストは、いくつかのデータ・ソースに対するこのプロパティーの設 定値の動作を説明したものです。

- Netezza においてシノニムのサポートを可能にするには、このプロパティーを TRUE に設定する必要があります。このプロパティーを TRUE に設定すると、Campaign は、テーブル・スキーマを取り出すための SQL 照会を準備することになります。 Netezza データ・ソースにおいて、シノニム・サポートのために、それ以外の設定や値は必要ありません。
- SQL Server の場合、シノニムのサポートを可能にするには、このプロパティーを TRUE に設定し、かつ、このデータ・ソースの TableListSQL プロパティーに有効な SQL を入力する必要があります。詳しくは、TableListSQL プロパティーの説明を参照してください。
- Oracle データ・ソースの場合にこのプロパティーを TRUE に設定する と、Campaign はテーブル・スキーマを取り出すための SQL 照会を準備 することになります。結果セットでは NUMBER フィールド (精度/有効桁数 の指定がないため Campaign では問題が発生する)が、NUMBER(38) とし て識別されるため、問題発生を回避できます。
- その他のデータ・ソースの場合、このプロパティーを TRUE に設定する ことにより、前述のデフォルトの SQL select 照会を使用したり、または デフォルトとして使用される ODBC API やネイティブ接続の代わりに (またはそれらに加えて)使用する有効な SQL を TableListSQL プロパテ ィーで指定したりすることができます。詳しくは、TableListSQL プロパ ティーの説明を参照してください。

# デフォルト値

FALSE

### 有効な値

TRUE | FALSE

#### 例

Campaign で Netezza または SQL Server シノニムが正常に動作するために は、

UseSQLToRetrieveSchema=TRUE

# **UserBaseTablePostExecutionSQL**

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|dataSourcename

### 説明

このプロパティーは、「新規マップ・テーブル」 > 「ベース・レコード・ テーブル」 > 「選択したデータベースに新規テーブル作成」に書き込むよ うにプロセス・ボックスが構成されている場合に呼び出されます。このプロ パティーは、(作成プロセスやマッピング・プロセス中に) テーブルが作成さ れる場合のみ呼び出されます。このプロパティーは、プロセス・ボックスの 実行時には呼び出されません。 このプロパティーは、構文を確認せずに SQL 式に自動的に追加されます。 このプロパティーを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。

このプロパティーでは、セミコロンが、複数の SQL ステートメントを実行 するための区切り文字として扱われます。SQL ステートメントにセミコロ ンが含まれていて、その全体を 1 つのステートメントとして実行するに は、そのセミコロンの直前にエスケープ文字としてバックスラッシュ (円記 号)を使用してください。

注: このプロパティーでストアード・プロシージャーを使用している場合 は、データベースに正しい構文が使用されていることを確認してください。 以下に示すのは、Oracle においてストアード・プロシージャーを呼び出す例 ですが、セミコロンのエスケープにバックスラッシュ (円記号)を使用して います。 begin dbms stats.collect table stats()¥; end¥;

トークンを使用して、この SQL ステートメントの <TABLENAME> を置換で きます。これは、キャンペーンの実行時に名前が動的に生成されるためで す。使用できるトークンについては、UserTablePostExecutionSQL を参照し てください。

#### **UserTablePostExecutionSQL**

# 説明

このプロパティーは、ユーザー・データ・ソースまたはシステム・テーブ ル・データベースでのユーザー・テーブルの作成直後に IBM Campaign に よって実行される、完成された 1 つの SQL ステートメントを指定するた めに使用します。このプロパティーは、プロセス・ボックスが以下のいずれ かのテーブルに書き込む場合に呼び出されます。

- 「新規マップ・テーブル」 > 「その他のテーブル」 > 「選択したデー タソースに新規テーブル作成 (Create New Table in Selected Datasource)」。プロパティーは、作成またはマッピングのプロセス中に 呼び出されます。スナップショットの実行時には呼び出されません。
- 「新規マップ・テーブル」 > 「ディメンション・テーブル」 > 「選択 したデータベースに新規テーブル作成」: このプロパティーは作成/マッピ ング・プロセス中に呼び出されます。スナップショットの実行時には呼び 出されません。
- 「データベース表」: このプロパティーは、プロセス・ボックスの実行時 に呼び出されます。

テーブル名および列名はキャンペーン実行中に動的に生成されるため、この SQL ステートメントでそれらを置換するためのトークン (<TABLENAME> お よび <KEYCOLUMNS>) を使用することが望ましい場合があるかもしれませ ん。

このプロパティーは、構文を確認せずに SQL 式に自動的に追加されます。 このプロパティーを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。 このプロパティーでは、セミコロンが、複数の SQL ステートメントを実行 するための区切り文字として扱われます。SQL ステートメントにセミコロ ンが含まれていて、その全体を 1 つのステートメントとして実行するに は、そのセミコロンの直前にエスケープ文字としてバックスラッシュ (円記 号)を使用してください。

注: このプロパティーでストアード・プロシージャーを使用している場合 は、データベースに正しい構文が使用されていることを確認してください。 以下に示すのは、Oracle においてストアード・プロシージャーを呼び出す例 ですが、セミコロンのエスケープにバックスラッシュ (円記号)を使用して います。 begin dbms stats.collect table stats()¥; end¥;

UserTablePostExecutionSQL で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

トークン	説明
<amuser></amuser>	このトークンは、ユーザー・テーブル作成の対象となった フローチャートに関連する IBM EMM ユーザー名に置換 されます。
<campaigncode></campaigncode>	このトークンは、ユーザー・テーブル作成の対象となった フローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換さ れます。
<campaignname></campaignname>	このトークンは、ユーザー・テーブル作成の対象となった フローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換され ます。
<dbuser></dbuser>	このトークンは、ユーザー・テーブルが作成されたデータ ベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<flowchartname></flowchartname>	このトークンは、ユーザー・テーブル作成に関連するフロ ーチャートの名前に置換されます。
<keycolumns></keycolumns>	このトークンは、ユーザー・テーブルの列名に置換されます。
<tablename></tablename>	このトークンは、ユーザー・テーブルの名前に置換されます。
<user></user>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザー の Campaign ユーザー名に置換されます。

表 72. UserTablePostExecutionSQL で利用可能なトークン

### デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

#### UseTempTablePool

説明

UseTempTablePool が FALSE に設定されている場合、一時テーブルはドロッ プされ、フローチャートが実行されるたびに毎回再作成されます。プロパテ ィーが TRUE に設定されている場合、一時テーブルがデータベースからドロ ップされません。一時テーブルは、切り捨てられた上で、Campaign によっ て維持されているテーブルのプールから再利用されます。一時テーブル・プ ールは、フローチャートを何度も再実行するような環境で最も効果的です (設計フェーズやテスト・フェーズなど)。

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

# SegmentTablePostExecutionSQL

### 説明

SegmentTablePostExecutionSQL プロパティーは、セグメントー時テーブル が作成され、データが設定された後に Campaign によって実行される、完成 された 1 つの SQL ステートメントを指定するために使用されます。

SegmentTablePostExecutionSQL で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 73. SegmentTablePostExecutionSQL で利用可能なトークン

トークン	説明
<amuser></amuser>	このトークンは、セグメント一時テーブルの作成対象とな ったフローチャートに関連する IBM EMM ユーザー名に 置換されます。
<campaigncode></campaigncode>	このトークンは、セグメントー時テーブルの作成対象となったフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<campaignname></campaignname>	このトークンは、セグメントー時テーブルの作成対象となったフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<dbuser></dbuser>	このトークンは、セグメントー時テーブルが作成されたデ ータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<flowchartname></flowchartname>	このトークンは、セグメントー時テーブルの作成に関連す るフローチャートの名前に置換されます。
<keycolumns></keycolumns>	このトークンは、セグメントー時テーブルの列名に置換さ れます。
<tablename></tablename>	このトークンは、セグメントー時テーブル名によって置き 換えられます。
<user></user>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザー の Campaign ユーザー名に置換されます。

# デフォルト値

定義されていません

#### 有効な値

有効な SQL ステートメント

# SnapshotTablePostExecutionSQL

### 説明

SnapshotTablePostExecutionSQL プロパティーは、スナップショット・テーブルが作成され、データが設定された直後に実行される、完成された1個

以上の SQL ステートメントを指定するために使用します。このプロパティーは、「スナップショット」プロセス・ボックスが抽出テーブルに書き出す 場合のみ呼び出されます。

SnapshotTablePostExecutionSQL で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

トークン	説明
<amuser></amuser>	このトークンは、スナップショット・テーブルの作成対象 となったフローチャートに関連する IBM EMM ユーザー 名に置換されます。
<campaigncode></campaigncode>	このトークンは、スナップショット・テーブルの作成対象 となったフローチャートに関連するキャンペーンのコード に置換されます。
<campaignname></campaignname>	このトークンは、スナップショット・テーブル作成の対象 となったフローチャートに関連するキャンペーンの名前に 置換されます。
<dbuser></dbuser>	このトークンは、スナップショット・テーブルが作成され たデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されま す。
<flowchartname></flowchartname>	このトークンは、スナップショット・テーブル作成に関連 するフローチャートの名前に置換されます。
<keycolumns></keycolumns>	このトークンは、スナップショット・テーブルの列名に置 換されます。
<tablename></tablename>	このトークンは、スナップショット・テーブルの名前に置 換されます。
<user></user>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザー の Campaign ユーザー名に置換されます。

表 74. SnapshotTablePostExecutionSQL で利用可能なトークン

# デフォルト値

定義されていません

### 有効な値

有効な SQL ステートメント

# **TempTablePrefix**

# 説明

このプロパティーは、Campaign によって作成されるすべての一時テーブル の名前の先頭に、自動的に付加されるストリングを指定します。このプロパ ティーは、一時テーブルの識別や管理に役立ちます。また、このプロパティ ーを使用することによって、一時テーブルを特定の場所に作成することがで きます。

例えば、ユーザー・トークンがスキーマと一致している場合、次のように設 定できます。

TempTablePrefix="<USER>"

そして、すべての一時テーブルが、データ・ソースに接続されているあらゆ るユーザーのスキーマで作成されます。

複数のデータ・ソースが同じデータベースを指す場合は、フローチャートの 実行時にエラーが発生して検索結果が正しくないものになります。さまざま なプロセス・ボックスやフローチャートが同じ一時テーブルを使用するから です。この状態は、抽出プロセス・テーブルや戦略的セグメント・テーブル の場合も発生します。この状態を避けるには、TempTablePrefix (抽出テー ブルの場合は ExtractTablePrefix)を使用して、データ・ソースごとに異 なるスキーマを定義します。この場合、名前の先頭部分が確実に違うので、 必ず違うテーブル名になります。

例えば、各データ・ソースに UAC\_DS1 や UAC\_DS2 などの一意の TempTablePrefix を付けて、データ・ソースごとに一時テーブルを区別しま す。データ・ソース・スキーマを共有する場合も、これと同じ概念が適用さ れます。例えば、以下の接頭部を使用すると、同じデータベースに一時テー ブルを書き込む両方のデータ・ソースで一時テーブルが一意になります。

DS1 TempTablePreFix: schemaA.UAC\_DS1

DS2 TempTablePreFix: schemaA.UAC\_DS2

TempTablePrefix で使用できるトークンを以下の表に記載します。

**注:** トークンの解決後の最終一時テーブル名が、データベース固有の名前長の制限を超えていないことを確認する必要があります。

注: TempTablePrefix に使用されるトークンで、データベース表名のために 有効でない文字があれば、それらはすべてスキップされます。トークンの解 決後、結果として得られる一時テーブル接頭部は、先頭の文字が英字でなけ ればならず、残りは英数字または下線文字でなければなりません。正しくな い文字があれば、警告が出されることなく除去されます。結果として得られ る一時テーブル接頭部の先頭文字が英字でない場合、Campaign は接頭部の 前に U の文字を付加します。

トークン	説明
<amuser></amuser>	このトークンは、一時テーブルが作成された
	フローチャートに関連する IBM EMM ユー
	ザー名に置換されます。
<campaigncode></campaigncode>	このトークンは、一時テーブルが作成された
	フローチャートに関連するキャンペーンのコ
	ードに置換されます。
<campaignname></campaignname>	このトークンは、一時テーブルが作成された
	フローチャートに関連するキャンペーンの名
	前に置換されます。
<dbuser></dbuser>	このトークンは、一時テーブルが作成された
	データベースのデータベース・ユーザー名に
	置換されます。
<flowchartname></flowchartname>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連
	するフローチャートの名前に置換されます。

トークン	説明
<user></user>	このトークンは、フローチャートを実行して
	いるユーザーの Campaign ユーザー名に置換
	されます。

UAC

### **TempTablePreTruncateExecutionSQL**

### 説明

注: このプロパティーは、Teradata データ・ソースによってのみサポートされています。サポートされているその他のどのデータベースにおいても、このプロパティーを設定しないようにしてください。

TempTablePreTruncateExecutionSQL プロパティーは、一時テーブル切り捨 ての前に実行する SQL 照会を指定するために使用します。指定する照会 は、TempTablePostExecutionSQL プロパティーで指定される SQL ステート メントの効果を打ち消すために使用できます。

例えば、TempTablePostExecutionSQL プロパティーを使用することにより、 索引作成のための以下の SQL ステートメントを指定できます。

CREATE INDEX <TABLENAME>Idx\_1 (<KEYCOLUMNS>) ON <TABLENAME>

その上で、TempTablePreTruncateExecutionSQL プロパティーに、索引をドロップするための以下の照会を指定します。

DROP INDEX <TABLENAME>Idx\_1 ON <TABLENAME>

### デフォルト値

定義されていません

### 有効な値

有効な SQL 照会

### **TempTablePreTruncateRunScript**

# 説明

注: このプロパティーは、Teradata データ・ソースによってのみサポートされています。サポートされているその他のどのデータベースにおいても、このプロパティーを設定しないようにしてください。

TempTablePreTruncateRunScript プロパティーは、一時テーブルの切り捨て の前に実行するスクリプトまたは実行可能ファイルを指定するために使用し ます。指定するスクリプトは、PostTempTableCreateRunScript プロパティ ーで指定される SQL ステートメントの効果を打ち消すために使用すること ができます。

例えば、PostTempTableCreateRunScript プロパティーを使用することにより、索引作成のための以下の SQL ステートメントを含むスクリプトを指定 することができます。 CREATE INDEX <TABLENAME>Idx\_1 (<KEYCOLUMNS>) ON <TABLENAME>

その上で、TempTablePreTruncateRunScript プロパティーに、索引をドロッ プするための以下のステートメントを含む別のスクリプトを指定します。

DROP INDEX <TABLENAME>Idx\_1 ON <TABLENAME>

#### デフォルト値

定義されていません

#### 有効な値

シェル・スクリプトまたは実行可能ファイルのファイル名

# **TeradataDeleteBeforeDrop**

説明

TeradataDeleteBeforeDrop パラメーターは、Teradata データ・ソースにの み適用されます。これは、テーブルをドロップする前にレコードを削除する かどうかを指定します。

テーブルをドロップする前に、テーブルからすべてのレコードを削除する場合は、この値を TRUE に設定します。

**注:** 何らかの理由で Campaign がレコードを削除できなかった場合、テーブ ルはドロップされません。

最初にすべてのレコードを削除することなく、テーブルをドロップする場合は、この値を FALSE に設定します。

## デフォルト値

TRUE

#### **TruncateSQL**

#### 説明

TruncateSQL プロパティーは、DB2 データ・ソースで使用可能であり、テ ーブルの切り捨てのための代替 SQL を指定するために使用します。このプ ロパティーは、DeleteAsTruncate が TRUE に設定されている場合にのみ適 用されます。 DeleteAsTruncate が TRUE に設定されている場合、このプ ロパティーにカスタム SQL が指定されているなら、テーブルの切り捨てに は、それが使用されます。このプロパティーが設定されていない場合、 Campaign は、TRUNCATE TABLE <TABLENAME> の構文を使用します。

このパラメーターは、デフォルトでは未定義です。

TruncateSQL で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 75. TruncateSQL で利用可能なトークン

トークン	説明
<tablename></tablename>	このトークンは、Campaign が切り捨てるデータベース表名
	に置換されます。

#### デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

# タイプ

説明

```
partitions > partition[n] > dataSources > [data_source_name] > type
プロパティーは、このデータ・ソースのデータベース・タイプを指定しま
す。
```

### デフォルト値

デフォルト値は、データ・ソース構成を作成するために使用されるデータベ ース・テンプレートに応じて異なります。

# 有効な値

- システム・テーブルで有効な値は、以下のとおりです。
- SQLServer
- DB2
- DB20DBC
- ORACLE
- ORACLE8
- ORACLE9
- カスタマー・テーブルで有効な値には、さらに以下のものが含まれます。
- TERADATA
- NETEZZA

# UseExceptForMerge

### 説明

Campaign によりマージ・プロセスまたはセグメント・プロセスでの排他操 作が実行される場合、デフォルトとして次のような「NOT EXISTS」の構文 が使用されます。

SELECT IncludeTable.ID FROM IncludeTable WHERE NOT EXISTS (SELECT \* FROM ExcludeTable WHERE IncludeTable.ID = ExcludeTable.ID)

UseExceptForMerge が TRUE に設定されていて、かつ、「NOT IN」を使用 できない場合 (これを使用できなくなるのは、UseNotInForMerge が無効に なっているか、またはオーディエンス・レベルが複数のフィールドで構成さ れていてデータ・ソースが Oracle でないときです)、この構文は以下のよう に変更になります。

#### Oracle

SELECT IncludeTable.ID FROM IncludeTable MINUS (SELECT ExcludeTable.ID FROM ExcludeTable)

### その他

SELECT IncludeTable.ID FROM IncludeTable EXCEPT (SELECT ExcludeTable.ID FROM ExcludeTable)

#### デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

#### UseMergeForTrack

説明

「トラッキング」プロセスのパフォーマンス向上のため、SQL MERGE 構 文を実装します。 DB2、Oracle、SQL Server 2008、および Teradata 12 で は、UseMergeForTrack プロパティーを TRUE に設定できます。 SQL MERGE ステートメントをサポートするその他のデータベースでも使用でき ます。

デフォルト値

TRUE (DB2 および Oracle) | FALSE (その他すべて)

有効な値

TRUE | FALSE

## UseNonANSIJoin

説明

UseNonANSIJoin プロパティーは、このデータ・ソースで非 ANSI の結合構 文を使用するかどうかを指定します。データ・ソースのタイプが Oracle7 ま たは Oracle8 に設定されている場合、UseNonANSIJoin の値が TRUE に設定 されているなら、データ・ソースにおいて Oracle に該当する非 ANSI の結 合構文が使用されます。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

#### UseNotInForMerge

説明

Campaign によりマージ・プロセスまたはセグメント・プロセスでの排他操 作が実行される場合、デフォルトとして次のような「NOT EXISTS」の構文 が使用されます。

SELECT IncludeTable.ID FROM IncludeTable WHERE NOT EXISTS (SELECT \* FROM ExcludeTable WHERE IncludeTable.ID = ExcludeTable.ID)

UseNotInForMerge が有効 (値が YES に設定されている) の場合で、しかも (1) オーディエンス・レベルが単一 ID フィールドで構成されているか、ま たは (2) データ・ソースが Oracle であるかのいずれかなら、構文は以下の ように変更されることになります。

SELECT IncludeTable.ID FROM IncludeTable WHERE IncludeTable.ID NOT IN (SELECT ExcludeTable.ID FROM ExcludeTable)

デフォルト値

NO

有効な値

YES | NO

### **UseSQLToProfile**

説明

UseSQLToProfile プロパティーは、("SELECT *field*, count(\*) FROM *table* GROUP BY *field*" を使用して) プロファイルを計算するのに、レコードを取 り出す代わりに、データベースに対して SQL 照会 GROUP BY をサブミット するよう、Campaign を構成するために使用します。

- 値が FALSE (デフォルト)の場合、Campaign は、テーブル中の全レコードについてフィールド値を取り出してフィールドのプロファイルを作成し、異なる各値のカウントを追跡します。
- 値が TRUE の場合、Campaign は、以下のような照会を発行することにより、フィールドのプロファイルを作成します。

SELECT field, COUNT(\*) FROM table GROUP BY field

これは、データベースに負荷をかけることになります。

デフォルト値

FALSE

# 有効な値

TRUE | FALSE

# Campaign | partitions | partition[n] | systemTableMapping

systemTableMapping カテゴリーのプロパティーには、システム・テーブルを再マッ プしたり、コンタクト履歴テーブルまたはレスポンス履歴テーブルをマップしたり する場合に自動的にデータが追加されます。このカテゴリーのプロパティーは編集 しないでください。

# Campaign | partitions | partition[n] | server | systemCodes

このカテゴリーのプロパティーは、Campaign において可変長コードを許容するかどうか、キャンペーンとセル・コードの形式とジェネレーター、オファー・コードを表示するかどうか、さらにはオファー・コードの区切り文字を指定します。

### offerCodeDelimiter

説明

offerCodeDelimiter プロパティーは、複数のコード・パーツを連結する場合 (例えば、Campaign 生成済みフィールドの「OfferCode」フィールドを出 力する場合) や、Campaign レスポンス・プロセスの着信オファー・コード を複数のパーツに分割する場合に内部的に使用されます。値は、単一文字の みでなければなりません。

今回のバージョンの Campaign の場合、「NumberOfOfferCodesToUse」パラ メーターは既に存在しないことに注意してください。現在ではこの値は、オ ファー・テンプレートから取得されます (オファー・テンプレートそれぞれ のオファー・コード数は異なる可能性があります)。

#### デフォルト値

#### allowVariableLengthCodes

説明

allowVariableLengthCodes プロパティーは、可変長コードが Campaign で 許容されるかどうかを指定します。

値が TRUE で、コード形式の末尾部分が x の場合、コードの長さは可変に なります。例えば、コード形式が nnnnxxxx の場合、コード長が 4 文字か ら 8 文字までのコードが可能です。これは、キャンペーン、オファー、バ ージョン、トラッキング、セルの各コードに適用されます。

値が FALSE の場合には、可変長コードは許容されません。

# デフォルト値

FALSE

# 有効な値

TRUE | FALSE

#### displayOfferCodes

### 説明

displayOfferCodes プロパティーは、Campaign GUI でオファー・コードの 名前の横にオファー・コードを表示するかどうかを指定します。

値が TRUE の場合、オファーコードは表示されます。

値が FALSE の場合、オファー・コードは表示されません。

## デフォルト値

FALSE

#### 有効な値

TRUE | FALSE

### cellCodeFormat

# 説明

cellCodeFormat プロパティーは、キャンペーン・コード・ジェネレーター が、デフォルトのセル・コード・ジェネレーターによって自動的に作成され るセル・コードの形式を定義するために使用されます。

有効値のリストについては、campCodeFormat を参照してください。

### デフォルト値

Annnnnnn

#### campCodeFormat

#### 説明

campCodeFormat プロパティーは、キャンペーン・コード・ジェネレーター が、ユーザーによるキャンペーン作成時にデフォルトのキャンペーン・コー ド・ジェネレーターによって自動的に生成されるキャンペーン・コードの形 式を定義するために使用されます。

Cnnnnnnn

# 有効な値

有効値は以下のとおりです。

- A から Z または任意の記号 定数として扱われます
- a A から Z までのランダムな文字 (大文字のみ)
- c A から Z までのランダムな文字または 0 から 9 までの数値
- n 0 から 9 までのランダムな数字
- x 0 から 9 または A から Z までの任意の単一の ASCII 文字。生成されたキャンペーン・コードを編集し、Campaign が「x」に関して置換した ASCII 文字をさらに任意の ASCII 文字に置き換えて、Campaign が代わりにその文字を使用するようにできます。

#### cellCodeGenProgFile

#### 説明

cellCodeGenProgFile プロパティーは、セル・コード・ジェネレーターの名 前を指定します。生成されたコードの形式を制御するプロパティーは、 cellCodeFormat プロパティーで設定します。サポートされるオプションの リストについては、campCodeGenProgFile を参照してください。

独自のセル・コード・ジェネレーターを作成する場合、そのカスタム・プロ グラムの絶対パスでデフォルト値を置換してください。絶対パスには、 UNIX の場合にはスラッシュ (/)、Windows の場合には円記号 (¥) を使用し てファイル名と拡張子を含めます。

### デフォルト値

uaccampcodegen (Campaign 提供のコード・ジェネレーター)

### campCodeGenProgFile

説明

campCodeGenProgFile プロパティーは、キャンペーン・コード・ジェネレー ターの名前を指定します。

生成されたコードの形式を制御するプロパティーは、campCodeFormat プロ パティーで設定します。

独自のキャンペーン・コード・ジェネレーターを作成する場合、そのカスタム・プログラムの絶対パスでデフォルト値を置換してください。絶対パスには、UNIX の場合にはスラッシュ (/)、Windows の場合には円記号 (¥)を使用してファイル名と拡張子を含めます。

デフォルトのキャンペーン・コード・ジェネレーターでは、以下のオプションを指定して呼び出す操作が可能です。

- -y 年 (4 桁の整数)
- -m 月 (1 桁または 2 桁の整数。値を 12 より大きくできません)
- -d 日 (1 桁または 2 桁の整数。値を 31 より大きくできません)

- -n キャンペーン名 (任意のストリング。64 文字を超えることはできません)
- -o キャンペーン所有者 (任意のストリング。64 文字を超えることはできません)
- -u キャンペーン・コード (任意の整数)。アプリケーションに生成させる のではなく、ユーザーが正確なキャンペーン ID を指定できます。
- -f デフォルトを指定変更する場合のコード形式。「campCodeFormat」で 指定された値になります。
- -i 他の整数。
- -s 他のストリング。

uaccampcodegen (Campaign 提供のコード・ジェネレーター)

### Campaign | partitions | partition[n] | server | encoding

このカテゴリーのプロパティーは、ファイルに書き込まれる値に関して、英語以外のデータをサポートするテキスト・エンコードを指定します。

#### stringEncoding

# 説明

partition[n] > server> encoding > stringEncoding プロパティーは、 Campaign がフラット・ファイルを読み込む方法と書き込み方法を指定しま す。すべてのフラット・ファイルで使用するエンコードが同じでなければな りません。どこにも構成しないと、フラット・ファイル・エンコードのデフ ォルトの設定になります。

注: WIDEUTF-8 はこの設定ではサポートされていません。

デフォルトでは、値は何も指定されず、出力テキスト・ファイルは Campaign のデフォルトのエンコードである UTF-8 としてエンコードされ ます。

使用する値が暗黙のデフォルトと同じ UTF-8 であっても、システムに適切 なエンコードにこの値を明示的に設定するのがベスト・プラクティスとなり ます。

注: StringEncoding プロパティーの値を dataSources カテゴリーのデー タ・ソースで設定しないと、この stringEncoding プロパティーの値がデフ ォルト値として使用されます。これにより、不要な混乱が生じる可能性があ ります。dataSources カテゴリーでは、必ず StringEncoding プロパティー を明示的に設定してください。

サポートされるエンコードのリストについては、「*Campaign 管理者ガイ* ド」を参照してください。

### デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

#### forceDCTOneBytePerChar

説明

forceDCTOneBytePerChar プロパティーは、Campaign が UTF-8 にトランス コーディングするための十分なスペースを確保するために予約済みの拡張可 能なフィールド幅ではなく、出力ファイルの元のフィールド幅を用いるかど うかを指定します。

テキスト値の長さは、表記に使用するエンコードによって異なる場合があり ます。stringEncoding プロパティーが ASCII でも UTF-8 でもないデー タ・ソースに由来するテキスト値の場合、Campaign は UTF-8 にトランス コーディングするための十分なスペースを確保するためにフィールド幅の 3 倍を予約します。例えば、stringEncoding プロパティーが LATIN1 に設定 され、データベースのフィールドが VARCHAR(25) と定義されている場合、 Campaign はトランスコーディングされた UTF-8 値を保持するために 75 バイトを予約します。元のフィールド幅を用いる場合には、 forceDCT0neBytePerChar プロパティーを TRUE に設定します。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

# Campaign | partitions | partition[n] | server | timeout

このカテゴリーのプロパティーは、ユーザーが切断してすべての実行作業が完了し た後に Campaign フローチャートが終了するまでに待機する秒数、および Campaign サーバー・プロセスがエラーを報告するまでに外部サーバーからの応答を待機する 秒数を指定します。

### waitForGracefulDisconnect

#### 説明

waitForGracefulDisconnect プロパティーは、Campaign サーバー・プロセ スではユーザーが切断するまでは確実に実行を継続するのか、ユーザーに切 断する意思があるかどうかに関係なく終了するのかを指定します。

値がデフォルトの yes の場合、サーバー・プロセスは、ユーザーが終了す る意思があるかどうかはっきりするまで実行を継続します。このオプション を使用すると、変更内容が失われることがなくなりますが、サーバー・プロ セスが累積してしまう恐れがあります。

値が no の場合、サーバー・プロセスはシャットダウンするので累積することはありませんが、ネットワーク中断が生じたり、正常に終了するために推奨されている操作手順に従わなかったりする場合には、作業内容が失われる可能性があります。

デフォルト値

TRUE

#### 有効な値

TRUE FALSE

# urlRequestTimeout

urlRequestTimeout プロパティーは、Campaign サーバー・プロセスが外部 サーバーからの応答を待機する秒数を指定します。現在、この設定は Campaign を使用して作動する IBM EMM サーバーと eMessage コンポー ネントに対する要求に適用されます。

Campaign サーバー・プロセスがこの期間内に応答を受け取らないと、通信 タイムアウト・エラーが報告されます。

### デフォルト値

60

## delayExitTimeout

説明

delayExitTimeout プロパティーは、ユーザーが切断してすべての実行作業 が完了した後に、Campaign フローチャートが終了するまでに待機する秒数 を指定します。

このプロパティーを「0」以外の値に設定すると、後続の Campaign フロー チャートでは新しいインスタンスを開始するのではなく、既存のインスタン スを使用できるようになります。

# デフォルト値

10

# Campaign | partitions | partition[n] | server | collaborate

このカテゴリーは IBM Distributed Marketing に適用されます。

# collaborateInactivityTimeout

### 構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|server|collaborate

説明

collaborateInactivityTimeout プロパティーは、unica\_acsvr プロセスが、 Distributed Marketing 要求にサービス提供を終了してから閉じるまでの待機 時間を秒単位で指定します。この待機期間によって、フローチャートを実行 する前に Distributed Marketing が一連の要求を行うという一般的なシナリオ において、このプロセスを使用可能な状態のままにしておくことができま す。

最小値は 1 です。このプロパティーを 0 に設定すると、デフォルトの 60 になります。

# デフォルト値

60

### **logToSeparateFiles**

```
構成カテゴリー
```

Campaign|partitions|partition[n]|server|collaborate

説明

このプロパティーは v8.6.0.6 で導入されました。アップグレード後、デフ ォルトではこのパラメーターの値は False になっています。

True の場合は、Distributed Marketing から開始されたフローチャートの実行 に関するログは、それぞれ別のログ・ファイルに記録されます。単一のフォ ルダー内でログ・ファイルが増えすぎないように、ログ・ファイルは現在日 付のフォルダーの下に作成されます。フォルダー名の形式は

「FlowchartRunLogs\_<YYYYMMDD>」です。

ログ・ファイル名の形式は

<CAMP\_NAME>\_<CAMP\_CODE>\_<FC\_NAME>\_<PID>\_<LIST\_CODE> \_<DATE>\_<TIMESTAMP>.log です。PID は、フローチャートを実行した Campaign サーバーのプロセス ID です。LIST\_CODE は、フローチャート を実行した Distributed Marketing のリスト、ONDC、または企業キャンペー ンのオブジェクト・コードです。

トラブルシューティングの目的で、フローチャート実行プロセスに渡される ユーザー変数はすべてログに記録されます。

注: フローチャートが開かれると、最初は従来のログ・ファイルに記録され ます。フローチャートの実行が Distributed Marketing から開始される際に、 logToSeparateFiles が True の場合は、その時点の新しいディレクトリーとフ ァイル内でロギングが行われます。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

# Campaign | partitions | partition[n] | server | permissions

このカテゴリーのプロパティーは、Campaign によって作成されるフォルダーに設定 される権限、および「プロファイル」ディレクトリーに入れるファイルに設定され る UNIX グループと権限を指定します。

# userFileGroup (UNIX のみ)

説明

userFileGroup プロパティーは、ユーザー生成 Campaign ファイルに関連付 けるグループを指定します。このグループが設定されるのは、ユーザーが指 定のグループのメンバーである場合のみです。

このプロパティーは、デフォルトでは未定義です。

# デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

# createFolderPermissions

### 説明

createFolderPermissions パラメーターは、テーブル・マッピングの「デー タ・ソース・ファイルを開く」ダイアログの「フォルダーの作成」アイコン を使用して、Campaign サーバー (partition[n] の場所) 上の Campaign によって作成されるディレクトリーの権限を指定します。

# デフォルト値

755 (所有者には読み取り/書き込み/実行アクセス権があり、グループとワールドには実行/読み取りアクセス権があります)

#### catalogFolderPermissions

#### 説明

catalogFolderPermissions プロパティーは、「保管テーブル・カタログ」> 「フォルダー作成」ウィンドウを使用して Campaign によって作成されるデ ィレクトリーの権限を指定します。

#### デフォルト値

755 (所有者には読み取り/書き込み/実行アクセス権があり、グループとワールドには実行/読み取りアクセス権があります)

#### templateFolderPermissions

#### 説明

templateFolderPermissions プロパティーは、「**テンプレート**」>「フォル ダー作成」ウィンドウを使用して、Campaign によって作成されるテンプレ ート・ディレクトリーの権限を指定します。

# デフォルト値

755 (所有者には読み取り/書き込み/実行アクセス権があり、グループとワールドには読み取り/実行アクセス権があります)

#### adminFilePermissions (UNIX のみ)

### 説明

adminFilePermissions プロパティーは、「プロファイル」ディレクトリー に入るファイルの権限ビット・マスクを指定します。

# デフォルト値

660 (所有者とグループには読み取り/書き込みアクセス権のみがあります)

# userFilePermissions (UNIX のみ)

# 説明

userFilePermissions プロパティーは、ユーザー生成 Campaign ファイル (例えば、ログ・ファイル、サマリー・ファイル、エクスポート済みフラット・ファイル)の権限ビット・マスクを指定します。

# デフォルト値

666 (サーバーで Campaign によって作成されるファイルはすべてのユーザ ーが読み取りおよび書き込みできます)

#### adminFileGroup (UNIX のみ)

# 説明

adminFileGroup プロパティーは、「プロファイル」ディレクトリーに入る ファイルと関連付ける UNIX 管理グループを指定します。

このプロパティーは、デフォルトでは未定義です。

# デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

# Campaign | partitions | partition[n] | server | flowchartConfig

このカテゴリーのプロパティーは、Campaign 生成済みフィールドの動作、複製セル・コードが許可されるかどうか、および「コンタクト履歴テーブルに記録」オプションのデフォルトを有効にするかどうかを指定します。

# allowDuplicateCellcodes

# 説明

allowDuplicateCellcodes プロパティーは、Campaign スナップショット・ プロセスのセル・コードで複製値を許可するかどうかを指定します。

値が FALSE の場合、Campaign サーバーでは固有のセル・コードが強制されます。

値が TRUE の場合、Campaign サーバーでは固有のセル・コードは強制され ません。

# デフォルト値

TRUE

# 有効な値

TRUE | FALSE

### allowResponseNDaysAfterExpiration

# 説明

allowResponseNDaysAfterExpiration プロパティーは、すべてのオファーの 有効期限後に応答を追跡可能な最大日数を指定します。こうした戻りの遅い 応答は、パフォーマンス・レポートに含められる可能性があります。

### デフォルト値

90

# agfProcessnameOutput

#### 説明

agfProcessnameOutput プロパティーは、リスト、最適化、応答、スナップ ショットの各プロセスにおける Campaign 生成済みフィールド (UCGF)の 出力動作を指定します。

値が PREVIOUS の場合、UCGF には着信セルに関連するプロセス名が入ります。

値が CURRENT の場合、UCGF は使用しているプロセスのプロセス名を保持 します。 PREVIOUS

有効な値

PREVIOUS | CURRENT

# logToHistoryDefault

説明

logToHistoryDefault プロパティーは、Campaign コンタクト・プロセスの 「ログ」タブにある「コンタクト履歴テーブルおよびトラッキング・テーブ ルに記録」オプションをデフォルトで有効にするかどうかを指定します。

値が TRUE の場合、このオプションは有効になります。

値が FALSE の場合、このオプションは新しく作成されるコンタクト・プロ セスではすべて無効になります。

デフォルト値

TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

# overrideLogToHistory

説明 このプロパティーは、該当する権限を持つユーザーが、コンタクト・プロセ スまたは「トラッキング」プロセスを構成する際に「コンタクト履歴テーブ ルに記録」設定を変更できるかどうかを制御します。すべてのフローチャー ト実稼働実行がコンタクト履歴に常に書き込まれるようにするには、 「logToHistoryDefault」を有効にし、「overrideLogToHistory」を無効にしま す。

デフォルト値

TRUE

# 有効な値

TRUE | FALSE

# defaultBehaviorWhenOutputToFile

# 説明

ファイルへの出力時における、Campaign のコンタクト・プロセスの動作を 指定します。このプロパティーが適用されるのは、現行パーティションのみ です。設定時のデフォルトの動作の適用対象となるのは、フローチャートに 新しく追加される際のプロセスのみです。プロセスがフローチャートに追加 されると、出力動作はプロセス構成で変更が可能です。

# デフォルト値

レコード置換

# 有効な値

- データ追記
- 新規ファイル作成
• レコード置換

#### defaultBehaviorWhenOutputToDB

説明

データベース表への出力時における、Campaign のコンタクト・プロセスの 動作を指定します。このプロパティーが適用されるのは、現行パーティショ ンのみです。設定時のデフォルトの動作の適用対象となるのは、フローチャ ートに新しく追加される際のプロセスのみです。プロセスがフローチャート に追加されると、出力動作はプロセス構成で変更が可能です。

#### デフォルト値

レコード置換

有効な値

- データ追記
- レコード置換

#### replaceEmbeddedNames

説明

replaceEmbeddedNames が TRUE である場合、Campaign は照会テキストに組 み込まれているユーザー変数と UCGF 名を実際の値に置き換えますが、そ れらの名前はアンダースコアーなどの非英数字で区切られている必要があり ます (例えば、ABC\_UserVar.v1 は置換されますが、ABCUserVar.v1 は置換 されません)。 Campaign 7.2 以前との後方互換性を持たせるには、このプロ パティーを TRUE に設定してください。

FALSE に設定すると、Campaign が実際の値に置換するのは識別可能なユー ザー変数と UCGF 名 (IBM EMM 式および未加工の SQL 式) のみです。 Campaign 7.3 以降との後方互換性を持たせるには、このプロパティーを FALSE に設定してください。

デフォルト値

FALSE

### 有効な値

TRUE | FALSE

#### legacyMultifieldAudience

#### 説明

ほとんどの場合、このプロパティーはデフォルト値の FALSE に設定された ままにしておくことができます。Campaign v8.5.0.4 以降では、マルチフィ ールド・オーディエンスの ID のフィールドの名前が、そのフィールドのソ ースに関係なく、オーディエンス定義に応じた名前になります。マルチフィ ールド・オーディエンスの ID のフィールドを使用するようにプロセスを構 成する際は、マルチフィールド・オーディエンスの新しいオーディエンス ID 命名規則を参照してください。以前のバージョンの Campaign で作成さ れたフローチャート内の既に構成済みのプロセスは引き続き機能するはずで す。しかし、この命名規則の変更のために古いフローチャートが失敗する場 合は、このプロパティーを TRUE に設定することによって、Campaign の動 作を以前の動作に戻すことができます。

デフォルト値

FALSE

#### 有効な値

TRUE | FALSE

### Campaign | partitions | partition[n] | server | flowchartSave

このカテゴリーのプロパティーは、新しい Campaign フローチャートの自動保存プ ロパティーとチェックポイント・プロパティーのデフォルトの設定を指定します。

#### checkpointFrequency

説明

checkpointFrequency プロパティーは、新しい Campaign フローチャートの チェックポイント・プロパティーのデフォルトの設定を分単位で指定しま す。これは、クライアント側の「詳細設定」ウィンドウからフローチャート ごとに構成できます。チェックポイント機能により、リカバリーのために実 行中のフローチャートのスナップショットを取得できます。

デフォルト値

0 (ゼロ)

#### 有効な値

任意の整数

#### autosaveFrequency

### 説明

autosaveFrequency プロパティーは、新しい Campaign フローチャートの自 動保存プロパティーのデフォルトの設定を分単位で指定します。これは、ク ライアント側の「詳細設定」ウィンドウからフローチャートごとに構成でき ます。自動保存機能によって、編集および構成中のフローチャートの強制保 存が実行されます。

### デフォルト値

0 (ゼロ)

#### 有効な値

任意の整数

### Campaign | partitions | partition[n] | server | dataProcessing

このカテゴリーのプロパティーは、Campaign がフラット・ファイル内のストリング 比較と空フィールドを処理する方法、およびマクロ STRING\_CONCAT の動作を指定し ます。

#### longNumericIdsAsText

説明

longNumericIdsAsText プロパティーは、Campaign マクロ言語が、15 桁を 超える数値 ID をテキストとして扱うかどうかを指定します。

値を TRUE に設定すると、15 桁を超える数値 ID はテキストとして処理されます。

値を FALSE に設定すると、15 桁を超える数値 ID は数値として処理されるので、切り捨てや丸めが行われると精度や固有性が失われる可能性があります。

注: この設定は、対象のデータ・ソースに由来するフィールドで partitions > partition[n] > dataSources > [data\_source\_name] > ForceNumeric プロパティーを TRUE に設定すると無効になります。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

#### stringConcatWithNullIsNull

説明

stringConcatWithNullIsNull プロパティーは、Campaign マクロ STRING CONCAT の動作を制御します。

値が TRUE の場合、STRING\_CONCAT のいずれかの入力が NULL であると、 NULL を戻します。

値が FALSE の場合、STRING\_CONCAT は NULL 以外のすべてのプロパティー を連結した値を戻します。その場合、STRING\_CONCAT のすべての入力が NULL であれば、NULL だけを戻します。

デフォルト値

TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

#### performCaseInsensitiveComparisonAs

#### 説明

performCaseInsensitiveComparisonAs プロパティーは、

compareCaseSensitive プロパティーが no に設定されている場合 (つまり、 大/小文字を区別しない比較の場合)、Campaign がデータ値を比較する方法 を指定します。compareCaseSensitive の値が yes の場合には、このプロパテ ィーは無視されます。

値が UPPER の場合、Campaign はすべてのデータを大文字に変換してから比較を行います。

値が LOWER の場合、Campaign はすべてのデータを小文字に変換してから比較を行います。

デフォルト値

LOWER

有効な値

UPPER | LOWER

#### upperAllowsDate

説明

upperAllowsDate プロパティーは、 UPPER データベース関数で DATE/DATETIME パラメーターが許可されるかどうか、その結果としてデータ ベースで操作を実行できるのか、Campaign サーバーで操作を実行する必要 があるのかどうかを指定します。

データベースが SQL Server または Oracle の場合には、値を TRUE に設定 します。これらのデータベースでは、UPPER 関数で DATE/DATETIME パラメ ーターを使用できます。

データベースが DB2 または Teradata の場合には、値を FALSE に設定しま す。これらのデータベースでは、UPPER 関数で DATE/DATETIME パラメータ ーの使用は許可されていません。

これは、グローバルの設定であり、データ・ソース単位の設定ではないこと に注意してください。使用しているいずれかのデータ・ソースに no の値が 推奨されている場合は、値を no に設定します。使用しているすべてのデー タ・ソースに yes の値が推奨されている場合は、値を yes に設定します。

デフォルト値

TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

#### compareCaseSensitive

説明

compareCaseSensitive プロパティーは、Campaign データ比較において英字の大/小文字 (UPPER と lower) を区別するかどうかを指定します。

値が FALSE の場合、Campaign では、データ値の比較の際に大/小文字の違いが無視され、バイナリーのテキスト・データは大/小文字を区別しない方法でソートされます。英語データを使用する場合には、この設定を強くお勧めします。

値が TRUE の場合、Campaign は大/小文字を区別してデータ値を識別し、それぞれの文字の実際のバイナリー値比較を行います。英語以外のデータを使用する場合には、この設定を強くお勧めします。

### デフォルト値

FALSE

### 有効な値

TRUE | FALSE

#### **IowerAllowsDate**

説明

lowerAllowsDate プロパティーは、 LOWER データベース関数で

DATE/DATETIME パラメーターが許可されるかどうか、その結果としてデータ ベースで操作を実行できるのか、Campaign サーバーで操作を実行する必要 があるのかどうかを指定します。

データベースが SQL Server または Oracle の場合には、値を TRUE に設定 します。これらのデータベースでは、LOWER 関数で DATE/DATETIME パラメ ーターを使用できます。

データベースが DB2 または Teradata の場合には、値を FALSE に設定しま す。これらのデータベースでは、LOWER 関数で DATE/DATETIME パラメータ ーの使用は許可されていません。

これは、グローバルの設定であり、データ・ソース単位の設定ではないこと に注意してください。使用しているいずれかのデータ・ソースに no の値が 推奨されている場合は、値を no に設定します。使用しているすべてのデー タ・ソースに yes の値が推奨されている場合は、値を yes に設定します。 通常、顧客のサイトで使用されているデータベース・タイプは 1 つだけで すが、複数のデータベース・タイプが使用されているインストール環境もあ ります。

デフォルト値

TRUE

#### 有効な値

TRUE | FALSE

#### substrAllowsDate

#### 説明

substrAllowsDate プロパティーは、 SUBSTR/SUBSTRING データベース関数 で DATE/DATETIME パラメーターが許可されるかどうか、その結果としてデ ータベースで操作を実行できるのか、Campaign サーバーで操作を実行する 必要があるのかどうかを指定します。

データベースが Oracle または Teradata の場合には、値を TRUE に設定しま す。これらのデータベースでは、SUBSTR/SUBSTRING 関数で DATE/DATETIME パラメーターを使用できます。

データベースが SQL Server または DB2 の場合には、値を FALSE に設定 します。これらのデータベースでは、SUBSTR/SUBSTRING 関数で DATE/DATETIME パラメーターの使用は許可されていません。

これは、グローバルの設定であり、データ・ソース単位の設定ではないこと に注意してください。使用しているいずれかのデータ・ソースに no の値が 推奨されている場合は、値を no に設定します。使用しているすべてのデー タ・ソースに yes の値が推奨されている場合は、値を yes に設定します。

### デフォルト値

TRUE

#### 有効な値

TRUE | FALSE

### **ItrimAllowsDate**

説明

ltrimAllowsDate プロパティーは、 LTRIM データベース関数で

DATE/DATETIME パラメーターが許可されるかどうか、その結果としてデータ ベースで操作を実行できるのか、Campaign サーバーで操作を実行する必要 があるのかどうかを指定します。

データベースが SQL Server、Oracle、Teradata の場合には、値を TRUE に設 定します。これらのデータベースでは、LTRIM 関数で DATE/DATETIME パラ メーターを使用できます。

データベースが DB2 の場合には、値を FALSE に設定します。このデータ ベースでは、LTRIM 関数で DATE/DATETIME パラメーターの使用は許可され ていません。

これは、グローバルの設定であり、データ・ソース単位の設定ではないこと に注意してください。使用しているいずれかのデータ・ソースに no の値が 推奨されている場合は、値を no に設定します。使用しているすべてのデー タ・ソースに yes の値が推奨されている場合は、値を yes に設定します。 通常、顧客のサイトで使用されているデータベース・タイプは 1 つだけで すが、複数のデータベース・タイプが使用されているインストール環境もあ ります。

デフォルト値

TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

#### rtrimAllowsDate

説明

rtrimAllowsDate プロパティーは、 RTRIM データベース関数で DATE/DATETIME パラメーターが許可されるかどうか、その結果としてデータ ベースで操作を実行できるのか、Campaign サーバーで操作を実行する必要 があるのかどうかを指定します。

データベースが SQL Server、Oracle、Teradata の場合には、値を TRUE に設 定します。これらのデータベースでは、RTRIM 関数で DATE/DATETIME パラ メーターを使用できます。

データベースが DB2 の場合には、値を FALSE に設定します。このデータ ベースでは、RTRIM 関数で DATE/DATETIME パラメーターの使用は許可され ていません。

これは、グローバルの設定であり、データ・ソース単位の設定ではないこと に注意してください。使用しているいずれかのデータ・ソースに no の値が 推奨されている場合は、値を no に設定します。使用しているすべてのデー タ・ソースに yes の値が推奨されている場合は、値を yes に設定します。 デフォルト値

TRUE

### 有効な値

TRUE | FALSE

#### likeAllowsDate

### 説明

likeAllowsDate プロパティーは、 LIKE データベース関数で DATE/DATETIME パラメーターが許可されるかどうか、その結果としてデータ ベースで操作を実行できるのか、Campaign サーバーで操作を実行する必要 があるのかどうかを指定します。

データベースが SQL Server または Oracle の場合には、値を TRUE に設定 します。これらのデータベースでは、LIKE 関数で DATE/DATETIME パラメー ターを使用できます。

データベースが DB2 または Teradata の場合には、値を FALSE に設定しま す。これらのデータベースでは、LIKE 関数で DATE/DATETIME パラメーター の使用は許可されていません。

注: これはグローバルの設定で、データ・ソース単位の設定ではありません。使用しているいずれかのデータ・ソースに no の値が推奨されている場合は、値を no に設定します。使用しているすべてのデータ・ソースに yes の値が推奨されている場合は、値を yes に設定します。

デフォルト値

TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

#### fileAllSpacesIsNull

説明

fileAllSpacesIsNull プロパティーは、フラット・ファイル内のすべてのス ペース値を NULL 値と見なすかどうかを指定することによって、Campaign がマップ済みフラット・ファイル内の空フィールドをインタープリットする 方法を指定します。

値が TRUE の場合、すべてのスペース値は NULL 値と見なされます。 Campaign は <field> is null のような照会を突き合わせますが、<field> = "" などの照会では失敗します。

値が FALSE の場合、すべてのスペース値は NULL ではない空ストリングと して処理されます。Campaign は <field>= ""のような照会を突き合わせま すが、<field> is null という照会では失敗します。

デフォルト値

TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

### Campaign | partitions | partition[n] | server | optimization

このカテゴリーのプロパティーは、Campaign サーバーのパーティションの最適化を 制御します。

注: このカテゴリーのパラメーターは、Contact Optimization には関連しません。

#### maxVirtualMemory

### 説明

このプロパティーは、フローチャートの実行時に使用するシステム仮想メモ リーの最大量のデフォルト値を指定します。この値を大きくするとパフォー マンスが向上し、この値を小さくすると単一のフローチャートによって使用 されるリソースを制限することができます。最大値は 4095 MB です。これ より大きな値を入力すると、Campaign により自動的に 4095 MB に制限さ れます。

(80% x 使用可能メモリー) / (同時に実行されるフローチャートの予想数) と等しくなるように値を設定します。以下に例を示します。

サーバー上で使用可能な仮想メモリー = 32 GB 同時に実行されるフローチャートの数 = 10 設定する仮想メモリー = (80 % x 32) / 10 = 約 2.5 GB / フローチャ ート

デフォルト値

128 (MB)

maxVirtualMemory は、グローバル構成設定です。特定のフローチャートの値をオ ーバーライドするには、対象のフローチャートを「編集」モードで開き、「管理」 メニューで「詳細設定」を選択して、「サーバー最適化」タブの「IBM Campaign による仮想メモリー使用量」の値を変更します。

### useInDbOptimization

#### 説明

useInDb0ptimization プロパティーは、Campaign が、Campaign サーバー ではなくデータベースで可能な限り多くの操作の実行を試行するかどうかを 指定します。

値が「FALSE」の場合、Campaign では、Campaign サーバーにある ID のリ ストが常時維持されます。

値が TRUE の場合、Campaign では ID リストのプルを可能な限り行わない ようにします。

#### デフォルト値

FALSE

#### 有効な値

TRUE | FALSE

### maxReuseThreads

### 説明

maxReuseThreads プロパティーは、サーバー・プロセス (unica\_acsvr) が再 使用するためにキャッシュに入れるオペレーティング・システム・スレッド の数を指定します。デフォルトでは、このプロパティーが 0 に設定され、 キャッシュは無効になります。

スレッドの割り振りによって生じるオーバーヘッドを削減する場合や、アプ リケーションの依頼に応じたスレッドの解放不能をオペレーティング・シス テムが禁止している場合には、キャッシュを使用してください。

maxReuseThreads プロパティーがゼロ以外の値の場合、設定値を MaxQueryThreads の値以上にしなければなりません。

### デフォルト値

0 (ゼロ)。キャッシュが無効になります

#### threadStackSize

説明

threadStackSize は、各スレッドのスタックに割り当てられるバイト数を決 定します。このプロパティーは、IBM からの指示がある場合以外には変更 しないでください。最小値は 128 K です。最大値は 8 MB です。

### デフォルト値

1048576

### tempTableDataSourcesForSegments

#### 説明

tempTableDataSourcesForSegments プロパティーは、セグメント作成プロセ スが永続セグメントー時表を作成できるデータ・ソースのリストを定義しま す。コンマ区切りリストになります。

デフォルトでは、このプロパティーはブランクです。

### デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

#### doNotCreateServerBinFile

### 説明

戦略セグメントのパフォーマンスを改善するには、このオプションを TRUE に設定します。このオプションを TRUE に設定すると、戦略セグメントによ って Campaign サーバー上にバイナリー・ファイルは作成されません。代わ りに、戦略セグメントによってデータ・ソース内にセグメント一時表が作成 されます。値を TRUE に設定する場合、セグメント化プロセスの構成で、少 なくとも 1 つの有効な一時テーブルのデータ・ソースを指定する必要があ ります。

#### デフォルト値

FALSE

#### 有効な値

TRUE | FALSE

### forceViewForPreOptDates

### 説明

デフォルト値 (TRUE) は、Optimize からオファーが割り当てられた「メー ル・リスト」プロセスで、パラメーター化されたオファー属性ビューを強制 的に作成します。値 FALSE は、メール・リストが少なくとも 1 つのパラメ ーター化されたオファー属性をエクスポートする場合にのみ、パラメーター 化されたオファー属性ビューを作成します。

この値を FALSE に設定すると、(ソースが最適化セッションである) 抽出プロセスから入力値を取得するよう構成された「メール・リスト」プロセスが、パラメーター化された開始日と終了日がオファーに組み込まれている場合であっても、UA\_Treatment テーブルに対して EffectiveDate と ExpirationDate に NULL 値を書き込む可能性があります。この場合は、 TRUE に設定し直します。

デフォルト値

TRUE

```
有効な値
```

TRUE | FALSE

### Campaign | partitions | partition[n] | server | logging

このカテゴリーのプロパティーは、Campaign サーバーで標準および Windows のイ ベント・ロギングを有効にするかどうか、ロギング・レベルとカテゴリー、および その他のロギング動作を指定します。

#### enableWindowsEventLogging

説明

enableWindowsEventLogging プロパティーは、Windows イベント・ログに 対する Campaign サーバー・ロギングを有効にするか無効にするかを指定し ます。 値が TRUE の場合、Windows イベント・ログへのロギングが有効になりま す。 値が FALSE の場合には、Windows イベント・ログへのロギングは無効で

値か FALSE の場合には、Windows イベント・ログへのロキングは無効です。無効の場合、windowsEventLoggingLevel と

windowsEventLoggingCategory の設定は無視されます。

### デフォルト値

FALSE

### 有効な値

TRUE | FALSE

### logFileBufferSize

説明

logFileBufferSize プロパティーは、keepFlowchartLogOpen プロパティー の値が yes の場合に使用されます。設定するこのログ・メッセージ数の上 限に達した後に、メッセージはファイルに書き込まれます。

値が1の場合、それぞれのログ・メッセージはすぐにファイルに書き込まれ、事実上バッファリングは不要になりますが、パフォーマンスに悪影響を 及ぼします。

このプロパティーは、keepFlowchartLogOpen の値が no に設定されている 場合には無視されます。

デフォルト値

5

#### keepFlowchartLogOpen

説明

keepFlowchartLogOpen プロパティーは、ログ・ファイルに行が書き込まれ るたびに、フローチャート・ログ・ファイルを Campaign が開いて閉じるか どうかを指定します。

値が FALSE の場合、Campaign はフローチャート・ログ・ファイルを開いて から閉じます。

値が TRUE の場合、Campaign は一度だけフローチャート・ログ・ファイル を開き、その後、フローチャートのサーバー・プロセスが終了する際にのみ フローチャート・ログ・ファイルを閉じます。リアルタイム・フローチャー トの場合、値を yes にするとパフォーマンスが向上する場合があります。 yes 設定を使用する副作用としては、ログに記録されたばかりのメッセージ がログ・ファイルに直ちに表示されないことがあります。Campaign がロ グ・メッセージをファイルにフラッシュするのは、内部バッファーが満杯に なったか、ログ・メッセージ数が logFileBufferSize プロパティーの値と 等しくなった場合だけであるためです。

デフォルト値

FALSE

### 有効な値

TRUE | FALSE

#### logProcessId

説明

logProcessId プロパティーは、Campaign サーバー・プロセスのプロセス ID (PID) をログ・ファイルに記録するかどうかを制御します。

値が TRUE の場合、プロセス ID はログに記録されます。

値が FALSE の場合には、プロセス ID は記録されません。

デフォルト値

TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

#### logMaxBackupIndex

説明

logMaxBackupIndex プロパティーは、Campaign サーバーのバックアップ・ ログ・ファイルのうち最も古いログ・ファイルを削除するまでに、保持して おくバックアップ・ログ・ファイル数を指定します。

値が 0 (ゼロ) の場合、バックアップ・ファイルは作成されず、 logFileMaxSize プロパティーで指定されたサイズに達するとログ・ファイ ルは切り捨てられます。

ゼロより大きい値である n の場合、ファイル {File.1, ..., File.n-1} は {File.2, ..., File.n} に名前変更されます。また File は File.1 と名前変 更されて閉じられます。次のログ出力を受信する場合に備え、新しい File が作成されます。

#### デフォルト値

1 (バックアップ・ログ・ファイルが 1 つ作成されます)

#### loggingCategories

### 説明

loggingCategories プロパティーは、 Campaign サーバー・ログ・ファイル に書き込まれるメッセージのカテゴリーを指定します。このプロパティー は、すべての選択したカテゴリーの重大度に基づいてログに記録するメッセ ージを判別する loggingLevels と連動します。コンマ区切りリストに複数の カテゴリーを指定できます。特殊カテゴリー all を使用すると、すべての ロギング・カテゴリーを素早く指定できます。

### デフォルト値

ALL

### 有効な値

サポートされているカテゴリーは次のとおりです。

- ALL
- BAD\_ORDER
- CELL ACCESS
- CONFIG
- DATA ERRORS
- DBLOAD
- FILE ACCESS
- GENERAL
- COMMANDS
- MEMORY
- PROCRUN
- QUERY
- SORT

- SYSQUERY
- TABLE\_ACCESS
- TABLE\_MAPPING
- TABLE\_IO
- WEBPROC

### loggingLevels

### 説明

loggingLevels プロパティーは、重大度に基づいて、Campaign サーバー・ ログ・ファイルに書き込む詳細度を制御します。

#### デフォルト値

MEDIUM

### 有効な値

- LOW
- MEDIUM
- HIGH
- ALL

LOW は、詳細度が最も低く (最も重大なエラーのみ)、ALL の場合にはトレース・メッセージが含まれ、主に診断を目的としています。フローチャート内の「ツール」>「ログ・オプション」メニューを使用して、これらの設定を調整できます。

注:診断のために Campaign からのロギング出力を最大限取得するには、構成やテストの際に loggingLevels プロパティーを ALL に設定することもできます。この設定にすると大量のデータが生成されるので、実稼働操作にはお勧めできない場合があります。

#### windowsEventLoggingCategories

#### 説明

windowsEventLoggingCategories プロパティーは、Campaign サーバーの Windows イベント・ログに書き込まれるメッセージのカテゴリーを指定し ます。このプロパティーは、すべての選択したカテゴリーの重大度に基づい てログに記録するメッセージを判別する windowsEventLoggingLevels と連動 します。

コンマ区切りリストに複数のカテゴリーを指定できます。特殊カテゴリー all を使用すると、すべてのロギング・カテゴリーを素早く指定できます。

### デフォルト値

ALL

### 有効な値

- ALL
- BAD\_ORDER
- CELL\_ACCESS

- CONFIG
- DATA\_ERRORS
- DBLOAD
- FILE\_ACCESS
- GENERAL
- COMMANDS
- MEMORY
- PROCRUN
- QUERY
- SORT
- SYSQUERY
- TABLE\_ACCESS
- TABLE\_MAPPING
- TABLE\_IO
- WEBPROC

### logFileMaxSize

### 説明

logFileMaxSize プロパティーは、Campaign サーバー・ログ・ファイルに許可されるバイト単位の最大サイズを指定します。このサイズに達すると、バックアップ・ファイルにロールオーバーされます。

#### デフォルト値

10485760 (10 MB)

#### windowsEventLoggingLevels

### 説明

```
windowsEventLoggingLevels プロパティーは、Campaign サーバーの
Windows イベント・ログに書き込む詳細度を重大度に基づいて制御しま
す。
```

### デフォルト値

MEDIUM

#### 有効な値

- LOW
- MEDIUM
- HIGH
- ALL

LOW は、詳細度が最も低く (最も重大なエラーのみ)、ALL の場合にはトレース・メッセージが含まれ、主に診断を目的としています。

### enableLogging

説明

enableLogging プロパティーは、 Campaign サーバー・ロギングをセッショ ン始動時に有効にするかどうかを指定します。

値が TRUE の場合、ロギングが有効になります。

値が FALSE の場合、ロギングは無効です。

デフォルト値

TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

### AllowCustomLogPath

説明

AllowCustomLogPath プロパティーを使用すると、ユーザーは、実行時にフ ローチャート固有のロギング情報を生成する各キャンペーン・フローチャー トのログ・パスを変更できます。

False を設定すると、ユーザーは、フローチャートのログ・ファイルの書き 込み先のパスを変更できなくなります。

True を設定すると、ユーザーはユーザー・インターフェースを使ってパス の変更を行えます。また、unica\_svradm を使ってフローチャートを実行す るときにも、同じく変更できるようになります。

デフォルト値

FALSE

#### 有効な値

TRUE | FALSE

### Campaign | partitions | partition[n] | server | flowchartRun

このカテゴリーのプロパティーは、Campaign スナップショットのエクスポートで許 容されるエラー数、フローチャートの保存時に保存されるファイル、およびテスト 実行の最上位プロセスごとの最大 ID 数を指定します。

#### maxDataErrorsAllowed

#### 説明

maxDataErrorsAllowed プロパティーは、Campaign スナップショットのエク スポートで許容されるデータ変換エラーの最大数を指定します。

### デフォルト値

0(ゼロ)。エラーは許容されません。

### saveRunResults

#### 説明

このプロパティーを使用すると Campaign フローチャートの実行結果を一時 フォルダーやデータベース一時テーブルに保存できます。フローチャートの 編集時に「管理」 > 「詳細設定」を使用して、個々のフローチャートを対 象にしてオプションを調整できます。 保存することが必要な成果物を作成するフローチャートの場合、

saveRunResults を TRUE に設定しなければなりません。例えば、「セグメ ント化」プロセスを含むフローチャートがある場合、実行結果を保存しなけ ればなりません。実行結果を保存しないと、戦略的セグメントは永続しませ ん。

値が TRUE の場合にはフローチャート (アンダースコアー) ファイルが保存 され、useInDbOptimization を使用するとデータベース一時テーブルが保持 されます。

値が FALSE の場合、保存されるのは .ses ファイルだけです。したがって、フローチャートを再ロードしても中間結果は表示できません。

IBM Campaign は一時ディレクトリー内に多数の一時ファイルを作成するの で、ファイル・システムの使用率が高くなることがあり、いっぱいになるこ とさえあります。このプロパティーを FALSE に設定すると、フローチャー トの実行の完了後にこれらのファイルがクリーンアップされます。しかし、 FALSE の設定を使用すると、フローチャートを一部だけ実行することはでき なくなるので、常に適しているとは限りません。

ディスク・スペースを節約するには、独自のスクリプトを作成して、一時フ ォルダー内のファイルを削除できますが、現在実行中のフローチャートに関 するファイルは決して削除しないでください。フローチャートが失敗ないよ うにするには、当日更新されたり作成されたりした一時フォルダーからファ イルを決して削除しないでください。保守の目的で、まる 2 日以上経過し た一時フォルダーからファイルを削除できます。

デフォルト値

TRUE

#### 有効な値

TRUE | FALSE

### testRunDefaultSize

説明

testRunDefaultSize プロパティーは、Campaign テスト実行における最上位 プロセスごとの最大 ID 数のデフォルトを指定します。値が 0 (ゼロ) の場 合、ID 数に制限はありません。

### デフォルト値

0(ゼロ)

### Campaign | partitions | partition[n] | server | profile

このカテゴリーのプロパティーは、数値およびテキスト値のプロファイル作成時に Campaign で作成される最大カテゴリー数を指定します。

### profileMaxTextCategories

説明

profileMaxTextCategories プロパティーと profileMaxNumberCategories プロパティーは、テキスト値と数値のプロファイル作成時に Campaign で作 成される最大カテゴリー数をそれぞれ指定します。

ユーザーに表示される bin 数の設定 (ユーザー・インターフェースで変更可 能です) によって、これらの値は異なります。

デフォルト値

1048576

#### profileMaxNumberCategories

### 説明

profileMaxNumberCategories プロパティーと profileMaxTextCategories プロパティーは、数値とテキスト値のプロファイル作成時に Campaign で作 成される最大カテゴリー数をそれぞれ指定します。

ユーザーに表示される bin 数の設定 (ユーザー・インターフェースで変更可 能です) によって、これらの値は異なります。

### デフォルト値

1024

### Campaign | partitions | partition[n] | server | internal

このカテゴリーのプロパティーは、選択された Campaign パーティションの統合設 定と internalID 限度を指定します。 Campaign インストール済み環境に複数のパー ティションが存在する場合、影響が及ぶようにするパーティションごとにこれらの プロパティーを設定します。

### internalldLowerLimit

#### 説明

internalIdUpperLimit プロパティーと internalIdLowerLimit プロパティーは、Campaign 内部 ID を指定の範囲に制限します。それらのプロパティーでは境界上の値が含まれるので、Campaign は上限と下限のどちらの値も 使用できます。

### デフォルト値

0(ゼロ)

#### internalIdUpperLimit

### 説明

internalIdUpperLimit プロパティーと internalIdLowerLimit プロパティーは、Campaign 内部 ID を指定の範囲に制限します。指定した値も範囲に 含まれます。すなわち、Campaign は、上限値と下限値の両方を使用できま す。 Distributed Marketing がインストールされている場合、値を 2147483647 に設定します。

### デフォルト値

4294967295

#### eMessageInstalled

説明

eMessage がインストールされていることを示します。Yes を選択する場合、eMessage 機能が Campaign インターフェースで使用できます。

IBM インストーラーは、eMessage のインストール済み環境のデフォルトの パーティションに対してこのプロパティーを Yes に設定します。eMessage をインストールしたその他のパーティションに対しては、このプロパティー を手動で構成する必要があります。

デフォルト値

いいえ

#### 有効な値

Yes | No

### interactInstalled

#### 説明

Interact 設計環境をインストール後、この構成プロパティーを Yes に設定 し、Campaign で Interact 設計環境を有効にしてください。

Interact がインストールされていない場合は、No に設定してください。この プロパティーを No に設定しても、Interact のメニューとオプションがユー ザー・インターフェースから削除されることはありません。メニューとオプ ションを削除するには、configTool ユーティリティーを使用して Interact を手動で登録抹消しなければなりません。

### デフォルト値

いいえ

#### 有効な値

Yes | No

#### 使用可能性

このプロパティーは、Interact をインストールした場合のみ適用可能です。

### **MO\_UC\_integration**

#### 説明

**Platform** 構成設定で Marketing Operations との統合が有効になっている場合に、その統合をこのパーティションで有効にします。詳しくは、「*IBM Marketing Operations および Campaign 統合ガイド*」を参照してください。

#### デフォルト値

いいえ

#### 有効な値

Yes | No

### MO\_UC\_BottomUpTargetCells

### 説明

このパーティションにおいて、**MO\_UC\_integration** が有効な場合に、ター ゲット・セル・スプレッドシートでボトムアップのセルを使用できるように します。 Yes に設定すると、トップダウンとボトムアップの両方のターゲット・セルが表示されますが、ボトムアップのターゲット・セルは読み取り 専用です。詳しくは、「*IBM Marketing Operations および Campaign 統合ガ* イド」を参照してください。

#### デフォルト値

いいえ

### 有効な値

Yes | No

#### Legacy\_campaigns

### 説明

このパーティションにおいて、Marketing Operations と Campaign が統合される前に作成されたキャンペーンへのアクセスを有効にします。

**MO\_UC\_integration** が Yes に設定されている場合のみ適用されます。レガ シー・キャンペーンには、Campaign 7.x で作成されて Plan 7.x プロジェク トにリンクされたキャンペーンも含まれます。詳しくは、「*IBM Marketing Operations* および Campaign 統合ガイド」を参照してください。

### デフォルト値

いいえ

### 有効な値

Yes | No

### IBM Marketing Operations - オファーの統合

#### 説明

このパーティションで **MO\_UC\_integration** が有効な場合に、Marketing Operations を使用してこのパーティション上でオファー・ライフサイクル管 理タスクを実行する機能を有効にします。 **Platform** 構成設定内でオファー の統合を有効にしなければなりません。詳しくは、「*IBM Marketing Operations および Campaign 統合ガイド*」を参照してください。

### デフォルト値

いいえ

### 有効な値

Yes | No

### UC\_CM\_integration

#### 説明

Campaign パーティションで Digital Analytics オンライン・セグメント統合 を有効にします。この値を Yes に設定すると、フローチャート内の「選 択」プロセス・ボックスに、入力として「Digital Analytics セグメント」を 選択するためのオプションが表示されます。パーティションごとに Digital Analytics 統合の構成をするには、「設定」>「構成」> Campaign | partitions | partitions [n] | Coremetrics を選択します。

#### デフォルト値

いいえ

### 有効な値

Yes | No

### Campaign | partitions | partition[n] | server | fileDialog

このカテゴリーのプロパティーは、Campaign の入力および出力のデータ・ファイル のデフォルトのディレクトリーを指定します。

#### defaultOutputDirectory

説明

defaultOutputDirectory プロパティーは、「Campaign File Selection」ダイ アログを初期設定するために使用するパスを指定します。 defaultOutputDirectory プロパティーは、出力データ・ファイルが Campaign にマップされる際に使用されます。値を指定しないと、パスは環 境変数 UNICA\_ACDFDIR から読み取られます。

### デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

#### defaultInputDirectory

説明

defaultInputDirectory プロパティーは、「Campaign File Selection」ダイ アログを初期設定するために使用するパスを指定します。 defaultInputDirectory プロパティーは、入力データ・ファイルが Campaign にマップされる際に使用されます。値を指定しないと、パスは環 境変数 UNICA\_ACDFDIR から読み取られます。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

### Campaign | partitions | partition[n] | offerCodeGenerator

このカテゴリーのプロパティーは、オファー・コード・ジェネレーター、およびタ ーゲット・セル・スプレッドシートのセルにコンタクト・プロセスを割り当てる際 に使用するセル・コード・ジェネレーターのクラス、クラスパス、構成ストリング を指定します。

### offerCodeGeneratorClass

説明

offerCodeGeneratorClass プロパティーは、オファー・コード・ジェネレー ターとして使用するクラス Campaign の名前を指定します。クラスは、パッ ケージ名で完全修飾する必要があります。

#### デフォルト値

表示のために改行が追加されています。

com.unica.campaign.core.codegenerator.samples. ExecutableCodeGenerator

### offerCodeGeneratorConfigString

説明

offerCodeGeneratorConfigString プロパティーは、オファー・コード・ジ ェネレーターのプラグインが Campaign によってロードされる際にそのプラ グインに渡されるストリングを指定します。デフォルトでは、

ExecutableCodeGenerator (Campaign に同梱) によってこのプロパティーが 使用され、実行する実行可能プログラムのパス (Campaign アプリケーショ ンのホーム・ディレクトリーへの相対パス) が示されます。

### デフォルト値

./bin

### defaultGenerator

#### 説明

defaultGenerator プロパティーは、セル・コードのジェネレーターを指定 します。セル・コードはコンタクト・スタイル・プロセス・ボックスに表示 され、ターゲット制御スプレッドシートのセルにセルを割り当てるのに使用 されます。ターゲット制御スプレッドシートは、キャンペーンとフローチャ ートにおけるセルとオファーのマッピングを管理します。

#### デフォルト値

uacoffercodegen.exe

### offerCodeGeneratorClasspath

### 説明

offerCodeGeneratorClasspath プロパティーは、オファー・コード・ジェネ レーターとして使用するクラス Campaign のパスを指定します。絶対パスで も相対パスでも構いません。

パスの末尾がスラッシュ (UNIX の場合はスラッシュ / 、Windows の場合 には円記号 ¥)になっていると、Campaign では、使用すべき Java プラグ イン・クラスが含まれるディレクトリーのパスだと見なされます。パスの末 尾がスラッシュではないと、Campaign では、Java クラスが含まれる jar ファイルの名前と見なされます。

相対パスの場合には、Campaign アプリケーションのホーム・ディレクトリーに対して相対であると Campaign は見なします。

#### デフォルト値

codeGenerator.jar (Campaign.war ファイルにパッケージ)

## Campaign | partitions | partition[n] | Coremetrics

このカテゴリーのプロパティーは、選択された Campaign パーティションの Digital Analytics と Campaign の統合設定を指定します。Campaign インストール済み環境 に複数のパーティションが存在する場合、影響が及ぶようにするパーティションご

とにこれらのプロパティーを設定します。これらのプロパティーを有効にするに は、 (partition | partition[n] | server | internal の下で) そのパーティショ ンの UC CM integration を Yes に設定する必要があります。

### ServiceURL

説明

ServiceURL は、Digital Analytics と Campaign の間の統合点となる Digital Analytics 統合サービスの場所を指定します。https のデフォルトのポートは 443 である点にご注意ください。

### デフォルト値

https://export.coremetrics.com/eb/segmentapi/1.0/api.do

#### 有効な値

このリリースでサポートされる値は、上記のデフォルト値のみです。

### CoremetricsKey

説明

Campaign では、CoreMetricsKey を使用して、Digital Analytics からエクス ポートされた ID を、Campaign の対応するオーディエンス ID にマップし ます。このプロパティーに定義される値は、変換テーブルで使用される値と 厳密に一致する必要があります。

### デフォルト値

registrationid

### 有効な値

このリリースでサポートされる値は、registrationid のみです。

### ClientID

説明

この値を、お客様の会社に割り当てられる固有の Digital Analytics クライア ント ID に設定します。

### デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

### **TranslationTableName**

#### 説明

Digital Analytics キーを Campaign オーディエンス ID に変換するために使用される変換テーブルの名前を指定します。例えば、Cam\_CM\_Trans\_Table のようにします。テーブル名を指定しない場合、入力として Digital Analytics セグメントを使用するフローチャートをユーザーが実行すると、エラーが発生します。テーブル名がなければ、Campaign は製品同士の間で ID をマップする方法が分からないためです。

注:変換テーブルをマップまたは再マップするとき、テーブル定義ダイアロ グで割り当てられる「IBM テーブル名」は、ここで定義された TranslationTableName と厳密に (大/小文字も含めて) 一致する必要があり ます。

#### デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

### **ASMUserForCredentials**

説明

このプロパティーは、どの IBM EMM アカウントが Digital Analytics 統合 サービスにアクセスできるかを指定します。追加情報については、下記を参 照してください。

値が指定されない場合、Campaign は、データ・ソースとして

ASMDatasourceForCredentials の値が指定されているかどうかを確認するために、現在ログインしているユーザーのアカウントを検査します。指定されている場合には、アクセスが許可されます。指定されていない場合には、アクセスは拒否されます。

デフォルト値

asm\_admin

#### **ASMDataSourceForCredentials**

### 説明

このプロパティーは、ASMUserForCredentials 設定で指定された Marketing Platform アカウントに割り当てられるデータ・ソースを指定します。デフォルトは UC\_CM\_ACCESS です。この「資格情報のデータ・ソース」は、統合サービスにアクセスできるようにする資格情報を格納するために Marketing Platform が使用するメカニズムです。

UC\_CM\_ACCESS のデフォルト値は指定されていますが、その名前のデータ・ ソースは提供されていませんし、その名前を使用する必要があるわけでもあ りません。

重要: 「設定」>「ユーザー」を選択し、ASMUserForCredentials で指定さ れたユーザーを選択し、「データ・ソースの編集」リンクをクリックしてか ら、ここで定義された値と名前が厳密に一致する新しいデータ・ソース (UC\_CM\_ACCESS など)を追加する必要があります。「データ・ソース・ログ イン」と「データ・ソース・パスワード」には、Digital Analytics クライア ント ID に関連付けされた資格情報を使用します。データ・ソース、ユーザ ー・アカウント、およびセキュリティーについては、「IBM Marketing Platform 管理者ガイド」を参照してください。

#### デフォルト値

UC\_CM\_ACCESS

# Campaign | モニター

このカテゴリーのプロパティーは、操作モニター機能を有効にするかどうか、操作 モニター・サーバーの URL、およびキャッシング動作を指定します。操作モニター 機能ではアクティブなフローチャートが表示されて、それらを制御できます。

#### cacheCleanupInterval

説明

cacheCleanupInterval プロパティーは、フローチャート・ステータス・キャッシュの自動クリーンアップ間隔を秒単位で指定します。

Campaign バージョン 7.0 より前のバージョンでは、このプロパティーは使用できません。

### デフォルト値

600 (10 分)

#### cacheRunCompleteTime

#### 説明

cacheRunCompleteTime プロパティーは、完了済み実行タスクがキャッシュ に入れられて、「モニター」ページに表示される期間を分単位で指定しま す。

Campaign バージョン 7.0 より前のバージョンでは、このプロパティーは使用できません。

### デフォルト値

4320

### monitorEnabled

### 説明

monitorEnabled プロパティーは、モニター機能を有効にするかどうかを指 定します。

Campaign バージョン 7.0 より前のバージョンでは、このプロパティーは使用できません。

### デフォルト値

FALSE

### 有効な値

TRUE | FALSE

### serverURL

### 説明

「キャンペーン」>「モニター」>「serverURL」プロパティーは、操作モニ ター・サーバーの URL を指定します。これは必須設定で、操作モニター・ サーバー URL がデフォルト以外の場合には、値を変更してください。

Campaign が Secure Sockets Layer (SSL) 通信を使用するように構成されて いる場合には、HTTPS を使用するようにこのプロパティーの値を設定しま す。例えば、次のようにします。 serverURL=https://host:SSL\_port/ Campaign/OperationMonitor ここで、それぞれの意味は次のとおりです。

- *host* は、Web アプリケーションがインストールされているマシンの名前 または IP アドレスです。
- SSL Port は Web アプリケーションの SSL ポートです。

URL の https に注意してください。

#### デフォルト値

http://localhost:7001/Campaign/OperationMonitor

### monitorEnabledForInteract

### 説明

TRUE に設定すると、Campaign JMX コネクター・サーバーが Interact で使 用可能になります。Campaign には JMX セキュリティーはありません。

FALSE に設定すると、Campaign JMX コネクター・サーバーに接続できません。

この JMX モニターは、Interact コンタクトとレスポンスの履歴モジュール 専用です。

### デフォルト値

FALSE

### 有効な値

TRUE | FALSE

#### 使用可能性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

## プロトコル (protocol)

### 説明

monitorEnabledForInteract が「はい」に設定されている場合、Campaign JMX コネクター・サーバーのリスニング・プロトコルです。

この JMX モニターは、Interact コンタクトとレスポンスの履歴モジュール 専用です。

### デフォルト値

JMXMP

#### 有効な値

JMXMP | RMI

### 使用可能性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

### ポート

説明

monitorEnabledForInteract が「はい」に設定されている場合、Campaign JMX コネクター・サーバーのリスニング・ポートです。

この JMX モニターは、Interact コンタクトとレスポンスの履歴モジュール 専用です。

デフォルト値

2004

有効な値

1025 から 65535 までの整数。

### 使用可能性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

## Campaign | ProductReindex

オファーの作成者は、対象のオファーと関連付ける製品を指定できます。オファー と関連付けることのできる製品リストが変更される場合、オファー/製品の関連付け を更新する必要があります。Campaign > ProductReindex カテゴリーのプロパティー は、その更新頻度、および最初に更新を実行する時刻を指定します。

#### startTime

説明

startTime プロパティーは、オファー/製品の関連付けが最初に更新される 時刻を指定します。最初の更新日付は Campaign サーバーを始動した後の日 付となり、その後の更新は間隔パラメーターで指定した間隔で行われます。 HH:mm:ss という形式で、24 時間クロックが使用されます。

Campaign を初めて始動する場合、以下の規則に従って、startTime プロパ ティーが使用されます。

- startTime で指定される時刻が将来の場合、最初のオファー/製品関連付けの更新は現在の startTime の日付で行われます。
- startTime が現在の日付で既に過ぎている場合、最初の更新は翌日の startTime か、現在時刻から間隔分経過した時刻のどちらか早い時刻に行 われます。

デフォルト値

12:00:00 (正午)

### 間隔

#### 説明

間隔プロパティーは、オファー/製品の関連付けの更新間隔を分単位で指定 します。更新は、Campaign サーバーを開始した後の日付で、startTime パ ラメーターで指定された時刻が初めて来ると行われます。

デフォルト値

3600 (60 時間)

## Campaign | unicaACListener

Campaign LunicaACListener プロパティーは、ロギング・レベル、いくつかのアク セス権、言語エンコード方式、オペレーティング・システム・スレッド数、および Campaign リスナーのプロトコル、ホスト、ポートを指定します。これらのプロパテ ィーを設定する必要があるのは、それぞれの Campaign インスタンスについて一度 限りです。各パーティションに関して設定する必要はありません。

### enableWindowsImpersonation

説明

enableWindowsImpersonation プロパティーは、Windows 偽装を Campaign で有効にするかどうかを指定します。

Windows 偽装を使用する場合には、値を TRUE に設定します。ファイル・ アクセスのために Windows レベルのセキュリティー権限を利用する場合、 Windows 偽装を個別に構成する必要があります。

Windows 偽装を使用しない場合には、値を FALSE に設定します。

デフォルト値

FALSE

### 有効な値

TRUE | FALSE

## enableWindowsEventLogging

### 説明

「Campaign」>「unicaACListener」>「enableWindowsEventLogging」プロパ ティーは、Windows イベント・ログへのロギングを制御します。このプロ パティーを TRUE に設定すると、Windows イベント・ログにログが記録さ れます。

### デフォルト値

FALSE

### 有効な値

TRUE | FALSE

## serverHost

### 説明

serverHost プロパティーは、Campaign リスナーがインストールされている マシンの名前または IP アドレスを指定します。Campaign リスナーが、 IBM EMM がインストールされているのと同じマシン上にインストールさ れていない場合、Campaign リスナーがインストールされているマシンのマ シン名または IP アドレスにこの値を変更してください。

### デフォルト値

localhost

### logMaxBackupIndex

説明

logMaxBackupIndex プロパティーは、保持可能なバックアップ・ファイル数 を指定します。このファイル数を超えると、最も古いバックアップ・ファイ ルが削除されます。このプロパティーを 0 (ゼロ) に設定すると、Campaign ではバックアップ・ファイルは作成されず、logMaxFileSize プロパティー で指定したサイズに達するとログ・ファイルでロギングが停止します。

このプロパティーに数値 (N) を指定すると、logMaxFileSize プロパティー で指定したサイズにログ・ファイル (File) が達すると、Campaign は既存 のバックアップ・ファイル (File.1 ... File.N-1) の名前を File.2 ... File.N に名前変更し、現在のログ・ファイル File.1 も名前変更してから 閉じ、File という名前の新しいログ・ファイルを開始します。

#### デフォルト値

1 (バックアップ・ファイルが1 つ作成されます)

### logStringEncoding

#### 説明

logStringEncoding プロパティーは、すべてのログ・ファイルで使用するエ ンコードを制御します。この値は、オペレーティング・システムで使用する エンコードと同じでなければなりません。複数のロケールを使用する環境で は、UTF-8 が優先設定となります。

この値を変更する場合、複数のエンコードが 1 つのファイルに書き込まれ ることがないように、空にするか、すべての関連するログ・ファイルを削除 する必要があります。

注: WIDEUTF-8 はこの設定ではサポートされていません。

### デフォルト値

native

#### 有効な値

「*Campaign 管理者ガイド*」の『Campaign の文字エンコード』を参照して ください。

### systemStringEncoding

### 説明

systemStringEncoding プロパティーは、オペレーティング・システムとの 間で送受信する値 (ファイル・システムのパスやファイル名など) を解釈す るために Campaign で使用するエンコードを示します。ほとんどの場合、こ の値を native に設定することができます。複数のロケールを使用する環境 では、UTF-8 を使用します。

複数のエンコードをコンマで区切って指定することができます。以下に例を 示します。

UTF-8, ISO-8859, CP950

注: WIDEUTF-8 はこの設定ではサポートされていません。

### デフォルト値

native

### 有効な値

```
「Campaign 管理者ガイド」の『Campaign の文字エンコード』を参照して
ください。
```

## loggingLevels

説明

```
「Campaign」>「unicaACListener」>「loggingLevels」プロパティーは、ロ
グ・ファイルに書き込む詳細度を制御します。
```

#### デフォルト値

MEDIUM

#### 有効な値

- LOW
- MEDIUM
- HIGH

## maxReuseThreads

### 説明

「Campaign」>「unicaACListener」>「maxReuseThreads」プロパティーは、 Campaign リスナー・プロセス (unica\_aclsnr) が再使用するためにキャッ シュに入れるオペレーティング・システム・スレッドの数を設定します。

スレッドの割り振りによって生じるオーバーヘッドを削減する場合や、アプ リケーションの依頼に応じてスレッドを解放できないようにする可能性のあ るオペレーティング・システムの場合には、キャッシュを使用するのがベス ト・プラクティスと言えます。

## デフォルト値

0(ゼロ)。キャッシュが無効になります

#### **logMaxFileSize**

### 説明

logMaxFileSize プロパティーは、ログ・ファイルの最大サイズをバイト単 位で指定します。このサイズを超えると、ログ・ファイルはバックアップ・ ファイルにロールオーバーされます。

### デフォルト値

 $10485760 \ (10 \ MB)$ 

### windowsEventLoggingLevels

説明

windowsEventLoggingLevels プロパティーは、Windows イベント・ログ・ファイルに書き込む詳細度を重大度に基づいて制御します。

デフォルト値

MEDIUM

有効な値

- LOW
- MEDIUM
- HIGH
- ALL

ALL レベルには、診断のためのトレース・メッセージが含まれます。

### serverPort

説明

serverPort プロパティーは、Campaign リスナーがインストールされるポートを指定します。

デフォルト値

4664

### useSSL

説明

useSSL プロパティーは、Campaign リスナーと Campaign Web アプリケー ションの間の通信に Secure Sockets Layer を使用するかどうかを指定しま す。

このカテゴリーの serverPort2 プロパティーの説明も参照してください。

デフォルト値

no

### 有効な値

yes no

#### serverPort2

説明

serverPort2 プロパティーは、同じカテゴリーに属する useSSLForPort2 プ ロパティーと組み合わせると、Campaign のリスナーとフローチャート・プ ロセスとの間の通信に SSL を使用することを指定できます。これは、同カ テゴリーの serverPort プロパティーおよび useSSL プロパティーによって 指定される Campaign の Web アプリケーションとリスナーとの間の通信と は別個に指定されます。

Campaign コンポーネント間のすべての通信 (Web アプリケーションとリス ナーの間の通信とリスナーとサーバーの間の通信) は、以下のいずれかの条 件の下で useSSL プロパティーによって指定されるモードを使用します。

• serverPort2 がデフォルト値 0 に設定されている場合、または

- serverPort2 が serverPort と同じ値に設定されている場合、または
- useSSLForPort2 が useSSL と同じ値に設定されている場合

このような場合、2 番目のリスナー・ポートは有効にならず、Campaignのリ スナーとフローチャート (サーバー) プロセスとの間の通信、およびリスナ ーと Campaign の Web アプリケーションとの間の通信は、useSSL プロパ ティーの値に応じて、同じモード (いずれも非 SSL、またはいずれも SSL) を使用します。

リスナーは、次の条件がいずれも満たされるときに、2 つの異なる通信モードを使用します。

- serverPort2 が serverPort の値と異なる 0 以外の値に設定されており、かつ
- useSSLForPort2 が useSSL の値とは異なる値に設定されている

この場合、2 番目のリスナー・ポートが有効になり、リスナーとフローチャ ート・プロセスは useSSLForPort2 で指定された通信モードを使用します。

Campaign Web アプリケーションは、リスナーと通信するとき、常に useSSL によって指定された通信モードを使用します。

SSL が Campaign のリスナーとフローチャート・プロセスとの間の通信に 対して有効である場合、このプロパティー (serverPort2) の値を適切なポー トに設定します。

デフォルト値

0

#### useSSLForPort2

### 説明

このカテゴリーの serverPort2 プロパティーの説明を参照してください。

### デフォルト値

FALSE

### 有効な値

TRUE、 FALSE

### キープアライブ (keepalive)

### 説明

キープアライブ (keepalive) プロパティーを使用して、Campaign Web ア プリケーション・サーバーがキープアライブ・メッセージを送信する頻度を 秒単位で指定します。その送信時以外は、Campaign リスナーへのソケット 接続は非アクティブな状態になります。

キープアライブ (keepalive) 構成パラメーターを使用すると、Web アプリ ケーションとリスナー (例えば、ファイアウォール) との間で非アクティブ な接続は閉じるように設定されている環境で、アプリケーションが非アクテ ィブな状態にある期間であっても、ソケット接続を開いたままにすることが できます。 ソケットにアクティビティーが存在すると、キープアライブ期間は自動的に リセットされます。 Web アプリケーション・サーバーの DEBUG ロギン グ・レベルの場合、campaignweb.log では、キープアライブ・メッセージが リスナーに送信する際にそのことが表示されます。

#### デフォルト値

0。キープアライブ機能は無効です

#### 有効な値

正整数

## Campaign | unicaACOOptAdmin

これらの構成プロパティーは、unicaACOOptAdmin ツールの設定を定義します。

#### getProgressCmd

説明

```
内部で使用される値を指定します。この値を変更しないでください。
```

### デフォルト値

optimize/ext\_optimizeSessionProgress.do

### 有効な値

optimize/ext\_optimizeSessionProgress.do

### runSessionCmd

### 説明

内部で使用される値を指定します。この値を変更しないでください。

### デフォルト値

optimize/ext\_runOptimizeSession.do

### 有効な値

optimize/ext\_runOptimizeSession.do

### loggingLevels

#### 説明

loggingLevels プロパティーは、Contact Optimization コマンド・ライン・ ツールのログ・ファイルに書き込む詳細の量を、重大度に基づいて制御しま す。選択可能なレベルは、LOW、MEDIUM、HIGH、および ALL で、LOW が最小の詳細を提供します (つまり、最も重大なメッセージだけが書き込ま れます)。 ALL レベルはトレース・メッセージを含み、主に診断を目的と しています。

#### デフォルト値

HIGH

#### 有効な値

LOW | MEDIUM | HIGH | ALL

## cancelSessionCmd

### 説明

```
内部で使用される値を指定します。この値を変更しないでください。
```

### デフォルト値

optimize/ext\_stopOptimizeSessionRun.do

### 有効な値

optimize/ext\_stopOptimizeSessionRun.do

## logoutCmd

説明

```
内部で使用される値を指定します。この値を変更しないでください。
```

### デフォルト値

optimize/ext\_doLogout.do

### 有効な値

optimize/ext\_doLogout.do

## getProgressWaitMS

## 説明

この値は、進行状況に関する情報を取得するための、Web アプリケーションに対する 2 回の連続したポーリングの間のミリ秒数 (整数) に設定します。この値は、getProgressCmd を設定しない場合は使用されません。

デフォルト値

1000

### 有効な値

ゼロより大きい整数

## Campaign | server

このカテゴリーのプロパティーは、内部で使用される URL を指定し、変更する必要はありません。

## fullContextPath

### 説明

fullContextPath は、アプリケーション・サーバーのリスナーのプロキシー と通信するために Campaign フローチャートで使用される URL を指定しま す。このプロパティーはデフォルトでは定義されておらず、その場合、シス テムは動的に URL を決定します。 Marketing Platform が IBM Tivoli Web アクセス制御プラットフォームと統合される場合、このプロパティーを Tivoli の Campaign URL に設定する必要があります。

## デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

# Campaign | ロギング (logging)

このカテゴリーのプロパティーは、Campaign ログ・プロパティー・ファイルの場所 を指定します。

## log4jConfig

説明

log4jConfig プロパティーは、Campaign ログ特性ファイル campaign\_log4j.properties の場所を指定します。 Campaign ホーム・ディ レクトリーに対する相対パスを、ファイル名を含めて指定します。UNIX の 場合にはスラッシュ (/) を使用し、Windows の場合には円記号 (¥) を使用 します。

## デフォルト値

./conf/campaign\_log4j.properties

# 付録 B. Campaign オブジェクト名での特殊文字

Campaign のオブジェクトの名前に関して、特定の要件がある場合があります。特殊 文字のいくつかは、Campaign オブジェクト名としてサポートされていません。加え て、オブジェクトの中には特定の命名上の制約があるものもあります。

注:オブジェクト名をデータベースに渡す場合(例えば、フローチャート名を含むユ ーザー変数を使用する場合)、特定のデータベースでサポートされている文字だけで オブジェクト名が構成されていることを確認する必要があります。そうしないと、 データベース・エラーを受け取ります。

# サポートされていない特殊文字

次のオブジェクトの名前には、その下の表でリストされている文字を使用しないで ください。

- キャンペーン
- フローチャート
- フォルダー
- オファー
- オファー・リスト
- セグメント
- セッション

表 76. サポートされていない特殊文字

文字	説明
%	パーセント
*	アスタリスク
?	疑問符
	パイプ (垂直バー)
:	עחב
,	コンマ
<	より小記号
>	より大記号
&	アンパーサンド
١	円記号
/	スラッシュ
"	二重引用符
タブ	タブ

## 命名上の制約を持たないオブジェクト

Campaign の次のオブジェクトには、その名前に使用される文字に関する制約があり ません。

- オーディエンス・レベル (オーディエンス・レベルのフィールド 名には命名上の 制約があります)
- カスタム属性の表示 名 (カスタム属性の内部 名には命名上の制約があります)
- オファー・テンプレート

## 特定の命名上の制約を持つオブジェクト

Campaign の次のオブジェクトには、その名前に関する特定の制約があります。

- カスタム属性の内部 名 (カスタム属性の表示 名には命名上の制約がありません)
- オーディエンス・レベルのフィールド名(オーディエンス・レベルの名前には命名上の制約がありません)
- ・セル
- ユーザー定義フィールド
- ユーザー・テーブルおよびフィールドの名前

これらのオブジェクトについては、名前に関する次の制約があります。

- 英字、数字、下線 (\_) 文字だけで構成される
- 先頭文字は英字

ローマ字を使用しない言語の場合、Campaign は構成済みのストリングのエンコーディングでサポートされている文字をすべてサポートします。

**注:** ユーザー定義フィールド名には、追加の制約があります。詳しくは、『ユーザ ー定義フィールドの命名上の制約』を参照してください。

## ユーザー定義フィールドの命名上の制約

ユーザー定義フィールド名には、以下の制約があります。

- ユーザー定義項目の名前は、以下のタイプの名前と同じにすることはできません。
  - INSERT、UPDATE、DELETE、WHERE などのデータベース・キーワード。
  - マップされたデータベース表内のフィールド。
- ユーザー定義項目の名前に Yes や No という単語を使用することはできません。

これらの命名上の制約に従わないと、正しくない名前のユーザー定義フィールドが 呼び出された場合に、データベース・エラーが発生して接続が切断される可能性が あります。

注: ユーザー定義フィールド名には、文字に関する特定の制約もあります。詳しく は、387ページの『付録 B. Campaign オブジェクト名での特殊文字』を参照してく ださい。
# 付録 C. ユーザー・テーブルにおいてサポートされるデータ型

このトピックでは、それぞれのサポート対象データベースで作成されたユーザー・ テーブルにおいて Campaign がサポートするデータ型をリストします。ここにリス トされていない他のデータ型は、サポートされません。 Campaign 内のユーザー・ テーブルをマッピングする前に、サポートされるデータ型だけがテーブルで使用さ れていることを確認してください。

注: テーブルのデータ型 DATE、DATETIME、または TIMESTAMP の列は、IBM Campaign フローチャート内でマッピングされると、DATE、DATETIME、または TIMESTAMP が大括弧に入れられた形式の TEXT 型として示されます。例えば、 [DELIM\_D\_M\_Y] や [DT\_DELIM\_D\_M\_Y] のようになります。フローチャート内の テーブル・マッピングでデータ型が TEXT として示されても、アプリケーションは 形式を認識してそれに応じて処理します。これらの 3 つのデータ型や、日付または 時刻に関連したデータ型の列を、オーディエンス ID 列として TEXT オーディエン ス・レベルにマッピングしないでください。日付に関連した列を TEXT オーディエ ンス・レベルとしてマッピングすることはサポートされていません。

#### DB2

bigint

char

date

decimal

double

float

int

numeric

real

smallint

timestamp

varchar

#### Netezza

bigint

byteint

char(n) [1]

date

float(p)

int

nchar(n) [2]

numeric(p, s)

nvarchar(n) [2]

smallint

timestamp

varchar(n) [1]

- 1. 同じテーブル内で nchar または nvarchar と共に使用する場合はサポートされ ません。
- 2. 同じテーブル内で char または varchar と共に使用する場合はサポートされません。

#### Oracle

DATE

FLOAT (p)

NUMBER [ (p , s) ] [1]

TIMESTAMP

#### VARCHAR2(size BYTE)

Campaign > partitions > partitionN > dataSources > [dataSourceName] >
UseSQLToRetrieveSchema データ・ソース・プロパティーを TRUE に設定してい
ない場合には、NUMBER を使用する際に精度が必要になります。精度を指定せ
ず、このデータ・ソース・プロパティーも設定しない場合、Campaign は 15 桁
の精度を保持するデータ型に値を保管できると想定します。このとき、15 桁を
超える精度の値がフィールドに保持されている場合には、その値が Campaign に
渡されるときに精度が失われるため、問題となります。

#### **SQL** Server

bigint

bit

char(n) [1]

datetime

decimal

float

int

nchar [2]

numeric

nvarchar [2]

real

smallint

text

tinyint

varchar(n) [1]

- 1. 同じテーブル内で nchar または nvarchar と共に使用する場合はサポートされ ません。
- 2. 同じテーブル内で char または varchar と共に使用する場合はサポートされません。

#### Teradata

bigint

byteint

char

date

decimal

float

int

numeric

smallint

timestamp

varchar

# 付録 D. 国際化対応およびエンコード

このセクションには、文字エンコードに関する情報およびデータベースの言語依存 考慮事項に関する情報と、Campaign および PredictiveInsight によってサポートされ るエンコードのリストが記載されています。

#### **Campaign での文字エンコード**

このトピックでは、Campaign がサポートしているエンコードについて取り上げま す。

ほとんどのオペレーティング・システムで、Campaign は GNU iconv ライブラリー を使用します。 IBM には、AIX インストール済み環境用の iconv が付属していな いことに注意してください。 AIX システムの場合は、適切な文字セットを入手する 必要があります。リストについては、以下の「ナショナル・ランゲージ・サポー ト・ガイドおよびリファレンス」を参照してください。

- http://moka.ccr.jussieu.fr/doc\_link/en\_US/a\_doc\_lib/aixprggd/nlsgdrf/ iconv.htm#d722e3a267mela
- http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/pseries/v5r3/index.jsp? topic=/com.ibm.aix.nls/doc/nlsgdrf/nlsgdrf.htm

このセクションには、Campaign でサポートされるエンコードがリストされていま す。これらのリストで示される値は、214ページの『Campaign の言語とロケールの プロパティー値の設定』に記載した Campaign 国際化対応パラメーターを設定する 場合に有効な値です。以下の点に注意してください。

- エンコード・グループ内の各箇条書きは、同じエンコードを表す異なる名前をスペース区切りでリストしたものです。名前が複数リストされた箇条書きに含まれる各名前は、グループ内の他のエンコードの別名です。システムでのエンコードの使用状況に応じて、Campaign構成パラメーターをグループ内の値のいずれかに設定できます。
- Campaign StringEncoding 構成パラメーターの値を設定する際、ほとんどの場合 は疑似エンコードの WIDEUTF-8 が推奨値です。ただし、以下のリストに記載され たエンコードのいずれかを使用できます。また、データベースが DB2 または SQL Server の場合は、このリストに記載されたエンコードのいずれかではなく、 コード・ページを使用する必要があります。詳しくは、コンテキスト・ヘルプま たは「Marketing Platform 管理者ガイド」を参照してください。
- Campaign は、他のエンコードとは扱いが少し異なる 2 つの文字エンコード (「ASCII」および「UTF-8」)を使用します。両方とも大/小文字の区別がありま す。これらのエンコードは、AIX を含め、すべてのプラットフォームで受け入れ られます。 Campaign におけるこれらのエンコードの性質は、テーブル・マッピ ング時の列幅とトランスコーディング操作に関して少し異なります。

可能なロケールの略語の一部を括弧内に示します。アラビア語 (ar)、アルメニア語 (hy)、中国語 (zh)、英語 (en)、フランス語 (fr)、グルジア語 (ka)、ギリシャ語 (el)、

ヘブライ語 (he)、アイスランド語 (is)、日本語 (ja)、韓国語 (ko)、ラオ語 (lo)、ル ーマニア語 (ro)、タイ語 (th)、トルコ語 (tr)、ベトナム語 (vi)。

#### 西ヨーロッパ

- CP819 IBM819 ISO-8859-1 ISO-IR-100 ISO8859-1 ISO\_8859-1 ISO\_8859-1:1987 L1 LATIN1 CSISOLATIN1
- CP1252 MS-ANSI WINDOWS-1252
- 850 CP850 IBM850 CSPC850MULTILINGUAL
- MAC MACINTOSH MACROMAN CSMACINTOSH
- NEXTSTEP
- HP-ROMAN8 R8 ROMAN8 CSHPROMAN8

#### Unicode エンコード

- ISO-10646-UCS-2 UCS-2 CSUNICODE
- UCS-2BE UNICODE-1-1 UNICODEBIG CSUNICODE11
- UCS-2LE UNICODELITTLE
- ISO-10646-UCS-4 UCS-4 CSUCS4
- UTF-8
- UCS-4BE
- UCS-4LE
- UTF-16
- UTF-16BE
- UTF-16LE
- UTF-32
- UTF-32BE
- UTF-32LE
- UNICODE-1-1-UTF-7 UTF-7 CSUNICODE11UTF7
- UCS-2-INTERNAL
- UCS-2-SWAPPED
- UCS-4-INTERNAL
- UCS-4-SWAPPED
- JAVA
- C99

## アラビア語

- ARABIC ASMO-708 ECMA-114 ISO-8859-6 ISO-IR-127 ISO8859-6 ISO\_8859-6 ISO\_8859-6:1987 CSISOLATINARABIC
- CP1256 MS-ARAB WINDOWS-1256
- MACARABIC
- CP864 IBM864 CSIBM864

## アルメニア語

• ARMSCII-8

#### バルト海沿岸語

- CP1257 WINBALTRIM WINDOWS-1257
- CP775 IBM775 CSPC775BALTIC
- ISO-8859-13 ISO-IR-179 ISO8859-13 ISO\_8859-13 L7 LATIN7

#### ケルト語

• ISO-8859-14 ISO-CELTIC ISO-IR-199 ISO8859-14 ISO\_8859-14 ISO\_8859-14:1998 L8 LATIN8

#### 中央ヨーロッパ

- ISO-8859-2 ISO-IR-101 ISO8859-2 ISO\_8859-2 ISO\_8859-2:1987 L2 LATIN2 CSISOLATIN2CP1250 MS-EE WINDOWS-1250
- MACCENTRALEUROPE
- 852 CP852 IBM852 CSPCP852
- MACCROATIAN

## 中国語 (簡体字および繁体字)

- ISO-2022-CN CSIS02022CN
- IS02022CNIS0-2022-CN-EXT

## 中国語 (簡体字)

- CN GB\_1988-80 ISO-IR-57 ISO646-CN CSISO57GB1988
- CHINESE GB\_2312-80 ISO-IR-58 CSIS058GB231280
- CN-GB-ISOIR165 ISO-IR-165
- CN-GB EUC-CN EUCCN GB2312 CSGB2312
- CP936 GBK
- GB18030
- HZ HZ-GB-2312

#### 中国語 (繁体字)

- EUC-TW EUCTW CSEUCTWB
- IG-5 BIG-FIVE BIG5 BIGFIVE CN-BIG5 CSBIG5
- CP950
- BIG5-HKSCS BIG5HKSCS

#### キリル文字

• CYRILLIC ISO-8859-5 ISO-IR-144 ISO8859-5 ISO\_8859-5 ISO\_8859-5:1988 CSISOLATINCYRILLIC

- CP1251 MS-CYRL WINDOWS-1251
- MACCYRILLIC
- KOI8-R CSKOI8R
- K0I8-U
- KOI8-RU
- K0I8-T
- 866 CP866 IBM866 CSIBM866
- 855 CP855 IBM855 CSIBM855
- CP1125 ("PC, Cyrillic, Ukrainian")
- MACUKRAINE

#### 英語

- ANSI\_X3.4-1968 ANSI\_X3.4-1986 ASCII CP367 IBM367 ISO-IR-6 ISO646-US ISO\_646.IRV:1991 US US-ASCII CSASCII
- 437 CP437 IBM437 CSPC8CODEPAGE437

#### グルジア語

- GEORGIAN-ACADEMY
- GEORGIAN-PS

#### ギリシャ語

- CP1253 MS-GREEK WINDOWS-1253
- ECMA-118 ELOT\_928 GREEK GREEK8 ISO-8859-7 ISO-IR-126 ISO8859-7 ISO\_8859-7 ISO\_8859-7:1987 CSISOLATINGREEK
- MACGREEK
- CP737869 CP-GR CP
- 869 IBM869 CSIBM869

## ヘブライ語

- HEBREW ISO-8859-8 ISO-IR-138 ISO8859-8 ISO\_8859-8 ISO\_8859-8:1988 CSISOLATINHEBREW
- CP1255 MS-HEBR WINDOWS-1255
- 862 CP862 IBM862 CSPC862LATINHEBREW
- MACHEBREW

## アイスランド語

- MACICELAND
- 861 CP-IS CP861 IBM861 CSIBM861

#### 日本語

JISX0201-1976 JIS\_X0201 X0201 CSHALFWIDTHKATAKANA

- ISO-IR-87 JIS0208 JIS\_C6226-1983 JIS\_X0208 JIS\_X0208-1983 JIS\_X0208-1990 X0208 CSIS087JISX0208
- ISO-IR-159 JIS\_X0212 JIS\_X0212-1990 JIS\_X0212.1990-0 X0212 CSIS0159JISX02121990
- EUC-JP EUCJP EXTENDED\_UNIX\_CODE\_PACKED\_FORMAT\_FOR\_JAPANESE CSEUCPKDFMTJAPANESE
- MS\_KANJI SHIFT-JIS SHIFT\_JIS SJIS CSSHIFTJI
- ISO-IR-14 ISO646-JP JIS\_C6220-1969-R0 JP CSISO14JISC6220R0
- CP932
- ISO-2022-JP CSIS02022JP
- ISO-2022-JP-1
- ISO-2022-JP-2 CSIS02022JP2

#### 韓国語

- EUC-KR EUCKR CSEUCKR
- CP949 UHC
- ISO-IR-149 KOREAN KSC\_5601 KS\_C\_5601-1987 KS\_C\_5601-1989 CSKSC56011987
- CP1361 JOHAB
- ISO-2022-KR CSIS02022KR

## ラオ語

ラオ語はタイ語と同じアルファベットを使用することに注意してください。

- MULELAO-1
- CP1133 IBM-CP1133

## 北ヨーロッパ

- ISO-8859-4 ISO-IR-110 ISO8859-4 ISO\_8859-4 ISO\_8859-4:1988 L4 LATIN4 CSISOLATIN4
- ISO-8859-10 ISO-IR-157 ISO8859-10 ISO\_8859-10 ISO\_8859-10:1992 L6 LATIN6 CSISOLATIN6

## ルーマニア語

• MACROMANIA

#### 南ヨーロッパ

- ISO-8859-3 ISO-IR-109 ISO8859-3 ISO\_8859-3 ISO\_8859-3:1988 L3 LATIN3 CSISOLATIN3
- CP853

#### タイ語

• MACTHAI

- ISO-IR-166 TIS-620 TIS620 TIS620-0 TIS620.2529-1 TIS620.2533-0 TIS620.2533-1
- CP874 WINDOWS-874

#### トルコ語

- CP1254 MS-TURK WINDOWS-1254
- MACTURKISH
- 857 CP857 IBM857 CSIBM857
- ISO-8859-9 ISO-IR-148 ISO8859-9 ISO\_8859-9 ISO\_8859-9:1989 L5 LATIN5 CSISOLATIN5

#### ベトナム語

- CP1258 WINDOWS-1258
- TCVN TCVN-5712 TCVN5712-1 TCVN5712-1:1993
- VISCII VISCII1.1-1 CSVISCII

#### その他

- ISO-8859-15 ISO-IR-203 ISO8859-15 ISO\_8859-15 ISO\_8859-15:1998
- ISO-8859-16 ISO-IR-226 ISO8859-16 ISO 8859-16 ISO 8859-16:2000
- CP858(IBM: "Multilingual with euro")
- 860 (IBM: "Portugal Personal Computer")CP860 IBM860 CSIBM860
- 863 (IBM: "Canadian French Personal Computer") CP863 IBM863 CSIBM863
- 865 (IBM: "Nordic Personal Computer")CP865 IBM865 CSIBM865

## 日付と時刻の形式

日付と時刻の形式の構成プロパティー (DateFormat、DateOutputFormatString、 DateTimeFormat、および DateTimeOutputFormatString)の構成方法を判別するに は、以下のセクションの情報を利用してください。

#### DateFormat および DateTimeFormat の形式

Campaign を複数ロケール用に構成しない場合は、DateFormat 構成パラメーターお よび DateTimeFormat 構成パラメーターの値を、DATE マクロで指定される形式のい ずれかに設定することができます (次の表を参照)。

ただし、Campaign を複数ロケール用に構成する必要がある場合 (ユーザーの言語と ロケールがさまざまである場合) は、3 文字の月 (MMM)、%b (月の省略名)、また は %B (月の完全な名前) が含まれる日付形式を使用しないでください。代わりに、 月を表す数値を使う区切り形式または固定形式を使用してください。複数ロケー ル・フィーチャーについて詳しくは、211 ページの『複数ロケール・フィーチャー について』を参照してください。

表 77. 日付形式

形式	説明	例
MM	月 (2 桁)	01, 02, 03,, 12
MMDD	月 (2 桁) と日 (2 桁)	3月31日は0331
MMDDYY	月 (2 桁)、日 (2 桁)、年 (2 桁)	1970 年 3 月 31 日は 033170
MMDDYYYY	月 (2 桁)、日 (2 桁)、年 (4 桁)	1970 年 3 月 31 日は 03311970
DELIM_M_D	月と日 (区切り文字付き)	March 31、3/31、または
DateTimeFormat の場合は次 を使用:		03-31
DT_DELIM_M_D		
DELIM_M_D_Y DateTimeFormat の場合は次	月、日、年 (区切り文字付き)	March 31, 1970 または 3/31/70
を使用:		
DT_DELIM_M_D_Y		
DELIM_Y_M	年と月 (区切り文字付き)	1970 March, 70-3, 1970/3
DateTimeFormat の場合は次 を使用:		
DT_DELIM_Y_M		
DELIM_Y_M_D	年、月、日 (区切り文字付き)	1970 Mar 31 または 70/3/31
DateTimeFormat の場合は次 を使用:		
DT_DELIM_Y_M_D		
YYMMM	年 (2 桁) と月 (3 文字)	70MAR
YYMMMDD	年 (2 桁)、月 (3 文字)、日 (2 桁)	70MAR31
ΥY	年 (2 桁)	70
YYMM	年 (2 桁) と月 (2 桁)	7003
YYMMDD	年 (2 桁)、月 (2 桁)、日 (2 桁)	700331
YYYYMMM	年 (4 桁) と月 (3 文字)	1970MAR
YYYYMMMDD	年 (4 桁)、月 (3 文字)、日 (2 桁)	1970MAR31
үүүү	年 (4 桁)	1970
YYYYMM	年 (4 桁) と月 (2 桁)	197003
YYYYMMDD	年 (4 桁)、月 (2 桁)、日 (2 桁)	19700331

表 77. 日付形式 (続き)

形式	説明	例
DELIM_M_Y	月と年 (区切り文字付き)	3-70, 3/70, Mar 70, March
DateTimeFormat の場合は次 を使用:		1270
DT_DELIM_M_Y		
DELIM_D_M	日と月 (区切り文字付き)	31-3、31/3、31 March
DateTimeFormat の場合は次 を使用:		
DT_DELIM_D_M		
DELIM_D_M_Y	日、月、年 (区切り文字付き)	31-MAR-70, 31/3/1970, 31
DateTimeFormat の場合は次 を使用:		03 70
DT_DELIM_D_M_Y		
DD	日 (2 桁)	31
DDMMM	日 (2 桁) と月 (3 文字)	31MAR
DDMMMYY	日 (2 桁)、月 (3 文字)、年 (2 桁)	31MAR70
DDMMMYYYY	日 (2 桁)、月 (3 文字)、年 (4 桁)	31MAR1970
DDMM	日 (2 桁) と月 (2 桁)	3103
DDMMYY	日 (2 桁)、月 (2 桁)、年 (2 桁)	310370
DDMMYYYY	日 (2 桁)、月 (2 桁)、年 (4 桁)	31031970
ММҮҮ	月 (2 桁) と年 (2 桁)	0370
ΜΜΥΥΥΥ	月 (2 桁) と年 (4 桁)	031970
МММ	月 (3 文字)	MAR
MMMDD	月 (3 文字) と日 (2 桁)	MAR31
MMMDDYY	月 (3 文字)、日 (2 桁)、年 (2 桁)	MAR3170
MMMDDYYYY	月 (3 文字)、日 (2 桁)、年 (4 桁)	MAR311970
MMMYY	月 (3 文字) と年 (2 桁)	MAR70
MMMYYYY	月 (3 文字) と年 (4 桁)	MAR1970
MONTH	月	January、February、March な ど、または Jan、Feb、Mar など
WEEKDAY	曜日	Sunday、Monday、Tuesday な ど (Sunday = 0)

表 77. 日付形式 (続き)

形式	説明	例
WKD	曜日の省略名	Sun、Mon、Tues など
		(Sun = 0)

# DateOutputFormatString および DateTimeOutputFormatStringの形式

Campaign を複数ロケール用に構成しない場合は、DateOutputFormat 構成パラメー ターおよび DateTimeOutputFormat 構成パラメーターの値を、DATE\_FORMAT マクロ の format\_str に指定される形式のいずれかに設定することができます (次の表を 参照)。

ただし、Campaign を複数ロケール用に構成する必要がある場合(つまり、ユーザーの言語とロケールがさまざまである場合)は、3 文字の月(MMM)、%b(月の省略名)、または%B(月の完全な名前)が含まれる日付形式を使用しないでください。 代わりに、月を表す数値を使う区切り形式または固定形式のどちらかを使用する必要があります。複数ロケール・フィーチャーについて詳しくは、211ページの『複数ロケール・フィーチャーについて』を参照してください。

- %a 曜日の省略名
- %A 曜日の完全な名前
- %b 月の省略名
- \*B 月の完全な名前
- %c ロケールに適合した日時表記
- %d 月内の日 (01 31)
- \*H 24 時間形式の時間 (00 23)
- %I 12 時間形式の時間 (01 12)
- %j 年間通算日 (001 366)
- %m 月番号 (01 12)
- %M 分 (00 59)
- %p 現行ロケールの 12 時間クロックのための午前/午後の標識
- %S 秒 (00 59)
- & 日曜日を最初の曜日とした年間通算週 (00 51)
- %w 曜日 (0 6: 日曜日が 0)
- &W 月曜日を最初の曜日とした年間通算週 (00 51)

- %x 現行ロケールの日付表記
- %X 現行ロケールの時間表記
- %y 年 (2 桁: 00 99)
- %Y 年 (4 桁)

%z, %Z - タイム・ゾーンの名前または略語。タイム・ゾーンが不明の場合は出力なし。

#### %% - % 記号

注: 形式の一部であり、かつ先頭にパーセント記号(%)のない文字は、そのまま出 カストリングにコピーされます。フォーマット設定ストリングは16 バイト以下に 収まらなければなりません。先行 0 を除去するには、# 文字を使用します。例え ば、%d では(01 - 31)の範囲の2 桁の数値が生成されますが、%#d にすると、必 要に応じて1 桁または2 桁の数値(1 - 31)が生成されます。同様に、%m では (01 - 12)が生成されますが、%#m にすると(1 - 12)が生成されます。

# 付録 E. Campaign のエラー・コード

Campaign は 2 つのサーバーといくつかの環境変数を使用するクライアント/サーバー・アプリケーションであり、このアプリケーションが適切に機能するためにはサーバーと環境変数を構成する必要があります。

Campaign は、コード番号とエラー・テキストから成るエラー・メッセージのあるエ ラー・イベントが発生すると、そのエラー・イベントをユーザーに通知します。

ユーザー・アクセス権限が無効であるというエラー・メッセージが表示された場合 は、そのアクションを実行するための正しい特権が Marketing Platform で割り当て られていない可能性があります。詳しくは、「*Marketing Platform 管理者ガイド*」を 参照してください。

Campaign を使用中にエラーが発生した場合は、IBM 技術サポートに連絡を取る前 に、このセクションの記述を読み、解決策を実施してみてください。エラーがここ に記載されていない場合、または解決策が失敗した場合は、管理者に問い合わせる か、IBM 技術サポートにご連絡ください。

## Campaign エラー・コード

次の表は、Campaign によって生成されるエラー・メッセージをリストしたもので す。

コード	エラーの説明
301	要求されたメモリーを割り当てることができません。
303	名前が組み込み関数名、演算子、またはキーワードと競合します。
304	名前が長すぎるか、無効な文字が含まれています。
305	名前付き変数に値が割り当てられていません。
306	式に構文エラーがあります。
308	保存された式をファイルからロードするときにエラーが発生しました (ラー ジ・メモリー)。
309	保存された式をファイルからロードするときにエラーが発生しました (不明 な関数)。
310	保存された式をファイルからロードするときにエラーが発生しました (ラン ダム・オブジェクト)。
311	保存されたオブジェクトをファイルからロードするときにエラーが発生しま した (無効な ID)。
312	保存された式をファイルからロードするときにエラーが発生しました (スタ ック)。
314	オブジェクトをファイルに保存中にエラーが発生しました (無効な ID)。
315	式をファイルに保存中にエラーが発生しました (ラージ・メモリー)。
316	式の中で演算子が連続しています。
304       305       306       308       309       310       311       312       314       315       316	名前が長すぎるか、無効な文字が含まれています。 名前付き変数に値が割り当てられていません。 式に構文エラーがあります。 保存された式をファイルからロードするときにエラーが発生しました(ラー ジ・メモリー)。 保存された式をファイルからロードするときにエラーが発生しました(不明 な関数)。 保存された式をファイルからロードするときにエラーが発生しました(ラン ダム・オブジェクト)。 保存されたオブジェクトをファイルからロードするときにエラーが発生しました(ラン グム・オブジェクトをファイルからロードするときにエラーが発生しました(スタ ック)。 オブジェクトをファイルに保存中にエラーが発生しました(無効な ID)。 式をファイルに保存中にエラーが発生しました(ラージ・メモリー)。 式の中で演算子が連続しています。

表 78. Campaign のエラー・コード

表 78. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
317	演算子の構文エラーです。
318	括弧がありません。
319	括弧の組み合わせが不適切です。
320	不明な式です。
321	名前が付けられていません。
322	等号の右側に式がありません。
323	フィールド名を特定できません。
324	2^16 点を超えるソートはできません。
325	仮想メモリーにアクセス中にエラーが発生しました (stat=0)。
328	行列積のディメンションが一致しません。
329	行列積のディメンションが大きすぎます。
330	特異行列エラーです。
331	引数の数が無効です。
332	引数はスカラー数値でなければなりません。
333	引数は 0 より大きくなければなりません。
334	引数の値が無効です。
335	引数の値は -1 から 1 の範囲になければなりません。
336	関数の引数のディメンションが無効です。
338	同じ長さの引数を指定する必要があります。
339	同じディメンションの引数を指定する必要があります。
341	標準偏差またはその他の統計的計算が無効です。
342	最初の引数として指定できるのはベクトルだけです。
343	整数の引数を指定する必要があります。
345	算術式が定義されていません。
346	トレーニング・パターンを取得できません。
348	この関数に対して適切でないキーワードを指定しました。
349	浮動小数点値のオーバーフロー・エラー。
350	負の数値の平方根を求めようとしています。
353	関数から返された文字列の合計サイズが大きすぎます。
354	1 つまたは複数の引数で許可されない文字列型を使用しています。
356	行/列のインデックスが無効です。
357	数字とテキスト列の混在は許可されません。
358	文字列の引用符が一致しません。
359	式が複雑すぎます。
360	文字列が長すぎます。
361	数値解析コードが無効です。
362	この関数は数値を処理できません。
363	文字列の引用符が一致しないか不足しています。
364	この関数から生成されるデータが多すぎます。
365	この関数の出力が多すぎます。

表 78. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
367	再帰的な式での複数列の出力は許可されません。
368	再帰関数が未知の値 (関数から生じない値) にアクセスしようとしていま
	す。
369	最初の行の入力にエラーが含まれています。
370	出力する列が長すぎます。
371	アルゴリズムの入出力のディメンションが壊れています。
372	再帰的な変数が無効です。
373	内部のみ: 解析ツリーが NULL です。
377	代入する値が不明です
381	変数の型を解釈しているときにエラーが見つかりました: '金額'
382	変数の型を解釈しているときにエラーが見つかりました: '電話'
383	変数の型を解釈しているときにエラーが見つかりました: '日付'
384	変数の型を解釈しているときにエラーが見つかりました: '時刻'
393	ブール式は 1 または 0 のみと比較できます。
394	1 つまたは複数の引数に範囲外の値があります。
395	CountOf 以外の任意のキーワードを使用して数値列を指定する必要があります。
396	BETWEEN の構文は次のとおりです: <値> BETWEEN <値 1> AND <値 2>
397	SUBSTR[ING] の構文は次のとおりです: SUBSTR[ING](<文字列><オフセット><サイズ>)
398	オプション [OutputValue] は、MinOf、MaxOf、および MedianOf キーワー ドを指定した場合のみ使用できます。
399	NULL 値が見つかりました。
450	ファイルの権限を変更できません (chmod)。
451	ファイル属性を取得できません (stat)。
452	ファイルを削除できません。
453	メモリー・オブジェクトを作成できません。メモリーまたはファイルのエラ ーが発生していないかログ・ファイルを確認してください。
454	メモリー・オブジェクト・ページをロックできません。メモリーまたはファ イルのエラーが発生していないかログ・ファイルを確認してください。
455	メモリー・オブジェクトをロードできません。メモリーまたはファイルのエ ラーが発生していないかログ・ファイルを確認してください。
456	I/O オブジェクトを作成できません。メモリーまたはファイルのエラーが発 生していないかログ・ファイルを確認してください。
457	入出力オブジェクトを作成できません。メモリーのエラーが発生していない かログ・ファイルを確認してください。
458	無効なサポート・ファイル拡張子です。ファイルが破損している可能性があ ります。
459	無効な UTF-8 文字が見つかりました。
460	ワイド文字をネイティブ・エンコーディングに変換することはできません。
461	ネイティブ・エンコーディングをワイド文字に変換することはできません。

表 78. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
462	ディレクトリーを作成できません。
463	ディレクトリーを削除できません。
500	内部解析ツリー構造のエラー。
600	内部エラー:構成ルートが指定されていません。
601	構成サーバーの URL が指定されていません。
602	指定された構成カテゴリーが見つかりません。
603	指定された構成プロパティーには、絶対ファイル・パスが必要です。
604	構成サーバーからの応答が無効です。
605	内部エラー:要求した構成パスは、現在のルートと異なります。
606	構成カテゴリーおよび構成プロパティーの名前を空にすることはできません。
607	構成カテゴリーの名前にスラッシュを含めることはできません。
608	指定された構成プロパティーには、相対ファイル・パスが必要です。
609	内部エラー: パーティション名が指定されていません。
610	デフォルトのパーティションを特定できません。
611	指定された名前のパーティションは存在しません。
612	パーティションが定義されていません。
614	config.xml に無効なパラメーターが指定されています。
620	内部エラー: セキュリティー・マネージャーは既に初期化されています。
621	内部エラー: セキュリティー・マネージャーを初期化できませんでした。パ ラメーターが無効です。
622	内部エラー: 無効な結果セット名が指定されています。
623	ユーザーはどのパーティションにもマップされていません。
624	ユーザーが複数のパーティションにマップされています。
625	ユーザーは指定されたパーティションにマップされていません。
626	ユーザーはアプリケーションへのアクセスを許可されていません。
700	メモリーが不足しています。

表 78. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
701	ファイルを開くことができません。
	考えられる原因:
	[非 ASCII ファイル名をトランスコードできませんでした。]
	[指定されたファイルが見つかりませんでした。]
	[ファイルを適切に開くことができません。]
	[非 ASCII ファイル名をトランスコードできませんでした。]
	[ファイルを開くことができなかったため、ファイルをコピーできませんで した。]
	推奨される解決方法:
	[必要な場所にファイルが存在することを確認します。]
	[ログ・ファイルでエラーを引き起こしているファイル名をチェックしま す。]
	[システム管理者に問い合わせます。]
702	ファイルのシーク・エラー。
703	ファイルの読み取りエラー。
704	ファイルの書き込みエラー。
710	フローチャート・ファイル・データが破損しています。
711	ファイルの作成エラー。
723	この関数に入力する 1 つまたは複数の変数にエラーがあります。
761	ディスク領域が不足しています。
768	ファイルの保存中にエラーが発生しました。
773	アクセスが拒否されました。
774	内部 HMEM エラー: スワップが許可されていないときはメモリーをフラッシュできません。
778	数値エラー:不明な浮動小数点エラー。
779	数値エラー:明示的な生成。
780	数値エラー: 無効な数字。
781	数値エラー:非正規化。
782	数値エラー:0 による除算。
783	数値エラー: 浮動小数点オーバーフロー。
784	数値エラー: 浮動小数点アンダーフロー。
785	数値エラー: 浮動小数点の丸め。
786	数値エラー: 浮動小数点がエミュレートされていません。
787	数値エラー:負の数値の平方根。
788	数値エラー:スタック・オーバーフロー。
789	数値エラー: スタック・アンダーフロー。
790	内部エラー。

表 78. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
967	データ・ディクショナリーに無効な定義が含まれています。
997	内部エラー: GIO スタック・オーバーフロー。
998	オブジェクトのロード・エラー: サイズ・チェックが失敗しました。
999	拡張エラー
1400	指定した行の行オフセットが見つかりません。
1500	この操作を実行するためのメモリーが不足しています。
1501	ヒストグラムの最大範囲を超過しています
1550	内部エラー 1550:
1649	ベクトルを引数として使用することはできません。
1650	COL キーワードを使用した場合は、最初のパラメーターでベクトルを使用 できません。
1709	クライアント/サーバーのバージョンが一致しません。
1710	ソケットを初期化できません。
1711	ソケットを作成できません。
1712	指定したサーバーに接続できません。
	考えられる原因:
	[ご使用のブラウザーが Campaign サーバーに接続できません。]
	[ご使用のブラウザーがホスト名の解決に失敗しました。]
	推奨される解決方法:
	[ネットワーク管理者に依頼し、サーバー・マシンとクライアント・マシンの間で相互に 'ping' を実行し、応答が返るかどうかをチェックしてもらいます。]
	[他のアプリケーション用に Campaign リスナー・プロセスに割り当てられ たポートが Campaign サーバー・マシンで使用されていないか確認するよ う、Campaign 管理者に依頼します。]
	[エラーが発生した手順をもう一度試します。再びエラーが発生した場合 は、クライアント・マシンをリブートした上で、システム管理者に Campaign サーバー・マシンをリブートするよう依頼します。]
1713	ソケット・データを送信できません。

表 78. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
1714	ソケット・データを受信できません。
	考えられる原因:
	[ソケットからの受信バイト数が、想定されたバイト数と一致しません。]
	[ソケットからのデータの待機中に Campaign がタイムアウトしました。]
	[メッセージの送信中にソケット・エラーが発生しました。]
	推奨される解決方法:
	[ネットワーク管理者に依頼し、サーバー・マシンとクライアント・マシンの間で相互に 'ping' を実行し、応答が返るかどうかをチェックしてもらいます。]
	[他のアプリケーション用に Campaign リスナー・プロセスに割り当てられ たポートが Campaign サーバー・マシンで使用されていないか確認するよ う、Campaign 管理者に依頼します。 [エラーが発生した手順をもう一度試 します。再びエラーが発生した場合は、クライアント・マシンをリブートし た上で、システム管理者に Campaign サーバー・マシンをリブートするよう 依頼します。]
1715	指定したポートにソケットをバインドできません。
1716	ソケットの listen を実行できません。
1717	通信要求がタイムアウトになりました。
1719	内部エラー:通信要求がタイムアウトになりました。
1729	クライアント/サーバー・ライブラリー:ドライブ情報の取得中にエラーが発 生しました。
1731	内部エラー:指定した引数インデックスが無効です。
1733	リスナーはセマフォーを作成できません。
1734	リスナー:ファイル・ブロック・サーバー・ポートが無効です。
1735	リスナーは指定したコマンドを起動できません。
1736	リスナー: UDME サーバー・ポートが無効です。
1737	リスナー: Campaign サーバー・ポートが無効です。
1738	リスナー: サーバー・プロセスと通信できません。
1739	リスナー:内部データ整合性エラー。
1741	スレッドを作成できません。
1742	スレッドを待機できません。
1743	クライアント/サーバー・ライブラリー:プロセスが無効です。考えられる原因:プロセス(トリガー、バルク・ローダー、UDIサーバーなど)が存在しません。推奨される解決方法:いずれかのプロセスが異常終了していないかログ・ファイルをチェックします。Campaign管理者に依頼して、異常終了したプロセスを再始動してもらいます。再びエラーが発生するようであれば、システム管理者に問い合わせます。
1744	クライアント/サーバー・ライブラリー: セマフォーが無効です。
1745	クライアント/サーバー・ライブラリー: ミューテックスが無効です。
1746	クライアント/サーバー・ライブラリー:メモリーが不足しています。

表 78. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
1747	内部エラー: クライアント/サーバー・ライブラリー: タイムアウトが経過
	し、オブジェクトにシグナルが送られませんでした。
1748	クライアント/サーバー・ライブラリー:オブジェクトの待機が失敗しまし
	た。 
1749	クライアント/サーバー・ライブラリー: 指定したディレクトリーが無効で
1750	内部エフー: 要求したサーバー機能はサホートされません。
1751	サーバーをシャットダウンします。要求が拒否されました。
1773	UDMEsvr: 削除要求したフローチャートは使用中です。
1783	他のユーザーが既に編集モードまたは実行モードで使用しています。
1784	実行が完了するまで編集は許可されません。
1785	要求したフローチャートは別のユーザーに対してアクティブです。
1786	サーバー・プロセスは終了しています。
	考えられる原因: Campaign リスナーが Campaign サーバー・プロセスを開 始できません。
	推奨される解決方法: システム管理者に問い合わせます。
1787	最大数のフローチャート・インスタンスが既に使用されています。
1788	要求したフローチャートは Distributed Marketing に対してアクティブで
	す。
1789	要求したフローチャートは Campaign ユーザーが使用中です。
1790	ユーザーを認証できません。
	考えられる原因:
	[指定されたパスワードは、Marketing Platform に格納されているパスワード と一致しません。]
	[データベースなどのオブジェクトにアクセスするために必要な、Marketing Platform のユーザー名フィールドまたはパスワード・フィールドに何も指定 されていません。]
	[データベースなどのオブジェクトにアクセスするために必要な、Marketing Platform のユーザー名フィールドまたはパスワード・フィールドに何も指定 されていません。]
	推奨される解決方法:
	[指定したユーザー名およびパスワードが正しいかどうかをチェックしま す。]
	[ユーザー名とパスワードが正しく Marketing Platform に保存されているか どうかを Campaign 管理者にチェックしてもらいます。]
1791	無効なグループ名を指定しました。
1792	無効なファイル・モードを指定しました。
1793	内部エラー:アクティブなプロセスの終了ステータスを要求しました。
1794	評価期間は終了しました。

表 78. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
1795	ライセンス・コードが無効です。
1796	作成者によってフローチャート名が変更されました。
1797	作成者によってフローチャート名が変更されました。
1823	内部エラー:要求パラメーターの数が一致しません。
1824	内部エラー:要求のパラメーターの型が一致しません。
1825	内部エラー:要求のスカラー数またはベクトル数が一致しません。
1830	サポートされていないプロトコル・タイプが検出されました。
1831	無効な API です。
1832	指定された実行に対するサーバー・プロセスが見つかりません。実行が既に 完了している可能性があります。
2000	HTTP セッション・オブジェクトが無効です。
2001	HTTP 接続オブジェクトが無効です。
2002	HTTP 要求オブジェクトが無効です。
2003	HTTP 要求ヘッダーの追加中にエラーが発生しました。
2004	HTTP プロキシー資格情報の設定中にエラーが発生しました。
2005	HTTP サーバー資格情報の設定中にエラーが発生しました。
2006	HTTP 要求の送信中にエラーが発生しました。
2007	HTTP 応答の受信中にエラーが発生しました。
2008	HTTP レスポンス・ヘッダーの照会中にエラーが発生しました。
2009	HTTP レスポンス・データの読み取り中にエラーが発生しました。
2010	HTTP レスポンスで返されたエラー・ステータス。
2011	HTTP 認証スキームの照会中にエラーが発生しました。
2012	一致する HTTP 認証スキームがありません。
2013	プロキシー・サーバー認証エラー。 Marketing Platform で「proxy」という 名前のデータ・ソースに有効なプロキシー・サーバー・ユーザー名およびパ スワードを指定した後に、Campaign へのログインを再試行する必要があり ます。
2014	Web サーバー認証エラー。 Marketing Platform で「webserver¥」という名前のデータ・ソースに有効な Web サーバー・ユーザー名およびパスワードを指定した後に、Campaign へのログインを再試行する必要があります。
2015	PAC ファイル認証エラー後の HTTP 要求エラー。
2016	PAC ファイル・スキーム・エラー後の HTTP 要求エラー。
10001	内部エラー。
10022	内部エラー: プロセスが見つかりません。
10023	内部エラー: 接続が見つかりません。
10024	内部エラー: プロセスが見つかりません。
10025	内部エラー: 接続が見つかりません。
10026	内部エラー: 関数タグが不明です。
10027	フローチャートにサイクルが含まれています。
10030	内部エラー: GIO からメモリー・バッファーを取得できません。
10031	フローチャートは実行中です。

表 78. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
10032	内部エラー: コピー状態が不明です。
10033	システム・テーブルの変更中にエラーが発生しました。
10034	1 つまたは複数のプロセスが構成されていません。
10035	プロセスに複数のスケジュールが入力されています。
10036	内部エラー: プロセスが見つかりません。
10037	貼り付けられた 1 つまたは複数のプロセスにユーザー定義フィールドが定
	義されています。再定義が必要になる可能性があります。
10038	ブランチの外部に 1 つまたは複数の入力プロセスがあります。
10039	フローチャート DOM 作成エラー。
10040	フローチャート DOM 解析エラー。
10041	フローチャートを自動保存ファイルからリカバリーしました。
10042	この実行に必要なグローバル抑制セグメントを作成するフローチャートが現 在実行されています。
10043	グローバル抑制セグメントがありません。
10044	グローバル抑制セグメントが不正なオーディエンス・レベルに設定されてい ます。
10046	このタイプで指定できるプロセス・ボックスは 1 つだけです。
10047	指定できるブランチは 1 つだけです。
10048	フローチャートは、対話プロセス・ボックスで開始する必要があります。
10049	処理キャッシュに処理が見つかりません。
10116	内部エラー: プロセスが登録されていません。
10119	内部エラー: 関数タグが不明です。
10120	プロセスは実行中です。
10121	プロセスの実行結果が失われます。
10122	内部エラー。
10125	プロセスは構成されていません。
10126	プロセス入力の準備ができていません。
10127	プロセス名が一意ではありません。
10128	内部エラー: 無効なプロセス・インデックス。
10129	内部エラー: 無効なレポート ID。
10130	内部エラー: 無効なテーブル ID。
10131	内部エラー: 無効なフィールド・インデックス。
10132	内部エラー: 無効なセル ID。
10133	内部エラー: 無効なフィールド・インデックス。
10134	内部エラー: 無効な登録プロセス。
10136	プロセスの実行がユーザーによって停止されました。
10137	プロセスがキューに入っている間の変更は許可されません。
10138	プロセスの実行中の変更は許可されません。
10139	後続のプロセスが実行中の変更、またはキューに入っている間の変更は許可 されません。

表 78. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
10140	プロセスのソースが変更されました。ユーザー定義フィールドおよび後続の
	プロセスの再構成が必要になる場合があります。
10141	選択した 1 つまたは複数のテーブルが存在しません。
10142	フローチャートの実行中の変更は許可されません。
10143	プロセスの DOM 作成エラー。
10144	プロセスの DOM 解析エラー。
10145	不明なプロセス・パラメーターです。
10146	プロセス名に無効な文字が含まれています。
10147	出力セル名が空です。
10148	スケジュール・プロセスをキューに対して実行するには、ID の蓄積オプションをオフにする必要があります。
10149	リーダー・モードではコマンドを使用できません。
10150	セグメント・データ・ファイルを開くことができません。
10151	セグメント・データ・ファイルのエラー: 無効なヘッダー。
10152	内部エラー: 無効なセグメント (データ・ファイル名が空白)。
10153	定義されていないユーザー変数をパスで参照しています。
10154	重大なエラーが発生しました。
10155	前のプロセスは実稼働モードで実行されていません。
10156	フローチャートでセル名の競合が検出されました。
10157	フローチャートでセル・コードの競合が検出されました。
10158	トップダウン・ターゲット・セルが複数回リンクされています。
10159	リンクされるトップダウン・セルがないか、既に別のものにリンクされてい
	ます。 
10161	無効なフィールド名です。
10162	ターゲット・セルは、実稼働での実行を承認されていません。
10163	実稼働で実行するためには、このプロセスのすべての入力セルを TCS のセ ルにリンクする必要があります。
10164	このプロセスでは、制御セルであるトップダウン・セル、または制御セルを 持つトップダウン・セルを処理できません。
10165	セグメント一時テーブルを開くことができません。
10166	内部エラー: 無効なセグメント (セグメントー時テーブル・データベースが 空白)。
10167	内部エラー: 無効なセグメント (セグメントー時テーブル名が空白)。
11167	入力のオーディエンス・レベルが異なります。
11168	指定したフローチャート・テンプレートがシステムにありません。
11169	Interact ベース・テーブル・マッピングが見つかりません。
10200	内部エラー: 無効な 'From' プロセス
10201	内部エラー: 無効な 'To' プロセス
10206	内部エラー: 無効な 'From' プロセス
10207	内部エラー: 無効な 'To' プロセス
10208	内部エラー: 無効な接続インデックス。

表 78. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
10209	内部エラー: DOM 作成エラー。
10210	内部エラー: DOM 解析エラー。
10211	競合するセル・コードは無視されます。
10300	ServerComm のメモリーが不足しています。
10301	内部エラー: クラスの関数が登録されていません。
10302	内部エラー:要求した関数はサポートされません。
10303	他のフローチャート接続が確立されています。再接続は許可されません。
10304	UNICA_ACSVR.CFG で指定した範囲の通信ポートはすべて使用中です。
10305	要求したフローチャートは既に使用中です。
10306	リーダー・モードではコマンドを使用できません
10307	フローチャートは使用中です。所有権を移す権限はありません。
10350	内部エラー:フローチャートが実行されていません。
10351	内部エラー: クライアントがフローチャートに接続しています。
10352	コマンドを認識できません。
10353	構文が無効です。
10354	内部エラー:実行の中断が進行中です。
10355	影響するセッションはありません。現時点では操作を実行できません。フロ ーチャートのログを調べて原因を究明し、後でもう一度試してください。
10356	新しい接続が無効になりました。管理者は unica_svradm の UNCAP コマン ドを使用して再度有効にする必要があります。
10357	フローチャートの実行が完了しましたが、エラーがあります。
10358	キャッシュ・データが見つかりません。
10359	絶対パス名ではなく、IBM EMM が提供する中央構成リポジトリーで定義 された partitionHome プロパティーに対する相対パス名でフローチャートを 指定する必要があります。
10401	内部エラー: クライアントは既に接続しています。
10402	クライアントはサーバーに接続されていません。
10403	サーバーとの接続が失われました。再試行しますか?

表 78. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
10404	サーバー・プロセスと通信できません。終了している可能性があります。
	考えられる原因
	[Campaign サーバー・プロセスで次の問題が生じています。]
	<ul> <li>[ログイン時またはフローチャートの作成/オープン時にプロセスを起動 できません。]</li> </ul>
	<ul> <li>[サーバーに再接続したときには既にプロセスが終了されていました。]</li> </ul>
	• [プロセスが異常終了しました。]
	推奨される解決方法
	[次の点を確認するよう Campaign 管理者に依頼します。]
	・ [Campaign リスナー・プロセスが実行されていること。]
	<ul> <li>「システム上で同じバージョンの Campaign Web アプリケーション、リス ナー、およびサーバーが実行されていること。」</li> </ul>
	• [Marketing Platform が提供する中央構成リポジトリーでポート番号が適切 に構成されていること。]
	このエラーに関して、より詳細な情報が必要な場合は、システム管理者にシ ステム・ログをチェックするよう依頼してください。
10405	サーバー・プロセスから応答がありません。再試行して待つか、キャンセル
	して切断します。
10406	内部エラー:サーバーとの通信が既に実行されています。
10407	接続が切断されました。管理者がこのフローチャートを中断しました。
10408	接続が切断されました。管理者がこのフローチャートを強制終了しました。
10409	接続が切断されました。管理者がこのフローチャートを停止しました。
10410	接続が切断されました。管理者がこのフローチャートを削除しました。
10411	接続が切断されました。管理者がこのフローチャートを管理しています。
10412	HTTP セッション ID が無効であるか、HTTP セッションがタイムアウトに なりました。
10440	Windows の偽装エラー。
10441	Windows 認証メッセージの送信を続ける
10442	Windows 認証メッセージの送信を停止する
10443	TYPE-1 メッセージを生成できませんでした
10444	TYPE-2 メッセージを生成できませんでした
10445	TYPE-3 メッセージを生成できませんでした
10450	サーバー・プロセスから応答がありません。この時点では接続できません。
10451	サーバー・プロセスから応答がありません。この時点では指定されたすべて
	のフローチャートにトリガーを送信できません。
10452	サーバー・プロセスから応答がありません。この時点では再接続できません。

表 78. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
10453	サーバー・プロセスから応答がありません。この時点では要求された操作を
	完了できません。
	考えられる原因
	Campaign サーバーは別の要求の処理でビジー状態です。
	推奨される解決方法
	Campaign サーバー・マシンの CPU リソースまたはメモリー・リソースが 十分であることを確認するようシステム管理者に依頼してください。
10454	サーバー・プロセスがフローチャート・データを更新しています。この時点 では要求された操作を完了できません。
10501	内部エラー: SRunMgr RunProcess スレッドは既に実行中です。
10502	プロセスの実行は、実行マネージャーの破棄によってキャンセルされました
10530	キャンペーン・コード形式が無効です。
10530	オファー・コード形式が無効です
10532	キャンペーン・コードを生成できませんでした。
10533	オファー・コードを生成できませんでした。
10534	処理コード形式が無効です。
10535	処理コードを生成できませんでした。
10536	セル・コード形式が無効です。
10537	セル・コードを生成できませんでした。
10538	バージョン・コード形式が無効です。
10539	バージョン・コードを生成できませんでした。
10540	キャンペーン・コード形式に無効な文字が含まれています。
10541	セル・コード形式に無効な文字が含まれています。
10542	処理コード形式に無効な文字が含まれています。
10550	HTTP 通信エラー。
10551	ASM サーバーからの応答が無効です。
10552	ASM サーバー: 不明なエラー。
10553	ASM サーバー: ログインが無効です。
10554	ASM サーバー: データベースへの挿入中にエラーが発生しました。
10555	ASM サーバー: ASM オブジェクトをマップしようとしてエラーが発生しました。
10556	ASM サーバー: オブジェクトが既に存在するためエラーが発生しました。
10557	ASM サーバー: パスワードが期限切れです。
10558	ASM サーバー: パスワードが短すぎます。
10559	ASM サーバー: パスワード形式が正しくありません。
10560	内部エラー: ASM サーバーから返されたデータを解析しています。
10561	ASM サーバー: 有効なログインが必要です。
10562	ASM サーバー: グループ名が必要です。

表 78. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
10563	ASM サーバー: サポートされない操作です。
10564	ASM サーバー:パスワードの最大許容試行回数を超過しました。
10565	ASM サーバー:パスワードに最小限必要な数の数値が含まれていません。
10566	ASM サーバー: ログインと同じパスワードは使用できません。
10567	ASM サーバー:以前と同じパスワードは再使用できません。
10568	ASM サーバー: ユーザー・ログインが無効になりました。
10569	ASM サーバー:パスワードに最小限必要な数の文字が含まれていません。
10570	ASM サーバー: 空白のパスワードは使用できません。
10571	ASM サーバー: パスワードが正しくありません。
10572	この操作を実行するには適切な権限が必要です。
10573	ASM サーバー: 内部システム・エラー。
10576	内部エラー: ASM クライアント・モジュールが初期化されていません。
10577	データベース資格情報の照会を実行するには、ログインする必要がありま す。
10578	セキュリティー・データ整合性エラー。
10580	HTTP 通信エラー
10581	eMessage サーバーからの応答が無効です
10582	eMessage サーバー: 不明なエラー
10583	eMessage サーバー: 内部システム・エラー
10584	eMessage サーバーの URL が設定されていません。
10585	内部エラー: eMessage サーバーから返されたデータを解析しています。
10586	eMessage サーバーからエラーが返されました。
10590	setuid が失敗しました。
10591	setgid が失敗しました。
10600	内部エラー: セルは既に初期化されています。
10601	内部エラー: ソース・セルが初期化されていません。
10603	内部エラー: 無効なセル ID。
10604	内部エラー: 無効なフィールド・インデックス。
10605	オーディエンス ID フィールドが定義されていません。
10606	内部エラー: テーブル・マネージャーが見つかりません。
10607	無効なテーブル ID です。
10608	セルへのアクセス中の操作は許可されません。
10612	内部エラー:ユーザー定義フィールドが見つかりません。

表 78. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
10613	フィールドが見つかりません。
	考えられる原因:
	[テーブル・マッピングが変更されています。現在そのフィールドは存在しません。]
	[オーディエンス・レベルが変更されました。]
	[そのフィールドは削除されました。]
	推奨される解決方法:異なるフィールドを参照するようにプロセス・ボック スの構成を変更します。
10616	内部エラー:派生変数が初期化されていません。
10617	内部エラー:式から複数の列が返されます。
10619	内部エラー: 無効な行インデックスです。
10620	フィールド名を特定できません。
10621	内部エラー:選択したフィールドがまだ計算されていません。
10624	内部エラー:アクセス・オブジェクトが無効になりました。
10625	内部エラー: 未加工 SQL 照会のデータ・ソースが選択されていません。
10629	Campaign サーバーの一時ファイルの書き込み中にエラーが発生しました。
10630	異なるオーディエンス・レベルに対する操作は許可されません。
10632	保存された照会への参照が見つかりません。
10633	内部エラー:派生変数にデータを含めることはできません。
10634	適合しないソート順が検出されました。 dbconfig.lis で
	¥enable_select_order_by=FALSE¥ を設定してください。
10635	保存された照会への参照を解決できません:保存された照会テーブルがマッ プされていません。
10636	ユーザー変数が定義されていません。
10637	セルの結果がありません。前のプロセスを再度実行する必要があります。
10638	「カウント」フィールドの値が無効です。
10639	内部エラー: STCell _Select の状態が正しくありません。
10641	派生変数の名前が既存の永続的なユーザー定義フィールドの名前と競合しま す。
10642	一時テーブルを <temptable> トークンに使用できません。</temptable>
10643	一時テーブルに格納されている行が多すぎます。
10644	一時テーブルに十分な行が存在しません。
10645	<outputtemptable> トークンが使用されていますが、データ・ソースの構成 では一時テーブルは許可されていません。</outputtemptable>
10646	システム・データベースに一時テーブルを作成できません。データ・ソース 構成で一時テーブルが許可され、一括挿入またはデータベース・ローダーが 有効になっていることを確認してください。
10661	インスタンス・マネージャーとの HTTP 通信エラー
10700	フィールド・タイプまたはデータ長が適合しません。

表 78. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
10800	カスタム・マクロのパラメーター名が複製しています。
10801	カスタム・マクロのパラメーター名がありません。
10802	カスタム・マクロのパラメーター数が正しくありません。
10803	カスタム・マクロのパラメーター名が正しくありません。
10804	既存のカスタム・マクロと名前が競合します。
10805	カスタム・マクロのパラメーターがありません。
10806	パラメーター名は予約語です。
10807	カスタム・マクロ名が無効です。
10808	既存の IBM マクロと名前が競合します。
10809	カスタム・マクロ式の中で使用されているパラメーターがマクロ定義に含ま れていません。
10810	選択した ACO セッションで、オーディエンス・レベルが定義されていません。
10811	選択した ACO セッションで、推奨コンタクト・テーブルが定義されていま せん。
10812	選択した ACO セッションで、推奨オファー属性テーブルが定義されていません。
10813	選択した ACO セッションで、最適化済みコンタクト・テーブルが定義されていません。
10820	動的キャスト内部エラー
10821	ODS キャンペーンの構成が無効です。
10821 11001	ODS キャンペーンの構成が無効です。 内部エラー: SendMessage エラー。
10821           11001           11004	ODS キャンペーンの構成が無効です。 内部エラー: SendMessage エラー。 内部エラー。
10821           11001           11004           11005	ODS キャンペーンの構成が無効です。         内部エラー: SendMessage エラー。         内部エラー。         内部エラー: 不明なレポート・タイプ。
10821       11001       11004       11005       11006	ODS キャンペーンの構成が無効です。内部エラー: SendMessage エラー。内部エラー。内部エラー: 不明なレポート・タイプ。フローチャートには別のユーザーがアクセスしています。
10821         11001         11004         11005         11006         11100	ODS キャンペーンの構成が無効です。内部エラー: SendMessage エラー。内部エラー。内部エラー: 不明なレポート・タイプ。フローチャートには別のユーザーがアクセスしています。メモリー割り当てエラー。
10821         11001         11004         11005         11006         11100         11101	ODS キャンペーンの構成が無効です。         内部エラー: SendMessage エラー。         内部エラー。         内部エラー: 不明なレポート・タイプ。         フローチャートには別のユーザーがアクセスしています。         メモリー割り当てエラー。         内部エラー: 関数タグが不明です。
10821         11001         11004         11005         11006         11100         11101         11102	ODS キャンペーンの構成が無効です。         内部エラー: SendMessage エラー。         内部エラー。         内部エラー: 不明なレポート・タイプ。         フローチャートには別のユーザーがアクセスしています。         メモリー割り当てエラー。         内部エラー: 関数タグが不明です。         内部エラー: IDtoPtr に不明なクラス名があります。
10821         11001         11004         11005         11006         11100         11101         11102         11104	ODS キャンペーンの構成が無効です。内部エラー: SendMessage エラー。内部エラー。内部エラー: 不明なレポート・タイプ。フローチャートには別のユーザーがアクセスしています。メモリー割り当てエラー。内部エラー: 関数タグが不明です。内部エラー: IDtoPtr に不明なクラス名があります。内部エラー: SCampaignContextConfig のマジック番号が正しくありません。
10821         11001         11004         11005         11006         11100         11101         11102         11104         11105	ODS キャンペーンの構成が無効です。内部エラー: SendMessage エラー。内部エラー。内部エラー: 不明なレポート・タイプ。フローチャートには別のユーザーがアクセスしています。メモリー割り当てエラー。内部エラー: 関数タグが不明です。内部エラー: IDtoPtr に不明なクラス名があります。内部エラー: SCampaignContextConfig のマジック番号が正しくありません。ファイル名が指定されていません。
10821         11001         11004         11005         11006         11100         11101         11102         11104         11105         11107	ODS キャンペーンの構成が無効です。内部エラー: SendMessage エラー。内部エラー。内部エラー。フローチャートには別のユーザーがアクセスしています。メモリー割り当てエラー。内部エラー: 関数タグが不明です。内部エラー: IDtoPtr に不明なクラス名があります。内部エラー: SCampaignContextConfig のマジック番号が正しくありません。ファイル名が指定されていません。サーバー・キャンペーン・コンテキストの内部エラー。
10821         11001         11004         11005         11006         11100         11101         11102         11104         11105         11107         11108	ODS キャンペーンの構成が無効です。内部エラー: SendMessage エラー。内部エラー。内部エラー。内部エラー: 不明なレポート・タイプ。フローチャートには別のユーザーがアクセスしています。メモリー割り当てエラー。内部エラー: 関数タグが不明です。内部エラー: IDtoPtr に不明なクラス名があります。内部エラー: SCampaignContextConfig のマジック番号が正しくありません。ファイル名が指定されていません。サーバー・キャンペーン・コンテキストの内部エラー。内部エラー: レポートをロックできません。
10821         11001         11004         11005         11006         11100         11101         11102         11104         11105         11107         11108         11109	ODS キャンペーンの構成が無効です。内部エラー: SendMessage エラー。内部エラー。内部エラー。内部エラー: 不明なレポート・タイプ。フローチャートには別のユーザーがアクセスしています。メモリー割り当てエラー。内部エラー: 関数タグが不明です。内部エラー: IDtoPtr に不明なクラス名があります。内部エラー: SCampaignContextConfig のマジック番号が正しくありません。ファイル名が指定されていません。サーバー・キャンペーン・コンテキストの内部エラー。内部エラー: レポートをロックできません。テーブルが定義されていません。
10821         11001         11004         11005         11006         11100         11101         11102         11104         11105         11105         11107         11108         11109         11110	ODS キャンペーンの構成が無効です。         内部エラー: SendMessage エラー。         内部エラー。         内部エラー:不明なレポート・タイプ。         フローチャートには別のユーザーがアクセスしています。         メモリー割り当てエラー。         内部エラー:関数タグが不明です。         内部エラー:IDtoPtr に不明なクラス名があります。         内部エラー:SCampaignContextConfig のマジック番号が正しくありません。         ファイル名が指定されていません。         サーバー・キャンペーン・コンテキストの内部エラー。         内部エラー:レポートをロックできません。         デーブルが定義されていません。         環境変数が設定されていません。
10821         11001         11004         11005         11006         11100         11101         11102         11104         11105         11105         11107         11108         11109         11110         11111	ODS キャンペーンの構成が無効です。         内部エラー: SendMessage エラー。         内部エラー。         内部エラー:不明なレポート・タイプ。         フローチャートには別のユーザーがアクセスしています。         メモリー割り当てエラー。         内部エラー:関数タグが不明です。         内部エラー:IDtoPtr に不明なクラス名があります。         内部エラー:SCampaignContextConfig のマジック番号が正しくありません。         ファイル名が指定されていません。         サーバー・キャンペーン・コンテキストの内部エラー。         内部エラー:レポートをロックできません。         デーブルが定義されていません。         環境変数が設定されていません。         内部エラー:フィールド情報の取得中にエラーが発生しました。
10821         11001         11004         11005         11006         11100         11101         11102         11104         11105         11105         11107         11108         11109         11110         11111         11112	ODS キャンペーンの構成が無効です。         内部エラー: SendMessage エラー。         内部エラー。         内部エラー:不明なレポート・タイプ。         フローチャートには別のユーザーがアクセスしています。         メモリー割り当てエラー。         内部エラー:関数タグが不明です。         内部エラー:IDtoPtr に不明なクラス名があります。         内部エラー:SCampaignContextConfig のマジック番号が正しくありません。         ファイル名が指定されていません。         サーバー・キャンペーン・コンテキストの内部エラー。         内部エラー:レポートをロックできません。         デーブルが定義されていません。         環境変数が設定されていません。         内部エラー:フィールド情報の取得中にエラーが発生しました。         パスワードが無効です。
10821         11001         11004         11005         11006         11100         11100         11101         11102         11104         11105         11105         11107         11108         11109         11110         11111         11112         11113	ODS キャンペーンの構成が無効です。         内部エラー: SendMessage エラー。         内部エラー。         内部エラー: 不明なレポート・タイプ。         フローチャートには別のユーザーがアクセスしています。         メモリー割り当てエラー。         内部エラー: 関数タグが不明です。         内部エラー: IDtoPtr に不明なクラス名があります。         内部エラー: SCampaignContextConfig のマジック番号が正しくありません。         ファイル名が指定されていません。         サーバー・キャンペーン・コンテキストの内部エラー。         内部エラー: レポートをロックできません。         テーブルが定義されていません。         環境変数が設定されていません。         内部エラー: フィールド情報の取得中にエラーが発生しました。         パスワードが無効です。         フローチャート名が一意でないか空白です。
10821         11001         11004         11005         11006         11100         11101         11102         11104         11105         11105         11107         11108         11109         11110         11111         11112         11113         11114	ODS キャンペーンの構成が無効です。         内部エラー: SendMessage エラー。         内部エラー。         内部エラー:不明なレポート・タイプ。         フローチャートには別のユーザーがアクセスしています。         メモリー割り当てエラー。         内部エラー:関数タグが不明です。         内部エラー:IDtoPtr に不明なクラス名があります。         内部エラー:SCampaignContextConfig のマジック番号が正しくありません。         ファイル名が指定されていません。         サーバー・キャンペーン・コンテキストの内部エラー。         内部エラー:レポートをロックできません。         デーブルが定義されていません。         関境変数が設定されていません。         内部エラー:フィールド情報の取得中にエラーが発生しました。         パスワードが無効です。         フローチャート名が一意でないか空白です。         キャンペーン・コードが一意ではありません。
10821         11001         11004         11005         11006         11100         11101         11102         11104         11105         11105         11107         11108         11109         11110         11111         11112         11113         11115	ODS キャンペーンの構成が無効です。         内部エラー: SendMessage エラー。         内部エラー。         内部エラー。         内部エラー: 不明なレポート・タイプ。         フローチャートには別のユーザーがアクセスしています。         メモリー割り当てエラー。         内部エラー: 関数タグが不明です。         内部エラー: IDtoPtr に不明なクラス名があります。         内部エラー: IDtoPtr に不明なクラス名があります。         内部エラー: SCampaignContextConfig のマジック番号が正しくありません。         ファイル名が指定されていません。         サーバー・キャンペーン・コンテキストの内部エラー。         内部エラー: レポートをロックできません。         デーブルが定義されていません。         環境変数が設定されていません。         内部エラー: フィールド情報の取得中にエラーが発生しました。         パスワードが無効です。         フローチャート名が一意でないか空白です。         キャンペーン・コードが一意ではありません。         アクティブなフローチャートを削除することはできません。

表 78. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
11117	古いフローチャート・ファイルの削除はサポートされません。手動で削除し
	てください。
11119	一時ディレクトリーの unica_tbmgr.tmp ファイルの書き込みができません。
11120	conf ディレクトリーの unica_tbmgr.bin の名前を変更できません。
11121	unica_tbmgr.tmp を unica_tbmgr.bin ファイルにコピーできません。
11122	conf ディレクトリーの unica_tbmgr.bin ファイルを読み取れません。
11128	構成で許可されていない操作です。
11131	無効なテンプレート・ファイル形式です。
11132	XML 初期化エラー。
11133	DOM 作成エラー。
11134	DOM 解析エラー。
11135	内部エラー: 不明なユーザー変数
11136	サーバー・キャンペーン・コンテキストのセル・ロック・エラー。
11137	サーバー・キャンペーン・コンテキストのファイル・オープン・エラー。
11138	指定されたユーザーは既に存在します。
11139	admin. セッションにユーザー・リスト・テーブルがマップされていませ
	h.
11140	ユーザーが見つかりません。
11141	パスワードが正しくありません。
11142	ファイルの読み取りエラー。
11143	ユーザー変数が空白です。
11144	フローチャート名とキャンペーン・コードが一意ではありません。
11145	unica_acsvr.cfg ファイルに authentication_server_url がありません。
11146	無効なユーザー変数です。
11147	ユーザー変数が見つかりません。
11148	仮想メモリー設定への変更は許可されません。
11150	フォルダー・ファイルを作成できません。ご使用の OS の特権を確認して
	ください。
11151	フォルダー・ファイルを削除できません。ご使用の OS の特権を確認して
11150	ヽたこ $V^{4}_{0}$
11152	フォルター/キャンペーン/ビッション・ファイルの石削を変更できません。  ご使用のオペレーティング・システムの特権を確認してください。
11153	キャンペーン/セッション・ファイルを作成できません。ご使用の OS の特
	権を確認してください。
11154	キャンペーン/セッション・ファイルを削除できません。ご使用の OS の特
	権を確認してください。
11155	フォルダー/キャンペーン/セッション・ファイルを移動できません。ご使用
	の OS の特権を確認してください。
11156	データ・ソースの認証に失敗しました。
11157	開始日が終了日よりも後の日付になっています。

表 78. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
11158	キャンペーン/セッション・ファイルを開けません。ご使用の OS の特権を 確認してください。
11159	ログ・ファイルを読み込めません。ご使用の OS の特権を確認してください。
11160	ログを表示できません。ログ・ファイル名が指定されていません。
11161	フローチャートの実行中の操作は許可されません。
11162	ログ・ファイルが存在しません。より詳細なログ情報が必要な場合は、ログ のレベルを変更してください。
11163	ファイル・システムにキャンペーン/セッション・ファイルが存在しませ ん。
11164	サーバーに保存されたリストの内部エラー。
11165	保存されたリストの関数タグが不明です。
11166	セキュリティー・ポリシーが無効です。
11201	コンテナー内部エラー (1)。
11202	コンテナー内部エラー (2)。
11203	コンテナー・データのロード・エラー。
11230	指定したエンコーディングと UTF-8 間のトランスコーダーを作成できません。
11231	テキスト値をトランスコードできません。
11232	ローカル・ホストの名前を特定できません。
11251	新しいパスワードが一致しません。再入力してください。
11253	ソート操作時にスタック・オーバーフローが発生しました。
11254	コマンド・ライン・パーサーに渡された引数が多すぎます。
11255	コマンドまたは構成ファイル・パラメーターの引用符が一致しません。
11256	追加のためのフローチャート・ログ・ファイルを開くことができません。
11257	フローチャート・ログ・ファイルへの書き込みができません。
11258	フローチャート・ログ・ファイルの名前を変更できません。
11259	無効なマルチバイトまたは Unicode 文字が見つかりました。
11260	キャンペーン・コードが正しくないか、複製しています。
11261	古いパスワードが無効です。
11262	新しい読み取り/書き込みパスワードが一致しません。
11263	新しい読み取り専用パスワードが一致しません。
11264	読み取り/書き込みパスワードが無効です。
11265	読み取り専用パスワードが無効です。
11266	パスワードは少なくとも 6 文字以上である必要があります。
11267	レポートが登録されました。
11268	レポート名がありません。
11269	新しいパスワードが一致しません。
11270	クライアント・コンピューター上に一時ファイルを作成できません。
11271	クライアント・コンピューター上の一時ファイルの読み取り中にエラーが発 生しました。

表 78. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
11272	クライアント・コンピューター上の一時ファイルの書き込み中にエラーが発
	生しました。
11273	新しい構成をデフォルトに設定しますか?
11274	選択したテーブルのマッピングを解除しますか?
11275	フィールドが選択されていません。
11276	フローチャート名がありません。チェックポイントは実行されません。
11280	サーバーはクライアントよりも新しいバージョンを使用しています。インス トールされているクライアントをアップグレードしますか?
11281	サーバーはクライアントよりも古いバージョンを使用しています。インスト ールされているクライアントをダウングレードしますか?
11282	インストールの実行ファイルを取得しましたが、実行できません。
11283	フローチャート・ログを消去します。本当によろしいですか?
11284	ヘルプ・トピックが見つかりません。
11285	ヘルプ・トピック・ファイルの解析中にエラーが発生しました。
11286	フローチャートを自動保存ファイルからリカバリーしました。
11287	ビットマップのロード中にエラーが発生しました。
11288	設定が変更されました。今すぐカタログを保存しますか?
11289	フローチャートは既に開かれています。現在のユーザーの接続を切断して接続しますか?
11290	この操作を処理するには、まずフローチャートを保存する必要があります。
11300	無効なフィールド名です。無効なフィールド名については、メッセージの末 尾を参照してください。
	考えられる原因:
	[テーブル・マッピングが変更されています。現在そのフィールドは存在しません。]
	[オーディエンス・レベルが変更されました。]
	[そのフィールドは削除されました。]
	推奨される解決方法:異なるフィールドを参照するようにプロセス・ボック スの構成を変更します。
	無効なフィールド名=
11301	無効なフィールド・インデックスです。
11302	これ以上レコードがありません。
11303	テーブルへのアクセス中の操作は許可されません。
11304	ロックされたテーブルは削除できません。
11305	無効なテーブル ID です。
11306	解析ツリー・コンテキストは使用中です。
11307	解析ツリーによるベース・テーブルのランダム・アクセスは許可されません。
11308	無効なテーブル・インデックスです。

表 78. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
11309	無効なキー・インデックスです。
11310	インデックス・キーが初期化されていません。
11311	ディメンション・テーブルでエントリーが見つかりません。
11312	ID フィールドが指定されていません。
11313	無効なテーブル・アクセスです。
11314	データは既にインポートされています。
11315	内部エラー: VFSYSTEM がありません。
11316	入力ファイルが指定されていません。
11317	データがありません。
11318	変更がまだ開始されていません。
11319	インデックス・フィールドのエントリーが一意ではありません。
11320	conf ディレクトリーにロック・ファイルを作成できません。
	考えられる原因: Campaign サーバーが dummy_lock.dat ファイルをロック できません。
	推奨される解決方法:ファイルが他のプロセスによってロックされていない かシステム管理者に確認を依頼します。ファイルが他のプロセスによってロ ックされていない場合は、Campaign サーバーをリブートし、ロックを削除 するよう Campaign 管理者に依頼します。
11321	内部テーブル・エラー
11322	不明な関数タグ
11323	データ・ディクショナリー・ファイル名が指定されていません。
11324	関数または操作がサポートされていません。
11325	'dbconfig.lis' ファイルが見つかりません。
11326	ディメンション・テーブルにキー・フィールドがありません。
11327	新バージョンの ID が既存バージョンの ID と競合します。
11328	テーブル・カタログ・ファイルを開くことができません。
11329	複製する ID が多すぎてテーブル結合を実行できません。
11330	テンプレート・ファイルを削除できません。
11331	カタログ・ファイルを削除できません。
11332	データ・ディクショナリー・ファイルの解析でエラーが発生しました: 無効 な形式です。
11333	テキスト・データを数値に変換しているときにエラーが発生しました。
11334	フィールド幅が小さすぎて変換後の数値を保持できません。
11335	フィールド幅が小さすぎてソース・テキスト・データを保持できません。
11336	アクセスしたテーブルはマップされていません。
11337	正規化されたテーブルで複製する ID が見つかりました。
11338	内部エラー: 無効な一時テーブルです。
11339	オーディエンス定義の不適合:フィールド数が正しくありません。
11340	オーディエンス定義の不適合:種類が一致しません。
11341	新バージョンの名前が既存バージョンの名前と競合します。

表 78. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
11342	フィールドが見つかりません。データ・ディクショナリーが変更されていま
	す。
11343	XML テーブル・カタログ・ファイルが無効です。
11344	ローダー・コマンドがエラー・ステータスで終了しました。
11345	テーブル・スキーマが変更されています。テーブルを再マップしてくださ
11346	キュー・テーブルの結果がありません。
11347	内部エラー:戻り値の形式が正しくありません。
11348	カタログのロード中に内部エラーが発生しました。
11349	カタログはロードされていません。
11350	テーブルへの接続中に内部エラーが発生しました。
11351	テーブルに接続されていません。
11352	dbconfig.lis ファイルのキーワードが無効です。
11353	無効な UDI 接続です。
11354	内部エラー: ベース・テーブルが設定されていません。
11355	無効なテーブル名です。
11356	DOM 作成エラー。
11357	DOM 解析エラー。
11358	複製するシステム・テーブル・エントリーはインポートできません。
11359	システム・テーブルをロックできません。
11360	パック 10 進数フィールド・タイプはエクスポートでのみサポートされま す。
11361	この操作はサポートされていません。
11362	SQL 式によって返されるフィールドが多すぎます。
11363	SQL 式によって返されるデータ・フィールドがユーザーの指定と一致しません。
11364	未加工 SQL カスタム・マクロで不明なデータベースが指定されています。
11365	このコンテキストでは、ID リストだけを返す未加工 SQL カスタム・マク ロを使用できません。
11366	セグメントが見つかりません。
11367	一時テーブルを <temptable> トークンに使用できません。</temptable>
11368	このオーディエンス・レベルに対するコンタクト履歴テーブルが未定義で す。
11369	このオーディエンス・レベルのレスポンス履歴テーブルが定義されていません。
11370	ディメンション要素式がありません。
11371	bin 定義を特定できません。
11372	カスタム・マクロが不正な数のフィールドを返しました。
11373	カスタム・マクロの結果フィールドが現在のオーディエンス・レベルと一致 しません。
11374	ディメンション要素名がすべてのレベルを通じて一意ではありません。
表 78. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
11375	不明なディメンション名。
11376	不明なディメンション要素。
11377	未加工 SQL カスタム・マクロのデータベース指定がありません。
11378	キャンペーン・コードが一意ではありません。
11379	XML ファイルのルート・ディメンション要素がありません。
11380	日付の形式を変換するときにエラーが発生しました。
11381	ディメンションで未加工 SQL を使用する権限がありません。
11382	構文エラー: AND/OR 演算子がありません。
11383	構文エラー:選択基準の末尾に余分な AND/OR 演算子があります。
11384	フィールドの不適合:数値フィールドが必要です。
11385	フィールドの不適合:日付フィールドが必要です。
11386	UDI サーバーがエラーを返しました。
11387	内部 ID が制限を超過する可能性があります。
11388	セグメント・データ・ファイルを開くことができません。
11389	セグメント・データ・ファイルのエラー: 無効なヘッダー。
11390	内部エラー: 無効なセグメント (データ・ファイル名が空白)。
11391	セグメント・データへのアクセス・エラーです。
11392	テーブル結合を行うには、テーブルが同じデータベース上に存在する必要が
	あります。
11393	非永続的なキューにはエントリーを追加できません。
11394	オーディエンス・レベルは予約されています。追加できません。
11395	オーディエンス・レベルは予約されています。削除できません。
11396	内部エラー:最適化済みコンタクト・テーブル名が無効です。
11397	フィールド・データが、テーブル・マッピングでこのフィールドに割り当て
	られているテーダ長を超過しました。テーブルを再マップし、フィールト幅   を毛動で増やしてからフローチャートを実行してください
11308	事後一時テーブル作成宝行スクリプトが完了しましたが。 エラーがありま
11570	す。
11399	アロケーターがビジー状態であるため、新しいオブジェクトに ID を割り当
	てることができません。
11400	一時テーブルを <outputtemptable> トークンに使用できません。</outputtemptable>
11401	オーディエンス・レベル定義が無効です。
11402	オーディエンス・フィールド定義がありません。
11403	オーディエンス・フィールド名が無効であるか、存在しません。
11404	オーディエンス・フィールド名が複製しています。
11405	オーディエンス・フィールド・タイプが無効であるか、存在しません。
11408	内部エラー: ID が無効です。
11409	内部エラー: DAO タイプが正しくありません。
11410	DAO 内部エラー。
11411	内部エラー: システム DAO ファクトリーが初期化されていません。
11412	内部エラー: 不明な DAO 実装が要求されました。

表 78. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
11413	内部エラー: DAO 転送で無効な種類が検出されました。
11414	挿入操作は単一のテーブルでのみサポートされます。
11415	更新操作は単一のテーブルでのみサポートされます。
11416	削除操作は単一のテーブルでのみサポートされます。
11417	一意のレコードが予期された SQL 照会で複数のレコードが返されました。
11418	コンタクト・ステータス・テーブルにデフォルトのコンタクト・ステータス が見つかりませんでした。
11419	コンタクト履歴テーブルは詳細コンタクト履歴テーブルより前にマップする 必要があります。
11420	システムにオファーが見つかりません。
11500	内部エラー:有効なデータベース・テーブルではありません。
11501	内部エラー: テーブルが選択されていません。
11502	選択したテーブルにはフィールド・エントリーがありません。
11503	無効な列インデックス。
11504	無効な列名。
11505	無効なデータ・ソース。
11506	選択したテーブルが無効であるか、破損しています。
11507	メモリーが不足しています。
11508	データベース行の削除エラー。
11509	SQL 照会の処理中にエラーが発生しました。
11510	データが返されていません - 照会を確認してください。
11511	照会結果には一致する行が見つかりませんでした。
11512	データベースにはこれ以上の行がありません。
11513	データベース表に行を挿入中にエラーが発生しました。
11514	データベース ID 列が正しくありません。
11515	データベース表の更新中にエラーが発生しました。
11516	新しいデータベース表の作成中にエラーが発生しました。
11517	列の数がこの照会タイプに対して不適切です。
11518	データベース接続エラー。
11519	データベースから結果を取得中にエラーが発生しました。
11520	データ・ソースに対して不明なデータベース・タイプです。
11521	内部エラー: 照会結果の状態が正しくありません。
11522	無効なデータベース接続 (ユーザーがデータベースにログインしていませ
	<i>h</i> )。
11523	最初の一意な ID が設定されていません。
11524	この列のデータ型が正しくありません。
11525	照会に FROM 節がありません。
11526	照会で別名を使用しています。
11527	内部エラー: データベースー時テーブルのエラー。
11528	データベース・エラー。

表 78. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
11529	内部エラー: 照会の実行に使用できるスレッドがありません。
11530	データ・ソースに対してプロパティーが無効です。
11531	カタログ/テンプレートに異なるデータベース・ログインが含まれていま す。
12000	コンタクト履歴テーブルが指定されていません。
12001	Customer ID が指定されていません。
12002	オファー ID が指定されていません。
12003	チャネル・フィールドが指定されていません。
12004	日付フィールドが指定されていません。
12005	推奨コンタクト・テーブルのテンプレートがありません。
12006	テンプレートに使用できるテーブルがありません。テンプレート・テーブル は、顧客レベルでマップし、必須のオファー・フィールド、チャネル・フィ ールド、および日付フィールドを含める必要があります。
12007	オプトイン/オプトアウト・テーブルに使用できるテーブルがありません。 オプトイン/オプトアウト・テーブルは、顧客レベルでマップされている必 要があります。
12008	オプトイン/オプトアウト・テーブルが指定されていません。 ¥"顧客選択 ¥" 規則を使用できなくなります。
12009	オファー・テーブルが指定されていません。
12010	オファー名フィールドが指定されていません。表示用にオファー ID が使用 されます。
12011	チャネル・テーブルが指定されていません。
12012	チャネル名フィールドが指定されていません。表示用にチャネル ID が使用 されます。
12015	テンプレート・テーブル内のオファー・オーディエンス・レベルのフィール ド名がコンタクト履歴テーブルと一致しません。
12016	オファー・テーブル内のオファー・オーディエンス・レベルのフィールド名 がコンタクト履歴テーブルと一致しません。
12017	オファー・テーブルに使用できるテーブルがありません。オファー・テーブ ルはオファー・レベルでマップされている必要があります。
12018	チャネル・テーブルに使用できるテーブルがありません。チャネル・テーブ ルはチャネル・レベルでマップされている必要があります。
12019	サーバー・プロセスを強制終了すると、前回の保存以降に行ったすべての作 業が失われます。本当によろしいですか?
12020	ウィンドウの作成に失敗しました。
12021	このオーディエンス・レベルに関連付けられている次のテーブルを削除しま すか?
12022	選択したディメンション階層を削除しますか?
12023	フローチャートは使用中です。続行しますか?
	「はい」をクリックすると、他のユーザーによる変更内容が失われます。
12024	選択したオーディエンス・レベルを削除しますか?
12025	オーディエンス名は既に存在します。

表 78. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
12026	このフローチャートは、他のユーザーによって変更または削除されました。
	すぐに「概要」タブに切り替わります。前回の保存以降のすべての変更内容
12027	このフローチャートは更新する必要があります。今すぐ更新するには、
	「ひん」をクリックしより。 史利が元」したら、 取後に1つた保旧をやり直 す必要があります。
12028	オブジェクトは初期化中であるか、初期化に失敗しました。この操作をやり
12020	直してください。
12029	選択した項目を削除しますか?
12030	Campaign システム・テーブルへの接続をキャンセルすることを選択しまし
	た。すぐに「概要」タブに切り替わります。
12031	Campaign システム・テーブルに接続しないと続行できません。
12032	このテーブルは、Interact がインストールされている場合にのみサポートさ
	れます。
12033	フローチャートをロードできませんでした。再試行しますか?
12034	HTTP セッションがタイムアウトになりました。再度ログインするには
	「OK」をクリックします。
12035	フローチャート制御に互換性がありません。以前のバージョンをダウンロー
	ドするには、フラウサーを閉じる必要があります。これ以外のフラウサーを
	りつて困してから、「UK」をクリックしてこのノフワリーを困しててたさ い、ブラウザーを再始動する際に、制御が自動的にダウンロードされます。
12036	記動しているブラウザーがあります。ブラウザーをすべて閉じてから
12030	に動しているフラフラットがあります。フラフラットをすべて困じてから 「OK」をクリックしてください
12037	フィールド名に無効な文字が含まれています。
12038	オーディエンス・レベル名が指定されていません。
12039	オーディエンス・フィールドが指定されていません。
12040	フローチャート構成にエラーは検出されませんでした。
12041	実行中のこのフローチャートは、別のユーザーによって一時停止されていま
	す。
12206	上のディレクトリーに移動できません: ルート・ディレクトリーです。
12207	ディレクトリーを作成できません。詳細なエラー情報についてはログ・ファ
	イルを確認してください。
12301	マージ・プロセスの内部エラー。
12303	マージ・プロセスの接続元プロセス・エラー。
12304	マージ・プロセスのセル・ロック・エラー。
12305	マージ・プロセスがユーザーによって停止されました。
12306	マージ・プロセスのセル操作エラー。
12307	マージ・プロセスのソース・セル取得エラー。
12308	マージ・プロセスが構成されていません。
12309	入力セルが選択されていません。
12310	入力セルが使用されていません。
12311	選択した入力セルのオーディエンス・レベルが異なります。

表 78. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
12312	ソース・セルがありません。入力の接続が正しくない可能性があります。
12401	実行内部エラー (1)
12600	内部エラー: SReport
12601	レポートは使用中です。削除できません。
12602	内部エラー: 無効なレポート ID です。
12603	内部エラー: 無効なレポート・タイプが保存されています。
12604	内部エラー: 無効なレポート・セル ID です。
12605	内部エラー:実行する前にレポートが初期化されません。
12606	内部エラー: 値がありません。
12607	内部エラー: レポートをロックできません。
12608	内部エラー: 無効なフィールドが指定されています。
12609	セルがないとレポートを作成できません。
12610	内部エラー:使用可能なセル・レコードがこれ以上ありません。
12611	レポート名が他の登録済みレポート名と競合します。
12612	HTML ファイルを書き込み用に開くことはできません。
12613	フィールド・タイプが内部設定と一致しません。テーブルを再マップする必 要があります。
12614	レポート名が空白です。
12615	リーダー・モードではコマンドを使用できません
13000	Web アプリケーションからの応答を解析中にエラーが発生しました。
13001	Web アプリケーションからの応答にクライアント ID がありません。
13002	Web アプリケーションからの応答に解決 ID がありません。
13003	Web アプリケーションからの応答の iscomplete フラグの値が正しくあり ません。
13004	Web アプリケーションから不明なエラー・コードが返されました。
13005	HTTP 通信エラー
13006	応答で iscomplete フラグが必要でしたが、欠落しています。
13101	内部エラー
13104	セル・ロック・エラー。
13110	プロセスが構成されていません。
13111	不明な関数タグ。
13113	レポート・ロック・エラー。
13114	プロファイル・レポート生成エラー。
13115	テーブル・ロック・エラー。
13116	入力セルがありません。
13117	入力が選択されていません。
13118	選択基準がありません。
13119	データ・ソースが選択されていません。
13120	選択したテーブルのオーディエンス・レベルが異なります。
13121	オーディエンス・レベルが指定されていません。

表 78. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
13122	DOM 作成エラー。
13123	DOM 解析エラー。
13124	不明なパラメーターです。
13125	無効なパラメーター値です。
13131	データベース認証が必要です。
13132	文字列への変換でエラーが発生しました。
13133	抽出フィールドが選択されていません。
13134	抽出フィールドのサンプル名が複製しています。
13135	複製するフィールドのスキップが選択されていません。
13136	リーダー・モードではコマンドを使用できません
13137	ソース・テーブルが選択されていません。
13138	ディメンション階層に基づく選択時のエラー:選択したセグメントのオーディエンス・レベルにテーブルがマップされていません。
13139	選択した最適化セッションのテーブル・マッピングが指定されていません。
13140	CustomerInsight 選択で指定が行われていません。
13141	CustomerInsight 選択で選択した内容が有効ではありません。
13145	NetInsight 選択で指定が行われていません。
13146	NetInsight 選択で選択した内容が有効ではありません。
13200	コンタクト・プロセスのメモリー割り当てエラー。
13201	コンタクト・プロセスの内部エラー。
13203	コンタクト・プロセスの接続元プロセス・エラー。
13204	コンタクト・プロセスのセル・ロック・エラー。
13205	コンタクト・プロセスがユーザーによって停止されました。
13206	コンタクト・プロセスのコンタクト・テーブル・ロック・エラー。
13207	コンタクト・プロセスのバージョン・テーブル・ロック・エラー。
13208	コンタクト・プロセスのセル情報取得エラー。
13209	コンタクト・プロセスのテーブル情報取得エラー。
13210	コンタクト・プロセスのテーブル・ロック・エラー。
13211	コンタクト・プロセスの不明な関数タグ・エラー。
13212	コンタクト・プロセスの GIO オープン・エラー。
13213	コンタクト・プロセスのレポート・ロック・エラー。
13214	創造的部分にはさらに情報が必要です。
13215	変動費項目を 1 つだけ選択する必要があります。
13216	変動費項目が競合します。
13217	バージョンにはさらに情報が必要です。
13218	創造的部分を少なくとも 1 つ選択する必要があります。
13219	レスポンス・チャネルを少なくとも 1 つ選択する必要があります。
13220	コンタクト・チャネルを1 つ選択する必要があります。
13221	選択された ID は一意ではありません。
13223	コンタクト ID が一意ではありません。

表 78. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
13224	処理ページ: ソース・セルがありません。
13225	処理ページ: コンタクト ID が選択されていません。
13226	処理ページ:バージョンが選択されていません。
13227	コンタクト・リスト・ページ: エクスポート・テーブルが選択されていませ
	h.
13228	コンタクト・リスト・ページ: サマリー・ファイルが選択されていません。
13229	コンタクト・リスト・ページ:エクスポート・フィールドが選択されていま せん。
13230	トラッキング・ページ: 更新の頻度が選択されていません。
13231	トラッキング・ページ: モニター期間をゼロにすることはできません。
13232	レスポンダー・ページ: レスポンダー・テーブルが選択されていません。
13233	到達不能ページ: 到達不能テーブルが選択されていません。
13234	ログ・ページ: コンタクトのログを記録するテーブルが選択されていませ
	h.
13235	ログ・ページ: コンタクトのログを記録するフィールドが選択されていません。
13236	ログ・ページ:レスポンダーのログを記録するテーブルが選択されていません。
13237	ログ・ページ:レスポンダーのログを記録するフィールドが選択されていま せん。
13238	ログ・ページ: 到達不能のログを記録するテーブルが選択されていません。
13239	ログ・ページ: 到達不能のログを記録するフィールドが選択されていません。
13240	コンタクト・プロセスのセル・フィールド情報取得エラー。
13241	コンタクト・リスト・ページ: トリガーが指定されていません。
13242	コンタクト・リスト・ページ: ソート・フィールドが選択されていません。
13244	無効なフィールドです。
13246	double 型から string 型への変換エラー。
13248	コンタクト・リスト・ページ: エクスポート・ファイルが選択されていませ ん。
13249	コンタクト・リスト・ページ:区切り記号が指定されていません。
13250	選択したテーブルのオーディエンス・レベルが異なります。
13251	コンタクト・リスト・ページ: エクスポート・ディクショナリー・ファイル が選択されていません。
13252	ログ・ページ: コンタクトのログを記録するファイルが選択されていません。
13253	
13254	ログ・ページ: コンタクトのディクショナリー・ファイルが指定されていま
	せん。
13255	ログ・ページ:レスポンダーのログを記録するファイルが選択されていません。
13256	ログ・ページ:レスポンダーの区切り記号が指定されていません。

表 78. Campaign のエラー・コード (続き)

7-1	エラーの説明
13257	ログ・ページ: レスポンダーのディクショナリー・ファイルが指定されてい
	ません。
13258	ログ・ページ: 到達不能のログを記録するファイルが選択されていません。
13259	ログ・ページ:到達不能の区切り記号が指定されていません。
13260	ログ・ページ: 到達不能のディクショナリー・ファイルが指定されていませ
	<i>λ</i> .
13261	コンタクト・リスト・ページ: 選択したデータ・エクスボート・ファイル名 に無効なパスが含まれています。
13262	コンタクト・リスト・ページ:エクスポート・ファイル用に選択したデー タ・ディクショナリーに無効なパスが含まれています。
13263	コンタクト・リスト・ページ:複製するフィールドのスキップが選択されて いません。
13264	コンタクト・リスト・ページ: レコードを更新するには、入力と同じオーデ
	ィエンスを持つベース・テーブルが必要です。
13265	ログ・ページのコンタクト: レコードを更新するには、入力と同じオーディ エンスを持つベース・テーブルが必要です。
13266	ログ・ページのレスポンダー:レコードを更新するには、入力と同じオーディエンスを持つベース・テーブルが必要です。
13267	ログ・ページの到達不能:レコードを更新するには、入力と同じオーディエンスを持つベース・テーブルが必要です。
13268	トラッキング・ページ: トリガーが指定されていません。
13269	レスポンダー・ページ:レスポンダー照会が指定されていません。
13270	レスポンダー・ページ: データ・ソースが選択されていません。
13271	到達不能ページ: 到達不能照会が指定されていません。
13272	到達不能ページ: データ・ソースが選択されていません。
13273	選択したソース・セルのオーディエンス・レベルが異なります。
13274	コンタクト・プロセスのパラメーターが不明です。
13275	コンタクト・プロセスのパラメーター値が無効です。
13276	バージョン名が一意ではありません。
13277	セル・コードが空白であるか、複製しています。
13278	他のフローチャートで使用されるバージョンを変更しようとしています。
13279	ログ・ページのコンタクト:複製するフィールドのスキップが選択されてい ません。
13280	ログ・ページのレスポンダー:複製するフィールドのスキップが選択されて いません。
13281	ログ・ページ到達不能:複製するフィールドのスキップが選択されていません。
13282	
13283	データ・ソースが選択されていません。
13284	コンタクト・リスト・ページ: 選択したデータ・ディクショナリー・ファイ ルが存在しません。

表 78. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
13285	ログ・ページ:コンタクトのログを記録するフィールドが選択されていませ
	h.
13286	リーダー・モードではコマンドを使用できません
13301	内部エラー
13304	セル・ロック・エラー。
13310	プロファイル・レポート生成エラー。
13311	不明な関数タグ。
13312	レポート・ロック・エラー。
13313	入力が選択されていません。
13314	フィールドが選択されていません。
13315	照会が指定されていません。
13316	データ・ソースが指定されていません。
13317	名前が一意ではありません。
13318	テーブルが選択されていません。
13320	不明なパラメーターです。
13321	無効なパラメーター値です。
13322	名前が指定されていません。
13323	無効な名前です。
13324	リーダー・モードではコマンドを使用できません
13400	スケジュール・プロセスのメモリー割り当てエラー。
13401	スケジュール・プロセスの内部エラー。
13403	接続元プロセス・エラー。
13404	セル・ロック・エラー。
13405	プロセスがユーザーによって停止されました。
13408	日付形式のエラー。
13409	時刻形式のエラー。
13410	全スケジュール期間が 0 です。
13411	実行するスケジュールが選択されていません。
13412	時刻で実行するには時刻が必要です。
13413	トリガーで実行するにはトリガーが必要です。
13414	出力トリガーが必要です。
13415	経過時間が0です。
13416	追加待機時間には、最初の 3 つの実行オプションのいずれかを使用する必 要があります。
13417	スケジュール実行時間がスケジュール期間外です。
13418	無効な時刻形式です。
13419	カスタム実行オプションを少なくとも 1 つ選択する必要があります。
13420	遅延時間が全スケジュール期間を超過しています。
13421	無効な時刻です。開始時刻の期限が切れています。
13422	入力キュー・テーブルが選択されていません。

表 78. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
13423	選択したキュー・テーブルが無効です。
13424	このプロセスで「プロセスの実行」は使用できません。
13501	サンプル・プロセスの内部エラー。
13503	サンプル・プロセスの接続元プロセス・エラー。
13504	サンプル・プロセスのセル・ロック・エラー。
13505	サンプル・プロセスがユーザーによって停止されました。
13506	サンプル・プロセスのサンプル・テーブル・ロック・エラー。
13507	サンプル・プロセスのバージョン・テーブル・ロック・エラー。
13508	サンプル・プロセスのソース・セル取得エラー。
13510	サンプル・プロセスの不明な関数タグ。
13511	サンプル・プロセスが構成されていません。
13512	サンプル・プロセスの出力セル・サイズが入力セル・サイズを超過していま す。
13513	ソース・セルが選択されていません。
13514	ソート・フィールドが選択されていません。
13515	名前が一意ではありません。
13516	サンプル・プロセスのパラメーターが不明です。
13517	サンプル・プロセスのパラメーター値が無効です。
13518	サンプル名が指定されていません。
13519	無効なサンプル名です。
13520	リーダー・モードではコマンドを使用できません
13521	サンプル・サイズが指定されていません。
13601	内部エラー
13602	GIO オープン・エラー。
13603	指定したトリガーは存在しません。
13604	トリガー名が指定されていません。
13605	トリガーが完了しましたが、エラーがあります。
13701	スコア・プロセスの内部エラー。
13703	スコア・プロセスの接続元プロセス・エラー。
13704	スコア・プロセスのセル・ロック・エラー。
13705	スコア・プロセスがユーザーによって停止されました。
13706	スコア・プロセスのセル操作エラー。
13707	モデル数を 0 にすることはできません。
13708	スコア・プロセスの GIO オープン・エラー。
13709	環境変数が設定されていません。
13716	スコア・フィールドのプレフィックスがありません。
13717	内部モデルが選択されていません。
13718	外部モデルが選択されていません。
13719	モデル変数が完全に一致していません。
13720	入力が選択されていません。

表 78. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
13721	モデル数が 0 です。
13723	スコア・フィールドのプレフィックスが一意ではありません。
13724	外部モデル (rtm) ファイルは、現在のスコア構成との互換性がありません。
13725	無効なフィールドです。
13726	dbscore プロセスが完了しましたが、エラーがあります。
13727	スコア・プロセスのパラメーターが不明です。
13728	外部モデル・ファイルが見つかりません。
13729	モデル情報を取得できません。モデル・ファイルが無効である可能性があり ます。
13730	リーダー・モードではコマンドを使用できません
13801	「オプションの選択」プロセスの内部エラー。
13803	「オプションの選択」プロセスの接続元プロセス・エラー。
13804	「オプションの選択」プロセスのセル・ロック・エラー。
13805	「オプションの選択」プロセスがユーザーによって停止されました。
13806	「オプションの選択」プロセスのセル操作エラー。
13807	「オプションの選択」プロセスのテーブル・ロック・エラー。
13809	「オプションの選択」プロセスのレポート・ロック・エラー。
13812	dbscore プロセスが完了しましたが、エラーがあります。
13825	複製するパーソナライズ・フィールド名が指定されています。
13833	パーソナライズ・フィールド表示名が空白です。
13834	パーソナライズ・フィールド表示名に無効な文字が含まれています。
13901	内部エラー
13903	接続元プロセス・エラー。
13904	セル・ロック・エラー。
13905	プロセスがユーザーによって停止されました。
13906	セル操作エラー。
13907	テーブル・ロック・エラー。
13909	不明な関数タグ・エラー。
13910	レポート・ロック・エラー。
13911	入力が選択されていません。
13912	エクスポート・テーブルが選択されていません。
13913	エクスポートするフィールドが選択されていません。
13914	ソート・フィールドが選択されていません。
13915	無効なフィールド名です。
13917	無効なフィールド名です。
13918	エクスポート・ファイルが選択されていません。
13921	文字列への変換でエラーが発生しました。
13923	選択したセルのオーディエンス・レベルが異なります。
13924	区切り記号が指定されていません。

表 78. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
13925	エクスポートするデータ・ディクショナリー・ファイル名が指定されていま
	せん。
13926	選択したデータ・エクスポート・ファイル名に無効なパスが含まれていま
	J.
13927	エクスポート・ファイル用に選択したデータ・ディクショナリーに無効なパ    スポ会まわています
12020	へがウム4ししいカタ。 海剌ナフラ , ルビのフナ 、 プが遅切さわていナユノ
13928	複製9 るノイールトのスキッノが選択されていません。
13929	レコートを更新りるには、人力と向しオーティエンスを持つペース・テーノルが必要です。
13930	スナップショット・プロセスの DOM 作成エラー。
13931	スナップショット・プロセスのパラメーターが不明です。
13932	スナップショット・プロセスのパラメーター値が無効です。
13933	セル・コードが空白であるか、複製しています。
13934	選択したデータ・ディクショナリー・ファイルが存在しません。
13935	リーダー・モードではコマンドを使用できません
14001	モデル・プロセスの内部エラー。
14003	モデル・プロセスの接続元プロセス・エラー。
14004	モデル・プロセスのセル・ロック・エラー。
14005	モデル・プロセスがユーザーによって停止されました。
14006	モデル・プロセスのセル操作エラー。
14008	モデル・プロセスのレポート・ロック・エラー。
14009	レスポンダー・セルが選択されていません。
14010	非レスポンダー・セルが選択されていません。
14013	モデル・ファイル名が選択されていません。
14014	モデル・プロセスで少なくとも 1 つの変数を使用する必要があります。
14015	レスポンダー・セルおよび非レスポンダー・セルが選択されていません。
14016	udmerun プロセスが完了しましたが、エラーがあります。
14017	選択したモデル・ファイル名に無効なパスが含まれています。
14018	リーダー・モードではコマンドを使用できません
14101	「オプションの評価」プロセスの内部エラー。
14103	「オプションの評価」プロセスの接続元プロセス・エラー。
14104	「オプションの評価」プロセスのセル・ロック・エラー。
14105	「オプションの評価」プロセスがユーザーによって停止されました。
14106	「オプションの評価」プロセスのセル操作エラー。
14107	「オプションの評価」プロセスのテーブル・ロック・エラー。
14108	「オプションの評価」プロセスの不明な関数タグ。
14110	「オプションの評価」プロセスのレポート・ロック・エラー。
14111	レスポンダー・セルが選択されていません。
14112	非レスポンダー・セルが選択されていません。
14113	レスポンダー・フィールドが選択されていません。

表 78. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
14114	非レスポンダー・フィールドが選択されていません。
14115	「オプションの評価」プロセスのパラメーターが不明です。
14116	セット番号が指定されていません。
14117	セット番号が範囲外です。
14118	セット名が空白です。
14119	サポートされるオプションではありません。
14120	リーダー・モードではコマンドを使用できません
14202	セグメントへのデータ挿入の内部エラー。
14203	セグメントへのデータ挿入のセル・ロック・エラー。
14204	PopulateSeg プロセスの不明な関数タグ。
14205	入力が選択されていません。
14206	指定されたフォルダー内のセグメント名が一意ではありません。
14207	セグメント名が指定されていません。
14208	セグメント名が無効です。
14209	セキュリティー・ポリシーが無効です。
14210	セキュリティー・ポリシーが指定されていません。
14301	「オプションのテスト」プロセスの内部エラー。
14303	「オプションのテスト」プロセスの接続元プロセス・エラー。
14304	「オプションのテスト」プロセスのセル・ロック・エラー。
14305	「オプションのテスト」プロセスがユーザーによって停止されました。
14306	「オプションのテスト」プロセスのセル操作エラー。
14307	「オプションのテスト」プロセスのテーブル・ロック・エラー。
14308	ソース・セルが選択されていません。
14309	最適化されるテストの数がゼロです。
14310	収支の 1 つが構成されていません。
14317	レポート・ロック・エラー。
14319	選択したフィールド・インデックスの取得エラー。
14320	確率フィールド値が 1.0 を超えています。
14321	無効なフィールドです。
14322	確率フィールドが選択されていません。
14323	処理が選択されていません。
14324	リーダー・モードではコマンドを使用できません
14501	カスタム・マクロの内部エラー。
14502	カスタム・マクロ式が指定されていません。
14503	カスタム・マクロ名が空白です。
14504	カスタム・マクロ式がありません。
14505	カスタム・マクロの不明な関数タグ。
14701	保存されたフィールドの内部エラー。
14703	変数名が指定されていません。
14704	式が指定されていません。

表 78. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
14705	同名のユーザー定義フィールドが既に保存されています。
14706	保存されたフィールドの不明な関数タグ。
14901	リスト・ボックス選択エラー
14902	選択した項目が多すぎます。
14903	項目が選択されていません。
14905	選択項目が見つかりません。
14906	ツリー・ビュー操作を認識できません。
14907	コスト情報が選択されていません。
14908	ダイアログ初期化エラー
14909	指定したセル名 (プロセス名 + 出力セル名) が長すぎます。
14912	創造的 ID には英数字とアンダースコアーだけを含めることができます。
14913	出力セル名が一意ではありません。
14914	現行情報に上書きしますか?
15101	ダイアログ初期化エラー
15201	リスト・ボックス選択エラー
15202	ダイアログ初期化エラー
15203	指定したセル名 (プロセス名 + 出力セル名) が長すぎます。
15204	無効なセル・サイズ制限です。
15301	ダイアログ初期化エラー
15501	文字列が見つかりません。
15502	最低率 > 最高率
15503	ダイアログ初期化エラー
15504	無効な出力セル名
15701	ダイアログ初期化エラー
15702	指定したセル名 (プロセス名 + 出力セル名) が長すぎます。
15801	選択した文字列が見つかりません。
15802	ツリー展開エラー
15803	ダイアログ初期化エラー
15804	セグメント名が指定されていません。
15805	セグメント名を指定できません
15901	選択した文字列が見つかりません。
15903	ダイアログ初期化エラー
15904	指定したセル名 (プロセス名 + 出力セル名) が長すぎます。
15905	リスト・ボックス選択エラー
15906	無効なセル/レコード・サイズ制限です。
15907	テーブルおよびフィールドに基づいた既存の式は失われます。
15908	ディメンション階層に基づいた既存の基準は失われます。
16001	ダイアログ初期化エラー
16002	リスト・ボックス選択項目が見つかりません。
16051	保存されたトリガーの内部エラー。

表 78. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
16053	トリガー名が空白です。
16054	トリガー・コマンドが空白です。
16055	同名のトリガーが既に定義されています。
16056	保存されたトリガーの不明な関数タグ。
16101	選択エラー
16102	複数選択エラー
16103	項目が選択されていません。
16104	選択スタイル・エラー
16105	選択項目が見つかりません。
16106	ダイアログ初期化エラー
16201	ダイアログ初期化エラー
16202	リスト・ボックス選択エラー
16203	指定したセル名 (プロセス名 + 出力セル名) が長すぎます。
16302	ソース・テーブルがマップされていません。
16303	ディメンション情報の内部エラー:不明な関数です。
16304	ディメンション情報の内部エラー。
16305	レベル数が無効です。
16306	ソース・テーブルに必須フィールドがありません。再マップする必要があり ます。
16400	データベース・ソースが定義されていません。
16401	テーブルが選択されていません。
16402	内部エラー: テーブル・マネージャーがありません。
16403	Campaign テーブルのインデックスが正しくありません。
16404	内部エラー
16405	内部エラー:新しいテーブルに不明な関数があります。
16406	ファイル名が指定されていません。
16407	データ・ディクショナリーが指定されていません。
16408	選択したテーブルには定義済みのフィールドがありません。
16409	内部エラー:テーブルが作成されていません。
16410	新規テーブルの名前が指定されていません。
16411	データベースのユーザー名とパスワードが必要です。
16412	現在サポートされていないデータベース・タイプです。
16413	テーブルがベース・テーブルではありません リレーションは許可されま せん。
16414	フィールド・インデックスが正しくありません。
16415	レコード・テーブル ID が指定されていません。
16416	内部エラー: この名前のディメンション・テーブルがありません。
16417	テーブルがディメンションまたは通常のテーブルではありません。
16418	内部エラー: この名前のベース・テーブルがありません。
16419	この操作のエントリー・ポイントが無効です。

表 78. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
16420	既存テーブルへのマッピングは、この操作では無効です
16421	新しいフラット・ファイルの作成中にエラーが発生しました
16422	エラー - ファイル/テーブル・オプションが選択されていません
16423	エラー - データベースが選択されていません
16424	エラー - 選択したテーブルが無効です
16425	エラー - キー・フィールド・インデックスが正しくありません
16426	エラー - キー・フィールド名が空白です
16427	エラー - テーブル名が複製しているか、無効です。
16428	フィールド名は文字で始める必要があります。英数字とアンダースコアーだ けを含めることができます。
16429	ディメンション・テーブル ID が指定されていません
16430	複製するフィールド名が指定されています
16431	テーブル名は文字で始める必要があります。英数字とアンダースコアーだけ を含めることができます
16432	エラー - ディメンション名が複製しているか、無効です。
16433	エラー - フォルダーが見つかりません
16501	ユーザー定義フィールドの内部エラー。
16503	ユーザー定義フィールドの不明な関数タグ・エラー。
16504	ユーザー定義フィールドが存在しません。
16505	ユーザー定義フィールドのレポート・ロック・エラー。
16506	ユーザー定義フィールドのテーブル・ロック・エラー。
16507	ユーザー定義フィールドのセル・ロック・エラー。
16508	ユーザー定義フィールドが既に存在します。
16509	ユーザー定義フィールドですべてのフィールド情報の取得時にエラーが発生 しました。
16601	内部エラー。
16603	許可されたプロセスのスケジュール期間が期限切れになりました。
16701	選択した文字列が見つかりません。
16702	親ウィンドウが見つかりません
16703	ファイル名が指定されていません
16704	フィールドが選択されていません
16705	ダイアログ初期化エラー
16706	指定したソース・ファイルが存在しません
16707	システム・テーブルを再マップします。本当によろしいですか?
16708	古い定義を上書きしますか?
16709	構文チェックは OK です
16710	現在の式への変更を破棄しますか?
16711	指定したディクショナリー・ファイルが存在しません
16712	派生変数名が指定されていません
16713	照会名が指定されていません

表 78. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
16714	トリガー名が指定されていません。
16715	フィールドが選択されていません
16716	フィールド名が正しくありません
16717	無効な名前:名前は文字で始める必要があります。英数字と '_' だけを含め
	ることができます。
16718	エントリーを削除しますか?
16719	フォルダーを削除しますか? すべてのフォルダー情報 (サブフォルダーなど) が失われます。
16720	名前が指定されていません
16721	無効なデータ・ディクショナリー・ファイルです。ディレクトリーである可 能性があります。
16722	データ・ディクショナリー・ファイルが存在します。上書きしますか?
16723	ファイルが見つかりません
16724	既存のファイルを上書きしますか?
16725	オーディエンス・レベルが指定されていません
16726	オーディエンス ID フィールドが指定されていません
16727	複製するオーディエンス ID フィールドがあります
16728	無効な実行状態 - 操作を終了します
16729	テーブルが選択されていません
16730	セルが選択されていません
16731	選択したテーブルのオーディエンス・レベルが異なります
16732	選択したセルのオーディエンス・レベルが異なります
16733	オーディエンス・レベルはテーブルのプライマリー・オーディエンスとして 既に定義済みです
16734	このテーブルのオーディエンス・レベルは既に定義済みです
16735	ベース・テーブルの関連フィールドがディメンション・テーブルのキー・フ ィールドに適合しません
16736	ファイル・パス長さが許容制限を超えました
16737	フィールドがチェックされていません
16738	テーブルまたはフィールド名が指定されていません
16739	派生変数名が Campaign 生成済みフィールドと競合します
16740	必要な値がありません。
16741	既存の式をポイント & クリック・モード用に変換できません。空白の式で 再開しますか?
16742	式をポイント & クリック・モード用に変換できません。テキスト・ビルダ ー・モードに切り替えますか?
16743	現在の式は有効ではありません。このままテキスト・ビルダー・モードへの 切り替えを続行しますか?
16744	ツリー展開エラー
16745	フォルダーが既に存在します。
16746	トリガー・コマンドを実行します。本当によろしいですか?

表 78. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
16747	派生変数の名前が既存の永続的なユーザー定義フィールドの名前と競合しま
1 (7.40	9
16748	区切り記号が指定されていません。
16750	派生変数の名前が指定されていません。
16751	選択したセグメントのオーディエンス・レベルが異なります
16752	フィールド名が正しくありません。ユーザー変数の値は選択プロセスでのみ 設定できます。
16753	名称が長すぎます。
16754	新規テーブルを作成するためには、管理者はオーディエンス・レベルを少な くとも 1 つ定義する必要があります。
16755	最適化されたリスト・テーブルの再マップは許可されません。
16756	オーディエンス ID フィールドの不適合:種類が一致しません。
16757	出力セル名が長すぎます。
16758	プロセス名が長すぎます。
16759	出力セル名が空です。
16760	セキュリティー・ポリシーが指定されていません。
16761	セキュリティー・ポリシーは元のポリシーに復元されました。
16762	開始日または終了日が指定されていません。
16763	指定した日付は無効です。
16764	日付が選択されていません。
16765	終了日には、開始日よりも前の日付を指定できません。
16769	データ・パッケージ内部エラー。
16770	パッケージ名が指定されていません。
16771	ログ・エントリーにアクセスするには、ログの表示権限が必要です。
16772	ディクショナリー・ファイル名をデータ・ファイル名と同じにすることはで きません。
16773	データ・パッケージ・フォルダーが既に存在します。そのフォルダー内の既
	存のコンテンツは削除されます。
16901	テンプレートの内部エラー。
16903	テンプレート名が空白です。
16906	テンプレートの関数タグが不明です。
16908	Templates ディレクトリーが存在しません。
16909	Templates ディレクトリーが無効です。
16910	同じ名前で保存されたテンプレートがすでに存在します。
17001	保存されたカタログの内部エラー。
17003	カタログ名が空白です。
17006	保存されたカタログの関数タグが不明です。
17008	Catalogs ディレクトリーが存在しません。
17009	Catalogs ディレクトリーが無効です。
17012	カタログ・ファイルの拡張子が無効です。'cat' および 'xml' のみ使用できます。

表 78. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
17013	ターゲット・カタログ・ファイルの拡張子が元のファイルの拡張子と異なり
	ます。
17014	Campaign データ・フォルダーの識別子が空白です。
17015	Campaign データ・フォルダーのパスが空白です。
17016	Campaign データ・フォルダーの識別子が複製しています。
17017	同じ名前で保存されたカタログがすでに存在します。
17018	カタログ名が、他のセキュリティー・ポリシーの既存のカタログと競合しま す。他の名前を選択してください。
17101	グループ・プロセスの内部エラー。
17102	入力が選択されていません。
17103	オーディエンスが選択されていません。
17104	照会文字列がありません。
17105	フィルター照会文字列がありません。
17106	基になる関数が選択されていません。
17107	基になるフィールドが選択されていません。
17108	レベルが選択されていません。
17109	カウント演算子が選択されていません。
17110	グループ・プロセスのセル・ロック・エラー。
17112	グループ・プロセスの不明な関数タグ。
17113	グループ・プロセスのレポート・ロック・エラー。
17114	選択したオーディエンスは選択したテーブルに存在しません。
17115	無効なオーディエンス・レベルが選択されています。
17116	オーディエンス・プロセスのパラメーターが不明です。
17117	リーダー・モードではコマンドを使用できません
17201	リスト・ボックス選択エラー
17202	ダイアログ初期化エラー
17203	ツリー展開エラー
17204	コンボ・ボックスの挿入エラー
17205	無効なセル・サイズ制限です。
17302	「最適化」プロセスの内部エラー。
17303	「最適化」プロセスのセル・ロック・エラー。
17304	「最適化」プロセスのテーブル・ロック・エラー。
17306	「最適化」プロセスの不明な関数タグ・エラー。
17307	「最適化」プロセスのレポート・ロック・エラー。
17308	入力が選択されていません。
17309	エクスポートするフィールドが選択されていません。
17310	無効なフィールド名です。
17311	文字列への変換でエラーが発生しました。
17312	選択した入力セルのオーディエンス・レベルが異なります。
17313	セル・コードが空白であるか、複製しています。

表 78. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
17314	選択した Contact Optimization セッションで、推奨コンタクト・テーブルが 定義されていません。
17315	選択した Contact Optimization セッションで、データベース・ソースが定義 されていません。
17316	推奨コンタクト・テーブルで必須フィールドが見つかりません。
17317	選択した Contact Optimization セッションは現在実行中です。
17318	データベース認証が必要です。
17319	Contact Optimization セッションが選択されていません。
17321	コンタクト日が無効です。
17322	コンタクト日が期限切れです。
17323	リーダー・モードではコマンドを使用できません
17324	選択したオファーが見つかりません。
17325	選択したオファーのチャネルが見つかりません。
17326	セルのオファーの割り当てがありません。
17327	内部エラー:オファーがありません。
17328	内部エラー: チャネルがありません。
17329	スコア・フィールドが指定されていません。
17330	オファーまたはオファー・リストがないか、回収になっていることが検出さ れました。
17331	関連する Contact Optimization セッションの実行中にフローチャートを実行 しようとしました。
17332	推奨属性テーブルへの書き込みに失敗しました。
17333	エクスポート・フィールドのマッピングが解除されました。
17334	関連する Contact Optimization セッションの実行中に、「最適化」プロセ ス・ボックスを削除しようとしました。
17351	選択エラー
17352	選択項目が見つかりません。
17402	セグメント化プロセスの内部エラー。
17403	セグメント化プロセスのセル・ロック・エラー。
17404	セグメント化プロセスの不明な関数タグ。
17405	入力が選択されていません。
17406	指定されたフォルダー内のセグメント名が一意ではありません。
17407	セグメント名が指定されていません。
17408	セグメント名が無効です。
17409	セキュリティー・ポリシーが無効です。
17410	セキュリティー・ポリシーが指定されていません。
17411	選択した入力セルのオーディエンス・レベルが異なります。
17412	bin ファイルの作成が無効になっており、一時テーブル DS なしが指定され ています。
17413	セグメントー時テーブルのデータ・ソース名が無効です
17452	セグメント名が指定されていません。

表 78. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
17502	内部エラー
17503	セル・ロック・エラー
17504	テーブル・ロック・エラー。
17505	不明な関数タグ・エラー。
17507	レポート・ロック・エラー。
17509	入力が選択されていません。
17510	実現ページ:エクスポート・テーブルが選択されていません。
17511	パーソナライズ・ページ:エクスポート・フィールドが選択されていませ
	<i>h</i> .
17512	ログ・ページ: コンタクトのログを記録するテーブルが選択されていませ
17510	
17513	ロク・ハーン: コンダクトのロクを記録するフィールトが選択されていません。
17514	ヤル・フィールド情報取得エラー。
17515	トリガーが指定されていません。
17516	パーソナライズ・ページ・ソート・フィールドが選択されていません。
17518	無効なフィールド名です。
17519	double 型から string 型への変換エラー。
17521	実現ページ: エクスポート・ファイルが選択されていません。
17522	コンタクト・リスト・ページ:区切り記号が指定されていません。
17523	実現ページ:エクスポート・ディクショナリーが選択されていません。
17524	ログ・ページ: コンタクトのログを記録するファイルが選択されていませ
	$h_{\circ}$
17525	ログ・ページ:コンタクトの区切り記号が指定されていません。
17526	ログ・ページ: コンタクトのディクショナリー・ファイルが指定されていま
	せん。
17527	実現ページ:選択したデータ・エクスポート・ファイル名に無効なパスが含
17520	
17528	実現ペーン: エクスホート・ファイル用に選択したナータ・ナイクンヨナリ ーに無効なパスが含まれています。
17529	パーソナライズ・ページ・複製するフィールドのスキップが躍択されていま
1,029	せん。
17530	実現ページ: レコードを更新するには、入力と同じオーディエンスを持つべ
	ース・テーブルが必要です。
17531	ログ・ページのコンタクト: レコードを更新するには、入力と同じオーディ
	エンスを持つベース・テーブルが必要です。
17532	選択した入力セルのオーディエンス・レベルが異なります。
17533	セル・コードが空白であるか、複製しています。
17534	ログ・ページ:複製するフィールドのスキップが選択されていません。
17535	実現ページ:選択したデータ・ディクショナリー・ファイルが存在しませ  ん。
17538	オファー・コードが一意ではありません。

表 78. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
17539	リーダー・モードではコマンドを使用できません
17540	eMessage 文書のオファー ID が無効です。
17541	オーディエンス・レベルが空白です。
17542	オファーが選択されていません。
17544	セルのオファーの割り当てがありません。
17549	実行中に eMessage サーバーからエラーが返されました。
17550	内部エラー: 不明な eMessage ステータスです。
17552	リスト・ボックス選択エラー
17553	選択項目が見つかりません。
17554	オファーの名前またはコードが空白です。
17555	指定したレコードは、コンタクト履歴テーブル、詳細コンタクト履歴テーブ ル、および処理テーブルから消去されます。
17557	このプロセスによって作成されたすべてのコンタクト履歴を完全に削除しよ うとしています。続行してよろしいですか?
17558	毎初た有効期限が指定されています
17559	文書の設定が eMessage サーバーから更新されました。
17560	複製する追跡コードは許可されません。
17561	トラッキング・オーディエンス・レベルを特定できません。
17562	無効なコンタクト数です
17563	無効なレスポンス数です
17564	開始/終了日付が無効であるか、指定されていません
17565	開始日に終了日よりも後の日付が指定されています
17566	このプロセスによって作成されたコンタクト履歴を選択して完全に削除しよ
	うとしています。続行してよろしいですか?
17567	このプロセスによって作成されたコンタクト履歴はありません。
17568	このプロセスのレコードがコンタクト履歴テーブル、詳細コンタクト履歴テ ーブル、および処理テーブルから消去されます。
17570	文書 PF に対するフィールドの割り当てがありません。
17571	オファー・パラメーターに対するフィールドの割り当てがありません。
17572	トラッキング・フィールドに対するフィールドの割り当てがありません。
17573	eMessage ディレクトリーが無効です。
17574	コンテンツ・タイプに対するフィールドの割り当てがありません。
17575	eMessage は最後の操作をまだ完了していません。後でもう一度試してください。
17576	eMessage 文書が選択されていません。
17577	不明なパラメーターです。
17578	無効なパラメーターです。
17579	DOM 作成エラー。
17580	複数のセルが選択されています。選択したすべてのセルに割り当て条件が適 用されます。
17581	内部エラー: オファーがありません。

表 78. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
17582	内部エラー: チャネルがありません。
17583	異なるオーディエンス・レベルでコンタクト履歴がトラッキングされていま
	す。すべてのオーディエンス ID フィールドを指定する必要があります。
17584	出力キューが選択されていません。
17585	出力キューが見つかりません。
17586	出力キューで必須フィールドが見つかりません。
17587	ログ・ページ: このオーディエンス・レベルに対するコンタクト履歴テーブ ルが未定義です。
17588	出力ページの拡張設定:このオーディエンス・レベルに対するコンタクト履 歴テーブルが未定義です。
17589	出力ページの拡張設定:このオーディエンス・レベルに対するレスポンス履 歴テーブルが未定義です。
17590	プロセス・ボックスが構成されたため、オファーの URL の 1 つに、新し
	いオファー・パラメーター名が追加されました。このオファー・パラメータ ーにフィールドをマップしないと実行を開始できません。
17591	eMessage の文書でパーソナライズ・フィールドが変更されたため、プロセ ス・ボックスを再構成する必要があります。
17592	オファーまたはオファー・リストがないか、回収になっていることが検出さ れました。
17593	割り当て済みオファー・リストにオファーが含まれていません。
17595	コンタクト履歴を消去できません。選択した処理にレスポンス履歴が存在し ます。
17596	コンタクト履歴レコードが見つかりません。
17597	現在の実行にはコンタクト履歴が存在します。実行の分岐と処理を開始する には、履歴を消去する必要があります。
17599	指定したコンタクト・ステータス・コードがシステムで定義されていません。
17600	
17602	レスポンス・プロセスの内部エラー。
17603	レスポンス・プロセスのセル・ロック・エラー。
17604	レスポンス・プロセスのテーブル・ロック・エラー。
17605	レスポンス・プロセスの不明な関数タグ・エラー。
17607	レスポンス・プロセスのレポート・ロック・エラー。
17608	レスポンス・プロセスのセル・フィールド情報取得エラー。
17611	double 型から string 型への変換エラー。
17613	オーディエンス・レベルが空白です。
17614	入力が選択されていません。
17615	選択した入力セルのオーディエンス・レベルが異なります。
17616	オファーが選択されていません。
17617	1 つ以上のオファーにセルの割り当てがありません。
17618	オファー・コード・フィールドがありません。
17620	キャンペーン・コード・フィールドがありません。

表 78. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
17621	セル・コード・フィールドがありません。
17622	チャネル・コード・フィールドがありません。
17623	製品 ID フィールドがありません。
17624	他の場所にログを記録するためのテーブルが選択されていません。
17625	レコードを更新するには、トラッキングと同じオーディエンスを持つベー ス・テーブルが必要です。
17626	他の場所にログを記録するためのファイルが選択されていません。
17627	区切り記号付きファイルにログを記録するための区切り記号が指定されてい ません。
17628	ログを記録するためのディクショナリー・ファイルが指定されていません。
17629	他の場所にログを記録するフィールドが選択されていません。
17630	無効なフィールド名です。
17631	選択したレスポンス・タイプのオファーは、このプロセスに既に追加されて います。
17632	レスポンス・タイプが指定されていません。
17633	レスポンス・チャネルが指定されていません。
17634	レスポンスの日付フィールドが日付型フィールドではありません。
17635	レスポンス日付値は、指定された形式になっていません。
17636	オファーが選択されていません
17637	内部エラー: オファーが見つかりません。
17638	内部エラー: コンタクト・チャネルが見つかりません。
17639	内部エラー: キャンペーンが見つかりません。
17640	すべての着信レスポンスをトラッキングするには、オファー・フィールドを 指定する必要があります。
17641	入力セルとは異なるオーディエンス・レベルでトラッキングする場合、すべ てのオーディエンス ID フィールドを、「ログ」タブの「追加フィールド」 タブで指定する必要があります。
17642	ユーザー・レスポンス・タイプ・テーブルにデフォルトのレスポンス・タイ プが見つかりません
17643	コンタクト・ステータス・テーブルにデフォルトのコンタクト・ステータス が見つかりません
17644	処理マッピングが指定されていません。
17651	リスト・ボックス選択エラー
17653	レスポンス名が空白です
17654	このプロセスのレコードが、レスポンス履歴テーブルおよびトラッキング・ テーブルから消去されます。
17655	このプロセスのレスポンス履歴テーブルおよびトラッキング・テーブルのレ コードを消去します。本当によろしいですか?
17656	レスポンス・チャネルが指定されていません。
17657	このプロセスのレコードがコンタクト履歴テーブルおよびトラッキング・テ ーブルから消去されます。

表 78. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
17658	このプロセスのコンタクト履歴テーブルおよびトラッキング・テーブルのレ
	コードを消去します。本当によろしいですか?
17659	異なるオーディエンス・レベルでコンタクト履歴がトラッキングされていま
	す。すべてのオーティエンス ID フィールドを指定する必要があります。
17702	キューブ・プロセスの内部エラー。
17703	キューブ・プロセスのセル・ロック・エラー。
17704	キューブ・プロセスの不明な関数タグ。
17705	入力セルまたはセグメントがありません。
17706	セグメント名が一意ではありません。
17713	出力キューブが指定されていません。
17714	ディメンションが存在しません。
17715	選択したセグメントは、不明なオーディエンス・レベルに基づいています。
17717	レポート・ロック・エラー。
17718	無効なフィールド名です。
17752	キューブ名がありません。
17753	使用可能なディメンションがありません。
17754	このキューブのディメンションが指定されていません。
17755	無効な構成:複製するディメンションが選択されています。
17800	表示する日付の書式設定中にエラーが発生しました。
17801	ユーザーが入力した日付の解析中にエラーが発生しました。
17802	表示する通貨値の書式設定中にエラーが発生しました。
17803	ユーザーが入力した通貨値の解析中にエラーが発生しました。
17804	表示する数字の書式設定中にエラーが発生しました。
17805	ユーザーが入力した数字の解析中にエラーが発生しました。
17806	表示する時刻の書式設定中にエラーが発生しました。
17807	クライアントに保存されたリストの内部エラー。
17808	表示する日時の書式設定中にエラーが発生しました。
19000	内部エラー: 関数タグが不明です。
19001	メモリー・エラー
19002	DOM 例外
19003	パイプ・オープン・エラー
19005	終了日に開始日よりも前の日付が指定されています
19006	レポート名が無効です
19007	属性名が無効です
19010	数値フィールドに無効な文字が見つかりました。
19011	セグメントは使用中です。変更できません。
19013	キューブの指定が無効です
19014	有効開始日が無効です
19015	有効期限が無効です
19016	終了日に開始日よりも前の日付が指定されています

表 78. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
19018	同じフォルダー内では、各フォルダー名が一意である必要があります。指定 されたフォルダー名は既にこのフォルダー内で使用されています。
19019	フォルダーを削除できません。最初にフォルダーの内容 (ファイル/サブフォ ルダー) を削除する必要があります。
19020	フォルダーには使用中のセグメントが存在します。移動することはできません。
19021	削除できません。
19022	移動することはできません。
19023	フォルダーにはアクティブなセグメントが存在します。削除できません。
19024	フォルダーには非アクティブなセグメントが存在します。削除できません。
19025	宛先フォルダーが選択されていません。宛先フォルダーを選択してから、再 試行してください。
19026	無効なフォルダー ID が指定されました。
19027	セッション名は、フォルダー内で一意である必要があります。指定されたセ ッション名は既にこのフォルダー内で使用されています。
19028	アクティブなフローチャートが含まれているので、キャンペーン/セッショ ンを移動できません。
19029	移動することはできません。移動すると、宛先フォルダー内に複製したセグ メント名が生成されます。
19030	宛先の名前が付いたオブジェクトが既に存在します。
19500	プロセスの内部エラー。
19501	文字列への変換でエラーが発生しました。
19502	選択した Contact Optimization セッションが見つかりません。
20000	内部エラー: 関数タグが不明です。
20002	DOM 例外
20003	パイプ・オープン・エラー
20004	オファー・コードが一意ではありません
20005	終了日に開始日よりも前の日付が指定されています
20006	レポート名が無効です
20007	属性名が無効です
20008	オファーは使用されています。削除できません。
20009	フォルダーには使用されているオファーが存在します。削除できません。
20010	数値フィールドに無効な文字が見つかりました。
20011	セグメントは使用中です。変更できません。
20012	オファー・バージョン名が一意ではありません。
20013	キューブの指定が無効です
20014	有効開始日が無効です
20015	有効期限が無効です
20016	終了日に開始日よりも前の日付が指定されています
20017	オファー・バージョン・コードが一意ではありません。

表 78. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
20018	同じフォルダー内では、各フォルダー名が一意である必要があります。指定
	されたフォルダー名は既にこのフォルダー内で使用されています。
20019	フォルダーを削除できません。最初にフォルダーの内容 (ファイル/サブフォ ルダー) を削除する必要があります。
20020	フォルダーには使用中のセグメントが存在します。移動することはできませ
	h.
20021	削除できません。
20022	移動することはできません。
20023	フォルダーにはアクティブなセグメントが存在します。削除できません。
20024	フォルダーには非アクティブなセグメントが存在します。削除できません。

# IBM 技術サポートへのお問い合わせ

資料を参照しても解決できない問題が発生した場合は、貴社の指定サポート窓口から IBM 技術サポートに問い合わせることができます。問題を効率的に首尾よく確 実に解決するには、問い合わせる前に情報を収集してください。

貴社の指定サポート窓口以外の方は、社内の IBM 管理者にお問い合わせください。

#### 収集する情報

IBM 技術サポートに連絡する前に、以下の情報を収集しておいてください。

- 問題の性質についての簡単な説明
- 問題の発生時に表示されるエラー・メッセージの詳細。
- 問題を再現するための詳しい手順。
- 関連するログ・ファイル、セッション・ファイル、構成ファイル、およびデー タ・ファイル。
- 「システム情報」の説明に従って入手できる、製品およびシステム環境に関する 情報。

### システム情報

IBM 技術サポートにお問い合わせいただいた際に、技術サポートではお客様の環境 に関する情報をお尋ねすることがあります。

問題が発生してもログインは可能である場合、情報の大部分は「バージョン情報」 ページで入手できます。そのページには、ご使用の IBM のアプリケーションに関 する情報が表示されます。

「バージョン情報」ページにアクセスするには、「**ヘルプ」>「バージョン情報」**を 選択してください。「バージョン情報」ページにアクセスできない場合は、各アプ リケーションのインストール・ディレクトリーの下にある version.txt ファイルを 表示すると、任意の IBM アプリケーションのバージョン番号を入手することがで きます。

#### IBM 技術サポートのお問い合わせ先

IBM 技術サポートへのお問い合わせ方法については、「IBM Product Technical Support」の Web サイト (http://www.ibm.com/support/entry/portal/open\_service\_request) を参照してください。

注: サポート要求を入力するには、IBM アカウントを使用してログインする必要が あります。このアカウントは、できるだけ IBM カスタマー番号にリンク済みのア カウントにしてください。お客様の IBM カスタマー番号とアカウントとの関連付 けについて詳しくは、サポート・ポータルの「サポート・リソース」>「ライセンス 付きソフトウェア・サポート」を参照してください。

## 特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合 があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービス に言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能 であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を 侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用す ることができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの 評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を 保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実 施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わ せは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒103-8510 東京都中央区日本橋箱崎町19番21号 日本アイ・ビー・エム株式会社 法務・知的財産 知的財産権ライセンス渉外

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態で提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的 に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。 IBM は予告なしに、随 時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を 行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプロ グラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の 相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする 方は、下記に連絡してください。

IBM Corporation B1WA LKG1 550 King Street Littleton, MA 01460-1250 U.S.A.

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができま すが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、 IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれ と同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定された ものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。 一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性がありますが、その測定値 が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一 部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があ ります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要がありま す。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公 に利用可能なソースから入手したものです。 IBM は、それらの製品のテストは行 っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の 要求については確証できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの 製品の供給者にお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回 される場合があり、単に目標を示しているものです。

表示されている IBM の価格は IBM が小売り価格として提示しているもので、現行 価格であり、通知なしに変更されるものです。卸価格は、異なる場合があります。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。よ り具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品 などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであ り、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎませ ん。

#### 著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を 例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されていま す。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラット フォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプ リケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式 においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することが できます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを 経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、 利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。 これらのサンプル・プログラムは特定物として現存するままの状態で提供されるも のであり、いかなる保証も提供されません。 IBM は、お客様の当該サンプル・プ ログラムの使用から生ずるいかなる損害に対しても一切の責任を負いません。

この情報をソフトコピーでご覧になっている場合は、写真やカラーの図表は表示さ れない場合があります。

### 商標

IBM、IBM ロゴおよび ibm.com は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corporation の商標です。他の製品名およびサービス名等は、それ ぞれ IBM または各社の商標である場合があります。現時点での IBM の商標リスト については、http://www.ibm.com/legal/copytrade.shtml をご覧ください。

### プライバシー・ポリシーおよび利用条件に関する考慮事項

サービス・ソリューションとしてのソフトウェアも含めた IBM ソフトウェア製品 (「ソフトウェア・オファリング」)では、製品の使用に関する情報の収集、エン ド・ユーザーの使用感の向上、エンド・ユーザーとの対話またはその他の目的のた めに、Cookie はじめさまざまなテクノロジーを使用することがあります。 Cookie とは Web サイトからお客様のブラウザーに送信できるデータで、お客様のコンピ ューターを識別するタグとしてそのコンピューターに保存されることがあります。 多くの場合、これらの Cookie により個人情報が収集されることはありません。ご 使用の「ソフトウェア・オファリング」が、これらの Cookie およびそれに類する テクノロジーを通じてお客様による個人情報の収集を可能にする場合、以下の具体 的事項をご確認ください。

このソフトウェア・オファリングは、展開される構成に応じて、セッション管理、 お客様の利便性の向上、または利用の追跡または機能上の目的のために、それぞれ のお客様のユーザー名、およびその他の個人情報を、セッションごとの Cookie お よび持続的な Cookie を使用して収集する場合があります。これらの Cookie は無効 にできますが、その場合、これらを有効にした場合の機能を活用することはできま せん。

Cookie およびこれに類するテクノロジーによる個人情報の収集は、各国の適用法令 等による制限を受けます。この「ソフトウェア・オファリング」が Cookie および さまざまなテクノロジーを使用してエンド・ユーザーから個人情報を収集する機能 を提供する場合、 お客様は、個人情報を収集するにあたって適用される法律、ガイ ドライン等を遵守する必要があります。これには、エンド・ユーザーへの通知や同 意取得の要求も含まれますがそれらには限られません。

お客様は、IBM の使用にあたり、(1) IBM およびお客様のデータ収集と使用に関す る方針へのリンクを含む、お客様の Web サイト利用条件 (例えば、プライバシー・ ポリシー) への明確なリンクを提供すること、(2) IBM がお客様に代わり閲覧者の コンピューターに、Cookie およびクリア GIF または Web ビーコンを配置するこ とを通知すること、ならびにこれらのテクノロジーの目的について説明すること、 および (3) 法律で求められる範囲において、お客様または IBM が Web サイトへ の閲覧者の装置に Cookie およびクリア GIF または Web ビーコンを配置する前 に、閲覧者から合意を取り付けること、とします。

このような目的での Cookie を含む様々なテクノロジーの使用の詳細については、 IBM の『IBM オンラインでのプライバシー・ステートメント』 http://www.ibm.com/privacy/details/jp/ja/)の『クッキー、ウェブ・ビーコン、その他の テクノロジー』を参照してください。



Printed in Japan